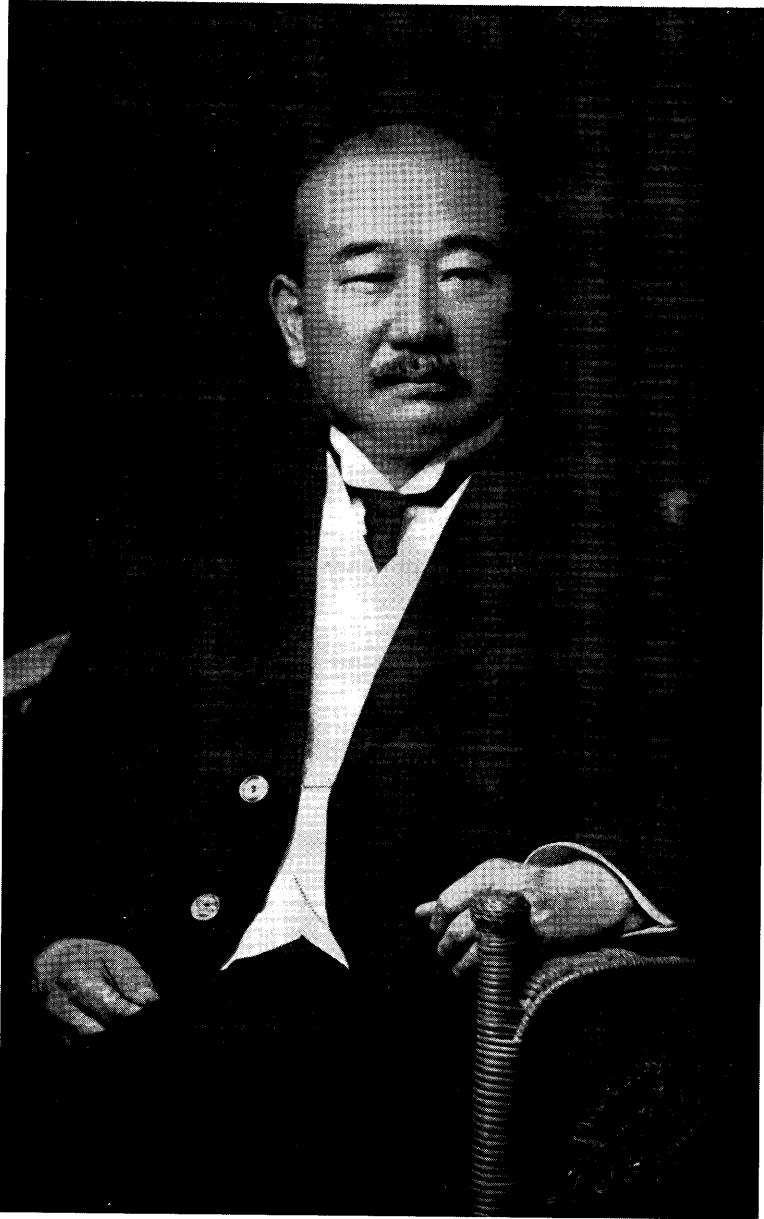


井深梶之助とその時代

第三卷

題字 武藤富男



壮年時代の井深梶之助

## 序

明治学院百年史の資料を収集、整理、保存すると同時に、井深先生を中心とする日本プロテスタント史の編集出版に着手したのは一九六八年三月であった。

第一巻は翌一九六九年三月に、第二巻はその翌年九月に刊行された。そして、この度第三巻を世に送り、この著作を完成することになった。

学院理事会においてこの計画が議せられた時、島村亀鶴理事は、「植村正久は多くの逸話を持ち、その行動範囲も大きく、怒涛の生涯を送ったから、この人を中心とする日本プロテスタント史は声価が高い。これに比べ井深梶之助は高山の頂にある湖のように、静かに澄んでいたが故に、『植村正久と其の時代』に比較し『井深梶之助とその時代』は出版物としての販路は狭いかも知れない」と述べた。出版の結果は正にその通りであった。

しかしながら、日本プロテスタント史の記録を完成する意味においては、これはかれに劣らぬ著作といえるであろう。植村正久を中核とする歴史は教会のそれであるが、井深梶之助を中軸とする歴史は、キリスト教学校教育と教会との両者に関連している。日本プロテスタント史

は教会の歴史のみをもっては足らず、キリスト教学校教育の歴史を伴って初めて全うされるのである。

本書全三巻の刊行には約一千万円の経費を要した。そのうち二百万円は、一九六八年当時、明治学院大学に在学した学生の保護者松元啓氏及び富士山茂氏より私を通じて学院に寄附されたものである。この寄附を受けたことは、こうした企画を実行に導く動機となった。ここに神の摂理を見るのである。

全三巻を完成するに至るまで、調査、資料収集、編集、出版、校正に三年半の日時を費し、たゆまざる努力を傾けたのは、杉本民三郎、秋山繁雄の両氏であった。寄附者への感謝とともに両氏の労に対し深く謝意を表わすものである。

学院大学の拡張に伴って建学の精神は教職員の間に、また学生、生徒の間に、稀薄になって行くおそれがある。この精神を正しく伝え、これをそれぞれの時代に応じて発揚させるものは、歴史であり、歴史の記録である。

全三巻にわたる井深梶之助の生涯とそれを取り巻く歴史とその記録が、後世の人々の前に置いて展(ひろ)げられる時、神の経綸が示され、学院建学の精神がこの人々の顔を照すであろうことを期待する。

終りにこの編集、出版に協力を賜わった委員各位の労を謝するものである。

一九七一年七月

「井深樞之助とその時代」

刊行委員長 武藤富男

井深樞之助とその時代刊行委員

委員長 武藤富男

委員 鈴木春(愷)村田四郎 鷺山第三郎 桑田秀延 和田豊彦 杉本民三郎

平林武雄 黒田正明 原田昂 佐藤泰生 高梨正夫 徳永清

稻川昌生 木村知己 佐藤謙 津田一路

編集実務 杉本民三郎 秋山繁雄

# 井深梶之助とその時代 第三卷 目次

## 第一篇

文部省訓令第十二号のあとをうけて

改革派・長老派両外国ミッション・ボード宛て報告と請求（明治三十五年）……井深梶之助 他二名……………3

キリスト教高等教育についての陳情……………デョーリジ・アレキサンダー他……………11

伝道の義務……………井深梶之助……………17

神の召……………井深梶之助……………22

神学博士チ・チ・アレキサンドル氏追悼ノ辞……………井深梶之助……………25

基督の倫理的教訓……………井深梶之助……………28

井深氏の台湾談……………福音新報第四百二十八号……………31

## 第二篇

明治学院理事員会記録と白金学報

明治学院理事員会記録（明治三十六年三月二十七日より  
明治三十八年二月十五日まで）……………37

第一回……………37 第二回……………38 第三回……………39 第四回……………41

明治学院英文理事員会記録一部……………43

英文理事員会記録の写真……………49

## 第三篇

### 日露戦争の頃

AM・KN・ワイコフ——ロトゼイ・ミラー	
A・K・N・ライシヤワー——W・インブリー	
白金学報発刊の辞	51
白金学報の写真	51
井深総理の祝詞	53
新聞に見た明治三十四年から明治三十八年まで	55
明治三十四年	56
明治三十五年	57
明治三十六年	60
明治三十七年	62
明治三十八年	63
菊田貞雄 井深先生関係資料	55
日露戦争と井深梶之助先生	81
日本宣伝にインブリー博士と井深梶之助氏	83
日露講和条約と小村寿太郎	88
英国を去りアメリカに向かう	93
小村寿太郎一行を訪ねる	99
小村、高平両氏に面会す	105
ポーツマスを去る	105
講和条約また延期	111
ヘボン博士より招待状	113
ヘボン博士を訪ねる	115
講和条約に対する井深の見方	117
米国一市民の	117
講和条約観	117
日本に於ける宣教活動と明治学院	117
講和条約に対する井深の見方	117
日本よりの	117

## 第四篇

電報諸教会及びミッション・スクールの焼打ちを伝える	ホール博士井深のために尽力す
病中の小村寿太郎を見舞う	日本全権一行に面会す
へボン博士の井深梶之助宛て招待状	小村全権を見送る
宗家大会、戦時伝道大演説会	
井深総理を送るの辞	熊野雄七
パリ万国基督教青年会創立五十年記念大会招待状、プログラム等の写真	
明治三十八年井深梶之助渡欧米旅行券の写真	
へボン博士の授賞と万国学生青年大会など	
満韓旅行談	井深梶之助
へボン博士勲三等旭日章授賞関係	
明治四十年井深梶之助先生日記	
東京基督教青年会の歴史につき	
青年会の創設	青年会館の建築
改築	経営及管理
基督教青年会の発生	日本に於ける基督教青年会
万国学生青年大会	万国基督教青年会
基督教青年会万国大会寄附金募集趣意書	
有力なる来会者	
記事及び写真	
157	156
152	151
148	143
141	137
133	131
128	127
119	



## 第五篇

世界の教化に対する東洋学生の責任……………	神学博士	井深	160
ホール博士の品性……………	井深	梶之助	162
明治四十二年の井深日記と宣教開始五十年記念会			
明治四十二年井深先生日記……………			171
一月……………			171
築地十七番土地譲渡証書(英文)の写真……………			172
米国長老教会外国ミッション宛て一致神学校財産報告……………			174
築地十七番有租地成地価査定願その他の写真……………			177
二月……………			178
築地明石町十七番実測図……………			179
三月……………			180
四月……………			183
五月……………			185
六月……………			188
七月……………			189
八月……………			191
九月……………			196
十月……………			196
宣教開始五十年記念会			
伝道五十年後の日本の基督教……………			200
伝道開始五十年の所感……………			202
福音新報第七百四十四号			
宣教開始五拾年記念会順序書……………			205
伝道開始五十年記念号発刊につき寄書を依頼されて……………			210
宣教開始五十年記念会事務会決議……………			211
		井深	
		梶之助	

ジョン・カルビン四百年記念会……………213

## 第六篇

エデンボローへの旅と基督教大学問題

明治四十三年井深梶之助先生外遊日記……………219

五月……………219 六月……………227

欧州に於ける井深先生の思出……………鈴木春……………230

六月(英文日記)……………231 七月……………240

本多庸一氏より井深宛て書簡及びその写真……………井深梶之助……………241

明治四十三年井深梶之助渡欧米旅行券の写真……………井深梶之助……………243

基督教教育の前途……………井深梶之助……………244

基督教大学問題……………観潮生……………249

## 第七篇

明治四十四年の井深日記と教派合同問題

明治四十四年井深梶之助先生の日記

一月……………255 二月……………257 三月……………259

六月……………267 七月……………269 八月……………272

十一月……………276 十二月……………279 九月……………272

教派合同期成同盟会発会式に於ける演説……………十月……………274

四月……………261 五月……………264

(一) 植村正久の演説	283
(二) 海老名弾正の演説	286
教派合同の気運	292
観潮生	

## 第八篇

### 明治学院財団法人理事会決議録

明治学院財団法人理事会決議録 (明治三十九年三月より  
明治四十五年七月まで)

三十九年	299	四十年	308	四十一年	318	四十二年	327
四十三年	336	四十四年	343	四十五年	352		

### 日露戦争後より明治を閉じるまで

新聞に見た明治三十九年より明治四十五年まで

三十九年	362	四十年	365	四十一年	369	四十二年	370
四十三年	375	四十四年	377	四十五年	380		

## 第九篇

### 排日問題と井深梶之助

米国移民の沿革……菊田貞雄 井深先生関係資料

若松村の哀史シュネルの事 シュネルの移民渡米は明治元年のヴァン・リードが布哇移民に暗示  
せられしか? シュネル (Schnell) について エッチ・シュネル チャイナ号の乗客

シュネル一行 当時の亜米利加 シュネルの失敗 日本移民史(第一回排斥) 学生隔離問題 米布合併と日本移民 日本移民の増加 排日決議 学童排斥隔離問題(明治三十九年) 布哇転航禁止(明治四十年) 土地法第一案(明治四十年) 米国実業団日本訪問紳士協約と太平洋協約(明治四十年) 排日諸案(明治四十二年) 日本実業団渡米(明治四十二年) ショーダン博士の訪日(明治四十四年) 在留日本人故国名士招待(明治四十四年) ラッセルと日本の社会 エリオット博士 島田三郎と平和協会大会 日米交換教授としての新渡戸博士 土地問題と日本名士渡米(大正二年) 井深先生の渡米 加州外国人土地法(一九一三年) 来るべき加州土地法 一般投票(一九二〇年十一月) 埴原大使の警告(一九二四年) 一九〇八年の紳士協約 米国両院反感を増す ションソン法案米国議会を通過す 新移民法の効果 千九百廿五年移民法 日本人後見人出頭否認(一九二三年) 借地権試訴敗訴(一九二三年) 在米日本人口	421
布哇移民の由来と経過……菊田貞雄 井深先生関係資料……	421
布哇在住日本移民三期 官約移民に対する知事の諭告 布哇移民草分(明治元年) 布哇国	421
王来朝と治外法権(明治十四年) 布哇国王渡来の目的	421
布哇皇帝の来朝と井深梶之助……	431
日米問題について……	433
排日問題 サンフランシスコ・クロニクル及び布哇日々新聞記事及びその写真……	438
井深梶之助先生大正二年之日記より……菊田貞雄 井深先生関係資料……	445
万国学生大会便り……	452
井深梶之助……	452

# 第十篇

井深梶之助宛て書簡の中より筆跡の写真

- |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| (1) 雨森 信成  | (2) 石本三十郎  | (3) 井上 毅   | (4) 植村 正久  | (5) 浮田 和民  |
| (6) 奥野 昌綱  | (7) 樺山 資英  | (8) 岸田 吟香  | (9) 熊 野 与  | (10) 小崎 弘道 |
| (11) 兒玉 小介 | (12) 西園寺公望 | (13) 柴 四朗  | (14) 高橋 五郎 | (15) 寺内 正毅 |
| (16) 新島 襄  | (17) 浜尾 新  | (18) 原田 助  | (19) 藤生 金六 | (20) 星野 光多 |
| (21) 本多 庸一 | (22) 本間 重慶 | (23) 松山 高吉 | (24) 真野 文二 | (25) 安川 亨  |
| (26) 山川健次郎 | (27) 横井 時雄 | (28) 李 春 生 |            |            |

457

## 凡 例

一、文中の用字用語は読みやすいことを主眼とし、漢字は原則として「当用漢字」によるようにつとめたが原文のままにしたものもある。また、かなづかいはおおむね「現代かなづかい」によった。記録及び引用文などの中には原文のままとしたものもある。

一、外国人名、地名その他の固有名詞で一定していないものもあるが、原文の記述を尊重してそのままにした。一、注については原筆者の注を「註」、編集者の注を「注」と一応の区別を設けたが、最近の筆者の注などはそのままにした。

第一篇



# 文部省訓令第十二号のあとをうけて

改革派、長老派両外国ミッション・ボード宛て報告と請求（明治三十五年）

井深樞之助、M・N・ワイコフ、ウイリアム・インブリー

Tokyo, January 2nd, 1902

To the Boards of Foreign Missions of the Reformed and Presbyterian Churches.

Dear Brethren:

In the autumn of 1899 (32 of Meiji) we were appointed to present to you a statement regarding the Academic Department of the Meiji Gakuin, and to request that the annual grant of 4200 yen be continued for two years longer. Those two years will end in April next; and we have again been appointed to write to you, in the hope that you will be able to comply with the present requests of the Board of Directors of the Meiji Gakuin as cordially as you have complied with those of the past.

The first request is that the present annual grant of 4200 yen be continued for another two years.

The general reasons to be urged in favor of this request were set forth in our letter of Oct. 4, 1899, but it may be well to repeat the main points. They are as follows:—

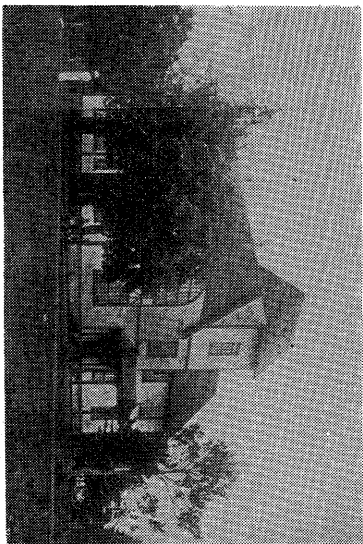
- 1 The Presbyterian and Reformed Churches stand for Christian education as an important part of mission work.
- 2 There are peculiar reasons why such institutions as the Meiji Gakuin should be supported in



Japan. The whole nation is being educated; but the national system of education is one in which all teaching of religion is prohibited. Not only is the system non-religious in principle, in some cases it is in fact anti-Christian. Unless therefore Christian schools are provided, the children of Christians, not to mention others, will be constrained to receive their education under influences adverse to faith in the truths of Christianity. This situation calls for particular consideration when it is remembered that Christian schools in Japan have now a large and growing Christian constituency.

3 If there are to be Christian schools, they must be maintained, at least for some time to come, by the liberality of the Churches at home.

The question in Japan is not, as it may be in some countries, one of carrying on a very elementary school in which a group of Christians may have their children instructed in the barest rudiments of knowledge. The whole country is supplied with good Primary and Middle Schools; and if Christian schools of at least the same grade can not be maintained, Christian education must be given up.



普通学部講堂及び廿一年、廿三年、廿四年、廿五年卒業生記念樹の景（白金學報より）

4 Two questions are often asked:—

A Can not such a school as the Meiji Gakuin be supported by the Japanese Christians themselves?

As compared with the Christians in some countries, the Japanese Christians are no doubt well-to-do. There are among them some persons of means; but the great majority are from among the poor. Many of the churches are still far from having attained to true self-support, their first duty; and they carry on the work of their Board of Home Missions only

through constant effort on the part of their pastors and others who are impressed with a sense of the responsibility of the Church in the matter.

Under these circumstances the Japanese Christians can not be expected to assume the burden of such schools as the Meiji Gakuin. The number of those in America with all its wealth who are able to make *gifts* to schools and colleges is relatively small; in Japan it is far smaller, and especially among those who are interested in Christian education. Most of the students at Princeton and Rutgers pay for their board and tuition; but that is all. Precisely the same is true of most of the students in the Meiji Gakuin; and the Church of Christ in Japan is no more pauperized by such institutions as the Meiji Gakuin, Joshi Gakuin, and Ferris Seminary, than the Churches in America are pauperized by Princeton, Rutgers and Wellesley.

B Why can not such a school as the Meiji Gakuin command a sufficient number of students to be self-supporting?

To dispense with all grants from the Boards and to rely entirely upon the funds received from tuition

fees, a school like the Meiji Gakuin must have at least 500 students; and to have that number, it must be located at a central point in the city where it will attract a large number of day pupils rather than in the suburbs. To this it may be added that from a Christian point of view such a school, even though it be self-supporting is by no means clearly to be preferred.

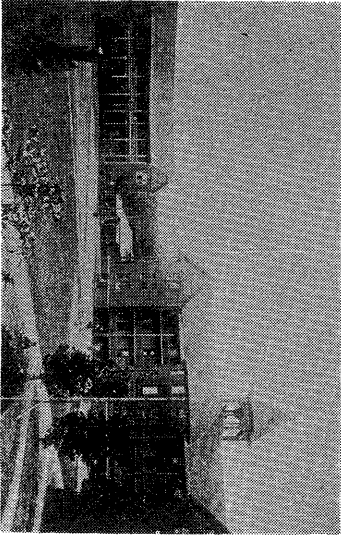
Turning from the general to the particular reasons that may now be urged for continuing the grant:—

1 Two years ago the institution took the stand that it would be a Christian institution or that it would close. It is not unfair to others to say that it took the lead in maintaining that position. Nor should it be forgotten that the principle involved was that of religious freedom in education; a great principle both for the present and the future of Japan. By firmness and painstaking that principle has finally been practically conceded by the government; and, so far as the Middle School students in the institution are concerned, the particular privileges pressed for have been granted. Under these circumstances it is thought that the funds necessary to the maintenance

of the institution will not be willingly curtailed by the Boards.

2 There are a number of signs that can not but be regarded as encouraging.

A Not only has the government made the concessions already referred to; it is manifestly changing its policy of indifference or semi-hostility to private schools to one of friendly interest in such institutions on condition that they are properly equipped. Along with this there is evident a renewed popular tendency in the same direction. As a result Christian schools



ペンホール及びハリスホール及び運動場の一部

generally seem at least to be at the beginning of a new course of prosperity; and they are endeavoring to strengthen themselves accordingly.

B The actual increase in the number of students is an encouragement. Two years ago there were about 90 on the roll; there are now 160 on the roll, with 151 in regular attendance. The classrooms will accommodate only 40 students. That number has been reached in the highest class; and for that reason a number of applications for entrance have been declined. The class next to the highest is within three of being full.

C A thing now new, but of vital importance to the highest success. The institution is at peace within itself.

But the Boards will naturally make inquiry regarding one point. Along with the increase in the number of students there is an increase in the amount received for tuition; and especially is this the case since the tuition fee has been raised from yen 1.50 to yen 2. per month. Why then can not the grant from the Boards be correspondingly reduced? For two reasons:—

1 The granting of the privileges already referred

to was accompanied by certain stipulations regarding equipment (the furnishing of rooms, apparatus, etc.) During the past year about 500, yen were expended in this way, and the changes required are not yet all made.

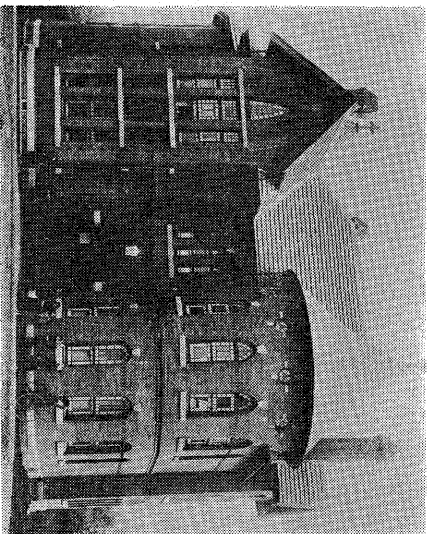
2 But the chief reason why the increase from tuition will not warrant a diminution of the grant is to be found in what so profoundly affects all forms of mission work in Japan: viz. the general rise in prices. The proof of this general rise has been set forth so fully and so urgently in other connections that it is not necessary here to repeat it; but the *fact* of the rise can not be repeated too often. It affects every thing: Fuel, repairs, keeping the grounds in order, servants' wages, and the salaries of teachers. As a consequence the expenditure has necessarily increased; and it must increase still more. Particularly is this true in the matter of the salaries of teachers, if the institution is to keep its teachers. It is a moderate estimate that puts the expenses of the institution at 30% higher than they were when the grant by the Boards was first made. In some things the increase is 50%.

For these reasons, general and particular, the Board of Directors asks that the present annual grant of 4200, yen be continued for two years longer. That is its first request.

Turning now to the second request:—

A year or more ago, as you are aware, inquiry was made by a number of the Boards of Foreign Missions as to the advisability of an attempt to establish a Christian university in Japan. Regarding that proposition some of the missions have answered favorably, and some adversely; but there is one point upon which there is very general agreement: viz. That such institutions as the Doshisha, Aoyama Gakuin and Meiji Gakuin should have a Higher Course. That does not mean that the Meiji Gakuin aspires to be a university in any proper sense of the term; but simply that it shall provide a course of three years for such students as have completed what is known as the Middle School Course.

For some time during its earlier years the Meiji Gakuin had a Higher Course which for various reasons was discontinued; but two years ago it seemed clear that such a course, differing somewhat in its details



明治23年設立の旧神学部校舎

but not essentially different in grade, should once more be established. The distinguishing features of the Higher Course now carried on were determined by what existing conditions seem particularly to call for. To be more explicit, most of the graduates of the Middle School Course of the Meiji Gakuin, and many of the graduates of the Middle Schools connected with the Department of Education, who desire to

continue their studies, may be divided into three classes:—

1 Those who wish to become teachers, especially teachers of English, in the government schools.

2 Those who wish to enter certain departments of the government Higher Schools or of the University.

3 Those who wish to enter business.

Among the arguments in favor of such a Higher Course are the following:—

1 It will keep the students longer in the institution; and it is the universal testimony that as a rule the best results both mentally and spiritually are obtained among those who remain the longest.

2 It will attract graduates of the government Middle Schools, and so bring them under the influence of the institution.

3 It will give the school a name as one that prepares students for definite careers. A matter of much importance as regards the reputation of the institution.

4 It will greatly aid the school in supplying itself with teachers. Another thing of prime importance.

5 There seems to be a clear call of Providence to make a specialty of the training of students to become teachers in the government schools. Investigation shows that already a large percentage (according to some a majority) of such teachers of English were educated in the various mission schools; and that the demand for such teachers continues appears from the applications for them that come to the Meiji Gakuin. In some cases at least it is known that the graduates of mission schools have the preference over others. At the Y. M. C. A. Convention held during Mr. Mott's recent visit to Japan, Professor Honda of the Normal College stated that those in charge of the school at Kumamoto had decided to limit their choice of teachers of English to the graduates of Christian schools.

Along with these facts are two others also to be considered. The Y. M. C. A. in Japan, with new support from America, is planning to extend its work throughout the country; and there is an arrangement under the general care of the American representatives of the Y. M. C. A., already in operation, to supply government schools with Christian teachers from

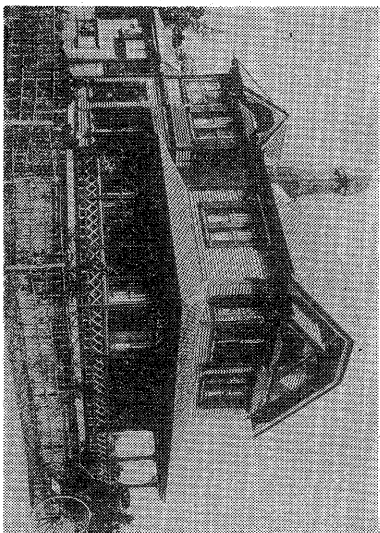
American colleges.

These facts taken together and considered in all their relations and bearings certainly seem at least to constitute a special call to the Meiji Gakuin and other like Christian schools to maintain a Higher Course especially arranged to train young men for the work of teachers.

6 The Doshisha and Aoyama Gakuin both have a Higher Course; and the missions of the Presbyterian and Reformed Churches in Japan can not rest content with a school of a lower grade than the schools of the Congregationalists and the Methodists.

So much by way introduction. Now as to the precise point:—

As is well known to you, the Middle School Course of the Meiji Gakuin has already received government recognition; and accordingly students of that course, as long as they are in that course, have the time of their conscription postponed. Further, on graduation from it they are admitted to the government Higher Schools on the same terms as the graduates of the Middle Schools connected with the Department of Education. These are the privileges



白金宣教師館の一つ

for which the Meiji Gakuin and other Christian schools so long contended. What the institution now seeks is government recognition for its Higher Course also; and this is sought for two reasons: (1) That students in that course may continue to enjoy the privilege of postponement of conscription; (2) that graduates from the course may be immediately eligible to appointment as teachers in government schools, instead of as now being obliged first to undergo a special examination. Under present conditions it is

evident that the Meiji Gakuin, so far as its Higher Course is concerned, is heavily handicapped; and such handicapping if continued will inevitably injure the whole institution.

In order to obtain government recognition for the Higher Course it will be necessary to make some additions to the material equipment of the school; but the chief pre-requisite is a slight increase in the number of Japanese teachers. This is what is learned in reply to inquiries regarding the matter. The amount of funds needed to comply with the requirements, over and above what is otherwise necessary, is estimated to be about 800, yen annually.

It is true that for the present the graduates of our own Middle School Course would not be entitled to the privileges now sought for. According to the regulations now in force such privileges would be enjoyed only by the graduates of government Middle Schools coming to the Meiji Gakuin for the sake of its Higher Course. But on the other hand it may be said:—(1) A Higher Course having government recognition will attract the graduates of government Middle Schools as one without such recognition can

not do. This is evident from the experience of Aoyama Gakuin as compared with our own. (2) Now that the government has granted the privileges so long contended for, it can hardly be doubted that upon proper representation it will grant to the graduates of our recognized Middle School Course entering our Higher Course all the privileges that the graduates of the government Middle Schools entering the same course will enjoy.

This then is the second request of the Board of Directors: That in addition to the continuance of the grant of 4200. yen for another two years, there be a grant for the coming year of 800. yen to be applied to the Higher Course with a view to obtaining government recognition. It will be observed that the

request is that this grant be made for one year; the intention being at the end of the year to make another statement in the light of conditions then existing.

In conclusion it may be added that the granting of this 800 yen will not increase the amount of the appropriations hitherto made by the Boards to the institution as a whole, now that the Southern Presbyterians have assumed a share in the expenses of the Theological Department.

For the Board of Directors,  
K. Ibuka.  
M. N. Wyckoff.  
William Imbrie.

キリスト教高等教育についての陳情

MEIJI GAKUIN

1905

A PLEA FOR HIGHER CHRISTIAN EDUCATION IN JAPAN



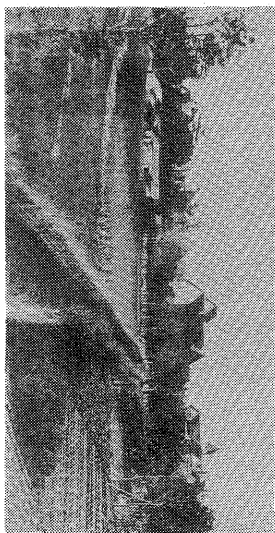
## THE HISTORY OF JAPAN

during the past fifty years has been a wonderful history. The opening of the country to the world after long and strict seclusion; the Restoration of the Emperor; the Imperial Pledge that Japan should seek far and wide for knowledge; the introduction of the railroad, the newspaper and the university; the enactment of new codes of law; government under a constitution; admission to a place of equality among the nations of the world; the achievement of singular prestige under circumstances calling for a high degree of wisdom and energy; the conclusion of a great war in the spirit of self-control and moderation. That is a wonderful series of events to be crowded into the short span of half a century; and now Japan is entering a new stage in her own career, and—what is of supreme moment to all Eastern Asia—a place of pre-eminent influence in Korea and the vast empire of China.

But to the thoughtful Christian mind, of all the wonderful events none is more wonderful than the progress of Christianity. To quote from a

statement recently made by the Prime Minister: "The number of those professing Christianity is a large one, with a much larger number of those who are Christian in their affiliations. Nor are the Japanese Christians confined to any one rank or class. They are to be found among the members of the National Diet, the judges in the courts, the professors in the universities, the editors of leading secular newspapers, and the officers in the army and navy. Christian churches are to be found in every large city, and in almost every large town in the empire."

But notwithstanding all its remarkable progress, in comparison with the mass of the nation, the



白金玉舞台遠景

Church of Christ in Japan is still only a little flock. Moreover, while as compared with the Christians in some countries, the Japanese Christians are relatively well-to-do, the majority of them are persons of small means. Many of the churches have not yet attained to complete self-support—their first duty; and they carry on the work of their Board of Home Missions only through constant effort on the part of their pastors. Under these circumstances it is quite beyond their power to assume the burden of establishing and maintaining institutions for higher Christian education. The number of those in America, with all its wealth, who are able to make gifts to schools and colleges is comparatively small. In Japan it is far smaller. To this it may be added that the rise in the cost of living owing to general economic conditions and the taxation incident to the recent war have greatly increased the difficulty of making contributions. There is therefore especial need for help in this department of Christian work.

Even in America, where all the surroundings are to so large a degree Christian, the need for

Christian schools and colleges appeals to many with peculiar force; but in Japan, where all religious teaching in the government schools is prohibited and at the same time a Christian environment is absent, the need is still more urgent. This situation calls for particular consideration when it is remembered that Christian schools in Japan have now a large and growing Christian constituency, and that parents send their sons and daughters to them, in part at least, that they may be established in Christian faith and character.

The debt that Christianity in Japan owes to higher Christian education cannot be over-estimated; and the need for it is no less now and will be no less in the future than it has been in the past. For reasons which it would take too long to state, Christian schools have had their periods of encouragement and despondency. In 1899 a crisis was reached. The Minister of Education issued an Instruction which forced them to forego the government recognition then enjoyed with its attendant privileges, or to cease to be Christian institutions. Then followed a long and patient endeavor to se-

cure from the government the acceptance of the great principle of religious freedom in education in institutions supported by private funds; and in the end the endeavor was crowned with success. It is to this that the Prime Minister refers in the statement already quoted, when he says, "Recently an ordinance has been issued by the Department of Education under which schools of a certain grade are able to obtain certain privileges granted to government schools of the same grade." Regarding the acceptance of this principle, a recent writer on the education of young men in Japan says, "The world at large took little notice of this brief announcement. But it marked a satisfactory conclusion of a long series of negotiations, the solution of one of our most difficult problems, and the opening of a new era in the history of missions in Japan."

In view of all these facts the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church has promised its cordial co-operation in an effort to raise a fund for the enlargement and endowment of Meiji Gakuin. In fact, the suggestion of the advisability

of such an effort was made by the Board itself. In this assurance the Board of Foreign Missions of the Reformed Church in America cordially concurs. Meiji Gakuin is situated in Tokyo, and is an institution for the education of boys and young men. The only one in Japan, it should be said, that is connected with the Presbyterian Church. It was founded some twenty years ago by the Boards of Foreign Missions of the Presbyterian and Reformed (Dutch) Churches; and since that time it has been carried on with their aid.

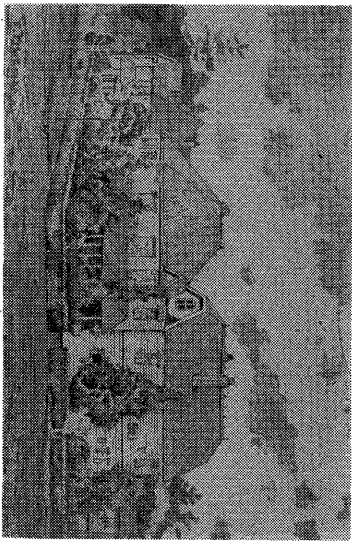
There are three separate courses of study: The Academic, the Higher, and the Theological. The Academic Course includes the subjects taught in what are called the Middle Schools of the Department of Education, and its grade will be sufficiently well understood when it is said that instruction is given in mathematics through trigonometry. The Higher Course carries the students three years further on in their studies. The Theological Course prepares young men for the ministry. The graduates of the Academic and Higher Courses are to be found scattered throughout

Japan and in foreign countries, pursuing the various callings in life, and many of them occupying positions of influence. The Theological Course has trained the majority of the ministers of the Church of Christ in Japan—the Church to which all the Presbyterian and Reformed missionaries in Japan are related. With the exception of twelve who hold scholarships yielding fifteen or twenty dollars a year, all the students in the Academic and Higher Courses meet all their expenses for board, room-rent and tuition; and between twenty and thirty per cent come from Christian families or through the influence of Christian friends. The students now taking these courses number 350. Of the theological students there are 27.

The governing body of Meiji Gakuin is a Board of twelve Trustees, half of whom are missionaries and half Japanese. That is the present arrangement; but looking to the future it may be thought advisable to make some change which shall increase the number of the Japanese members of the Board. Recently the Board has been incorporated under the laws of Japan, with a charter,

one of whose articles declares the religious position of Meiji Gakuin to be that of the Confession of Faith of the Church of Christ in Japan; a brief, simple, evangelical creed that sufficiently guards the Christian character of the institution.

But why cannot Meiji Gakuin be carried on as hitherto? In other words, why are enlargement and an endowment now a necessity? For two reasons:—



明治37年の宣教師館 (岡見富男画) 伯普通学部生当時のスケッチ  
中央はライシヤロー館 右はランヂヌ館

1. In their early history the Christian schools were the best in the country, and students flocked to them by a natural choice. To-day, while in some respects they are actually better than formerly, relatively they are not so. There is nothing more marked in the progress of Japan than the steady improvement of the government schools. Especially is this true of those in the large cities. In various ways they offer advantages superior to those of the Christian schools; and the result is what might be expected. Many students who in the old days would certainly have gone to the Christian schools, now as eagerly attend those maintained by the government. So eager are they to get the best, that the best government schools in Tokyo are crowded with the pick from all parts of the city. This is a situation of which no one can reasonably complain; but it must be met by the Christian schools if they are to maintain their reputation, to get in large numbers the most desirable students, and to do justice to their own Christian constituency. In the case of Meiji Gakuin, this means a better equipment; additional build-

ings; and an increase in funds, especially in order to secure a large number and, for certain positions, a higher grade of Japanese teachers correspondingly higher salaries. But these are needs which the Boards of Foreign Missions cannot supply from their common receipts. Therefore if they are to be supplied at all it must be by special funds for enlargement and endowment.

2. Hitherto Meiji Gakuin has been to a large degree what is commonly described as a "mission school"; but it has always been the intention of its founders, when the time should come, to make it more distinctively a Japanese institution. The carrying out of this intention is only the application, in the case of Meiji Gakuin, of the principle that has ruled the nation in all its lines of national development; and for the highest future success of Meiji Gakuin it is necessary that the way be prepared for such a change. But in order to do this the institution must be placed upon a permanent, and within the limitations of its charter, an independent foundation; and this can be done only by an endowment.

The present property is valued at \$ 150, 000.

City.

Signed : GEORGE ALEXANDER

The amount required for enlargement and endowment is \$ 150, 000. Gifts to such a fund will be received by Mr. Dwight H. Day, Treasurer of the

President of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church.

Presbyterian Board of Foreign Missions, or Mr. W. H. Van Steenberg, Treasurer of the Board of

MANCIUS H. HUTTON \*  
President of the Board of Foreign Missions of the Reformed Church

Foreign Missions, R. C. A.

Dr. Ibuka, the President of Meiji Gakuin, will

CHARLES CUTHBERT HALL \*  
JOHN H. CONVERSE

be pleased to furnish further information to those who desire it. He may be addressed in care of

\* Deceased.

Mr. Robert E. Speer, 156 Fifth Avenue, New York

### 伝道の義務（説教）

井深梶之助

本月七日、市内日本基督教会聯合祈禱会に於て

羅馬書第一章十四、十五節に曰く、我はギリシヤ人及び異邦人またかしこまひと 智人おろかならひと およびおへ 愚人にも負る所あり。是故に我力を尽して福音をなんぢら 爾曹ロマにある人々にも伝へんことを願ふ。

本日世界万国の基督教会が特に内国伝道のために祈禱する日に当たり此の会の開かれたるは至極適當のことと思わる。昨年来我が国の経済界は不景氣の声のみ高く、政治界は黒雲に蔽われて晴雨未だ判然せず、人々疑惑の

中に立てり。教育界は彼の教科書事件の為に一大恐慌を来たしつつあり。此の間に基督教界は伝道上多望なる新年を迎うるの幸福を与えられたり。

然れば、他の教会に於ても本年度の新事業若しくは運動の方針等に就き夫々計画あるべし。我が日本基督教会に於ても前途の成功を祈り且つ成るべく同心協力を勉むるため本日の如き会合を為すは極めて適當なりと信ず。依つて予は今茲に引用したる異邦人の大使徒パウロの言に基づき伝道の義務に付き一言を述べて諸兄弟と共に省みる所あらんとする。

彼曰く、我はギリシヤ人及び異邦人、智人及び愚人にも負う所ありと。負う所ありとは即ち道德上の債務の義なり。ギリシヤ人及び異邦人とは支那人の所謂る中外ちゅうがいと云うが如く、又吾人の所謂る内外人の如く、人種若しくは言語上の区別なき意なり。一言に凡ての人に対して負う所ありと云う義なり。然して其の負う所の義務とは何ぞ。即ち次節に云う所の福音を伝うる事、凡て信ずる人を救わんとその神の大能たる福音を宣伝せんことなり。哥林多書には尚一層剴切なる言ことばを以て此の意味を表明せり。我れ福音を宣伝えると雖も誇るべき所なし、止むを得ざるなり。若し我れ福音を宣伝えずば実に禍なりと。又エペソ教会の長老等に与えたる告別の辞に左の如く言えり。我がアジヤに來たりし初の日より常に汝等の中に在りて行ないし事は汝等が知る所なり。即ち我凡ての事に謙へんたり又涙を流しユダヤ人の詭あしきかごと謀まうにより艱難に遭いて主に事え、益あることを残す所なく之を宣べて、或いは人々の前、或いは家々に於て汝等に教え、神に対しては悔改、主耶穌基督に対しては信仰すべき事をユダヤ人又ギリシヤ人に示せり。今日我が心切りてエルサレムに往く、彼所にて遭う所如何を知らず。只聖靈邑毎に我に示して云う、縲なづめ綆なづめと患難我を俟てりと。然れど、我が往くべき路と主耶穌基督より受けし職即ち神の恩恵の福

音を証する事を遂げん為には我が生命をも重んぜざるなりと。嗚呼、何ぞ其の精神の盛んにして其の言の剴切なるや。之を読むもの千載の下尚奮起すべきにあらずや。

以上は固より使徒パウロが単に自己の使命に關する確信を吐露したるに過ぎず。然れども、神の恩恵の福音を宣伝するは決して彼一人の責任に非ず。基督の十二使徒は皆之が為に召されしに非ずや。単に使徒のみに非ず、初代の信者は皆夫々信仰と力とに應じて此の大任を負わせられしに非ずや。既に初代の信徒教会の責任たりしとせば、今日の信徒教会に於ても亦免るべからざる責任と云うべし。実に伝道は基督教会の大責任なり。地上に教会の存在する限り、縦令一人にても未だ耶蘇基督の名と救を知らざるものあらん限りは、内外の別なく恩恵の福音を宣伝する責任は尽きずと云うべし。此れ何の故ぞ。次に其の理由を信ずる二、三を述べんとす。固より別に新しき考案あるにあらず。聖書に示されたる語ことばにより反省せんとするに過ぎず。

第一、恩恵の福音を普く天下に伝うるは主耶蘇基督の命令なり。福音書の終り又使徒行伝に拠れば此の事明らかなり。耶蘇復活して後ち十一の弟子に命じて、遍く世界を廻りて凡ての人に福音を宣伝えよと。又馬太伝またいにガリラヤの山に於て弟子等に命じ給える語あり。汝等往きて万国の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ。又主は復活後エマオ村に於て二人の弟子に告げて曰く、その名によりて悔改と罪の赦はエルサレムより始まり万国の民に宣伝えられん。汝等は此等の事の証人なり。又最後に橄欖山びんざんに於て使徒等に命じて曰く、聖靈汝等に臨むに因りて後、汝等能力ちからを受けエルサレム、ユダヤ、サマリヤ及び地の極はたにまで我が証人と為るべしと。一度ならず数回繰返して命じ給いたる此等の命令は、直接には最初の弟子等に与えられし所なれども一時限りの命令にあらず。万国、万世の基督教会に与えられたるものたること自ら明瞭なるのみならず、実に基



督教会は紀元後二十回の世紀を重ねるまで此の大命令の下に進みつつ来たりたり。今日我等が伝道する理由の一は神の命令あるに由ると云うべし。然らば即ち我が日本基督教会は他の教会と共に此の命令の下に立つことを記憶すべきなり。

第二、我が国民現今の道徳及び宗教上の状態に就いて考うるも伝道は今日の急務たることを知る。単に基督の命令によりても教会に伝道の義務責任あること明瞭なりと雖も、縦よし之なくとも、我が国民の道徳及び宗教上の欠乏を真面目に考え来たれば自ら此の義務あることを覚知するに至らん。若し我が福音を宣伝えざれば禍なる哉と絶叫したる使徒パウロは亦兄弟よ、我が心に願う所と神に祈る所はイスラエルの救われんことなりと云えり。蓋し彼は一面に於て基督より蒙りたる使命を果さんが為めに百難を排してギリシヤ人にも、異邦人にも、自主たる者にも、奴隸たる者にも恩恵の福音を宣伝したり。斯る時にも曾て神の選民たりしイスラエル人の状態を察しては亦特別に伝道心を刺戟せられたり。彼等の熱心なるは我証す。然れども、其の熱心は智識に由るにあらず。彼はヘブル人より生れたるヘブル人として最も嚴重なるパリサイ宗の人たり。其の経験に由り、恐らくは異邦人に対してよりもユダヤ人に対して最も深厚なる同情を寄せたるならんと察せらる。故に彼は異邦に伝道するに当たり、先ず第一に其の地にあるユダヤ人に伝道し、彼等が剛腹にして十字架の教を受けざる時は転じて異邦人に伝道するを常とせし者の如し。然らば今日の基督教会も、一面に於て主耶穌基督の命令を奉ずると同時に、我が同胞の状態を察し之に対する同情を以て彼等を救うことを勉めざるべからず。今日我が国民の道徳は如何、政治界は如何、実業界は如何、教育界は如何、頭の頂より足の爪先まで中毒の状態にあらずや。古来ユダヤ人には蹟くもの、ギリシヤ人には愚かなるものなりと雖も、凡て信ずるものを救わんとすの神の大能ちゆうぶつたる十字架の教に抛ら

ずして、彼等を罪惡と其の束縛の中より救ひ得るもの此れあらんや。

第三、以上二カ条にても伝道の理由、動機は十分に存するなり。然れども尚一つ考うべきことあり。伝道事業は教会自身の健全なる開發の爲にも必要なりと云う事は是れなり。此れ固より伝道の動機にあらず、伝道は徹頭徹尾献身的の事業なり。決して利己的の事業にあらず。然れども、積善の家には余慶ありと云うが如く、慈善を行なうは自己の幸福の爲に非ざるも自然に幸福を得るが如く、基督自らも我が爲に生命を失うものは之を得べしと云い給ひし如くに、真に基督の聖旨<sup>みことば</sup>を服膺して人を救う教会は其の反射的結果によりて大なる幸福を受くるなり。換言すれば、能く伝道する所の教会は其の信仰も健全にして益々開發成長するなり。之に反して、常に自己の爲のみを計りて他の事を顧みざる教会は自らも決して健全なる開發をなさざることとは千數百年來の教会歴史に徴して明々白々たり。蓋し教会の成長發達は猶お個人の發達の如し。常に自己の利益のみを謀りて他人の利害を顧みざるものが高尚偉大なる人物となりたる例なし。教会も復、常に自己の利益のみを顧み、又他人の爲に犠牲的行為を爲すことを肯せずば決して盛大なること能わざるなり。此れ理に於て當<sup>あた</sup>りにあらずや。伝道の精神なき教会は縱令基督の教会と称すと雖も、其の實基督の心を失ひ、基督の命令に背きたる教会なり。失ひし者を尋ねて之を救ひ、多くの罪人を救はんが爲に基督は、世に出て、血を流せり。然るに未だ神を知らず、基督の恩恵を知らざる同胞の爲に、時と金とを献ずるの精神なき教会何ぞ基督の教会たるべけんや。

然らば即ち、我が教会の版図を拡張することは姑く置き、我等が与えられたる所の信仰の道を純粹に保存して之を子孫に伝え、然して我が日本基督教会の生命を愈々健全強壯ならしめんがためにも亦吾人は全力を尽して伝道すべきにあらずや。

我はギリシヤ人にも異邦人にも負う所あり、多く与えられたる者は亦多く求めらる。我等は四千万の同胞に先だちて恩恵の福音と、凡て其の中に包含せられたる幸福と栄光とを与えられたり。豈之を同胞に分たずして可らんや。汝等は我が証人なり。汝等往きて凡の人に福音を宣伝えよと基督命じ給う。吾等先ず之を同胞に伝えずして可ならんや。明治三十六年は我等の為に如何なる年たるべきか、我之を預言するの先見なし。只我は諸君と共に左の言を以て今年の事業に着手せんと欲す。曰く

今は寝より醒むべきの時なり。そは信仰の初より更に我等の救は近し。夜既に更けて日近づけり。故に我等暗きの行を去て、光明の甲を衣るべし。〔福音新報第三百九十三号 明治三十六年一月十日〕

## 神 の 召

井深梶之助

旧約時代信仰的偉人少なからず。然も義人アブラハムの如き、其の最も偉大なる人物と謂うべし。彼等は星の燦爛として天空に光輝を放つ如く、灼然として其の光明を万世に輝かしつつあり。アブラハムは即ち其の冠たり。彼は其の信仰堅実にして神に喜ばるる者にてありき。故に神の友と呼ばれたり。而して彼は猶太国民の祖先たるのみならず、世界信徒の父となれり。死して今尚お言うの人なり。

アブラハム神の召命を受け、愛するウルの郷関を出で、漠然未知の辺境に志し、千辛万苦忍び難きの行路を経てカナンの国土に流寓し、茲に其の骸骨を埋めたり。彼が信仰的公生活、真に欽慕に堪えざる者ありと謂うべし。

近来盛んに提唱さるる旧約聖書高等批評は、旧約時代に於ける信仰的偉人の存在を否定せり。曰く、アブラハ

ム、イサク、ヤコブの如きは、歴史的人物として存在せしに非ず。彼等は一の種属に過ぎざるなり。其の名称は個人称にあらず、種属の称号なりと。然るに近來斯る妄誕の臆説を根底より打破するに足る最も有力の証拠物は発見せられたり。即ちバビロン国王ハンムラビの石碑此れなり。

ハンムラビは紀元前約二千四百年頃のバビロン国王にして、創世記第十四章に記されたる、ミナルの王アムラベルと同一人なりと云う。即ち彼はアブラハムと同時代の人にして、東はエラム即ち彼斯ペルシヤより、西は地中海に至るまでを領し、バビロンを首府となし、一大王国を建設したる人物なり。

創世記十四章には、彼はエラサルの王アリオケ、エラムの王ケダラ、オメル及びゴイムの王テダル等と同盟聯合して、ソドム、ゴモラの王等を攻め、大いに勝利を得、ロト及び其の眷族を取返したる記事あり。

旧約聖書を研究する学者にして、是等の人物の果して歴史的人物なるや否やを疑いたる者少なからざりしが、不思議にも昨年に至りル・モーカンなる人、仏国政府の命に依り、バビロンの旧跡を掘り、ハンムラビの石碑なるものを発見したり。其の石碑は画面に四十四行宛ての碑文あり。ハンムラビ王が制定したる法律二百八十条を記す。其の内容及び形式モーゼの律法に酷似するもの少なしとせず。例えば「人若し其の父を打たば其の手を切断すべし」と云い、又「人若し他人の目を滅さば其の目を滅すべし」、「人若し他人の歯を折らば其の歯を折るべし」と云うが如きは、モーゼの律法に於ける、目にて目を償い、歯にて歯を償えと云えるに似たり。又曰く「人若し妻を娶りて子を生まば妾を迎うることを許さず。人若し妻を娶りて子を生まず妾を迎えんとするも之を家に入るることを得ず。但し妾を妻と同等に住居せしむることを許さず」と云うが如き条文なり。

以上バビロンの石碑に付きては、研究すべきもの種々ありと雖も、キ開は本問題の範囲にあらず。唯だ此に由り

てアブラハムの歴史的人物たることの極めて堅固なる關係の証拠を得たることを記憶すべし。

アブラハムの故郷を出づるや、其の神命を確信し、未來の幸福を希望して行けり。彼は神の聖慮を知覚して之に服従し、善く其の命令を實行するの人にてありき。故に彼は親戚を去り朋友を捨て、漠然向う所定かならざる異境に進みたり。愛蘭アイerlandの米国移住民が、船の本国を解纜するに臨み、愛する親戚、朋友等と両々埠頭に相擁し、潸然さんぜん熱涙を濺ぎ、泣声を揚げ、互に深く其の袂別を悲しむ。交通運搬の利便備わり、一去一來極めて容易なるの今日、別離を悼むの情尚お斯の如し、況んや未開時代のアブラハムをや。

昔者神その聖慮を人に明示せんがため、夢幻を以て覚知せしむることありき。然も今日尚お同一の方法を以て人類を指導し給うやは疑問に属す。吾人は眼のあたり神の声を聴き、明らかに其の召命を受くるに非ずんば、絶対的服従を為し能わざるか。優渥なる天皇の恩召を被りながら、尚お且つ童顔に咫尺し奉り直接に其の勅詔を聴くに非ずんば之に応ずる能わずと言う者あらんや。身は天涯の孤客たらんも、其の聖恩に感泣すべきにあらずや。聖書は神の聖慮を示し、良心は人生の針路を語る。吾人は静思熟慮して神の下し給う召命を覚り之に服従すべきに非ずや。

博士へボンは今を距ること四十年前、我が日本に渡来せり。彼は我が国に於て偉大なる事業を經營せし人にはあらざりき。然も彼は専心日本語を研修し、和英辞典を編纂して内外人修学の便に供したり。彼は又維新以前に於て治療所を開設し、広く泰西の医術を施したり。故に彼は西洋医術元祖の一人に算えられたり。而して日本語聖書の翻訳も又彼の手に由りて成されたり。彼は紐育に於ける開業医にして前途有望の人士なりき。彼にして其の事業を今日に至るまで継続し来たれば、優に市の錚々たる地位に進むべき人たるや疑うべくもあらざりき。然

れど、彼は日本伝道の急務なるを感じ、年齒四十歳にして断然その志を決し、己が事業を抛ちて本邦に渡来したりき。当時米国には未だ大陸縦貫鉄道の敷設なかりしを以て、大西洋を航するの便を得ず。船は喜望峯を迂廻し六ヶ月を経て漸く横浜に到着すべき時代にてありければ、其の親戚、朋友は博士の遠大なる壯図を解せず、其の志の突飛なるを嘲り、到底その空望の遂ぐ可らざるを詰りたり。然も博士は日本伝道をもて神の命令なりと確信し、愛する故山に辞して蒙昧未開の本邦に渡来したりき。其の従順の信仰、熱切なる愛情、誠に欽慕すべきに非ずや。

新島襄は苟かに国禁を破り、単身邦土を脱してボストンに到り、ハアデエの知遇を受け、学成り業修まりて本邦に帰朝し、同志社を建設して多大の貢献を為したりき。アブラハムを召して信仰の父となしたる神は、博士へボンの本邦に送り、又新島襄氏を米国に遣わし、以て日本の開發に貢献する所あらしめたりき。神の人類を召して其の奥妙なる経綸に参画せしむるの跡、歴々として見るべきに非ずや。

義人アブラハムの後裔より耶蘇基督生まれ出でたり。彼は其の約束の如く万国民の父となれり。我が国民を指導して基督の救を蒙らしめ、神の子たるの光榮に与からしむる責任を有する者は誰か。此れ吾人基督教徒にあらずや。吾人は神の召命に服従して福音のために全力を献げざる可らず。〔福音新報第四百一号明治三十六年三月五日〕

神学博士チ・チ・アレキサンドル氏追悼ノ辞

井深梶之助

余ハ明治学院ヲ代表シ又多年氏ノ交ヲ辱クシタル一個人トシテ一片ノ弔辭ヲ陳ベント欲ス。

トマス・チエロン・アレキサンドル氏ハ一千八百五十年頃北米合衆國テネスシー州ノ東部マウントホロフニ生マル。氏ノ家ハ農家ナリ。南北戦争ノ時二人トナリ、メリビル大学ニ入学シタリ。然ルニ、當時同大学ハ戦後ノコトトテ財産非常ニ困難ナリシカバ、在学ノ生徒等自ラ奮ツテ職工トナリ、校舎ノ建築ヲ助ケシガ、トマス・アレキサンドルモ其ノ一人ナリキ。

メリビル大学ヲ卒業シテ、二年間助教ヲ務メ、ニウヨルク市ユニオン神学校ニ入学シ、時ノ校長ドクトル・アダムス氏ノ懇篤ナル待遇ト教訓トヲ受ケタリ。

右神学校ヲ卒業シテ間モナク神学校ニ在ルウキン氏ヨリ日本伝道ヲ勸メラレ、米國プレスビテリアン教会ノ派遣宣教師トシテ日本ニ渡來シタリ。是レ實ニ一千八百七十七年（明治十年）ナリ。最初ハ東京ニ居ヲ定メ日本語ヲ学ブノ傍ラ一致英和学校ニ於テ英語ヲ教授シタリ。然ルニ其ノ頃プレスビテリアン・ミッションニ於テハ其ノ事業ヲ拡張シ関西地方伝道ニ着手スルコトトナレリ。然シテ其ノ創業者ノ撰ニ当タレルハ同氏ナリキ。實ニアレキサンドル氏ハ関西地方に於ケル我が教会伝道ノ創業者ノ一人ナリトス。

然ルニ、明治廿六年（一八九三）ニ明治学院神学教授ドクトル・ノツクス氏ハ任ヲ辭シテ帰國セラレタルヲ以テ、同氏ハ其ノ後ヲ襲ツテ神学教授トナリ四年間最モ忠実ニ其ノ任ヲ尽サレタリ。

明治卅二年休養ノ期來タリ、一旦家族ヲ携エテ帰國シ一年ヲ経テ单身再ビ來朝セラレタルヲ以テ、明治学院ハ再ビ氏ヲ教授ニ聘セント欲シタレドモ、或ル事情ノ為ニ其ノ意ヲ果ス能ワズ。氏ハ再ビ関西伝道ニ従事セラルルコトトナリテ京都ニ居住セラレタリ。其ノ後ノ歴史ハ尚人々ノ記憶ニ新タナルコトナレバ之ヲ此ニ詳述スルノ必

要ナカラン。

故アレキサンドル氏ハ日本伝道ノ為ニ全生涯ヲ貢獻シタル人ナリ。故ニ吾人ハ同氏ヲ紀念スルモ（第一）自然宣教師トシテノアレキサンドル氏ナルガ、氏ノ如キハ実ニ有数ノ宣教師ナリ。

一、日本語ニ熟達シタルコト、上品ニシテ紳士學士風ノ言語ヲ能ク用イタルコト。

二、日本ノ事情ニ通ジタルコト。此ノコトハ容易ナルガ如クシテ容易ナラザルコト。是ハ氏が最初ヨリ深く内地ニ入りテ直接伝道ニ従事シタル結果ナリ。

三、日本人ニ対シテ同情深カリシコト。其ノ結果日本人ヲ能ク信ジ又日本人ニ信セラレタルコト。其ノ一例ハ氏が大会伝道局ノ為ニ尽瘁シタルコト。伝道局ノ未ダ能ク了解セラレザル時ヨリ之ニ厚キ同情ヲ表シタルコト。又其ノ局員トシテ尽力シタルコト。

第二、神學者又は聖書學者トシテノアレキサンドル氏。

同氏が実地伝道ニ熱心ナルト同時ニ終始、読書研究ヲ怠ラズ、殊ニ旧約文學ニ於テ精通セラレシコトハ人ノ知ル所ナリ。氏ノ著述ニ関スル旧約書ノ人物、予言者アモス及ビ其ノ他ノ書ハ有益ナルキリスト教文學ナリ。神學者又ハ聖書學者トシテ氏ヲ記憶スルニ当タリテ茲ニ默スベカラザル一事ハ、氏が神學上ノ意見ニ付キテ一時同僚ヨリ大イニ非難攻撃ヲ受ケタルコトナリ。今其ノ可否曲直ヲ論ズベキ場合ニ非ズト雖モ、氏ノ神學上ノ位置ハ決して極端、若シクハ破壊的ノモノニ非ズ。只寛大ニシテ進歩的ノ態度アリシノミ。恐ラク此ノ点ニ付キテ大イニ誤解セラレタルナラン。

氏病ヲ獲テ特ニ帰國セントスルヤ、余ハ東京中會ノ委員ノ一人トシテ氏ヲ横浜海岸通りクラブホテルニ訪イ相



語り共ニ祈リテ別レントスルニ際シテ、氏ノ告ゲタル語ヲ忘ルル能ワズ。

氏ハ先ズ自ラ日本基督教會ニ於テ其ノ指導者等ヨリ望外ノ信任ト厚遇トヲ受ケタルコトニ付キテ深キ感謝ノ意ヲ表シ、然シテ目下日本ノ神學界ニ於テ我が基督教會ガ守ルベキ位置、取ルベキ方針ニ就キテ縷々述ベル所アリ、殆ンド其ノ病苦ヲ忘レタルモノノ如クナリキ。然シテ其ノ吾ガ教會ノ守ルベキ位置トハ、一方ニ於テ頑冥固陋ニ流レズ、他ノ一方ニ於テハ極端破壞的ノ神學說ニ對シテ確乎タル建設的ノ信仰ヲ維持主張スルニアリ、是レ實ニ日本基督教會ノ大使命ナリト云ウニアリキ。

蓋シ是レ氏が將サニ此ノ國ヲ去ラントスルニ當タリ至誠ヲ籠メテ吾人ニ与エタル遺訓ナリ。願クハ謙遜忠実ナルキリストノ僕、熱心ニシテ同情ニ富メル宣教師、寛大ニシテ進歩的、而モ極端ニ走ラズ、常ニ健全ナル聖書學者タル神學博士トマス・チーロン・アレキサンドル氏ノ精神ガ、永ク我が教會ノ中ニ活動シ、且ツ氏が廿有余年ノ間南船北馬シテ日本各處ニ伝播シタル福音ノ種ハ百千倍ノ実ヲ結ビテ神ノ御倉ニ納メラレンコトヲ祈ルナリ。

明治卅六年一月卅一日 番町女子學院ニ於テ（井深梶之助説教講演集）

## 基督の倫理的教訓

井深梶之助

猶太の教法師、耶穌に來たりて問いけるよう、凡の誠の中孰れか大いならんと。耶穌応えて曰く、爾心を尽し、精神を尽し、意せを尽して主なる爾の神を愛すべし。斯より大いなる誠なしと。基督教倫理の基礎及び其の大本は此の簡明なる基督の語に於て遺憾なく説き尽されたりと謂うべきなり。若し基督の倫理的教訓を綜合して其の條を挙げ項を分かつたは、其の数極めて多かるんも、要は唯だ神を愛し人を愛するの一点に帰著す。其の説く所極めて單純にして無味乾燥なるの如き觀ありと雖も、基督教

的万般の倫理道德は其の根底を此の教訓に養いつつありと断言するに憚らざるなり。蓋し基督の倫理的教訓は複雑なる規則を制定して、人類を一定せる模型の中に拘束せんと試みたるに非ずして、単に其の根本的原则を示したるに過ぎざればなり。基督は徹頭徹尾その倫理道德を宗教的に弁明しぬ。基督教道德の金篇玉条とも謂うべき山上の垂訓に、終始一貫宗教的意義の含蓄せるに徹しても明白なりと謂うべきなり。是れ吾人が新約書に含まれたる倫理的教訓を学ぶに於て記憶し置くべき必要条件なりとす。

基督は凡ての人類に対して其の全心全力を挙げて父なる神を敬愛すべきことを要求しぬ。此れ正しく基督教倫理の根本的思想の有神の原理に基因せるを明白に表現したるものに非ずや。基督は亦た神と人類との倫理的關係を明らかに道破して、人類が父なる神を主として之に敬事するの義務あることを教訓せり。神は万有の創造者にして且つ自然界の統治者たるは勿論、神と人類の道德的關係は最も深刻なる意味に於ける君臣主僕の情義に基づくべきものなりてう思想は旧約時代に於て明白に発現せり。然れども、此の時代に於ては神人の關係恰も父子の情交に於けるが如くに親密なるべしとの信念は毫も発芽せざりしなり。唯だ基督に於てのみ最も明確に神人の父子的關係は説き示されたるなり。共観福音書を見るも、神人父子の關係の如何に密接なる可きかは知了し得べしと雖も、約翰伝に至つては更に其の綿密なる靈的關係を知悉し得るの心地す。約翰伝中、神を指して父と称せるの句、実に九十回の多きを見る、豈に愉快ならずや。基督サマリヤの一婦人に対して父なる神の存在を物語りしが如き更に趣味深きを感じずんば非ざるなり。

万有の創造者たり主宰たる神を敬愛して之に奉事するは基督教倫理の第一義にして、其の活ける神を確信すると然らざるとは、倫理思想の上に多大なる差違を生ずべきや明白なりとす。換言せば、無神論者若しくは唯物主義、汎神論者の唱道する倫理主義と、有神論者の主張する倫理主義に於ては、実に霄壤の差あるを免がれざるなり。而して亦た無神論者と有神論者の人生觀に於ても根本的に相違するの点あるを認めずんば非ざるなり。神を信するの徒は自ら神を以て倫理道德の中心となし、人類万般の義務も其の帰著する所、我が主たり父たる神に對する義務なるべきを認識して如何なる事業を執るに於ても主に事うるが如く、極めて誠実なる心を懷いて行なう者なり。然れども、在天の神を信せざるの徒に至りては、飽くまでも自己を以て倫理の中心となし、徹頭徹尾自己の欲望と意志の満足を以て人生最大の目的とはなせり。斯かる倫理思想を懷抱せるものは、竟に狹隘なる國家主義か若しくは陰鬱なる厭世主義に陥らざんば止まざるなり。豈に慎まざる可んや。

基督は常に人類の全心全力を挙げて神に奉事すべき義務あるを教訓せられたるのみならず、亦た己の如く其の隣を愛すべきこ

とをも教えられぬ。使徒ヨハネ、其の書に記して曰く、凡そ愛なきものは神を知らず。神は即ち愛なればなり。既に見る所の兄弟を愛せずして未だ見ざる所の神を如何で愛することを得んや。神を愛するものは亦た其の兄弟をも愛すべしと。基督亦た善きサマリヤ人の比譬を設けて世界同胞の均しく相愛すべき義務あることをも教訓せられたり。(路加伝十章三十乃至三十七)之に由りて之を觀れば、基督の倫理思想は正しく世界同胞主義に基づきたるや明らかなり。現代に於てこそ世界人類の共同一致でうことは一般に認識せらるるに至りしと雖も、古代に於ては然らず。猶太人は自ら神の選民なりと誇りて他を異邦人と蔑如し、希臘人は自国外の人民を目して蒙昧野蛮なりと輕侮し、日本國民は自國を以て神州と誇稱し傲然として歐米文明國民を毛唐人なりと罵詈し、支那國民亦た自ら中華を以て誇り漫然外國人を侮蔑して夷狄と見做したりき。此の他印度に於ける階級制度の如き明らかに既往の歴史は世界の排外主義を物語りつつあるなり。基督世に降りて世界人類の同胞主義を説く。何ぞ皮膚の黒白と洋の東西を以て相敵視するの愚を学ばんや。

基督凡ての人類に対して、己の如く其の隣を愛すべきことを教えたりしに依りて、著しく個人の価値を認識することを得たりき。而して基督は亦た凡そ人類たるものには、貧富、貴賤、賢愚の差別なく、各人各個に貴重的人格ありて、各神よりの使命と一個の目的を有し、拮据勉勵之を成就すべきの義務及び責任を負うものなるが故に、自己の権能と意志を犠牲に供して他人の器械となるべきものに非ざることを教えたり。更に基督は、人類は神より享けたる永遠無窮の靈性を以て永久世界に活動すべきものなるが故に、毫も之を侮蔑すべきに非ざることを説き示されたりき。基督の倫理的教訓及び其の行為の世界に於ける倫理道德の思想に及ぼしたる影響、蓋し惻度し難きものありと謂わざる可らず。基督教が千數百年の間歐米諸國に於て実行しつゝある各種の慈善事業、若しくは奴隸解放、一夫一婦の大倫の如き、均しく之れ基督教的同胞主義の賜なりと謂わざる可らず。

伊太利のフロレンスに建てられたる禮拜堂に有名なる文豪ダンテの肖像を写したる壁画ありき。此は稀世の絶品にして世の人々の嘆賞し措く能わざるものにてありしが、星移り物變るに連れて其の禮拜堂も無残に壞れ、昔の面影見るべくも有らざるまでに朽ちゆくと同時に、あわれ文豪ダンテの肖像も消え失せたり。何時の頃にやありけん、此の慕わしき壁画の昔語りは技芸に堪能なりとの誉高かりし一画工の耳に入りぬ。画工の思いけるよう、此は趣味深き物語りを聴くものかな、いで其の廢れたる古き禮拜堂を搜索ねんものと、市街の隅々まで残りなく探し求めたりしが、程経て後ち其の古き禮拜堂も見当たり且つ有名なるダンテの肖像をも尋ね出すことを得たりと。基督人類の罪惡の沈倫せる魂を搜索して之を救うの状恰も斯くの如くならん。

日露の交戦將に酣ならんとするに際し、吾人は基督教徒の戦争綱を明らかにすべき必要あるを認めずんばあらず。由來基督教

に於ても絶対的に戦争なるものを否定するの一派あり。クエーカー教派即ち是れなり。其の主張に曰く、世界の人類は凡て神の子にして均く同胞兄弟なり。故に干戈を交えて兄弟相互に害うは頗る神の意志に反すと。吾人は同胞の残酷なる争鬪と悲惨なる流血を傷むの情極めて切なる感ず。然れども、国家の権利と人格の存在とのためには、寧ろ残酷と認むべき行為をも犠牲に供せざる可らず。故に吾人は斯かる極端なる非戦論には絶対的に賛同し能わざるなり。現時我が国に於ても或る一部の人士は盛んに極端なる非戦論を主張して開戦論者を喝破し去らんとする勢いを呈しつつあり。然れども、人格の存在と国家の権利を犠牲にしてまでも非戦論を主張する彼等の意見には左袒する能わざるなり。仮りに凶器を携帯して人を恐喝し貴重人命と財産を掠奪せんとする強盗に襲われんか、吾人は神に賦与せられたる人格を防衛するためには極力之に抵抗して自己の安全を計らざる可らず。故に吾人は正義公道のため決して戦争を辞すべきものにあらざるなり。

基督は人類に対して新たな理想を示したるのみならず、尚且つ其の高尚なる理想をして実現するの活力をも携え来たりしなり。基督以前に於て情美高尚なる倫理道德を唱道したるものなきに非ずと雖も、悲しい哉、其の倫理道德を實踐躬行せしむるの力に至りては殆んど皆無にてありき。パウロ曰く、我れ願う所の善は之を行なわず。反りて願わざる所の悪は之を行なえり。噫、我れ困苦なやみする人なるかなと。蓋し自己の意力を以て道德的理想に到達せんと試むるものは、パウロと共に無限の嘆声を発せざんば止まざるべし。然れども、パウロは竟に基督の救いを己が魂に呼び求むるの幸福に際会して、此の死の体より我を救はんものは誰ぞや。是れ我等の主耶穌基督なるが故に神に感謝すと絶叫せり。斯の如きは実に基督教倫理の特徴たらざんばあらざるなり。基督教は理論に非ず、学説に非ず、実力なり、生命なり。而して其の基督教倫理道德の生命及び実力の根本要素は基督の中に充溢しつつあるなり。故に基督教倫理の真意を解釈せんと欲せば、唯り基督の教訓のみの研究を以て満足することなく、深く進んで其の道たり、真理たり、生命たる基督の人格に接触せざる可らず。〔福音新報第四百五十一号明治三十七年二月十八日〕

## 井深氏の台湾談

福音新報第四百二十八号

此の程台湾より帰京せられたる井深樞之助氏談話の概要なり。

意外なる台湾 台湾に於て最も意外に感じたる一事は、基督教の勢力が官民の間に普及せる状況なりき。余は暴風雨のため妨げられ、中部台湾の地方に巡回すること能わざりしが、南北両部に於ける著名の市邑は殆んど観察することを得たり。而して是等の各地に於ける諸官衙、会社、商店などには、基督教徒が枢要の地位を占め、伝道上多大の貢献をなしつつあれば、台湾伝道に従事するものに取りて頗る便利の点多し。

社会全体の意向より言うも基督教に対しては頗る尊敬の態度を取り、官民共に伝道者を優待するの良風あり。後藤民政長官の如きは、基督教徒に対して最も深厚なる同情を灑ぎ、殊に台湾伝道の上には出来得る限りの便利と保護を与えらるるを吝まず。故に甚だ愉快なる心を以て南船北馬することを得たり。台湾日日新聞は、余の台北淡水館に於ける三日間の説教を速記して、之を八日間の紙上に連載したり。以て社会の基督教に対する意向を想察し得べきなり。

伝道上一つの困難 新領土なるの故を以て内地人一般に永住的觀念の欠乏せると、総督府官吏に更迭多きとに因り、一個の教会若しくは講義所に永久籍を列ぬるものなく、長きは三、四年、短きは数カ月にして他所に移転するを以て、漸く盛大の氣運に向わんとせば、忽ち会員の移動に依りて寂寞を來たし、伝道の氣勢竟に振わざるに至る。之れ台湾伝道に従事するもの大いに困難とする所なり。

生蕃の将来 生蕃を如何にすべきかてう問題は、台湾の統治上最も解決に苦心所なり。台湾総督府も未だ一定の對蕃策を確立する能わず。従来は唯だ撫蕃、滅蕃孰れか適當の政策なるやを試験したるに過ぎざりしとは、当局者の語る所なりき。現時台湾總督府に於ても、生蕃は獐猛にして濟度す可からざる人種なれば、之を滅尽するが至当なりと論する一派と、之を撫育して文明的善良の民に薰化すべしと主張する一派とありて、未だ撫蕃、滅

蕃孰れとも確定せずと伝う。然れども、民間の信用ある企業家若しくは撫蕃の衝に当たりて深く蕃情に通じたる官吏の語る所に拠れば、生蕃は決して教化し能わざる人種に非ず。其の性情寧ろ支那民族よりも愛すべき点ありと。滅蕃は人道に非ず。須らく彼等を撫育して文明的良民たらしめざる可からず。要は唯だ彼等が文明的生活に堪え得るや否やに在り。或る生蕃通の語る所に拠れば、彼等の氣力の旺盛にして体力の強健なる、優に文明世界の生存競争に堪え得る望みありと。想うに彼等は、アイヌの如く意志薄弱にして、飲酒、喫煙の如き些々たる欲望を制し能わざるが如き人種に非ざれば、教育の方法宜しきを得ば、日本国民として恥じざるまでに同化し得べきか。而して之が化育の方法は、基督教を蕃界に宣伝すると同時に、民間の有志家、事業家が蕃界に事業を企て彼等に生活の道を与うるにあり。

愉快なる伝道地 新領土に於ける多数の人民は、窮屈なる社会の制裁に緊束せらるるの不自由もなく、將た亦親屬、縁者、骨肉、朋友の干渉を受くる氣遣いもなく、全く新しき天地に新しき生活を經營しつつあり。故に個人として將た家族として基督教を研究し且つ信仰するも、些かの宗教的、社会的干渉に遭遇することなく、自由に己が信仰を維持することを得。台湾伝道の發展著しきは、蓋し以上の社会的要素あるを以てなり。台湾は実に愉快なる伝道地なりと謂わざる可からず。

第一篇 台湾人同化の一策 世界中何れの地に在りても、宛かも水と油の如く其の風俗人情に融和せず、頑然として固有の民族的風習を改めざる支那人種を、日本国民の氣風と習俗に同化せしむるは最も至難の事業に属す。然れども、彼等の社会に伝來する階級制を利用しなば優に彼等を同化し得べきか。由來支那民族は上長者を推尊し、其の言々、句々を悉く真理と仰ぎて敬服するの風習あり。故に台湾人民を日本化せしむるには、其の上長者を誘

導して母国の文化に浴せしめ、漸次に其の後進を啓発せしむるを最も良策とす。台湾の名望家呉道源氏の如きは、第五博覧会見物以後大いに母国文明の進歩に感ずる所あり、今回其の令息を明治学院に入学せしむることを約し、台北の富豪李春生氏も亦其の孫女を女子学院に送ることとなりぬ。台湾前途のため甚だ喜ばしき現象と謂わざる可からず。〔福音新報 明治三十六年九月十七日〕

## 第二篇





# 明治学院理事員会記録と白金學報

## 明治学院理事員会記録

(明治三十六年三月廿七日より  
明治三十八年二月十五日まで)

### 第一回

明治卅六年三月廿七日午前九時神学部総理室ニ於テ開會

理事 山東直砥、ハウルス、松永文雄、イムブリー、タムソン、稲垣信、石原保太郎、ブライス、ブカナン、カミング、ゼームス・バラ、員外 ランデス、ワイコッフ、熊野ノ諸氏出席

一、タムソン氏祈祷

一、理事、服部綾雄氏渡米辞任ニ付其後任トシテ山本秀雄、

磯部弥一郎ノ両氏ヲ候補者トシテ投票セシニ磯部氏七票山本氏五票即チ二票ノ差ニテ磯部氏当選但シ磯部氏若シ就任ヲ承諾セザル時ハ次点ノ山本氏ヲ挙ゲルコトトス

一、本邦理事ノ任期皆既ニ満チタルヲ以テ今悉ク改選セザル可ラザルモ全体ヲ改選スル時、事務上不便尠カラザルガ故ニ現在ノ稲垣、片岡、石原、及ビ磯部ノ四氏ヲ二年ノ任期トシ

山東、松永、松井、服部(後二)ノ四氏ヲ一年トス

一、井深、イムブリー、石原、ハウルスノ四氏ヲ事務員ト定ム、但シワイコッフ氏ハ書記タルヲ以テ現任ニアラザルモ其員ニ参列スルコトトス

一、井深氏ヨリ神学部ニ関スル報告

現員十五名及神学生候補者四人ハ其予備トシテ高等学部ニ在リ

一、ワイコッフ氏普通学部ニ関シ報告ス

一、十二時ヲ報ジタルヲ以テ一時卅分マデ散會

一、午後一時三十分再ビ開會

一、事務員ヨリ左ノ報告アリ

理事會ノ決議ニ基キ先般オートマンス氏ニ神学部教授タランコトヲ照會セシニ之ヲ欣諾セルモ同氏帰省ノ期近キニ在ルヲ以テ一応帰省シテ復ビ渡來ノ後、就任セントノ約ヲナシタリ而シテ間モナク愈々帰省シ目下該地某神学校ニ在リテ旧約史

研究中ニテ来年四月比來任スベシ

一、講師柏井氏ヲ神学教授トシテ其月給ヲ六十円トナスコトニ定ム

一、事務員ハ学才アル有望ノ青年ニシテ神学部教員トナルニ足ルベキ者ヲ得ンコトニ注意スベシトノ決議案アリ

一、普通学部講師足立氏ノ月給ヲ五円増額スルコトトス

一、神学部ニ於テ邦語ヲ以テ教授スルニ付テノ委員稻垣氏ヨリ報告アリタレドモ種々ノ議論アリシ末カンミンダ氏ノ動議ニテ神学部ハ可成速カニ邦語ニテ教科書ヲ著述スルコトトセリ

一、神学、高等、普通三学部本年度ノ予算ヲ會計ヨリ提出シ原案ノ通り可決

一、寄宿舎ノ湯殿ヲ新築スルコトニ定ム

一、土木委員ヨリ今度講堂新築ニ付旧來ノ門番家屋ヲ移転シ且ツ之ヲ増築シ教員ノ住宅トナス目的ニテ既ニ工事ニ着手セリトテ事後承諾ヲ求メシニ異議ナク可決セリ

一、稻垣氏祈祷シテ閉會

## 第二回 理事会

明治卅六年十二月廿二日午後二時臨時理事会ヲ開ク

理事、稻垣、松井、イムブリー、ハオルス、ブース、ブカナ  
ン、カンミンダ、松永、石原、タムソン、ゼームス・バラ及  
員外ワイコッフ、熊野ノ諸氏出席 松井氏祈祷シテ開議

一、井深總理ヨリ神学部及高等学部ハ去ル十一月廿七日文部省専門学校令ニ依リ認可セラレタル旨報告アリ又過般理事會ニ於テ決議セル件ニ基キ神学部ニ別科ヲ置キ且本科卒業後研究科ヲ置クコトトシ是又文部省ノ認可ヲ得タリトノ報告アリ

一、台湾台北李春生ヨリ新築講堂裝飾費用ノ内ニ金貳百円ヲ寄附セリトノ報告アリ

一、植村正久氏其牧シ居ル教会ニ全力ヲ注キ度且神学部ノ現狀ニ満足セザル所モアリトノ理由ヲ以テ神学部講師ノ任ヲ辞セリ仍テ理事会ハ遺憾ナガラ其辞任ヲ受ケ容レ而シテ時々科外教師トシテ講演ヲ依頼スルコトトシ且井深ハオルス二氏ヲ委員ニ挙ケ其神学部ニ対スル意見ヲ問フコトト定ム

一、稻垣氏ヨリ左ノ決議案ヲ提出ス

我が明治学院ハ日本基督教會ノ信仰ノ告白ヲ以テ其教理ヲ標準トナスコト

右決議ス

理由 元來明治学院ハ日本基督教會トハ密接ナル關係ヲ有

シ其教理ノ標準モ同教會ノ信仰ノ告白ニ遵拠シ來リ

シガ近來其点ニ就テ疑念ヲ懷クモノアリ故ニ今日之

ヲ明言スルノ必要ヲ認ム

右討議ノ上提出案ノ通り可決ス

一、植村氏ノ辞任モアリ且全体神学部教授ノ數不足ナルヲ以テ東北学院教授笹尾久米太郎氏ヲ月給八拾円ヲ以テ招聘ス

## 第二篇

ルコトトシ井深總理不日該地ニ行キ直接同人ニ相談スルコトト定ム

一、学院各学部ヲ拡張スルノ必要アリ故ニ委員五名ヲ挙ケ案ヲ立テ次ノ例会ニ提出セシムルコトヲ決議ス

右委員ニハ井深、松永、松井、イムブリー、ワイコッフ、ノ五氏ヲ挙ク

一、ランヂス氏負傷ニ付理事会ヨリ同情ヲ表シタル見舞状ヲ贈ルコトトス

一、ランヂス氏負傷ニ就テハ当分教授ノ任ニ堪ヘザルベキヲ以テ其補欠ノ事ハプレスビテリアンミッシヨンニ交渉シ然ルベキ人ニ依頼スルコトト定ム

右議了シ稲垣氏祈祷シテ閉会

## 第三回

明治三十七年三月廿四日午後二時理事例会ヲ開ク 井深、タムソン、バラ(ゼームス)、イムブリー、ブース、松永、松井、石原、ミロル、ブカナン、ハウルス、カンミンク、ノ諸理事及ビ員外、マクネヤ、プライイス、フルトン、バラ(ジョン)、ワイコッフ、熊野、ノ諸氏出席

一、ミロル氏祈祷シテ閉会

一、書記邦文及ビ英文ノ前会記録ヲ読ム各員之ヲ正確ナリト認ム

一、總理ヨリ左ノ報告アリ



片岡健吉

葬セリ

1. 片岡理事ノ永眠ニ付学院ヲ代表シテ弔電及ビ贈金拾円ヲ贈ル又山東理事ノ永眠ニ対シテハ弔書ニ贈金五円ヲ添ヘテ贈リ且ツ會

2. 昨年十二月臨時會ニテ笹尾桑太郎氏ヲ神学部教授ニ招聘ストノ決議ニ基キ昨臘仙台市ニ赴キ親シク同氏ニ面會シテ相談セリ而シテ此ノ事頗ル重大ニ属スルヲ以テ熟考ノ必要モアリ又東北学院院长シユネドル氏及ビ同僚ニモ協議セザル可カラズ故ニ確答ハ數日間ノ猶予ヲ与ヘヨトノ事ニテ別レタリ尤シユネドル氏ハ折悪シク旅行中ニテ面會ヲ得ズ遺憾ナガラ書翰ニ委曲ノ事情ヲ記シ家人ニ托シ置キテ帰レリ

3. 前回ノ決議ニ基キ予及ビハウルス氏ハ植村氏ヲ訪ヒ謝儀トシテ金百円ヲ呈シ且ツ神学部ニ対スル同氏ノ意見ヲ叩キタリ

一、書記ヨリ神学部高等学部及ビ普通学部ニ於ケル過去一年間ノ諸件ヲ報告ス

一、神学部卒業生池田勤之助、松本徳三郎、鈴木高志ノ三生ニ高等学部ノ卒業生富尾留雄、赤松政臣、匹田順、下津宇

一ノ四生及ビ普通学部卒業生石井鉄三外廿名ニ規定ノ卒業証書ヲ授与スルコトニ決ス其他普通学部五年生油田篤太郎ハ賜賀扶斯ニ罹リ且下入院中ニ付全快ノ上本学期間受験セシメ及第セバ証書ヲ授与スルコトトス

一、前会ニテ決議セル学院拡張案ノ一トシタイムブリー氏ノ手ニ成レル書翰即チ学院基本金及ビ校舍建築費(金貨十万弗)ノ寄附募集ノ件ヲ詳述セルモノヲ各ミッションボールトニ送ルコトニ決ス

一、右寄附金募集ニ付井深総理ヲ米國ニ派遣セバ如何トノコトヲボールトニ交渉シ其贊同ヲ得テ後同氏ヲ渡米セシムルコトトス

但其交渉ハ書記及イムブリー氏ニ托スルコトトス  
一、従来ランデス氏ノ教授セル学科ヲ担任スルガ為メニハウルス氏ヲ招聘スルコト 但シ其学科中經濟國際法ハマクネヤ氏ニ依頼スルコトニ決ス



園井 柏

一、事務員ヨリ左ノ報告アリ

柏井氏出発ノ際ハプリンストン神学校ニ入ルノ目的ニシテ其不在中ハ其俸給ノ半額ヲ支給スルコトナリシガ米國

ニ至ルヤ都合ニ依リユニオン神学校ニ入りホール校長ノ尽

力ニテ奨学金ヲ受ケ且ツ其家族ヲ扶助スルニ足ルノ資金ヲ得ルコトトナリシヲ以テ爾來学院ヨリハ其俸給ヲ支給セザルコトトセリ柏井氏ニ於テモ固ヨリ之ヲ期セザルノミナラズ出発ノ際俸給ノ六ヶ月分ヲ前受シタル額ヲモ償還ス可キヤト照会シ來レリ而シテ事務員ハ同氏ノ功勞勤カラザルヲ以テ之ヲ償還スルニ及バズトセリ

一、右ノ報告ヲ是認シ且前臨時會ニ於テ定メタル信仰告白ヲ認可スルコトトス  
一、理事半数任期滿チ且ツ片岡山東二氏永眠ニ付五名改撰補欠ス  
即チ松永文雄 松井安三郎改選 渡辺暢 有馬純清 水

芦幾次郎ノ諸氏當選ス 但シ水芦氏ハ山東氏ノ後任ニシテ一年ノ任期トス  
時已ニ六時ヲ過ギタルヲ以テ石原氏祈祷シテ七時卅分マデ散會

七時卅分再ビ開會

一、神学部講師秦氏ハ本年六月マデノ期限ナルモ尚一ヶ年即チ來卅八年六月マデ繼續スルコトトス  
一、今回ノ高等学部卒業生富尾留雄ヲ舎監トシ月給廿円図書館助手トシテ月給拾円合セテ卅円ヲ支給スルコトトス  
一、本年度ノ予算ヲ別紙ノ如ク決ス  
一、神学部ニ於テ神学科担任ハ次ノ例会マデ教授會ニ委任スルコトニ決ス

## 第二篇

一、普通学部ニ於テ尚一層良教員ヲ聘シ且ツ全体ニ於テ其待遇ヲ改善スルノ方針ヲ以テ今後学校ノ進歩生徒ノ増加ヲ待チ此実行ヲ事務員ニ委任スルコト

一、事務員ヲ改選セルニ投票ノ結果井深、石原、イムブリー松井、ハウルス、当選ス但シワイコッフ氏ハ書記タルヲ以テ自然事務員ニ列スルコト

一、高等学部ノ学科ニ変更ヲ要スル所アリ之ヲ普通学部教授会ニ委任スルコト

一、石原ワイコッフ二氏ヲ会計検査委員ニ挙ゲ

一、明治学院憲法ノ改正ヲ要スル点アリ且邦語ニテ記スベキ

ニ付之ヲ事務員ニ委托スルコトトス

右議了シテカンミング氏祈祷シテ閉会

## 第四回

公益法人トシテノ最後ノ例会

明治卅八年二月十五日午後二時理事例会ヲ開ク

井深、石原、有馬、松永、マイルス、磯部、ブカナン、松

井、ハウルス、ブース、稲垣ノ諸理事及ビワイコッフ、ジ

ョン・バラ、ゼームス・バラ、オートマンス及熊野ノ員外

議員出席

一ブース氏祈祷シテ開会

一書記邦文及ビ英文ノ前記録ヲ朗読ス之ヲ可トス

一熊野氏ヨリ普通学部ニ於ケル過去一年間ノ報告アリ

一井深氏ヨリ神学部ニ於ケル同様ノ報告アリ

一井深総理ヨリ請求アリ曰ク未ダ定規ノ試験ハ終ハラサルモ神学部本科生大野直周及ビ別科生八幡太利吉又高等学部三年級部留仙次外三人普通学部五年生横山弥太郎外卅三人ノ内定規ノ試験ニ及第スル者ニハ卒業証書ヲ授与スベキニ付此件ハ凡テ各教授会へ御委任アラシコトヲト(可決)

一井深氏左ノ二件ヲ通告ス

(1) 学院憲法改正及邦文ニ記述ノ件ハ事務員ニ委托シアリシモ未ダ着手セス今暫ク猶予アラシコトヲ云フ

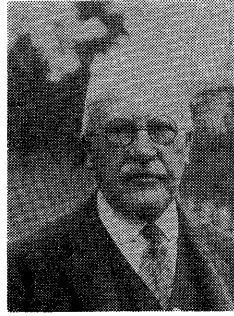
(2) 学院ヲ財団法人トスルコトニ就テハ予及ビワイコッフ氏委托サレ居リシカ今尚其手續中ナリ云々

一事務員ハウルス氏報告シテ曰ク前記録ニアル如ク基本金募集ノ為メ井深総理ヲ米國ニ派遣云々ノコトヲ決セリ然ルニ今般幸ヒ同氏ハ来四月下旬仏國ハリス市ニ開会ノ万国学生青年大会ニ本邦青年会ヲ代表シテ臨席セラルル筈ニ付事務員ハ此行ヲ利用シテ仏國ヨリ帰路米國ニ過キリテ十分尽力セラレンコトヲ依頼スルコトニ議決セリト

右ニ付井深氏ヨリ請求アリ曰ク予ノ渡米シテ基本金ヲ募集スルコトニ対シ各ミッシェンボードガ大ニ之ヲ賛成シテ十分ノ扶助ヲ与フル様ニ理事会ヨリ依頼書ヲ送ルコトニ致シタシ

一ゼームス・バラ氏動議 井深氏ノ欧州行ヲ利用シテ帰路米國ニ渡リ基本金ヲ募集スルコトヲ依頼スルコトトシテ此事

ヲ各ボーロドニ報シ其扶助便利ヲ与フル様ニ請求スルコト  
ハウルス氏賛成可決



オルトマンス

一 井深氏曰ク今度予

ノ洋行中ハ熊野氏

ヲ臨時総代理ニ

オートマンス氏ヲ

臨時神学部部長ニ

ワイコッフ氏ヲ臨

時高等学部部長ニ推

挙ス 理事会ハ之ヲ賛成セラレンコトヲ乞フ バラ氏賛成

可決

一 井深氏曰ク神学部卒業式ハ従来普通学部ト同様三月末ニ舉

行シ来リタルモ学科ノ都合モアリ其他種々不便モアリ来年

度ヨリハ其期ヲ変更シテ六月初旬ニ舉行シタシ可決

一 ジョン・バラ氏ヨリ昨年度ノ決算報告アリ

一 井深氏曰ク此ニ二ツノ賛成ヲ得度件アリ一ハ熊野氏従来横

浜伝道女学校ニ一週二回行キ教授シ居ルガ予ノ不在中殊ニ

必要モアリ是非横浜ノ方ヲ止メ始終学院ニ居ルコトニナシ

度ク付テハ其俸給ヲ増加スルコト又一ハ柏井氏追々婦朝ニ

付テハ其旅費トシテ二百円ヲ送ルコトニ致度シ可決

一 ブース氏動議 熊野氏ノ年俸ヲ千円トスルコト可決ス 但

四月一日ヨリ

一 井深氏曰ク種々ノ必要アリ明治学院案内ヲ英文ニ記述スル

コトヲ教授会ニ托シ度シ可決

一新講堂ハ大抵落成セルカ未ダ椅子其他裝飾ヲナスコトヲ得

ス而シテ卒業式モ近キニ迫リ居リ捧室式ヲ舉行スルコトハ

延期シテ卒業式ハ新講堂ニテ舉行スルコトニ決ス

一 来年度ノ予算ハ別紙ノ如ク決ス

一 松井氏ノ動議ニ基キ特別寄附金ヲ要スルコトアリ万事事務

員ニ委托スルコトトス

一 事務員イムブリー氏不在ニ付其補欠トシテマクネヤ氏ヲ舉

ク他ハ前ノ如ク石原松井ハウルス氏熊野ワイコッフ二氏ハ

自然職掌上ソノ会議ニ列スルコト

一 理事石原稻垣磯部水芦ノ四氏任期満チタルヲ以テ改選セシ

ニ

石原 稻垣 磯部 毛利ノ四氏當選ス

一 会計検査員トシテ石原ワイコッフノ二氏ヲ舉ク

有馬氏祈禱シテ閉会

# 明治学院英文理事会記録

## MINUTES of

### MEETINGS of the BOARD of DIRECTORS

of the

#### MEIJI GAKUIN

December 22nd 1903 to Mar. 14, 1917

Board Meeting

December 22nd 1903

Met in the president's room at 2 P. M.

Prayer was offered by Dr. Haworth. The following members of the Board were present:—Messrs. Iwano, Ballagh J. H., Thompson, Matsunaga, Ishiwaru, Matsui, Inagaki, Sano, Buchanan W. C., Cumming, Ballagh J. C., Booth, Haworth and Imbrie. Messrs. Kumano and Wyckoff were also present.

President Iwano reported that the Theological Course and the Higher Course of the Academic Department had been registered as Semmon Gakko. He stated also that Rev. M. Uyenura had offered

his resignation as a professor in the Theological Department.

As there seemed to be no possibility of persuading Mr. Uemura to reconsider his resignation, the Board accepted it with regret, but requested that Mr. Uemura should continue his relation with the school by being an occasional lecturer. Drs. Iwano and Haworth were appointed a committee to inquire particularly of Mr. Uemura about any opinions that he may have as to the condition of the school, or the manner of conducting it.

The treasurer was instructed to pay to Mr. Uemura a sum equal to two months' salary as a slight recognition of his long service in the Meiji Gakuin.

The following motion was presented by Mr. Inagaki:—

Resolved, that the Confession of Faith of the Church of Christ in Japan be made the standard of doctrine for the Meiji Gakuin.

As the above resolution had not been mentioned



in the call for this special meeting, it was passed subject to ratification by the Board at its next regular meeting.

The Board decided to invite Dr. Kumetaro Sasao, a professor in the Tohoku Gakuin at Sendai, to become a professor in the Theological Department and the Higher Course of the Meiji Gakuin, at the same salary that he is now receiving at the Tohoku Gakuin, to take effect from April 1st 1904.

President Ibutka was authorized to visit Dr. Sasao at his earliest convenience, carrying notice of the above action of the Board to Dr. Sasao and Dr. Schneider.

Messrs. Ibutka, Matsunaga, Matsui, Imbrie and Wyckoff were appointed a committee to consider how to improve the condition of the Meiji Gakuin, to examine carefully into the condition of other schools, and to report at the next meeting.

The secretary was instructed to convey to Mrs. Landis the sympathy of the Board with her in her anxiety over the severe injuries received by Mr. Landis in his fall from the new chapel on December 12th.

The faculty of the Academic Department was appointed a committee to confer with The Eastern Japan Mission in regard to filling Mr. Landis's place as a teacher in the school. After prayer by Inagaki the meeting adjourned.

M. N. Wyckoff  
Sec.

#### AD-INTERIM COMMITTEE

February 3rd 1904.

Met in the President's room at 2 P. M. and were led in prayer by Dr. Ibutka. The whole committee was present.

The secretary was instructed to request from the Boards of Foreign Missions of the Presbyterian (North) and Reformed Churches the continuance of the annual grant of yen 4200.00 for another period of two years.

Dr. Ibutka told of his visit to Dr. Sasao, but said that no reply had yet been received from Dr. Sasao.

The Committee then adjourned

M. N. Wyckoff  
Sec.

## ANNUAL BOARD MEETING.

March 24<sup>th</sup> 1904.

Met in the theological school at 2.30 P. M. The meeting was opened with prayer by Rev. E. R. Miller.

The members present were Messrs. Iwabata, Miller, Cumming, Ballagh, J. H., Ishiwara, Haworth, Buchanan W. C., Thompson, Price, Matsui, Booth, Matsumaga and Imbrie.

Messrs. Ballagh J. C., Kumano, Fulton, MacNair and Wyckoff. were also present.

The minutes of the annual meeting for 1903 and the special meeting held on Dec. 22<sup>nd</sup> 1903, in Japanese and in English were read and approved.

President spoke of the death of Directors Kataoka and Santo, and said that he had on behalf of the Board sent messages to the families of the deceased, together with a gift of yen 5.00 to each.

He also reported that he had visited Dr. Sasao and presented to him the invitation of the Board to become a professor in the Meiji Gakuin, and that after giving the matter full consideration Dr. Sasao had written that he was unable to accept the invitation.

Dr. Iwabata also stated that he and Dr. Haworth,

as a committee had visited Mr. Uyemura, carrying with them the honorarium authorized by the Board, and had asked Mr. Uyemura for an expression of his opinions concerning the school. Of this interview Dr. Haworth reported that Mr. Uyemura had made the following suggestions:—

1. That there ought to be closer relations between the Theological Department of the Meiji Gakuin and the Dai Kwai (Synod).

2. Funds for the support of theological students should be administered by the school instead of by missions; the school authorities to pass on the qualifications of candidates. (Note: This is not to preclude a mission or an individual from assuming the support of students on their own responsibility.)

3. The creed of Nihon Kirisuto Kyokwai to be the standard of teaching, and professors not to be held to any other creed, nor restricted in their teaching unless they teach contrary to the creed of the institution (i. e. the creed of the Church).

4. The Faculty should be strengthened by the employment of new teachers of ability.

5. The Bekkwa (Special Course) should be

improved.

6. The Board of Directors should in every instance take the initiative in the appointment of professors.

Reports for the Academic Department were given by Messrs Wyckoff, Ibuka and Kumano, bringing out especially the following points:—

1. The Higher Course had received government recognition as a Semmon Gakko.

2. On Jan. 25th 1904 a regulation had been issued extending the privilege of entrance to Kōtō Gakko to graduates of schools recognized by the Minister of Education as set forth in Article VIII, No. 1. of the regulations for entrance to Semmon Gakko, thus giving to the Meiji Gakuin all privileges accorded to Chu Gakko.

3. Permission had been received from the Department of Education to increase the number of students in the Futsu Gakubu (middle course) from 200 to 300.

4. During the year 97 pupils have entered the school and 66 have left. The present number is 173 in the Middle and Higher Courses. There are 53 professing Christians in the school, and 12 have made

profession during the past year.

Dr. Ibuka reported for the Theological Department that there were 9 students in the Regular Course, 8 in the Special Course and 3 partial students.

The Theological Faculty reported that Messrs. K. Ikeda, T. Matsumoto, and T. Suzuki had completed their studies, and recommended them for graduation. This recommendation was adopted.

On the recommendation of the Academic Faculty the following persons were accorded graduation:—

*Higher Course*, T. Tomio, M. Akamatsu, J. Hikida and U. Shinotsu.

*Middle Course*, T. Ishii, K. Takagi, T. Aoyagi, K. Suka, H. Ito, A. Ishiwara, S. Yamada, T. Ishida, H. Tokunaga, T. Kajiki, S. Takeda, M. Yamamouchi, S. Takaoka, T. Sugiyama, F. Ogata, G. Maki, M. Kanashige, T. Mizobe, T. Motoyama, T. Komatsu, and M. Shiraiishi. Mr. Yuda, who had been absent because of sickness, might be given a certificate of graduation later, by action of the Faculty.

*Theological Course*, K. Ikeda, T. Matsumoto, and T. Suzuki. Dr. Imbrie reported for the Committee on Improvement by reading the draft of a letter that he

had written to Dr. Elinwood in regard to endowment of the Meiji Gakuin. The letter was approved, and Dr. Imbrie was instructed also to send copies of it to the secretaries of the other co-operating missions.

It was also decided that word should be sent with this letter that if it be thought desirable by the Board of Foreign Missions to have Dr. Ithaka to come to America to assist in *raising* the endowment, the Board of Directors will be glad to have him go.

The Board appointed Dr. Haworth a teacher in the school to take the work hitherto done by Mr. Landis, with the exception of International Law and Political Economy.

The Board also requested Mr. Mac Nair to teach International Law and Political Economy.

The Ad-Interim Committee reported that Mr. Kashiwai had not gone to Princeton, as was expected, but to Union Seminary instead, and that the half salary allowance to him had been discontinued. When he went away he was paid for six months in advance, and had asked whether he must refund this. The Ad-Interim Committee recommend that he should not be required to do so. The Board approved of

the recommendation.

The action taken at the Special meeting of Dec. 22nd, making the creed of the Nihon Kirisuto Kyokwai the creed of the Meiji Gakuin, was ratified.

The following Directors were elected:— Re-elected for two years, Messrs. Matsumaga and Matsui. Elected for one year to fill unexpired term of Mr. Kataoka, Mr. Mizunashi.

New members, for two years, Judge Watanabe and Rev. Arima.

As the engagement with Rev. Mr. Hata to teach in the theological school will expire at the end of June, it was decided to ask him to continue the arrangement for another year.

Mr. Tomio of the graduating class, was appointed to be proctor and asst. librarian, at a salary of yen 30, a month; being yen 20, as proctor, and yen 10, as asst. librarian.

The appointment of a librarian in place of Mr. Landis was left to the Faculties, with power.

The Estimates for the year 1904—5 were presented by the Treasurer, and amounted to the following:—  
Academic Department yen 7,632.00

Theological Department 3, 100. 00

They were adopted.

The arrangement of subjects in the Theological School until the next stated meeting of the Board of Directors was left in the hands of the Theological Faculty.

The Ad-Interim Committee was authorized to make improvements in the teaching force in the Academic Department in such ways as might be possible.

The following were elected to be the Ad-Interim Committee for the ensuing year.

Ex Officio, Messrs. Ibutka and Wyckoff. Other members, Messrs. Ishiwara, Imbrie, Matsui and Harworth.

The Ad-Interim Committee has power to fill vacancies. Messrs. Ishiwara and Wyckoff were appointed to audit the treasurer's and Registrar's books.

Changes needed in the curriculum of the Higher Course were entrusted to the Academic Faculty and the Ad-Interim Committee. The Ad-Interim Committee was instructed to pre print a corrected edition of the Constitution, in Japanese and English. Adjourned after prayer by Mr. Cumming.

AD-INTERIM COMMITTEE, June 20 th 1904

Met at 2 P. M. and considered a draft of an application for a Zaidan Hojin for Meiji Gakuin.

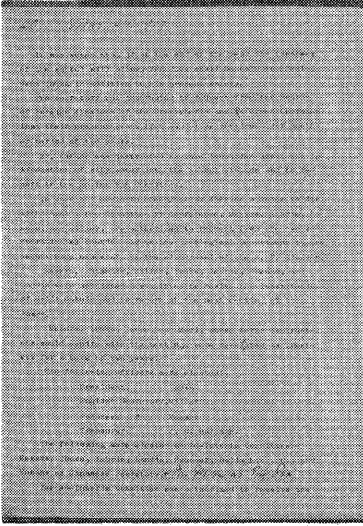
The Application was referred to a committee consisting of Drs. Ibutka and Wyckoff, who were to write it out, making necessary additions, and after consultation with the Mombusho, to present it again to the Board of Directors.

M. N. Wyckoff

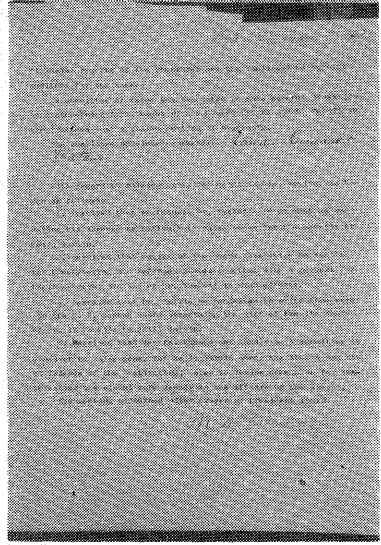
Sec.

【以下略】

第二篇



(1)



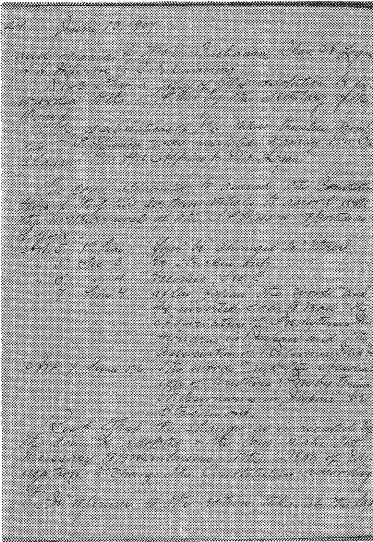
エム・エヌ・ワイコフ (書記)

(2)

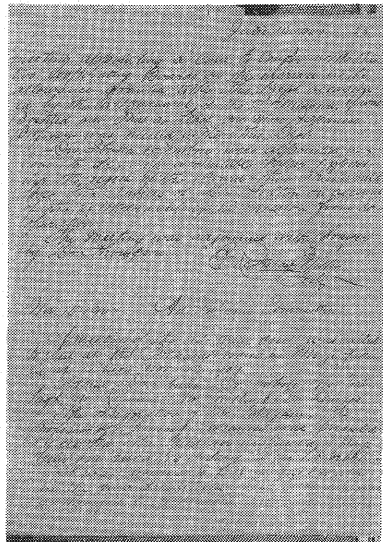
英文理事会記録

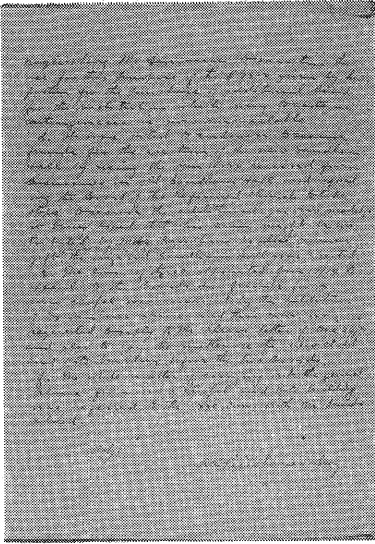
(1)

(2)



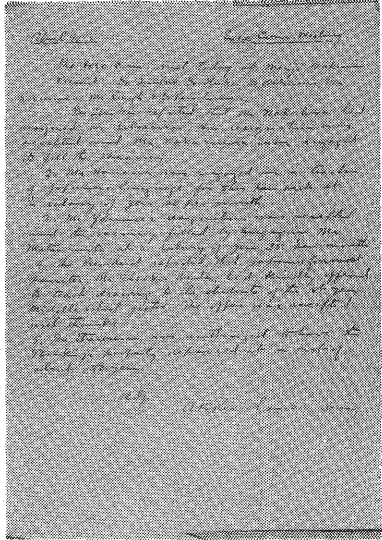
ローゼイ・ミラー筆





(1)

A・K・ライシャワー筆

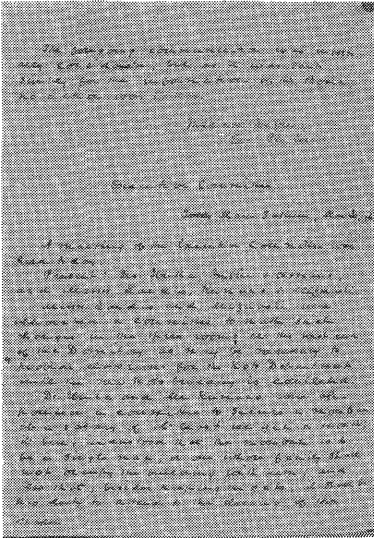


(2)

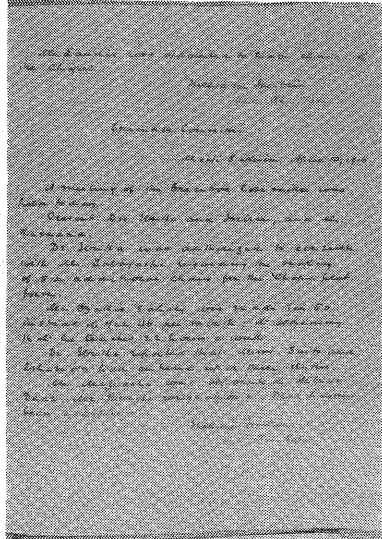
英文理事会記録

(1)

(2)



ウィリアム・インプリー筆



第二篇

白金學報 第三卷 目次

編輯の謝辭	第一號	第一號
編輯の謝辭	第二號	第二號
編輯の謝辭	第三號	第三號
編輯の謝辭	第四號	第四號
編輯の謝辭	第五號	第五號
編輯の謝辭	第六號	第六號
編輯の謝辭	第七號	第七號
編輯の謝辭	第八號	第八號
編輯の謝辭	第九號	第九號
編輯の謝辭	第十號	第十號
編輯の謝辭	第十一號	第十一號
編輯の謝辭	第十二號	第十二號
編輯の謝辭	第十三號	第十三號
編輯の謝辭	第十四號	第十四號
編輯の謝辭	第十五號	第十五號
編輯の謝辭	第十六號	第十六號
編輯の謝辭	第十七號	第十七號
編輯の謝辭	第十八號	第十八號
編輯の謝辭	第十九號	第十九號
編輯の謝辭	第二十號	第二十號
編輯の謝辭	第二十一號	第二十一號
編輯の謝辭	第二十二號	第二十二號
編輯の謝辭	第二十三號	第二十三號
編輯の謝辭	第二十四號	第二十四號
編輯の謝辭	第二十五號	第二十五號
編輯の謝辭	第二十六號	第二十六號
編輯の謝辭	第二十七號	第二十七號
編輯の謝辭	第二十八號	第二十八號
編輯の謝辭	第二十九號	第二十九號
編輯の謝辭	第三十號	第三十號
編輯の謝辭	第三十一號	第三十一號
編輯の謝辭	第三十二號	第三十二號
編輯の謝辭	第三十三號	第三十三號
編輯の謝辭	第三十四號	第三十四號
編輯の謝辭	第三十五號	第三十五號
編輯の謝辭	第三十六號	第三十六號
編輯の謝辭	第三十七號	第三十七號
編輯の謝辭	第三十八號	第三十八號
編輯の謝辭	第三十九號	第三十九號
編輯の謝辭	第四十號	第四十號
編輯の謝辭	第四十一號	第四十一號
編輯の謝辭	第四十二號	第四十二號
編輯の謝辭	第四十三號	第四十三號
編輯の謝辭	第四十四號	第四十四號
編輯の謝辭	第四十五號	第四十五號
編輯の謝辭	第四十六號	第四十六號
編輯の謝辭	第四十七號	第四十七號
編輯の謝辭	第四十八號	第四十八號
編輯の謝辭	第四十九號	第四十九號
編輯の謝辭	第五十號	第五十號
編輯の謝辭	第五十一號	第五十一號
編輯の謝辭	第五十二號	第五十二號
編輯の謝辭	第五十三號	第五十三號
編輯の謝辭	第五十四號	第五十四號
編輯の謝辭	第五十五號	第五十五號
編輯の謝辭	第五十六號	第五十六號
編輯の謝辭	第五十七號	第五十七號
編輯の謝辭	第五十八號	第五十八號
編輯の謝辭	第五十九號	第五十九號
編輯の謝辭	第六十號	第六十號
編輯の謝辭	第六十一號	第六十一號
編輯の謝辭	第六十二號	第六十二號
編輯の謝辭	第六十三號	第六十三號
編輯の謝辭	第六十四號	第六十四號
編輯の謝辭	第六十五號	第六十五號
編輯の謝辭	第六十六號	第六十六號
編輯の謝辭	第六十七號	第六十七號
編輯の謝辭	第六十八號	第六十八號
編輯の謝辭	第六十九號	第六十九號
編輯の謝辭	第七十號	第七十號
編輯の謝辭	第七十一號	第七十一號
編輯の謝辭	第七十二號	第七十二號
編輯の謝辭	第七十三號	第七十三號
編輯の謝辭	第七十四號	第七十四號
編輯の謝辭	第七十五號	第七十五號
編輯の謝辭	第七十六號	第七十六號
編輯の謝辭	第七十七號	第七十七號
編輯の謝辭	第七十八號	第七十八號
編輯の謝辭	第七十九號	第七十九號
編輯の謝辭	第八十號	第八十號
編輯の謝辭	第八十一號	第八十一號
編輯の謝辭	第八十二號	第八十二號
編輯の謝辭	第八十三號	第八十三號
編輯の謝辭	第八十四號	第八十四號
編輯の謝辭	第八十五號	第八十五號
編輯の謝辭	第八十六號	第八十六號
編輯の謝辭	第八十七號	第八十七號
編輯の謝辭	第八十八號	第八十八號
編輯の謝辭	第八十九號	第八十九號
編輯の謝辭	第九十號	第九十號
編輯の謝辭	第九十一號	第九十一號
編輯の謝辭	第九十二號	第九十二號
編輯の謝辭	第九十三號	第九十三號
編輯の謝辭	第九十四號	第九十四號
編輯の謝辭	第九十五號	第九十五號
編輯の謝辭	第九十六號	第九十六號
編輯の謝辭	第九十七號	第九十七號
編輯の謝辭	第九十八號	第九十八號
編輯の謝辭	第九十九號	第九十九號
編輯の謝辭	第一百號	第一百號

目次



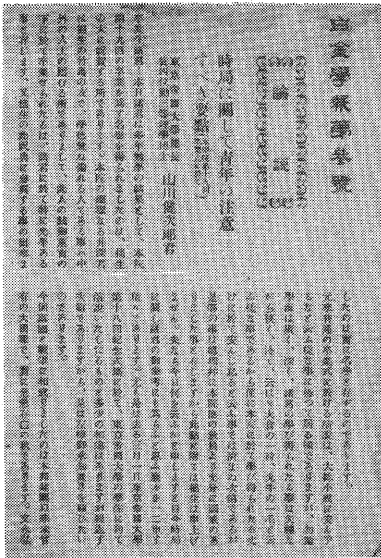
白金學報 第三卷

白金學報 第三卷号 (明治三十六年十二月発行)

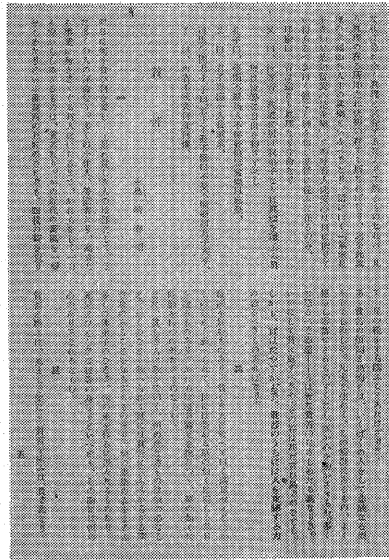
發刊之辭

我が明治学院は明治十三年始めて築地に設けられ築地大学と称せしが、明治二十年閑静高燥にして風景亦頗る佳なる白金の地を下し名を明治学院と改め爾来既に二十年に近からんとす。而して爰に学び業を卒えしもの凡そ四百人、其の他の在籍者を合するときは九百余人に及べり。然り九百余の数は以て国民の大に比すれば決して多となすに足らざれども、彼等は自ら文明の指導者となり、社会矯風事業の上に直接間接貢獻せし功績の少なからざりしは自信して疑わざる而已ならず、世の識者も首肯する処ならん。然れども吾人の本領は過去を以て満足すべきにあらず。社会の進歩と共に益々其の経営を大にして天父の聖旨に負こもくなからんことを期す。然れども、此等の計画の實行は微かなる小數者によりて期し得べきにあらず、同窓諸氏の愛校心と内外諸子の同情とに依るにあらずんば何れの日か之を期せん。而して吾人抱負の発揚は只々学院の教室に於て止むべきか、否決して然らず。必ずや母校を辞して各地に散在する我が同窓諸士と常に相呼応して世に立ちて社



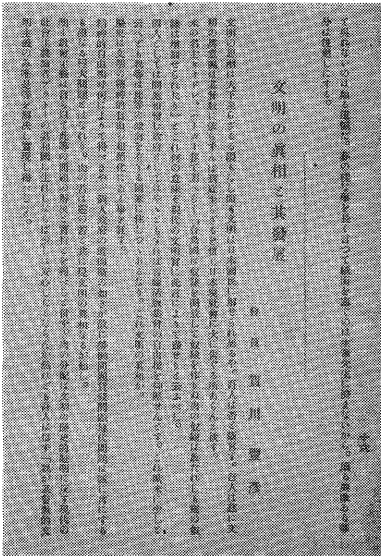


白金學報第三号

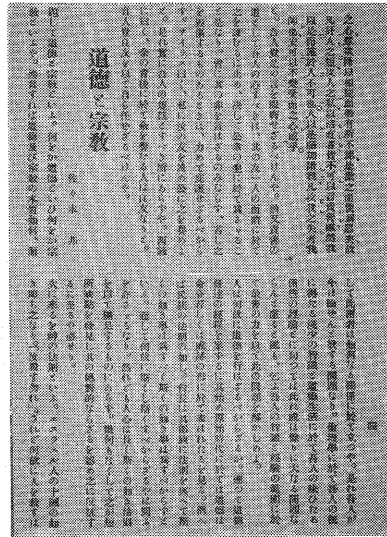


白金學報第二号

会の幸福を計る可きなり。然るに、我が学院には彼我氣脈を相通ずる此の重要な機關の設けなかりしが爲めに、愛校心深き同窓諸氏をして院内の消息の一端をだに知るによしなからしめたり。是れ平素吾人の最大恨事とせる所なり。噫々既往は再び追うべからざれども来者は猶お迎うべし。今や機熟し感を同じうする内外同窓の賛成を得て爰に明治学院同窓会の創立を見るに至れり。而して其の機關として毎学期一回本會機關雜誌を發刊することとなり、茲に其の第一号を發刊するの幸運に會せり。其の目的は重ねて贅せずと雖も、期する所は各地に散在し或いは都下に在るも業務の爲め時々一堂に會し袂を接し襟を交え相談するの機を得ざる會員をして、学院及び會員一同の事情を明かにし慶弔相共にし益々相互の友誼を濃厚ならしめんと勉むると同時に、井深總理を始め先輩諸氏の論説談話と學術に關する講話を掲げ、亦會員相互の知識を交換し見聞を博うせんために一欄を設け、附加するに院内學事の景況と諸集會及び各運動部の模様を以てせんとす。吾人の希圖する所にして會員諸氏に多少の裨益を与え無聊を慰するの一端とならば余輩の光榮何んぞ之に過ぎん。願わくは會員諸氏は本誌發刊の趣旨を諒せられ、各其の所見と動靜とを寄するに吝ならずとして本誌の目的を永久に全からしめんことを助けられよ。



白金学報第六号

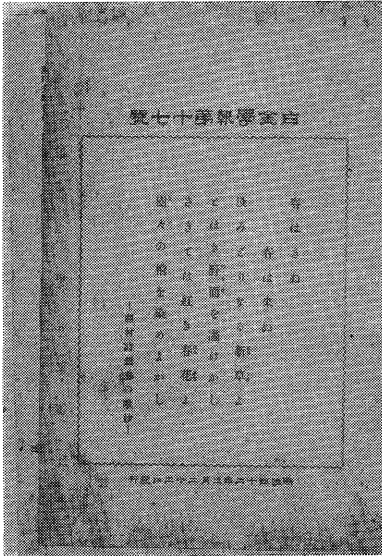


白金学報第五号

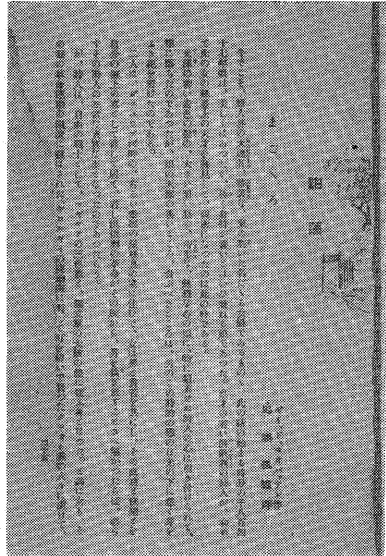
井深総理の祝詞

拜啓今回専ら両兄の御尽力により白金学報なる者  
発行せられ候趣甚真に嬉しく感じ申し候。是迄も同  
窓会雜誌若しくは明治学院学報発行の議は屢々起り  
たること之れ有り候えども、種々の事情の為に遺憾  
乍らその実行を見るに至り申さず候。惟数年前に水  
芹幾次郎氏の尽力によりて「アルムニ」会報なるも  
の発行せられたること之れ有り候えども、是れも三  
回には達せずして中絶致したる様に記憶致し申し  
候。既往の経験は斯くの如くに候えども、今度御尽  
力によりて誕生したる白金学報は飽くまでも健康に  
して年を積み号を重ねるに従い益々健全に生成発達  
せんことを祈りて止み申さず候。

扱新刊雑誌について小生の希望を述べれば多々之  
れ有り候えども、最初より理想に達するは固より不  
可能として、第一に希望致し候は此の学報が我が学  
院と学院出身諸氏の間面に立ちて互に其の気脈を通  
ずるの機関たらん事に候。明治学院出身者中には既  
に十数年乃至二十有余年前に学院を出でて、或いは  
教育に、或いは実業に、或いは伝道に、或いは政治  
に従事し成功しつつある人物少なからず、或いは又



白金学報第十七号



白金学報第十三号

遠く海外に出でて諸種の事業を試みつつある人物も数多之れ有る可く候。希くは此等の学院出身諸氏と学院との交情の今一層深厚ならん事に候。学院の当局者及び内外の教員諸氏に取りては、学院出身諸氏が刻下劇烈なる競争場裏に立ちて如何に成功しつつあるかを聞くは最も愉快とする所たるは申すに及ばず、又教育の方針、学科課程等に関して我が学院出身諸氏の忌憚なき而かも同情ある意見を拜聴するは最も幸福とする所に候。然かして出身者諸氏に於ても、又時々学院の情況を知るの便を得らるるは大いに喜ばるる所たるべきは疑いを容れ申さず候。是れ白金学報に対する第一の希望に候。次には本学報が在学生徒諸子の文章錬磨の機関となり又その動機たらん事に候。作文を教うるには適當なる奨励法を要する事論を俟たず候。若しも自今作文担当教員諸氏に於て生徒の作文中より秀逸なるものを選びて時々御掲載相成り候わば、自然何時も困難に感ぜらるる作文教授上に於て一大奨励となり申す可く候。是は多言を費すまでも之れ無き事と存じ候。

終りに尚一の希望を申せば、本学報によりて我が学院の School Life の我が国の学生間に紹介せられん事に候。固より我が学院の学校生活とても決して

新聞に見た明治三十四年から明治三十八年まで

菊田貞雄 井深先生関係資料



口絵に付きて

(前略)同窓会文学部が去る日、島崎藤村、馬場胡蝶両氏を聘して演説を乞ひし夜写せしものなり、二つとも夜写せしものゆえ聊か明瞭を欠くものなれども旧知己諸氏の為めにと思ひ上梓することとなしぬ。後列向って右より井深同窓会々長、宮地同窓会書記、島崎春樹(藤村)氏、馬場勝弥(胡蝶)氏、熊野同窓会副会長、前列向って右より日達文学部理事、賀川(豊彦)文学部理事、尾崎文学部理事、井深(健次)文学部理事

『白金学報第10号(明治39年12月)の説明による』

理想的のものには之れ無く候得共、且下東京市内に於ける同程度の学校の寄宿舎生活に比較して多少その趣きを異にする所あるを疑い申さず候。今日我が国学生の寄宿舎生活は遺憾の点甚だ多しと存じ候。我が学院に於ては其の辺に益々改良を加えて我が国の学校生活をして今一層趣味深く且つ高潔健全ならしめて我が学院の特色を世に顕わさんことを希望致し候。その他申し述べ度き事多々之れ有り候え共、此回は此に摺筆仕り重ねて明治学院同窓会の機関たる白金学報の上に天の祝福の豊かならんことを祈り候。

敬具

明治三十六年十一月十六日

井深梶之助

熊代彦太郎様  
宮地謙吉様

明治三十四年

自由廃業と救世軍

〔明治三十四年一月二十四日、毎日新聞〕

横浜永楽町二丁目貸座敷一圓楼方媚妓在原事山田うめ(廿七)は、昨年中故郷の両親と相談の上、寿町署に於て自由廃業を行はんと試みたれど、同署にては何故か本人の意思にあらずと為し、遂に其認可を与へられざりしかば、同人は不得已今日迄心にもなき醜業を続け居たるが、此程又々初一念を貫徹せんものと決心し去る廿一日午後四時頃ひそかに同楼を脱れ出で、首尾よく汽車にて新橋に着するや否や、すぐ芝なる救世軍本営にかけこみ、意思の存する処を告げて廃業手続の労を執られたしと依頼したるも、同日は既に時刻おくれ如何とも為し難きを以て、一先づ同軍中将山室軍平氏の宅に一泊し、昨日午後三時頃山室及び少佐チャールズ・デュースの兩人本人同道にて横浜に赴き、早速寿町署へ出頭の上漸く廃業を認可せられしも、之と同時におうめは無断逃走のかどにて、横浜地方裁判所へ告発せられたりと云ふ。醜業一輩の執念深きこと驚くに堪へたり。〔新聞集成明治編年史第十一卷一九九頁〕

自由廃業と洲崎

〔明治三十四年六月十八日、毎日新聞〕

自由廃業以来洲崎遊廓の日に衰頹して、門前に雀羅を張れば格子先きにも蛛の巣を張る始末に、是りや叶はぬと眼が覚

めて、堅気の商売に転業するものあり、詮術なしに店を閉ちて夜逃するもありて、漸く臨終の模様を現はし来りたる趣は此程の紙上にも掲載せしが、斯る中にも例の四百五十燭といふ十五基のアーケ燈は夜々覚束なげに廓内を照らし、世間多数の遊治郎をして昨日までも不夜城がらせ居りし処、笑止や今は此点火料も仕払ひかねて、深川電燈会社よりしばし督促を受くるも埒明かぬより、一昨夜同社は断然其点火を中止したれば、馬鹿者の所謂不夜城も忽ち化して闇黒城となり了んぬ。さればまた此没落旦夕を謀るべからざる孤城に踏止り、未練にも尚其罪惡を重ねつつある醜類共も、毎夜千人余のお茶挽を出して外に糧の続くべき途なきより、今日此頃は青息吐息の有様なりと。何はしかれお先まっ暗と云へる諺は、移して洲崎真暗と謂ふこそよけれ。〔同上書二六六頁〕

日本の基督教徒

〔明治三十四年四月十日、大阪朝日〕

横浜聖書館ルミス氏の最近日本に於ける基督教統計に依れば、新教諸派教会四百四十三、信徒四万二千四百五十一人、天主教教会百十七、信徒五万四千六百二人、希臘教会会百七十三、信徒十二万三千四十七人なりと。因に記す新教諸派日本人より年々寄附する金額は十万三千二百二十八円五十銭にして、一人には一箇月平均二十銭一厘の出金に当れりと云ふ。〔同上書二三九頁〕

明治三十五年

日英協約

〔明治三十五年二月十二日、官報〕

日英協約 ○日英兩國政府間ニ於テ去月三十日左ノ協約ヲ締結セリ。

日本国政府及大不列顛国政府ハ、偏ニ極東ニ於テ現状及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ、且ツ清帝国及韓帝国ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト。及該二国ニ於テ、各国ノ商業工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ関シ特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ、茲ニ左ノ如ク約定セリ。

第一条 兩締約国ハ、相互ニ清国及韓国ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ、該二国孰レニ於テモ全然侵略の趨向ニ制セララルコトナキヲ声明ス。然レドモ兩締約国ノ特別ナル利益ニ鑑ミ、即チ其利益タル大不列顛国ニ取リテハ主トシテ清国ニ関シ、又日本国ニ取リテハ、其清国ニ於テ有スル利益ニ加フルニ、韓国ニ於テ政治上竝ニ商業上及工業上格段ニ利益ヲ有スルヲ以テ、兩締約国ハ若シ右等利益ニシテ別国ノ侵略の行動ニ因リ、若クハ清国又ハ韓国ニ於テ、兩締約国孰レカ其臣民ノ生命及財産ヲ保護スル為メ干渉ヲ要スベキ騷擾ノ發生ニ因リテ侵迫セラレタル場合ニハ、兩締約国孰レモ該利益ヲ擁護スル為メ必要欠クベカラザル措置ヲ執リ得ベキコトヲ承認ス。

第二条 若シ日本国又ハ大不列顛国ノ一方ガ、上記各自ノ

利益ヲ防護スル上ニ於テ別国ト戦端ヲ開クニ至リタル時ハ、他ノ一方ノ締約国ハ嚴正中立ヲ守リ、併セテ其同盟国ニ対シテ他国ガ交戦ニ加ハルヲ妨グルコトニ努ムベシ。

第三条 上記ノ場合ニ於テ、若シ他ノ一国又ハ數国ガ該同盟国ニ対シテ交戦ニ加ハル時ハ他ノ締約国ハ、來リテ援助ヲ与ヘ協同戦鬪ニ当ルベシ。講和モ亦該同盟国ト相互合意ノ上ニ於テ之ヲ為スベシ。

第四条 兩締約国ハ、孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經ズシテ、他国ト上記ノ利益ヲ害スベキ別約ヲ為サザルベキコトヲ約定ス。

第五条 日本国若クハ大不列顛国ニ於テ、上記ノ利益ガ危殆ニ迫レリト認ムル時ニ、兩國政府ハ相互ニ充分ニ、且ツ隔意ナク通告スベシ。

第六条 本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ実施シ、該期日ヨリ五箇年間効力ヲ有スルモノトス。若シ右五箇年ノ終了ニ至ル十二箇月前ニ締約国ノ孰レヨリモ、本協約ヲ廢止スルノ意志ヲ通告セザル時ハ、本協約ハ締約国ノ一方ガ廢棄ノ意思ヲ表示シタル当日ヨリ、一箇年ノ終了ニ至ル迄ハ、引續キ効力ヲ有スルモノトス。然レドモ右終了期日ニ至リ、同盟国ノ一方ガ現ニ交戦申ナル時ハ本同盟ハ講和結了ニ至ル迄當然繼續スルモノトス。

右証拠トシテ、下名ハ各其政府ヨリ正当ノ委任ヲ受ケ、之ニ記名調印スルモノナリ。

一千九百二年一月三十日竜動ニ於テ本書二通ヲ作ル

大不列顛國駐劄日本國皇帝陛下ノ特命全權公使

林 董 印

大不列顛國皇帝陛下ノ外務大臣

ランスタウン 印

〔同上書二七九頁〕

実業界日英同盟を歓迎す

〔明治三十五年二月十三日、時事〕

昨日発表されたる清韓兩國に關する日英同盟條約は一般の歓迎する所なるが、殊に実業界に於ては是非東洋の平和を保護し、東洋貿易安全の基礎を設定したるものにして、且つ我國の商工業に向つて浅からざる安心を与へたるものなりと爲し、何れも同盟を祝うの有様あり。実業家の意向右の如く此同盟を以て安心を与へたるものなりと爲す以上は、今後内地經濟界は勿論、支那、朝鮮に向て事業を企てんとする者は、恰も潤雨を得たるの感を以て進む可ければ、今や恢復に向はんとしつつある我國經濟界は更に數層の速度を以て景氣恢復の實を挙ぐるならん……〔同上書三八〇頁〕

日英同盟由来

〔明治三十五年二月十五日、国民新聞〕

總ての事皆然るが如く、日英同盟は一朝にして出来上りたるものにあらず。其の遠き由来は暫く尋ねずとするも、近くは伊藤内閣の頃に端緒を啓きたること既に我社の明かに指示したる所にして、世人も記憶するが如く日本が英独協商に

加入したる前後、滿洲問題に關して強硬の態度を執り、再三の警告を当事者に致して清國領土の保全を維持し、且つ滿洲に於ける各國の利益を擁護したるは、滿洲に於ける利益を重んじたる英國及び米國の承認したる処にして、北清事變の善後に対する日、英、米の歩調は重要な場合に於て多くは一致したりき。……

更に事情の許す限りに於て機微の消息を繰返さんに、滿洲問題の後倫敦に於て、固より正式にはあらざるも重要な外交的談話が某國代理公使（現大使）によりて、他の全權の公使に語られたることあり。其の趣旨を詮じ詰むれば、英独協商の基礎によりて新しき協約を日英独の三國間に試みんとの意向を諷示したるもの由なりしが、當時英國は尚ほ多くの考慮を南阿事件以外に転ずるに苦しむ場合にもあり、其他事情もありたるに拘らず昨年四月頃に至り英國より屢々諷示し懲懲する所あり、伊藤内閣も従来歩調を同じくしたる吾國と緊切の關係を結ぶが爲めに、考慮を費す所少なからざるに至りたりと。

次で伊藤内閣は更迭して桂内閣となり、七日頃に至りて又々諷示あり、懲懲あり、彼我の意向漸く相通するの端緒を啓きたり。而して此事たる最も重大の問題なれば九月に出発したる伊藤侯の如き門外漢たる能はざることを勿論にして且つ前内閣よりの關係もあれば、桂首相よりも時に応じて侯に打合はす所ありたりと云ふ。

## 第二篇

斯くて十月に至り愈々双方正式の交渉を開始し、速かに歩を進めて、最後の決心をなすべき時に到着したるは十二月にして、桂首相よりは特に国家の大問題たる故を以て、山県、松方、井上、西郷の諸元老に打合す所あり。元老の意見一致して内閣の決心も愈々強きを加へ、勅語を仰ぎて一月三十日全権の調印を終りたる次第なりと。〔同上書三八一頁〕

### 日英協約祝会慶応義塾生

〔明治三十五年二月十六日、時事新聞〕

○慶応義塾にては、今回日英協約の成立に対する祝賀の意を表せん爲め、前号所報の如く一昨日午後六時より盛なる炬火行列を挙行せりと。〔同上書三八二頁〕

### 江原素六の勅語演説

〔明治三十五年六月五日、日本〕

去一日の事なり、江原素六氏は其の郷里なる静岡教育協会懇話会席上に於て一場の演説を試みたり。然るに其の演説中教育勅語は時勢に依て変更せざる可らずと放言し、会員中拍手して之に和したるものありしより、爰に端なく大紛擾は起りたり。

曰く、斯道の古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざるは、勅語申既に之れを宣べり。江原翁何する者ぞ、敢て慢りに変更を説くと慨するものあり。果して是れ必竟氏が基督教信者にして、平素皇室の觀念に乏しきの致す処なり。君の如きものを校長の席に置くは我が教育界の根柢を危くするもの

なりと憤るものあり。或は前年尾崎氏の共和演説の例を引き、尾崎氏の演説にして尚ほ且つ大臣の席を去らざる可らざる値ありとすれば、氏が此の演説は我が教育界は決して輕々に之を看過すべからずと云うものあり。非難の聲囂々として起り、山内県知事も大に之を憂慮し、目下演説草稿の取調中なりと。〔同上書四二二頁〕

〔六月六日、東京日日〕

江原素六氏が静岡に於て爲したる演説中、勅語に対して議論を挟みたるの嫌あるやに伝うるものあるも、其勅語に関する一節は下の如くに過ぎざりしといふ。

教育の方法の推移するは当然なれども、教育勅語の如きは完全無欠のものにして、何処何処までも之れを変更すべしにあらず。先頃修身書の編纂に当り、勅語に対して彼是と議を挟みたるものありて、囂々を極めたることありしも、僕は教育勅語を以て完全無欠のものと信ずるが故に固より時代に依て変更さるべきものにあらざるは明かなれども、事は単に勅語であるから変更の出来ぬと云ふことはない。仮令ば攘夷鎖国の詔勅ありしも、時代の推移に依りては開港の詔勅となりしと云ふ様な次第にて、其保存して置きて可なることは之を保存する固より可なるも、之に反し其の更改を要すること適当なりとする場合には、之が更改を見ること一に時代の推移に依るものなりと謂ふべし。教育の勅語が完全無欠万世に亘り炳焉たるを以ての故に、他の時代の推移に依りて更改を



見るべきものまでも挙げて、其圈内に入れんとするは偏見の謗を免れず云々。〔同上書四二三頁〕

日露戦争前の移民会社

〔明治三十五年十月二十日、大朝〕  
移民事業の有利なるは世の知る所、現今本邦移民は布哇北米大陸其他諸外国に在るもの総計約十万人、此等移民の収益は土地に由り又人に由りて多少の差等なきにあらねど、一人にして一年平均百円の貯金をなし、之を本国に送付しつづつあるは事実なれば、即ち十万人の汗は凝て千万円の金塊となり、我国力を培養しつづつあるなり。過日農務局長が全国の耕地整理を完成せば、優に二千万円の増収を見るべしと云へり。是亦一美事たるに相違なきも全国に亘りて数万円の投資をなし多くの日子を費し、漸く千万円の増収を見るに過ぎず、之を夫の農家の壮丁十万人の移民を出すと比較せば、其難易果して如何ぞや。況んや我邦には年々四五十万の人口増殖しつづつあり、移民事業は有利の事業と云はんよりも、寧ろ必要の事業と云うを以て適当となせるをや。然るに翻つて我移民会社の現状を見るに、弊害百出幾ど枚挙に遑あらず。此事たるや世人の既に知悉せる所、之を要するに各移民会社が移民の無智なるに乘じ不当の手数料を負り、又其の積立金を着服し、偏に私利をのみ逞せんとするは、其罪の為其功を投ずるは酷ならんも、今は只徐に其矯弊策を講じ、而して一方に於て益々斯業の發達を図らざるべからず。……蓋し現在の

移民会社数は二十有七にして、一箇年の渡航予定人員一万四千五百人に上れり。故に一会社一箇月の取扱数は僅に四十五人に制限し居り、而して移民一人の取扱料は二十円なり。……〔同上書四七六頁〕

明治三十六年

帝大教授七博士強硬意見

〔明治三十六年六月二十四日、東京朝日〕

東京帝国大学教授富井、戸水、寺尾、高橋、中村、金井、小野塚の七博士が、桂首相に提出したる満洲問題の意見書は左の如し。

大凡天下の事一成一敗其間髪を容れず。能く機に乗ずれば、禍を転じて幸となし、機を逸すれば幸を転じて禍となす。然るに顧みて七八年来極東に於ける外交の事を察すれば、往々にして此機を逸せるものあり、遼東還附の際、其割譲の条件を留保せざりしは是れ実に最必要の機を逸せるものにして、今日の満洲問題を惹起せる原因と謂はざるべからず。後独逸の膠州灣を覬覦せるや、薄弱なる海軍力を以て長日月を費し以て我が極東に臨む。彼の艦隊や顧みて後継の軍力ありしにあらず。進んで依拠すべき地盤ありしに非ず。渺々として万里に懸軍するの有様なりしを以て、此機に乗じ掲ぐるに正義を以てし、臨むに実力を以てせば、縦令ひ彼れ谿壑の欲望を有するも何を以てか此の正義と此強力に抵抗することを得んや。当時若し独逸にして手を膠州灣に下す能はず

## 第二篇

んば、露も亦た容易に旅順、大連の租借を要求すること能はざりしや明かなり。然るに我邦遂巡為す所なく、遂に彼等をして其欲望を逞うするを得せしめたるは、実に浩嘆の至に堪へず、機を逸するの結果又大ならずや。北清事件の後諸国の兵を撤せんとするに際し、詳細に滿洲の撤兵に関する規定を立てなば、以て今日露国をして撤兵に躊躇するの余地を致せしめざりしならん。是れ亦た外交の機を逸したるものと謂はざるべからず。今や第二回撤兵の期既にすぎ、而して露国は猶ほ其実をあげず、此時に当り空しく歲月を経過して条約の不履行を不問に附し、若しくは姑息の政策により一時を弥縫せんとするが如きことあらば、是れ千歳の機会を逸し、国家の生存を危くするものと云はざるべからず。噫我國は既に一度遼東の還附に好機を逸し、再び之を膠州灣事件に逸し、又た三度之れを北清事件に逸す。豈に更に此覆轍を踏んで失策を重ねぬべけんや。既に往は追ふべからず。只之を東隅に失ふも之れを桑榆に収むるの策を講ぜざるべからず。特に注意を要すべきは極東の形勢漸く危急に迫り、既往の如く幾回も機会を逸するの余裕を存せず、今日の機会を失へば遂に日清韓をして再び頭を上ぐるの機なからしむるに至るべきことは是れなり。今日は実には是れ千載一時の好機にして而も最後の好機たることを自覚せざるべからず。此機を失ひて万世の患を遺すことあらば、現時の國民は何を以てかその祖宗に答へ、又何を以てか後世子孫に對することを得ん。……

之を要するに、吾人は故なくして慢りに開戦を主張するものにあらず。又吾人の言議の適中して後世より先覚言者たるの名称を得るは却て國家の爲めに嘆ずべしとするものなり。噫我邦の存立を危うすることを自覚せざるべからず。姑息の策に甘んじて曠日弥久するの弊は、結局自屈の運命を待つものに外ならず。故に曰く、今日の時機に於て最後の決心を以て此大問題を解決せよと。〔新聞集成明治編年史第十二卷八〇頁一八二頁〕

議長河野広中の勅語奉答文に内閣彈劾

〔明治三十六年十二月十一日、東京朝日〕

開院式終るや、例に依つて衆議院は午前十一時三十分議員一同議場に入り、河野議長は、開院式勅語に對する奉答文は例に依り議長の手許に於て起草したるに付朗誦すべしとして、左の奉答文を朗誦し、満場拍手喝采を以て可決したり。議長參内の期は未定なり。

恭しく惟みるに、車駕親臨して茲に第十九回帝國議會開院の盛式を挙げ、優渥なる聖詔を賜ふ。臣等感激の至りに堪へず。

今や國運興隆、洵に千歳一遇なるに當りて、閣臣の施設之に伴はず、内政は弥縫を事とし外交は機宜を失し、臣等をして憂虞措く能はざらしむ。仰ぎ願はくば聖鑑を垂れ給はんことを。臣等協贊の任に在り、慎重審議以上陛下の聖旨に答へ奉り、下國民の依託に酬ひんことを期す。

衆議院議長 臣河野広中 誠恐誠惶謹て奏す。

明治三十七年

対露宣戦の詔勅

〔明治三十七年二月十日、官報〕

詔勅 ○天佑ヲ保有シ、万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ、忠実勇武ナル汝有衆ニ示ス。

朕、茲ニ露國ニ対シテ戦ヲ宣ス。朕ガ陸海軍ハ、宜ク全力

ヲ極メテ露國ト交戦ノ事ニ從フベク、朕ガ百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ヲ率ヒ、其ノ権能ニ応ジテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スベシ。凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ尽シ、遺算ナカラムコトヲ期セヨ。(以下略)〔同上書一八五頁〕

開戦に關して文部省訓令

〔明治三十七年二月十日、官報〕文部省訓令第二号

今回露國ニ対シテ戦ヲ宣セラレタル趣旨ハ、炳乎トシテ宣戦ノ詔勅ニ明ナリ、此時ニ當リテ國民挙テ忠勇ノ精神ヲ勵マシ、滿腔ノ熱誠ヲ捧ゲテ陸海軍ノ後援ヲナスハ固ヨリ当然ノコトニ属ス。而シテ國民ガ戦ノ進行ニ懸念シ、平素ノ業務ヲ顧ミルノ違ナキニ至ルガ如キハ、忠愛ノ至情ニ出ヅルトスルモ決シテ嘉ミスベキニアラズ。……思フニ今回ノ事變タル、其ノ関スル所極メテ大ニシテ、其ノ結果ハ遠ク我國家ノ將來ニ及ブベシ。是ヲ以テ教育者ハ能ク学生生徒ヲ訓誨シテ、青年子女ガ國家ニ負フ所ノ責任ハ、將來益々重ク加フルニ至ルコトヲ知ラシメ、他年此ノ重大ナル責任ヲ尽ス所以ハ、修学

時代ニ於テ専心一意心身ノ修養ヲ務ムルニアルコトヲ体認セシムベシ。……

今ヤ露國ト事ヲ構フルモ、固ト是レ平和ヲ永遠ニ克復スルガ為メナレバ、学生生徒ガ客氣ニ驅ラレ露國民ニ対シテ嘲罵ヲ逞クシ、延キテ他ノ外國民ニマデ悪感ヲ懷カシムルガ如キコトナカラシムルハ子女ノ教育上最モ注意ヲ要スル所ナリ。

〔以下略〕〔同上書一八六頁〕

横川省三の統殺

〔明治三十七年五月四日、東京朝日〕

哈爾濱にて殺されたる一人は横川省三氏たること分明したり。……氏は若手奥盛岡の人旧南部藩士故三田村勝衛氏の二男也。……〔同上書二四〇頁〕〔註記・横川省三は基督者なりしといふ〕

各派宗教家時局大会

〔明治三十七年五月十八日、東朝〕

大日本宗教家大会○一昨日午後二時より芝公園内弥生館に開かれたり。先づピアノ、ヴァイオリンの合奏あり、司会者に久我侯爵を推し、一同君が代を三唱し、黒田真洞氏開会の辞を述べ、久我侯より出席者中の年長たる西有穆山氏を座長に指名し議事に取り掛り、左の宣言書を満場拍手の裡に可決したり。

大日本宗教家大会決議案

宣言

## 第二篇

日露の交戦は、日本帝国の安全と東洋永遠の平和とを画し、世界の文明、正義、人道の爲めに起れるものにして、毫も宗教の別、人種の同異に關する処なし。故に吾儕宗教家は、宗派、人種の異同を問はず、此に相會し、各自公正の信念に懇へ、相与に奮って此交戦の真相を宇内に表明し、以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む。

右決議し之を中外に宣言す

明治三十七年五月十六日

右の決議終るや、平田盛胤氏は先登に演壇に出て、此際宗教家の相反目するは國家に取て不利益なりとて、其懇親の必要を説き、佐治突然氏は諸宗教の本尊たる宇宙の实体に就き仏教は一神教より多神教に入り、耶穌教は多神教より一神教に入りたるの傾向あるを説き、其統一の難からざる所以を述べ、小崎弘道氏は露西亜は十六世紀位の思想を抱き、我邦は廿世紀の智識を以て進歩しつありとて、宗教家統一の必要を簡単に演説し、村上專青氏は宗教と戦争の關係に就て述べ、真面目に解釈せば戦争と宗教とは互に相容る可らざる者なるも、國家と宗教とは相離る可らざる者なりとて、其關係を論じ、尚進んで仏教の大慈悲と耶穌教の博愛とは皆同一なりと説き、次に大内青巒氏は黃人禍に就きて説を立て、西洋人の危懼措かざる黃人とは支那北方の人種を指せるものにして、支那人種、日本人種の謂にあらざると、蒙古人が曾て歐洲に攻め入りたる歴史沿革を述べて之を説明し、今日の日

本は夙に歐洲の文化に同化し居れば、黃色人種なりとて日本を恐るるは甚だ謂れなし、吾露國は即ち古の蒙古なれば世界各國は却て大に之に對して警戒するの必要あるべしと論じ、最後に日本は宗教の自由國なれば、露國とは自ら其選を異にして全く反對なりと喝破して降壇し、次に柴田礼一氏の演説あり、次に米國人エムブリ氏は、井深堀之助氏の通訳にて祝辭を述べ、之に繼いで尾崎市長、千家東京府知事、村田救順氏の祝辭あり、了りて一同天皇陛下及日本帝國の万歳を三唱し、奏樂の裡に午後五時半無事散會したり。……來會者は無慮千余名、満場立錫の地なく非常の盛會なりしが、歐米各國の宣教師婦人等も数十名來會したることとて、從來曾てみざる所の異觀ある集會なりき。〔同上書二四九頁〕

### 黃禍說排擊

〔明治三十七年五月二十日、東朝〕

倫敦タイムスは大陸諸新聞紙の喧々する黃禍說の有害不正なるを論じて、日本もし國際間の疎外をうくる場合あらば、黃禍或は事實とならんといひ、尚論じて曰く、日本を文明國民の範列より除外せんとするが如きは、不正愚昧之より甚しきはなし。英、米兩國は決して此の如き勸説に耳を傾くること能はずと。〔同上書二四九頁〕

明治三十八年

井深、本多渡歐

〔明治三十八年二月二十八日、読売〕

井深梶之助氏 ○本多庸一氏と共に渡航すべき井深梶之助氏は、和蘭の学生大会に出席後、米國に赴きて暫らく同地に留まるべしと。〔新聞集成明治編年史第十二卷三八五頁〕

#### YMCAの滿州軍慰問

〔明治三十八年四月一日、東朝〕

基督教育青年会の軍隊慰勞事業 ○日本基督教育青年会同盟の開設にかかはる同事業は、着々拡張の途に到り、従来の鳳凰城、營口の外大連にも開設する事となり、十一名の主任者之に當り居たるが、更に旅順、遼陽にも夫々拡張の計画あり、従つて新に六名の主事を派遣する筈なり。又同会に對する内地同情者の寄附金額は数千円に上り、米國よりは此度一個人にて旅順開設の爲め三千円を寄附したるものありといふ。

〔同上書四〇〇頁〕

#### 米國大統領日露講和談判調停説

〔明治三十八年四月三日、東朝〕

〔三月三十一日倫敦発〕

在彼得堡タイムス通信員の所報に曰く、露國は日本の提議に基き、米國大統領ルーズヴェルト氏を調停者に選挙し、目下談判を進めつつありと。又曰く露國は償金並に土地割讓の条件を容ること能はざる旨を述べたる由。若し事実ならば談判は無用なりと。

〔明治三十八年四月三日、東朝〕

日本が露國と共に米國大統領ルーズヴェルト氏に仲裁を託

したりとの流説は、頗る欧州に信を措かれたりしが如き形跡あり。タイムスは其露都通信員が此事を露國当局の責任者より聞知したりとまで書添へる由なれば、一時欧州中立國人の心を動かしたるも亦故なきにあらざると云ふべし。固よりタイムスが虚構の言を爲す可き道理なく、其露都通信員は確に此事を露國の責任者より聞知したる事ならんが、去るにても此謂ゆる責任者は何故にかかる流言をことさら鼓吹したるにや。其真意知る可からずと雖も、昨今或向にて信せらるる所によれば、露國は猶又巴里募債の企画に及び、シンヂケートとの密約だけは既に成立したりといふ。さすれば仏國資本家を安心せしめて欺瞞的に募債の成功を促すため、特に平和説を發したりともみるを得べし。要するに近來専ら行はるる欧州の講和説は、却て露國自身より出で来るもの多きが如し。就ては募債の魂胆に出でたりと見るの外、又風船玉の試揚ともみるを得べく、とにかくに油断のならぬ次第と謂ふ可し。〔同上書四〇一頁〕

#### 対バルティック艦隊論

〔明治三十八年四月九日、東朝〕

倫敦タイムス軍事寄書家は、バルチック艦隊が日本に取りて真実の危険たることを認めたるが如く、日本は浦潮の包圍を進むる代りに、宜しく蘭領印度地方に於ける前進根拠地に砲臺を築き、之れを堅むべしと主張せり。

又露國艦隊が東郷艦隊に對して成功を得るは、根本的の日

本軍事の基礎を傾覆する所以なりとの議論を評しては則ち曰く、日本人は此の如き議論を以て余りに誇張に失すとすが如しと雖も、將來に於て日本もし海軍力の優勝を保持するを得ば、凡ての点に於て露國に駕し之を凌ぐを得べきなりと。

〔同上書四〇二頁〕

バルチック艦隊北上す

〔明治三十八年四月十七日、東京朝日〕

(十五日上海発)

上海タイムスの香港特電に曰く、汽船コーナ号は十一日コンドル島沖〔註・Pulo Kondor は Coochin China の低地方沖に面する仏領の島である〕に於てバルチック艦隊を見たり。搜索巡洋艦は同艦に向つて積荷の行先を問ひ、臨検の後立去れり。艦隊は快速なる哨艦に依りて掩護せられ、戦艦と巡洋艦は石炭船と運送船を中心として其外側線を保護し居れり。艦隊の状態は良好にして、速力十節、艦体数碼の海草に掩はるとの談は虚妄なり。

同艦隊は石炭積入の爲め、パラセルス群島(海南島の南方)

に向へるものと察せられる。〔同上書第十二卷四〇四頁〕

米國大統領の講和提議

〔明治三十八年六月十二日、官報〕

在本邦米國公使は本月九日附ヲ以テ帝國外務大臣ニ對シ、左ノ照會ヲ為セリ。

本使ハ國務長官ノ電訓ニ從ヒ、閣下ニ對シ左ノ通牒ヲナス

ノ光榮ヲ有ス。

大統領ノ所感ヲ以テスレバ、今ヤ人類一般ノ利益ノ為メ、目下ノ慘憺タル且痛歎スベキ戰爭ヲ終局セシムルコト能ハザルカラ見シガ為メ、大統領ニ於テ努力セザルベカラザル秋、方ニ至レリ。

合衆國ガ日露兩國ト友好親善ノ關係ヲ保ツヤ久シ。合衆國ハ此兩國ノ繁榮福祉ヲ祈ルト共ニ、此二大國民間ノ戰爭ニ依リ、世界ノ進歩阻礙セラルルヲ感ズ。故ニ大統領ハ、日露兩國政府ニ於テ、兩國自己ノ為メノミナラズ、文明世界全体ノ利益ノ為メ相互間ニ直接ノ講和談判ノ開始センコトヲ切望ス。

右講和談判ハ、全然面交戰國間ニ於テ直接ニ之ヲ行フベク、換言スレバ即チ日露兩國ノ全權委員ハ、何等仲介者ヲ設ケズシテ会见シ、以テ此等兩國ノ代表者ニ於テ講和条件ヲ協定スルコト能ハザルカラ見ルニ至ランコトは大統領ノ勸告スル所ナリ。大統領ハ熱心ニ日本政府ニ請フニ兩國政府ガ此際如上ノ會合ニ同意センコトヲ以テシ、又露國政府ニモ等シク同意ヲ求メツアリ。大統領ハ講和談判其モノニ関シテハ何等ノ仲介者ヲ要スルヲ見ズト雖モ、若シ兩國關係國ニシテ、會合ノ日時及場所ニ関シ、予議ヲ整フルニ付大統領ノ力ヲ仮ルヲ利アリトスルニ於テハ、大統領ハ正當ニ為シ得ル限り、何事ニモ欣然其任ニ當ラントス。然レドモ右ノ予議トテモ、若シ兩國間直接ニ、又ハ其他ノ方法ヲ以

テ之ヲ整フコトヲ得バ、は大統領ニ於テ固ヨリ憚ラ所ナリ。何トナレバ、大統領ノ目的トスル所ハ唯文明世界全体ガ依テ以テ平和ヲ来サンコトヲ務ルベキ会合ノ成立ニ外ナラザレバナリ。

本使ハ此機ニ附シ云々。

右ニ対シ帝國外務大臣ハ、一昨十日附ヲ以テ左ノ回答ヲ為セリ。

本大臣ハ國務大臣閣下ノ電訓ヲ通牒セラレタル本月九日附貴翰ヲ受領スルノ光榮ヲ有ス。尚帝國政府ノ覆答トシテ、左ノ趣ヲ貴國政府ヘ電報セラレンコトヲ請フ。

帝國政府ハ貴翰ニ記述セラレタル合衆國大統領ノ勸告ニ対シ、極メテ慎重ナル考量ヲ加ヘタリ。是其発言者ト其内容トニ顧ミ、素ヨリ当然ニ屬ス。

露國トノ平和ハ、其確實ヲ充分ニ保障スルニ足ルベキ条件ノ下ニ、之ヲ復立センコトハ、世界ノ利益ノ為メ、將又帝國ノ利益ノ為メ、帝國政府ノ希望スル所ナルヲ以テ、帝國政府ハ大統領ノ勸告ニ応ジ、全然同交戦國間ニ於テ直接ニ講和条件ヲ商議決定スルノ目的ヲ以テ相互ノ意ニ適シ、且ツ便宜ト認メラルベキ日時及場所ニ於テ、露國全權委員ト会合センガ為メ、帝國委員ヲ任命スベシ。

本大臣ハ此機ニ附シ云々〔同上書四三四頁〕

### 露國も講和応諾す

〔明治三十八年六月十五日、東朝〕

十二日朝露國大使は米國大統領に会见し、露國政府は大統領の勸告に應ずべき旨復答し、同時に巴里駐在の露國大使ネゾドフを全權委員に任命し、巴里を以て談判地となしたき希望なる趣正式に通牒したり。

大統領は土曜より日曜日（十日、十一日）に至り出獵し不在なりし為、十二日始めて露國大使と会见したる次第なり。

（高平公使よりの報告）〔同上書四三七頁〕

### 七博士組の議決

〔明治三十八年六月十四日、日本〕

外交上の風雲漸く急なる昨今、七博士運動以來時局問題を講究して國家の長計を尽せんとする博士學士並に其他二三の同志の士にして組織したる集會に於て、去十一日夜戸水寛人、岡田朝太郎、中村進午、建部遯吾、松浦厚、渡辺千秋外數氏は左の如き相談を為したるが、是は諸氏の一致せる最小限度の条件なるよし且つ朝鮮に關しては無論の事として言はざる次第なりと。

### 講和予備条件

一、講和談判の場所 日本に於て他の煩累を受けざる場所を選ぶべし。

一、休戦予備條約締結迄は休戦せず、其後は条件を付して休戦す。

### 講和条件

一、償金 土地割讓の外左の額を要求す。

三十億円

一、土地(樺太、カムチャッカのみならず沿海州全部の割譲。

(一)遼東半島に於て露国の有せる権利を譲与せしむること。

(二)満州に關しては日清兩國の決定する所に任すべし。

一、物 (一)東清鐵道及其敷地の讓与。

(二)新嘉坡以東にある露国逃竄軍艦其他軍用船の讓渡。

(三)満州に在る露国政府の鉱山其他の建設物。

一、國際役務(一)太平洋並びに日本海に露国をして艦隊を置か

しめざること、(二)貝加翁湖以東に於ける露国守備兵を制

限すること、(三)露国は日本の承諾を得ずして清国の土地

に關する利益を得べからざる事。〔同上書四三六頁〕

### 日本講和談判員一行渡米

〔明治三十八年七月九日、東朝〕

講和全權委員小村寿太郎男、隨員佐藤弁理公使、山座外務

省政務局長、安達公使館書記官、本多外務書記官、小西外交官

補、外務省雇デニソン氏、並に米国公使館附立花步兵大佐の

一行は、愈々昨日午後一時五十分新橋発列車にて出発したり。

……斯くて一行は沿道歡呼の聲に迎へられて、西渡止場に到

り、県庁用意の小舟にて、ミネソタ号に赴き、此の際煙火數

十発の打揚げあり、ミネソタ号にても、大使一行に敬意を表

する為め、檣頭高く日本国旗を揚げ、且つ満船飾を施し、船

は予定の如く午後四時纜を解て、米國シャートルに向ひたり。〔同上書四五七頁〕

### ミネソタ号記録的快速

〔明治三十八年七月二十三日、日本〕

小村全權大使一行を載せたるミネソタ号は、去水曜日(十九日)午後八時半ポート・タウンセントに到着したり。即ち十一日二十三時、殆ど前例なき短時日を以て太平洋を横断したるものにて、全權大使は非常に満足を表されたり。同一行は今夜紐育へ出発の筈。〔同上書、四六三頁〕

### 第一回会見

〔明治三十八年八月十二日、東朝〕(十日倫敦發)

ポオツマスにて、第一回の会見を今朝行はれたり。……

〔同上書四六八頁〕

〔註記・日本代表は、大使(外務大臣)小村寿太郎、大使高平小五郎、副使佐藤愛鷹、書記官落合謙太郎、同垣原正直。露国代表は、外相ウイッテ、公使ローゼン、コロストヴェフ、ナバコアリ、ブランコンなり。〕

### 日本の要求

〔明治三十八年八月十三日、東朝〕(十一日華盛頓發)

小村全權は、文書を以て日本の講和条件を提出したり。

此の次の会見は露国の回答まで延期せらる。此の回答は多分來週月曜(十四日)なるべし。日本の要求は左の如しと伝へらる。



一、戦費の賠償（其の額を明記せず）。

二、樺太の割讓。

三、旅順、大連租借の讓渡。

四、滿州の撤兵。

五、韓国の保護權。

六、哈爾濱に至るまでの鐵道を讓与すること。

七、中立国竄入軍艦の引渡し。

八、東洋に於ける露国海軍力の制限。

九、浦潮以北の沿岸に於ける漁業權。

露国政府の訓令によれば、最初の二条は到底露国の認諾する能はざる所なるべく、露国は此の条件を以て過酷にして露国を侮辱するものなりとなす。右は凡て聖彼得堡に報告せられたり。（同上書四六八頁）

#### 講和問題同志聯合会

〔明治三十八年八月十八日、東朝〕

講和問題同志聯合大会 ○昨十七日午後三時明治座に於て開会せり。出席者は河野広中、鈴木重遠諸氏等一千余名。河野氏開会の趣旨を述べ、鈴木氏を座長に推し、山田喜之助、大竹貫一氏より、各地方遊説の結果を報告し、次に左の第一より第三までの決議案を朗読し、満場一致を以て可決し……

#### 第一決議案

吾人は我が全權委員の提出したる講和条件は、抑捐の甚しきを以て、東洋永遠の平和を保護するに足らずと認む。

若し更に讓歩をなすが如きことあらば、当局者は戦捷の効果を喪失し、国家百年の禍患を貽すの責を免がるべからざるものとす。

右決議す。

#### 講和問題同志聯合会

第三次議案（小村全權に送る電信文）

国論一致、露国の虚傲を憤る。吾人は、閣下が断乎たる方針に出で、苟且の交渉を拒絶せんことを望む。

東京明治座に於て

#### 講和問題同志聯合会〔同上書四七〇頁〕

米大統領調停に斡旋す。

〔明治三十八年八月二十二日、東朝〕（二十日ボーツマス発）

昨電の如く、米大統領は金子男を通じて我国に讓歩を忠告したれども、我が態度頗る強硬にして一步も讓らず若し又讓歩なすとするも、極めて僅少にして単に申訳に過ぎず。故に大統領も我が態度の動かすべからざるを認め、遂に忠告を停止せり。又一方には前電の如く、ロオゼン男は目下当地に來れるコンダセフ公爵（開戦前駐日露国公使館書記官たりしクゼダフか）と共に、昨午後七時ホテルを出て、同二十分当地発の汽車にてオイスタア・ベイに赴けり。当日ロオゼン男が同地に着したるは、午後五時にして直ちに大統領を訪問せり。

当日大統領はロオゼン男に向ひ露国は今日の如き態度を抛

擲し、大に讓歩する所あるべきを忠告し且つ曰く、若し今日の如き態度を以て、毫も變ずる事なきに於ては、余は余が意見を發表し、我は温和なる干涉的方法を講ずるやも知る可らずと。

之に対しロオゼン男は、兎に角ホテルに帰りたる後、我皇帝に電報し、御返電を待ち、而して後我々の態度を決すべしと語れりとの風説盛んなり。〔同上書四七二頁〕

露帝、米国の調停を拒絶

〔明治三十八年八月二十三日、東朝〕(二十一日華盛頓発) 米國大統領は露國全權ロオゼンに対し、償金割地に関する仲裁を申出で、其の旨を露帝に通せんことを求めたり。然るに其後の様子に拠れば、露帝は償金割地の二点に就き、讓歩することを欲せず、大統領の申込を拒絶せしが如し。大統領仲裁の事業にして、愈々成らずんば、談判の破裂遂に避くべからずと信ぜらる。〔同上書四七二頁〕

戸水博士休職

〔明治三十八年八月二十五日、官報〕叙任及辞令

東京帝國大學法科大學教授法學博士 戸水寛人

文官分限令第十一條第一項第四号ニ依り休職被仰付(八月二十四日內閣)

〔明治三十八年八月二十六日、東朝〕

今回戸水博士が休職となりし表面の理由は兎も角も其の実は講和問題に関する事云ふ迄もなく、元來彼の七博士諸氏は

開戦前真先きに開戦論を主張して既に政府の忌諱に触れたるに、講和問題の起るや、又々天下に先つて、最も強硬の条件を發表して世論を喚起せしより、愈々当局者の嫉視する所となり、去る六月以來二回迄も文部大臣より大學總長を経て嚴重なる戒告を加へたれども、博士諸氏は此の國家の大事に際し學者の本分として其の所信を公にするに當り、政府が強て之を威圧せんとするが如きは其意を得ずとて、爾來依然として筆に口に其の意見を公表しつゝありしかば、政府部内特に元老の立腹一方ならず恰も処士横議を以て之を目し、博士諸氏に加ふるに、浮浪の徒を取締るべき予戒令を以てすべしと放言したる事もあり、結局政府は寺尾博士等を始め、諸官省に關係ある諸氏に戒告を加へし結果、諸氏は断然其の關係を断ち、益々硬説を唱へ居りし爲め、政府は益々持て余し、右同志の博士諸氏を悉く処分するの議もありしが、斯くては國家の体面のみならず、實際教育上差支の場合もあるを以て、取敢ず其の内の最硬派なる戸水博士を処分して他を威圧するに決し、偕てこそ今回の休職沙汰を見るに至りしものにて、特に真の近因となりしは、去る七月の外交時報に「講和の時機果して到れるや」と題して掲げたる同氏の論文に基くものよしなるが、他の同志諸氏は霜を履んで堅氷臻るとなし、益々其の決心を鞏固にする所あり、且つ戸水博士一人を犠牲として、其の儘黙視し得べきに非ずとの考へを有する人々もありといへば、或は他日連袂辞職を見るが如き事あるやも知

れずといふ。(同上書四七五頁)

戸水事件に付帝大総長辭職

〔明治三十八年十二月五日、東朝〕

山川〔健次郎〕東京帝国大学総長辭職の真相なりと云ふを聞くに、氏は曩に戸水博士が休職を命ぜらるるや、主務省に出頭して徹頭徹尾其の措置の不当を勧告し、若し同博士を復職せしむるにあらずんば延いて大学教授連の大反抗あるべき旨を予言したるも、当局側にては更に改むる所なく、遂に一戸水博士の休職問題は大学対文部省の反抗となり、其余波溢れて京都大学にまで及びたり。事茲に至りたる以上、大学教授団に応援せざるべからざるも、氏の性行上部下を統率して、上長官に反対するが如きは事既に不穩の極みなるを悟り辭意を固むるに至りたる次第なりと。(同上書五三六頁)

七博士辭職の手續

〔明治三十八年十二月六日、東朝〕

……殊に七博士連いかで坐視す可き、寺尾、金井、建部、高橋、岡田の諸博士は既に一昨四日午後を以て各自辭表を新総長〔松井博士〕の手許に差出したりといふ。其の分科大学教授中には寧ろ新総長及文部大臣に辭職を勧告す可しと論ずる向もあり、亦それに及ばず前総長に同情して相共に辭職す可しと論ずるもの有り、未だ其決着を聞かざりしが、猶聞き込み次第に報告する所ある可し。(同上書五三七)

新総長辭職

〔明治三十八年十二月七日、東朝〕

△新総長へ辭職勧告 未だ本議に入らざるに、先づ松井新総長に辭職を勧告すべしとの説出で、二回迄某々博士等此時総長室に控へ居たる松井博士を訪ひ、其意を通じたるに、総長は最初容易に決すること能はざるが如くなりしも、結局辭職を以て已むを得ざるものと認め、勧告を容るる旨を明言し、本問題文だけは協議会の本議に付せられずして落着せり。

△新総長辭職 右の次第にて松井総長は一昨朝を以て既に辭表を提出せり。

久保田讓文部大臣に辭職勧告

△意見書提出、文相辭職勧告 次に協議会は最初選出したる委員の提案に基き、総理大臣及文部大臣に意見書を提出すること、並に文部大臣に辭職を勧告するの件に就き擬議したるに、前者は異議なく可決し、後者は決議として成立するに至らざりしも、出席者三分の二以上之を是としたり。依つて協議会は三上博士、梅博士等を意見書起草委員に選定し、同委員等は一昨夜を以て既に其起草を終りたり。文部大臣に対する辭職勧告運動も近々に着手さるべき筈。(同上書五三七頁)

久保田文相辭任す

〔明治三十八年十二月十日、東朝〕

久保田文相は今回の大学事件に関し責を引くの已むを得ざるに至り、一昨日を以て愈々辭表を提出し、同日の閣議に於て之を奏請することに決定したれば、今明日中に發表を見る

べし。……大学総長は未定なれども、山川博士の復職ならざることだけは確なり。〔同上書五三九頁〕

日露講和条約成立

〔明治三十八年九月一日、東朝〕

講和条約調印（二十九日ポウツマス発）条約の調印は予て華盛頓にてなすべしとの説ありしも、当地にて総てを終り、当地より直ちに我が全権は帰朝すべし。〔同上書四七七頁〕

〔九月一日、東朝〕

講和条件○国民新聞の報ずる所によれば、講和条件の主要なる点は左の如きものなりといふ。

樺太の分割は北緯五十度を以て日露の境界となすものもの如し。即ち徳川時代に於て露国と折衝したる目的を今日に於て達したるものと云ふべく、而して兩國共に樺太に於ては兵備を為さざることに定められ、朝鮮に於ても、其の北境露国と境を接する所は、互に兵備を置かざることに定められ居れりといふ。又東清鐵道の日本の有に帰すべきは、哈爾濱の南テクシユン駅より以南の分にして、俘虜賠償金は約一億五十万円との説あり、又沿海州沿岸漁業権に關しては、日露兩國共に均一の權利を有することに定められ居れりといふ。〔同上書四七七頁〕

屈辱講和条約は当路者の予期せる所

〔明治三十八年九月一日、東朝〕

大々屈辱の大理由○開戦以來連戦連捷の我が日本帝国は、

何が故に今回の如き屈辱に甘んじてまでも、講和の成立を圖らざる可からざりしか、五千万の民衆は皆慨然として、当局有司の不甲斐なきを憤らざるはなし。此時に際し、政府側の某有力者は平然として屈辱に甘んず可き理由なりとして、社員に語りて曰く、

君等は今回の講和条約を以て屈辱なりと云ふも、是れ畢竟前途を洞観するの明なきが為めなり。今試みに元老及桂首相、海陸当局者の所論如何と顧みれば、君等亦自ら其の短見を悟らん。即ち

△桂首相は講和談判開始の當時に於て、或人に語りて曰く、抑も今回戦争の目的たるや、帝国の侵略的精神に出たるにあらずして、自衛上已むを得ざるに出たる事は、彼の宣戰の詔勅に依りて明なり。而して韓国は既に我が勢力範圍に歸し、滿州に於ける露国の経営、亦水泡に屬し、却て我が勢力圈内に在るに於ては、開戦の目的は既に貫徹せられたるものと謂ふ可く償金割地の如き、寧ろ枝葉に屬せずや。

△各元老は曰く、今後戦争を継続して、哈爾濱を屠り、浦潮を陥るるは、必ずしも難事にあらずとするも、仮に今より一年間統戦するものとして、約十八億の戦費を要す。之に過去一年有半に費したる戦費を加ふれば、殆んど三十六億円の巨額の戦費は、果して能く我が国民の負担し得べき所なるか。縱し国民の力は之れが負担に堪ゆるものとするも、敵国の首府を陥れて其の死命を制するが如きは到底不可能の事に

属するを以て、統戦後の講和談判に於ても、露國をして戦費を償はしめん事は甚だ覺束なく左れば國民の未だ戦費の負担に疲れざる今日に於て、戦局を収むるは豈に策の得たるものにあらずや。区々たる償金の事の如き、深く意に介するに足らざるなり。

△陸海軍当局者は曰く、開戦以來、海に陸に連戦連捷を重ねたるは、我が将卒の忠勇に依れると雖も、亦天佑に浴するもの多し。而して今後統戦して、果して今日までの如く、連戦連捷し、能く其名譽を保持するを得べきか、幸ひにして今後も戦争は勝つことを得べしとするも、之が為めには多くの犠牲を出さざる可らず。左れば寧ろ講和の機会到来したる今日に於て戦局を収め、以て永く我陸海軍の名譽を保持するの勝れるに若かさるなりと。

此の如く穿鑿し来たれば、講和談判に於て、今日の結果を得たるは寧ろ当然にして、毫も怪しむ所なきのみか、元老以下の内閣有司は今回の講和成立を以て、真に國家の長計を為すものなり。然るに君等之に対して屈辱なりと云ふ。余は其の何の謂たるを解せざるなり云々。社員は果然、云ふ所を知らずして去る。(同上書四七八頁)

#### 講和問題聯合同志会上奏文案

〔明治三十八年九月五日、東朝〕

講和問題聯合同志会にては既報の如く上奏案決定済みとなりしに就き、引続き調印取纏中なりしが、愈々河野広中氏外

二十七名連署の上、昨日午前十一時河野氏總代となりて、宮内省に出頭し、捧呈の手續を終りたり。其の案左の如し。

#### 草奔の微臣 河野広中等

謹みて奏す。謹みて惟るに、征露の戦役は洵に無前の盛舉曠古の大業にして、而して其の成功は、

陛下の御稜威と、陸海軍の忠勇精銳とに、是れ由る。而して國民が恩讎相忘れ、上下同心の功亦決して没す可らざるなり。然るに陛下の閣臣及び全権委員等深く之を思はず。講和の局面遂に今日あるに至りては、臣等豈之を言ふに忍びんや。臣等竊に惟ふに、幾十万人の親を独にし妻を寡にして、子を孤にして、十幾億の国債を負ひ、五千万人の同胞をして、其の今日の如き講和条件に接せしめむとは、実に想像も亦及ばざりし所なり。

#### 謹みて惟ふに

陛下が垂れ玉ひし開戦の詔勅は炳として日星の如く、講和の聖旨は既に出でたる汗の如し。然るに全権委員の失体閣臣の贊同以て君國の大事を誤るに至りては、臣等豈復た之を言ふに忍びんや。臣等謹みて惟みるに、閣臣及全権委員は、実に陛下の罪人にして、亦実に國民の罪人なり。豈惟り

陛下と國民との罪人のみならんや。亦実の上祖奈に対し、下後世子孫に対する罪人なり。今日の事、臣等復た之を云ふに忍びざるなり。仰いで天に訴へんと欲すれば、天答へず。伏して地に懇へんと欲すれば、地応ぜず。臣等の進退茲に谷ま

る。

仰ぎ願くば、

陛下宸衷より聖断し玉はむことを。臣等憂憤惕励の至りに禁へず。謹みて閣下に伏奏し奉る。

誠恐誠懼頓首々々

明治三十八年九月四日〔同上書四八四頁〕

六博士の奏上

〔明治三十八年九月二十三日、読売〕

法学博士金井延、同寺尾亨、同戸水寛人、同岡田朝太郎、文学博士建部遯吾、法学博士中村進午の六博士は、連署して講和条約拒絶の上奏文を奉りたる由は昨報の通りなるが、其の文案は左の如くなりと云ふ。

恭しく惟るに征露戦役の大捷は有史以來未だ曾て有らざる所、陛下の赤子は天に歡び地に喜び仰いで聖寿を祈り俯して国運を祝す。是れ陛下の熟知せさせたまふ所なるべし。曩に宣戦の大詔一たび下るや、臣等は深く聖旨の在る所に感激して、夙夜に永遠の平和を以て念と為し、之を心肝に銘じて敢て或は懈ることなかりき。頃者世に伝ふる所の講和条約を按ずるに、条項一として開戦の目的を達するに足るものなく、上、陛下與国の宏謨に副はず、下、億兆勤王の丹誠を蔑し、空しく千歳罕遇の機を逸して、永く百世不雪の辱を取る。臣等恐懼言ふ所を知らず。伏して惟るに、陛下至仁至慈夙に立憲の美制を帝国に施かせたまひ、常に億兆の総意を納るるを

御心と為させたまふ。則ち陛下が此の如き条約を嘉納せさせたまはざる可きは、臣等の竊に確信する処にして、陛下の赤子が共に仰望する所なり。然るに或は妄見の存するあり、或は信を万国に失ふを以て辞と為し、或は内外の事情を以て説と為し今次の条約を以て、万已むを得ざるに出づと為し、以て陛下の聡明を雍蔽し奉らむと擬する者なきを保せず。夫れ条約の批准が法律の裁可と均しく許否の自由を存するは、之を國際の法律に照らして明なり。若し國家の元首は大臣の締結したる条約を必らず批准せざるべからずとせば批准は則ち無用の長物のみ。焉んぞ國際法に於て此の如き無用の長物を設くるの理あらんや。凡そ批准の拒絶し得べきことは之を普通の学理に稽へ、之を幾多の実例に徴して、昭明的確復た一点の疑を有せず。而して此事毫も元首が、予め条約の内容を熟知せると否とを問はざるなり。唯夫れ批准拒絶の事、濫にして尋常の対局に施すは固より不可なりと雖も、苟くも國家の存亡禍福に関する重大の事態に際しては、断じて之が適用に躊躇すべきにあらず。臣等謹みて按ずるに、帝國縦へ今次の条約を不成立に帰せしめ、更に戦争を継続するも、経営苟くも其宜を失はずんば、我經濟上の実力は、戦費を弁じて綽々として余裕あらむ。而して環視列國必ず亦、陛下公明の聖旨を仰ぎ、臣民愛國の衷情を諒とし、帝國の威信に於て、特に損益する所なかるべし。之に反して帝國若し今次の条約を甘諾し、苟安姑息の平和を招来せば、人心沮喪し財力萎靡

し、風教弛廢して名節地に墮ち、其弊必ず統戦に倍するものあらむ。況や或は自ら自国の防備を制限して、以て独立国の体面を損じ、或は數歳ならずして、再び敵国と難を構ふるの已むを得ざるに至るあらば、臣等恐らくは、帝国國運の發展永へに望みなきに了らむ事を。臣等生れて盛時に遭ひ、聖恩に感激し、夙に宣戦の大詔を捧読して聖意を捧体す。今敢て天威を冒し、微衷を縷陳して聖鑑を仰ぎ奉る。斧鉞の罪固より逃るるに所なしと雖も、抑も亦国家の大事に臨み、知りて言はざるの却て臣民の大義を害せむ事を恐るればなり。仰ぎ願はくば、赤子仰望の至情を垂憐せさせ給はむ事を。誠恐誠惶、謹みて奏す。〔同上書四九七頁〕

#### 日露講和条約批准

〔明治三十八年十月十六日、官報〕

勅令 ○朕、明治三十八年九月五日亜米利加合衆国「ポーツマス」(ニュー・ハムプシャ州)ニ於テ、朕ガ全権委員ト露西亞全権委員ノ記名調印シタル講和条約ヲ批准シ、茲ニ之ヲ公布セシム。

#### 御名御璽

明治三十八年十月十六日

内閣総理大臣兼外務大臣 伯爵 桂 太郎

〔同上書五〇五頁〕

#### 神仏道各管長へ訓示

〔明治三十八年十月十六日、官報〕

内務省訓令第二十三号(神仏道各管長へ)

日露ノ戦局終リテ告ゲ愛ニ優渥ナル

聖詔ヲ奉拜スルニ至レリ。顧ミレバ交戦二十閱月、連戦連勝遂ニ克ク開戦ノ目的ヲ達シ、東洋治安ノ宏圖ヲ確立セラレタルモノ、素ヨリ至尊ノ御稜威ノ然ラシムル所ナリト雖モ、教宗派管長ガ時局ニ処シテ能ク其職責ヲ尽シ、部下教師ヲ督励シ、各々其任務ニ従ヒ、奉公ノ誠ヲ致サシメタルノ功亦鮮シトセズ。今ヤ国家ノ光榮新ニ加ハリ國民ノ責任一層ノ重キヲ見ル、布教ニ従事スル者宜シク國運ノ趨勢ニ鑑ミ、民情ヲ調撰シ風俗ヲ提擲シ以テ 聖旨ニ奉答スル所ナカルベカラズ。特ニ國憲ノ趣旨ヲ服膺シ、人ヲシテ信教自由ニ関スル危懼ノ念ヲ絶タシムル如キハ、布教伝道ヲ以テ其任ト為ス者ノ最モ

深ク意ヲ致サザルベカラザル所トス。管長タル者宜シク此意ヲ体シ、部下ノ教師ヲ指導誘掖シ、以テ其本分ヲ完フスルヲ期セシムベシ。

明治三十八年十月十六日

内務大臣男爵 清浦奎吾

〔同上書五〇九頁〕

#### 日露講和談判日記

〔明治三十八年九月四日、大阪朝日〕

六月九日、米國大統領より日露直接の講和談判を開始せん事を勧告し来る。

六月十日、帝國は此の勧告を容れ、露國政府亦直に之に応

## 第二篇

じ、其の旨を回答す。

六月十二日、露国は其の巴里駐劄全権大使ネリドフを講和全権委員に指名す。

六月十三日、露国は巴里を以て両国講和の談判地と定めたき旨正式に申出づ。

六月十五日、米国大統領は講和全権委員会合地を華盛頓に選定せる旨宣言す。

六月二十六日、米国大統領は日露全権が八月上旬中に会合すべき事を提議す。

六月二十八日、清国政府は日露両国間の講和談判に参与せんとするの意を示す。

七月二日、露国全権委員ネリドフ辞任し、羅馬駐劄大使ムラビエフ之に代る。

七月三日、小村外務大臣及び高平全権公使、我が講和全権委員仰付けらる。

七月四日、弁理公使佐藤愛鷹、政務局長山座円次郎、公使館一等書記官安達峰一郎、外務書記官本多熊太郎、外務官補小西孝太郎の五氏講和全権委員随員として米国へ差遣せられ、歩兵大佐立花小一郎米国公使館附に補せらる。同時に露国にありては、ムラビエフの外、米国駐劄公使ローゼン男講和全権委員に任せられ、国庫局長シボッフ、北京駐劄公使ボコチロフ、教授マルチニス、倫敦大使館附武官エルモロッフ及び東京公使館附武官たりし海軍大佐ルーシン露国講和全権

委員の顧問に任せらる。

七月六日、小村全権委員に対し平和を永遠に恢復すべしとの勅語を賜はる。

七月七日、談判地はポーツマスと定めらる。

七月八日、小村全権委員一行横浜出発。

七月十三日、露国全権委員ムラビエフ氏辞表を提出し、ウキッテ氏之に代る。

七月十四日、高平氏及びローゼン男米国大統領に面会し、談判手続に就て談合す。

七月二十日、小村全権委員一行シアトル着、露国全権ウキッテ氏露都を出発す。

七月二十四日、露国皇帝は芬蘭の沿岸にて独逸皇帝と親密なる会見を遂げたり。

七月二十五日、小村全権紐育着。

七月二十八日、小村、高平の両全権委員は、米国大統領をオイスター・ベーに訪問す。

八月二日、ウキッテ氏紐育に到着し、直に談判開始に関する宣言書を發表す。

八月四日、露国の両講和全権委員は、米国大統領をオイスター・ベーに訪問す。

八月五日、両国全権委員は軍艦に搭乗して紐育発、オイスター・ベーに赴き、米国大統領の紹介により互に握手挨拶したり。席上米国大統領の挨拶ありたり。



八月八日、日露全権の一行を分乗せしめたる米国軍艦ポーマスに到着す。

八月九日、我が全権は露国全権の希望により、打合の爲予備会見を開く。談判用語は英仏両国語を併用する事に決定したり。

八月十日、両国講和全権委員第一回正式会見を開く。各随員亦出席し委任状を交換査閲して、互に間然する所なきを認めたるにより直に談判に入り、我が全権より要求条件を文書にて提出す。露国全権は之を研究したる上、速かに回答を提出する事に決し散会。

八月十二日、露国全権より我が要求の各条に対する回答を仏文にて提出し、午後第一条より逐条討議に移りたり。露国全権の随員は会議の円滑に進捗せる事を語りたり。

八月十三日、日曜日には会議せざるに決す。

八月十四日、午後の会議にて我が要求第一条を議了し、午後第二条及び第三条の討議を終りたり。第一条は韓国に於ける日本の保護権、第二条及び第三条は日露両国の満州撤兵満州還付なりと云ふ。

八月十五日、午前第五条の討議に三時間を費せしも決定に至らず、遂に両者議論の相違せし点を書留め、之を後廻しとし、午後第六条を議了したり。第六条は遼東半島租借地讓渡にして、第五条は樺太の割譲なり。

八月十六日、午前より午後に亘り、第七条に就き討議を爲

し、大体に於て決定、引続き第八条を議了して散会したり。第七条は哈爾濱以南の東清鉄道讓渡にして、第八条は満州横断鉄道及び哈爾濱以南東清鉄道を軍事に使用せざる件なりと。

八月十七日、第九条に就て討議せしも、両者の議一致を見るに至らざりしにより、後廻しとするに決し、午後第十条を討議せしも、同じく決定に至らず、第十一条の討議半途にて散会したり。第九条は軍費払戻、第十条は遁竄艦艇の引渡にして、第十一条は露国の絶東に於ける海軍力制限なりと云ふ。

八月十八日、第十一条に就き討議を継続せしも決定に至らず、第十二条に移り、無事議了して二十日迄休会する事に決したり。第十二条は沿海州に於ける漁業権允許なり。

八月十九日、露国の両全権はポーツマウスを去って、マグノリアに赴き、同地よりローゼン男ポーツマウスに帰來す。米国大統領と会見したり。

八月二十日、露国全権ローゼン男ポーツマウスに帰來す。米国大統領が露国全権に与へたる勸告其の効を奏し、一般の形勢徐々融解せんとするが如くに伝唱せらる。

八月二十二日、露国の提出すべき議事録浄書間に合はざる為、会見延期となる。米国大統領特使を以て書を露国全権に送る。

八月二十三日、午前の会見に於て両国全権が記録せし是れ

迄の議事録を対照せしが相違の点ありしにより、午後再び開會、遂に前日迄に決議したる講和条項の覚書に調印したり。残り四箇条に関する談判は、二十六日午後三時三十分まで延期する事に決したり。

八月二十四日、駐露米國大使マイエル氏、露帝に謁見し、三時間の會談をなしたり。

八月二十五日、伯林電報に依れば、獨帝は再び談判継続の爲運動せるもの如し。

八月二十六日、午後の會見に於て、露國よりは正式の回答を提出せざりしも、到底戦費払戻及び樺太割讓に関する我修正案に同意する模様見えず、然し本國より未だ正式の回答達せざるより、前會の議事録に調印したるのみにて、談判は二十八日迄休會せらる。

八月二十八日、元老及び各大臣首相邸に參集して緊要事件につき會議を開き午後御前にて重要な御前會議を開かる。ポーツマウスに於ける講和談判は二十九日迄延期。

八月二十九日、午後三時會見の筈なりしが、繰上げて午前九時半會見、樺太分割問題も俘虜償金問題も、千歳の恨事を遺して仮に解決したるが如し。〔同上書四八三頁〕〔菊田貞雄 井深先生關係資料第六冊〕



# 第三篇



# 日露戦争の頃

日露戦争と井深梶之助先生

菊田貞雄

日露の交渉史は徳川幕府の鎖国政策と露西亜の東漸南下策とに由来し、これが仲介の役割を演じた者にわが無名の漂流民があった。元禄七年兵庫の漁夫伝兵衛なる者がカムチャッカに漂着して露人に助けられたことがある。土官ウラディミール・アトラソフは伝兵衛から日本の富裕なることを聴取して己が慾心を制し難く、部下に命じて千島の北地を掠奪せしめたが、更に彼はピョートル帝に日本侵略の許可を懇請した。露帝は一応伝兵衛に出廷を求めたので、彼は元禄十五年モスクワに送られた。露帝は伝兵衛に日本語の教授方を命じたが、その底意は臆て東洋遠征の準備のためであった。ここに於て船頭伝兵衛は一躍、科学院会員に挙げられ元文元年その死するの日まで日本語教授の職に在った。伝兵衛のお国自慢が余程ピョートル帝の心を動かしたものと見え、正徳元年イワン・ペトロヴィッチ・コズイレーフスキーなる者をカムチャッカに遣わし、専ら千島の偵察に当らせたが、彼は到るところで狼藉を働いたために遂に解職になった。享保五年フェオドル・ルズィン、イワン・エヴレーイノフの兩名が再び千島偵察の密使となったが、折しも享保十年ピョートル帝の急死に遭い、彼等の試み

は挫折するの已むなきに至った。

然るに自然は撓むところを知らず、この間にも黒潮は幾度かわが漁船や廻漕船などを遠くカムチャッカの地に漂着させたのである。彼等は多く露都またはイルクーツクの日本語学校の教師に任せられ、そのころ日本へ使節として派遣された露人のなかにはこれら日本語学校の出身者も見受けられた。若き士官アダム・ラックスマンもその一人で彼は寛政四年に伊勢の漂流民を携えて蝦夷地松前に来って、交易を求めた。文化元年には露米貿易会社の長ニコライ・ペトロヴィッチ・デ・レザノフがこれまた仙台の漂流民を引具して交易を求めて長崎に現われた。文化三年フヴォーストフ、ダヴィドフの二士官等はラックスマンの復讐ということで蝦夷地に入寇した。ワシリー・ミハイロヴィッチ・ゴローヴニンは文化八年蝦夷地の測量の使命を帯びて来り捕われの身となったが、これはフヴォーストフやダヴィドフらの仕打ちに対するみせしめであった。

その後、四十年の間、露西亜は国土経営を欧羅巴大陸に集中することを余儀なくされて東洋に意を用うる余裕を持たなかったが、嘉永六年の夏になると海軍中将ユーフィーミーウス・ブーティアーティンは米利堅国海軍代将マセウ・カルブレース・ペリーと相前後して長崎に入港して交易と国境決定の二点を求めた。安政五年の「日露和親条約」はエトロフ全島以南を日本領とし、ウルップ全島以北のクリル諸島は露西亜領と定めたが、唐太島は従来通り境界は定めずに雑居の形式をとることになった。翌六年ムラヴィーヨフが渡来して唐太全島の領有を主張して破談。幕府は文久二年に使節を露都に遣わして境界の談判に当らせたが、露国は四十八度線定界説を堅持して譲らず、遂に翌年を期して日露両国より使節を唐太島に派遣して実地検分の上、境界を定めることになった。然るに幕府は攘夷断行を繰り、内外ともに多難で破約の已むなきに至った。唐太島の露国勢力は益々その度

を加えるばかりで、これが対策として幕府は慶応三年に小出大和守秀実を露都に派遣した。樺太仮条約はその結果であるが、纔に日露和親条約の再確認の域を出でずして幕府は瓦解したのであった。

明治政府の成立後、樺太の処置は外務卿副島種臣らの買収説となり開拓使次官黒田清隆らの放棄論ともなり、纏ては明治八年千島樺太の交換を見るに至ったのである。

これを以て見れば、旧幕以来日本の対露政策は終始一貫して消極的のものであった。

二

韓国の独立と領土保全の問題は自衛上から日本を日清戦争へ導いたが、それによって弱体を暴露した清国は不幸にして欧羅巴諸国による分割の機会を増加する結果となった。三国干渉はその前奏曲である。仏蘭西は清国に対して東京の国境と特種關係を要求し、独帝は既に膠洲灣占領について露帝の諒解を得ていたが山東に伝道中の宣教師殺害事件を契機に清国に迫ってそれが租借に成功した。露国は先きに日本をして清国に返還せしめた遼東半島を自ら占拠して南下の策源地と化した。英吉利はこの露国に対抗する目的から威海衛を租借した。

露西亜が滿洲経営に当るとすれば、その圧迫は直ちに韓国に波及し、日本は拱手傍觀を許されない。その上、露西亜は初めより日本の実力を軽視してかかった。当時の本邦駐劄露西亜公使館附武官は「日本陸軍が歐洲最弱の軍隊に対比する道徳的基礎を得る迄にも約一世紀を要するであろう」と報告した。陸軍大臣クロバットキンは明治三十六年に日本を訪問したのち、日本の実力を問題にせず「我等は十三日の内に四十万の軍隊を日本国境に集めることが出来、かつその用意がある。これは我等の敵を破るに足る兵力の三倍の数である。戦争は単に軍事



的散歩に過ぎない程度のものであって云々」と言った。海軍も同様のこと。明治三十六年のわが大観艦式を参観した一露国艦長は『日本海軍の物質的部分は至れり尽くせりだ、だが艦の操縦には将卒果して合格すべきや疑わしい』と語った由である。

他方日本国内に於いても対露政策に就いて強硬なる態度をとる者も多く、所謂七博士らが総理大臣桂太郎に提出した満洲問題の意見書などはその代表的のものであった。この七博士とはそのころ東京帝国大学教授の職に在った富井政章、戸水寛人、寺尾亨、高橋作衛、中村進午、金井延、小野塚喜平次の七名を刺すものである。<sup>(マヤ)</sup>また明治三十六年十二月の第十九回帝国議会は開院式の終るや勅語奉答文案中に内閣弾劾を議決し、衆議院議長河野広中は参内して此の奉答文を捧呈せんとしたが、その実現を見ざる先きに議會解散の詔勅が下った。政府は、時の「輿論」から見れば、「恐露病者」と誤診されるほど露国に対しては慎重なる態度を持して来たのである。

明治三十七年二月四日に最後の御前會議が開かれてわが方の採るべき方針は決定された。翌五日には駐日露西亜公使ローゼンに最後通牒を手交し、また駐露日本公使栗野慎一郎に電訓して露西亜政府に談判破裂を通告させた。わが聯合艦隊が旅順港を夜襲して敵艦を撃沈したのが二月八日、九日には仁川沖の海戦で敵艦二隻を沈めた。十日には宣戦布告の詔勅が渙発せられ、日本は露国に対して正式に露端を開くに至ったのである。

ここに特筆すべきことは駐日露西亜公使ローゼンが帰国に際し、畏くも皇后陛下には、特に女官を露西亜公使館に御差遣遊ばされ、ローゼン夫人に極めて優渥なる令旨を賜い、御餞別として銀製の花瓶一对を御下賜遊ばされた御事である。公使夫人は文字通りに涕泣して拝答の辞を申上げることが出来なかつたということである。従って国民も概ね敵国民に対して誠に寛容の態度を持したのであった。

そのころ既に露西亜は日露戦争を目して白色人種対黄色人種の戦いであり、且つ基督教国対異教国の闘争と看做していた。むろん露西亜は白色人種の文明の擁護者を以て自任し、欧米諸国の同情を一身に集めようと努力して怠るところがなかった。この露帝の自負心を増長させた人物に独帝ウイヘルム二世があつた。彼は明治二十八年三国干涉宣言の三日後に露帝に対して、黄色人種の征服は露国の使命なる旨を説き、露西亜が東洋に勢力を向けるためには敢えて自らその背後を固むべきことを辞せずと約した。なお明治二十八年七月三十日外務次官ロ―テンハンに訓示した独帝の対露政策は

「吾人は露国をして歐洲並歐洲東方の経営を減せしむべく極東に釘附にすべく試みねばならぬ。露国はオルソドックス教会及モスコウ方面の力を利用することに依り、オルソドックス教並に十字架の先驅者として文明の擁護者として、日本に依り動員せられたる支那の侵撃に対する切迫せる危険に抗せしむべきである。此種政策は既にビスマルク公も行った。若し露国にして極東経営に従事するに至らば、独逸皇帝は幾分の讓歩を交換とし露国の後方に於ける危険を絶たん。之に対する讓歩及前提として独逸国境に於ける露軍の削減並に独逸が支那に於て領土、少くとも貯炭所を獲得する場合、露国が之を支持することにある。」

更に独帝は日露戦争の直前、黃禍を宰相フォン・ビュローに説き「これは白人種、キリスト教及び歐洲文明に對する最大なる危険である。もしロシアがこれ以上、日本人に屈したならば、今後廿年にして黄色人種はモスクワ及びポーゼン(Posen)に在るであろう……我等はザー(Zar)に対して、かれが諒解しないところの黃禍の危険について注意を喚起しなくてはならぬと述べ、露帝ニコラス二世に宛てて黃禍を説いた親書をも贈っている。

日本の国内に於いてもこれに類似の戦争觀を有し、甚だしきに至つては基督教徒を目するに「露探」を以て

し、地方によっては誤解から生じた迫害をも惹き起したとも伝えられている。このような情勢であって見れば、日本は、日露戦争が人種戦または異宗教間の闘争でないこと及び今次の戦争が日本の自衛上から起った義戦であることを中外に宣揚する必要があった。内務大臣は、宣戦の布告された直後、府県知事に宛てて、管下の露西亜国民を特に保護すべきことを通牒し、文部省は訓令を以て学生生徒の戦時下に於て守るべき事柄を明示した。その中に次の一節があった。

今回露国ニ対シテ戦ヲ宣セラレタル趣旨ハ、炳乎トシテ宣戦ノ詔勅ニ明ナリ、此時ニ当リテ国民拳テ忠勇ノ精神ヲ励マシ、満腔ノ熱誠ヲ捧ゲテ陸海軍ノ後援ヲナスハ固ヨリ当然ノコトニ属ス。……

「今ヤ露国ト事ヲ構フルモ、固ト是レ平和ヲ永遠ニ克服スルガ為メナレバ、学生生徒ガ客氣ニ驅ラレ露国民ニ対シテ嘲罵ヲ逞クシ、延キテ他ノ外国民ニマデ悪感ヲ懷カシムルガ如キコトナカラシムルハ子女ノ教育上最モ注意ヲ要スル所ナリ。」〔以下略〕

更に政府は神道、仏教、基督教の重立った者に対して政府の方針に協力を求めた。時の内閣総理大臣桂太郎は神、仏関係者には通達を以てしたが、基督教に在っては日本基督教青年会同盟委員長本多庸一を首相官邸に招じて依頼するところがあつた。越えて五月十六日芝公園内弥生館に「大日本宗教家大会」が開かれた。発起人は神道関係では実行教の管長柴田礼一、仏教は浄土宗大学の校長黒田真洞、真宗大学の校長前田慧雲、基督教は本多庸一と福音同盟会長の小崎弘道であつたが、井深先生も元田作之進などと共に基督教側を代表して尽力するところがあつた。当日の参集者は神道関係は三百六十八名、仏教徒七百四十七名、基督教徒三百六十五名、婦人十七名、外国人四十三名、印度人五名。席上満場一致を以て「日露の交戦は、日本帝国の安全と東洋永遠の平和とを



桂 太 郎

劃し、世界の文明、正義、人道の爲めに起れるものにして、毫も宗教の別、人種の同異に關する処なし、故に吾儕宗教家は、宗派、人種の異同を問わず、此に相会し、各自公正の信念に懇え、相与に奮って此交戦の真相を宇内に表明し、以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む」との決議をなした。

この宗教家大会は国内の誤解を除くためには余程の貢献はしたが、対外的にはそれほどの効果は挙げられなかつたように見受けられた。

政府は戦時外交の円滑を図り、代弁者として、英吉利には末松謙澄を、亜米利加には金子堅太郎を派遣した。蓋し末松は嘗て英吉利に遊学し、金子は亜米利加に留学して、夫々派遣先きの実情に通じ、且つ先方に於ても信用の厚い人達であつたからである。然し他方外国の輿論を動かすには適当な外国人を用いる必要もあつたので、桂首相は亜米利加宣教師中の長老で多分に外交手腕を持ち識見の高いウィリアム・イムブリーに依頼するところがあつた。彼は井深先生と同道で桂総理を訪い、前後二時間に及ぶ会見談を認め首相の校閲を受けた文章を倫敦の「タイムス紙」「スペクテーター」誌や紐育タイムス紙などに発表した。この文章がその後多くの新聞などに転載されて読者を啓発するところ少々ではなかつたとも伝えられている。

万全を期した首相桂太郎は明治三十八年一月十七日徳富猪一郎を通じて本多庸一に委嘱するところがあり、委細は外務次官珍田捨巳と諮るやうにとのことであつた。これは本多が弘前東奥義塾頭時代に珍田がその塾生であつた關係によるものであつたらう。当時本多は青山学院長でメソジスト教会の重鎮、基督教青年会同盟委員長を兼ねていた。井深梶之助先生は明治学院総理で日本基督

教会の先達の一人、基督教青年会同盟副委員長。両人は明治初年の横浜公会以来の信友で、本多は先生よりも六歳の年長、基督教界の活動方面に於ても多くは先生の先輩格であった。先生は本多庸一と共にその年の四、五月巴里に開かれる基督教青年会同盟万国大会と和蘭国ザイストに開かれる学生基督教青年会同盟万国大会に日本代表として出席することになっていた。桂首相より依頼を受けた本多は井深先生と同道して総理大臣桂太郎、外務大臣小村寿太郎、同次官珍田捨巳、大隈重信を歴訪した結果、両人は基督教徒として欧米の基督教徒に日露戦争の大義を説明することになった。政府は珍田外務次官を通じて補助金を与え、合せて在外の公使館、領事館をして適當の便宜を図らしめることを約した。

### 三

井深先生等は明治三十八年三月四日（土曜日）独逸船プリンツェス・アリス号に乗船して横浜を解纜することになった。ここに先生の日本人としてまた基督教徒としての海外に於ける活動が始まるのである。幸い遺品中に当時の模様を伝える英文日記があるので、筆者は専ら井深先生をして語らしめる方法を探った。この英文日記は明治三十八年三月四日横浜乗船の日に始まり、同三十九年二月十二日（月曜日）横浜上陸の前日に終っている。先生は幾度かの外遊に際して、その都度英文日記を書かれたが、それは必ず故国出帆に始まり故国上陸の前日に終っている。然もあの謹厳で格式を重んずるように見られていた先生が、英文日記に於ては袷を脱ぎ棄てて誠に身軽に躍動して居られるので、得難い資料である。ただ紙面の都合上、欧羅巴大陸歴訪のことに限り、英・米に於ける先生の活躍については割愛することにした。なお本来ならば原文のまま引用する筈のところを、印刷上の

都合で拙訳を以て発表するの余儀ない次第を遺憾に思うものである。

「三月四日、土曜日、朝家を出る時には可成りの暴風雨であった。雨は夜半ごろから降り始め、花〔夫人〕と私が家を辞するときには土砂降りになった。母上とお国におんぶした真澄〔三男〕は門まで出送って呉れた。お春〔三女〕と健次〔二男〕は品川駅まで来て呉れた。沼沢氏外数名の友人は既に駅で待っていた。多くの〔明治学院の〕教員と生徒もそこに待っていた。元田〔作之進〕博士、丹羽〔清次郎〕氏と小松〔武治〕氏も見えていた。〔帝国〕大学の山川〔健次郎〕総長も嵐を冒してかけつけた。ワイコフ、オルトマンズ〔明治学院教授〕の両博士、熊野〔雄七、明治学院幹事〕氏は汽船まで送って呉れた。横浜在住の友人らも見送って呉れた。雨も風も烈しく……そのうち出帆の時刻も切迫したので、私らは雨の中をハンケチを振りながら波止場で見送っている友を残して乗船し、こちらは帽子を振って甲板上から答えた。今日は船出するには誠に陰鬱な天候である。……船中で本多〔庸一〕に会った。船はプリンセス・アリスと云い、大きく立派で、船の設備も相当である。二等室は一等室に比べて稍狭いだけで、普通の船の一等と何等異なるところがない。昼時、本多と私は食卓に着いたが余り長居はしなかった。外海に出るや否や波は可成りに高く、私は船酔ではなかったが、三時間の安眠をとった。本多は私よりも早く床に就いた。双方共に晚餐には着かなかつた。」

五日の午後一時に神戸に上陸し、同夜神戸出船。七日長崎入港。ここで乗船した者のうちに亜米利加公使も居たので、出帆の際には長崎港に碇泊中の伊太利駆逐艦マールコ・ポロ号は亜米利加の国歌を奏し、アリス船の音楽隊もいくつかの楽曲を演奏した。先生が首遊の地、上海に上陸されたのは九日木曜日の朝である。

「本多と私は基督教青年会〔以下単に青年会と記す〕に赴き、ルイス氏〔主事〕外数名の清国人指導者に会

った。……私らは〔日本郵船会社の〕黒川〔新次郎〕氏の案内で市中を見物してから、郵船会社に戻り、それから領事館で松岡洋右氏と木村〔斉雄〕氏に会い、初めて奉天会戦の勝報に接した。露軍は退却し、日本軍は盛んに追撃中。……夕食後、私らは北京路の青年会館に帰り、……私は英語で彼等のために一場の演説を試みた。日清関係の緊密なること、日露戦争の目的とその結果の予想を語ったところ、私の趣旨を諒解したものと見えて、彼等は拍手を以て答えた。聴衆は五、六十名。」

先生が日露戦争に触れたのは上海の青年会を以て初めとする。翌十日は奉天会戦の詳報を手にせられた。

「朝刊紙は奉天大会戦の詳報を載せているが、日本軍の勝利は殆んど圧倒的だった。露軍の両翼は降伏せるもの如く、鉄道は奉天以北約七哩迄も破壊された。彼等は東北へ退却を余儀なくされた。奉天は昨日の正午までに占領された。敵軍の損害は十万人以上と伝えられている。日本軍万歳！……露西亜士官若干名がこの船で帰国する由、なお三等には二百人の露人〔兵？〕も乗込んだという。」

「三月十一日、土曜日。昨日の午後から雨は降り続けている。寒くはないが不愉快な朝。大勢の乗客、多くは露西亜人である。露西亜の婦人らは耳環をつけ、身なりも違う。昨夜一人の誠に大漢の露軍の将校が家族を引連れて乗船した。」

船は十一日の正午に上海を出帆した。翌十二日は安息日。「波は静かだが終日曇天。濃霧甚だしく警笛は五分毎に鳴らされ、船足は緩い。」外船の習慣で日曜日毎に必ず礼拝が守られる。

「あさ礼拝は食堂で行われ、加奈陀に帰る宣教師リー氏が司会した。彼はC・M・S・〔英吉利国教会伝道協会〕の人である。祈禱書を朗読し終りに簡単な説教をしたが、仲々の上出来であった。私は礼拝を守って豊かな気

分になった。出席者は約三十名。五人の宣教師が同船しているが、そのうち一名はスカンディナヴィア人である。彼等は順番に礼拝を司会する手順になっている。」

十五日、水曜日。先生は始めて船中で入浴して香港に上陸、直ちに領事館を訪問して奉天会戦の大捷を喜ばれた。それから英吉利人の青年会を訪れ、主事スウザムと面晤された。香港は先生の眼に「上海よりも一層西洋的に」映じたことであつた。

「三月十八日、土曜日。もう熱帯の氣候だ。私たちはまた洋服を着換えた。多くの旅客は白衣を用いている、海は静かに、船は日に三百五十哩(マイル)も進み、絶好の航海を続けている。シンガポール入港は明後日正午の予定。

「碧空と大海原のほか見るべきものもなく、来る日も来る日も誠に単調である。甲板は旅客で満員、彼等は長椅子に横たわり、子供らはそれぞれ戯れている。本多は又々昨夜虫に刺された。私らの船室は三人で占められているが、虫に攻められるのは本多だけだ。不思議。」

そのころ先生の通信に「香港よりは又乗客を増し只今は第二等のみにても百二十人位にて甲板上の賑かさは中々筆紙に尽し難く其光景頗る奇妙にて」とあり「乗客中に露国の婦人数人乗込居候が、彼等の不行状なるには、驚人申候。彼等はスモークングルームに出入して煙草を喫し、酒を飲むのみならず、男子と相交りて勝負事を致し居候。彼等は旅順の落武者(?)共に候が奉天の大敗北を聞きては嘸落胆するならんと思ひしに中々左様な風なく実に平気なものに御座候」とて呆れ果てて居られる。

三月二十日、月曜日。シンガポール入港。碩田館で入浴して、「鯛の刺身、塩焼、潮、松茸、味噌、香の物で」夕食をとられた。二十二日、水曜日、卑南上陸(ピナ)。二十七日、日曜日、セイロン島のコロムボに上陸してそこ



の青年会を訪問された。二十八日、火曜日、コロムボ出帆の翌日先生らはバルチック艦隊を見たのだが、誰もそれと断定出来兼ねた様子であった。

「〔三月〕廿九日の夜遙かに探海燈の空中に輝くの見申候処、乗客一同甲板に出てソレ日本艦隊が来たと言  
う者もあれば、否あれはボルチック艦隊なりと論ずるありて議論区々なりしも唯遠方より探海燈をアチラコチ  
ラへ向けるのみにて此方へ近かよらず、其中に東西相別れて影も見えず相成申候、果して何れの軍艦なりし  
や」

長い航海中には時に退屈を破る試みも工夫されるものである。

「昨日は四月一日、エプリル・フルス・デーの事として何者の企てか知らざれども、掲示場に一のノウチスが  
出申候。其趣意に曰く、「昨夜船客の一人飛び魚を捕えたり、其長さ六尺あり、木戸銭拾銭、但其収入金は海  
員救済金へ寄附致し可申候事」一同無事に困み居候事故、我も我もと先を争うて木戸内に這入りて見れば、何  
ぞ凶らん、カラ箱の中に一尾の鯨の干物あり、其の背に山鳥の尾が指込んで有之候。然して其上に説明あり、  
曰く、「此魚不幸にして長さ六寸に縮み申候。四月一日」と。是を見て初めて成程今日はエプリル・フルスな  
りと心付て、他の人をダマさんと勉め、段々見物人も有之、六円以上の収入有之候由に候。(四月二日亜丁に  
て)」

四月六日木曜日、スエズ着、翌七日ポートサイドに進み、午後八時に同港を出帆して地中海に入った。八日、  
土曜日になると先生は明日の礼拝に話すようにと懇望された。

「天氣が良く、海は静か。昼ごろリー氏が見えて明日の礼拝に話をするようにと依頼した。私は承諾した。喧

曠のうちに午後と夜分を明日の準備に費し、眠に就いたのは夜半過ぎであった。」

四月九日の安息日は航海第五回目に当り、第一回の説教者は宣教師リー、第二回は宣教師ブレン、第三回は宣教師ベル、第四回は宣教師マックレーガン、第五回が井深先生という順序。

「今日は昨日に勝る好天気。礼拝は午前十時に始まり、食堂は大凡満員。一等からの出席者も可成りにあった。リー氏が礼拝を司会した。私は「戦争と日本に於ける基督教」に就いて三十分ほど語った。礼拝ののち数名の聴衆が進み出て謝礼を述べた。午後私が甲板に出た時には更に多くの船客が謝意を表した。」

四

四月十一日ナーポリに上陸、十二日、安息日に羅馬着。先生はこの日教会で二度話をされた。

「午後私らはクラーク博士の客間で話すよう招待された。可成り多くの英米人が来た。本多は日本の現状を語り、私は戦争の基督教に及ぼす影響に就いて話をした。夕食後私らは再び伊太利人の教会で話をした。会堂は超満員。聴衆は少なくとも六、七百に達したに相違ない。私は日本に於ける基督教の現状と戦争の原因に就いて語った。クラーク博士の通訳。聴衆は傾聴したばかりでなく衷心から拍手喝采をして呉れた。彼等は日本に対して同情を寄せているもののように見えた。」

先生らは四月十七日、青年会に行つて一場の演説を述べ、十八日には伊太利の新聞社から会見を申込みました。

「伊太利新聞パトリオの記者は通訳を連れて会見を求めた。私らは三十分ほど雑多な問題に就いて話をした。その節私は露兵の捕虜の写真を出して見せた。」

「四月廿日、木曜日。鉄道従業員の罷業は未だ継続中。わが会見記が今朝の新聞に出ている。……アントニオ・カミールロなる一伊太利工芸家が来訪して日本に祝意を表するためとて我等にペン軸を贈った。彼は会見記を読んで大いに興味を感じたのである。」

四月廿一日羅馬を出発して先生らが巴里に着かれたのは二十三日の日曜日であった。基督教青年会同盟万国大会の会期は二十六日から三十日迄。これは一八五五年に初めて組織された万国基督教青年会同盟の創立五十年を記念するための大会である。代議員七百二十名で、代表された国は二十数箇国にも及んだ。日本の代議員は本多庸一、井深梶之助、五来欣造、ゲーレン・フィッシャーの四名。二十七日に井深先生は日本の基督教青年会同盟を代表して一場の挨拶を述べられたが、これを聴いた本多は「その満堂の拍手を受けたる良演説を喜んだ」ということである。次にフィッシャーの報告文を引用しよう。

「この大会の最も意義深い出来事の一つは日本代表に対して衷心から歓迎の意を表明したことである。以下は井深博士が大会に齎した短き挨拶の一節である。「御承知のように、この時局下に私共が日本を離れるのは誠に容易ならざることでありました。然しこの大会の重要さを思い、私共は万難を排しても出席出来ましたことを感謝するものであります。私共は日本の基督教青年会からの挨拶のみならず、「我国は今や欧羅巴の一大強国と交戦中にも拘らず、個人として、基督信徒としては世界の国民と平和のうち在る」とのメッセージを呈せんとするものであります。私はあらゆる国の代表者と握手出来たことを喜ぶ者でありますが、就中、露西亜のヘルマン・リツイウス牧師の手を堅く握ることが出来たことを喜ぶものであります。……私はこの困難なる時局に際し諸君の我等に示された同情に対して衷心より謝意を表明せんとする者であります。最後に私

は永遠の平和の速かに来らんために、合せて秩序の成就せらるるの時、凡てが正義の上に置かれるようにとの我等の祈りに参加されることを願う者であります。」

井深先生は自らも次のように記して居られるが、いかにも「基督教化された武士」らしい人柄がよく画かれている。

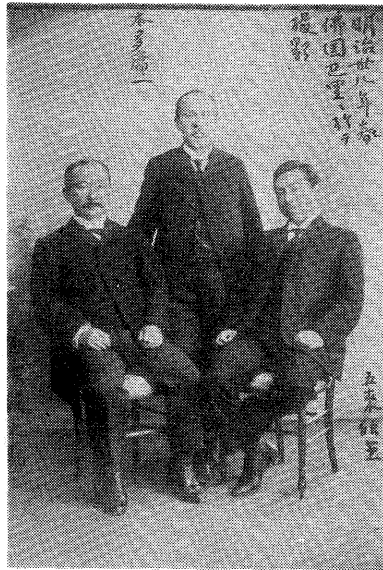
「日本の代議員として大会に挨拶を致すのが私の責務であった。私が演壇に立った時、聴衆は烈しく拍手喝采を送って止まず、数分の間私は語り始めることも出来なかつた。彼等の日本に対する同情は深くまた自然である。それに就いては疑いの余地がない。私の挨拶の要点は、一言にして云えば、日本は欧羅巴の一大強国と交戦中であるが、個人としてまた基督信徒として、私共は全世界の国民と平和のうちにある。故に私は眞の兄弟の印として露西亞のリツイウス牧師の手を堅く握つたことを愉快に思う。私共日本人は戦争の起つたことを深く悲しむ者であるが、速かに永遠の平和の来らんために祈る者である。最後に私は眞の平和の為に、そして秩序の成就されるの時、すべてが正義の上に置かれるように祈ることを彼等に求めた。私が挨拶を終えた時リツイウス牧師は進み出て前の如く私の手を堅く握りしめた。これを見た全聴衆はしばらくの間歓声を発し、また拍手喝采して止まず。恐らくこれは大会中最も顯著な出来事であつたであらう。」

井深先生の「基督教化された武士」としての他の一面を伝える出来事がこの大会最後の日に起つた。

「大会の最終日も終らんとするころ露西亞国教会の一大佐が挨拶を朗読した。その前に彼は聖ペテルスブルクの基督教青年会の亜米利加人の主事と一人の露西亞人と共に私のところに見えて、自分が挨拶を朗読する間私に演壇を降りるように懇願した。これは誠に奇妙な要求であるから、私はその理由を尋ねた。すると彼の言い

分は、若し私が壇上に席を占めて居れば、聴衆は私に彼の露国の大佐との握手を求めるかも知れぬ。若し彼が日本人と握手した事が聖ペテルスブルグに達すれば軍職を剝奪されるというのである。益々以て奇妙な理由である。私は壇上で彼との握手を欲するものでもなければ、また欲せざるものでもない。若しも彼が握手せんとすれば私は喜んで之を受けるが、若し彼にして欲しなければ、私は敢えて握手せんとするものではない。然し彼の挨拶中に私は座を外すことを快しとしない。中座は正しいことではない。私個人としては中座することに何等異議を挟むものではないし、また実際私は壇上に居りたくもない。然し私は万国委員として日本の代議員として、大会議長の招きによって壇上に座を占めている者であるから、正当の理由なくして私の権理を破棄することは出来ない。更に我等は凡て主に在る兄弟として大会に出席している者であるが、文武その他の公式の資格を以て、出席しているものでないことを附加した。若し何人と雖も何らかの理由で、主に在る兄弟と握手が出来ないとすれば、その人は大会に出席せぬ方が宜しい。私共が廊下で論争していると偶々紐育の〔青年会総主事〕モース氏が通りかかったので、彼等は同氏を引留めて己が言い分に私を説服せしめて貰おうとしたのである。モース氏は事情を聴取した後、彼等に同意する代りに、若し私が貴君の立場にあつたら、私は壇上を去らないと語った。その後、彼等は言うべき理由がなくなったので、件の大佐を壇上に招じ入れた。大佐はせかせかしながら挨拶文を朗読し終つて、件の米人主事がそれを独逸語に通訳する間、壇上の後方に座を占めていた。彼は通訳が済んで静かに壇上を去り幕の後に隠れてしまった。これは馬鹿馬鹿しい話である。その後、モース氏に会つて私は彼の亜米利加流の仲裁に謝意を表した。彼曰く「今度は私共の権理が兎に角通つたね」と。

巴里大会は四月三十日の日曜日トロガデロ大会館に於て基督教青年会万国同盟創立五十年記念式を以て終った。「会場は満員の盛況で出席者は少なくとも七千人に及んだ。音楽は特によかった。この会合は大会に適しい最高潮であった。」



左より 井深幌之助、本多庸一、五来欣造

五月二日の火曜日には巴里大会に出席した記念として先生は本多庸一、五来欣造の代表者と撮影された。翌三日の朝先生一行は巴里を発し、その日の午後六時に和蘭国ザイストに到着された。

「私共の宿所はキンダー・パンションで、本多、フイツシャー、デイヴィス〔京都同志社大学教授ジェローム・ディーン・デイヴィスの息、のち日本に渡り青年会の主事を勤めた〕に私は同室。……………」

夜モラヴィア派教会で開かれた。代議員は百余名で大約三十国より集った。会堂の簡素なことは羅馬加特力教會に比べて驚くべき相違である。会期は午前九時より十二時半まで、午後は四時から六時まで。用語は独逸語と英語で、巴里大会より一箇国語だけ少ないから、それだけ怠屈さも少ない訳である。……………本多は聖書研究に就いて朗読演説をなし、私は「新東洋と西洋に於ける学生基督教青年会の責務」に就いて演じた。また同會議の婦人部で私は「日本に於ける女子学生とその精神的必要」の演題の下に約三十名の代議員のために語つ

た。

「日曜日〔五月七日〕の夜モット氏は「指導者の代償」と題して力強い演説をなした。彼は語る前に次回の大会費用の予約を求めたところ、数分にして六百八十四磅の応募金に達した。」

この会議の席上で次回の大会地を東京と定め明治四十年に開催することになった。「基督教週報」は「ザイストに於ける井深棍之助氏」と題する一文を掲げて先生の活躍ぶりを次のように報道している。

「学生基督教青年会同盟の大会は本年五月三日より七日に至るまで五日間和蘭ザイストに於て開催せられ、吾人は其大会の情況、殊に我代表者が同会に於ける運動の如何を知らんことを切望せしが、此頃始めて其詳細なる報告書を手にする至れり。

「同大会に出席したる議員の数は百四十人にして、代表せる国は三十ヶ国なりと云う。此世界的大会の席上に於て井深氏は特有の雄弁を振り、熱血の精神を吐露し、我国の爲め、殊に我国伝道事業の爲めに弁ずる所ありき。氏は先ず冒頭に於て大会の開會地たる和蘭(マコ)と日本の關係を述べて曰く、此兩國は過去三百年來の親交国にして、ペリー以前に於て既に我國民は蘭語を学び、蘭學を修め、和蘭を通じて西洋の學術技芸を輸入したり。加之、和蘭は我國率先の宣教師たるフルベッキ博士の誕生地にして、同博士が我国に尽したるの功少なしとせざと。次に氏は日露戦争と基督教の關係に論及し、國民の思想を分析して、無教育の人民は、名義上の基督教國（露國）の行為を以て直ちに基督教其者の主義と速断し、従つて基督教の勢力に反抗するに至るべく、又た教育あるものの中には、「木は其果に依て知らる」との原理を採り、若し非基督教國たる日本が、戦争に於ても、平和に於ても、人道を守り又學術の応用をなし得るものとすれば、露國の如き國家を造出する基督教を採

用するの必要いづくにあると云うものもあらん。斯の如き思想の傾向を観察すれば、前途頗る暗黒なりと雖も、是れ一方の觀察なり。又た他の一方の事実をも觀察せざるべからずと論じ、更に進んで開戦當時に於ける宗教大会の態度に及び日露戦争は国家と国家との戦争にして、個人対個人、宗教対宗教、人種対人種に非らざることを証明し……、我國民が西洋基督教国に対する深厚なる心情を弁証せり。夫れより戦争其ものとの与えつつある結果を陳べ、日露戦争は日本人の長所を發揮せると共に、……〔中略〕……従來の武士道に洗礼を施して、基督教的武士道となすに非らずんば、將來の日本國民をして健全ならしむる能わずと論じ、戦争も亦国をして敬虔の念を生ぜしめ、……東郷大將が其戦況報告の中に屢々天祐の存在を認識せるは、人事に神の摂理を感ずるに至れる証拠なりと云えり。

「氏は終りに臨〔ん〕で、青年会事業の必要を論じ、支那伝道の急務を論じ、明後年「日本に於て開かるべき大会に歐洲有為の人物の來会せんことを希望する旨」を以て論結せり。

「井深氏は我基督教徒の多数が外国に於て言わんと欲することを言えり。三十ヶ国を代表せる百四十五人の議員及び数千の傍聴者は大いに悟る所ありしなるべし。我國民の感情を適當に外国に紹介するに當りては、数千の外交官よりも数百の漫遊者よりも正直と誠実を以て標榜せる基督教徒、殊に内外人に信用ある井深氏の如き人の証言を以て最も力ありとす。吾人は井深氏がザイストに於ける熱心なる議論を其到る處に於て発表せられんことを希望す。」



その後、先生らは白耳義国アントワープ、ブリュッセルに至り、ブリュッセルの青年会では五百名以上の聴衆の前に語り、「彼等は熱心に傾聴して日本に多大の同情を寄せ」るのを目撃した。十二日は和蘭国ハーグに着し、翌日は基督教青年会館で五十名ばかりの上流社会の紳士貴女のために演説をなした。

「一、二名の国務大臣と総理大臣の二令嬢も出席した。私は家にて〔註・必ずしも先生の家庭の意味ではないと思われる〕準備していた演説をなし、本多は日本の基督信徒が戦時下困苦の裡にありながら感謝すべき理由に就いて語った。何となく聴衆は余り感応的でないように感じられ、私はその理由がわかった。この和蘭には、殊に金融上露西亜と利害関係のある富裕階級の間には露西亜に対して可成りの同情を寄せている。私は痛いとところに触れた。恐らく、ある政治上の理由で彼等は自由に己が感情を公然と表わせないのだ。いずれにせよ、この聴衆はこれまで私が演説した限りでは最も感応力のない聴衆である。集会のうちカルコーン氏は我等が余りに政治上の話をしたために失望したと告げた。マケー男爵は我等を晩餐に招いた。……私はカルコーン氏の不満を話したところ、敢えて歯牙にかけるなど答えた。逆に、男爵は、若し貴下等が日露戦争の話をしたなら、彼等は貴下等の話を出来なかったというでしょうと語った。」

先生がどんな演題で話されたか詳かではないが、「余りに政治上の話をしたために失望した」とあるところを見ると、恐らく「日本に於ける基督教の現状」に始る演説であったであろう。その内容は、信教の自由が憲法に於て許されていることを中心にして、次は「日本に於ける新文明」の項で、日本が文明国である所以を述べ、「東洋に於ける日本の指導権」のところでは、日本は東洋で唯一の新文明を有する独立国である事実を掲げて、当然東洋の指導者の地位に就くべき次第を説明したものである。更に日本が東洋の指導権を掌握することは東洋

を西洋から封鎖することを意味せず、清韓兩國をして特に日本の新文明の水準に達成せしむる目的であるから、ある種の人々の主張する「黄禍」<sup>ユロクガ</sup>は事実無拠であること、日本をして東洋に於ける指導権をとらしめないとすれば、それは日本に新文明を放棄せよと命ずると同じ結果になり、日本は古い攘夷に復帰せねばならぬ。清韓二国は日本の近隣国であるから、西洋諸国にして万一この二国の独立と領土保全を侵すようなことがあれば日本は拱手傍觀を許されない。実に東洋は今や「白禍」<sup>ホクイトホリ</sup>の危険に瀕していると論及し、「日露戦争の真相」として、日本は好戦国ではなく、露西亜が戦を挑んだ事実を挙げ、「日本は独り己が安全と東洋永遠の平和の為のみならず、広く自由を愛好する凡ての国民のために戦いつつある者なり。日本は世界の正義と人道と文明の為に戦に従うものなり。これぞ日露戦争の目的にしてまたその意義なり」と結んである。

先生らは、和蘭国が徳川時代に日本とは特別の關係にあつたから、期待するところもそれだけ多かつたが、何ぞ図らん、ハーグの人々は先生らの到来を寧ろ迷惑に感じたのである。このことに就いて「本多庸一伝」は「和蘭は……露国と經濟關係深きと尙皇室の間も近きと、更に日本の武威昂ると共に蘭領印度領有の危険を感じるに至りて薄気味悪く思われたらしい」と記しているが、その見解は妥当である。先生らがハーグで演説されたのは五月の十二日で日本海の大戦前二週間のことである。後日先生らが日露講和談判全権委員の小村寿太郎、高平小五郎を亜米利加合衆国ニュー・キャッスルの旅舎に訪問したとき、談たまたまハーグの事に及んだ。「すると彼〔小村男〕は、それはボルチック艦隊がジャヴァに寄港することを恐れて和蘭はある嚴重な注意を払っていたからねと話して呉れた。恐らくはハーグの人たちは私共の演説を聴きながら、その事に思いを寄せていたのである」と先生は記している。

十二日の夜先生らは青年会で演説をしたが、彼等青年会員は遙かに感応的であつた。演説ののち握手を求めて進み出た者も大勢あつた。通訳は例によつてマケー男爵。五月十四日はアムステルダム自由大学の学生四、五十名のために話をされ、そこから独逸国コロンを経てコブレンツに至り、汽船でライン河を溯航してビンゲンで下船、汽車でハイデルバークに辿り着いた。帰路シュツツガルトに寄り、そこでザイストの学生青年会大会で知り合つたグンデルトの出迎えを受けた。

「グンデルト氏は直ちに父の家に連れて行つて呉れた。彼は立派な果樹園と花木を持っている。日本の芍薬が立派に育っているのを見て私は驚いた。シュツツガルトはウルテンバークの首都で人口二十万の大都会である。

「私はここで二回演説をした。一度は青年会で、他は学生だけのために。前者の集会には千人近くの聴衆で、さしにも広い講堂も満員であつた。この青年会館は独逸随一のものでその建築には百万馬克を要したという。「エルゼツサー氏は我等をワツハター・ラウデンバーハと称ぶ、青年会の事業に深い関心を持っている婦人のところへ連れて行つた。彼女は青年会事業の良き理解者なるワルダゼー伯爵の義妹である。この婦人は伯爵について興味ある話をして呉れた。彼の死後その机の引出しの中に日本が露西亞と戦う時の作戦計劃が発見されたが、その計劃は実に今度の日本軍の軍事行動と寸分違わず符合した由。」

このワルダゼー伯爵こそは北清事変の際聯合軍の総指揮官として派遣された独逸の元帥で、大いに日本軍隊の眞価を称揚して、わが国の留学武官にも一方ならぬ便宜を与えた由である。彼は北清事変の当時、既に日露戦争の遠からざることを予想していたのであつた。

「夜〔五月十九日〕私らは音楽堂の一室で学生のために話をした。グンデルト氏が通訳をして呉れた。私は「日本の教育制度と学生生活」に就いて、本多は「我が改宗」に就いて語った。序でながらグンデルト氏の父は印刷屋で、内村鑑三の「余は如何にして基督教徒となりし乎」を独逸語で出版し、既に三版に及んでいる。数名の学生が同書に就いて私に語った。私はグンデルト青年と長いこと話し合った。彼と、婚約した妻は日本の基督教会について多く訊ねた。彼等は宣教師として日本に渡ろうとしているのである。」

シュッツガルトの人々は余程先生一行に関心を持ったようであるが、在日三十年に及んだ名医学者のエルウィン・ベルツを出した処だけに、彼等は日本に関する相当の知識もあつたのであろう。

ここから先生らは瑞西国のバーゼルに赴き、南独逸のミューニヒに向い、更に奥太利の首府ウィーンからハンガリヤの首都ブダペストに達したのが五月二十六日の夜。多少英吉利語を解する二人のハンガリア人が乗合せ、彼等が大いに心を日本に寄せるのを知って先生らは喜ばれた。

「私共は手と顔を洗ってから直ちにスコットランド伝道所に赴き十分ばかりの演説をした。そこで私共は宣教師で倫敦トラクト協会の代理人のウェブスター氏に面会した。……ウェブスター氏は私共を伴ってフォーン・スツレッシー氏に至った。私共は彼の家族とその友人で露西亜嫌いの紳士に紹介された。この紳士は日本の成功をいたく喜び、ハンガリア人は二重の意味で日本の同情者である。第一は我々は日本人と同胞であり、第二に我等は露西亜を以て共同の敵としているからであると語った。

「夜、本多と私は博物館で演説をした。……翌日はフォン・スツレッシー氏の案内で下院議長、宗教教育大臣其他に紹介された。」

本多庸一がここで病気に罹り、先生らのウィーンへの帰還も延期されることになった。先生は二十九日に日本海大海戦の報道を知られた。

「本多は快方に向っているが医師は外出を禁じている。ウェブスター氏は私を伴ってストラウツ教授宅に至った。私共は朝餐に招待されていたのである。一人の土耳其の弁務官も同席していたが、彼の話の中に土耳其が強大なる文明国になり、然も「東洋」を失わぬ方法は如何にと問うた。私は、日本の成功の秘訣は代議政治の採用にあると答えた。彼曰く、左様、それは難事です。土耳其で我らが本心を吐露するのは誠に危険ですと。私は更に如何なる国も国民の自由なくして強大にはなれぬと附け加えた。」

五月三十日先生らはウィーンで牧野伸顯公使から日本海海戦の公式電報を見せて貰った。「場所は隠岐島附近、海戦は土曜日〔廿七日〕の午後から月曜日〔廿九日〕まで続き、決定的勝利が日本に齎らされた。露西亜艦船十二艘沈没、四艘鹵獲、日本艦船の損害極めて軽微、素晴らしい大勝利。」先生らはウィーンの青年会でも演説をされた。通訳者はヘックラー教授。六月二日伯林に着して青年会の宿舎に旅装を解かれた。

「街路と窓は旗と花で賑々しく飾立てられ群衆はそれらを打ち眺めている。独逸皇太子妃殿下が明日公式に入京なされるのである。評判の高いウンター・デン・リンデンは見たところそれほどでもない。ウィーンのリングストラッセの方が遙かに立派である。他の街路もさほど広くはない。有栖川宮西殿下は只今伯林に御滞在中である。独逸皇帝は停車場まで殿下を御出迎え申上げ、皇太子御兄弟は殿下を御宿舎まで護衛の任に当られた。これは独帝としては特別の儀礼で目下大評判である。ある新聞によれば、これは天皇陛下に暗黙の裡に日本海軍の大勝利を御祝い申上げる意味であろうと。」

六月五日ウィッテンバーグにルッターの旧居を訪い、そこからハルレに赴かれた。ここで先生らはワーネック教授を訪い、独逸福音教会の宣教師らが高等批評を以て、日本の基督教会に及ぼした悪影響に就いて談ずるところがあった。

「私はワーネック教授を訪問した。彼は健康勝れなかったが、私共を招じ入れて十五分ほど話をした。尊敬すべき上品な七十の老翁だが、仲々の元氣。私共は独逸福音教会が日本に宣教師を送り、聖書その他について極端な意見を吐くことの弊害を述べたが、彼は強くそれを否定した。グンデルトは甚だ失望の態。

「夜は二百人の学生に演説をしたが、例によってグンデルトが通訳の勞をとった。集会は青年会宿舍の大講堂で行われたが、聴衆は大学生と教授に限られた。……私共の友は大いに満足の様子である。」



ランデイス

極端に排他的でまた貴族的である。彼等は実業に従事するような青年輩と交ることを嫌うように見える。」七日伯林に還り、伯林大学で講演をされたが、三百の聴衆は傾聴したばかりでなく拍手喝采をも送った。八日にはドレスデンに赴き、賜暇休養中の明治学院教授ヘンリー・ランデイス夫妻を訪問された。

「停車場にランデイス氏が待つて居た。彼はひどく変った、丸で老人のように見える。頭髪がすっかりなくなった。」

欧羅巴大陸の大国を遍歴された先生らは六月九日丁抹の首都コーペンハーゲンに到着された。

「七時〔午後〕少し前に到着した。海峡を渡るのに私共は二度汽車を乗換えねばならなかった。モルトケ伯爵

は停車場に馬車を廻して呉れたので、直ちにそれに乗って伯爵邸へ向った。

一人の新聞記者が停車場で私共を迎え馬車に同車することを求め、道すがらいくつかの質問を發した。

伯爵は独り住居である。古い立派な客間が幾つかあり、壁には立派な絵が掲げてある。私共が夕食を済したころ、伯爵は帰宅して長々と話をし、共に祈った。部屋は静かで住心地がよく、私はすっかり身体が休まった。

「六月十日、土曜日。朝食ののち、伯爵の司会で家庭祈祷会が行われた。彼には家族がなく、四人の召使だけである。彼等は四人とも祈祷会に列した。伯爵は立派な基督教紳士である。

「……ウッシング牧師とその夫人が晩餐に招かれた。食後私共は青年会へ歩いて行った。集会室は既に満員で八、九百人の聴衆。通路に立っていた人々も相当見受けられた。ウッシング牧師が司会しました通訳の労もとった。彼等は終始一貫して誠に熱心に傾聴して呉れ、演説の終った時、彼等は衷心より拍手喝采を送った。これは丁抹人にとっては珍しいことの由。モルトケ伯は大いに満足された。演説ののち私共は食堂でお茶に招かれ、その席上でコーペンハーゲン来訪の記念にとて小さい丁抹の国旗を贈られた。今回の集会はこれまで私共の持った集会のうちでは最善のものであった。

「六月十一日、日曜日。本多はメソヂスト教会で説教をするために出掛け、伯爵はウッシング牧師の教会に出



モルトケ伯爵

かけた。私は近くのマーブル教会に行った。会堂は立派で満員であった。無論私は言葉がわからないが、礼拝は簡素で音楽が良かった。それにも増して私を喜ばせたものは、凡ての階級の人々が皆教会に出席したことである。大勢の軍人も青年もいた。恐らく貴族階級はいなかったであろう、少なくとも私は立派に着飾った男女を多く見受けなかった。

「午後というよりも夕刻に、モルトケ伯は五十人ばかりの人々を応接室に招いて私共の話を聴かせた。私は日本に於ける伝道事業一般の成功と将来への希望に就いて語り、本多は伝道事業の困難なる諸点を述べた。演説のち彼等は質問を發し、私がそれに答えた。モルトケ伯爵は私共のために凶るところ多かつた。彼は誠に珍しくも立派な基督教紳士である。露西亜のニコライ男爵、和蘭のマケー男爵、瑞典のバーナダット公爵、丁抹のモルトケ伯爵は皆選ばれた人達である。」

先生の一行は六月十二日コーペンハーゲンを出発して途中ゴッテンバーグに下車し、翌日諾威の首都クリスチヤニア〔オスロー〕に到着した。そこから瑞典国の首府ストックホルムに向い停車場で秋月左都夫公使の出迎を受け、更にビョルカ・ソバイに赴いて、瑞典基督教青年会大会のために一場の演説をされた。

「朝、私はフリース博士の通訳で「日本に於ける基督教の現在と将来」と題して語った。夜は「わが改宗」と題して本多が語った。瑞典人は男も女も日本に甚だ興味を有し、躊躇するところなく我等に同情を表した。彼等は驚くほど懇切・篤実な友人たちである。基督教の同胞主義の現実には基督教真理の有力なる証拠の一つである。」

先生一行は六月十七日にストックホルムに戻り、十九日には「靴を修繕に出したので一日中部屋に閉ぢこもって



手紙を書いたり新聞を読んだりした。」翌日の夕刻先生らは青年会で講演をした。

「七時半にフリース博士が連れに来た。一通り会館を見たのち、私共はフリース博士の通訳で五百人ばかりの聴衆に講演をした。彼等は特別に傾聴したばかりでなく、私共の話が終ったとき長いこと拍手喝采をして止まなかったのので、私共は又候壇上に登って謝意を表さなければならなかった。のみならず、フリース博士が私共に一言謝辞を陳べた時は全聴衆が起立し、集会ののちに大勢の人々が握手を求めた。」



ストリンドベルグ

この聴衆の中に、あの有名な作家アウグスト・ストリンドベルグが居たのだが、井深先生はそのことに触れて居られないところを見ると恐らく御存じなかったことであろう。後年、万国学生基督教青年会同盟会長のカール・フリースが日本基督教青年会同盟総主事の齋藤惣一氏に宛てた書翰のうちに「一九〇五年ストックホルムのY・M・C・Aで本多、井深両氏の講演を聴いた瑞典の有名な作家アウグスト・ストリンドベルグは日本に於ける基督教の誤解が全く解けた」と記している。先生は羅馬を初めとしてヘーグでも話された内容に就いて講演され、本多は「我が改宗」を語ったものであろう。ストックホルム滞在中先生は王宮内に開かれた臨時議会の開院式に列して老国王の臨御の模様を特筆している。

六月廿四日諾威クリスチャーニアに赴き基督教青年会大会に出席するために、そこからドラムメンに向った。

「そこには大勢の人がいた。一人の牧師の話が終つてから、私は何か話をするようにと懇望されたので喜んで引受けた。彼等は私共両人を熱狂的に歓迎して呉れた。男女の青年達は余程外国人が珍しいものと見えて、私

は丸で左右に諾威の青年たちの護衛兵を引具して行列を作っているように見えた。宿舎に着いたのは既に夜の十一時近くであったが、仲々暗くならない。この真夏には夜がないのである。太陽は九時過ぎまでも没しない。十二時と云えば一番暗い時刻だが、私は戸外で楽々と新聞を読むことが出来た。これは誠に奇妙な体験である。」

大会中先生はルーテル教会の聖餐式に列して異様に感じられた。

「六月廿五日、日曜日。あさ教会で聖餐式が行われた。教会堂は満員。ルーテル教会の聖餐式は奇妙である。どうも羅馬加特力と改革派教会の合の子のようである。彼等は麵麩の代りにウェーファを用い、聖餐に与る者は麵麩と葡萄酒を手で受ける代りに直接口で受ける。なお麵麩と葡萄酒を受ける前に赦罪を受けるのである。」

「午後公園で屋外集會が催され、優に六千人が出席した。私共兩人は司會者、名士、音楽隊の控えている壇上に席を与えられた。数人の演説者あり、私は諾威人牧師の通訳で三十分ほど話をした。彼等は謹聴し時々喝采を送った。諾威人は誠に音無しいが、心の奥底は「国家の」独立問題に関して堅い決心の臍を秘めているのだ。」

先生一行は六月二十六日諾威基督教青年會同盟創立二十五年記念祝賀會に臨んだ。

「午前中教會堂で諾威基督教青年會同盟創立二十五年記念祝賀會があつた。式典は長く私は怠屈(つひ)を感じた。本多は日本基督教青年會同盟を代表して祝辭を陳べた。次に五百人を容れる食堂で祝宴が張られた。幾度か祝杯の辭の応答があり、日本とその代表者に対する祝杯の辭が熱烈な喝采の裡に申し出でられた。本多はそれに対して謝辭を述べたが、私にはもつと何か応酬せねばならぬような氣がしたので、私共の國語で成功と長生を祈

る心持を表現する言葉に「万歳」というのがあると云いながら、食卓の上に飾りたてられてあった美しい諾威の新国旗を両手に握り「Banzai for Norway!」「Banzai for Norway!」と叫んだ。祝宴場は喝采に続くに喝采ノ丸で嵐のようである。彼等は喝采して止まず、議長は、今度は日本語で万歳の発声を懇望した。然も椅子に上れと云ってきかない。私は彼等の拍手喝采の裡に「諾威万歳」を繰返した。司会者は私共に祝会の記念にとて件の小さい国旗を贈った。私らが別れを告げた時、彼等は万歳を三唱して呉れた。これ以上の真心と自然さは外に何物もない。」

当時諾威は瑞典から独立せんとする際で国旗も出来たてのころであった。先生が彼等の微妙な心理を把握し同情に満ちた軽妙の即席挨拶は、いたく諾威の人々を感動させたのである。もともと彼等は無口な、内気な国民で滅多に己が心情を表明しない民族であるが、然し彼等は真情のこもった親切な人達である。その彼等であつたなればこそ、井深先生の誠意と同情に応えたのである。

先生の歐羅巴大陸に於ける使命はこれで終りを告げ、六月廿七日クリスチャーニアを出発、そこからコーペンハーゲンに渡り、更にハンブルグに進み、白耳義国のリエージュで数日見物方々休養して七月九日の日曜日にアントワープから英吉利行の汽船に乗船された。当日の日記に「汽船は七時に港を離れた。英語が通じるので大いに気が楽になった」とあるが、この一文のうちに英語の通用しない欧羅巴大陸諸国で如何に先生らが不自由を感じられたかを窺知するに足るであろう。従つて旅行の計画斡旋は予め主として基督教青年会万国同盟が引受けたものであろう。先生らが伊太利羅馬から諾威ドラムメンに至るまで挨拶や演説をしたのは各地の基督教青年会、学生基督教青年会又は基督教会関係に於てであった。然も宗教団体を聴衆とした関係上、先生の演説も日本の基

基督教を主に語り政治問題は間接に触れたのである。これは基督信徒たる先生にして初めて成し得るところであった。

七

いま、先生らが三箇月に亘る大陸に於ける演説旅行を通観するに、ハーグの場合を除いては到る処で歓迎されている。それには、先生の手記にも現われているように、日本と日本人に対する好奇心も可成り手伝ったのである。然し、ただそれだけの理由で先生らが歓待されたのではない。先生の英語演説は正確にして上品、誠に堂に入ったもので、英語を母国語とする人々に伍しても優に一等地を抜くものがあつた。そして先生のなされた挨拶や演説にはよくその人柄が浮出されている。先生は滅多に自分を語り或は自分を押すことをせず、常に聴衆の立場に身を置いて語る流儀を選ばれた。それは単なる媚態と云うべきものではなく、いつも心情のこもった言辭に溢れたものであつた。その典型的の例を説者は巴里大会とドラマメンの諾威基督教青年会同盟創立二十五年記念祝賀会の挨拶に見たことであろう。聴衆の立場に己を置くことは理解を容易ならしめるの意であるから、先生の演説は多く実証的であり、それだけ語る者の主張を自ら容認させる結果となつた。説者はこの典型的の場合をザイストとストックホルムの演説に認めたことであろう。

先生や本多庸一は揃つて肥り型で日本人としても短身の方であつたが、風采は誠に立派で気品があり、どこか侵し難いところがあつた。これこそ「基督教化された武士」の風格であろう。この先生らが日本人の代表者としてまた日本の基督教徒の「見本」として彼等の前に立つて証言をする時に、彼等の日本人に対する好奇心、異教

国の基督信徒に対する優越感は臆て敬愛のころに変ったことであろう。読者はその場合を文豪ストリンドベルグに見たのである。「井深先生は顔がよかった」と述懐を漏らした教え子もあったが、蓋し明言である。先生のこの「顔」を彼等のみならず「人好きのする人柄」と賞讃するのであった。

幕末のころ練達の幕吏に接して「その一語一語が、眼差の一つ一つが、そして身振りまでが、すべて常識と、ウィットと、爛敏と、練達を示していた。明知はどこへ行っても同じである。民族、服装、言葉……までも違っていて、聰明な人々の間には共通の特徴がある」と語った露西亜の文豪イワン・アレクサンドロヴィッチ・ゴンチャロフの言葉は、そのまま井深先生にも当てはまるであろう。ただ先生の場合には、これに加えて神につける敬虔なる信仰と人生につける深い信念があった。それは神が宇宙の創造者にして支配者にいまし給うとの信仰と耶蘇の所謂二大誠命の確信である。この信仰と確信がいかで聴衆を動かさずに措こう乎。井深棍之助、本多庸一という二人の基督信徒によって、日本の国と日本の基督教界の気品が海外に於て、いやが上にも発揚されたことは疑うべくして疑うべからざる歴史的事実であろう。（昭和十八年六月十三日、五句節）

〔附記〕拙稿は未定稿であるから、このままの姿で、筆者が託されている「井深棍之助先生伝」の一章をなすものではむろんないが、今迄に入手した資料を以て、日露戦争当時のわが国情に処した基督信徒たちの活動の代表的の型を示すものとして記してみたものである。〔明治学院論叢第十四号昭和十八年九月〕

〔編者注〕筆者菊田貞雄氏の以上の論文の出典については三十九項目にわたって詳細に記されているが、ここには省略する。

## 日本宣伝にイムブリー博士と井深梶之助氏

中島久万吉

日露戦争当時桂首相の秘書官であつた明治学院出身の中島久万吉(男爵・齋藤内閣商工大臣)は桂首相と井深、イムブリー両氏の会見に至つた経緯と会見の模様などについて回想録「政界財界五十年」に、次のように記している。△編者▽

明治三十七年初夏の頃、神道と云わず、基督教と云わず、日本に於ける各宗教団体の代表者二百余名の多数者が、帝国ホテルに会合したことが有つた。夫れは帝国宣戦の大義を昂揚し、日本が極東の平和と東洋民族の安寧との為には國運を賭して戦うの已むを得ざるに至つた条理を宣明する為め、宗教家の立場から之を世界各国の國論に訴えんと

の趣旨に出でたものであつた。



中島久万吉

是に於て私は考えた。斯かる団体宣伝も結構だし、多数者に依る運動も亦固より悪くないが、何うかすると極くお座なりに扱われる嫌が無いではない。それよりも桂総理大臣なりが例えば我が国在任の外国宣教師中、内外が齊しく認めて斯人ならばと為す学徳高い人に向かつて、日露交渉の発端から遂に開戦の已むを得ざるに至つた経緯曲折を談じたものを、聴者たる其の宣教師の人から之を談話体にして外国の最も有力な新聞紙の二、三に發表する形式を取つた方が、寧ろ効果的かも知れないと考えたから、右の所見を桂首相に進言して同意如何を試みた。すると首相は私の予想した以上に賛成で、一とつ実行の方式を考えてくれと命ぜられた。そこで私は年来懇意の間柄でも有り、且つ我が基督教界の長老として殊に私に取つては母校である明治学院総理の井深梶之助氏を其の芝白金の邸を訪ね、具さに私の思う次第を陳べ、桂首相も賛成なる旨を言い添えて相談した。井深総理は寧ろ甚だ歡喜の態で、それはウィリアム・イムブリー博士に限ると言わる。実は私に於ても亦イムブリー博士以外に求めて其の人無からんと考えて来たような訳で、それでは時を移さずこれから早速にイムブリー博士に直談して見ようと、井深総理と共にイムブリー博士に往き、仔細を告げて其の奮起を促した。すると博士は決然として、夫れは基督教徒として勿論当然の使命でも有り、又た主イエス・キリストの精神にも適う所なれば、進んでお引受け致度し、桂首相にも宜しくと其の快諾を得た。

越えて数日、イムブリー博士は井深総理に伴われて永田町の官邸に桂首相を来訪した。私も其の会見の席に列した。桂首相は

日英協約締結当時の事情から説き起し、夫れは畢竟極東の平和と東方民族の安全とを期するの趣旨に出たものであるから、引き続き露國との外交交渉に当りても亦蹇々和平を希うの外に余念も無かつたが、然るに我れ一步を退けば彼れ一步を進め、我れ一を讓れば彼れ二を求むると云うふうには、終に極處に逼られて于戈相見るの余儀無きに至れるは、世界秩序の爲めにも亦遺憾至極で、今と成りては一日も速やかに日露の平和を克復し、兩國の民を戦苦より済わねば成らぬと切言したに對し、イムブリー博士は井深氏の通訳の下に幾んど一節毎に御尤々々と聴いて居られたが、博士も亦アメリカ、プレスビテリアン教会の宣教師として渡日以来の我國に於ける布教伝道の実績に就いて語り、本来神道仏教國の日本人民が新たなる基督教の教義を理會するの速やかにして且つ其の信仰の篤きには驚くの外無く、日本人を好敵國民など言はしめるも亦甚だしきもので、自分は維新開國の國是よりするも、新日本國民は世界の平和を愛好し人道の大義を尊重する國民であることを信じて疑わぬと述べ、逐一談話の要点を書き留めて辞去した。

其の後幾くも無く、イムブリー博士は「日本内閣總理大臣桂伯爵談話」と題し、当日交話の次第を極めて直截明快な文章に纏めて私に送つて來た。私は之を反訳して首相の閱覽に供し其の同意を得たから、更にイムブリー博士に逢うて之を外國の新聞紙上に発表する方法に就いて相談した。是に於いて博士は先ず之をロンドンに郵送し、スペクテーター紙上を借りて其の全文を発表した。すると忽ちそれが有力な欧米の新聞雜誌に転載せられ、各國識者の注目をも惹いたものか、殊に英米兩國に於ける相當階級の人士から、直接總理大臣宛に、対露開戦に於ける日本の動機と此間に處する日本政府の態度とが、更に広く一般に了解せらるる機會を得て大いに歎ばしいなどという同情に充ちた書面が、しばしば數は到來した。

このことに引続き、明治三十八年四月下旬にフランスのパリで催さるる世界基督教青年會同盟及びオランダのザイストで開かるる万国學生青年會同盟に、井深明治學院總理が日本の基督教青年會同盟を代表して出席することが起こつた。そこで私は井深氏と協議して、旅中苟しくも機會有る毎に桂總理大臣談話の趣旨を宣伝することにし、井深氏は之を快諾して、同年三月横浜を出帆した。後ちに聞いた話だが、井深氏がパリの基督教青年大會で日本内閣總理大臣桂伯爵に依つて宣明せらるる通り、吾等日本國民は世界の平和を愛好し人道の大義を尊重するの精神から、日露の戦雲の一日も速やかに収まらんことを祈りて止まぬ。庶幾くは満堂の諸君も亦吾等と斯の祈念を一にせられんことをと、熱誠溢れん許りの演説を試みた。すると席上に交戦國たるロシアの代表者も在つたが、其のロシアの代表者は感激の余りとして壇上に上がり、井深氏の手を握り締めて離さない。兩人は感極まって落涙する、満場は拍手を以て送る、それはそれは感慨の深い場面であつたとか。

イムブリー博士は其の後明治四十二年二月、論功行賞に依って勲四等旭日章を賜わつたと聞いた。しかし私は寧ろ有らずもがなのことと思つた。(中島久万吉著「政界財界五十年」昭和二十六年、大日本雄弁会講談社)

日露講和条約と小村寿太郎 明治三十八年井深樞之助英文外遊日記より

英國を去りアメリカに向かう

[1905, Sunday, August 6]

Honda advised me very strongly to call on or rather call up Mr. Matsudaira. I followed his advice and saw him at his boarding house in Kempford Garden.

We left 49 Bernard St. Russell Square 2.30 and came to the Waterloo Station. Mr. Asō and Mr. Sugimori came to see us off. The train left at 3.30 and arrived at Southampton at 5.20. We at once went on board a "tender" to meet the Steamer. We waited sometime for it and it was not after 8 o'clock before the ship started. The ship is full.

ニューヨークに到着

[Tuesday, August 15.]

It is raining hard. Rather wet day for the last day of the voyage. But they say we shall get in

New York this evening at 6 o'clock. We got into the

pier just about 7 o'clock. Messrs. Kawai and Ishikawa were sent to meet us and helped us not a little.....

We took a cab and went to the Nippon Club, 44 W. 85 th St. Kawai and Ishikawa came with us and talked late into the night. They do not both look very strong.

日本領事館を訪ね珍田氏の書簡を受取る

[Wednesday, August 16]

Kawai and Ishikawa called and we together went to the Japanese Consulate. The Consul Uchida received us kindly and handed us Mr. Chinda's letter with its enclosure. Mr. Ishikawa kindly offered to go to the Bank and get exchanged our money. We went to a Chinese Restaurant and enjoyed a Chinese dinner. Then we went to the Y. M. C. A. building on W. 23 rd St. Nobody whom we knew was there.



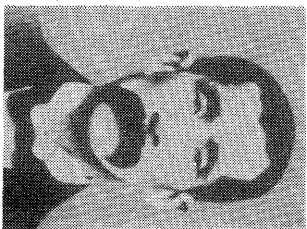
We found out also Mr. Mott was not in town. I went then with Mr. Kawai to the Dutch Reformed Church House on East 22nd St. Dr. Amerman was not there but Dr. Cobb was. I found several letters waiting for me in the office. We went over to the Presbyterian Building. Saw Dr. Gavet and Miss Dickie, Mr. Speer's secretary. I got some more letters. [Thursday, August 17th]

Wrote letters and mailed the small packages that I brought from Japan to several friends of my wife.

小村寿太郎一行を訪ねる

[Friday, August 18th]

We took the 10. 2 train from the Grand Central for Portsmouth, N. A. arrived at Boston a little after 4. Mr. Takasugi was at the station to meet us. We took 4. 44 train from the North Station and arrived here in Portsmouth 6. 40. We came to the Hotel Rockingham, which was recommended to us by Mr. Sakai in New York City.



小村寿太郎

After supper we engaged a carriage to take us to the Hotel Wentworth, New Castle, where Baron Kominura and his suite are stopping. We saw Mr. Sato [Aimaro] and Mr. Kumataro Honda, but the Baron was engaged and wanted to call on him tomorrow at 10 o'clock. The hotel is a large building but it is fully crowded. There are more than 100 newspaper reporters all anxious to catch the latest news of the peace negotiation. There are many ladies too. Nearly all the papers that I have seen here are pessimistic, but Mr. Sato seemed the other way. Has he any good reasons for his hope? The Envoys have adjourned till Tuesday next. The ostentatious reason given for it is an accumulation of the clerical business but the real reason is to wait for replies from Tokyo and St. Petersburg on the four points on which they can not agree: namely.

1. The cession of Sakhalin.
2. Remuneration for the cost of the war (Indemnity)
3. The surrender of interned warships in neutral ports.
4. The limitation of Russia's naval power in Pacific waters. Other points seem to have been substan-

tially agreed.

小村，高平両氏に面会す

[Saturday, August 19th]

We started for Wentworth, and while we were waiting for an electric car a gentleman came along in an automobile and invited us to ride with him to the hotel, as he was going to the same place. So we had a fine automobile ride. When we lighted from the automobile, I met Mr. Hamada who came here representing the "Kokumin."

We saw Baron Komura and Mr. Takahira separately in their rooms. Baron was in high spirit. We told him about the kind welcome that was given to us everywhere in Europe. When we told him that Hague was the only place where they did not openly express their sympathy for Japan, he told us something which goes long way to explain the facts, namely, he said it was feared that the Baltic fleet will probably stay in Java and it took some stringent precautions to prevent it. Perhaps those friends in Hague who listened to our addresses were thinking of that!

[Sunday, August 20.]

Beautiful day. The air is delightful. Honda went to the Methodist church. There being no Presbyterian church in the city I went to St. John's Church, the oldest historic church in the place. In the evening I intended to go to Christ's Church which Mr. Takahira and some other members of the Japanese envoys were to attend. But I was misdirected and went to a Roman Catholic church.

ポーツマスを去る

[Monday, August 21]

Quite warm again. Honda and I left Portsmouth by 10.55 train. Honda stopped at Boston of which he has not yet seen. I returned to New York and came to the Union Theological Seminary. Dr. Knox kindly arranged to give me his room in the Seminary.

講和条約また延期さる

[Tuesday, August 22] Very warm.

Went to the Nippon Club and found several letters awaiting, from Dr. Hepburn, Imbrie and others. The Peace Conference has adjourned for another day. Spent the evening with Kawai in the Central Park.

G. W. ノックス博士学院援助を約す

[Wednesday, August 23]

I went to Dr. G. W. Knox's house in Pelham Manor, N. Y. He invited me to come and stay over the night. Pelham Manor is a very pretty place. We had a very interesting talk with over matters old and new. He promises to help me in raising an endowment fund for the Meiji Gakuin. He thinks if the institution can be put on a right basis, that is, if it can become a real Japanese institution as it was intended at first, the endowment can be raised without much difficulty. He promises to secure Dr. Hall's help in the matter. The things look very hopeful. If the thing can be done, it will not only a great financial help to the institution, but it will put a new soul into it. If God grant me, as I hope and pray, another ten years of life on earth, I will spend it for Meiji Gakuin. With all my short comings I think I can honestly say that I have tried to do my best. And it is nearly 13 years since I was made the President and nearly 25 years since I was called as an instructor in the theological school.

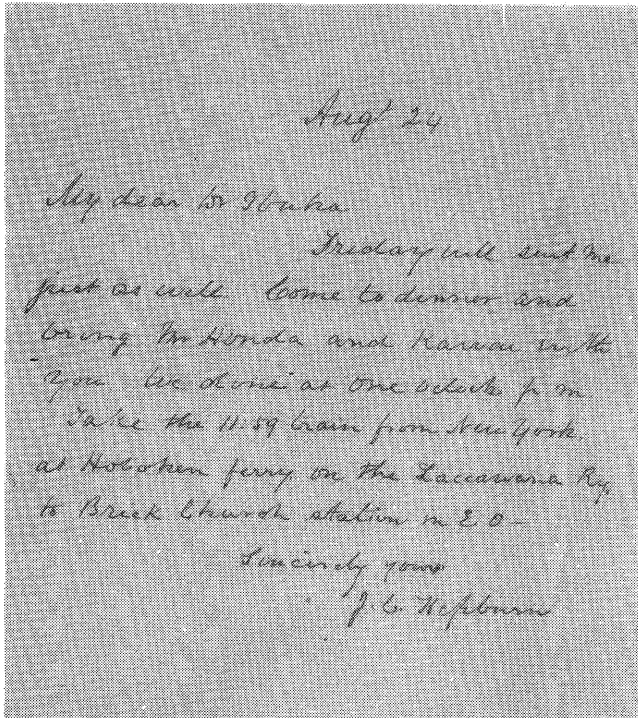
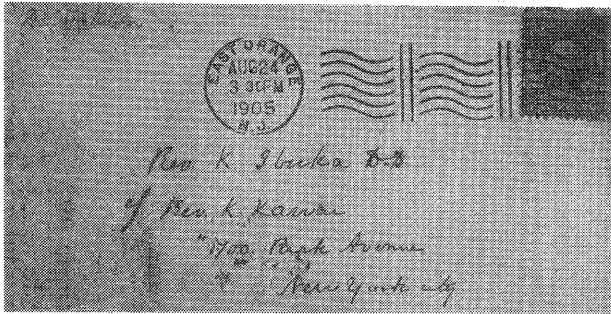
But in order to do my best I need a reasonable confidence in the future development of the institution. If the school is to remain a mere "mission school,"

as in the past, there is not much ground for the hope of vigorous growth in the future. As long as it is a foreign school, Japanese will not naturally look upon it as their own and thus the school will fail to win their hearty sympathy and support. The problem before me now is how to make Meiji Gakuin a real Japanese Christian institution as it was originally intended, as it clearly stated in the original plan of organization. The first need is an endowment fund large enough to secure its financial independence. And now is the time to start it. Now or never.

I was glad to see Dr. Knox throughly in sympathy with my views on the subject. He wants to talk over the matter with Dr. Imbrie and myself. He invited us to dine with him at the Century Club on Monday after next. What will he say? What will the Board say on the question? That is to be seen.

～ボノ博士ヨリ招待状

[Thursday, August 24.] Very hot and a close day. Returned from Pelham Manor to New York a little after noon.... Received a letter from Dr. Hepburn inviting me and Kawai to come and dine with him tomorrow. He writes a young hand. His hand



へボン博士の井深梶之助宛て招待状

明治三十八年（一九〇五年）八月二十四日

writing does not at all look like that of an old man.

～ボソ博士を訪ねる

[Friday, August 25.]

It rained very hard since last night. Accepting Dr. Hepburn's invitation Kawai and I went to East Orange. Dr. has not changed half as much as I expected. He looks almost the same as ten years ago when I saw him last. His mind is clear though his memory is failing. His eye-sight is still good. He can hear very well. His steps are not firm but he uses no cane. He does not at all look a man of 90 years of age. When I offered my congratulations on his being decorated by the Emperor, he expressed his deep appreciation of the honor conferred on him. He said he wore the order at the last commencement of Princeton University, when they gave the degree of LL. D. on him and the students cheered him to the sky. He fully deserved the honor. Really it should have given him long ago. It came late but not too late. He showed us an address sent him by the Maruzen Company which presented him a silk embroidery screen which, however, has not yet arrived. He was greatly pleased with them too. But poor

Dr. Hepburn. His wife lost her mind and is in an asylum and his only son is not Christian. Nor has he any other issue. And Dr. said he has given the decoration to the Board of Foreign Missions.....

Wrote a letter to Viscount Hayashi thanking him for his courtesy while in London and also telling him about Dr. Hepburn and his receiving the decoration.

アメルソ博士に会う

[Monday, August 28]

By appointment I went down town to meet Dr.

Imbrie at his nephew's office at No. 18 Jersey St. We sat down in the St. Paul's Church Yard for nearly two hours talking over different matters.

Then we went in the Park Row building to get our lunch. After that he took me to the office of

his old friend Mr. W. E. Stiger who is a member of the Board of Foreign Missions. After seeing the



アメルソ

Aquarium which is a good one we called at the Reformed Church building and saw Drs. Cobb and Amerman. Dr. Amerman changed considerably in his appearance. He looks very much older; his beard is nearly white. No wonder he has aged. Mrs. Amerman has been insane for some years. She does not know her own daughters and son. She only vaguely know her husband. I felt very sorry for him. He is living alone in Bloomsfield. He says he is very lonely. . . . . . Mr. J. Ballagh called at the club.

講和案約遂に決定

[Tuesday, August 29]

The final settlement of the Peace Conference was expected today. Took 10.10 train to Tenaby to return Mr. Ballagh's call. I got there a little after 11 and found Mr. Ballagh and his sister Anna Ballagh. We prayed together and after a light lunch he took me round to make calls on some of his friends in the town. Then I took 4.03 train to New York. At the ferry I bought the afternoon edition of the "Sun" which said Peace has been agreed between the two envoys, Japan waiving her claim to indemnity and

half of Saghalin. So at last the great question has been settled—settled through by the council in Tokyo.

The Russians are jubilant and the Japanese are not at all so at Portsmouth, so the papers say. Not only so but the news I am afraid will produce disappointment at home. It looks very much like a defeat, diplomatic defeat, as it was feared by great many. I must confess I am one of the disappointed, not because peace has been agreed but because of the unfair terms. I do not understand why the Japanese government broke down so easily and suddenly. Could it be because of the financial difficulty? Or want of confidence in the army to continue the war until the enemy may be brought round to our terms? Of course without knowledge of the inside circumstances I can not judge but it is very questionable whether this is a peace with honor or even a lasting peace in the Far East.

井深の講和案約についての感慨

[Wednesday, August 30]

The papers are full of the Peace question. Some say it is a moral victory on the part of Japan but nobody thinks it was a diplomatic victory, while

everybody says it was Mr. Witte's great victory. President Roosevelt calls it in his letter to the Emperor "magnanimity and generosity." I wish it could be the case but it is not so. It is nothing but a defeat, and very humiliating. Every Japanese is ashamed and everybody is surprised. It is true Japan has won the object for which she went to war; namely, the "preponderating" influence in Korea, the open door in Manchuria, and something more, namely, the lease of Port Arthur and Dalny, the Eastern Chinese Railway, Fishery rights along the Siberian coasts and the Southern half of Saghalin and the recognition as one of the first class powers in the world. These are very great gains no doubt. Japan did not expect to gain so much when she first went to war. She fought for her existence, to drive away Russia from Korea and Manchuria. Certainly in this object she has succeeded. She did far more, she has annihilated the Russian fleet, and smashed her military influence, opened the eyes of the world in regard to her real military strength and her internal condition- Russia is no longer the "unconquerable" power.

All these are perfectly true but they have been

won by the force of arms, and not diplomacy, except the fishery rights. Therefore from the diplomatic point of view the negotiation must be pronounced a defeat. No wonder, therefore, that on the day the peace was agreed on, the Russians were exultant, they shouted Hurrah and embraced and kissed each other in joy while the Japanese were crestfallen and remained in gloomy silence. Some of them are said to have wept.

What a peace! after such a great and brilliant series of victories on land and sea, without a single defeat! The world is perfectly astounded. The official explanation is H. M. the Emperor "in the interest of humanity and civilization waived Japan's reasonable and moderate claims."

Perhaps the best thing that can be said on the other side is that the terms are so easy that they do not humiliate Russians and therefore the conclusion of the peace does not leave bitter taste in their mouths and Russia and Japan can be good friends or neighbors in future. But can Russia even be trusted as a good neighbor? That is the question. Will it not be far more likely as soon as she recovers from the shock

she will prepare revenge herself on the old enemy?  
This is the most important question in determining  
Japan's future policy.

Saw Mr. John R. Mort in his office at #3  
West 29th St. and had a long good talk..... He  
also read to us a letter from one of the secretaries  
in India making a strong appeal for a Japanese  
Christian leader to visit India and give addresses.  
He asked whether we could not retrace our steps  
and accept their invitation. I said half in joke, if he  
will help me to raise \$100,000 for Meiji Gakuin to  
a successful issue by the end of October I will do  
so. He simply saying \$100,000 is a good sum of  
money while Honda heartily laughed over the pro-  
posal.

From there I went with Honda to the Nippon  
Club to take a Japanese supper. I found there seven  
or eight men all denouncing the terms of the peace  
and some of them were severely criticizing Baron  
Kaneko.

櫻  
川  
線  
米國一市民の講和条約觀  
[August 31, Thursday]

I went into a stationery at the corner of 3rd

Avenue and 69th St. to get some paper &c. but as  
soon as the wife of the owner saw me she began to  
ask me what I thought about the terms of the peace.  
I told her I was far from being satisfied. She said  
she felt so badly she did not read the papers nor  
would she listened to her husband when he tried to  
read to her. Pretty soon the husband came out and  
denounced the terms and argued, as if I were  
responsible for the agreement of the peace.

[Friday, September 1.]

Went to the annual conference of the International  
Committee and Y. M. C. A. Secretaries which met at  
Hotel Grammatan in Bronxville, N. Y. about 15 miles  
from the city. About 100 men were present, some  
of whom are old friends or acquaintances, like  
Wishard, Morse, Murray, Ober brothers and Dr.  
Warner.

[Sunday, September 3.]

Took an early lunch and came to New York to  
speak to the Japanese young men of New York in  
the church house belonging to the University Presby-  
terian Church where Kawai is working. There were



present about 40 of them inspite of the bad weather. Kawai had charge of the meeting and I spoke for nearly 40 minutes on Japan's mission in the Orient. They listened very well. After the closing prayer a sort of after meeting was held in another room for a free conversation and Mr. Dohikawa and two others spoke on the subject of the Peace Treaty. None of them is satisfied with its terms. They somehow seem to have a grudge against Kaneko.

I hastened to Bronxville, because I was to speak in the evening session of the Conference. Wishard, Mott and several secretaries spoke each for 10 minutes. Then the chairman Mr. Murray called on me to speak and I did so. I expressed my pleasure in attending the Conference and thanked the International Committee for what they have done and are doing for Japanese Y. M. C. A. work. I told about Mr. R. S. Miller's initiative part in the army work in Manchuria and concluded with a hearty invitation to the Student Federation Conference in Tokyo in 1907. They received my address with great cordiality and great many came and thanked me for it.

日本に於ける宣教活動と明治学院

[Monday, September 4]

This is the so-called "Labor Day" something like the "Bank Holy Day" in London. Unfortunately for the men it rained very hard the whole morning. The conference was still in session but I left Bronxville by 10.14 train for the city because I had an appointment to meet Drs. Knox and Imbrie at the Century Club, 7 w. 43rd St. I was delayed a little by the big procession of the workmen in the 5th Ave. and when I got to the club they were already talking about on the topic of our coming together, namely the present situation of the missionary or rather Christian work in Japan in general and the future policy and endowment fund for Meiji Gakuin in particular.

After a full talk I was glad to find that we were all agreed on the important points in regard to the future policy of the Dendo work and Meiji Gakuin, that is, in one word, the Japanese control of the work in order to make it a really Japanese one. And in regard to the latter, the solution of the problem was an endowment large enough to be free from an annual subsidy or appropriation from the

mission boards. Dr. Knox is to see Dr. Hall to secure his support in the movement and Dr. Imbrie and myself to see Mr. Speer to secure the support of the Presbyterian board.

講和条約に対する井深の見方

[Tuesday, September 5]

Afternoon papers say the new famous peace treaty was signed at 3 p.m. today in the Navy Yard by Komura and Takahira on one side and Witte and Rosen on the other.

It is rather strange that this peace is very unpopular both in Japan and Russia, while all other countries are satisfied. The reason no doubt is the peace was premature, that is to say, the Czar and his subjects do not realize that they have been beaten and think, nay the Czar says so in many words, in his proclamation to his army that they were in a position to inflict definite defeat on the enemy! No wonder then that they are dissatisfied with the astonishing easy terms with which they let off. And there seems to be the seed of future troubles. They were not beaten enough to awake from their fond dream of the Oriental aggressions. They may have

burnt their fingers severe enough to stop their mischief for a while, but as soon as they feel strong enough they will be sure to repeat the trick. But thank God, Port Arthur is no longer theirs. Nor is Korea under her influence. Possibly she will try next time to come out to the Persian Gulf or Constantinople.

[Wednesday, September 6]

There came reports from Tokyo that the people are greatly dissatisfied with the terms of peace. Mobs attacked the "Kokumin Shinbun" building.

In the afternoon went to the Museum of Art. It has been considerably enlarged and improved since I saw it last. . . . Still as compared with the famous Museums in Europe it is vastly inferior.

日本よりの電報諸教会及びミッシェン・スクールの  
焼打ちを伝える

[Thursday, September 7.]

Heard from Mr. Speer. He wants to meet me and Dr. Imbrie tomorrow morning and have a full talk on Meiji Gakuin and the general situation of the evangelistic work in Japan.

Evening papers have very serious telegrams from

[Tokyo]. . . . . But the worst and incredible report is that ten Christian churches and a mission school are burnt down. If the reports are true it is serious indeed.

[Friday, September 8]

Saw Mr. Speer in the office and together with Dr. Imbrie had full talk about Meiji Gakuin and the general situation of missionary work in Japan. We talked from 10 to 4 o'clock with a short interval for chapel meeting and lunch. He seems to take in the situation very well and willing to do all in his power to help the cause. It was a very satisfactory interview altogether. He is also going to make all the appointments for my speaking in different churches.

Today's telegrams say things are quieting down in Tokyo. But I am very sorry to see among other things that the Asakusa and Ryogoku churches are destroyed. There seems to have been no such trouble in Shibaku or Kojimachi-ku or Ushigome, but only in Honjo, Shiaya, Asakusa, Nihonbashi and Kanda.

The papers here do not express very great sur-

prise but some of them remind the public that just hundred and ten years ago there was a similar riot in New York about a treaty with Great Britain which was signed by Jay, Alexander Hamilton in defending the treaty was stoned and struck.

ホール博士井深のために尽力す

[Monday, September 11]

Dr. Hall came in and told me that he had a full talk with Dr. Knox this morning and he suggested he should ask Mr. James to invite us four to his country house and talk over the whole thing. I am exceedingly glad to see him manifest such a living interest in the matter.

病中の小村寿太郎を見舞ふ

[Wednesday, September 13]

I went to Waldorf Astoria Hotel to inquire after Baron Komura's health who is reported to be seriously ill. I saw Mr. Sato who tells me that Baron Komura was suffering from typhoid fever. He himself wanted very much to leave tomorrow but finally yielded to the doctor's advice to postpone it till the next steamer. Mr. Sato said that more than 40 Christian chapels or churches were injured by

the recent riots in Tokyo. He said he and two or three more decided to remain with the Baron but the rest are going to leave tomorrow. When I expressed my sympathy for his difficult situation, he said, "Waratte kaeru wake niwa ikimasen."

日本全權一行に面会す

[Tuesday, September 19]

[In the afternoon (Sep. 18) I went to Eaglewood, N. J. to speak for the ladies' missionary society, of which Mrs. Speer is the president. I spoke on the subject what Christianity has done for the women of Japan? [There were fifty or more ladies present.] Returned from Eaglewood. In the afternoon I went

to Waldorf Astoria with the deputation of the Pres-

byterian and Reformed Boards of Foreign Missions to express sympathy for Komura's illness and to present congratulations on the conclusion of peace with Russia. There were Dr. Hepburn, Dr. Cobb and a dozen other men. Dr. Richard was the spokesman. Mr. Sato received them.

小村全權を見送る

[Wednesday, September 27]

I went to the G. Central Station to see Baron Komura off. He looked very pale and thin. But for sometime before the train left he stood at the rear platform of the train talking with friends.

### 宗 教 家 大 会

◎宗教家大会は去る十六日午後二時より芝公園彌生館に於て開かれたり。ピアノ、バイオリン合奏の後、久我侯爵司会し、一同君が代を三唱し、黒田真洞氏開会の辞を述べ、出席者中の年長者たる西有穆山氏（曹洞宗大本山総持、令八十四才）を座長に推して議事に移り、左の宣言書を満場拍手の裡に決議せり。曰く、

『日露の交戦は日本帝国の安全と東洋永遠の平和とを画り世界の文明正義人道の為に起れるものにして毫も宗教の別、人種の同異に関する所なし故に吾儕宗教家は宗派人種の異同を問はず此に相会して各自公正の信念に

懇へ相互に奮て此交戦の真相を宇内に表明し以て速に光榮ある平和の克復を見んことを望む

右決議し之を中外に宣言す』

議事了りて平田盛胤、佐治実然、小崎弘道、村上專精、大内青巒、柴田礼一諸氏の演説あり、奏樂に次いでイムブリー氏祝辞を述べ、井深梶之助氏之を通訳せらる。尚お尾崎市長、千家東京府知事、瀬沼恪三郎（希臘教会有志者を代表して）、村田寂順諸氏祝辞を述べられ、陛下の万歳を三呼して散会せり。来会者は地方より來たる者も頗る多く無慮八百余名、満堂立錫の地なき盛会なりき。僧侶、神官、基督教徒入り乱れて相座し、我が国にては未曾有の集会なり。外国人は宣教師を始め数十名見受けられ、日本の婦人も数十名列席せり。

### 戦時 伝道 大演説会

◎日本基督教會戦時伝道部は予報の如く去る十五日青年會館に於て昼夜二回大演説会を開きたり。弁士演題は大體前号記載の如くなれど、只井深氏が演題を「黄人禍と基督教」と変えられたると、植村氏が病氣の爲出演せられざりしとの異同ありき。聴衆は昼夜とも五百余名にて盛会なりき。昼間は宣教師四音合唱、福田夫人、林貞子の独吟等あり、夜は酒井將軍氏數回讚美歌を独吟せられたり。〔福音新報第四六四号明治三十七年五月十九日〕

井深総理を送るの辭

賛助會員 熊野雄七

白駒駸々隙を過ぎ本学年も將さに晩れ復新学年を迎えんとて事倍々繁からんとするに際し、総理は来る四月下旬仏國巴里市に

開かるべき万国基督教青年同盟会に臨み、更に五月上旬和蘭ユートリックに於て開かるべき万国基督教学生青年同盟会に列し、転じて英独米等の諸国に遊ばんが爲めに日ならずして万里の鵬程に上らんとす。吾人は我が学院の暫く被るべき影響を顧みるの邊なく滿腔の熱誠を以て其の行を敬び送らざるを得ざるなり。総理の其の兩大会に於ける代表者としての成功はその学識と経験とに徴して曷んぞ今新たに喋々するを須いんや。吾人が深く総理に望む所のもの此に非らずして寧ろ彼に在り。



顧みれば神明を軽んじ人道を蔑ろにし妄りに吞噬の欲を逞しくせんと信義を棄て滿州撤兵の約に背き我を脅嚇圧迫せんとしたる彼の蜚露は、我が正義の皇軍に對し連戦連敗將さに滿韓の地を棄て遠く國境に退かんとするの窮境に陥りぬ。是に於てか彼は例の慣用得意の詐術を弄し親交國の為政家等を恣憑して、所謂黃禍の浮説を放たしめ以て皇國が万邦に野博したる信任と名声とを傷つけ、外交の上に於て我が前途を阻碍せんことを謀りつつあり。而して浮説は任々諸邦の識者をすら誤らしむるの虞れを醸すに至りぬ。

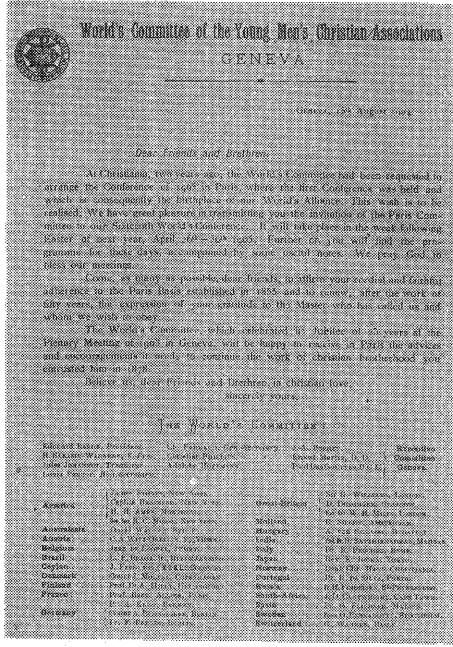
夫れ彼の兩大会はその名の示すが如く世界諸邦よりして各其の代表者を派遣し以て其の会に列せしむるが故に、寔に各國に於ける有力にして篤信敬虔なる紳士の会合なりと見るを得べし。而して我が総理は親友なる青山学院長本多庸一氏と共に黃禍の盟主として世界注視の焦点たる我が國を代表して其の間に投ぜんとす。少にして我が國特有の武士的教育を受け、後基督教の真理に薰化せられ敬神愛國の志厚き総理が、一國民として、一教育家として、又一宗教家として、上神明と下國民とに負える責任は吾人の論議を俟たずして明かなるものあらん。而して総理が其の海外に於ける信任と其の胸裡に抱持せる確信とは、以て彼の誣妄を弁じ其の誤解を闡くに大いに力あるべきは毫も疑を容れざる所なり。且つ我が國の今日の位地に達せる所以のものは、単にコムモードル・ペリーの来朝以来僅々五十年間の結果に非らずして二千年來涵養せる國有の文明に其の潤色を加えたるに因れるものなることを明かにし、欧米人士の我が國に對する迷夢を醒ますに至らんこと亦吾人の確く信じて疑わざる所なり。

更に総理は英独米の諸國に於ける教育制度を視察し兼て米國に於ては我が学院の爲めに基本金を募集せんとす。熟ら現今時勢の要求する所を察すれば、吾人は我が学院の現状に憊焉たるもの洵に一にして足らず。随つて総理に望む所決して尠少に非ざるなり。従来我が学院は幾多の学生を訓養し種々の方面に人才を出せること尠からざれども、未だ以て最高の教育を施すべき機關の備えなきが故に業を卒えて後其の多くを更に他の學校に送らざるべからざるは吾人の常に遺憾とする所なり。今回総理の英米

に於ける視察とその運動とは、我が学院に係る吾人の宿望を盈たすの期を速かならしむる者として、之れが成功を熟待せずんばあるべからず。又更に総理が直接の交渉に因り英米両国の大学と我が学院との聯絡を結び、以て修業後海外に遊ばんとする学生に多大の便宜を与え、尚お学制視察の結果は之を我が学院に施して益々其の完整をなすに至るべきを得べし。且つ総理は必ず歐米諸学校の其の卒業生に対する待遇法をも細かに査察し来たり、我が学院と卒業生との情誼を一層円滑にし、従つて「アルマタタ」の真相益々発現して校運の隆盛大いに見るべきものあるに至らん。

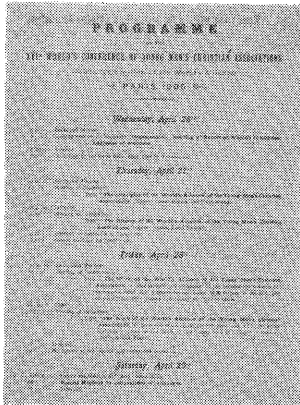
是れ実に吾人が一は国家の爲めに、一は我が学院の爲めに満腔の熱誠と欣喜とを以て総理の行を送る所以なり。総理不在中の校務は、吾人足らずと雖も同僚相扶け黽勉以て之に当らん而已。海陸万里の行程、皇天の恩寵総理の上に裕かならんことを祈る。〔白金學報第五号明治三十八年三月二十二日發行〕

パリ万国基督教青年会創立五十年記念大会  
招待状・プログラム等の写真

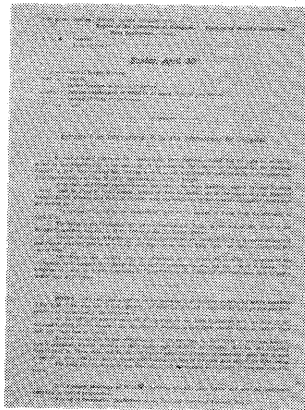


(1)

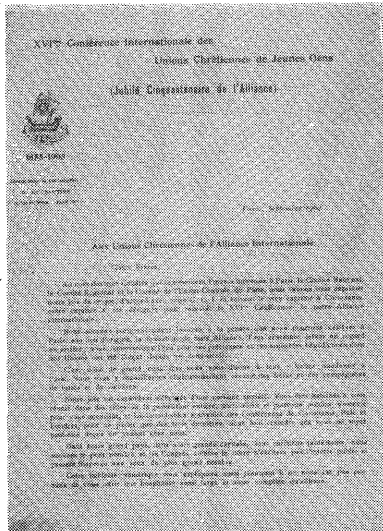
(2)



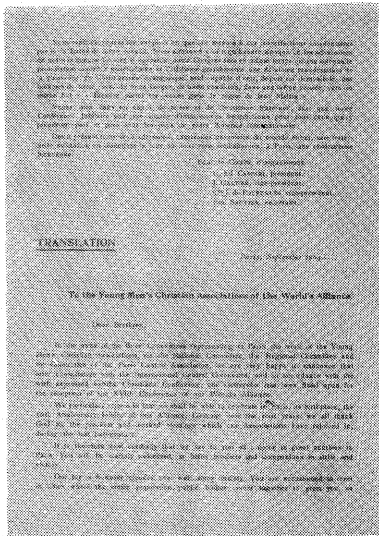
(3)



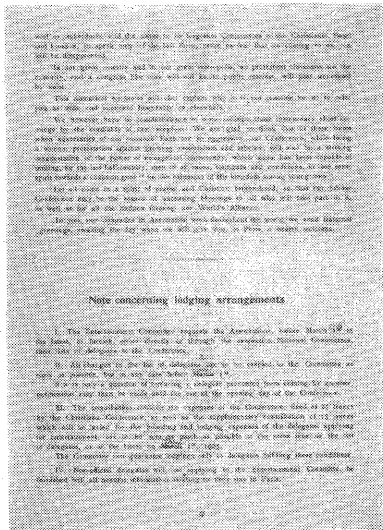




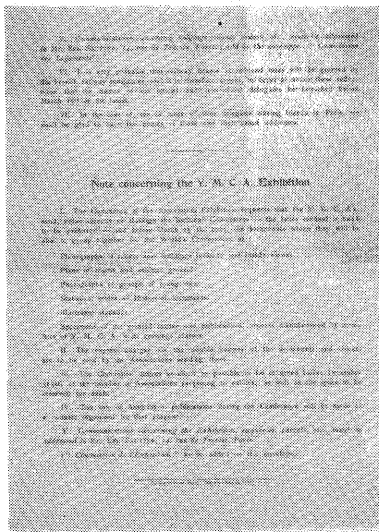
(4)



(5)



(6)



(7)

第三篇

井深堀之助 明治 38 年度欧米旅行券

1905

右ハ欧米各國へ之ヲ發行シ  
 起テ 行路險阻 旅行セシムルニ且此券ヲ用ルニ便  
 知テ 此券ヲ用ルニ便知テ 此券ヲ用ルニ便知テ 此券ヲ用ルニ便知テ  
 明治三十八年一月十五日  
 日本帝國外務大臣 陸奥宗光  
 西村八右衛門

券 八四〇五 號

東京市芝区白倉今里町  
 十二番地  
 井深堀之助  
 五年九月

RECEIVED  
 1805. Mr. Kajinosuke Shuka  
 Registered in Tokyo for  
 all European ports

RECEIVED  
 1805. Mr. Kajinosuke Shuka  
 Registered in Tokyo for  
 all European ports

RECEIVED  
 1888. Mr. Kajinosuke Shuka  
 Registered in Tokyo for  
 all European ports

RECEIVED  
 1888. Mr. Kajinosuke Shuka  
 Registered in Tokyo for  
 all European ports

RECEIVED  
 18742003  
 Mr. Kajinosuke Shuka  
 Age 55 years 4 6 months

RECEIVED  
 18742003  
 Mr. Kajinosuke Shuka  
 Age 55 years 4 6 months



第  
四  
篇



# へボン博士の授賞と万国学生青年大会など

## 満韓旅行談

井深梶之助

近頃滿韓旅行より帰られた井深梶之助氏を訪れしに、氏は快よく記者を其の書齋に導かれて滿韓の地図を拡げて凡そ一時間程、其の見聞に就いて語られた。以下は其の大意である。

此度の旅行は、先ず大連に上陸し旅順に赴き、北行して營口に立ち寄り、大石橋、遼陽、鉄嶺、奉天と云う順序に其の土地に宿泊して観察した。奉天よりは奉安鉄道にて安東県に出で、義州より京義鉄道にて途中平壤に立ち寄りて京城に來たり、それから仁川、仁川から汽船にて木浦、釜山と云う様に立ち寄って帰つたのである。

大連は余り予期大きかつた故か、思つた程の事はなかつた。非常に立派な様に聞いて居つたが左程でもない。勿論大きな棧橋等はあるけれども街の規模は小さいのである。唯一つ注意を引いた事は街の割り方である。誰が設計してこう云う風に割り付けたのか、恰度巴理、ワシントンの市街と大いに似て居る処がある。日本の街は大概碁盤形になつて居るが、之れはそうではない。アベニウと云う幾条かの大通が貫いて居つて、そして市街の中央に広場があつてそこに集まつて居る。中々趣味があり変化があつて、非常に面白い街の割り方であると思う。大連の教会は日曜の集会以外に色々の集会をして熱心に働いて居る。又一つ注意すべき事業は婦人救済会である。是は地味な、而しながら又手広い、又中々骨の折れる仕事であるが先ず成功して居る。私の行つた時も恰度電話交換手が入ると云うので、救済会の婦人が四名試験を受けた処が三名迄及第したと云う事であつた。唯此の事業の主任者として働いて居る益富君は、未だ独身の青年であるので、自分も長く此の事業に従事するのは適當でないといふ事を自覚して居るとの事で、救世軍の方へ此の事業を譲り渡して再び東京に出でて勉強する積りであるとの事であつた。左様、もう救世軍の方へ渡し済みになつた筈です。唯益富君は皆が仕事に慣れる迄もう一カ月間位留まつて、而して後帰るとの事

であつた。此の事業は非常に一般の同情を得て居るので、遼東新報等も能く其の事業を世に報道して呉れるとの事である。又信者の力を以て慈恵病院を建てて居り、商業学校や女学校等を起こさんとの企てもある。浪花町の教会、青年会、救済会は総て基督教運動の中心となつて居る。先般<sup>ア</sup>、<sup>ロ</sup>、<sup>セ</sup>つた朝日の時にも其所で歓迎会を開いたのである。唯此度日匹信亮君が大連の倉庫長より他に転任したので少なからぬ打撃を蒙つたのであろう。大連の将来に就いては考ゆる処もあるが又他日にしよう。大連教会の発展も一つに大連全体の繁栄に關係して居る事は無論の事である。

それから旅順に行った。旅順の教会は旧市街の山の手に位して恰度よい地位を占めて居る。之れは露西亜の方の教会であつたのを、そっくり貰い受けて居るので構造もよく出来て居る。広いけれども幾つもの間数に分かれて居つて日曜学校等には非常に都合がよい。教会、青年会等の事業に対しては一般に非常に同情を持つて居る。否同情を持つと云うよりも寧ろ感謝して居る。陸海軍の幹部は其の部下の者が青年会に出入するのを大いに喜んで居る。日曜学校の如きも人々の要求に適應して居つて非常に歡迎されて居る。風俗の悪い事は御話にならぬ。料理屋、旅館総て暖味屋ならざるはない。たつた一軒旅順ホテルのみが清いとの事である。旅順で一つ面白い話を聞いた。日曜学校の生徒で、十才許りの子供が親を感化した。それはどう云う訳か審しくは知らぬが、何んでも其の子供の言葉によつて、例の不潔な悪い商売をして居つた親が恥じて全く其をやめたとの事である。腐敗の中にも此の様な美しい話もある。

管口へは新たに石原保太郎氏が行かれて日本基督教会を建設した。又管口にも今回青年会が創立された。これは大連、旅順の青年会とは其の性質を異にして、一般人の青年会であつて万国の人を抱擁して居る。其の開会式には米國、露國、日本、支那の人々が集まつて来た。慥かに前途發達の見込みがある。

遼陽の青年会は矢張り軍隊慰勞部の時と同性質のもので、新聞雜誌の縦覧室、遊戲室、書信室、理髮室等を備えて守備の軍人に非常なる便利と清樂とを供して居る。で、守備の第十六師団長閣下も大いに同情と好意を有して居る。自分が行つた時には訪問したが、先方からも副官をよこして礼を云つて来た様次第である。

鉄嶺では未だ其の緒について居ない。而し遠からずして此処にも青年会が設けられるであらう。今や其の準備中である。鉄嶺から奉天に來た。奉天では宣教師ドクトル・ギレスピイと云う人が奉天病院で病者の診療をなすと共に伝道をして居る。ドクトル・ギレスピイは滿州教化の爲めに奉天を中心として永い間働いて居る人である。今や其の結果として奉天には独立の支那人教会が設立せられて劉某と云う土人の牧師もある。此の教会は一度義和団の時にこわされたが再び建立された。私は頼ま

れて此の支那人の教会で説教をしたが、男子二百人、婦人百人と云う盛んなる集会であつた。ドクトル・ギレスピーが通訳の勞をとられた。支那人は非常に喜んだ。日本人が来て説教して呉れたのは之が最初である。どうか折々云う風に日本人が来て説教して呉るれば、非常に福であるがと云つて居つた。奉天の日本人会でも、特に自分の爲めに歓迎会を開いて大いに寛待して呉れた。又その人々の案内で王宮を拝観したが、其の頽廢の状、実に甚だしい、見るに忍びぬ。或る確かなる人の言に拠ると、今の超將軍の前の將軍の時の事である。當時の福島少將が、前將軍始め多くの文武官に案内されて此の王宮を拝観した事があつた。其の時福島少將は巡覽して其の頽廢の甚だしさに驚いたが、最後に一同の前に立つて一場の演説をした。そして、言を惜しまずして王宮の頽廢を譴責し、支那人自ら其の皇室を尊敬せざる事此の如く、自己の体面、品位を顧みざる事此の如き事では、外國の輕蔑を受け、凌辱を加えらるるも止むを得ない事である。これではならぬ。先ず自己の体面を立派に保たねばならぬと、強く一同の面前で論責したことがあつた。それから支那人も大いに恥じて修繕を加えたとの事である。之れは当時福島少將と同行して、親しく其の演説を聞いた人の直話であるが、今日でも依然として非常なる頽廢である。北京の政府から、修繕料として毎歳幾何かの費用を投じてあるとの事であるが、官吏の手を経る中に途中で消えて了つて、實際は何等の修繕もなされて居ない。支那官吏の腐敗は此処にも現われて居る。

此の王宮の内に宝物庫がある。特別に此の宝物庫を觀覽する便宜を得た。此の宝物庫にはどつきり種々の宝物が珍藏されて居る。歴代の帝王の肖像はすつかり懸かつて居る。其の他種々の幅がある。近頃見るものとは頗る異なつて居る密画がある。花瓶類、刀劍類、特にダイヤモンドを以て柄となせりと称する劍、乾隆帝の兜、様々の軍服、陣羽織等夥だしいものであつた。それから北陵をも觀たが之も大分荒れて居る。

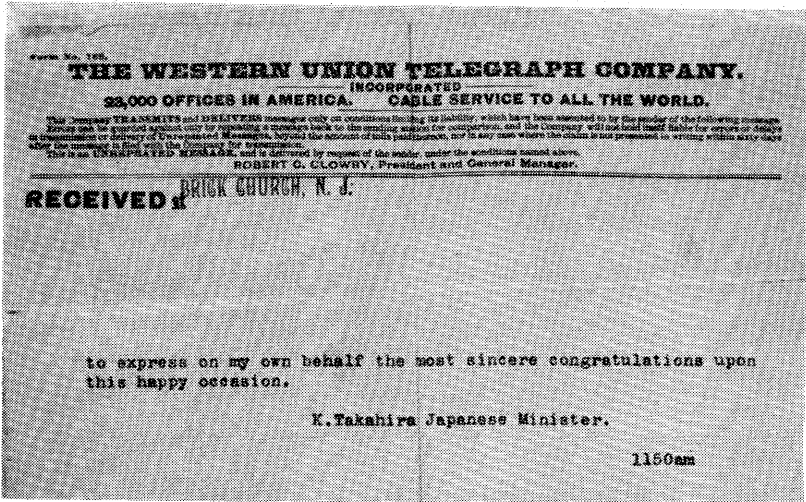
奉天から奉安鉄道に乗つて安東県に出た。分水嶺等の險山、連岡の間を松葉形の線路に沿うて汽車は走るのであるが、其の迂余繁廻、所謂松葉形をなしておる処甚だ珍らしい。安東県の発達は目醒ましいもので既に立派な日本の町が出来て居る。唯鴨綠江は中流に瀕があつて、少しも船は溯航し得ないとの事である。之れは意外であつた。鴨綠江を渡つて朝鮮に入り、義州より京義鉄道に乗つた。朝鮮に入つてから何となく哀れの感が催した。山には樹木がない。土地の耕作は至つて不行届きで、且つ粗末である。家屋は小矮で見すばらしい。そして男女とも麻と布との白い服を纏つて居る。さながら喪服を着て居るかの様である。支那人は非常に労働をして金銭を蓄積する民であつて、一見至つて汚ない風をして居る苦力でも、百円、二百円の金を貯えないものはない。そして労働力も日本人を凌ぐとの事であるが、朝鮮人は金のある中は働かない。だらりと長い煙管を銜えて遊惰の





第 四 篇

ヘボン博士勲三等旭日章授賞関係

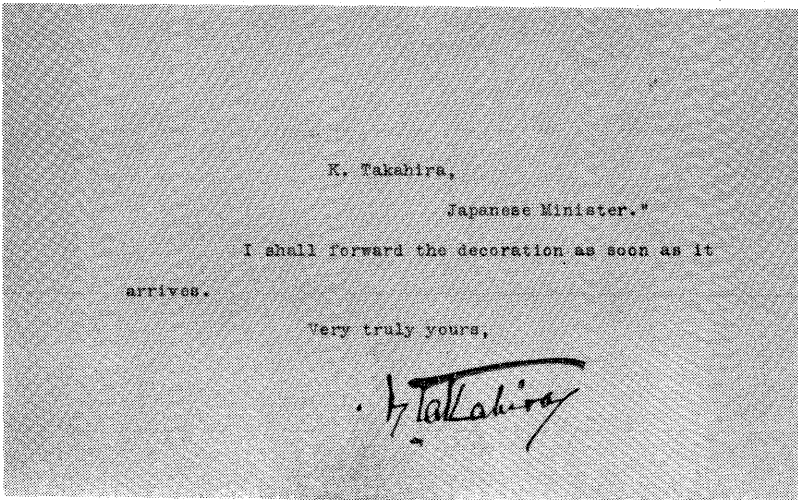


(1)

(1)ヘボン博士宛高平公使電報

(2)同手紙

(2)



Empire of Japan  
Washington

March 12th, 1905.

Dr. J. S. HEPBURN,  
East Orange,  
New Jersey.

Dear Sir:

I have the pleasure to inform you that I have this day telegraphed you as follows:

It is my pleasant duty to announce to you on this anniversary of your 70th birthday that His Majesty the Emperor has been pleased to confer upon you the Third Class of the Imperial Order of the Rising Sun in recognition of the valuable services you rendered to Japan while you lived there in making important contributions to the advancement of the English education among our people and also of the friendly interest you have since then continually exhibited in the progress of the Empire. I also desire to take this opportunity to express on my own behalf the most sincere congratulations from this happy occasion.

(3) (1)の電報確認の手紙

*Respectfully made in presentation of J. S. C. HEBURN  
for the degree of Doctor of Laws at the  
Imperial Commencement June 19 1905  
U. S. A.*

JAMES OSWALD HEBURN of the class of 1868, upon entering his senior course, the oldest living graduate of Princeton University. In the study for his medical education in China. From 1868 to 1880 a physician in New York City. In 1881 - only six years after Commodore Perry's fleet opened Japan to peaceful intercourse with the western world - he gave up a lucrative medical practice at home and sailed for Japan, arriving after a voyage of over four months, and at once engaged in medical work and the study of the language. His work in Japan continued for thirty-three years. He collaborated on the translation of the New Testament into Japanese and prepared a Japanese dictionary of the Bible. At the Fall of thirteen years labor he produced his Japanese-English dictionary, the first ever made and still the standard. He has been honored this year by the Emperor of Japan with the decoration of the Order of the Rising Sun. Today we joyfully and gratefully honor this venerable scholar, translator, physician and benefactor of the people in the Farthest East.

*To J. S. C. HEBURN with affectionate regards  
from Prof. Oswald A. Bost  
Princeton, June 19 1905*

(4) ウエスト教授のヘボン宛手紙

(5) 斎藤博のヘボン宛手紙

IMPERIAL JAPANESE PRESS  
WASHINGTON

September 14, 1911.

My dear Mr. HEPBURN:

I have received your kind letter of the 9th instant, in which you were so kind as to give me a detailed sketch of Dr. Hepburn's life in Japan. I am very sorry to learn that the doctor is now in a feeble condition and, moreover, that he has been deprived of the pleasure of participating in his part in which he accomplished such a grand work in the field of philology. The study of English in Japan could have been quite different from what it is without the aid of his invaluable Dictionary of English and Japanese Collocations which is the best authoritative pioneer in this line of enterprise. Indeed, I may say that every Japanese will agree with me that the dictionary was what followed his name in fact nearly revised editions of this work.

I have at once forwarded to Mr. J. CHIBA a copy of your mentioned letter which he will surely be very much delighted to receive.

IMPERIAL JAPANESE PRESS  
WASHINGTON

I thank you cordially for your kindness in taking pains to write me at such length and for your efforts to find a photograph of the doctor,

with best wishes for you and the doctor.

I remain,  
Yours very sincerely,  
*Wm. O. Taylor*

(6) (5)に同じ

明治四十年井深梶之助先生日記

明治四十年一月

〔一月一日、火曜日〕 天氣快晴

家族一同感謝祈禱。雜煮ヲ食シ自分ハ年首廻禮ニ出ヅ。小石川松平家、水上、荒川、等ヲ廻リテ歸ル。市中殊ニ目立チシハ新勲章ヲ佩ビタル海陸軍人ナリ。今年ハ平和ノ新年ナルモ凱旋軍人ノ正月ナリ。

〔一月二日、水曜日〕 曇

午前十時ヨリ植村氏ノ宅ニ於テ貴山氏ト会见シ、台灣伝道ノ件、滿韓伝道ノ件等ニ付キ協議シ、午後二時ヨリハ伝道局常務委員会ヲ開ク。

〔一月三日、木曜日〕 昨夜ヨリ雪降ル

午後四時、高輪教会ニ於テ上野榮三郎氏第二女福子ノ結婚式アリ、招カレテ花子同伴列席ス。豊子、春子ハ荒川及び水上ヘ年首廻リニ往ク。

〔一月四日、金曜日〕

終日在宅、來客ニ応対ス。

〔一月五日、土曜日〕

午後二時、神田青年會館ニ於テ日本基督教會教授者新年會ヲ開ク。本年度ノ特別伝道其ノ他ノ事ニ付キ協議ス。右終ッテ

後、伝道局常務委員会ヲ開ク。帰途、熊野、植村、貴山、永井ノ四氏ト晩食ヲ共ニス。

〔一月六日、日曜日〕 快晴

午前十時、芝教会ニ於テ説教ス。題ハ模範の祈禱。午後、早稲田鶴巻町青年會寄宿舎ニ開カレタル青年會幹事會ニ出席、幹事ノ位地ニ関シテ討議アリ。

〔一月七日、月曜日〕 快晴

事務ニ出ヅ。建築師伊藤為吉氏來訪、講堂修理ノ件ニ付キ話アリ。曰ク、自ラ責任ヲ負ウテ完全ナル修理ヲ為スベシ、別ニ仕様帖ヲ差出サズト。余ハ之ニ對シテ氏ヲ信ジ氏ニ一任スレバ責任ヲ全ウセラレンコトヲ希望スト。氏曰ク、諾。午後、津田鍛冶雄、水上守如氏等來訪ス。

〔一月八日、火曜日〕

芝教会堂ニ於テ市内日本キリスト教會連合祈禱會ヲ開ク。目的ハ特別伝道ノ為ナリ。余、司會シ、星野、熊野、貴山氏等奨励ヲナス。植村ハ病氣ノ為欠席。來會者ハ多数ナラザレドモ有益ノ祈禱會ナリキ。

〔一月九日、水曜日〕

秦、松永両氏ノ神学部教授就任式執行ス。余、宣誓ノ式ヲ司

リ、稲垣氏告辞ヲ宣べ、秦氏ハキリストノ神学トパウロノ神学ノ調和、松永氏ハ教会歴史ト神秘主義ト云ウ題ニテ講演ヲ試ミタレドモ、孰レモ成功トハ云イ難シ。時間モ不充分ナリシガ用意モ周到ナラザリキ。稲垣氏ノ告辞モ成功ニ非ズ。然シ来会者モ七、八十名アリ。先ズ以テ無事ニ式ヲ終リタルハ感謝スベシ。

〔一月十日、木曜日〕

昨日就任式以來風邪ノ気味ナリ。然レドモ予約シタルガ爲、午後五時止ムヲ得ズ学生大会ノ爲交渉委員会ニ出席シタリ。然ルニ本多、江原、福岡等孰レモ不快ノ赴キニテ来会ナシ。唯渡辺暢氏ト余ノミ出席セリ。大塚、フヒシヤル等ト略々評議ノ上、接待其ノ他ノ件ヲ定ム。

〔一月十一日、金曜日〕

午後六時、中国基督教青年会成立発表会ニ出席、一場ノ英語演説ヲ試ム。来会者六、七百人、多数ハ支那人ナリ。支那婦人モ数名見エタリ。支那人ノ演説、祝文等アリシガ、其ノ音声何トナク噪ガシク聞エテ下品ナリ。其ノ音声ニハ儘ニ威厳ナシ。来賓中ニニコライ大主教アリ、休息室ニ於テ暫時談笑ス。日本ニ来タリテ既ニ四十六年ヲ経過スト云ウ。之ヲ回顧セバ幾多ノ感アラン。

〔一月十二日、土曜日〕

終日在宅。今夜ハ台町教会ニ於テ昨年ヨリ延期セラレタルクリスマス祝イアリトテ、とよ、はる等多忙ナリ。寒氣昨夜ヨ

リ烈シ。彦三郎今朝京坂地ヨリ帰京ノ由電話アリ。

〔一月十三日、日曜日〕

瀬ノ上氏ハ汽車不通ノ爲上京六ヶ敷キ赴キ電話アリ。依リテ自ラ説教スルノ覚悟ニテ芝教会ニ往キタルニ、図ラズ瀬ノ上氏来タル。依リテ同氏ニ説教ヲ讓ル。礼拝ノ後教会ノ総会アリ。会務、会計等ノ報告アリ、長老、執事ノ撰挙アリ、孰レモ重任ヲ決ス。

〔一月十四日、月曜日〕

午後神学部教授会ヲ開ク。四時ヨリ青年会ニ於テ伝道局常務員ノ会議アリ。大連、當口、安東県等ノコトニ付キ協議ス。六時ヨリ青年会同盟事務委員会ヲ開ク。本多、平沢氏等出席。

〔一月十五日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後三時、旧講堂ニ於テフランセス・ブラオン氏ヲ招キテ日曜学校ニ関スル講話ヲ聞ク。

〔一月十六日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、久米邦武氏ヲ訪問シテ講演ノ事ヲ依頼ス。神道ト日本古代史トノ関係ニ付キテ講話ヲ依頼セリ。夕、鈴木春氏ヲ招キテ晩飯ヲ饗ス。

〔一月十七日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。

〔一月十八日、金曜日〕

授業例ノ如シ。秋葉氏来訪、瀬ノ上氏ノ説教ニ付キ批評的ノ

第四篇

話アリ。甚ダ不満足ノ赴キナリ。實際同氏ノ説教ハ拙劣ナリシ。

〔一月十九日、土曜日〕

特別伝道ノ為福島ニ赴ク。午前八時五十分上野発、五時半着。斎藤王士雄氏停車場ニ出迎フ。福島ホテルニ投ズ。星野光多氏一汽車先着。公会堂ニ音楽会アリ、余ハ旅宿ニテ休憩ス。

〔一月二十日、日曜日〕

午前十時公会堂ニ於テ演説会アリ。祈祷、讚美、聖書朗読ノ後、星野氏人生觀ニ付キ演説、余ハ神ノ召ト云ウ題ニテ演説ス。聴衆ハ三百名以上アリ終始静聴セリ。公会堂ニ於テ祈祷讚美ヲ為シタルハ之ヲ嚆矢トスト云ウ。午後斎藤氏ト懇談ス。事ハ宮城中会対大会、即チ伝道局ノ問題ニ関セリ。午後七時、講義所ニ於テ説教会アリ。余先ズ演説シ、星野氏演説シタル後、決心者、求道者ニ挙手ヲ求ム。之ニ応ジテ決心ヲ表セルモノ十六人、求道者三十四人アリ。

〔一月二十一日、月曜日〕

朝ヨリ雪降ル。星野氏ハ後ニ残り、余ハ東京ニ歸ル。昨夜説教後、ランペ、斎藤ノ二氏ト共ニ協力伝道其ノ他ニ関シテ談話シ夜半ニ至ル。大イニ意志ノ通ゼザルモノアルヲ発見シタリ。斎藤氏ノ如キモ誤解ヲ免レズ。講堂修繕ニ着手ス。嗚呼、之レガ為ニ苦心セルコト幾何ゾヤ。

〔一月二十二日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。礼拝後、福島伝道ノ情況ヲ述ブ。

〔一月二十三日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。宮川己作氏來訪。札幌教会牧師候補者ノ事及ビ一身上ノ件ニ付キ依頼アリ。ミセス・セージ氏ヘドクトル・イムブリート連名ニテ依頼ヲ出ス。其ノ成功ヲ祈ルコト切ナリ。建築ノ為五万弗、地面ノ為壹万五千弗ヲ請求シタリ。

〔一月二十四日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。

〔一月二十五日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。モット氏昨日來朝、本日帝國ホテルニ於



モット

テ会食ヲ求メ來タリタルニヨリ、即チ往キフヒシャル氏ト三人ニテ午餐ヲ共ニシナガラ語ル。事ハ今回同氏ガ日本ノ学生寄宿舎ノ為ニ為シタル報知、即チ米國ノ学生ヨリ我が学生ノ為ニ寄附シタル金貨五万弗ノ事ナリ。明日ハ同氏同道ニテ文部大臣ヲ訪問スル筈ナリ。ホテルヲ出ル時モールス氏夫婦ニ邂逅ス。同氏モモット氏ト同行シタルナリ。

[Saturday, January 26]

Went to the Imperial Hotel. In company with Mott, Honda & Fisher called on Mr. Makino the Minister of Education who received us cordially. Mott spoke about the proposed Hospices and asked his cooperation in getting the Japanese moneyed men to contribute toward the fund. He was very courteous and simply said he will consider the matter and let us know. Then we drove to Count Okuma's. He was very cordial and showed a lively interest in the enterprise and promised to give letters of Introduction to different wealthy men.

In the afternoon Mr. Mott met the Central Committee and others and told them about the delegates and programme of the Conference. He spoke in the Hall in the evening.

[Sunday, January 27]

Preached in the Shiba Church, baptized four young men. At 3 p. m. went to the hotel again to consult with Mr. Mott. Honda, Fisher, Niwa, Komatsu, Otsuka, Kashiwai were present. We considered the different speakers and subjects &c. until he had to start for the station. We went to the Shinbashi

Station to see him off. Mr. Morce went with him. Fisher and other foreign secretaries went with him as far as Shizuoka to talk over different matters with him in the train. He is one of the energetic and active men I have ever seen.

[Monday, January 28]

Taught in the morning. Went at 4 p. m. to the Y. M. C. A. to consider and decide about the Japanese speakers at the Conference and about "the Plan of Campaign" after the Conference. No small undertalking. Niwa came with me to stop over the night.

Another letter from Mr. Landis objecting to the timber brought. He is acting in a very queer manner.

[Tuesday, January 29]

Hana left by 8 o'clock train for Kobe to attend the first meeting of the Board of Managers of Kobe Jogakuin.

Still another letter from Mr. Landis. The thing is getting rather comical. He objects to their digging foundations for the new pillars to be put in. Does he want them to do so without foundation?

[Wednesday, January 30]

With Honda called on Baron Goto at the office of the South Manchurian Railway Company. It is the former residence of Count Kawamura. It commands a fine view of the bay. He showed a lively interest in the coming Conference. He offered to give a garden party to the 500 delegates. He had another plan namely inviting them to a theatre but we discouraged the latter plan. He was going out to the palace and did not have enough time to discuss the plan.

In the afternoon went to the Shimokukai of the Shiba Church at Mr. Harai's. The Daimachi Church held its "Item Shiki" under the new name of Takanawa Church.

[一月三十一日、木曜日]

授業ヲ休ミ、熊野、バラ両氏ヲ携エテ伊藤為吉氏方ニ赴キ、工事ノ進行ヲ尋ネタル上、金巻千円ヲ渡ス。且ツ仕様書ヲ添エ契約書ヲ送ラレンコトヲ請求ス。氏ハ固ヨリ之ヲ快諾ス。南プレスビテリアン・ミッシェンハ弥明治学院ヨリ分離ス赴キテ両ミッシェンニ通知シ来タル赴キナリ。元来彼等ヲシテ学院ニ入ラシタルガ失策ナリキ。今ニシテ彼等ノ去ル驚クニ足ラズ、又惜ムニ足ラザルナリ。恐ラクハ此ノ次ハ教会ノ分

離ナラン。午後イムブリー氏ト学院ノ前途ニ就キ種々談話ス。夕ハ台町改称高輪教会ニ於テ説教ス。新築移転ニ付キ特別伝道説教会ノ第一夜ナリ。求道者六名、姓名ヲ記ス。

明治四十年二月

[二月一日、金曜日]

出院授業例ノ如シ。

午後三時ヨリ神道ト日本古代史トノ關係ニ就キテ久米邦武氏ノ講演アリ。神学生ノ外ニモ來聴者アリ、凡テ四拾名余。元來二時ヨリ開始ノ筈ナリシニ時刻ニナリテモ久米氏來タラズ。使ヲ以テ迎エタルニ、氏ハ次ノ水曜日ヨリノ積リニテ失念シ居ラレタルナリ。本日ノ同氏ノ講話ハ神道研究ノ緒論ニテ余リ秩序立チタル講演ニ非ズ、又氏ハ能弁ニ非ズ。唯悪口が中々上手ナリ。時々諧謔ヲ加味スルガ故ニ人ヲシテ倦マシメズ。

[二月二日、土曜日]

午前本多庸一氏ト共ニ第一高等學校長新渡戸稻造氏ヲ訪問ス。万国学生青年会ノ件ニ付キ後藤男爵ヨリ同氏ニ話置キタル園遊会ノ趣向ヲ曉キ、之ニ付キ意見ヲ述ベンガ為ナリ。後藤氏ハ大会ニ付キ多大ノ趣味ヲ有シ、之ヲ以テ東西ノ融和ノ一機会ト為サント欲スルモノノ如シ。新渡戸氏ヨリ弁当ノ饗応ヲ受ク。午後青年会ニ於テ伝道局常務委員会ヲ開キ、満州伝道ノ件其ノ他ヲ議ス。夕、熊野氏ニ招カレテ網嶋氏ト共ニ夕飯ノ饗応ヲ受ク。花子発熱、インフルーインザノ気味ナ



り。

〔二月三日、日曜日〕

午前芝教会ニ出席ス。瀬ノ上広成氏ニ説教ヲ托ス。説教ハ甚ダ不出来ナリ。余リ説教ノ体ヲ為サズ。将来有力ノ説教者タルベキカ甚ダ疑ワシ。夜芝教会ニ於テ説教ス。花子熱度高シ。愈々インフルエンザナリ。

〔二月四日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。

〔二月五日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後神学部教授会ヲ開ク。更ニ部長ヲ置カントノ議アリ、議一致セズシテ休ム。花子熱尚高シ。

### 東京基督教青年会の歴史につき

#### 青年会の創設

日本に於ける最初の基督教青年会は今を去る四十年前、即ち明治十三年（一八八〇年）五月現今我國の基督教界の指導者として知らるる小崎弘道、井深堀之助、平岩愷保、植村正久、田村直臣、並に神田乃武の諸氏に由て創立せられたり、之れより以前横浜に在任せる外国人は明治七年（一八七四年）の頃在住外国人の間に The Y. M. C. A. of Yokohama なる名称の下に設立せるものありしも其幾年間継続せられしや詳ならず。其後東京に於て明治十一年（一八七八年）に Tokyo Christian Association の名の下に官立学校の外人教師及び宣教師等の組織により築地居留地に設立せられ、会長は当時帝國大学英文科の講師蘇格蘭人ウォター・デキソン氏なり。此会は其性質上専ら社交的団体にして男女共に会員たりし、而して同会は蔵書五百部を有せしも、

〔二月六日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後久米氏第二回ノ講演アリ。

〔二月七日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、高等学部及び普通学部教員会ヲ開キ、本学部ノ試験ノ日割其ノ他ニ付キ評議ス。午後四時ヨリ神田青年会館ニ於テ中央事務委員会ヲ開ク。重ナル問題ハ今回米國ヨリ模範寄宿舎建設ノ為寄贈セラレタル金拾万円分配ノ事ナリキ。東京ニ五万円ハ確定、其ノ内壹万九千円ハ小石川茗荷谷、壹万円ハ神田青年会裏地丈ハ確定シタレドモ、其ノ他ハ調査ノ上確定スルコトニ定メテ特別委員ヲ上グ。金ノ問題ハ何時モ面倒ナリ。仙台ヨリハ笹尾、北野二氏態々上京シテ仙台ノ必要ヲ陳述ス。（以下欠）

悉く之を後に設立せられたる日本人の青年会に継承せり。

青年会なる語は今日一般に使用せらるるも其当時 Y M C A なる文字を基督教青年会として初めて訳出せられたりと聞く、最初  
は京橋区銀座通に次て新看町十三番地に一家を借入れ、主として基督教に関する研究討論及六合雜誌の発刊（第一号は十三年十  
一月十一日発行なりと）小壮基督教徒の交際等を主なる事業とせり。

明治十四年より二十一年まで最初の篤志幹事として木村熊二氏は熱心其事業に従事せられ、伝道的集會、出版及び書籍の回  
覽、宗教及哲学上の討論会等を催し事実上東京に於ける基督教の活動中心点なりし、而して此会に於ける、主なる会員は教役  
者となりし人々なり、其後青年会の事務所は幾度の移転を経て現時の場所に定むることとなれり。

#### 青年会館の建築

明治二十二年（一八八九年）にはジョン・テイ・スウィフト氏が東京役員等の請により紐育なる万国青年会同盟本部より派  
遣せられ、青年会事業の発展に関し画策する所あり。同氏の熱心なる活動は青年会をして発達の第二期に入らしめ、現在の美土  
代町なる煉瓦建築会館は夫に氏の努力に負ふ所多く、米国有志の醸出に係る金六万弗を以て明治二十六年定礎式を行ひ、翌二十  
七年五月四日工事完成を告げたり。当時此会館は市内に於て最も宏麗なる建築物にして講堂、委員室、社交室、図書室及教室数  
個を有し市内基督教徒及青年の活動の用に供せり。五百坪の会館敷地は湯浅治郎氏の尽力により金八千六百七十五円を投じて最  
も便宜の土地を選定して購入せられ、会館及設備費は金三万六千六百円を口し、尚金壹万円の維持基金を存せり。

#### 最初の日本人専任主事

スウィフト氏の来朝に後るる一年、即ち明治二十三年十月丹羽清次郎氏は初めて東京市青年会専任主事として就任せられ、青  
年会各部署の発展の為に大に尽瘁せられ、爾來十五年間勤続せられ、今日の青年会あるを見るは同氏の力多きに居る、特に青  
年会主事の重要な職務と青年事業の成功せるデモンストレーションとは同氏に依て茲に体现せられたりと云ふべし。次で山本  
邦之助氏は明治三十八年九月丹羽氏の後を継ぎ更に事業の拡張に努力し幾多の変遷を経て以て今日に至れり。

#### 学生寄宿舎

明治二十五年頃青年の為に経営したることありしが其後中絶したり、恰も明治四十年四月東京に於て万国基督教学生大会を  
開催せらるる際に、米國基督教青年会の総幹事ジョン・アール・モット博士を通じて米國諸大学卒業の有志より本邦学生寄宿舎  
建築の為に金十万円を寄附せられ、其内より金五万円を東京市内学生のために提供せられたり。東京基督教青年会は此米國人

の好意に係る寄附金を以て小石川、神田、麻布の方面に、三個の寄宿舎を建築せしが、其後移転改築等の為め目下府下中野町及び麻布新網町の二個所に専門学校程度の学生四十名を収容すべき設備を有せり。更に東京商科大学学生のために一個の寄宿舎を新築すべき計画なり。

### 体育館新築及講堂改築

明治四十四年二月米國青年會が日本に於ける基督教事業發達に資せんが為めに會館建築補助の為に金五十万円を提供せらるるに際し、其内九万円を東京基督教青年會の為に寄附せられたれば更に内地に於て有志者の寄附金五万三千余円を得て体育館の新築及講堂の拡張工事に着手し、其竣工を告げたは実に大正六年十月なりとす。爾來東京基督教青年會が本邦に於ける最初の体育館を建設し、比較的完全なる設備を以て斯界の為に尽す所あるは感謝すべきことなりとす。

### 経営及管理

青年會の外部的發展と共に内部に於ける事業の経営及管理上にも大なる進歩を見るに至れり、即ち明治三十五年一月より財政上の獨立を宣言し、經常費に対して其以前米國より十九年間最初は金二千円終りは金四百円と年々漸減の方法を以て寄附せられたるものを全然補助を受けざる事とし、前項学生寄宿舎建設及体育館建築等の為に臨時の寄附を受くる事に止めたり。明治三十六年九月財団法人の組織に改め内務大臣の認可を受けたり、即ち十五名の理事と三名の監事を選挙し青年會事業の経営及管理に當らしむることせり。

累代の理事長として三好退藏、世良田少将、安藤太郎、片岡健吉等の諸氏あり、以て現時の江原素六氏に至る。

(中略)

### 日本に於ける基督教青年會

東京以外の都市に於て基督教青年會事業の開設せらるるものは、大阪、京都、神戸、横浜、長崎、仙台、福岡、名古屋、岡山、京城及び大連等の二十市にして、其内專屬會館を有するものは、大阪、京都、神戸、長崎、横浜、大連の六箇所なり。名古屋及び京城は目下會館建築の準備中とす。

市青年會と對して学生基督教青年會は東京、京都、東北、九州帝国大學を初め、各官私大學及高等學校、各種専門學校等に設立せられ、現に六十個の基督教青年會を見るに至れり。

此等の都市及學生間の基督教青年會は聯合して日本基督教青年會同盟を組織し、其事務所を東京に置き同盟委員會に由りて管理

せらるる。

此同盟の事業の一として毎年一回御殿場東山荘に夏季学校を開き、講演、研究、社交等の方法に由りて靈的方面の修養をなす、又歐洲戦乱に際し聯合軍慰問の使節を派遣し或は西比利亜出征軍及露國窮民の爲めに慰問部を設けて既に数十名の幹事を送り各方面に従事せり。

此日本の同盟を通じて更に万国同盟の一大団体を形成するに至れり。

#### 万国基督教青年会

世界に於ける基督教青年会の起源は今を距ること七十六年以前、即ち西曆一八四四年六月四日英国倫敦市の呉服商店に奉公せる当時二十三才の青年ジョージ・ウィリヤムス氏に由りて創設せられ、商店の風紀改善に熱心なる有志十二名の会合を以て其濫觴とす。爾來其会合は仏國を初め、独逸、米國其他世界の各國に伝播せられ、獨り商業に従事せる青年の間に於けるのみならず、工業、鉄道、学生、海陸軍人、郵便電信、鉱山、移民、其他の事業に關係せる多数の青年間にも広く普及せられ、其實際的効果の著大なりし爲め創立五十年記念会に際し英国ヴィクトリア女皇は特殊の優遇を賜はり、ウィリヤムス氏にナイトの榮爵を授与し貴族に列せられたり。

此の如く万国基督教青年会の同盟は形成せられ、瑞西ゼネバに其本部を置き毎四年目に万国大会を催す。〔大正九年六月、東京基督教青年会創立四十年記念〕

### 基督教青年会の發生

植村正久

明治十三年春の事かと覚ゆ。京橋鍛冶屋町なる小崎弘道氏寓居（講義所）の一室に、数名の基督教の青年信徒会合を催おせり。青年とは言え、湯浅治郎氏、吉田信好氏の如き、立派に一家を成せる紳士等を其の席に見受けた。彼等は種々評議せし結果、東京青年会なるものを組織せり。是れ本邦青年会てう名称を見るの濫觴（濫觴）と言ふべきものか。

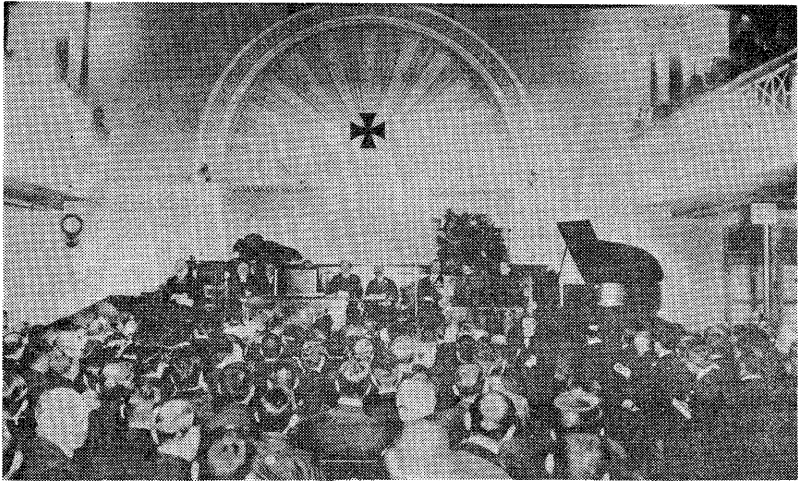
投票の上青年会の役員に選挙せられしは、井深、小崎、植村の三氏にて、會員を正員客員に分ち、毎月二回集會を催し、其の一つは公衆を集めて宗教及び學術の演説をなす仕組みにてありき。神田乃武氏、元良勇次郎氏の如きも正會員として尽力せられたるやに記憶す。特に神田氏の如きは帰朝後間もなきこととて、屢々教会に出入し、青年会創立の會にて種々意見を陳べ、基督

教徒と交際来住すること頗る繁多なりき。然れども教会の有様、氏が米國にて見聞せし所と大いに其の趣を異にし、音楽は勿論、万事蕪雜粗野なるに驚き、「如何も日本の教会はホームライクに非ずして困る」とは、氏が其の友人に屢々告げし所なり。其れかあらぬか、亜米利加の宗教的暖室に成長せし氏を初め多くの信者が、日本の未熟なる教会を厭い、或は社会の手荒き待遇に辟易して、基督教徒に遠ざかり、果ては神の國にも遠ざかりしもの多きは、残念千万と謂わざるべからず。(明治三十一年九月二日「福音新報」、植村正久選集二三〇頁)

## 万国学生青年大会

福音新報第六一五号

第二日午前「青年学生の信仰と品性の建設」なる題下に、万国学生青年会委員長博士フリーズ、上海青年会幹事、雑誌青年の主筆謝鴻賚及び万国青年会書記にて英国人なるガーフィールド・ウィリアムスの三氏の演説あり。続いて本社植村氏「学生伝道に高調せらるべき理想たる基督に似たる生涯」と題して演説せり。其大要は基督教は開発すべき裕なる生命にして、彼の耶蘇の下に走り来つて如何にして永生を嗣ぐべきかを問える古の青年の如く、古人の残せるものを嗣ぎ若しくは西洋人の伝えたるものを嗣ぐべきにあらずや。而して基督教の真髓は実に其代人的犠牲の宗教たるにあり、十字架は基督教と非基督教とを分つ境界線なりと云うにありき。氏の演説は独り自から自家の天地を開拓せんとする我邦基督教徒の抱負と其当に望んで進むべき標的を示せるのみならず、亦新たな解釈を求めて十字架の教に皈らんとせる世界の趨勢を喝破せるものにあらずや。午後は大国民の生活に於ける基督教の発達と現状の題下にテオフィル・マン氏の演説に次いでフランク・レンワード氏英国に於ける基督教の現状を演説し、続いてオベリン大学神学部教頭ボスウォルス氏の吾等の主耶蘇基督と題せる演説あり。



万国大会発会式(四月三日夜)

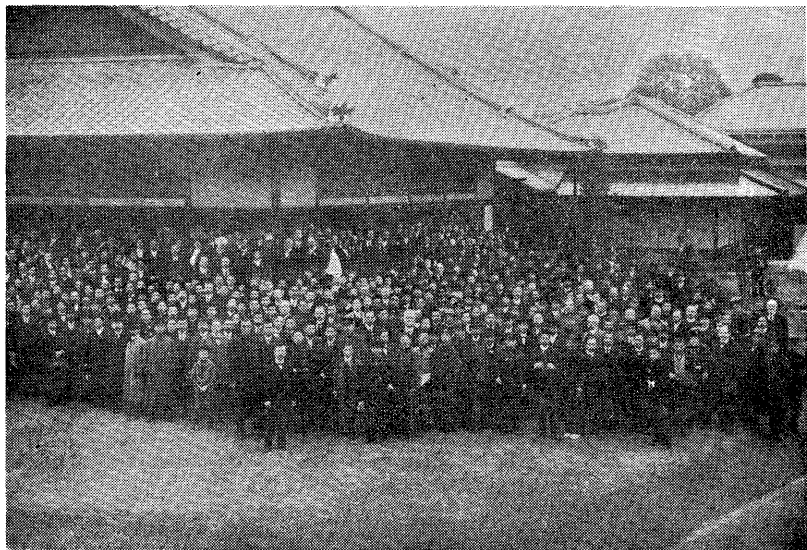
壇上の人、左より(1)井深縄之助氏(2)グリーン氏(3)江原素六氏(4)尾崎行雄氏  
(5)本多庸一氏(6)フリス氏(7)モット氏 (8,9)奏楽者

り、基督の個人的意識とそが人心に及ぼせる力に関し数箇条に涉りて論ぜり。敢えて斬新なりと云わざれども条理暢達にて論旨明白なりき。氏の演説終りて代表者等は皆手を携えて米国大使の招待会に赴かんが為めに靈南坂なる米国大使館に赴けり。夜オックスフォード大学教授マカリスト博士の基督教に対する科学的態度と題せる演説あり。博士は学界に重きをなせる学者にして、其精緻なる論弁は科学と基督教の調和に感える我国人に大なる益を与えたるべし。マカリスト博士の演説終るや、学徳一世に秀で其徳風天下に仰慕せらるるシンプソン博士趣味深く愛嬌こぼるる一場の演説をなせり。シンプソン博士の名はプログラム中に無かりしかば、我等は老熟純化せる基督教的紳士の典型と云うべき老博士の言を聞くを得ざるべきかと思ひしに、此夜偶然此演説を聞くの機会を得たり。我等の喜び果して如何ぞや。

第三日午前、基督の王国の拡張に尽瘁せる青年学生なる題下に印度の代表者アザライア、北京大学教授陳維城

及び宮川經輝氏の演説あり。三氏の演説に次いで印度幹事たるシャーウッド・エデー氏の勇敢にして己を犠牲とする精神に訴うと題せる演説あり。午後は大国民の生活に於ける基督教の進歩と現状なる題にて教授ポア氏仏国の事情を語り、米国バルチモア女学校々長ガウチャー氏合衆国の事情を語れり。此時司会者はプログラムに依れば、露国青年会代表者ニコライ男爵の演説ある筈なりしかども、閉会の時刻既に迫りたればとて、ニコライ男爵に代りて一場の演説をなさんことを賓客として此会に参列せしニコライ大主教に乞えり。斯くてニコライ大主教は其偉大なる老軀を演壇に運び日本語を以て演説せり。彼は四十五年前に我国に渡來せることより説き起こし、神、儒、仏の三教を論じて彼等は子もりにて恰も旧約の新約に於ける如く基督教の準備なりと云い、日本国民が基督教を取る可き時期正に來れりと論結せり。彼の演説は短かりしも此会に於ける演説中の最も意義あるものの一なりき。而して其鬣々たる肩に垂るる白髪を浪立たせ手を戈にして語る其無邪氣にして真率なる態度は、一人の心を魅するものありき。夜はジョン・カーター博士、アドリアニと朝鮮人尹致靈三氏の演説あり。

第四日午前、大国民の生活に於ける基督教の進歩と現状の題下にハントン氏亞非利加の事情を説き、ファーギューアー氏印度の事情を語れり。ファーギューアー氏の語る所によれば印度の信者の中には七十万の遺産を基督の爲めに献げたるものありと云う。こは我国基督教の歴史に未だ見ざる所にて我国信者の精神を刺戟するに足るものならんか。二氏の演説に次いで、海老名弾正氏英語を以て日本に於ける三百年前デスイットの伝道歴史より説き起こし現時の情勢に説き及ぼし、自ら日本語に訳せり。氏の英語は中々流暢にして立派に、用意の程も推し量られてゆかしかりき。其長髯を撫してどれ丈けお分りになりましたかと言われし時の得意の状は定めて世界の代表者も感嘆したらん。此日午後より大隈伯の招きにより代表者一同伯爵邸の園遊会に臨めり。



万国学生青年大会参列者（大隈伯邸園遊会）

第五日の祈祷会に於ける教授ボスウォルス氏の演説は頗る有力なりし由なれども、予は去り難き事情ありて参列することを得ざりしかば、此日の出来事は一切之を知らず。同夜の総幹事モット氏の告別演説には終りに近づいて漸く参列することを得たるが、一千近くの聴衆は恰も酔えるが如き有様にて、深く感に打たれたるが如く見えき。

万国学生青年大会は此の如くして始まり此の如くして終れり。此会に望みを属すること大なりしものは、或いは厭き足らぬ思いやしたるならん。然れども、此種の会合に此以上を望むは恐らくは当を得たるものならざらん。而して此会の印象と其結果亦決して小ならざるものあるを信ぜんと欲す。議長フリーズ氏は快活なる人物にて何時も場内に響き渡る大音声を出し、讃美歌の番号を呼ぶ時の如き恰も号令をかくるが如くなりしは、斯る大集会の司会者として頗る其人を得たりと見えき。楽器にコルネットを用いたるは勇壯なる気



象を鼓吹するの効大なりしならん。

日曜日、南滿鐵道總裁後藤男爵は代表者一同を後樂園に招きて園遊会を開けり。後藤氏の用意周到にして鄭重なる歓待と我國園芸の精神たる林泉の美は定めて連日の勞を慰して余りありたるべし。〔福音新報第六一五号明治四十年四月十一日〕

### 基督教青年会万国大会寄附金募集趣意書

基督教學生青年会万国大会は本年四月を期して東京に開かれんとす。日露戦争後世界の注視専ら我が帝國に集まれる時に於て我が國に開かるる世界的集會の嚆矢として此の大会の開かるるは愉快なることにあらずや。抑も我が基督教青年会は近世に於ける最も新しく、最も活氣に富める運動なり。其の聯合して万国同盟大組織せしは今を距る五十二年巴里に開かれたる集會に始まり。爾來非常なる速力を以て膨脹発達し、今や欧米の基督教會は云うも更なり、東洋各國の都府學校の青年会をも網羅し絶えず氣脈を通して、基督の爲め正義の爲めに隊伍整然暗黒の力と戦いつつあり。而して此の同盟の万国大会は或いは米國に、或いは仏國、或いは獨逸に、或いは丁抹に隔年に開かれ、又昨年は巴里及び和蘭に開かれて会毎に我が國よりも有力なる代表者を送り非常の厚遇を受けたり。

本春大会が日本に開かるるに就きては、世界各國の有力なる代表者の來集すべきは云う迄もなく、宗教界思想界に重望ある學者（例えば米國ユニオン神學校長ホール博士の如き、聖書學者ボスウォース教授の如き、獨逸ハールレ大学のハイム博士の如き）又実業界の勢力ある紳士の之を機として來遊すべく既に確定せるものあり。本年桜花咲く頃は我が國の教界は百花爛漫の觀を呈すべし。今日精神上の要求盛んなる時に於て我等の人物を迎え、其の高論卓説を聴くことに依り、独り青年会と云わず、基督教會と云わず、日本の社會が受くる裨益の多大なるものあらん。又我等の人々は大会の前後、部署を分ちて全国各地方に運動を試むることとなるを以て、地方の伝道上天なる声援となるべきは云うを待たざる所也。又此等の人々は戦勝後の我が國に來たり大いに得る所あらんことを期待して來たるべく、殊に印度清國より來會すべき多数の代表者が東洋の先進國たる日本に來たり我が

宗教、文物の實際を目撃して携え行く精神は将来東洋の教化に向いて一大勢力となるべきや疑を容れず。希わくば此の逸すべからざる機会を善用して、大いに受け大いに与え、我が国をして世界の精神的活動の重要な骨子たらしめ、以て神の我が国民に授けたる天職の幾分を果たさしめんこと吾人の切望なり。

吾人は此の拳を起すに当たり約七千数百円を内外有志者より仰がざるべからず。願わくは多大の同情と興味とを以て応分の義捐を投ぜられむことを望みて已まざる也。

左の件御注意迄に申上候

一、寄附金額は多少を論せず御好意を迎え申可候

二、寄附金締切日を三期に分ち候に付き分納せらるるも差支無之候

第一期三十九年九月三十日 第二期十二月三十一日 第三期(四十年)二月二十八日

三、寄送名宛は東京神田区美土代町三丁目三番地日本基督教青年会同盟宛に被成下度候  
四、振出局は「神田区小川町郵便局」と被成下度候

明治四十年 月 日

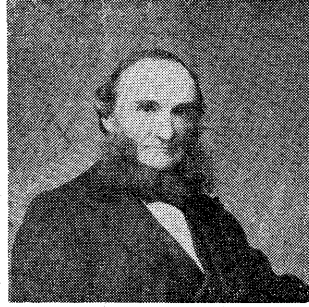
万国基督教青年会学生大会募集委員

委員長 渡 辺 暢

本多庸一 井深槐之助 笹森宇一郎 元田作之進 宮川経輝 平沢均治 デーリング 笹尾糸太郎 佐島啓助 山井三七  
木村禎橘 宮本貞三郎 鶴崎庚午郎 田村貞亮 中津親議 小西恭介 シュネーダー 小崎弘道 大島多計比古 大村益荒  
菅沼元之助 ミラール 村松吉太郎 ヘール 福田令寿 中村和之雄 山本邦之助 高野重三 吉村鉄之助 高木貞衛 高  
木正義 角倉賢道 猪俣泰作

### 有力なる来会者

欧米各国より来たるべき有名なる人々の名は前号にも掲載したれども、其の後加わりたる人も少なからざれば



アレキサンダー・シムプソン

重ねて之を列記す。

△アレキサンダー・シムプソン博士—スコットランドのエデンボロー大学教授にして前に医科の学長たりし人なり。名誉博士、医学博士、科学博士の学位を有し「ナイト」の勲位を有する学界の耆宿なり。

△ドナルド・マカリストア博士—英国ケムブリヂ大学のセントジョン・カレッジの医学研究部長にして科学界に於ては重要な地位に在りと云う。医学博士、ドクトル・オブ・シビル・ロオ等の学位を有す。

△チャールズ・カスバート・ホール博士—米国ニューヨーク市ユニオン神学校々長にして宗教界の重望を負えり。シカゴ大学の依頼により今年重ねて講演のため印度に行けり。名誉博士、神学博士の学位を有す。

△ボスウォース教授—米国オバリン大学の教授にして聖書学者として有名なる人なり。著書多し。



カール・フレイス

△カール・フレイス博士—丁抹の人哲学博士の学位を有す。万国学生青年会の会長は此の人なり。(前号の記事は誤あり。)

△ジョン・モット氏—万国学生青年会総幹事の地位に在り、世界の青年間の伝道の勇将として活動しつある人物なり。既に二度日本に來たり活発なる事業を為せり。

△ジョン・ワナメーカー氏—米国人、世界屈指の豪商にして基督教的紳士な

り。



エミール・ソオター



アドリヤニ



ポータリス

△ポオタリス伯—仏国の名門にして去年巴里に於て開かれたる万国基督教青年大会の議長たり。

△ボイ教授—仏国プロテスタント教育の中核たるモントオバン神学校の教授。

△アドリヤニ博士—和蘭の学者にして思想家なり。

△ガーチャー監督—米國ボルチモアの女子大学の校長なり。

青年会の幹事として各国を代表して来る人々には

エミル・ソオター(仏国) イー・チャー・コルトン及びアール・シー・モルス

(米國) チイ・タツロー(英國) カアター及びアザリヤ(印度) テオフィル・

マン(独逸) 諸氏

清國より来るべき人々のうち既に定まりたるは

謝鴻賓(H. S. Zia) 数年間上海英華書院の教授たり。今は中國青年會編輯部

主任たり。著訳多し。曾錫曾(S. K. Tsao) 清國最初の市青年會の幹事たり。

昨年和蘭ザイストの万国大会に出席したり。

李氏(Y. S. Li) 元は医学を修め教授たりしが一年前決心して伝道事業に身を

を献じ有力なる活動をなしつつあり。

Prof. W. C. Chen 十年以上北京大学の教授の職に在りたり。先年丁抹ソロ

の万国大会に出席したり。〔開拓者第二卷第三号明治四十年三月一日〕

## 世界の教化に対する東洋学生の責任

神学博士 井深梶之助

余の論すべき問題は先の演説者と同じく世界的伝道に対する東洋学生の責任という事なるが、抑も世界的伝道とは如何なる事を意味するか是れ第一に生ずる所の疑問なり。此の疑問に就いては随分八釜敷き議論なきに非ざれども、今は之を論ずるの時間なく又その必要あるを認めず。今は唯主イエス・キリストの遺命を奉じて世界万国にその福音を宣伝するの意義に解するを以て足れりとせんと欲す。イエス彼等に曰いけるは、遍く世界を廻りて凡ての人に福音を宣伝えよと。夫れ此の命令を遵奉して天下に福音を宣伝するの義務ある事は、凡てのキリスト信徒の等しく認識する所なれば今更に之を主張するの必要なからん。寧ろ此の問題に於て特に吾人の注意を要するは西洋に対する東洋と他の階級例えば教員又は役者等に対する学生にありとす。

然らば、キリストの福音を遍く世界に宣伝するに於て東洋の学生たる者は何等の特別責任ありや。世界的伝道に対し支那、印度及び日本の青年学生は如何なる機会と可能を有するか。欧米人は今日も尚東洋を指して絶東と呼び、吾人も又欧州を呼んで西洋という。然れども、今日に至りては単にその距離上より見れば東西の間に於て此の如き懸隔は存せざるなり。今を去ること五十年、最初のプロテスタント派の宣教師の渡来したる時には、彼等がニウヨークを出帆して後六カ月目に漸く神奈川に着したり。今日は三週間にて同市より日本に到着すること容易なり。シベリヤ鉄道の今一層整頓するに於ては五十日間に於て世界を一週するは敢えて難事に非ざるべし。此等の事実を記憶する時は、或いは絶東と呼び、或いは絶西と云う、殆んど意味なきに似たり。

然れども、既に往古に於ても東西の国民をして相互に隔離せしめたる所の者は単に地理的に非ざりしが如く、現今に於ても亦東洋の諸国民との間には地理的以外の懸隔ある事を忘却すべからず。而してその懸隔たるや、交通の機関は如何に長足の進歩を為すとも恐らくは容易に消滅せざるべし。兎に角に、尚長年月の間は東洋は依然として東洋たり、西洋は西洋たらんと断言して不可なるべし。而して此に生ずる問題は、東洋諸国を福音化するの責任は果して何人の責なるかと云うにあり。

今更説明する迄もなく、基督教はその起源に於て東洋的の宗教なり。基督教は亜細亞大陸の西南隅に誕まれたり。然れども、神の摂理によりて前なる者は後に成り、後なる者は前に成り、近代の東洋諸国民は欧米に於ける基督の教会より福音を宣せられたり。是れ最も明白なる歴史上の事実にして、東洋の基督信者が欧米の基督信者に対して負う所の大なる債務なり。永く忘る

#### 第四篇

べからざる所の恩誼なりとす。唯に既往に於いてその恩誼あるのみならず、将来に於ても尚東洋に神国を建設拡張せんが為めに、西洋に於ける基督教会の後援を要する国民も一にして足らざるべし。

然れども、吾人の一瞬間も忘却すべからざる事實は、如何なる国民といえ共、外国宣教師の伝道の上に依りては決して全く福音化せられ難き事なり。何れの国を論ぜず、基督教の初めて伝わるは外国宣教師の伝道に依るを常とす。然れども、その伝道事業も或る程度に達すれば、神がその国民中より指導者として起こし給う所の人物によりて發展せられざるべからず。

東洋伝道に対する外国宣教師の偉績を認識するに於て余は敢えて他に譲らざるべし。今試みに、ウィルリアム・ケリ、ヘンリー・マルチン、ロボルト・モリソン、アドニラム・ジャドソン、アレキサンドル・ダフ等の名を列挙し来たらば外国宣教師の功績は明瞭ならん。余自らも米国宣教師より初めてキリストの教を聞き、其の英語の教育を受けたる者なり。即ち我が恩師ブラオン翁其人なり。然れども、余は外国教師に対し又その事業に対し誠実なる敬意を表すると同時に、凡そ一国民を真に福音化するはその国民中より起こりたる人物に待たざるべからざるの事實を忘却する能わざるなり。

然して、之が為には有力なる教役者を養成するの必要あるは論を俟たず。固より凡て信者たるものは、各自その分に応じてキリストとその救いを同胞に伝うるの任あり。然れども、支那に於ても印度に於ても日本に於ても、信者悉く説教者たり難く又指導者たり難き事は、欧米諸国と何の異なる所あらんや。之が為には特別に召され特別に養成せられたる人物を要す。唯熱心に富むのみならず、人を教え導くに足る程の学識と人格とを具うる人物を要するなり。是れ絶対的の必要なり。余は敢えて断言せん、何れの国を論ぜず特別に教育養成せられたる教役者なくしては、決して強固にして自給独立する教会を見ること能わざるべし。

夫れキリスト信者たる学生は個人とし、基督教青年会は団体として、学生間に伝道するの機会を極めて多し。官立学校に於ても若し熱心なる学生がその機会を利用して同窓間に宣道せば、その好結果或いは予想の外なるものあらん。到底局外者の企図すべからざる程の好果を見ることなきを保すべからず。

然れども、苟くも広き意味に於て、日本若しくは支那、若しくは印度国民を福音化せんには、之が為に特別に召され特別に教育せられ且つ之が為に全生涯を献げる所の人物なかるべからざる事は明々白白なりとす。蓋し是れ歴史の明白なる教訓にして、イエス・キリストの先例に適合せる事なり。何となれば、キリストは神の国を建設するに当りて先ず第一に、十二弟子を選びて特別に彼等を教育し給ひしに非ずや。

伝道の為に特別に人才を養成せんと欲せば、完備せる神学校の必要なる事、又特にその候補者を募集すべき所の基督教主義の

普通校の必要なるは勿論なり。是れ亦一個の重要問題にして開陳せんと欲する意見一にして足らずと雖も、時間に制限あるを以て今は之を省き既に略述したる所の要点を左に列挙して以て此の演説を結ばんと欲す。

第一 東洋伝道に対して外国宣教師の功勞多大なるを認識す。

第二 然れども、東洋伝道の重なる責任は東洋の基督信者自ら之を負担せざるべからず。

第三 東洋伝道に対して学生基督教青年会は一の重要なる地位を有する者なれども、未だ此の事実の明白に認証せられざるを遺憾とす。

第四 然れども、一層広く且つ深き意味に於て一國民を福音化せんには、その國民の青年中より特に伝道に従事する所の教役者を得ざるべからず。然してその教役者は數に於ても強く信仰に於ても強く、且つ適當なる訓練を經、百難を排して伝道に従事する者たるを要す。

第五 然れども、教役者は重に教育ある青年即ちキリスト教信徒たる学生中に之を求むべくんば、彼等を特別に教育せんが爲に完備せる神学校の必要なるは論を俟たず。然れども、亦如何に完備せる神学校の設置ありとも、若しも青年学生中に神の召に応じ、自ら振って立ち福音の宣伝に従事するものあるに非ずんば、又何の益かあらん。

収稼は多く工人は少なし。故にその稼主に工人を収稼場に送らんことを願うべし。〔明治四十年五月二十五日 日本基督教青年会同盟発行 柏井園編万国青年大会講演集〕

## ホール博士の品性

井深梶之助

私は曾て暫くの間ユニオン神学校に学んだ所の者でございます。併して其の當時に於きましてはホール博士はまだブルークリンに於ける所の第一プレスピテリアン教会の牧師をして居られたのでありまして、世間ではまだ其の名前を能く知らぬ位でありました。当時紐育及びブルークリンに於ては數多の有名な牧師達が居りまして私も学校に居ります間、日曜日には夫等の有名な人々の説教を聴きましたが、まだホール博士の名は余り世間



霍尔博士

に知られて居りませぬために、遂に其の説教を聴いたことが無かったのであります。従つて面会したこともございませぬ。私が初めて先生に面会を致しましたのは先生が初回に日本に参られた時でございます。併しながら、一度先生に会いましたときよりして恰も旧識の如き心持が致したのであります。それから又今回先生の訃音に接してから色々先生の事を考え、且つ其の書簡などを繰返して見ますの中に、先生が初めて日本に参られたときに、大阪より私の方に送られたる所の書簡を見出しましたから、其の一節を一寸此処に読みましょうと思ひますが、此の一言によつても先生は如何なる精神を以て日本に来られたかという事を推察することが出来ます。併し是は日本ばかりではございませぬ、凡て東洋到る処に此の如き精神を以て来られたと思ひます。然かも是はまだ私が先生に一回も面会しませぬ前のことでありますが、斯う申して居られます。「私は是非貴君に御面会をして日本の現在の状態の或る方面に付きて極く静かに密かに御話をしたいと思ふ。夫れ故にどうか私が東京に参るときには是非其の機会を私に与えて下さい」斯う云うような如何にも謙遜なる言葉でございます。私は数十年来海外よりして伝道視察の為、或いは其の他の視察研究の目的を以て来朝した所の外国の紳士学者等に随分多く接して居ります。けれども、未だ曾て面会をせぬ前よりして此の如き態度を以て来られた所の人は稀れてございます。既に斯う云う精神でありますからして、只一回会見しましても実に色々大切な事に付いて、非常に趣味ある所の談話をする事が出来たのであります。加之しかのみならず、当会館に於ける前回の講演の時に於きましても、最後の講演の時に於きましても、数回出席して先生の講演を親しく聴くことが出来、又其の後に於きましても度々親しく談話を



交えることも出来、且つ又其の後渡米致したときには、ユニオン神学校を訪問して、先生及び其の家族にも面会を致し、其の家にも招かれ、又先生のクラブにも招かれて一方ならぬ厚遇を受けた次第でございます。私は本日ホール博士の為に此の追悼会の催されるに当りまして、此処に立って先生の人物を批評し、若しくは其の事業を論じようと云う考えは毛頭無いのであります。唯此の場合私が平素先生に対して有つ所の所感の一端を披瀝して、聊か追悼の意を表したいと思つてでございます。

先生がユニオン神学校の校長の職に就かれた時には、同神学校は実に容易ならざる状態であつたのであります。が、丁度其の少し前にユニオン神学校が奮闘しつゝある時に私は学校に居りました。即ち彼のブリッグスの異端事件のあつたときでございます。私は丁度其の時学校に居りまして当時の校長ヘスティング博士が非常に苦心をせられたことも面の前まへに見ました。当時ユニオンに対する非難攻撃の声は中々激烈なものであります。ホール博士は即ち其の後を承けて難局に当られたのであります。其の措置誠に宜しきに適い、それがためユニオン神学校の基礎は、愈々堅固になり、且つ教会内外の信用も益々厚くなりまして、近來の進歩發展は実に顕著なるものでございます。即ち教授の數に於ても、其の人物學識に於ても、又其の生徒の數に於ても、質に於ても、恐らく今日北米合衆國中ユニオン神学校の右に出る者は無からうと思ひます。唯それのみならずユニオン神学校は、我が日本の神学生、教役者とは一種特別なる所の關係があるのでございます。尤も是はホール博士が校長になられぬ前からございましたけれども、特に先生の尽力に由りて益々關係が親密になつたのでございます。申す迄もなく、日本よりして米國に留学する人が沢山ございます。然うして単に其の学生の頭數から云えば、或いはエール若しくはハーバート、コロンビヤ等の大學に遊ぶ人の方が多數であると思ひますが、神學研究の目的で日本

#### 第四篇

の学生が最も多く学んだ所の神学校と云うものは、ユニオンが一番であろうと思います。又それのみならず、ユニオンに学ぶ日本の神学生は、一教派の人のみではありませぬ、是が其の特長の一つであります。其の歴史上から見れば、ユニオンはプレスビテリアン教会と最も深い関係があります。併し其の態度に於て更に教派的でなく、唯一教派の機関と云うのでなく、総ての基督教会の爲め、総てのクリスチャンの爲に、健全なる神学と穩健なる聖書の解釈を与えると言うのが、此の学校の目的であります。日本より此の校に留学する青年学生に於ても、唯プレスビテリアン教会に縁故の有る人ばかりでなく、或いはメソヂスト教会の人もあり、或いは組合教会の人もありますが、之等の日本の神学生に対してホール先生が如何にも深切であります。唯昨年十一月にホール先生が送られたる手紙に斯う云う事が書いてあります。「我が神学校も本年は我が神学校の歴史あつて以来大多数の学生を以て此の学年を始むることになりました。日本人は今年九名程居るが、皆良い人物であります。唯甚だ遺憾なことには、其の中の一人の靱倉と云う人が大病であつて、目下病院に入つて居る、病症は盲腸炎で以て二日程前に手術をした所であります」と云う事が書いてあります。是は唯一寸したような事でありませぬけれども、先に御聴きになった所の事と併せて之を御考えになりましたならば、如何に先生が日本人の学生の爲に深き同情を持って居られたかと云うことが、能く御分りであらうと思ひます。其の他度々手紙も贈答致しましたが、大抵此の如き事でございます。多分先生の深切は総ての人に対して同様であつたろうと思ひますが、吾々より考えますときには、吾々日本人に対しては特別に深切であつたように感ぜられます。

それから是は誰でも一度ホール博士に接した所の人は感ずることであらうと思ひますが、先生の学識力量と云うことは別としましても、其の人物の如何にも高尚にして而かも同情の厚い事であります。昔より書物を読んで



準にして、そうして東洋の事物を測度するからである。どうも東洋人の眼を以て東洋を觸ることが出来ぬためである。言換えれば、東洋の思想を尊重することが出来ぬからであります。然るに、ホール先生の態度は此の点に就いて非常に彼等と違つて居ることを認めます。実は吾々から見ますと、是は余り鼻負過ぎるではないか、余り先生が東洋の事を重んじ過ぎはせぬかと疑うたことが度々あつた位であります。そうして今日の欧羅巴、亜米利加の基督教と云うものは、決してまだ完全なものでない。決してまだ円満絶對的に發展したものでない。基督の心が完全に現われるには、まだまだ余地がある。それには東洋的思想、即ち印度人の默想的、又は日本人の活動的特長も貢獻する所があつて、然かる後初めて茲に基督教が円満なる發展を為すことが出来るであらうと云うことを深く信じて居られたのであります。然して東西の文明、或いは東西の基督教を融化調和するを以て、我が天職と確信して之に全力を注がれたのであります。そうして先生は是が為に遂に犠牲となられたのであります。

もう一つ茲に彼の先生の手紙があります。是は初めて日本に来て歸られる時に船中に於て書かれた所の手紙であります。「私は此の横浜に於て諸君より受けたる実に立派なる贈物に対しては、晚香坡に達した後、改めて感謝状を差出す積りであります。私は実に諸君の親切に対して言葉が無い……」先生は人に対して親切である如く、人の親切を感じることも又極く深いのであります。実はそんな立派な物ではないのでありますけれども、先生はそう云うように見られたのでございましょう。「どうぞ貴君は私を以て、真実の愛と嘆美とを以て、日本を仰慕する一人として見て下さい。私は日本国民の精神には深く、我が心を動かされました。確に日本は自今列國の關係に於て大いに見るべき所の事を成すに違いない」と言われたが、是が即ち日露戦争前の事であります。同情ある者にして初めて能く物の真相を知ると云うことがありますが、まだ此の時は日本の真価が世界一般に認

められて居らなかつたのでありますけれども、先生は早く既に日本の眞価を認めて居られたのであります。此の点に就いては実に一の予言者と見ても宜しかろうと思ひます。「再び日本に來たつて、諸君と相携えて働くことが出来るや否やは分らぬけれども、望むらくは神その道を開き給はんことを」彼は其の祈りの如くに再び日本に來て更に有益なる講談を爲し、更に大なる感化を我が國民に与えられたのであります。如何なる神の御摂理でありますか、私共之を説明することが出来ませぬけれども、遂にホール先生は東洋の爲に尽粹せられたる其の結果として、尙前途多望なる春秋に富める身を以て、遂に此の世を去られたことは、御同然に実に遺憾千萬な次第でございます。

右は去る五月三日ホール博士追悼会席上講演の筆記にして井深博士の訂正を経たり。〔開拓者第三卷第六号

明治四十一年六月一日〕

第  
五  
篇



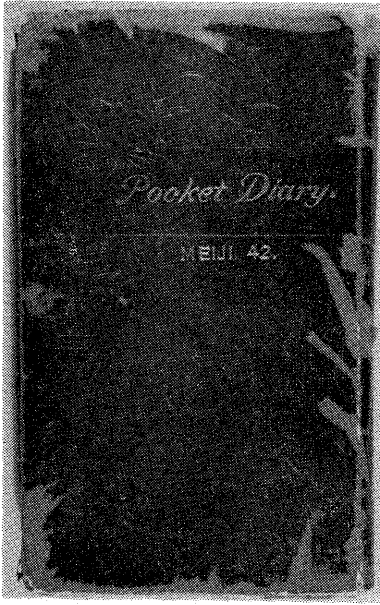
# 明治四十二年の井深日記と宣教開始五十年記念会

## 明治四十二年井深先生日記

明治四十二年一月

〔一月一日、金曜日〕

午前六時起床、七時家族一同食事ニ就キ感謝シテ雑煮ヲ食ス。晴天ナレドモ夜来寒氣強シ。八時半宅ヲ出テ年始廻リヲ



井深梶之助明治42年日記表紙

為ス。荒川、片山、小石川松平子爵邸、津田、霞町井深等ヲ歴訪シテ夕刻帰宅ス。留守中二片山夫婦来タリ夕食ヲシテ帰ル。

〔一月二日、土曜日〕

在宅、年賀状ノ返事ヲ書ク。百枚ニテ足ラズ更ニ五十枚ヲ求ム。学院ヨリ別ニ熊野氏ト兩名ニテ三百枚ヲ出シタリ。津田鍛雄氏来訪午餐ヲ共ニス。真野正雄、沼沢竜雄、春日季雄等来タリ歌加留多ヲ取ル。

〔一月四日、月曜日〕

山本氏ト会见シ、同氏受持ノ授業上其ノ他ノ事ニ付キ打合せヲ為ス。即チ今学期ヨリ同氏ヲ牧会学ノ外ニ教会政治及ビ別年、三年、二年ノ説教ヲ負担スルコトト定ム。在米三好務氏ニ書状ヲ出ス。

〔一月五日、火曜日〕

昨夜十時半過ギ文雄帰宅ス。地洋丸昨日横浜ニ入港ス。一泊シテ今朝帰船ス。台湾沖ニテ大風ニ逢イ、舵機ヲ破





This Indenture made the twenty third day of February in the year of our Lord one thousand eight hundred and ninety three Between James Lansing Morrison of the City, U. S. A., and William Embury of Tokio in Japan and Samuel L. Morrison of Missouri in the Middle West Territory of the United States of America the parties of the first part and John C. Ballagh and Martin A. Wyckoff both of Tokio in Japan hereinafter called the parties of the second part Whereas by an indenture dated the 23<sup>rd</sup> day of April 1879 the said James Lansing Morrison and William Embury did give and assign unto the parties of the first part as Trustees of the Union Theological School of Tokio and their successors in said office forever in trust for and to the use benefit and behoof of said school all that lot of land known as Number One Hundred (77) Parkiji in the Foreign Settlement of Tokio together with all things movable and immovable therein belonging and appurtenant thereto and all right title and interest of them the said James Lansing Morrison and William Embury therein and Whereas the parties of the first part since the date of said indenture have held title to said lot hereunto and according to the terms thereof and have received and collected all the rents and profits thereon and have not received any notice or demand for the redemption of said lot and Whereas the said James Lansing Morrison and Samuel L. Morrison have long since ceased to reside in Japan and the said William Embury is about to depart from Japan by ocean whereto the parties of the first part are no longer in a position conveniently or properly to discharge his duties as trustee hereunto and Whereas it is desired by all parties concerned that the title to said property should be conveyed to new trustees on the trusts aforesaid

Now this Indenture Witnesseth that for effecting the said desire and to fulfil and carry same according to the title and substance of said deed the parties of the

(1)

(3)

first part do hereby convey grant and assign unto the parties of the second part as Trustees of the said Union Theological School of Tokio and their successors in the office of Trustees of said school an of said indenture in witness whereof All the said lot of land known as lot Number One Hundred (77) Parkiji in the Foreign Settlement of Tokio together with all buildings structures and improvements therein and all things movable and immovable therein and all rents and profits thereon and demand of the parties of the first part in it as one of the same under the title deed thereof granted by the Japanese Government dated 1 July 1870 the parties of the second part observing the conditions of said deed and under and by virtue of all the deeds and conveyances and orders of the said John C. Ballagh the said property unto the use of the parties of the second part and their successors in office forever

In Trust nevertheless that no part of the same shall be used or disposed of for any other purpose than that which has been held by the parties of the first part and to the benefit and behoof of the said Union Theological School of Tokio and its successors in succession in trust by which means money and earnings as successors may be called In Witness Whereof the said parties of the second part and their Trustees have signed the day and year first above written John Morrison Seigneur and delivered by Wladimir Spiridow he said parties in the presence of John C. Ballagh and Martin A. Wyckoff as witnesses of J. H. B.

at the City of New York January 19<sup>th</sup> 1893  
John M. Lecon  
 Notary Public in and for the State of New York  
 in the presence of John C. Ballagh and Martin A. Wyckoff

(2)

United States Consulate General ss.  
 Nagasaki, Japan.  
 On the twenty third day of February, 1893, before me personally came William L. Morrison, of the City of New York, U. S. A., and Samuel L. Morrison, of the Middle West Territory of the United States of America, and John C. Ballagh and Martin A. Wyckoff, both of Tokio, in Japan, who being duly sworn, depose and say that they are the parties of the first part of an indenture bearing date the 23<sup>rd</sup> day of April, 1879, in and to the use, benefit and behoof of the Union Theological School of Tokio, in the Foreign Settlement of Tokio, Japan, and that the said indenture is now in force and effect, and that the parties of the first part of said indenture have since the date thereof conveyed the title to the premises therein mentioned to the parties of the second part of said indenture, and that the parties of the second part of said indenture are now in possession and control of the premises therein mentioned, and that the parties of the first part of said indenture are no longer in a position conveniently or properly to discharge their duties as trustees of the premises therein mentioned, and that it is desired by all parties concerned that the title to the premises therein mentioned should be conveyed to new trustees on the trusts aforesaid.

Witness my hand and the seal of the Consulate General of the United States of America at Nagasaki, Japan, this 23<sup>rd</sup> day of February, 1893.

John M. Lecon  
 Notary Public in and for the United States of America

(4)

U. S. Consulate General Nagasaki, Japan December 23 <sup>rd</sup> 1893 1893	October 23 <sup>rd</sup> 1893 James L. Morrison William Embury Samuel L. Morrison John C. Ballagh Martin A. Wyckoff Trustees Conveyance of No. 77 Parkiji, Tokio, Japan. Men as Tru.
--	--

一八九三年二月二十三日付  
 アメルマン、インブリー、マクラレンよりバラ及びワイコフ宛  
 築地十七番土地譲渡證書

Copy

THE BOARD OF FOREIGN MISSIONS

PRESBYTERIAN CHURCH IN THE U. S. A.

Report on Property of Board at Station Tokyo of Mission, East Japan (1)

Note—Use a blank for each piece of property

Date June 20th 1906

- 1. Name by which property or building is known: Union Theological Seminary of Tokyo.
2. Location—Send with this report: a. Diagram of lot, with measurements and position of buildings. b. Plans and general description of buildings, with photograph if possible.
3. If dwelling house, give number of sleeping rooms available.
4. Number of present occupants.
5. Other buildings; give facts as to use and accommodations.

- 6. When bought: April 23rd 1879.
7. Price paid: \$575.
8. Expended on improvements: \$1030.
9. Present value: Lot \$420, Buildings \$1780, Total Value \$2200.
10. Deed from whom: Samuel H. Sherman, William Ambrose and Samuel H. Sherman - Trustees for Union Theological.
11. Deed to whom: J.W.C. Ballagh and W. N. Wyckoff - Trustees for Union Theol. School of Tokyo.
12. Deed in whose custody: J.W.C. Ballagh.
13. When title not in Board's name, has any declaration of trust or other paper been executed by person in whose name title stands to secure Board's rights?
14. If such paper exists, send the paper to Board's Treasurer.

(2)

About interest paid: J.W.C. Ballagh (Signature) Miyi Ochiai (Address)

Date June 20th 1906

When filled, please forward to one of our Writers, Dr. J. S. Young, 15 Fifth Avenue, New York.

米国長老教会外国ミッション宛て一致神学校(築地十七番)財産報告

財団法人明治学院に築地十七番土地を譲渡することの証明

This certifies that we hereby authorize James Lansing Sherman, William Ambrose and Samuel H. Sherman, to transfer to Meiji Gakuin Jaidai Hojin, the title to the lot now on only known as No. 17 Senzaki, together with all the buildings, structures and improvements on it. Our reasons for making this statement are as follows: (3)

- 1. In 1873 a plan was drawn up by the said parties conveying the property to us as Trustees of the Union Theological School.
2. That plan was duly recorded at the American Consulate in Yokohama. But it was not recorded at the Tokyo Office; and the Tokyo Office declares that it can not now recognize us as Trustees, but regards the said James Lansing Sherman, William Ambrose and Samuel H. Sherman, as having made conveyance of the land on lease.
3. The Theological Department of Meiji Gakuin is the successor of Union Theological School of Tokyo.
4. All the Boards of Foreign Missions in interest, at some time ago requested by us, have signified their consent to have over the property to Meiji Gakuin to be a part of its endowment.

Tokyo, March 14th 1906. J.W.C. Ballagh, W.N. Wyckoff, New Brunswick, N.J. April 27th 1906, W.N. Wyckoff



This certifies that I hereby authorize William Ambrose, now residing in Tokyo, Japan, to act for me in the following: (4)

- 1. To transfer to Meiji Gakuin Jaidai Hojin the title to the lot of land containing 302.22 hectares more or less, together with all buildings, structures and improvements on it; the said lot being a part of the lot now owned and described in the official plan of the former settlement at Senzaki, as No. 17, and containing 391.20 hectares more or less.
2. To take whatever steps may be necessary to effect the said transfer.
New York April 1906. Wm. Ambrose (Signature) (U.S.) 20 West 32nd St. N.Y. City.

City and County of New York; as On this 17th day of April, 1906 before me personally came JAMES L. AMBROSE, to me known and known to me to be the true person signifying in and who executed the foregoing instrument, and duly acknowledged to me that he executed the same.

Notary Public (Signature) New York

## 第五篇

ラレテ難儀シタリトノ話アリ。午前十時神田青年会ニ往キ宣  
教開始五十年記念会プログラム及び役割トニ付キ相談ス。午  
後五時過ぎ迄カカレリ。勝治、三人ノ女ヲ携エテ年始ニ來タ  
ル。

〔二月六日、水曜日〕

ホフサンマー氏ニ学校ノ統計ヲ送ル。在学生徒、神学部二十  
二人、高等部二十三人、普通部三百二十六人、内神学生ノ外  
信者八十五人ナリ。夜、高輪教会ノ祈禱会ニ出ツ。

〔二月七日、木曜日〕

ドクトル・イムブリート同道ニテ東京府庁ニ赴キ、元一教神  
学校築地十七番号地借地権ヲ明治学院財団法人ニ譲与スル  
事ニ付キ打合セヲ為ス。帰途、東京区裁判所登記所ニ立寄り  
法人登記抄本願ヲ出ス。午後ハ右件ニ関スル書類製作ニ費  
ス。新潟教会へ祝辞ヲ送ル。夜、高輪教会ノ祈禱会ニ出ツ。

〔二月八日、金曜日〕

午前九時神学部始業式ヲ举行ス。山本秀焯氏本学期ヨリ教授  
ノ任ニ就ク。來ル十四日信徒修養会ノ為ニスベキ講演ノ準備  
ヲナス。祈禱会ニ出席ス。祈禱会后、山本氏ト共ニ熊野氏方  
ニ往キ懐旧談ヲ為ス。

〔二月十日、日曜日〕

夜來降雪、銀世界トナル。午後小川義綏氏ヲ本郷森川町ニ訪  
イ、横浜公会創立時代ノ事情ヲ聞取ル。当時教会ノ独立ヲ主  
張シタルハ安食(後、粟津)高明ナルコトヲ聞ク。教会設立

ヲ勸メタルハゼームス・バラ氏ナリ。然シテリフオームド又  
ハ長老ノ名ニ反対シテ耶蘇公会ヲ主張シタルハ小川氏ナリト  
云ウ。

〔二月十一日、月曜日〕 快晴

本日ヨリ普通高等両学部始業式ヲ執行ス。本年ノ標語トシ  
テ、勤メテ怠タラズ心ヲ熱クシテ主ニ事エノ一節ヲ奨ム。且  
ツ昨年ノ詔勅中ノ勤儉力行ノ意ヲ説明ス。正午、銀座清新軒  
ニ於テ教員一同会食懇談ヲ為ス。会スル者ワイコッフ、ラン  
デス氏ヲ始メ旧新教員合セテ十九名、自今毎月一回英語教員  
ノ研究会ヲ開クコト又時々教員全体ノ懇談会ヲ開クコトニ決  
ス。帰途、教文館ニ寄りテ書物ヲ求ム。

〔二月十二日、火曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。午後二時、青年会館ニ於テ伝道開始  
第五十年記念祝会委員会ニ列シ執行順序ヲ議定ス。自分ハ  
キリスト教教育ニ付キテ演説スルコトトナル。各派ノ關係上  
役割頗ル困難ナリ。二時ヨリ五時迄ニ至リテ閉会ス。寒氣強  
シ。炊事場ノ水道管凍リテ水ヲ用ユルコト能ワズ。夜、本  
多、山路二氏ノ編述セルキリスト教五十年史ヲ読ム。至ツテ  
不十分ナル感ヲ存セリ。

〔二月十四日、木曜日〕

昨日ヨリハ稍寒氣ヲ減ズ。昨日ハ神学部ノ洗面場ノ水凍ル。  
是レ曾テ覚エザルコトナリ。午前授業例ノ如シ。午後、芝教  
会堂ニ於テ信徒修養会アリ。余ハ日本基督教会創立以來現在

ニ至ルマデノ信仰の歴史ヲ三期ニ區別シテ演説ス。不天氣惠路ノ為、來会者四、五十名ニ過ギズ。稻垣、山本、熊野、植村氏等モ懐旧感話ヲ為ス。

〔一月十五日、金曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。十時ヨリ白金小学校創立三十三年記念日祝イニ招カレテ往ク。熊野氏同道ス。校長熊代及ビ学務委員長小松崎氏ノ話等アリ。午後、信徒修養会ニ出席、植村司会感話ヲ為ス。会後、記念伝道ノ事及ビ協力問題ニ付キ協議ス。ゼルマン・ミツシヨンヨリ提出ノ案ニ付キ而ハ決定ヲ延期ス。

〔一月十八日、月曜日〕

朝来寒氣強ク九時頃ヨリ再ビ降雪トナル。午前授業例ノ如シ。午後、青年会館ニ於テ記念会プログラム委員会ヲ開ク。小崎氏不参。宮川氏ヲ説教者ニ定ム。右終リテ平和協会ノ総会ニ出席。姉崎正治氏ノ報告アリ。会後宝亭ニ於テ食ヲ共ニス。

〔一月二十日、水曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。午後貴山氏來タリ、記念会ノ事ニ付キ協議ス。同氏ハ三月十日ニ伝道開始五十年記念会ヲ我が教会又ニテ執行セント欲シタレドモ、余ハ之ニ反対シ、熊野、山本兩氏モ余ニ同意シタリ。依リテ我が教会ノ創立ヲ記念スルコトトナセリ。五時ヨリ青年会事務委員会ニ出席、夜十時頃帰宅ス。

〔二月二十一日、木曜日〕 雨降り悪路甚ダシ

午前一組ヲ教授シテ後、イムブリー氏ト共ニ東京府ニ出頭シ、築地明石町十七番地、元一致神学校敷地ヲ明治学院ノ所有ト為ス手続ヲ為ス。夜、宅ニ於テ神学部懇話会ヲ開キ、余ハドクトル・ブラオンノ伝ヲ話ス。出席者廿四名、秦氏ハ欠席ス。

〔二月二十二日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後三時学院理事務委員会ヲ開キ、寄附金募集ノ件ヲ議ス。即チ時間ノ許ス限り余ヲシテ其ノ任ニ當ラシメ而シテ必要ノ費用ヲ支弁スル事ニ決ス。

〔二月二十三日、土曜日〕

イムブリー氏ト共ニ京橋区役所ニ往キ、築地明石町十七番地建物譲受ノ手続ヲ為ス事ヲ寺田氏ニ依頼ス。同氏ハ万事引受け呉レタリ。山本、熊野二氏ヲ招キ晚餐ヲ饗ス。快談十時ニ至リテ帰ル。

〔二月二十五日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、新栄教会ニ於テ教授者会アリ、引続キ伝道局臨時会ヲ開キ、伝道開始五十年祝謝伝道会ノ事ニ付キ協議ス。午後ヨリ大雨トナル。

〔二月二十六日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。イムブリー氏ト共ニデハブランド氏ヲ訪問ス。不在ニテ面会ヲ得ズ。

〔二月二十七日、水曜日〕

東京市芝罘日全令里町四拾五番地  
 明治廿二年二月二日付東京  
 市租地及、海願書、通、査定  
 明治四拾三年四月七日  
 幸橋 稅務署長  
 稅務官 佐川貞一



有租地役町内  
 幸橋見之皿  
 甚巨自金平里町の法學院内  
 井深掘二助様

築地十七番有租地成地価査定関係書類



東京市四四〇番地  
 明治廿二年一月二日  
 幸橋 稅務署長  
 稅務官 佐川貞一  
 此收地役町内  
 前野王地今四拾五番地、井深掘二助様、  
 地價査定、  
 明治廿二年一月二日付東京市租地及、  
 海願書、通、査定、  
 明治四拾三年四月七日  
 幸橋 稅務署長  
 稅務官 佐川貞一

有租地役町内  
 幸橋見之皿  
 甚巨自金平里町の法學院内  
 井深掘二助様  
 幸橋 稅務署長  
 稅務官 佐川貞一

午前出院授業例ノ如シ。午後イムブリー氏ト共ニ築地十七番地第一号及ビ二号ノ間ノ地境ニ関シ二号地ノ所有主デハブランド氏ヲ訪問シ、談判ノ上、京橋区役所ニ赴キ寺田氏ニ面会シ測量師ヲ携エテ宅地ヲ見分ス。二号地ハ八十八坪九合八勺ナル事ニ確定ス。其ノ結果一号地ニハ十四坪強ノ「ノビ」ヲ生ズル割合ナリ。

〔一月二十九日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。夜、自宅ニ於テ普通部教員ノ為ニ聖書研究会ヲ開ク。自今ハ第二、第四ノ金曜日ニ午後余ノ教室ニ於テ開クコトニ定ム。

〔一月三十日、土曜日〕

内外へ書信ヲ認ム。母上七十四回ノ御誕辰ニ花子及ビ春子ノ誕辰ヲ兼ねテ家族一同之ヲ祝ス。

明治四十二年二月

〔二月一日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、青年会館ニ於テ伝道局理事会アリ。来月六日ノ伝道開始五十年祝謝伝道会ノ事ニ付キ相談ス。夕刻、帝国教育会ニ往キ、岡夷氏ノ南米視察談ヲ聞キ、食卓ニ於テ服部博士ノ清国教育談アリ。

〔二月二日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、神学部教授会ヲ開ク。会后一個人トシテ秦氏ト相談シ辭職ヲ勸ム。ミセス・ラウダー、ミセス・ウィルリアムソン、及ビ娘來訪、暫時快談シテ去ル。

〔二月三日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。夕刻ヨリ富士見軒ニ於テ学制研究会ノ總會アリ、諸種ノ報告アリ、教育基金填補ノ件ニ付キ協議ノ後食卓ニ就ク。文部大臣小松原氏モ來会。食後教育上ノ雜談アリ。

He struck me as an unassuming pleasant gentleman. Does not strike me as a strong man. There were present as usual Ebara, Iawa, Yumoto and dozen other members. Several new members were elected.

〔二月四日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。秦氏ヨリ郵便ニテ返書來タル。其ノ態度愈々奇ナリ。イムブリー、熊野、松永ノ三人ニ經過ヲ話ス。片山とよ子來タル。午後二時半、國漢文受持教員ノ委員会ヲ開ク。

〔二月五日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。夕刻、服部綾雄氏ヲ訪問シ、寄附金募集ノ件其ノ他ニ付キ依頼ス。

〔二月六日、土曜日〕

午後、星野光多氏ヲ訪問シ、明日ノ説教ヲ依頼ス。是レヨリ鉄道青年会評議員会ニ出席ス。夜、高輪教会ノ伝道演説会ニ出席ス。

〔二月八日、月曜日〕

第五篇

出院授業例ノ如シ。午後七時浅草教会ニ於テ臨時中会アリ。伝道教会ノ件ニ関シテ少シク議論アリ。結局、常置委員が大会议ノ趣意ヲ通知シ、其ノ事情ヲ調査シ且ツ応分ノ助力ヲ与ウベキ事ニ決ス。荒川ノ後室病氣、花子訪問ス。

〔二月九日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後五時、司法省ニ齋藤十郎氏ヲ訪問シテ財団法人ノコトニ関シテ質問ス。午後六時、青年会ニ於テ伝道開始五十年祝謝伝道会評議員会ヲ開ク。来会者五十名、募金四千円乃至五千円ノ事、其ノ他ノ事ヲ協議ス。実行委員十七名ヲ挙ゲテ万事ヲ之ニ委任ス。

〔二月十一日、木曜日〕

午前九時紀元節兼憲法發布二十年記念祝賀式ヲ執行ス。教育勅語並ビニ憲法發布ノ詔ヲ奉読ス。勝治及ビ片山夫婦来タリ午餐ヲ共ニス。夕刻ニ沼沢竜雄、益富氏来タリ又晚餐ヲ共ニス。市中ハ大イニ賑シト云ウ。

〔二月十二日、金曜日〕

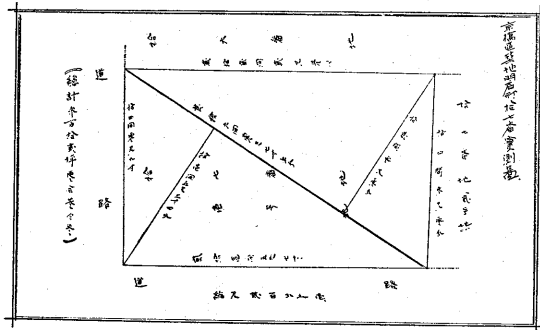
授業例ノ如シ。明治学院法人寄附行為中改正ノ件認可セララル。教員ノ為、午後教室ニ於テ聖書研究会ヲ開ク。馬可三ノ十九ヨリ卅五迄ヲ講義致セリ。

〔二月十三日、土曜日〕

午前、幸橋稅務署ヨリノ通知ニヨリ明石町十七番地実測立合イノ為同地ニ出張ス。実測ノ結果、届出ノ坪数ト殆ンド同一タルコトヲ知ル。二号地トノ境界ニ棒クイヲ打ツ。帰途石屋

ニ立寄り境界石ヲ命ズ。寒氣強ク風邪ノ氣味ナリ。  
〔二月十四日、日曜日〕  
午後二時、神田青年会館ニ於テ万国学生聯合祈禱会ニ於テ一場ノ感話ヲ為ス。夜、学院旧講堂ニ於テ基督教ト青年ノ關係ニ就キテ講話ヲ為ス。開教五十年ニ際シ学生青年ノ奮発ヲ悟セリ。

〔二月十五日、月曜日〕



築地明石町十七番実測図

出院授業例ノ如シ。午後五時、笹倉弥吉、林蒙二氏来訪。熊野氏ト共ニ横浜海岸教会堂及ビ敷地ヲミツシヨンヨリ譲受ケルノ件ニ付キ種々相談アリタリ。依リテ最初ヨリノ経過ヲ聞取りタルニ甚ダ拙キ談判ニテ、今更無償譲受ケ等ノ申込ミヨナス余地ナシ。依リテ現在ノママ使用權ヲ持續スルカ、又ハ一万円位ニテ買収シタル方可ナラント助言ヲナス。



〔二月十七日、水曜日〕

〔前略〕

ドクトル・イムブリーハ昨日敷四等旭日小綬章受領シタリトテ大喜ビナリ。

〔二月二十一日、日曜日〕

午前六時半出立、千葉町ニ赴ク。本所ヨリ八時廿五分ニ発車、千葉教会ニ於テ説教ス。学生青年会関東部会開会ノ為ナリ。盛岡牧師ノ内ニテ午餐ヲ喫シテ後、松屋旅店ニ赴キ懇談会ニ出席ス。ソレヨリ同店別荘ニ於ケル教会ノ親睦会ニ出席、三時半過ギ同所ヲ辞シ七時半過ギ帰宅。寒氣強シ。

〔二月二十二日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後二時、青年会館ニ於ケル教役者会ニ出席、午後四時ヨリフヒシャル氏宅ニ於テ青年会中央事務委員会晩飯ノ饗応ヲ受ク。午後七時、青年会館ニ於テ祝謝伝道実行委員会ニ出席ス。

〔二月二十四日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。彦三郎ヨリ狩ノ獲物ノ写真着ス。午後、イムブリー氏ト共ニ築地十七番地ニ赴キ境界石柱ヲ立ツ。

〔二月二十六日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後六時ヨリ神田青年会館ニ於テ明治学院文学大会ヲ開ク。頗ル盛会ニシテ出演者モ上出来ノ方ナリキ。就中、一年生ノ柴田、韓人李宝鏡ノ日本語、松田ノブルータス、中村獅子雄ノ英語演説優等ナリキ。

〔二月二十八日、日曜日〕

午前ヨリ荒川氏ヲ訪問シ、葬式後種々ノ事ニ付キ相談ヲ受ク。帰途、服部綾雄氏ヲ芝公園ニ訪問シ秦氏ト会見ノ模様ヲ聞ク。夜、学院ニ於テ丹羽清次郎氏ノ講演アリ。試験前ニテ聴講者多カラズ。

明治四十二年三月

〔三月一日、月曜日〕

午後三時、神田青年会館ニ於テ府下教役者会ヲ開キ、伝道開始五十年祝謝会伝道並ビニ伝道修養会ノ件ニ付キ打合せヲナス。我が庭園ニ於テ文学大会記念ノ写真ヲ取ル。

〔三月三日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。講堂ニ於テ文学大会優等者ノ賞与ノ事ヲ披露ス。授賞者ハ高三ノ中村獅子雄、普四年小沢、李宝鏡、並ビニ一年ノ柴田ナリ。午後、熊野氏ト共ニ大崎最寄りニ散歩ス。

〔三月四日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。大谷廣氏来訪。来ル日曜日ニハ富士見町教会ニ於テ貴衆両院議員中キリスト信者ヲ特ニ同日ノ礼拝ニ招キタレバ、其ノ時ノ祈禱ヲ依頼スト。之ヲ承認シタリ。午後、普通学部教員会ヲ開キ卒業式ノ準備其ノ他ニ付キ議決ス。

〔三月五日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。午前十一時、古川鋳業会社ニ小田川全之

及ビ中嶋久万吉男ノ二氏ヲ訪問シ、近日服部綾雄氏ト会見ノ事ヲ約束シテ歸ル。午後、教員聖書研究会ヲ開ク。出席者熊野、宮地、河西、齋藤、大内、佐久、石原、庵田ノ八人。馬可伝四章前半ヲ講義ス。貴山幸次郎氏來訪。丸山伝太郎氏ヲ支那人伝道者トシテ北京ニ派遣ノコトニ付キ相談ス。

〔三月六日、土曜日〕

來ル十三日ノ祝謝伝道開始会演説ノ草稿ヲ作ル。夜、青年会館ニ於テ右伝道会評議會アリ。丸山氏支那人伝道ノ議アリ。次会迄延期ニ決ス。

〔三月七日、日曜日〕

午前十時、富士見町教会ニ於テ帝國議會議員礼拝ニ出席ス。



田川大 吉郎

予メ教会ノ依頼ニヨリ 特ニ彼等ノ為ニ祈禱ヲ 捧グ。衆議院議員ニテ 出席セルモノ鶴沢、田 川、服部綾雄、細川義 昌、根本正、石橋為之 助、齋藤宇一郎ノ七士 ナリ。礼拝後富士見軒ニ於テ午餐ノ饗応アリ。自今議院開会 中毎月便宜ノ場所ニ於テ議員及ビ有志者ノ懇談会ヲ開クノ約 束ヲ為ス。

〔三月八日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。昨夜スピーヤ氏ヨリ來書アリ。來年一月

ノエデンボローノ万国伝道大会ニ出席ノ事ヲ照会シ來タル。

〔三月九日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。三井乙蔵氏來訪。苦學生ノ件ニ付キ依頼アリ。仙台ミロル氏ヨリ協力伝道案ニ付キ書狀來タル。

〔三月十三日、土曜日〕

午後二時、青年会館ニ於テ伝道開始五十年祝謝会ヲ執行ス。

余ハ日本基督教會創立以來今日ニ至ルマデノ主義方針ニ付キ演説シ、植村ハアンテオケ教會ノ事ニ付キ演説ス。外國伝道局ニ対スル感謝ノ決議及ビ祝謝伝道ノ決議等アリテ頗ル盛会ナリキ。來会者七百名モアリタラン。右ニ引統キ上野精養軒ニ於テ祝宴アリ。余司会シテ、植村、イムブリー、ミロル、星野、田川、服部、多田氏等ノ卓上演説アリ、是レ又盛会ナリキ。出席者二百廿名以上、中ニハ古キ信者数名アリキ。

〔三月十四日、日曜日〕

午後七時ヨリ青年会館ニ於テ聯合礼拝アリ。余司会ヲナシ、秋月致、河合亀輔、鶴沢総明、多田素氏等ノ演説アリ。余モ伝道ノ動機ニ就キテ演説スル積リナリシカドモ時刻進ミタレバ見合セタリ。会衆約八百名アリ盛会ナリキ。但シ教師牧師等ノ出席少ナカリシハ遺憾ナリキ。

〔三月十五日、月曜日〕

午前、富士見町教会ニ開カレタル伝道修養会ニ出席ス。植村氏、回心ト云ウ題ニテ演説ス。引統キ祈禱感話等アリ。午後ハ学院ニ於テ臨時教員会アリ、普通学部卒業生ノ点数ヲ定

ム。六十三名中四名ノ落第者アリ。

〔三月十六日、火曜日〕

午前、伝道修養会ニ於テ古今基督教會ニ於ケル靈の覺醒ト云  
ウ題ニテ講演ス。即チ主トシテ十八世紀ニ於テ英國ニ起コレ  
ル信仰復興ノ事ニ付キ演説ス。引続キ植村氏、ウエスレーノ  
日記ニ付キ語ル。感話祈禱アリ。午後ハ説教ノ修養アリ。

〔三月十七日、水曜日〕

午前ハ学院ニ於テ高等部一年ノ試験ヲ為ス。午後修養会ニ出  
席ス。ゼームス・バラ夫人病死ノ事ヲ報告ス。会ハバラ氏ニ  
同情ヲ表シ特別ナル神ノ祝福ヲ祈ル旨ヲ決議シ、且ツ余ヲシ  
テ其ノ旨ヲ伝エシム。大会常置委員会及ビ特別委員会ヲ開  
ク。リフオームド「ミッシヨン」ト協力ノ事ニ付キ笹尾、出  
村二氏懇々上京ス。三人修養会後宅ニ来タリ熊野、山本氏ト  
共ニ陳情ス。

〔三月十八日、木曜日〕

午前出院例ノ如シ。正午、熊野氏同道ニテバラ夫人ノ葬式  
ニ赴ク。式ハフエリス女学校講堂ニ於テ営マル。ブース氏司  
会、タムソン氏ノ説教アリ。余ハ修養会ノ決議ノ旨ヲ述ブ。  
墓地迄送りテ後帰京。直チニ亀嶋町借菜園ニ赴キ、大塚、江  
原、広田、フヒシヤル氏等ニ会見ス。目的ハ韓国鉄道管理局  
長大屋樫平氏ニ同鉄道青年会ノ事ニ付キ賛同ヲ請ワンガ為ナ  
リ。

〔三月十九日、金曜日〕

午前出院事務ヲ見ル。夫レヨリ修養会ニ赴ク。柏井氏既ニ講  
演ヲ了リタル後ナリ。チャーモルス軀機ニ付キ感話最中ナリ  
キ。夫レヨリ植村氏ハビウリタン説教者ニ付キ語ル。又感話  
祈禱アリ。此ニ一旦修養ノ竣リヲ告ゲ楼上ニ於テ一同会食  
シ、更ニ再ビ分レノ祈禱会ヲ開キ互ニ三分レヲ惜シミテ分ル。  
要スルニ、多少ノ不平アリシニモ抑ラズ今回ノ修養会ハ靈的  
修養ノ為ニ有益ナリシハ疑イナシ。

〔三月二十日、土曜日〕

正午、一番町五十二番地渡辺莊氏方へ招カレテ午餐ノ饗応ヲ  
受ク。來賓ハ植村、多  
田、河合、川添、貴  
山、井ノ口、南、余ノ  
九人ナリ。午後六時ヨ  
リ芝三縁亭ニ於テ明治  
学院旧友会アリ。服部  
綾雄、富保二氏ノ当選



服部綾雄

ヲ祝セン為ナリ。來会者三十四、五名。写真ヲ取り食後和田  
英作氏ノスケッチアリ。頗ル盛会ナリキ。

〔三月二十二日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。河合龜輔、川添万壽得氏來訪。宅ニ於テ  
午餐ヲ供ス。午後四時ヨリ青年会事務委員会ニ出席ス。星野  
光多氏來訪。内外協力伝道其ノ他ノ件ニ付キ懇談ス。普通学  
部ノ学年試験了ル。

〔三月二十三日、火曜日〕

神学部授業例ノ如シ。瀬川浅氏參觀ス。多田素氏來訪、午餐ヲ饗ス。星野又吉氏來訪ス。午後二時半ヨリ韓国学生ノ卒業生送別会アリ。來会者約四十名。服部綾雄氏來訪。

〔三月二十四日、水曜日〕

神学部授業例ノ如シ。午後二時、理事会開会。帝國議會最終日ニ付キ服部、鶴沢両氏共欠席。日本人ニテ出席者ハ磯部、松井ノ二人ノミ。諸種ノ報告、理事半数ノ改選其ノ他ノ事務ノミニテ重要ノ事ハナシ。会后右二氏及ビ熊野氏、宅ニ來タリ夕食ヲ共ニス。服部綾雄氏ヲ訪イ小田川全之氏ト会見ノコトヲ問合ワス。

〔三月二十六日、金曜日〕

神学部授業例ノ如シ。午後六時ヨリ服部綾雄、小田川全之二氏ヲ芝三縁亭ニ招待シテ、学院拡張ノ為寄附金募集ノ事ヲ依頼ス。小田川氏ハ之ヲ快諾シタリ。中嶋久万吉氏モ招待シタレドモ止ムヲ得ザル故障ノ為欠席セラレシハ残念ナリキ。夜ニ入りテ雪降ル。

〔三月二十七日、土曜日〕

昨夜來降雪ノ為心配シタレドモ幸イニ晴天トナレリ。午前ハ式場準備ノ為忙シ。午後二時ヨリ卒業証書授与式ヲ執行ス。伯爵林董氏ハ、往昔ドクトル・ヘボンノ家族二十三才ヨリ十七才迄教育セラレタル事ヲ語り、且ツヘボン氏ノ人物ニ付キテ讃辭ヲ述べタリ。米國大使オブライエン氏ハアブラハム・

リンコンノ人物ヲ評シ青年学生ノ之ニ學ブベキ事ヲ勸メタリ。來賓無慮二百名、頗ル盛会ナリキ。式後菓子折ヲ以テ林伯へ謝礼ニ赴ク。

〔三月二十九日、月曜日〕

午前、神学部休業。卒業式演說謝礼ノ為米國大使館ニ赴ク。大使差支エアリ単ニ名刺ヲ残シテ帰ル。午後五時ヨリ青年會館ニ於テ信者タル代議士諸氏ト懇談会アリ。田川、鶴沢、服部、三氏出席。六時ヨリ伝道局理事会ヲ開キゼルマン・リフ・オームド・ミツシヨノ協力案ヲ認可ス。七時ヨリ祝謝伝道実行委員會ニ移リ、丸山伝太郎氏ヲ支那人伝道ニ派遣スルコトニ決ス。

〔三月三十一日、水曜日〕

神学部授業例ノ如シ。早昼ニテ真澄、清見、八重子ヲ携エテ靖國神社及ビ遊就館ヲ見物セシム。午後四時半ヨリ青年會館ニ於テ、來ル十月ノ記念会執行順序委員會ニ出席ス。

明治四十二年四月

〔四月一日、木曜日〕

本日ヨリ神学部モ休業ス。昨夜一時過ギ芝増上寺本堂焼失ス。今朝、服部綾雄氏ヲ訪問ス。真澄本日ヨリ三田小学校ニ入学ス。午後女子学院卒業式ニ往ク。

〔四月二日、金曜日〕

キリスト教ト他ノ宗教トノ關係トニ関スルスピーヤ氏ノ書狀ニ對スル長文ノ書狀ノ為ニ一日ヲ費ス。イムブリー氏ニ英文

ノ校正ヲ依頼ス。

〔四月五日、月曜日〕

スピヤ氏へ送ルベキ書状ヲ淨書シテ発送ス。ミス・マクドナルド来訪。伝道開始五十年記念会ノ事ニ付キ相談アリ。

〔四月六日、火曜日〕

午後、三田ニ往キ明治学院拡張費寄附金募集帖ヲ作ラシム。

〔四月七日、水曜日〕

午後、熊野氏ト共ニ横浜ニ赴キ成毛金次郎氏ヲ訪問シ、寄附金ヲ依頼ス。氏モ応分ノ寄附ヲ約シタリ。服部綾雄氏モ同行ノ筈ナリシガ行違イニテ同行セザリキ。

〔四月八日、木曜日〕

モット氏ノ質問ニ対スル書翰ヲ認ム。来年蘇国ニ開カルベキ万国伝道大会ノ為ナリ。

〔四月十日、土曜日〕

午前九時、新学年始業式ヲ挙行ス。新入学生約九十名。内高等部生二十一名、神学予科生八名。新教員ハ野村宗朔、石沢藤吉ノ二氏、新井、大橋ノ二氏辞任ス。学院及ビ四隣ノ桜花正ニ満開ナリ。

〔四月十六日、金曜日〕

午前六時半出立、新橋ニテ植村氏ヲ待合セ八時ノ最大急行ニテ下阪ス。八時半梅田駅着。夫レヨリ電車ニテ堺市ニ赴キ芳川楼ノ旅店ニ投ズ。汽車中ニテ偶然宮川経輝氏ニ会ス。近畿地方、菜花盛ンシテ綺麗ナリキ。

〔四月十七日、土曜日〕

堺市教会ニ開カルタル伝道者修養会ニ赴ク。植村先ズ救ワレタル者ノ累進の経験ニ付キテ演ベ、余モ簡單ニ話ス。余リ振ワズ。午後ハキリストノ弟子タル者ノ死号ト云ウ題ニテ余先ズ演説シ、植村其ノ他ノ人モ余リニテ語ル。夜ハ吾等ノ宣ブベキ福音ト云ウ題ニテ余先ズ演説。後ニ植村モ語ル。聴衆ハ余リ多カラズ。演説ヲ了リテ大阪ニ帰り国本ニ宿泊ス。

〔四月十八日、日曜日〕

午前、青年会館ニ於テ市内五教会ノ聯合礼拝アリ。植村説教シ、後ニ余モ奨励ヲ為ス。来会者四百名許リ満堂ナリキ。午後休息。夜、北教会ニ於テ信徒修養会ヲ開ク。山本氏「落後者」ニ付キテ語り、余ハ信仰ノ必要ニ付キテ語り、植村モ亦奨励ヲナシテ終了ス。

〔四月十九日、月曜日〕

午前八時半大阪出発、植村同行。然ルニ午後八時四十分頃、列車ノ川崎六郷川ノ橋ヲ通過スル際、同橋上ニ於テ脱線シ居リタル貨車ト衝突シテ、汽罐車、貨車、郵便車ノ三台ハ橋ヨリサカサマニテ落下シ、客車モ最後ノ車ヲ除クノ外ハ悉ク脱線シテ傾キタリ。然レドモ、連鎖ノ破レタル為ニ客車ハ動揺シタルノミニテ墜落ヲ免レタリ。自分ハ幸ニ最後ノ車ニ居リタル為ニ比較的安全ナリキ。火夫即死、機関士ハ重傷ヲ受ケタリ。

〔四月二十日、火曜日〕

第五篇

午前九時半、高輪教会ニ於テ春期中会ヲ開ク。新議長ハ星野光多氏ナリ。憲法修正案ガ否決セラレタルノミナラズ、四十年度ノ大会決議ヲ撤改スベキ建議案夜ニ入りテ突然議場ニ踞ワレ五名ノ多数ニテ通過ス。今回ノ中会ニ於テハ阿波、岡等ノ言語甚ダ不謹慎ニテ見苦シカリキ。永井、有馬等ノ議論モ亦例ニ依リテ例ノ如クナリキ。

〔四月二十一日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。フルトン氏ハ書状ヲ出ス。南プレスビテリアアン・ミッシヨンハ書面ヲ添エテ關係ミッシヨン案ヲ返附ス。

〔四月二十二日、木曜日〕

午後、普通部教員会ヲ開ク。七時ヨリ米國大使館通訳ミラー氏方ヘ招カル。村井吉兵衛、吉村鉄之助、角倉、丹羽、フビシャルト余ノ六人ナリ。丹羽氏欧州行キ旅費調達ノ為ナリ。三人共ニ賛成ノ意ヲ表シタリ。村井ト云ウ人ニハ初メテ面会シタリ。極ク安スポキ人物ナリ。然シ寧ろ率直ニシテ左程イヤ味ナシ。中々能クシャベル方ナリ。

〔四月二十四日、土曜日〕

明日説教ノ準備ヲナス。汽車衝突ノ危難ヲ免レタルガ為ニ小豆飯ヲ焚キ一家感謝会ヲ開ク。山本、熊野二氏來訪。外村氏來訪。中会前ニ有馬、福田、秦氏等ノ密議アリシコトヲ告グ。

〔四月二十六日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後四時、杉金ニ於テ專任教員ヲ招キテ慰勞会ヲ開ク。今夜十一時ノ夜行ニテ仙台ニ赴ク筈ナリ。教職員來会者凡テ十五名。一同歡ビテ解散、時ニ八時半。余ハ直チニ予定ノ如ク上野ニ赴ク。待ツコト二時間余ニシテ乗車ス。

〔四月二十七日、火曜日〕

二等車ニ乘リタレドモ雜踏シテ横臥スルノ余地ナシ。依ツテ一等ニ乘替エ漸ク寢ルコトヲ得タリ。仙台ニテハドクトル・シュネーダー停車場ニ出迎エラレ直チニ同氏ノ宅ニ案内セラる。同所ニテミロル氏ニ面会ス。中会ニ出席、數言ヲ述ブ。午後再ビ中会ニ出席、憲法改正ノ件ニ付キ參考ノ為意見ヲ述ブ。夜シュネーダー氏ノ宅ニ於テ連合委員会ヲ開ク。シュネーダー、ミロル、齋藤、梶原及ビ余ノ五人。コック氏ハ不在。

〔四月二十八日、水曜日〕

午前六時三十分仙台出發。シュネーダー、笹尾、中村氏等停車場迄來タル。午後七時過ギ無事帰宅ス。仙台ニテ寸暇ヲ得テ笹尾氏ノ案内ニテ津々ちが岡ノ桜ヲ見ル。木ハ古來ニテ無類ナリ。但シ盛り過ギテ花ハ過半落チ去リタリ。仙台ハスダレ桜ガ深シ。八重ハ一本モ見當ラザリシ。鉄道沿路ハ、桃、梨、李ノ花盛りナリキ。

明治四十二年五月

〔五月三日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後四時青年会ニ於テ伝道局理事会アリ。引

続キ大会常置員会ヲ開キ、來ル七月十日カルピン四百年記念会ノ事ヲ議ス。尚引続キ祝謝伝道実行委員会ヲ開ク。夜十時半帰宅。文雄地洋丸ヨリ帰宅。身体モ左シタルコトナキガ如シ。

〔五月七日、金曜日〕

授業例ノ如シ。午後、夏期伝道委員会ヲ開キ、神学生ノ伝道地ヲ定ム。夜、ミス・ウエスト方ニ逗留セルミセス・ラウダー及ビウィルリアムソンヲ訪問ス。來月四日地洋丸ニテ帰國ノ筈ナリ。

〔五月八日、土曜日〕

午後三時、青年同盟事務委員会ヲ開キ夏期学校ノ事其ノ他ヲ議決ス。会後、丹羽清次郎氏ノ為ニ宝亭ニ於テ送別会ヲ開ク。

〔五月十日、月曜日〕

授業ヲ休ミ出発ノ準備ヲ為シ且ツ座敷壁塗替エノ監督ヲ為ス。午後七時比、熊野氏暇乞イノ為來タル。八時宅ヲ出発シ品川停車場ニ於テ暫時待チ九時七分ノ急行ニ乗車ス。汽車ハ中々雑踏ナリ。

〔五月十一日、火曜日〕

名古屋以西ハ幾分カ乗客減少シタルヲ以テ休息スルヲ得タリ。午後十二時二十分三宮着。直チニ車中ニ投ズ。少シハ改良シタルナラント思イシニ、依然タル状態ニテ器物等不潔ニテ甚ダ不快ニ感シタリ。且ツ内ニ風呂サエモ沸カサズ、銭湯

へ案内セラル。広瀬氏來訪、丸山伝太郎氏縁組ノコトニ付キ談ズ。六時滋賀丸乗組。八時出帆。船中ニテ大谷廣氏同船シタルコトヲ知ル。

〔五月十二日、水曜日〕

昨夜十時寝ニ就キ今朝五時半迄熟睡ス。天氣快晴海上穩カナリ。午前十一時高知着ノ筈ノ処、速力早ク八時四十分棧橋ニ着キタリ。多田牧師其ノ他信者数名出迎ウ。暫時城西館ノ支店ニ休息シテ後、本店ニ赴ク。演説其ノ他ニ付キ多田氏ト打合せヲ為シ、午餐ヲ喫シテ後大谷氏ト共ニ人車ニテ安芸ニ向ウ。行程十里余ナリ。道路ハ意外ニ立派ナリ。山坂ヲ除クノ外ハ平坦砥ノ如シ。風景モ又佳ナリ。午後五時半安芸ニ着シ菅寛助氏ノ宅ニ迎エラル。夜、大谷氏ト共ニ教会ニ於テ演説ス。

〔五月十三日、木曜日〕

天氣晴朗庭前ノ樹木美シ。午前八内ニ在リテ休息ス。午後二時須賀宅ニ信徒修養會アリ。來會者約二十名、大谷氏ト共ニ講話ス。午後五時ヨリ大谷氏大人ノ家ニ晚餐ニ招カル。耳嶋氏モ共ニ往ク。大人ハ隱居ニテ三男定氏ハ病院ヲ開キタリ。

家ハ新築ニテ楼上ヨリ北方ノ山野ヲ眺ムベシ。夜又、大谷氏ト共ニ教会ニ於テ演説ヲ為ス。聴衆ハ百名許リ、先ズ当町ニテハ盛會ナリト云ウ。

〔五月十四日、金曜日〕

午前七時十五分安芸ヲ出発ス。車ハ高知ヨリ來タレルモノナ

第五篇

リ。天氣晴朗海岸ノ風景佳ナリ。就中毛能山最モ佳ナリ。赤岡町ヨリ海岸通ニ出テ十二時過ギ城西館ニ歸ル。多田氏等來訪、演説ノ打合セラハ爲ス。夕刻ヨリ雨ヲ催ス。演説会ハ午後八時ヨリ教会堂ニ於テ開カル。聴衆三百五、六十人ナリト云ウ。終始傾聴ス。中々盛会ナリ。未信者ハ過半ヲ占メタリトノ事ナリ。

〔五月十五日、土曜日〕

朝ヨリ曇天雨模様ナリ。数名ノ來訪者アリ。午前八夜ノ演説ノ準備ヲナス。午後、会堂ニ於テ学生青年ノ為ノ講演会アリ。余ハキリスト教ト青年学生トノ關係ニ付キテ語ル。夜ハ愈々雨天トナレリ。然レドモ聴衆ハ堂ニ滿チタリ。裁判官學校長等モ來タレリ。余ハ特ニ頼ミテ第一席ニ演説シテ大イニ好都合ナリキ。何時モ後廻シニセラルルハ殆ンド閉口ナリ。

〔五月十六日、日曜日〕

午前教会ニ於テ説教ス。会衆二百七十名ト云ウ。午後婦人会ノ為ニ話ス。婦人ノミノ來会者二百九十名ト云ウ。午後八時ヨリ演説会ニ於テ再ビ演説ス。但シ余ノ始メタル時ハ九時三十五分過ギナリキ。聴衆ハ三百五、六十名ニテ終始謹聴セリ。東京ニテハ容易ニ得難キ聴衆ナリ。演説会ハ先ズ以テ成功ト云ウベキカ。高知ニ於テキリスト教ハ既ニ一ノ勢力タルコト明白ナリ。

〔五月十七日、月曜日〕

午前多田氏ヲ訪問ス。午後二時ヨリ高知教会創立廿五年兼宣



多田素

教五十年祝謝会アリ。多田司会シ余ハ過去三十年間ニ於ケルキリスト教ノ感化ニ就キテ語ル。帰途由井氏父子ヲ訪問ス。父ハ中風ニテ身体不自由ナリ。午後八時ヨリ修養会アリ。多田氏司会、余二十分許リ感話ヲ為ス。感深キ会合ナリキ。今回ノ運動ハ隨ニ有効ナリト信ズ。

〔五月二十八日、火曜日〕

天氣晴朗早朝独リ散步ス。午前八時比ヨリ多田、大谷氏ト共ニ城北図書館ヲ見、ソレヨリ旧城跡ノ公園ヲ見、市中ニ於テ半切紙鯨ノかぶら等ヲ求めテ旅館ニ歸ル。午後五時ヨリ潮江ノ共遊亭ニ於テ親睦会アリ、來会者男女合セテ三十五、六名。共ニ晚餐ニ就キ緩談シテ分ル。其ノ後長老二名旅館ニ來タリ帰途ノ旅費ト土佐塗品茗箱ヲ謝礼トシテ贈ル。諸事行届キタル待遇ナリ。

〔五月十九日、水曜日〕

五時起床。晴快但シ朝ノ中ハ裕ニテモ冷々ス。日中トハ大ナル相違ナリ。大谷氏ハ今朝ノ船ニテ故郷安芸ニ赴ク。午前行李ヲ整ウ。午後十二時半、旅館ヲ辞シ電車ニテ棧橋ニ赴ク。多田氏ニ途中ニテ逢ウ。教会員男女數十名見送ル。船ハ午後三時ニ解纜出帆ス。天氣朗晴海上極メテ平穩ナリ。往復共ニ



滋賀丸ニテ、往復共ニ平穩ニテ真ニ幸福ナリキ。

〔五月二十日、木曜日〕

午前三時半船ハ神戸港ニ着ス。五時比上陸。商船会社ノ樓上ニテ暫時休憩シテ後、三ノ宮停車場ヨリ最大急行車ニ乗り午後九時新橋着。十時過ぎ無事帰宅。家族一同安全ナリ。

〔五月二十九日、土曜日〕

午後二時、佐藤季顯氏方ニ於テミセス・ウィルリアムソン及ビミセス・ラウダーノ為ニ送別会ヲ開ク。来会者十八名。兩夫人共ニ大満足ナリキ。本多庸一、植村二氏帰途宅ニ寄り、晚餐ヲ饗シテ往事ヲ談ズ。

〔五月三十一日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後二時、青年会館ニ於テ大会常置員会ヲ開キ、カルビン四百年記念会執行順序ヲ定ム。引続キ実行委員会ヲ開キ諸種ノ報告ヲ聞キ、本月下旬ヨリ山本氏徳嶋出張ノ件等ヲ定ム。

明治四十二年六月

〔六月一日、火曜日〕

フヒシヤル氏ト共ニ統監府出張所ニ古谷秘書官ヲ尋ネ、京城ニ於テ青年会館敷地ノ事ニ付キ交渉ス。統監ハ助言ノ余地アラバ助言ヲ惜マザルベシト約セラレタリ。但シ陸軍ノ方ノ都合ヲ一応尋ネルノ必要アリトナリ。文雄ヲ訪問ス。殆んど全快ナリ。

〔六月十八日、金曜日〕

午前四時人力車ニテ出発、上野ニ向ウ。雨後早天、市街殊ニ丸ノ内ノ静カサ愛スベシ。上野ニテ待ツコト暫時ニシテ、ガルジナル氏馬車ニテ女ヲ携エテ来タリ仙台迄同行ヲ托セラシ。途中無事五時三十三分仙台ニ着ス。梶原氏出迎ウ。仙台ホテルニ投宿ス。入浴喫飯ノ後ミロル氏宅ニ於テ協力委員会ヲ開ク。伝道教会補助規程ヲ議ス。議論百出容易ニ纏ラズ。明日午後ヲ期シテ休憩ス。

〔六月十九日、土曜日〕

午前ホテルニ於テ齋藤、梶原、笹尾、五十嵐、出村等ト打合せヲ為ス。ミロル氏方ニテ午餐ヲ饗セラシ。午後、協力委員会ヲ開キ来年度ノ予算ヲ議決ス。夕刻トナリタレバ閉会ス。午後七時ヨリ東北学院ニ於テ青年会ノ為ニ一場ノ講演ヲ為ス。

〔六月二十日、日曜日〕

午前十時、東二番町教会ニ於テ礼拝説教ヲ為ス。シュネードル氏方へ午餐ニ招カル。二時ヨリ同氏宅ニ於テ学生十三、四名ノ為ニ特ニ講話ヲ為ス。午後四時ヨリブゾル軒ニ於テ笹尾、梶原、郡山、中村ノ四氏ヨリ晚餐ノ饗応ヲ受ク。夜、宮城女学校寄宿生ノ為ニ一場ノ話ヲ為ス。

〔六月二十三日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。夕刻フヒシヤル氏來訪。京城ニ於ケル青年会事業ノ件並ビニバルトン教授上京ノ事ニ付キ談話ス。

〔六月二十五日、金曜日〕

第五篇

出院授業例ノ如シ。深見明氏ヲ代理トシテ築地明石町十七番地地所ノ権利保存登記ヲ為サシム。登録税九十円ヲ納ム。但シ地価ハ志坪ハ五十円余ノ割ナリ。

〔六月二十八日、月曜日〕

デンマルクノモルトケ伯來朝、帝國ホテルニ滞在トノ通知ニ接シ午前十時訪問ス。同伯ヲ東京青年會館ニ案内シ、ソレヨリ正金銀行ニ立寄りテ帰宅ス。銀行ニ於テモ同道シタルガ為ニ為替シ便宜ヲ与エタルハ好都合ナリキ。同氏ハ腸胃ノ工合思ワシカラズト云イ居レリ。

明治四十二年七月

〔七月一日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。モルトケ伯來訪礼拜ニ列席シタル後、神學部教室、書籍室等ヲ一覽シタル後宅ニ來タリ茶ヲ喫シナガラ緩談ス。本多氏ハ來タラズ。熊野氏同席ス。モルトケ氏婦リテ間モナク本多氏モ來タル。午後教員會ヲ開ク。教室ノ取締、臨時試験等ノ件ニ付キ協議ス。夜、理事事務員會ヲ開ク。田嶋氏解約、谷富一氏囑托ノ件、一般修繕ノ件ニ付キ熟議ノ末、ランデス、ワイコッフ、熊野氏ヲ委員トナス。イムブリー氏ヲ神學部修理ノ委員トナス。

〔七月九日、金曜日〕

午前九時、イムブリー氏同道バルトン教授ヲ帝國ホテルニ訪問シ、午後一時迄教育上ノ事ニ付キ談話ス。主トシテキリスト教主義大學校設立ノ可否ニ関ワル。午後五時ヨリ青年會館

ニ於テ同氏ニ會見シ青年會事業ニ付キノ質問ニ応ズ。宝亭ニ於テ晚餐ヲ共ニシタル後、會館ニ於テ同氏ノ演説アリ。半途ニシテ帰宅ス。

〔七月十日、土曜日〕

普通學部試験、閉校式ヲ挙グ。広田太郎氏演説ス。午後二時ヨリ青年會館ニ於テカルビン誕生四百年記念會ヲ開ク。余ハカルビンノ性行及ビ事業ニ就キテ演説シ、星野、鵜沢ノ二氏モ演説シ、小崎、平岩ノ二氏又感語ヲ為ス。聴衆ハ二百人余ニ過ギズ。至ッテ静カナル記念會ナリキ。

〔七月十二日、月曜日〕

午前、理事事務員會ヲ開キ新講堂修繕ノ事ヲ議シ、ランデスニ一任スル事ニ決ス。但シ經費約二百円ノ見込ミナレドモ恐ラクハ其ノ二倍ヲ要スルナラン。午後二時、芝教會ニ於テ北嶋剛三氏ノ葬式アリ、式甚ダ長シ。五時ヨリ祝謝伝道実行委員會アリ七時半ヨリ神田教會ニ於テ大會準備ノ為、市内諸教會代表者ノ會アリ。議員宿泊及ビ歡迎等ノ事ニ付キ協議セリ。

〔七月十四日、水曜日〕

午前九時、青年會館ニ於テバルトン氏ト會見ス。イムブリー、ワイコッフ、本多、小方、クレメント、バンニングホク、フヒシャルト余ノ八人ナリキ。元田、タツカルノ二人ハ來タラズ。キリスト教大學ノ事ニ付キ意見ヲ交換シ、余ハ再ビ其ノ必要ヲ論ズ。本多氏ハ一片ノ論文ヲ提出ス。固ヨリ結

果ハ今日予知スベカラスト雖モ全ク無益ニハ非ザルベシ。  
大塚氏ト共ニ午餐ヲ喫シテ後、片山、荒川兩家ヲ訪問シテ帰  
ル。暑氣頓ニ増シ八十六度以上ニ昇ル。

〔七月十五日、木曜日〕

午前小崎弘道氏方ニ於テ今秋、市内諸教派連合伝道運動ノ事  
ニ付キ相談会ヲ開ク。本多、植村、稻垣、山鹿、石坂、綱嶋、貴  
山氏等ナリ。午後、新宿柏木迄田嶋氏ヲ断リニ往ク。留守故  
細君ニ面会シ書状ヲ置キテ帰ル。午後四時ヨリ青年會館ニ於  
テ事務委員會ヲ開キ、来タラントスル總會ノ事、夏期學校ノ  
事等ニ付キ相談ス。暑強シ。

〔七月十六日、金曜日〕

早朝母上、彦三郎、健次同道、真澄、清見ヲ携エテ青山ニ墓  
参ス。文雄ハ前日墓参シタリ。茶飯ヲ焚カシム。自今中元ヲ  
以テ祖先追悼記念ノ日トナス事ニ定ム。暑強シ。

〔七月十七日、土曜日〕

午前、小石川松平子爵家へ暑中機嫌問ニ出ツ。容大公ニ面  
謁、お咲モ全快ノ赴キナリ。疊ノ表變エヲ始ム。上表八十二  
錢、中七十五錢ナリ。暑氣甚ダシ。昨日ハ九十一度以上ナリ  
キ。

〔七月二十日、火曜日〕

貴山氏來訪、大会準備ノ話アリ。午後二時ヨリ青年會同盟總  
會準備ノ為幹事ト打合セヨナス。(以下略)

〔七月二十一日、水曜日〕

午後二時、青山学院ニ於テ第二十回青年會夏期學校ヲ開キ、  
余先ズ開校ノ辞ヲ述ベ、小方氏其ノ他ノ歡迎ノ辞及ビ答辞ア  
リ。來會者百余名。夜、今井壽道氏ノ演説アリ。少シ低音ニ  
シテ早調子ナレドモ演説ハ上手ノ方ナリ。

〔七月二十二日、木曜日〕

午前九時ヨリ夏期學校ニ赴ク。聖書研究ノ組ヲ見ル。凡テ九  
組アリ、結果ハ未ダ分ラズ。今井氏ノ講演ハ昨日ニ比シテ上  
出來ナリ。午後中央委員會アリ。憲法改正案ニ付キ議論ア  
リ。調査委員ヲ挙グ。夜ハ原田助氏ノ演説アリタル筈ナレド  
モ宅ニ帰ル。彦三郎ハ午後九時十三分品川発ノ汽車ニテ出発  
ス。

〔七月二十三日、金曜日〕

夏期學校ニ出席。午前ハ原田助氏ノ講演アリ。パウエル書翰總  
論ナリ。格別ノ事ナシ。午後同盟總會アリ。中央委員ノ選  
挙、三年間ノ事務及ビ會計ノ報告等アリ。憲法修正ニ付キ又  
々議論アリ。月曜日マデ延期ス。夜、笹森氏ノ講演アリ。氏  
ハ音声悪シキノミナラズ思想モ未熟ナリ、不出來ナリ。同  
時、中央委員會ヲ開キ新役員ヲ選挙シタリ。

〔七月二十六日、月曜日〕

八時半ヨリ夏期學校ニ出頭ス。植村氏演説ス。題ハイエスト  
日本國民思想ノ一斑ト云ウ事ナリキ。主トシテ現今唱道セラ  
ルル武士道ノ不完全ナルヲ説ケリ。演説トシテ至ッテ不出來  
ノ方ナリキ。午後ハ同盟總會ヲ開キ憲法修正ヲ議決ス。続イ

第五篇

テ同盟委員会ヲ開ク。四時ヨリ青山学院ノ歓迎会アリ。改良  
講談、手品等アリ。青山ハ大憤発ナリ。夜ハ大会堂ノ電燈付  
カズ。神学部ニテギウリツキ氏ノ講演アリ。炎暑甚ダシク一  
同困難シタリ。

〔七月二十七日、火曜日〕

午前休息。午後同盟總會ヲ開キ憲法修正ヲ議決ス。夜、ドク  
トル・バルトン、嶋田三郎氏ノ演説アリ、孰レモ有益ナリ  
キ。十一時過ギ帰宅ス。

〔七月二十八日、水曜日〕

午前十時半監督ハリス氏ノ感話アリ。引続キ閉校式ヲ挙グ。  
来校者凡テ二百名余。聖書研究モ先ズ以テ成功ナリシ。少ナ  
クモ二、三人ノ組丈ハ、講演モ概シテ有益ナリキ。今井氏ノ  
評判宜敷シ。午後五時本郷教会ニ於テ石川林四郎、花嶋ナホ  
子ノ結婚式ヲ司ル。式後、上野精養軒ニ於テ晚餐ノ饗応ア  
リ。

〔七月三十一日、土曜日〕

朝、大塚氏来訪。南滿鉄道青年会ノ事ニ付キ話アリ。午後、  
江原素六氏ト共ニ南滿会社ニ中村総裁ヲ訪問シ青年会事業ニ  
付キ交渉ヲ為ス。主任者ノ選定困難ナリ。帰途服部綾雄氏ヲ  
訪問ス。不在ニテ面会セズ。

明治四十二年八月

〔八月二日、月曜日〕

学院ノ修繕工事ヲ監視ス。午前十時半自宅出発、零時四十分

上野発車ス。二等列車ハ近頃改造ノモノラシク食堂車杯幾分  
カ改良ヲ加エタリ。

〔八月三日、火曜日〕

午前九時三十五分青森着車。直チニ塩谷支店ニ投ズ。室蘭へ  
電報ヲ打チ、自宅及ビ鶴沼へはがきヲ出ス。東京ニ比スレバ  
氣候ハ余程冷シ。昨夜ハ汽車中難踏シテ困難シタリ。昼食  
後、講義所ニ仁田生ヲ訪問ス。伝道ハ頗ル不振ノ状態ナリ。  
主任伝道者山口某ハ我が教会員ニ非ズト云ウ。奇ナリ。午後  
七時半催促シテ乗船ス。船ハ石狩丸、一千三百余噸ノ新造船  
ナリ。清潔ニシテ便利ナリ。

〔八月四日、水曜日〕

夜來「ガス」深ク船進マズ。九時比漸ク入港ス。数名ノ信徒  
棧橋ニ出迎ウ。創成館(本)ニ投ズ。午後二時教会附屬館ニ  
於テ歓迎会アリ。集會者十数名、祝謝伝道ノ趣意ヲ述ブ。室  
蘭ノ膨脹ハ予想外ナリ。人口二万ト云ウ。午後八時ヨリ教会  
ニ於テ演説会アル筈ナリ。題ハ現時下ニ於ケルキリスト教ノ  
使命ト云ウ事ナリ。

〔八月五日、木曜日〕

早朝母恋ノ製鉄所ヲ見物セント欲セシカドモ、ガス深ク悪路  
ニシテ往ク事ヲ見合セタリ。客舎ニ在リテ今夕ノ講演ノ準備  
ヲナス。午後、室蘭町長岩波常景氏ノ来訪ヲ受ク。同人ハ乘  
松ノ友人ナリト云ウ。昨夜、聖公会ノ伝道師遠藤栄氏来タ  
ル。同氏ハ遠藤此熊ノ弟ナリト云ウ。本夕ハキリスト教ノ中

心的事衷ト云ウ題ニテ演説ス。聴衆ハ昨夜ヨリ少シ多数ナリキ。

〔八月六日、金曜日〕

今朝ハガス深シ。為ニ母恋行ハ見合セトス。晩ノ演説ヲ準備ス。午後二時婦人会ニテ講話ヲ為ス。夜ハ又演説ヲ為ス。永生及ビ之ヲ得ルノ道如何ト云ウ題ニテ一時間程演説ス。前後三回ノ演説幾何ノ効果アリシヤ。聴衆ノ知識ノ程度モ分ラズ。或イハ適中セザル事モ多カラシテ恐ル。而モ演題ハ千磐氏ノ選ビタルモノナリ。

〔八月七日、土曜日〕

午前六時三十分発車。千磐及ビ十数名ノ信徒ステーションニ送リ来タル。室蘭ヲ去ルヤ漸ク快晴トナリ暑氣大イニ加ワル。岩見沢以北殊ニ甚ダシ。深川ヨリ連相一行乗車ス。四時半旭川ニ着。信徒数名出迎ウ。「キト」旅館ニ案内セララル。一等旅館ト称スレドモ室蘭ノ(本)ニ劣ルコト数等ナリ。夜、会堂ニ於テ修養会ヲ開キ信仰ノ覚醒ニ付キ演説ス。集會者四十人許リナリキ。本日ノ暑ハ九十五度ナリト云ウ。夜ニ入りテモ寝兼ネタリ。

〔八月八日、日曜日〕

午前十時教会ニ於テキリストノ与ウル平安ニ就キ説教ス。会衆五十名許リ三名ノ授洗者アリ、又聖晚餐アリ、阪本氏之ヲ執行ス。同氏ハ近日当地ヲ去リテ札幌ニ行カントスルナリ。午後二時、婦人会ノ為ニ講話ヲ為ス。暑シ。今日ハ九十二、

三度ナリ。ミス・チャンドレル、杉浦夫人等ニ面晤ス。

〔八月九日、月曜日〕

今朝ハ雨模様トナリ冷氣ヲ催シタリ。午前青柳夫人來訪。婦人会総代トシテ礼ニ來タル。午後、修養会ニ於テ講話シ、且ツ団体キリスト教、社会主義等ニ付キ質問ニ答ウ。午後ヨリ雨天ニナリ夜ニ入りテハ豪雨トナル。ソレガ為ニ夜ノ集會ハ僅カニ前夜ノ半数ニ満たザリキ。不朽ノ生命ニ付キテ演説ス。過去十年間ニ於ケル当地ハ著シキ発達ナリ。十年前ノ一小村ハ人口三万以上ノ一都会トナレリ。氣候ノ激変モ驚ク可ク、今朝ハ冷氣肌ニ徹ス。十月ノ氣候ナリ。

〔八月十日、火曜日〕

午前七時十分旭川ヲ出發シ、十時五十分名寄ニ着ス。名寄ハ目下天塩線ノ終点ナリ。山口氏其ノ他三、四ノ信徒停車場ニ出迎ウ。氣候ハ十一月頃ノ氣候ナリ。山口氏ノ寒暖計ハ六十七度ナリ。而モ三日前ニハ九十七度五分ナリト云ウ。午後二時會堂ニ於テ講話ヲ為シ、徳田宇十郎ナル人ニ授洗ス。會後、市街ヲ見物ス。未ダ新開ノ地見ルベキモノナシ。夜、會堂ニ於テ説教ス。即チ永生ヲ求メタル青年ノ事ニ付キ話ス。來會者四、五十名ナリキ。山口氏ハ忠実ニ働キツツアルガ如シ。

〔八月十一日、水曜日〕

午前七時名寄ヲ出發ス。寒暖計ハ室内ニテ五十五度、東京ニテハ冬ノ時候ナリ。汽車中ニテモ夏服ヲ二枚重ねタル上ニ外



日記

套ヲ着テ漸ク凌ギタリ。旭川ニ来タリテ稍々晴氣ヲ覺エタリ。同所ニテ家信ニ接ス。午後二時奈井江ニ着ス。教会ヨリ一台ノ荷馬車ヲ迎エニ出シ置キタリ。依リテソノ馬車ヲ解キ之ニ鞍ヲ置カシメテ馬上ニテ聖園ニ向ウ。石狩川ノ渡ニテ青山氏ニ逢ウ。浦臼館ト云ウ宿屋ニ案内セラレ、夜会堂ニ於テ演説ス。来会者ハ五十人許リナリ、熱心ニ傾聴シタリ。青山氏モ忠美ニ働キ居ル様子ナリ。

〔八月十二日、木曜日〕

午前五時起床喫飯。先ズ荷物ヲ馬車ニ托シ、自分ハ六時過ギ昨日ノ馬ニテ奈井江ニ赴ク。馬ハ從順過ギル程ニテ少々張合イナカリキ。停車場ニテ暫時待合セ、正午前札幌ニ着ク。新嶋教授及ビ数人ノ信徒出迎ウ。新嶋氏ノ住宅ニ案内セラル。同氏ノ夫人ハ独逸人ナリ。既ニ一人ノ小兒アリ。午後五時ヨリ長老吉田茂人氏ノ宅ニ招カル。新嶋、阪本、千磐氏ノ外ニミス・マレク、及ビミス・ホールセイモ招カル。夜、教会ニ於テ演説会アリ。光氏先ズ演説シ、余之ニ続ク。聴衆二百名余、謹聴ス。

〔八月十三日、金曜日〕

午前新嶋氏ノ案内ニテ札幌大学ヲ見ル。宮部金吾氏ニ逢イソノ標本ヲ見、又松村氏ノ蝶類ノ標本ヲ

見ル。実ニ珍シキモノアリ。午後、公園ニ於テ教會員ノ親睦会アリ、ドクトル・ヘボン及ビブラオンノ事ヲ話ス。夜、教會ニ於テ演説会アリ。千磐氏モ演説ス。来會者ハ二百五、六十名アリ。和田健三氏ニモ面會ス。札幌人ノ能ク聴クハ感心ナリ。夜ハ冷氣ヲ催シテ愉快ナリ。親睦会ニ往ク途中ミセス・新嶋ノ片言交リノ日本語ノ話ヲ聞キタリ。

〔八月十四日、土曜日〕

午前五時起床、八時札幌出発。ソンドースクールノ子供ト共ニ新嶋氏夫婦モ錢函マデ往ク。阪本直寛、千磐氏同行ス。中央小樽ステーションニテ光氏等ニ迎エラレ牧師館ニ投ズ。文雄及ビ春子ヨリノ手紙ニ接ス。又有馬氏ノ辞任ノ手狀ニ接ス。午後献堂式アリ、余ハ説教ヲ為ス。夜ハ演説会アリ、余ハ教育ニ於ケルキリスト教ノ貢獻ト云ウ題ニテ演説ス。聴衆ノ中ニハ校長教員等モ多カリシトノ事ナリ。

〔八月十五日、日曜日〕

午前礼拝式アリ。余ハ祈禱ノ教ニ就キテ説教シタリ。午後ハ休息シ、夜又、前夜ノ続キヲ演説ス。新會堂ハ八間ニ六間ノ小サツパリシタル建物ナリ。會員ノ奮発容易ナラズ。朝夕ハ涼シクナレリ。内地九月末ノ氣候ナリ。

〔八月十六日、月曜日〕

午前、光氏ニ案内セラレテ裏手ノ公園ヲ見ル。将来ハ好公園トナラン。午後、小信徒ノ宅ニ於テ婦人会アリ一場ノ勸メヲナス。夫レヨリ精養軒ニ於テ晚餐ノ饗応アリ。主人ハ長老其

ノ他教會ノ有志者ナリ。七時半ヨリ演説会アリ。余ハ求道ノ精神ト云ウ題ニテ若キ宰ノ話ヲ為ス。是ニテ小樽ニ於ケル任務ハ終了シタリ。身体疲勞ヲ覺エタリ。

〔八月十七日、火曜日〕

千磐氏ハ午前五時十五分ノ汽車ニテ室蘭ニ歸リ、余ハ同五時三十分ノ汽車ニテ函館ニ向ウ。光氏其ノ他数名ノ信徒停車場マデ見送ル。二等車ノ乗客至ツテ少ナク車中樂ニ休息スルコトヲ得タリ。森野ニ達シタル時ニ漁夫等が大亀ヲ捕エタリトテ人々見物シ居リタリ。頻リト酒ヲ寄セ居リタリ。午後五時函館ニ着ス。白井慶吉氏及ビ教會ノ長老数名出迎ウ。

〔八月十八日、水曜日〕

「山勢」ト称スル東南ノ風吹キ、肌寒キ程涼シ。土地ノ人ハ此ノ山勢ヲ惡風トシテ厭ウ。三日吹キ続ケバ稻枯ルト云ウ。午前ハ休息ス。但シ数名ノ来訪者アリ。午後、源克巳ト云ウ人ノ宅ニ於テ婦人会アリ、講話ヲ為ス。信者土橋藤市氏ノ招待ニ由リ後藤軒ノ晚餐会ニ往ク。白井氏及ビ教會ノ長老等出席。夜、教會ニ於テ演説ス。満堂立錫ノ地ナシ。能ク傾聴シタリ。文雄ノ書面ニ接ス。

〔八月十九日、木曜日〕

午前九時ヨリ特ニ礼拝式ヲ行ナイ洗礼ヲ二人ニ授ク。写真師石川恵堂及ビ早稻田大学生大塚栄三ナリ。早朝ヨリ大雨トナリ来會者少ナシ。午後、五稜郭ヲ見ント思イタレドモ雨ノ為ニ妨ゲラル。宿ニ在リテ休息ス。午後七時半ヨリ會堂ニ於テ

第五篇

再び演説ス。小降りトハナリタレドモ未ダ全ク休マズ。来聴者百余名ナリ。白井及ビ長老四名宿ニ来タル。今夜出発ノ積リナリシガ風雨ノ為ニ見合セタリ。

〔八月二十日、金曜日〕

午前、長老等訪問ス。十一時、比羅夫丸ニテ出帆、信徒数名棧橋ニ見送ル。予定ニ違ワズ午後三時青森ニ着。連絡待合所ニテ喫飯シ休息ス。六時二十分発車、十二時十八分盛岡ニ着ス。伊藤藤吉及ビ中山生停車場ニ出迎フ。案内セラレテ附近ノ陸奥館ニ投ズ。暫時談話ノ後寝ニ就ク。時ニ一時過ギナリ。

〔八月二十一日、土曜日〕

伊藤氏ニ案内セラレテ市内ヲ見物ス。但シ依然タル盛岡ニシテ進歩發展ノ状ナシ。人民ハ正ニ七夕祭ヲ為シツツアリ。土産トシテ南部鉄瓶一個ヲ求ム。夜、会堂ニ於テ演説ス。聴衆八十名余、余、演ズルコト一時間余。彼等聴クコトハ聴クレドモ一向ニ響キナク手答エナシ。人形ニ向イテ物云ウ如キ感ナキ能ワズ。

〔八月二十二日、日曜日〕

午前十時會堂ニ於テ説教ス。メソヂスト、慢礼ノ信者モ来タリテ共ニ礼拜ス。午餐ヲ喫シテ午後一時十分出発ス。伊藤、中山等見送ル。列車中ハ中々暑シ。盛岡ハ旧曆ノ七夕祭トテ太鼓ヲ鳴ラシツツアリ、如何ニモ不活発ノ人氣ナリ。

〔八月二十三日、月曜日〕

午前七時半無事帰宅ス。此ノ行、里程千五百余哩、演説講話二十有六回、大分膏ヲ搾ラレタリ。脂肪一貫汗ニ流シテ帰京哉。内ニテハ母上始メ一同無事ナリ。花子ト子供等ハ鶴沼ニアリ。イムブリー氏来タリ輕井沢ニ於ケルミツション會議ノ事情ヲ語ル。頗ル神経過敏、抱腹絶倒ノ話ナリ。

〔八月二十四日、火曜日〕

有馬氏ヲ訪イ同氏ノ渡米ヲ送ル。帰途山本氏ヲ訪問ス。午後、青年會館ニ於テ大塚氏ト会見シ、満州鉄道青年會事業ノ件ヲ相談ノ上、左ノ二ヶ条ヲ定ム。

一、九月早々江原、大塚、フヒシヤノ三人実地視察ノ事

一、大塚氏ヲ主任ト為ス事

〔八月二十五日、水曜日〕

午前、滿鉄總裁中村氏ト面会シ昨日ノ件ヲ話シソノ意見ヲ問ウ。至極満足ノ旨ヲ述ブ。服部綾雄氏来訪、未ダ秦氏ニ面会ノ機ヲ得ザルコトヲ述べ、今回ハ一層正面ヨリ話スベシト約束シテ帰ル。

〔八月三十一日、火曜日〕

午前十時半、青年會館ニ於テブラオン氏ト会見ス。会スルモノ三十名余。挨拶ノ後、日本ニ宣教師ヲ多ク送ルノ得失ニ就キテ諮問アリ。服部章蔵、熊野、星野等ノ意見アリ。協力伝道ノ事ニ付キボールドノ立場ヲ説明シ、然シテ大会ノ定義ニ從ツテ協力スルノ可否ヲ問ウ。可トスルモノ二十一名、否トスルモノ一名、可否ヲ明ラカニセザルモノ十一名、但シ其ノ



中三人ハ投票ノ權利ナキモノナリキ。十二時半ヨリ宝亭ニ於テ午餐ノ饗応アリ。食後、青年会館ニ於テ伝道局員及ビ大会特別委員タル光、齋藤ノ二氏ト再ビ会見ス。宣教師派遣ノ事、ミッシェン伝道方法ノ得失等ニ付キ諮問アリ、三時後分ル。若シモミッシェンノ或ル人ニ於テ此ノ会見ニシテ協力反對ノ意見ヲ發表セシメントノ魂胆アリタランハ全然失敗ニ帰セリ。

#### 明治四十二年九月

〔九月二十日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、教役者祈禱会ニ出席ス。青年会同盟事務委員会ヲ開キ、年来ノ懸案タルキリシタン阪第二号寄宿舎ノ件ニ付キ、東京青年会理事ト協議会ヲ開キ、遂ニ之ヲ神田ニ移転スルコト決定ス。午前九時神学部始業式ヲ挙グ。

〔九月二十一日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、三崎町バプテスト会堂ニ於ケル教役者祈禱会ニ出席ス。平岩氏司会、有益ノ勸告ヲナス。井上治宗氏ハ突飛ニ田村氏ト植村、井深ハ喧嘩ヲシテ居ル云々ト云イ出シタルガ為ニ一座白ラケテ見エタリ。余モ止ムヲ得ズ一言正誤シタリ。会後、植村、山本、熊野ト伝道局ノ事ニ付キ協議ス。宝亭ニ於テ鉄道青年会評議員会アリ、益富氏ノ報告アリ。

〔九月二十二日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。母上玉川ノ柴氏方ヨリ帰宅。プレスビテ

リアン・ボールドヨリミッシェンへ電報アリ曰ク Board can not consent. Strong action taken insisting on Co-operation. 協力ノ懸案モ之ニヨリテ解決スベシ。

〔九月二十三日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後、普通部教員会ヲ開キ修学旅行ノ事ヲ定ム。即チ高等及ビ五年以下三年マデヲ一組トナシテ四日三泊トシ、二年及ビ一年ヲ一組トナシテ三日二泊トナスコト。時ハ十月五日ヨリ八日マデノコトトス。五日ヨリ十日マデハ開教五十年記念大会ヲ執行スルノ時ナリ。

〔九月二十四日、金曜日〕

秋季皇靈祭ニ付キ休業。但シ終日雨天ニテ子供等ノ失望ナリ。午後二時、麴町教会ニ於テ新会堂ノ献堂式アリ。会堂ハ氣ノキキタル建物ナリ。

〔九月二十五日、土曜日〕

午前、伝道局理事会ヲ開キ、条例改正ノ件及ビ来年度ノ予算ノ件ヲ議ス。夜、麴町教会ニ於テ田川大吉郎氏ト共ニ演説ヲナス。聴衆ハ多カラズ。

〔九月二十六日、日曜日〕

来月大会開会ノ説教ヲ作ル。夜、学院ニ於テ山本秀燿氏及ビ村田四郎生ノ演説アリ。

〔九月三十日、木曜日〕

大会常置委員会及ビ伝道局理事会ヲ開ク。

明治四十二年十月

第五篇

〔十月一日、金曜日〕

第二十三回大会ヲ廻町新教会堂ニ開ク。前会ノ議長トシテ説教ヲ為ス。羅馬書十二ノ一ト二トヲ取り開教五十年記念ノ祭物ト題シテ説教ス。山本氏議長ニ当選ス。午後、申合伝道ノ条件ヲ議シ可決ス。此ニ於テ多年懸案ノ協力、非協力問題モ落着シタリ。阿波、福田等タムソン、小川氏等ト共ニ反対ヲ試ミタレドモ全然失敗シタリ。夜ハ楼上ニテ議員ノ懇談会ヲ開キタリ。先ズ以テ一荷下シタル心地シタリ。

〔十月二日、土曜日〕

伝道局条例改正案ヲ可決シ理事ヲ改選ス。理事、井深、植村、毛利、笹倉、子屋、多田、川添、中山、光、齋藤、平山、河合ノ十二名。阿波氏等ヨリ提出シタル憲法違反論モ大多数ニテ否決シタリ。大会常置員選挙。井深、植村、星野、山本、貴山。植村氏辭シテ笹倉氏代ワル。伝道局ノ予算ハ一万二千円ト決シタリ。

〔十月三日、日曜日〕

午後二時、毛利氏ノ説教アリ。大会議員一同聖餐ヲ守ル。夜、横浜指路教会ニ招カレガラー増築後第一回ノ演説会ニ於テ演説ヲ為ス。即チヘボン氏ノ事ヲ語ル。

〔十月四日、月曜日〕

小崎弘道氏福音同盟会ヲ代表シテ来訪ス。教会同盟ノ挙ニ対シテ七名ノ交渉委員ヲ挙グ。井深、植村、星野、熊野、毛利、笹倉、山本。此度ノ大会ハ憲法改正後第一回ノ大会ニ

テ、議員ハ正議員八十六、員外議員二十八人、意外ニ盛会ナリキ。憲法改正ハ適宜ノ措置タルコト實際ニ証明セラレタリ。来年ハ大会ヲ開会ノ筈。会后、小川町宝亭ニ於テ慰勞晩餐会アリキ。

〔十月五日、火曜日〕

宣教開始五十年記念会ヲ神田青年会館ニ開ク。午前ハ感謝会ニテバラ、本多、村上、稲垣氏等ノ懐旧談アリ。午後ハ祝賀会ニテ小崎、イムブリー両氏ノ回顧演説アリ。桂侯、文部大臣、府知事、市長、大隈伯等ノ祝文又ハ祝辭アリ。夜ハ歓迎会アリ。アルサル・スミス氏ノ演説アリシト云ウ。自分ハ明日ノ為欠席シタリ。同夜、東京中会アリ無事ニ結了シタリト云ウ。

〔十月六日、水曜日〕

午前、基督教々育ノ結果、ペータールス。同前途、余。教役者ノ養成ニ付キ、原田助氏ノ演説アリ。ペータールス氏上出来ナリ。其ノ他数氏ノ演説アリ。午後、基督教文学ニ付キ柏井氏及ビギウリック氏ノ演説アリ。其ノ他諸氏ノ七分演説アリ。夜ハ海老名、新渡戸、及ビ藤沢利喜太郎氏ノ演説アリ。新渡戸氏最モ不出来ニテ不評判ナリ。但シ聴衆満堂、盛会ナリキ。

〔十月七日、木曜日〕

本日ハ婦人部ノ集会ナリ。我等ハ別室ニ於テ基督教々育同盟会組織ノ事ヲ議決シタリ。婦人部ノ集会モ中々盛会ナリ。夜



宣教開始五十年記念園遊会（品川御殿山原六郎氏邸に於て）

八元田、山室、ハリス、安藤四氏ノ演説アリ。山室氏ノ演説ハ極メテ有力ニシテ人ヲ動カシタリ。

〔十月八日、金曜日〕

午前ハ牧会事業、午後伝道事業ニ付キ内外諸教師ノ講演アリ。夜ハデフレスト、留岡、嶋田三氏ノ演説アリ。盛会ナリ。聴衆ハ近來ニ珍ラシキ人出ナリ。

〔十月九日、土曜日〕

午前、過去及ビ將來ニ於ケル宣教師ノ事業ニ付キ内外諸氏ノ意見アリ。大抵ハ尚宣教師ノ必要ヲ認ムルモノノ如シ。午後三時ヨリ御殿山原六郎氏ノ庭園ニ於テ園遊会ヲ開ク。天気清朗、來会者約一千名盛会ナリキ。写真數葉ヲ取ル。但シ茶菓分配ノ時、日本人中ニ甚ダ無作法ノ男女アリシハ残念ナリ。万事予期以上ノ成功ナリ。

〔十月十日、日曜日〕

午後二時聖餐式アリ。宮川経輝氏説教ヲ為ス。人ヲ漁ル者ト漁ル法ト云ウ事ナリシガ甚ダ不出来ナリキ。石原保太郎氏式ヲ司ル。

〔十月十一日、月曜日〕

午前、教会同盟会組織ノ事ニ付キ會議アリ。小崎氏開会ノ辞ヲ演ベ、宮川氏議長ニ挙ゲラル。議事ノ順序ニ付キ議論アリ、少シク混雜シタリ。議長ノ処置ニ不平ヲ唱ウル者アリ、遂ニ五名ノ調査委員ヲ挙ゲテ午後ニ報告セシムル事トナル。午後、委員ノ報告ニヨリ十六名ノ同盟交渉委員ト十二名ノ常

第五篇

務委員トヲ拵ゲテ同盟成立迄ノ事務ヲ執ラシムルコトニ決シテ解散シタリ。

〔十月十二日、火曜日〕

本日ヨリ出院授業シタリ。午後一時ヨリ十六名ノ交渉委員会ヲ開キ各派ノ分担ヲ定ム。三時ヨリ、十六年頃ヨリ伝道ニ従事セル旧友ノ会ヲ催シテ懐古談ヲナシ寄合書ヲナシ、三河屋ニテ晚餐ヲ共ニス。会スルモノ大儀見元一郎、服部章蔵、稻垣信、本多庸一、熊野雄七、余、橋本醇之、小崎弘道、平岩慎保、山本秀燿、植村正久、石原保太郎、太田留助、嶋岡佳吉、井上文慈郎、原田助ナリ。

〔十月十三日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。熊野氏ニ招カレ石原保太郎、富尾留雄二氏ト晚餐ノ饗応ヲ受ク。プレスビテリアン東部ミッションハ遂ニ降伏シテ協力案ヲ伝道局ニ提出スル事ニ決シタリ。旅順港遂ニ降伏スト同氏ハ云エリ。

〔十月二十一日、木曜日〕

授業例ノ如シ。千代子三人ノ子供ト二人ノ下女ヲ携エテ来タル。終日遊ビテ帰ル。午後七時、横浜指路教会ニ於テドクトル・ヘボン渡来五十年記念会アリ。嶋田三郎氏ノ演説アリ。余ハ植村氏ノ代リニ演説ス。楼上楼下立錫ノ地ナキ程ノ聴衆ナリキ。十時ノ汽車ニテ帰京ス。

〔十月二十五日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後二時ヨリ教会同盟委員会ヲ青年会ニ開キ

小崎氏ヲ會長ニ、平岩氏ヲ副會長ニ、山本氏ヲ幹事ニ、松嶋氏ヲ會計ニ選舉ス。同四時ヨリ宣教開始五十年記念準備委員会ヲ開キ會計ノ報告ヲ聞ク。五、六十円ノ余剰アリ。宝亭ニ於テ慰勞ノ晚餐アリ。

〔十月二十六日、火曜日〕

授業例ノ如シ。午後六時、新聞骨外來タル。伊藤公爵ハルビンノ停車場ニ於テ或ル韓国人ノ為ニ狙撃セラレテ斃スト。実ニ青天ノ霹靂ナリ。嗚呼、彼ノ韓人ハ韓国ノ良友ヲ殺シタリ。怨ヲ以テ恩ニ報イタリ。日本ノ為ニハ国家ノ大不幸ナリ。但シ伊藤公自身ノ為ニハ実ニ立派ナル最後ナリ。終リ迄國ニ竭シタリ。國ニ殉ジタリ。同公ハ死後尚言ウノ人タルベシ。

〔十月二十七日、水曜日〕

授業例ノ如シ。禮拜ノ時生徒一同ニ此ノ際静肅ヲ守リ弔意ヲ表スベキコトヲ注意ス。午後、青年会ニ於テ基督教教育会ヲ組織ス。役員選舉ノ結果、余ヲ會長ニ、元田氏ヲ副會長ニ、ベンニングホフ氏ヲ書記兼會計ニ擧グ。

〔十月三十日、土曜日〕

午前、基督教青年会同盟ヲ代表シテ靈南坂伊藤公爵ノ官邸ヲ弔問ス。

〔十月三十一日、日曜日〕

午後二時、丸山伝太郎氏清國伝道ノ為近日出發セントスルニ付き送別会アリ。出席シテ一場ノ感話ヲナス。夜、学院ニ於

テドクトル・ブラオンノ小伝及び性行ニ付キ記念演説ヲナス。

明治四十二年十一月

〔十一月一日、月曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。午後、横浜海岸教会ニ於ケルドクトル・ブラオン來朝五十年記念碑除幕式ニ參列、一場ノ感話ヲ為ス。

〔十一月二日、火曜日〕

## 宣教開始五十年記念会

### 伝道五十年後の日本の基督教

日本に於ける新教派基督教の伝道は已に五十年を経過したり。其の間多少の消長なきにあらざりしも、年を追うて益々発展し、社会に及ぼす精神上及び思想上の感化の意外に大いなるものあるは感謝せざるを得ざる所なり。又之を統計的に觀察するも必ずしも悲観すべきにあらず。

日本に在留する外国宣教師諸氏の手に依りて年々編纂せらるる「日本に於ける基督教の活動」は此程出版せられたり。外国人に日本基督教の現状とともに、日本の国勢、社会、教育及び文芸等の情態を知らしめんとする目

出院例ノ如シ。午前十時二十分三学部聯合、新講堂ニ於テ伊藤公爵ノ悲惨ナル薨去ニ付キ追悼会ヲ開ク。余先ズ同公ノ国家ニ尽シタル功績ニ付キ訓話シ、イムブリー、熊野両氏モ演説ス。午後、神学部教授会ヲ開キオルトマンズ氏ノ受持科目等ニ付キ協議ス。秦氏ハ本学年中ニ愈々辞職スルノ意志ヲ明言シタリ。夜、満州鉄道青年会ノコトニ付キ委員会ヲ開ク。

(以下略)

的に出でたるものなり。而うして其の調査に係る統計を見るに、日本に於ける五十年間の伝道の結果、現在新教各派（朝鮮及び台湾をも含む）に属する会員七万四千五百六十人に上れり。之に天主教会の会員六万三千〇九十四人と露国正教会の会員三万〇七百十二人とを加うれば、總計十六万八千三百六十六人となる。之を日本の人口に比例すれば、二百六、七十に一人の基督信者散在する割合とならん。本書編纂者の計算に拠れば、去年パプテスマを受けしものは九千三百六十六人。自給教会百六十九。幾分か自給せる教会五百四十一。伝道所九百五十六。教会に属する財産総額百四十五万六千〇二十三円。日本人、朝鮮人、及び台湾人が献金せる金額は二十五万九千四百九十八円に上る。而うして直接伝道の任に当れる日本人、朝鮮人、及び台湾人にして按手札を領せる教師五百五十八人、未だ之を領せざる伝道者五百三十八人、婦人伝道者三百三十七人なり。一昨年統計に拠れば、新教各派伝道の結果は一割三分強の増加を示めせしが、昨年に於ても同様の膨脹力を有す。特に昨年に於て自給教会の数著しく増加せるは、組合教会及び日本基督教会が独立自給の精神を鼓舞し、且つ之を着々実行せるに原因することならん。斯の如く日本の基督教の事業は漸々日本人の手に由りて経営し且つ之を維持するに至れり。

本書の統計に拠れば、新教各派の外国宣教師にして、本邦、台湾、及び朝鮮に在留するもの総て七百六十二人に上れり。彼等有する財産と其の年々費すところの金額は実に意外の巨額に達す。而うして如何に賢く使用されつつありや否やは別問題として、兎に角之を以て見るも過去五十年間日本の伝道に對する外国宣教師の勞力と投資との如何に莫大なりしかを想像するに足らん。

又基督教的教育の現状を見るに、日曜学校千百五十九、其の教師、及び生徒合せて八万七千〇〇五人。男子の学校十五、其の生徒三千〇三十四人。女学校三十七、其の生徒三千六百九十三人。幼稚園及び小学校五十九、其

の生徒四千七百〇二人。神学校十九、其の生徒百七十九人。既に卒業せるもの六百十二人。其の現に伝道に従事し居るもの四百四十七人なりという。日本の青年会々員四千二百五十人。朝鮮及び台湾の青年会員五百二十八人。女子青年会員千三百人なり。其の他矯風慈善などの社会事業は、他の社会に卒先して着手したるだけに進歩の見るべきもの少なからず。

天主教会昨年中の受洗者は大人二千九百二十二人、小児三千八百七十九人にして、露国正教会の受洗者は八百六十八人なり。旧教派に属する信者総数九万三千八百〇六人、昨年の受洗者六千六百六十九人。之を新教派の膨脹力に比較すれば稍々劣るところあるが如し。且つ天主教会に於て小児の受洗者が多数を占めつつあるは其の伝道の方法に基因するものあらんか。而うして旧教派には自給の教会甚だ少なく、今尚お大部分は外国基督教徒に由りて維持せられ居るもの如し。

是れ統計に現われたる日本現在の基督教の大勢なり。五十年間の伝道の結果なり。基督教の事業は果して如何に進行し来りしか。此の際、吾人は静かに其の功過の跡を考え、更に思慮深く今後の事業を經營し、神の恩寵によりて、思うに優る良き果を得んこと祈らざる可らず。(S)〔福音新報第七百四十四号 明治四十二年九月三十日〕

伝道開始五十年の所感 福音新報第七百四十四号

余は伝道開始の祝会をして史談会たらしむるを好まず。伝道のジュビリイは常に預言的なるを尚ぶべし。五十

年を回顧する吾人の心胸は希望をして之を支配せしめざる可からず。然れども、「汝ら昔し光照を受けしの大なる苦の戦争を忍びたりし日を憶い出づべし」（希伯來十の卅二）。「我この幕屋に居るあひだ、汝らに此の事を憶ひ出させて汝らを励すは当然のことと意へり」（彼得後書一の十三）。斯の如く感謝、懺悔、及び鑑戒を其の要素のうちに加ふる宗数は、決して記憶を軽んぜざるなり。往時に忠なるものは、来事に向つて発憤興起するの機会を与えらるべし。一千八百五十九年某の月以降五十年に亘れる日本の伝道は、感懐極まりなき多くの記憶を以て満たされたり。リッキングス、ウキリアムス、フルベッキ、ヘボン、ブラウン氏等を始めとして、其の後伝道の為め日本に來りしもの引きも切らず、現今は其の數八百人に垂んとす。彼等が我國の為め精神的に寄与したるもの莫大なるは云うを待たず。推測に由りて之を計算するに、外国宣教師及び之に伴える多くの機関の為に、年々費さるる金額を以てせば、平時に於て日本陸軍の一師団を維持することを得べく、戦時に於ても勁敵に對して有力なる一大隊を數カ月間遠く滿州に支うることを得べし。吾人は此の祝会に於て外国基督者の主に於ける博愛の徳を敬重し、五十年間日本の精神的發達の為めに貢献したるもの多大なるを感謝せずんばあらざるなり。

五十年の回顧は吾人をしてフルベッキ、ブラウン、クラアク（札幌農學校）、ジェンス、ウキリアムス、バラ、タムソン、デビス、グリーン、ピヤソン（横浜僧成女學校創立者）、ミロル（夫妻）、イムブライ、ラアネット等諸氏、その他或いは教育に、或いは伝道に、日本の基督教を以て今日あらしむるに与りて力ありしを記憶せしむ。彼等の或る者は已に凱旋して上なる他界に入れり。グリフィスが或る宣教師伝を著わし、之に題して日本の建造者たる某と云えるが如き、余り仰山なる讚美には遺憾ながら同意すること能わずと雖も、吾人は同志社、明



治学院、青山学院、共立女学校、フェリス女学校、東北学院、神戸女学院等を始めとして其の手に成りし男子学校十五、女子学校三十七、之に教育せらるる男女学生七千人に達せんとするを見、已に既往に於て幾多俊秀達徳の人士及び良妻賢母を教養したるを記憶して、外国宣教師五十年間の成績偉なるを嘆賞せずんばあらざるなり。

文学の方面に於て日本在留外国宣教師の功績、対岸の清国に勤勞せるものに及ばざること遠しと雖も、聖書の翻訳、ヘボンの辞典の如き、確かに伝道五十年の史上燦然たる光を発つに足るべしと信ず。鉄道の各停車場の掲示に於て、英和対照の辞典に於て、其の他多くの場合に用いらるる羅馬字の用例は、外国宣教師の日本文学に留めたる、小なるが如くにして其の实頗る大なる痕跡たるを認むべきなり。彼等が禁酒廢娼等の如き社会事業を奨励し、諸種の病院を設立したるが如きも吾人の忘るまじきところにあらずや。日本国民は明治初年有名なりし俳優沢村田之助に外科の大手術を施したる米国宣教師ヘボン博士が、我が医界を照らせる時代ありしを記憶するの義務を負えり。日本国民の間に基督教徒の如く、清潔を貴び、衛生を重んずるものの少なかるべし。宣教師社交的の感化、斯る些末の点にまで深大なるを思ふべし。

伝道五十年は決して外国宣教師の歴史のみにあらざるなり。日本独立の教会を主唱せる粟津高明、同志社の創立者新島襄、自給教会の鼓吹者沢山保羅、軍人にして神学者たりし海軍少将世良田亮、信仰に由りて真正の自由を味うに至れる衆議院議長片岡健吉、遼陽の役、首山堡に基督教的戦死を遂げたる陸軍小佐秋山助六郎、学者の典型として永く世人に惜まるべき山崎為徳、大西祝等の如き、其の他多くの基督者の品格及び事業は、五十年の歴史に光彩陸離たるを覚ゆるなり。然れども、人間の真正なる歴史は社会に名を著わせるものの占領すべきものにあらず。吾人は家庭の奥、教場の隅、父母の膝下に基督に由りて教育せられ、救われし傑れ人雲の如くなるを

想像すべき理由あるを神に感謝するなり。

吾人は日本の基督教が如何に発達せるや、其の教会の基礎が如何に堅固になりつつあるやを顧みれば、五十年の回顧感涙堪きあえず、前途の希望洋々胸に漲り来るを覚ゆるなり。〔福音新報第七百四十四号明治四十二年九月三十日〕

### 宣教開始五拾年記念会順序書

会場 (東京市神田区美土代町)  
(東京基督教青年会館)

明治四十二年十月五日(火曜日)午前九時開会

感謝会

司会者

小崎弘道  
イー・アール・ミラー

讚美歌

祈禱

頌歌

祝禱

博士 デー・シー・グリーン

奥野昌綱

讚美歌

博士 ジェー・シー・デビソン

祈禱

小川義綏

同日午後二時開会

祝会

司会者

博士 ダブリュ・ビー・バンカム

監督 本多庸一

演説(二十分)

博士 ジェー・エチ・バラ

讚美歌

五十年の回顧

博士 ウィリアム・イムブリー

演説(二十分)

監督 本多庸一

内閣総理大臣、文部大臣、日本駐在外国大使、東京府知事、東京市長、外国伝道会社よりの祝文朗読及来賓大隈

感話(十分宛)

博士 村上俊吉

博士 デー・タムソン

稲垣信

伯爵演説

同日午後七時開会

歓迎会

歓迎の辞

演説

司会者 高崎介蔵

山本邦之助

博士 アーサー・スミス

十月六日(水曜)午前九時開会

祈禱会

同日午前九時卅分開会

司会者 中島力三郎

博士 元田作之進

講演

司会者

博士 ジェー・シー・デビソン

基督教教育の結果(廿分)

基督教教育の前途(廿分)

教役者の養成(廿分)

イー・ピータルス

博士 井深梶之助

原田助

深田直太郎

松本益吉

イー・ダブリュ・クレメント

今井寿道

エフ・エヌ・スコット

博士 笹尾糸太郎

シー・エッチ・ピー・ウード

七分演説

同日午後二時開会

講演

司会者

博士 平岩愼保

イー・テイ・ハワード

博士 エス・エル・ギユリック

基督教文学(廿五分)

博士 エス・エル・ギユリック

七分演説

同日午後七時開会

講演

司会者

博士 井深梶之助

海老名弾正

博士 新渡戸稲造

理学博士 藤沢利喜太郎

日本の倫理、宗教思想及国民生活に及ぼせる基督教の感化

日本の教育並に文明に及ぼしたる宣教師の功績

十月七日(木曜)午前八時卅分開会

祈禱会

司会者

井深花子

博士 矢島楯子

一伝道事業

婦人伝道学校(十五分)

婦人伝道者に就て(五分)

教会に於ける婦人会(十五分)

婦人伝道者の地位と其事業(五分)

ミス・イー・タルカット

ミス・シー・ダブリュ・バンペテン

本多貞子

ミス・アイ・エム・ハーグレイブ

女学校生徒の日曜学校事業(十五分)

ミス・シー・ビー・デフォレスト

未信者に対する伝道事業(十五分) 稲垣 スエ子

同上(五分) ミセス・ジー・ピー・ピアソン

一教育事業

(イ) ミッション女学校(十五分) ミス・エヌ・ビー・ゲーンズ

同上(五分) ミス・エス・エー・ソール

同上(五分) ミス・エー・ジー・ルイス

(ロ) 幼稚園及小学校(十五分) 和久山 キソ子

有志者演説

(イ) 普通女学校の学生間に於ける伝道事業(十五分)

ミス・イー・ジー・ワイリップス

(ニ) 基督教文学(十五分) ミス・ジー・ポーカー

同日午後二時開会

講 演 司会者 ミセス・シー・エチ・デー・フィッシャー 栗屋 栄子

一社会改良

(イ) 矯風会、救済、工場事業(十五分) 小崎 千代子

(ロ) 病院、孤兒院、小兒預所(二十分) 林 歌子

(イ) 矯風事業 ミス・エフ・イー・ストラウト

過去五十年間に於ける日本婦人の進歩及び其事業

ミス・エム・エフ・デントン

同日午後七時開会

講 演

基督教と社会改良

十月八日(金曜) 午前九時開会

祈祷会

同日午前九時卅分開会

講 演

教会事業(二十分)

同上(二十分)

同上(二十分)

七分演説

(イ) 礼拝に就て

(ロ) 説教に就て

(イ) 個人伝道

(ニ) 日曜学校

司会者 小崎 弘道

博士 元田 作之進

山室 軍平

監督 エム・シー・ハリス

安藤 太郎

司会者 ダブリュ・ビー・バンカム

司会者 中島 力三郎

博士 ジェー・ビー・ヘール

博士 平岩 愼保

多田 素

植村 正久

河合 堯三

アル・イ・マカルピン

稲沼 鑄代太

石黒 猛次郎

デー・ノルマン

博士 鴨 飼 猛

デー・エー・モーレー

(外)教会の自給

エス・イー・ヘーガー

同日午後二時開会

講 演

司会者

監督 本多庸一  
イー・アル・ミラー

伝道事業(十五分宛)

星野光多

七分演説

(イ)市内伝道

河合禎三

(ロ)地方伝道

博士 小方仙之助

(ハ)集中伝道

博士 エー・デー・ヘール  
波多野 伝四郎

(ニ)大挙伝道

貴山 幸次郎

(ホ)青年伝道

山本 邦之助

(ヘ)内海島嶼に於ける伝道

エフ・シー・ブリッグス

(ト)九州に於ける伝道開始と讚美歌に就て

瀬川 浅

同日午後七時開会

講 演

司会者

博士 元田作之進

基督教と慈善事業

留岡 幸助

民権及信教自由に於ける基督教の影響

博士 シェー・エチ・デフォレスト  
島田 三郎

十月九日(土曜)午前九時開会

祈祷会

司会者 高野 丈三

同日午前九時卅分開会

講 演

司会者

博士 平岩 愼保  
ダブリュ・ビー・バンカム

過去及将来に於ける宣

監督 山本 秀煌

教師の事業(十五分宛)

綱島 佳吉

五分演説

博士 シェー・デー・デビス

同日午前十一時卅分開会

シエー・ジエー・ダンロップ

事務会

植村 正久

同日午後三時開会

園遊会

十月十日(日曜)午後二時開会

説教及聖晩餐式

司会者

小崎 弘道

説 教

イー・アル・ミラー

聖餐司式者

宮川 経輝

委員姓名

石原 保太郎

委員長

相原 英賢

副委員長

元田作之助。平岩愼保。本多庸一。井深梶之助

委員姓名 小崎弘道。イー・アル・ミラー

副委員長 元田作之助。平岩愼保。本多庸一。井深梶之助

第五篇

全委員

中島力三郎。テイ・シー・ウイン。  
 エー・テイ・ハワード。ジエー・  
 シー・デビソン。エー・エー・ベ  
 ンネット。ダブリュ・ビー・バン  
 カム。

平岩信保。本多庸一。星野光多。  
 井深梶之助。稻沼鑄代太。河合禎  
 三。小崎弘道。元田作之進。高野  
 丈三。山本邦之助。中島力三郎。  
 ジエー・デー・デビス。ジー・オ  
 ルチン。ジエー・シー・シート・ニ  
 ユートン。ウイリアム・イムブリ  
 ー。デー・ビー・シュネダー。デ  
 イリング。エチ・セント・ジョー  
 ジ・タッカー。アーサー・リー。  
 エム・シー・ハリス。エー・デー・  
 ハワード。ジー・エム・フィッシ  
 ヤー。

婦人部委員

ミセス・シー・ダブリュ・バ  
 ンベテン。ミス・エー・シー・マク  
 ドナルド。本多貞子。井深花子。  
 ミス・ケー・エム・トリストラム。  
 ミス・アイ・エス・ハルセー。



宣教開始五十年記念会全委員

(前列左より) 星野光多。元田作之進。小崎弘道。平岩信保。熊野雄七。稻沼鑄代太。ウイリアム・イムブリー。  
 (中列左より) イー・アール・ミラー。田川大吉郎。高野丈三。井深梶之助。鵜飼猛。本多庸一。稻垣信。別所梅之助  
 (後列左より) エー・デー・ベリー。シー・エチ・デー・フィシヤー。ジエー・デー・デビス。エー・テイ・ハワード。中島力三郎。河合禎三。小林富次郎。山本邦之助。

音楽委員 別所梅之助。稲垣信。イー・エス・コップ。エ

チ・エチ・コーツ。テイ・エム・マグネヤ。ジ

ー・オルチン。

接待委員 角倉賀道。熊野雄七。小林富次郎。大倉文二。

福岡秀猪。山本邦之助。田川大吉郎。イー・エ

記録委員 鵜崎庚午郎。鵜飼猛。

以上〔明治四十三年発行 開教五十年記念講演集〕

伝道開始五十年記念号発刊につき寄書を依頼されて

井深 梶 之 助

貴墨拝読仕り候。然る処本年は我が国伝道開始五十年に相当するを以て、貴社に於ても其の祝意を表せんが為に記念号を御発行成被れ候趣き、就いては、小生も此の際特に何ぞ御寄書仕る可き様御申越し下だ被れ、御厚情鳴謝奉り候。

扱、御同然に本年は伝道開始五十年を記念するに当たり既往を追回して神恩の洪大なるを感謝すると同時に、我が日本基督教会の発展等に就き種々の所感も之れ有り候得共、此等の所感は曾て祝謝伝道大会の席上に於て開陳致したることも之れ有り候故、此に之を反復するを差<sup>さしか</sup>かえ今回は単に貴社新報が創立以来百難を排して、外は福音伝播の為、内は穩健なる信仰と神学思想発展の為に、終始御奮闘成被れ候其の功績の尠少ならざるを感謝するの意を表し且つ今後神の恩寵に由りて貴社の益々隆盛ならんことを是れ祈り候敬具。

四十二年九月廿三日〔福音新報第七百四十四号、明治四十二年九月三十日〕

## 宣教開始五十年記念会事務会決議

第五日(十月九日、午前十一時半開会)

### 事務会

司会者

小崎 弘道  
イー・アール・ミラー

定りたる諸講演も爰に無事終了することを得たれば、委員長小崎、ミラーの両氏は平岩、デビソン両氏に代りて司会者の席に着き直に事務会に移り、議案委員より提出せる別項記載の諸決議文を遂次和英両文にて朗読の上、満場一致起立を以て之を可決し、讚美歌第二百七十三番を歌いミラー氏の祝詞を以て閉会す。干時午後零時三十分なりき。

### 決議 文 其一

本大会ハ日本ニ於ケル「プロテスタント」基督教宣教開始第五十年ヲ祝スルニ当リ先ズ我等ノ主イエス・キリストノ父ナル全能ノ神ニ対シ既往ニ於テ日本国民ガ享有シタル鴻恩ニ感謝ス。就中、天皇陛下ノ大御心ニ由リ憲法ヲ欽定セラレ以テ貴重ナル信教ノ自由ヲ保障セラレタルコトニ対シテ特ニ神ノ聖名ヲ頌讚ス。

過去五十年間ニ於テ欧米ノ諸基督教会ハ主イエス・キリストノ大命ヲ奉ジ且ツ其模範ニ倣イテ永生ノ福音ヲ日本ニ宣伝シタリ。此事業ニ対シテ本大会ハ深厚ナル謝意ヲ表スルト同時ニ今後日本ノ諸基督教会ガ確實ニ建立セララルルマデ尚其

ノ愛ノ勤勞ヲ繼續センコト切望ス。且ツ斯ク豊カニ日本ノ為メニ貢獻シタル諸教会ニ神ノ恩寵ノ益々豊カニ加ワランコトヲ祈ル。神ノ大智ニ由リテ古ヨリ世界ニ於テ特殊ノ重任ヲ負ワンガ為メニ召サレタル国民アリ。思ウニ日本国民モ亦タ此ノ如キ召ヲ蒙リタルコト年ヲ逐ウテ明白ナリ。是故ニ本大会ハ日本国民ガ其蒙リタル召ト選ビトテ堅クシ且ツ日本ノ諸基督教会ガ此時代ニ在リテ光ノ如ク世ニ顕ワレンコトヲ祈リ且ツ欧米ノ諸教会モ亦タ常ニ我等ト共ニ之レガ為ニ祈ランコトヲ切望ス。

### 決議 文 其二

本大会ハ欧米ニ於ケル諸教会ノ伝道会社及ビ伝道局ガ送リタル兄弟ノ懇切ナル祝詞ニ対シテ誠実ナル謝意ヲ表ス、又既往多年ノ間彼等ガ日本ノ為ニ尽シタル其同情ニ対シテ深厚ナル謝意ヲ表スルト同時ニ彼等ガ常ニ聖靈ノ指導ニ由リテ其ノ重任ヲ全ウセンコトヲ祈ル。

右決議ス

### 決議 文 其三

本大会ハ茲ニ博士ヘボン氏並ニ監督ウイリアムス氏ニ対シテ懇切ナル兄弟ノ親愛ヲ表シ且ツ彼等ガ神ノ恩寵ニ由リテ平安ノ中ニ一生ヲ終リ遂ニ言ウベカラザル喜ビト光榮トニテ充



チタル永遠ノ国ニ入ランコトヲ祈ル。

#### 決議文 其四

本大会ハ日本ニ於ケル高等ノ諸基督敎学校ガ既往ニ於テ収メタル効果多大ナルヲ喜ビ認ムルト同時ニ之ト同程度ノ官公立学校ニ比較シ其設備ニ於テ甚ダ遜色ナキ能ワザルヲ遺憾トス。此ノ如キハ日本ニ於ケル基督敎ノ前途ノ為メ憂慮ニ堪エザル所ナリ。実ニ日本ニ於ケル基督敎ノ将来ハ現在ノ諸基督敎学校ノ設備ヲ拡張完備スルト為ザルトニアリ。加之更ニ緊要ナルハ名実相適エル基督敎大学ヲ速クニ設置スルニアリ。故ニ本大会ハ茲ニ此等ノ必要ヲ掲ゲテ内外基督敎徒ノ注意ヲ喚起シ且ツソノ同情ニ訴ウ。

#### 決議文 其五

我國ニアル諸派基督敎会ハ従来福音同盟会ノ下ニ協同一致ノ運動ヲ為シ来リシガ数年前ヨリ時勢ノ必要ニ応ジ愈々此ノ協同一致ノ実ヲ全ウスル為メ之レヲ改造シテ敎会同盟ナルモノヲ組織スルコトニナリタリ。今回爰ニ会同シタル我等ハカカル同盟ノ必要ヲ深く認ムルガ故ニ敎会同盟ノ設立ハ勿論、ソノ組織ヲシテ各派協同ノ実ヲ完ウセシムル様ニ計ラレンコトヲ希望スルモノナリ。

#### 決議文 其六

吾人ハ神国建設ノ要素及ビ其ノ拡張ノ機関トシテ日曜学校ノ極メテ大切ナルヲ認メ日本日曜学校協会ガ銳意斯業ノ調和

統一ヲ計ラントスルニ對シテ贊同ノ意ヲ表シ且ツ之レヲ諸敎会、諸ミツション及ビ信徒各自ニ推薦シテ其ノ同情ト協賛トニ訴ウ。

#### 決議文 其七

宣敎開始五十年記念会ハ日本ニ於テ從來世ニ出デタル基督敎文学中幾多優秀ナル著訳アルヲ認ムト雖モ現時ノ要求ニ応ゼンニハ現存セル出版機關ヲ以テ充分ナリト信ズル能ワズ。今ヤ日本ニ於ケル基督敎ノ運動ヲ為スニ當リ從來ノ著訳ヨリモ品質優秀ニシテ種類多キ基督敎文学ヲ要求スルヤ極メテ痛切ナリ。然ルニ此ノ要求ニ応ズベキ出版機關ヲ設置スル事業ハ一敎会一敎派ノ独力以テ能クスル所ニアラズ、広大ナル規模計画ニ待タザルベカラズ。而シテ之レガ為メニハ頗ル多数ノ資金ヲ要スル事亦多言ヲ要セズ。

故ニ本会ハ此ノ件ニ関シ内外ノ信徒諸君ガ切実ナル注意ヲ惹起センコトヲ熱望スルモノ也。

右決議ス。

#### 決議文 其八

吾人ハ日本基督敎青年会同盟及ビ日本基督敎女子青年会同盟ガ各敎会ヲ代表シテ専ラ青年伝道及ビ其ノ敎化ノ事業ニ尽瘁シ能ク我國敎会ノ事業ニ援助ヲ与エタルノ功ヲ認メ之レヲ感謝スルト共ニ将来益々其ノ事業ヲ拡張シテ特ニ学生及ビ商工業者間ニ普及セシメンコトヲ希望ス。

右決議ス。

決議 文 其九

日本基督教發達ニ関スル記録、書籍、写真、又ハ其他ノ物品ヲ集メテ之ヲ適當ナル場所ニ適當ニ保存スルハ現在ノ興味又將來ノ歴史ノ参考品トシテ極メテ必要ナリ。依テ吾人ハ愛ニ左ノ決議ヲ為ス。

一、本大会ハ五人ノ委員ヲ挙ゲテ我国基督教歴史ノ參考タルベキ書籍物品ヲ適當ナル方法ヲ以テ集収シ且ツ保存スル事。

右決議ス。

決議 文 其十

我国ニ多クノ慈善事業アリ、且ツ我国医学ノ進歩著シク病院ノ数多シト雖モ、未ダ一ノ完全ナル基督教の慈善病院アルヲ見ザルハ一ノ遺憾ナリ。今回宣教開始五十年記念会ニ際シスル病院建設ノ必要ヲ認メ有志ニテ之レガ設計ヲ計画センコ

ジョン・カルビン四百年記念会

第貳拾參回大会記録摘要

第一 開会式 第廿三回大会は明治四十二年十月一日（金曜）午前九時半より東京麹町教会堂に於て開かる。井深議長司会をなし、会衆一同讚美歌第卅六番を歌い、台北教会牧師河合龜輔君羅馬書第十二章を朗読し、高知教会牧師多田素君開会の祈禱を捧ぐ。次で議長井深梶之助君羅馬書第十二章一二節を採りて説教をなし、一同讚美

トヲ希望ス。

右建議候也。

明治四十二年十月九日

川上昌保

西 鎮

長田重雄

和田劍之助

渡辺憲十郎

田口契矩

浅見三慶

木村順吉

毛利伊賀

右建議ノ旨趣ヲ賛成シテ茲ニ之ヲ決議ス。

決議 文 其十二

今回ノ記念大会ヲ執行スルニ際シ東京基督教青年会ハ其会館ヲ開放シテ我等ノ用ニ供シタルノミナラズ万般ノ事ニ付テ多大ノ便宜ヲ与エタル其ノ厚意ニ対シテ本大会ハ深厚ナル謝意ヲ表ス。

右決議ス。

歌第二百五十四番を合唱して、十時半開会の式を終る。

(中略)

### 第六 大会常置委員会書記貴山君報告

明治四十一年十月以来六回の委員会を開き取扱ひたる事項如左

- 一、互選を以て井深氏を委員長に星野氏を會計に貴山氏を書記に定めたり
- 二、各中会の書記に向け四十一年三月までに協力問題の解決に関する準備をなし置く様特に注意書を発せり
- 三、大会記録及び教会一覽を合本にして八百部を印刷し一部宛各教会に配布したる残部は之を諸教会及び有志に売捌けり
- 四、四十二年度初週祈祷表八千枚を印刷して之を諸教会に配布したり
- 五、四十二年六月中カルビン四百年の記念会に関する書簡及び福音新報社懸賞当選のジョン・カルビンの伝記行及び思想一部宛を各教会に送りたり、書簡左の如し



カルビン

拜啓主の御恩寵の下、貴教会益々御清康被為在奉恭賀候、陳者前大会の決議に従い來七月十日東京に於て、ジョン・カルビン、四百年記念会開催被致候に付各地に在る日本基督教会に於ても其々便宜の方法を以て記念会御開催あらんことを希望仕候、就ては今回の記念に際し御同然に特に記憶反省すべき事共左に申述べ候

此の際日本基督教会とカルビン主義との關係を明かにすること即ち(一)

我が教会の創立に最も密接なる關係を有する外国宣教師は所謂リフォルムド系統の教会に屬する者たる事

(二) 我が教会の信仰箇条は最も公共的にして寛大なるものなればカルビン主義の神学を継承して攻守共に其の責に任ずるものにあらざる事

然れどもカルビン主義に於て我等の主として学ぶべき点を挙ぐれば

第一、神の主權を重じ何事を為すにも神の栄光を彰はすを以て第一の目的となす事

第二、基督に於ける個人の權利を尊び教会の自治的代議政体の基礎を堅固にし且国家公民の責任を明かにする事

第三、教会の規律を嚴重にし質素剛健の氣風を養ひ世の光たり地の塩たる天職を全うする事

第四、飽迄世の罪惡と奮斗して神の国の拡張に努力すべき事

此等は其の要点にして現今我が国家及び教会の状態に対して極めて重要なる事共と信じ候

右御參考まで申述候間今回の記念をして可成有益ならしめ且つ教会振興の一助たらしめんことを希望致し候  
敬具

六、四十二年七月十日東京青年會館に於てカルビン四百年記念會を開き左の演説及び感話ありき

△カルビンの伝記及び性行 井深梶之助氏

△建設者としてのカルビン 星野 光多氏

△カルビンの政治思想 鵜沢 総明氏

△感話 小崎 弘道氏

△感

平岩 愼保氏

七、四十二年八月上旬大会に關する書簡を各教会及び各教師に送たり

八、廿三回大会期日及び会場を定め相当の準備をなし置けり

九、婦人会、青年会及び日曜学校職員会開会の方法及び準備を委託されをりしかど都合によりて本年はこれを見合すこととせり

(以下略)〔第二十三回大会記録〕

## 第六篇



# エデンボローへの旅と基督教大学問題

明治四十三年井深梶之助先生外遊日記

明治四十三年（一九一〇年）

〔五月五日、木曜日〕

家族一同並びに送別の為来たれる荒川千代、和田仙太郎、沼沢竜雄、津田栄、熊野雄七等と共に讚美歌を謳い、詩篇百二十を朗読し、祈禱を捧げて後一同と共に出発す。品川停車場前に学院の教員、生徒一同、整列して余等の至るを待つ。生徒に対して一言別れを告げて去らしむ。停車場には外国教師、神学部教授生徒、教役者等百名以上見送りの為待合わしたり。発車に臨み一同万歳を唱う。自らは帽を振りて之に答う。二等車には今回大連基督教青年会主事として赴任する守瀬氏及び妻子あり。二等は矢張り満員の様子なり。一等は七、八人なり。しかども、左右に喫煙する人ありて少しく閉口したり。車内に横臥するの余地は十分ありたれども矢張り窮屈にて安眠は出来ざりき。

〔五月六日、金曜日〕

午前七時半三宮駅に到着、直ちに人力車を傭いて海岸に赴

く。大里屋廻漕店員の世話にて守瀬氏一行と共に開城丸に乗込む。然るに、船には未だ乗客を迎うるの用意なく、暫時甲板上に待ちたり。漸く給仕来たる。余は一号室の一なり。一室六人を容るる割なり。朝来微雨降る。気候は思いの外冷氣なり。船にて留守宅及び文雄へ宛て端書を出す。神戸の大阪商船支店の船客掛に大津文之介と云う人あり。東北学院出身の由にて自ら紹介したり。瀬戸内海は曇天雲霧の為に景色も見るべきものなし。只大小群島の頭が彼処此処に幽かに見ゆるのみ。午後九時入港して後寝に就く。海上は至極静謐なり。

〔五月七日、土曜日〕

昨夜は濃霧の為船の進行遅々たり。屢々汽笛を鳴らしたり。門司へは七時頃、着の筈の処、濃霧の為八時過ぎに到着したり。着港の上留守宅へ書状を出す。武洋丸は如何と尋ねたる処昨日播摩灘にて行違いたりと云う。間もなく文雄より書状達す。果して五日朝門司を出帆するが故に、多分播摩灘辺に



て逢わんと云えり。

船中の待遇は格別申分なし。二等にても差支えなし。一等は其の割に善からずとの事なり。但し室内は中々窮屈なり。今日は終日雨天にて鬱陶敷かりし。夕食には事務長の案内にて特に余と永井氏とに洋食を饗せらる。門司より数人の乗客あり。二等室は殆んど満員となれり。

〔五月八日、日曜日〕

昨夜も海上至つて静穏なりき。午前三時半目覚めれば、「ハーレー」彗星を見んと欲して甲板上に出て見たれども雨天にて何も見えず。

朝飯後、食堂に於て満州又は台湾生蚕の事杯談話したりしに、俄然船の進行息みたるが故に何事かと思ひ寢室の丸窓より外を見たるに、僅かに五、六間を隔てて岩石の几然として聳ゆるを見る。且つ頂上にて頻りに空鐘をたたき「あぶない。あぶない」と連呼する声を聞きたり。実に危機一髪とは此の事ならんか。船長が今一分間気付かざりせば、船は岩石に衝突せしならんが、幸いに其の厄難を免れたり。

朝鮮多嶋海の濃霧は実に危険なり。船は暫時進行を止め「ガス」の晴るるを待つ中に、嶋より一隻の小舟の来たるを見る。即ち燈台の役人が信号汽笛破損して用をなさざるが故に大連より仁川へ電信を打呉れよとの依頼の為に来たれるなり。停船約二時間にして復び進行を始め。後にて聞けば此の嶋は港門嶋と称する嶋にて其の岬に燈台あり。又、船長太田

某は曰く、船の嶋に最も接近したりし時にも、尚三百間の間隔ありきと。然れども乗客は之を信せず。

海上は極めて静穏なり。午後には日脚も見えたり。夜は又々事務長の厚意にて洋食の饗応あり。又、三等の客室にて船員等の娯楽ありとの案内あり、一寸様子を見に往きたれども、その話陋劣にして聴くに堪えず。半途にして帰り寝に就く。

〔五月九日、月曜日〕

海上平穩昨日の如し。但し時々濃霧来たる。汽笛を鳴らしつつ進行す。無聊に堪えず。輪投げをして遊ぶ。昨日正午より本日正午まで二百八十二哩を駛る。大連まで余す所尚百〇二哩あり。普通午後四時大連着の筈の所、五時間延着して正九時に投錨す。途中西方に当たりて大孤山及び円嶋を見る。夕食には小豆飯の馳走あり、無事着港を祝するの意か。

乗客中に満州日々新聞記者伊原幸之助なる人あり能く談論す。談、宗教の事に及び、キリスト教は国家を無視すと云い、又猥りに万国青年会と称して不都合なりとて得々然として論談す。又、乗客中に吉田嘉一郎なる人あり、其の甚だ無根なるを弁明す。余も聞くに堪えず、一言を加えて伊原氏の議論の事実相違あることを弁じて止む。

吉田氏は台湾及び満州に於て多年警視又は民政署長等を奉職したる人にてクリスチアンの由なり。先方にては余の名を聞きて驚きたり。「ソレデハ有名ノ井深サンデスカ」と。又伊原氏は彦三郎を能く知れりと云えり。又、乗客中には正金銀

一行の二人あり、孰れも彦三郎及び和田俊夫を知ると云えり。  
今夜は大連に於て集会ある筈なりしが、嘸失望せしことならんと推察せらる。明朝は午前七時上陸との事なり。先ず先ず海上無事着港したるは感謝の至りなり。

〔五月十日、火曜日〕

船客一同午前五時前より起床、檢疫官の來たるを待つ。檢疫終了後朝飯を喫し、各自荷物の用意を為して船の棧橋に着くを待つ。漸くにして二隻の曳船來たりて船を棧橋に近か寄らしむ。橋上には数十名の信徒出迎う。導かれてウキン氏の宅に投ず。貴山氏あり。旅順よりは嶋村氏來たり、安東県よりは竹内氏來たる。暫時休息の後、大塚素氏に導かれて北公園の俱樂部に往き、滿鉄会社練習生四十名許りに講話を為す。了りて本社により社内を巡視して後食堂に於て昼食の饗応を受く。食後總裁及び副總裁に面会して、青年クラブの図案及び彼等が大塚氏と共に前線を慰問したる時の写真等を見る。別れを告げて教会に來たり信徒修養會に於て一場の勧めを為す。多少の感動を与えたるが如し。それよりヒバート氏に招かれて大和ホテルに赴く。基督教青年會及び同主事守瀬氏披露の爲、滿鉄の重役連及び三井物産、正金銀行等の人々を招待したるなり。卓上に於て基督教青年會の目的及び性質を説明して彼等の贊助を求む。  
夕食後、再び北公園クラブに赴き見習生百名許りに講話を為

す。国沢氏及び数名の職員も列席したり。大連に於ける滿鉄に對する任務は先ず之にて終了。

〔五月十一日、水曜日〕

大塚氏の案内にてウキン氏同道、電気公園を見物し、それより中央試験所を視察す。所長某は渡欣中にて不在なれども、明治学院の出身者上田氏あり。丁寧に説明したり。蚱蜢を以て製したる絹糸縮緬、豆油、高粱紙等の見本を見る。中々面白し。又ヤママイ絹の工場を一見す。右を辞して基督教慈善病院を慰問し、それより大連公学堂を參觀す。生徒二十才前後より六、七才の者約百人唱歌、体操等を為して我等に觀せしむ。彼等が「浦嶋」の歌を唱いたるは中々奇なりき。校長は浅井某なり。

ウキン氏方に於て午餐を喫して後教会に婦人大會あり。「初代教会に於ける女信徒」と題して一場の講話を為す。會衆五十人許りあり中々盛會なり。各々電気公園に於て歡迎會あり、洋食の饗応あり、來會者約五十人中々盛會なり。数名の未信者も加われり。

夜、教会に於て演説會あり。貴山氏先ず演説して後、余はキリスト教の使命と題して約四十五分間演説を為したり。第一、活神、第二、人格、第三、奉事、の精神を宣伝せんとするものなるを説く。聴衆三百以上。中村總裁、国沢副總裁等も出席したり。但し貴山氏の演説例の如く長く、司會者不熟練なるは残念なりき。

〔五月十二日、木曜日〕

午前八時、ウキン氏方を辞し停車場に赴く。杉本氏、大塚氏等送り來たる。貴山氏も來たり同氏と共に旅順に來たる。旅順の停車場には嶋村、竹内の二人、西川夫人、西尾生等出迎う。手荷物をも西尾生に托し貴山、嶋村、竹内の三人と共に白玉山に登り表忠碑を見る。記念の爲、絵葉書並びに閉塞船の木材を以て作りたる頑箱一個を求む。表忠碑に昇るの許可を得たれども、烈風の爲に見合せたり。貴山氏と共に馬車を驅りて新市街の杉森此馬氏の宅に赴く。同氏方にて午餐の饗応を受け入浴休息して、四時半より月見俱樂部に於て、中学校の生徒百数十名と工科学堂の生徒数名及び教員、官吏数十名の爲に一場の講話を爲す。元來工科学堂の生徒の爲にする筈なりしに、彼等実地演習の爲に差支えありて來たらざりしは遺憾なりき。工学士草刈氏司会をなす。同氏は青年會會長なり。杉森氏余を紹介したり。杉森氏方に於て夕飯を喫し旧市街青葉町の教会堂に赴く。貴山氏先ず演説し、余も亦大連に於けると同一の題を以て一時間演説したり。聴衆満堂靜聴したり。演説を終り乃木町なる西川玉之助氏方に招かれて宿泊することとなり。但し同氏は旅行中にて不在なり。

旅順の町は三十九年に來たりし時と外觀に於て左したる變動なし。但し、市街の幾分か秩序立ち且つ清潔になれるを見るのみ。新市街は依然として寂莫たり。工科学堂の生徒中には寂莫に堪えずして逃げ帰れるものありと云う。

〔五月十三日、金曜日〕

朝食後、当地の弁護士鎌田某來たりて宗教上の質問を爲す。同人は安重根の最後を目撃して大いに感ずる所あり、今や宗教に心を傾けつつありと云う。約一時間質問に応じて談話を試みたり。嶋村氏と散歩して元の礼拝堂を見る。貴山、竹田等と共に満州伝道の事に付き協議し、満州伝道協議會なるものを設立することに定む。又記念の撮影を爲す。午後教会に於て婦人会あり。竹内氏と共に一場の講話を爲す。西川夫人司会を爲す。

夜八時より教会に於て再び演説。竹内虎也氏先ず演じ然して後、余も不朽の生命と題して約一時間演説す。聴衆は前夜と同じく靜聴せり。西川夫人の話によれば、午後婦人会の話には大分的中せる所ありし由、固より自分は何も知らず、単に一般の事を述べたるに過ぎず。殊に当地屈指の財産家の夫人の如きは正しく自家の場合に当たると云えりとの事なり。新開の地道德的制裁の薄弱なる所むしる皆然りと云う。

〔五月十四日、土曜日〕

午前八時宮城と云う写真店に於て教會員十数名と共に記念の撮影をなす。天氣は快晴なり。東京の友人に宛て絵葉書兩枚を出す。午前十一時、西川夫人、嶋村、草刈氏等に送られて旅順を去る。

午後零時二十五分大連に着す。ウキン氏及び杉本氏出迎う。再びウキン氏の家に投ず。午餐後ウキン氏と共にヒツパード

## 第六篇

氏を訪問す。守瀬氏も住宅を見付けて落付きたる由なり。京城の丹羽氏より伝言あり漸く好都合の由なり。貴山、秋山、杉本の諸氏来訪す。杉本氏に旅順に於て求めたる記念の硯箱と大連の絵葉書を托す。クレメント氏は昨日当地に来たり、今朝旅順に往き明夕帰り、火曜の急行車にて北行の赴き伝言あり。奉天に於て待合せする筈なり。旅順よりも大連の方余程熱き様なり。曇天なれども雨降らず。

〔五月十五日、日曜日〕

昨日午後七時、ウケン氏方を辞し、同氏、杉本、貴山其の他の人々に送られて大連を出発す。大塚氏は見習生を卒えて同車中にあり、又同車中に（四谷？）氏あり、橋頭タンネル工事及び教会設立の事を語る。午前七時三十分奉天に着車す。彦三郎並びに教会員数名出迎う。彦三郎の案内にて馬車にて同人の家に至る。日本の実業団、来奉天中にて日本人は混雑の際なり。彦の住宅は境内六百坪、建物は応接間、書齋、食堂、寢室等各々十畳敷位の支那家にて手広き住宅なり。入浴の後朝飯を喫し、中江氏の案内にて新市街なる教会堂に至り説教し、山下英雄なる人に授洗し且つ一回聖晩餐を執行す。信者の数約二十名なり。平素出席するものは十四名なりとの事なり。

礼拝後、東洋ホテルに招かれて午餐を喫す。但し二時頃なりき。教会の有志者六、七名参列す。食後入浴して休息す。夜食を喫せず、午後八時より教会に於て再び説教す。午後より

雨模様となり且つ不便の場所なるが故か、聴衆は極めて小數なりき。再び中江の嚮道にて彦三郎の家に帰る。時に十一時前なりき。

〔五月十六日、月曜日〕

今朝はゆっくり休息したり。身体は思いしよりも疲れたり。夜行列車中睡眠不足の為ならん。入浴喫飯の後、彦三郎同道小池総領事を訪問す。実業家を案内して北陵に往きたりとの事。それより居留民会事務所に往きクラブ及び病院を見る。院長某の案内にて院内の様子を見る。未だ整頓せず。經費不足の為なり。帰途城壁の上に登りて四方を眺望す。天気晴朗神氣愉快を感ず。

午後、居留民団書記某の案内により宮殿及び其の宝物を観る。兎も角も一通りは修繕も出来し卅九年に觀し時とは全く面目を改めたり。宝物も昔日と異なるなし。乾隆帝の兜、羽織、印鑑等なり。宮殿を去って市街を散歩す。市街の光景は前年とは大いに面目を改めたり。見世の様子も奇麗になり道路も善く、且つ人口も数倍したるが如し。且つ店頭に日本製品の多きこと著明なり。夕食は彦三郎の案内にて小西洋料理店に於て喫す。風味佳なり。軍医杉山氏も共に招かる。今日一日休養して元氣大いに回復したるを覚ゆ。

〔五月十七日、火曜日〕

午前二時半、彦と共に起きて「ハーレー」彗星を見る。その核を見ること能わざりしは残念なりき。然れども、その尾は

東の地平附近より銀河に達せんとす。実に壯観なりき。且つ滿州の地、空気透明にして、列星の光燦爛、内国の秋天の如し。三時に再び起きて之を見たれども、その時は既に夜明けは近く光は幾分か薄くなりたり。今日は小池総領事より彦三郎と共に午餐に招かれ、午後二時は新市街の小学校に於て話を為し、それより日本人倶楽部に於て講話を試み、其の後又会食に招かれたり。

金六亭に於て日本食の饗応あり。來会者は奉天クラブの評議員十数名なり。八時半同所を辞し彦三郎の住宅に帰り旅装を整えて、彦三郎と共に三井の馬車にて停車場に向う。奉天停車場長名川某は、昔日本挽町にて近所に住居したる人なり。クレメント氏は大連より來たる。午後十時四十分出發す。

〔五月十八日、水曜日〕

午前六時長春に着、和田俊雄停車場に出迎う。直ちに大和ホテルに往きて朝食を喫し、自分は長春小学校長の依頼により同校に赴きて一場の話を為す。生徒百五十名許りなり。

午前十一時五十分長春を發す。是よりは愈々露国の鉄道なり。午後八時半ハルピンに着す。はがきを出し、停車場外に散步す。十一時に浦塩よりの列車來たる。之を乗換う。其の際頗る混雜したり。偶然岡本敏行氏に逢う。真野氏は既に寝に就けりと云えり。スタール教授と同室に入る。同氏及び從僕ゴンサレス、並びにクレメント氏と余と凡て一室四人なり。手荷物多く中々窮屈なり。

〔五月十九日、木曜日〕

早朝起床、冷水にて身体を拭取る。茫々たる原野を西に向いて奔るのみ。午後八時マンジュリー駅に達す。此にて旅券及び手荷物の検査あり。但し関税を課せらるべきものあるや否やと口上にて聞きたるのみ。意外に寛大なりき。但し其の前に車掌に一人一R宛て心付けをしたり。

〔五月二十日、金曜日〕

平原を通過して左右に山河を見る。午前八時チタ府に達す。日中は暑に堪え兼ねる程なるに、尚地上には残雪あり。此の暑気は或いはハレー彗星の尾に接触したる為には非ざるか抔と戯れたり。

〔五月二十一日、土曜日〕

午前四時起床、汽車は未明よりバイカル湖畔を沿うて走りつつあり。湖水は尚堅氷を以て蔽われつつあり。九時半バイカル停車場に着。アングラ河に沿うて走る。実に盛大なる大河なり。午前十一時イルクックに着す。同府はシベリヤ第一の都会なりと云う。

〔五月二十二日、日曜日〕

兩三日來、移民を満載したる列車に逢うこと頻繁なり。日中暑氣甚だし、且つ砂風の襲來あり。やがて雨降る。日没エネセ河を渡る。クラスノイアルスク市を過ぐ。

〔五月二十三日、月曜日〕

朝は冷氣にて心地好し。但し日中には暑氣烈しく八十度以上

## 第六篇

に昇る。然かも尚、地上には処々残雪を見る。実に奇観なりとす。夕刻オビ河を渡る。此の日過ぎたる処は牧場幾百里、深林又幾百里、且つ金坑多しと云う。実に広大なる国なり。

〔五月二十四日、火曜日〕

原野茫茫たり。午前六時オムスクに着。大雨となる。暫時にして休む。終日冷気を覚ゆ。夕刻クルガンを過ぐ。沃野千里の眺望あり。ウラル山の名物たる寶石の売物あり。

〔五月二十五日、水曜日〕

昨夜来ウラルの山中に入る。但し峻坂に非ず。午前六時前歐亜の国境を過ぐ。即ちウラルの分水嶺なり。ストウスト駅に於て記念の為寶石数個を求む。冷気を覚ゆ。

〔五月二十六日、木曜日〕

午前六時三十分ヴオルガを渡る。河も盛んなり。橋も盛んなり。殆んど揚子江の如し。橋の長さ一千三百六十二メートルなりと云えり。此の辺の光景は大陸にして始めて見るを得べし。

〔五月二十七日、金曜日〕

午前七時五分予定の如くモスカウに到着したり。此に於てスタートル氏に別れを告げ真野、丸山、岡本、クレメント、マフヘット、余の六人にてホテル・ベルリンに投ず。朝鮮人朴道錫なるもの案内者として停車場に迎う。ホテルに於て各室を定む。ク氏と余は同室にて一人前室料三ルウブルなり。それより朴の案内にて雀が岡及び救世主の大会堂を見る。雀が岡

と称するはモスカウ河の彼岸にてモスカウ全部を一目の下に見るべき所なり。ナポレオン第一世が陣取りたる所なり。今は水道の蓄水所なり。岡の上に二、三の茶屋あり。小女等裸足にて客を引く様は日本の田舎にも見ざる所なり。モスカウ河を小蒸気船にて上下す。絶景なり。病院の広大なる驚くに堪えたり。

救世主の大会堂は露仏戦争記念の為に建築せられたるもの。其の経費一千二百万円と云う。実に荘大美麗なり。

本日は露帝戴冠祭日にてクレムリン始め博物館等皆見ること能わず。依りて午後は宿にて書簡を認め、且つ小西氏の案内にて真野氏と共に露国式風呂を試みたり。久振りの入浴にて実に愉快に感じたり。且つその仕掛けの広大なるに驚きたり。但し入浴料は一人二「ルウブル」なりき。本日は対馬海峽戦争の記念日なるこそ実に奇妙なり。

〔五月二十八日、土曜日〕

午前十時朴をして荷物を停車場に預けしめ、ホテルの仕払いを為し、十一時より同人の案内にてクレメント、モヘット、岡本等と共にクレムリン宮殿に往きその諸部を見る。宮殿の中心に小会堂あり。之をクレムリンの起源と為すと云えり。又ナポレオン第一世が三泊したりと云う寝台等あり。当時の宮殿は実に質朴なるものなり。只戴冠式の行なわれたる正殿は中々荘大なり。

クレムリン宮殿を見て後に絵画館を見る。就中、最も見るべ

きはウエレスチャージンの作なり。露土戦、露仏戦争、髑髏の山の如き最も傑作なり。同画伯が旅順港外に歿したるは実に遺憾なりき。終りに「アルケード」を一見したり。中々盛大なる組織なり。ブラセルスの夫れに酷似す。

午後六時半より真野、丸山、岡本氏等と共に日本副領事花岡氏方に招かる。土曜会員五、六名と共に日本料理の饗応を受く。自ら本国より携えたる干海苔、カキ餅、ビスケット等を寄附したるに一同大喜びなりき。料理人は小西増太郎氏なり。午後、余と岡本氏とは同所を辞し一旦ホテルに帰り、クレメント氏と共に朴を伴いてニコラス停車場に至る。待つこと約一時間にして発車す。露国式二等寝台車は至極便利にて日本の一等寝台に勝れり。

〔五月二十九日、日曜日〕

昨夜来降雨にて寒気を覚ゆ。午前九時十五分ベテルスベルグ府に着車す。三人相携えてホテル・デアングリテール(英國ホテル)に投ず。見物は明日に譲る予定なりしが、月曜日は大抵の所は見る能わずとの事故止むを得ず案内を雇い、先ずセント・アイザックの大会堂に往き暫時讚美歌を聞き、それよりヘルミターデの博物館を見る。絵画中見るべきもの多しと雖も、最も注目すべきはミウレルローの大作其れなりと思えり。ラファエルのもは傑作と思われず。其の他フレミシ、オランダ、エギリス、ゼルマン派等見るべきもの少なからず。但し時間の迫れるが故に只之を瞥見せしのみ。実に遺憾

なりき。ホテルに帰り午餐を喫したる後各宮殿を見る。是れ実に壯大華麗を極めたるもの筆紙の能く尽す所に非ず。右を瞥見否通過して後に、夏公園及びベテル大帝の御殿なるものを見る。此には大帝自製の細工物等あり。中々面白し。但し極めて質素なるものなり。

此を去りてアレキサンドル・エフスキー修道院の讚美歌を聞く。其の声や実に美なれども只同一の事を幾回となく反覆するのみにて何等の意味あるやを知らず。且つその大会堂の如きもロマ教のそれと大同小異にて殆んど偶像教の観あるを免れず。日本人が之を「御寺」と呼ぶは無理ならず。

帰途バロン・ニコライ氏の宅を訪問す。不在なり。名刺を残して帰る。夜に入り同氏来訪す。同氏の招きにより再び同氏方に赴き学生十数名に会見して一場の談話を為す。

〔五月三十日、月曜日〕



ニコライ氏

バロン・ニコライ氏はデイ氏を同伴し来訪す。デイ氏は露国学生のために労働するの目的を以て米國青年会より派遣せられたる人なり。同氏の案内にて「マヤルカ」(燈台の意義)即ち露国特種の青年会館を見る。主任ゲートルド氏はエデンポローに往き不在、体操教師其の館内

## 第六篇

を案内す。他の点に於ては普通の Y・M・C・A. と異なる所なければども、露国皇帝及び皇后の肖像を広間の正面に掲げたのみならず、各室に「アイコン」を掲げたる実に奇妙に感じたり。畢竟するに露国々教会の歡心を買わんとするが為に招きたる必要なり。

ニコライ氏の周旋により休日にも拘わらずアレキサンドル三世博物館を見る。本館長某殊更に出て来たりて自ら説明の勞を取りたるは多とすべし。本館の作り凡て露国人の作なりと云う。就中、ウエレスチアーギンの作多々あれども傑作はモスカウにあり。只同人が日本の建物、人物等を写したるもの數品あるは珍し。其の他種々の大作はあれども妙品と見るは稀れなり。

午後、岡本氏は尚一日滞在することとなり、クレメント氏及び余は今夜出発と定む。午前中に案内をして寢台を買わしめんとしたれども既に売切れてなしとの事なり。依つて翌日の寢台をナイトクウネンに電報を以て申込みしめたり。ホテルのコンダクトル曰く、若しも六ルウブルを出さば余等二人の爲に一室を買切ることを得べし。依つて彼に六ルウブルを托す。彼又曰く、然れどもその手荷物も悉く室内に持入ることを得べしと。

午後十時十五分ベルリンに向いて出発の筈なり。デイ氏は同車にてワルソウ停車場迄余等を見送る。露国の一学生も亦来た。コンダクトルは行李の一は大にして室内に入るべから

ずと云う。且つ切符は二枚以上は出さずと云う。依つて或いは彼が為に三ルウブルは全くせしめられたるには非ずやとの疑いを起こしたり。然るに不思議にも、余等二人の室には何人も他に入り来たらす。終夜一室を占領して安眠するを得たり。察するに、停車場の出札掛と相謀りて、余等より二人分の代金を受取り切符は握潰したるものならん。是れ即ち露国式の一ならんか。

### 〔五月三十一日、火曜日〕

午後四時半露国々境ウキルバレンに着す。此に於て旅券の検査を受く。此にてルウブルをマークに交換す。待つこと一時間余にして僅かに數丁を隔てたるナイトクウネンに着す。此より独逸領なり。此に於て荷物の検査を受く。但し頗る寛大にて殆んど形式に過ぎず。クレメント氏は出札所に往きて電報の受取を示し寢台の事を掛合いしも、更に取合わずとて空しく帰り来た。且つ又余及びク氏の行李をベルリン迄預けたるに十マルクを要求せらる。是には少々驚きたり。夜中は寢台に非ざるが為に安眠するを得ず。頗る困難したり。

### 〔六月一日、水曜日〕

午前六時二十分伯林フレデリヒ・ストラッセ停車場に到着す。荒川文六出迎え呉れる。ペテルスベルグよりウキルヘルム・ストラッセの青年会ホスピス氏に電報を打置きたれば、先ず同所に往きたれども既に満員にて余室なしとて隣家のホテルに案内したり。依りて止むを得ずクレメント氏は此に一室



を借ることとなし、余の荷物も此に置き、余は文六の予め頼み置きたるボンションに一泊することに定む。朝夕の食事を包みて一日六マルクの由なれども、室は二十畳以上覆台も二個あり中々に立派なるものなり。ホテルにては部屋のみにては八マルク以上のものなり。ボンションに着き、先ず第一に風呂を命じて数日来の汗と労とを洗い落し、文六と相携えて市街に出て午餐を共にし、夫れより動物園内を散歩し、然して当地第一のデパートメント・ストアを一見し記念の爲絵葉書アルバム一冊を求む。

ベルリンはペテルスボルグより来て見ればその繁栄進歩驚くばかりなり。去る卅八年に來たりたる時に比すればその繁栄数倍したる如くに感ぜらる。殊に目立つは自動車の往來織るが如きことなり。又地下鉄道の如きも其の後の事と信ず。実に独逸の進歩の甚早なるには驚くの外なし。本日春期大観兵式の祭日として市中殊に賑わし。ボンションに帰り内への書信を認む。十四日発の家信に接す。一同無事の赴きなり。

〔六月二日、木曜日〕

午前八時半荒川文六來たる。ボンションの会計をせしに九マルクなりと云う。最初荒川の約束したる時には、朝夕の食事を含めて一日六マルクの筈なりしに今となりて九マルクなりと云う。面悪しき仕打ちなれども喧嘩にもならず。九マルクを払いて去る。独逸の下宿屋は油断ならずとの断なるが是れ亦其の一例ならん。荒川と相携えてホテルに帰りクレメント



夫の千代子博士  
荒川文六の長女  
井深長工の長女

氏同道ウンテル  
デン・リンデン・  
ドーム、旧新博  
物館を觀る。王  
宮は昨日の宴会  
の爲に縦覧を許  
されず。リンデ

ン・レストウラントに於て昼餐を喫し近衛兵の交代を見且つ絵画館を見る。古画はなけれども新画中に傑作と思わるるもの少なからず。之を辞しリング鉄道にて伯林の郊外の景況を見、シャーレツホンボルクに下車しチアルガルテンを通過し夕食を喫してホテルに帰る。一日の見物にて中々疲労を覚えたり。クレメント氏の如きは大弱りに弱わられたり。

夜に入り石橋友信氏來訪、米國遊学の事に付き依頼あり。荒川は二週間前風邪発熱せし赴きにて大いに衰弱の様子なり。呉々も衛生に注意するよう忠告を与え置きたり。

〔六月三日、金曜日〕

午前十時ウエルヘルム・ストラセの旅館を出立し十一時四十五分、フレデリヒ・ストラセの停車場を出発す。荒川、石橋の二人停車場迄送る。

ハニ、ドルトマレド、エスセン等の製造地方を經過し夕刻ライン河を渡り、ホックステールに於て税関の検査を受く、極めて寛大なり。午後十二時比フラッシングに着、汽船に乗移

る。荷物其の他に付きてク氏の心配一方ならず、傍観するも  
 氣の毒なるほどなり。実に小心翼翼たるの人なり。乗船して  
 暫時寝に就く。モルガン氏は年令六十以上と見受けたり。頭  
 髪は既に斑白以上なり。長身にして瘦ぎずの人、音声は朗々  
 として発音最も精確明瞭なり。ゼスチュルは多く用ゆる方な  
 り。説教題は行伝廿の廿八、神の教会と云う事にて、其の意  
 義を説明し神の国との区別を明らかにし、キリスト信者は只  
 聖靈のバプテスマを受け神の権能の下に生活するものたる事  
 を弁明したり。その思想に於ては別に斬新なるものなかり  
 き。但しその弁明の明瞭にして老練なるには敬服せざるを得  
 ざりき。聴衆は約千人と見受けたり。礼拝後聖晩餐式あり。  
 極めて簡單なり。只他教会員の姓名と所属教会とを札に記さ  
 しめて之を読み上げたるは至極妙案と思う。之に由りて西京  
 のデビス氏夫婦のある事を知れり。然れどもその顔を見ざり  
 き。会衆中に一人の日本人と思わる人ありたれども之と語  
 を交ゆるの機会を得ざりき。教会を辞してロールド・キナア  
 ルドの宅に赴く。午餐に招かれたればなり。キナアルド夫人  
 及び令息二人及び氏の妹も共に食卓にあり。令息の一人は四  
 年前日本に漫遊したりとの話あり。食後雑話の後辞して帰  
 る。貴族院傍聴券を申受けたり。

午後七時シテ・テンブルに往きカムベル氏の説教を聴く。  
 聴衆は堂に満ちたり。但し説教には特別の事なし。題は神が  
 イスラエル人に語らんとせしかども、彼等はエジプトの奴隸

と成り果ててその声を聴く事能わざりきとの事実より、今日  
 の物質的傾向に及びて靈の為に生活すべき事を勧めたり。コ  
 ワヤの唱歌は実に美事なりき。男女三十名許りあり、女は大  
 学生の如き帽を戴き且つガウンの如きものを着せり。彼等は  
 説教者の真上のガラリーに在って聴衆に面せり。又礼拝式數  
 名の役員は壇上に坐せり。会衆は千人位と見えたり。中等社  
 会の人々と見受けたり。

〔六月六日、月曜日〕

午前ミオルジ・ウキルリアムス・ハウスに往き内及び熊野氏  
 よりの書状を落手す。内にも学院も無事の赴きにて感謝  
 す。但し文部省に於ては又々高等学校規程に付きて狹隘なる  
 規則を設けて我等の学校を疎外せんと企図す。実に困りたる  
 ものなり。熊野氏の報によれば神戸の方は十年計画にて千円  
 募集云々。何たる寢言なるやあきればはてたる事共なり。

ハワード・ウキルリアムス氏に面会す。故ウキルリアムス氏  
 の写真を贈らる。ドクトル・ワイコッフ氏の書状を携えて熊  
 ヲジョン・ジャクソン氏を訪問したるに不在なりき。ロンド  
 ン青年会本部フウバル氏を訪問す。彼も不在なりき。

午後は日本への返書を認めて後休息す。夕刻クレメント氏に  
 再会して夕食を共にす。同氏の話によれば原田助氏はエデン  
 ボロー大学よりエル・エル・デーの学位を受けんとすとの事  
 なり。氏の得意思いやらる。

〔六月七日、火曜日〕

昨夜来雷鳴降雨あり。本日は雨天にも拘らずクレメント氏と共に日英博覧会を見ん為に往き、開場迄に尚半時間あるが故に、先ず日本人キリスト教青年会に往き幹事村上氏を問う。同氏は親切に我等を迎えたり。鈴木春氏も附近にありとて使者を送る。クレメント氏は先ず独り見物に出掛け余等は三人にて向側の生稲分店と云う日本料理店に往き日本食を喫す。吸物に刺身に牛肉と玉葱の甘煮なれども、風味は最より佳ならず、只日本食と云う迄の事なり。モスカウの日本料理に及ばざることを遠し。

食後村上氏の案内にて会場を一見す。名は日英博覧会なれども、実はロンドンに開かれたる日本の小博覧会にて英国の分は申訳の為のみと見受けらる。但し博覧会は中々好評にて見物人も之れある可き様子なり。然し乍ら何を申しても、相手が錢儲け主義の私立の会社故万事その調子なり。日本の出品殊に陸海軍省の出品は目立って宜し。美術品も可なり。なれども之を見る人は寧ろ少数ならん。村上氏と共に台湾の喫茶



鈴木春

店に立寄りて茶菓を命ず。給仕女は日本服装の英国人なり。其の服装、髪風等実に奇妙なり。然かも英国人中には彼等を日本人と思ひ、日本人にも中々色

白の人あり杯と評す向きもある由なり。見物を終り村上氏に分れ鈴木氏の案内にて自動車に乗り、ハイドパーク、リゼントパーク、ハンプステド等を乗廻してホテルに帰る。甚だ愉快なりき。其の前に鈴木氏と共に陸奥伯を訪問す。伯は胃潰瘍の赴きにて夫人面会せられ、中嶋男爵の伝言を達して辞したるも、余程重患の様子なり。気の毒なる事なり。一日も早く日本に帰りたしと夫人は云われたり。住居はカンパデンヒルにて頗る好地位なり。夜に入りてフヒシャル氏来訪、暫時談話して去る。同氏は明日フックスフォルドに往き、それよりリバルプールの青年会大会に出席し、それよりエデンボロに往く赴きなり。

### 欧州に於ける井深先生の思出

鈴木春

わたしの滞欧は一九一〇年から一七年にいたる七ケ年間でして、最初の三カ年間はロンドンに、其後の四カ年間はパリに在任していました。一四年からの三カ年間は、恰も第一世界大戦争の最中として戦争の最重要地と認められたパリにおりました故、種々忘れ得がたい思出がありますが、今は井深先生に関する思出を語るに止めます。

欧州で先生にお会いしたのは、たしか一九一〇年エディンバラにて開かれた教会々議に先生がご出席の途次ロンドンに

お立寄りのときでした。先生は当時ビショップ街にあったわたしの事務所にお電話があり、お泊りになっていたホテルに先生をご訪問することになりました。その頃のわたしは齡三十歳、今日は既に九十歳を超え、先生にロンドンでお目にかかったのも既に六十年の昔のこととして、当時のわたしの写真をと本書の編集責任者からのお求めに応じ、ここに載せられることになりましたが、まことに今昔の感に堪えないものがあります。

ロンドンに在住の期間わたしに会見を求められたキリスト教会の先生方で、井深先生以外には植村正久先生と原田助先生とがあります。わたしの海外勤務は銀行関係のことでありました故、先生方と会見してもお話の題目は自然と限られてしまいますが、異国で再会の喜びをあらわすには、先生方を食事にご案内するのが適当と感じていましたので、井深先生をご案内しようと思ひホテルの狭いお部屋におたずねしその旨を申し上げますと、先生はベッドに腰掛けわたしに椅子をすすめながら、お部屋で語り合う方が望ましいと答えられ、そのままひと時を故国のこと特に明治学院母校のことなどのお話に過ぎしました。

植村先生は何の前触れもなく突然わたしの事務所にお出になりましたので、お食事に先生をご案内しお話を承わりたいと申し上げますと、暫らくわたしの身内のものなどのお話があり、食事よりも大英博物館へ案内して呉れとのこと希望があり、

ミュージアムの前までお供しますともうこれでお別れすると先生は独り館内にお入りになってしまいました。原田先生はわたしの妻の里方湯浅家の姻戚でもあり、同志社総長としてのご経歴から世俗社会とのご経験も少なからず、銀行マンのわたしのおつき合ひも心得ていられるとみえ、わたしが先生をお食事にのご案内すると喜んでおうけになり種々のお話を交えながら一夕の歡びを尽すことができました。

以上ロンドンに於ける教会の三大先生とわたしとの会見の思出は、先生各自の異なったパーソナリテイの片りんを示しているように思います。あえて優劣を判断するためでなく各自の特色がにじみ出ているような感じを受けたのです。今日はこれらの先生方も各々のなすべきこの世の仕事を果して、父なる神のみ許に立ち帰られました。ロンドンならぬ天國に於て先生たちとわたしとの再会も程遠からぬことでしょう。

(筆者は明治学院理事長)

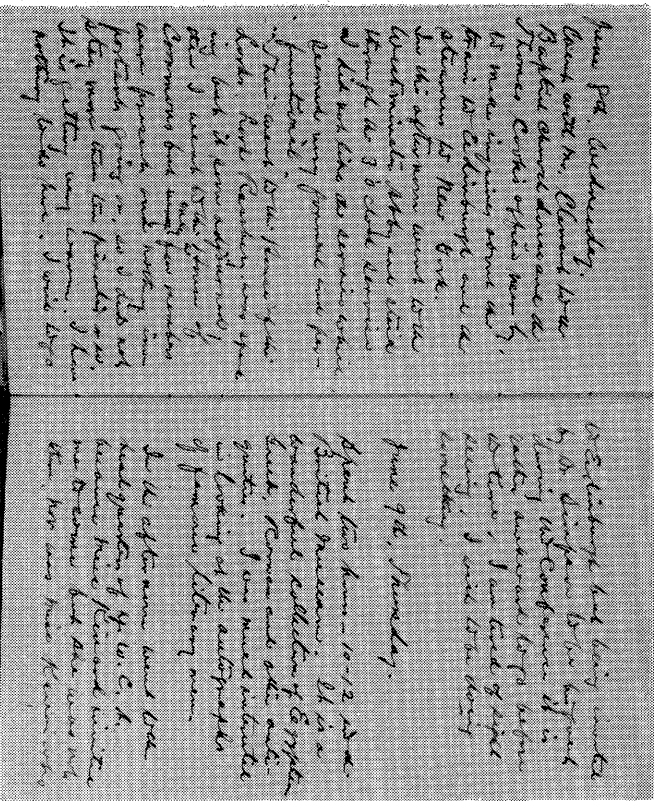
[June 8th, Wednesday]

Went with Mr. Clement to the Baptist Church House and the Thomas Cook's office near by, to make inquiries about the train to Edinburgh and the steamers to New York.

In the afternoon went to Westminster Abbey and stayed through the 3 o'clock service. I did not like the service which seemed very formal and perfunctory.

Then went to the House of the Lords. Lord  
Rassbery was speaking but it soon adjourned; then  
I went to the House of Commons but only a few

members were present and nothing important going  
on, so I did not stay more than ten minutes or so.  
It is getting very warm. I have nothing to do here.



明治43年の日記

I wish to go to Edinburgh but  
being invited by Dr. Simpson to  
be his guest during the Conference  
it is rather awkward to go before  
the time. I am tired of sight  
seeing. I wish to be doing some  
thing.

[June 9th, Thursday]

Spent two hours—10—12 in  
the British Museum. It is a won-  
derful collection of Egyptian, Greek,  
Roman and other antiquities. I  
was much interested in looking at  
the autographs of famous literary  
men.

In the afternoon went to the  
headquarters of Y. W. C. A. because  
Miss Kinard invited me to come  
but she was not there. Nor was  
Miss Kawai who, as I was told,

was to be one of the speakers. So I left after staying a few minutes. It is very warm in London. I wish I were in Edinburgh.

A note came from Dr. Simpson saying "Welcome Monday afternoon." I finished reading the life of Sir George Williams which was given to me by Sec. Howe. He was a true Christian man. He loved the souls of youngmen and did his best to save them. That was the secret of his success.

[June 10th, Friday]

Papers say that yesterday was the hottest day in the year, 79 d. in the shade. It was not only hot but very close.

Wrote to Mr. Ohori in America. Went with Mr. Clement to the King's Cross Station to buy ticket to Edinburgh. Then I went to the Yokohama Specie Bank in Bishop's gate street. It rained and the road was muddy.

In the afternoon it was again very sultry and close. Bought Kingsley's Hypatia.

[June 11th, Saturday]

Having nothing to do specially, went again to the Exhibition. But having been through it once I

was not so much interested and returned "home" about 2 p. m.

In the evening Mr. S. Suzuki called and I had a pleasant talk with him for two hours or so. He told me that he met Tamura at the Japanese Y. M. C. A. He told me also that Honda had come to London.

This is the day for the commencement of the Theological Department in Meiji Gakuin.

[June 12, Sunday]

In the morning went to Hampstead to Dr. Hortor's Church. He expounded the latter half of the 2nd Corinthians. I was quite disappointed in his preaching. There was nothing original. But he told a rather good story about the boyhood of Robert Moffat.

In the afternoon went to the Japanese Y. M. C. A. at Sheperd Bush and spoke to about twenty Japanese youngmen. Honda was there and he led the meeting. Tamura & Chiba were there too. I took my nori and kakimochi. We had a simple Japanese supper. They all enjoyed the nori very much.

We took a walk in the Hyde Park.

[June 13, Monday]

Left the Bedford Hotel at Southampton Row at 9 a. m. and took the train from the King's Cross Station at 10. Mr. Clement and I were again in the same compartment. Honda and other Japanese friends took another train that started about ten minutes earlier.

Arrived at Edinburgh 6. 20. had to wait some-time for my luggage and a carriage. The porter went to get one.

Dr. Simpson welcomed me to his own house at 52 Queen St. The Fishers and the Eddis of India are few guests. Mrs. Simpson is away.

After supper Dr. Simpson took Mrs. Eddy, Mrs. Fisher and myself to the Reception at the Museum given by the Lord Provost and the magistrate of Edinburgh. There was a great crowd of people. 4,000 invitations were issued, I understand.

On my return home I found Simizu and Tsuru waiting for me. The latter wishes to stay here and study theology.

[June 14, Tuesday]

I enjoyed a quiet night. After breakfast went to the office and paid my fee (10 s.) and obtained the delegates' ticket, reports &c. &c. Met Mr. Oldham. I find I was put on the Business Committee which met on Saturday and Monday, but I did not know it until yesterday.

At 3 p. m. the Conference began with a business meeting. Low Be Young presided. The Business Committee appointed and Standing orders and rules for debate were adopted, and officers were appointed.

At 5 p. m. all delegates were invited to the Honorary Graduation Ceremonial of the Univ. of Edinburgh.

Mr. Chattergi of India and Mr. R. E. Speer among others received the degree of D. D. and Harada and Mr. Mott received L. L. D. There was a large crowd to witness the Ceremony. Evidently the honor was conferred to signalize the Conference because the recipients are all delegates of the Conference and were chosen representing different nationalities. The Vice Chancellor and the members of the Faculties and those who received the honor all wore gowns of different color.

In the evening the opening meeting of the Conference was held. A message from the King was read by the Chairman while the whole Conference listened standing and "God save the King" was sung. The Chairman gave an opening address which was very good. He was followed by the Archbishop of Canterbury and Dr. Speer. The Archbishop's address was very good. The meeting closed at 9.30.

[June 15 th, Wednesday]

After devotional session for a garter of an hour the Conference began with the consideration of Reports of Commission I "Carrying the Gospel to all the new-Christian world."

Mr. Mott as the Chairman of the commission made a very powerful speech. He was followed by a number of men who represented different countries. Mr. Chiba and Dr. Davis spoke for Japan. 12.35—1 p. m. Intercession meeting which was very impressive. 2.30—4.30 The consideration of Report of Commission I was continued. A lady made a very good 7 minute speech on the Extension of Christianity Empire sizing the social side of it. Mr. Speer too made a very good one emphasizing the

individual side of it.

As a member of the Business Committee I was asked to sit on the platform.

In the evening the Hon. Seth Low presided. Prof. Paterson of the Edinburgh University on Christianity as the final and universal religion as Redemption and Dr. Coffin on the same subject in its Ethical Ideal. The latter is by fair a better speaker. His speech was a very strong impeachment of modern civilization falling short of the Christian Ethical Ideal.

[June 16 th, Thursday]

After the devotional Exercises Dr. Campbell Gibson presented the Report on Commission II. On the Church in the Mission Field Dr. Arthur Brown made a very strong speech, insisting that the whole attitude of the Western Church toward the church in the mission field should now be changed. Mr. Pietin spoke but made no impression. Dr. Brown carried the Conference with him. Dr. Murray also spoke on the right side but did not amount to much. Honda spoke in Japanese and Fisher interpreted for him.

In the afternoon the discussion on the same subject was continued. Honda spoke on Belief and



its statement. It was rather indefinite.

In the evening I did not go to the Conference. I took rest and wrote letters to home and Dr. Imbrie.

[June 17th, Friday]

The subject of discussion for the day was "Education in relation to the Christianization of National life." Dr. Gove made a very good speech on the Report.

In the morning India and Africa was considered chiefly the former. In the afternoon China and Japan had their turn. There is a wide spread interest in China far more than Japan. I spoke emphasizing the need of strengthening the present schools and colleges and also of having a Christian university worthy of the name.

There is a consensus of opinion regarding the supreme importance of the educational work and of strengthening and coordinating the present institutions. This certainly is an indication of deeper insight into the real work of evangelization, quite different from the time when "the Evangelization of the world in this generation" was the watch word.

In the evening the mission work of German,

Dutch and French churches received attention. I went in but I could not understand the German speaker, so I came home and prepared for my address on Saturday night.

[June 18th, Saturday]

"The missionary message in relation to non-Christian religions" was the subject for the day's discussion.

The Animistic religions, the Religions of China, & Japan, and Islam were discussed in turn. The discussion was quite interesting. In the afternoon Hinduism was discussed. Rather wide difference of opinion was discovered as to the attitude to be taken toward it.

Mr. Speer summed up the discussion. I intended to speak a word of Testimony but there was no time. Yesterday, the Chairman said, there were 42 men who wished to speak, yet had no chance given them.

In the evening I spoke in the "Folbooth Church" the church of Scotland Assembly Hall. The Hall was quite full, about 1000 people were present. I had to read my notes, that was a great drawback, but I had

to. Mr. Miller of Sendai spoke, but his voice was so weak that he was not heard by half the audience I feared. Good many left while he spoke. Bishop Harris and Dr. Jones of Korea spoke. Their voices filled the Hall.

[June 19th, Sunday]

In the morning I was invited to speak in the Abbey Parish Church, the second largest Congregation in the city, as I was told by the pastor Rev. James Sabstin. I spoke for 30 minutes I suppose. I felt a little more at home than last night. I was not so harried. It was a large congregation, nearly one thousand. The church was full.

In the evening went to the Synod's Hall. The meeting was men only. It was crowded. Mr. Mott spoke with great force. He has a certain magnetism. He said when he returned from his first trip round the world he thought so many more thousand missionaries were needed to evangelize the world, the second time he came back he thought so many thousand more native workers were needed, but the third time he came back his ideas entirely changed. He saw that it was not a question of Mathematics but of Dynamics.

Mr. Mc somebody the editor of the Churchman, New York, spoke but he had nothing special to say except that Man's relations were family relation i.e. Sons of God and brothers &c. I then went to the Assembly Hall and heard the last half of Harada's address on the contribution of the non Christian races to the body of Christ. He made the loyalty the contribution of Japan to the fulfillment of Christian truth.

[June 20th, Monday]

In the morning went with Honda to buy a ticket for a passage cross the Atlantic. Then went to the Assembly Hall. The discussion was on the Mission's government. It was rather interesting. A photograph was taken. At noon I was invited to a luncheon at the Baramol Hotel by the Board of Foreign Mission of the Presbyterian Church. There were more than hundred persons at the table.

In the afternoon did not go to the Conference but took a rest and prepared for the evening.

In the evening spoke at the Assembly Hall. Bishop Roots of Hawkaw first spoke. I followed him. I read from my notes. I wish so much I could

Mr. Azriot spoke last. He spoke frankly about the unchristian attitude of some Christian missionaries in India toward the Indians. He quoted a sentence from some body to the effect that the English through their missionaries offered golden thrones in the world to come but gave them no chair in this world. It produced a sensation but he did it in a fine spirit, I thought.

[June 21, Tuesday]  
In the morning went to the Conference. The discussion was on the Cooperation and the Promotion of Unity.

In the afternoon I went to Glasgow to speak in the St. George's Church. The church was quite full about 1000 in number. Other speakers were Dr. Wilson and Guadis. In the evening went to the Conference again. In the evening Mr. Eddy and Dr. Denny spoke, D. Wa prayed.

[Wednesday 22nd, June]  
The discussion was on the preparation of missionaries. The subject was warmly but with good spirit discussed.

Was invited by the famous publisher, the Clark

family to dinner. Met Dr. Hasting, Prof. Mott, and some other noted men. Honda and Harada also were invited.

In the evening Dr. Horrow spoke on "the Sufficiency of God." did not hear the first part of it and was not very much impressed by it.

[Thursday 23rd, June]  
The discussion was about the "Home base of Mission." It was a fitting subject for the closing day. In the evening Sir, A. Fraser made a very good speech. Mott was not so good. He was too tired I am afraid. But the interests were well sustained to the very last moment. The devotional feeling was very remarkable. I felt greatly humbled and strengthened. I hope I may carry and spread the wonderful spirit of the wonderful Conference.

[Friday 24th, June]  
All the guests entertained by Sir Alex. Simpson during the Conference, i. e. Dr. George Alexander, the Eddies, the Fishers, and also Mr. & Mrs. Alexander departed after prayer and singing "God be with you till we meet again."

I called on Mr. Severance at North British Hotel.



原田 助

tian." The latter condition would be rather difficult to meet at once for obvious reasons, we can not turn out the men who served the school so faithfully during the past years. The

better way would be to convert them if possible.

On my way I called on Tsuru but he was out. I wrote him a note giving him a letter of introduction to Prof. Martin. I want him to prepare for teaching the O. T. in our school.



都留 仙次

Left Edinburgh by 4 o'clock train from the Waverly Station, and came Waverly Station in Glasgow. It was evening. Honda came after 11 o'clock.  
[Saturday 25 th, June]

After breakfast took a walk with Honda. He bought a grip and I bought half a dozen collars and handkerchiefs.

Left the Hotel at 9. 30 and took a train at 10 o'clock and came to Greenock about 11. We met Mr. Chiba at the station. A lance brought us to the Steamer California which is a little over 1.000 tonnage but a nice comfortable boat. Dr. and Mrs. Arthur Brown and several others who attended the Conference are on board the Steamer.

Wrote some letters to be mailed in Ireland tonight. Thus far the sea is very calm, and the day fine.

[Sunday 26 th, June]  
Slept well last night.

The sea was very quiet all day but rather cold. But the sea air is delightful after the smoky air in London and Edinburgh.

There was a short divine service in the writing

room. Dr. Hume, a missionary in India preached. Read an article by an English bishop on the unrest in India, which is very good.

[Monday 27 th, June]

It was quiet in the morning but it soon began to be rough and felt uncomfortable all day.

[Tuesday 28 th, June]

The weather improved and the sea quieter and enjoyed reading and eating.

[Wednesday 29 th, June]

The weather unpleasant but have yet missed a meal.

[Thursday 30 th, June]

Foggy and chilly all day. They kept whistling till late in the night.

[Friday 1 st, July]

The weather much better. Took a long walk before breakfast. Saw a number of whales sporting.

[Saturday 2 nd, July]

A little foggy but quiet.

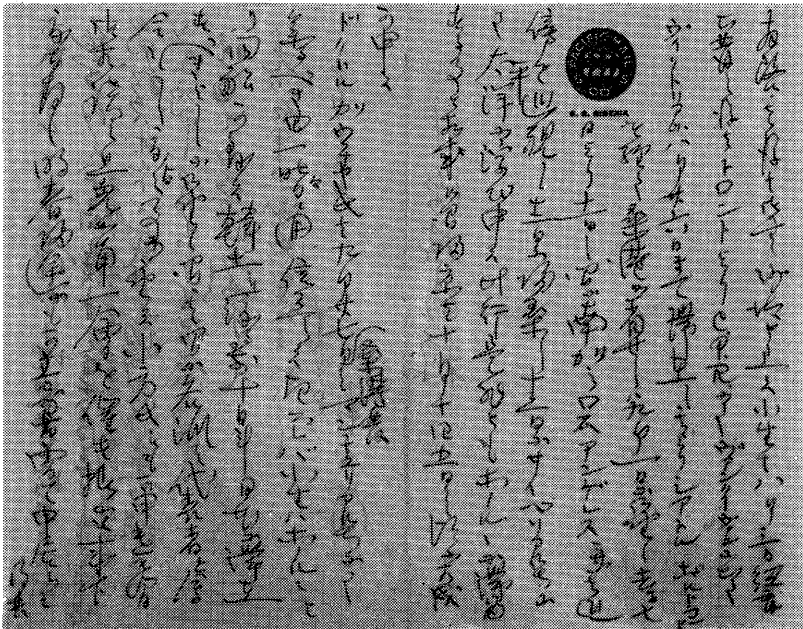
[Sunday 3 rd, July]

I was asked to speak at the divine service, and I did so. Dr. Arthur Brown presided, Honda read

the scripture and I spoke about the result of Christian mission during the past fifty years in Japan. Dr. B. asked for a copy of my address, so did some others.

The steamer arrived at the Pier about 3 p. m. I saw Dr. Amerman waiting at the Pier. Mr. Ohori did not appear. So I concluded that my letter did not reach him in time or he was prevented by some business. But while I was waiting for my baggage or rather while I was having my baggage examined by the Custom's officers he came. Mrs. Ohori too came and helped me and took me to their home. The Custom's officers were not very strict. I had nothing to pay. But before we came to the Pier the Emigrant officers asked to see our passport and asked how much money I had with me. That is a new thing. I hardly expected that sort of thing though I had no trouble about it. Honda went to stay with Mr. Mizuno, the Consul General, and Chiba went to Philadelphia. On the whole it was a pleasant voyage.

Thankful we arrived America in safety.  
[24(1) 望]



本多庸一氏より井深権之助宛て書簡

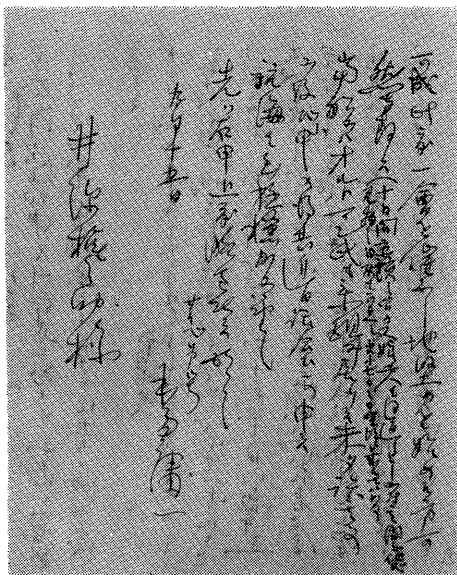
東京芝区白金明治学院 井深権之助殿

サイベリア号上にて

本多庸一

拜啓其後は御無沙汰申上候 小生は八月三日紐育  
 出発の後はトロントよりC・P・R・にてヴァンク  
 ーヴァルに出てヴィクトリアに八月廿六日まで滞在  
 し其よりシアトル、ポルトランドを経て桑港に着せ  
 しは九月一日に御座候 去る七日より十一日の間に  
 南加のロスアンゲレス并其近傍を巡視し十二日に帰  
 桑し十三日にサイベリア号にて太平洋に浮び申候  
 此行是非ともホノルルに滞留する事と相成候間帰京  
 は十月十四、五日の頃に相成可申候

ドクトル・ガウチャ氏は九月廿七日桑港発のマン  
 チュリア号にて参るべき由一昨々日通信之有候 さま



すれば小生はホノルルに上り同船可致候 韓土え渡  
 る前十日斗日本に滞在すべきよしに御座候間其間に  
 各派の代表者と会合いたし度旨の事に御座候 小方  
 氏えも可申遣候間御相談の上兎に角一会を催す様に  
 も成下度奉存候 明春帰途にも可立寄旨曾て申居り  
 候得共可成此度一会を催ふし地堅めを始めた方可然  
 奉存候 (十日間京浜の間に又娘二人も同道のよしに  
 付其間に他処見物の日取も可有候乎十七日の日曜頃  
 に成候ては如何)

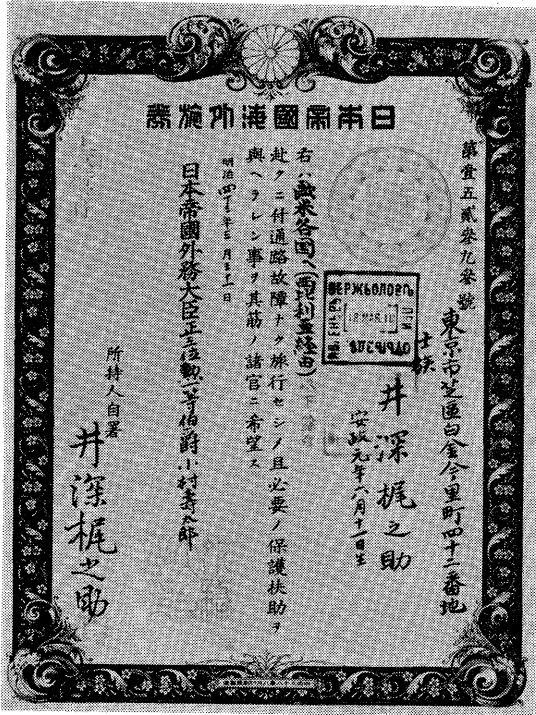
当船にはオルトマン氏も乗組み居り候 未だ談其  
 事に及び不申候得共近日話合ひ可申候 航海は至極  
 穩かに御座候

先は右申上度略書仕候 敬具

(明治四十三年) 九月十五日 サイベリア号

本多庸一

井深樞之助様

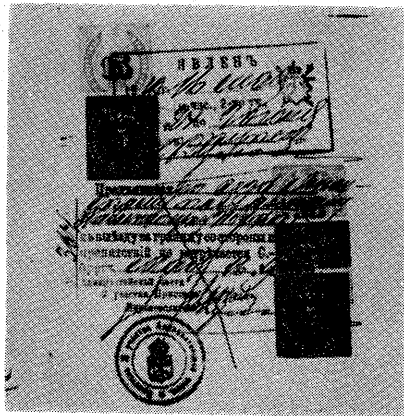
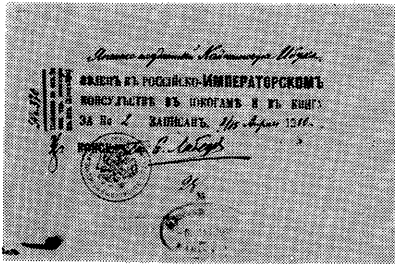


明治四十三年渡欧米旅行券

(1)

(2)

(3)





## 基督教教育の前途

井深 禊之助

我が邦に於ける基督教々育の過去に付いては既にピータルス氏の綿密なる演説あり、教役者養成即ち神学校の事に関しては後に原田氏の演説ある筈なり。然れば余は此等の方面に向いては論ずるの必要なし。然れども、單に基督教々育の前途に関しても研究すべき問題は随分沢山にあり、到底限られたる時間に於て之を詳細に論ずること不可能也。故に余は更に問題の範圍を狭めて女子教育に関する事は凡て婦人部に譲りて之を論ぜざるべし。又初等教育に関する問題、例えば幼稚園、家庭学校、小学校の問題には一切論及せざるべし。是れ決して此等の問題の緊要ならざるが故に非ずと雖も、比較的更に重要にして且つ切迫せる教育問題の我等の目前に横たわる者あるが故なり。

然らば、その重要な問題とは何ぞ。是れ他なし、今後我が邦に於て中学校程度以上の基督教々育を如何にすべきかと云う事は是れなり。中学程度教育も彼の有名なる明治三十二年八月三日の文部省令第十二号訓令に由り容易ならざる打撃を蒙り、明治学院、同志社及び青山学院は基督教々育の主義を維持せんが為に已むを得ず中学校の認可及び之に伴える所の高等学校との聯絡及び徴兵猶予の特典を放棄するに至れり。

文部大臣の訓令に曰く

一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは学政上最必要とす、依つて官立公立学校学科課程に関して法令の規定ある学校に於ては課程外たりとも宗教の教育を施し又は宗教の儀式を行うことを許さざるべし。

此の訓令の目的及び性質は一読して明白なり。官立公立の学校に於て宗教々育を施すの不可なるは論ずるを俟たざれども、私立の学校に於て宗教々育を施すべからざる理由果して何処にあるか。我等はその甚だ理由なきことたるを信じたるが故に、文部の当局者に向いて我等の所信を開陳し交渉数年に跨り漸くにして右三校の普通学部は文部大臣に於て中学校程度以上と認定せらるるに至り、引續きて諸種の官立専門学校及び高等学校との聯絡も付き且つ徴兵猶予の特典も与えらるることとなりたれば、父兄等此に初めて安んじて此等の学校に生徒を入学せしむる様になり、此の如くにして基督教主義の中学程度学校も漸く活路を開き得たる次第なり。若しも不幸にして文部の当局者が、最初の態度を固守して前述の特典を拒絶したらんには、恐らくは我等の学校は中学教育の機関としては自ら廢校の悲運を見たりしならん。

然れども、大能なる神の冥助により幸いにして事此に至らず、文部の当局に於ても漸く寛容の態度を示して現在の規定を設けるに至りたれば、目下の処先ず以て中学校と大差なきの状態となれり。然して其の結果、全国に於ける數個の基督教主義の中学程度の学校は何れも満員の有様なり。

然れば尚問題として存するは、中学以上の教育を如何にすべきか。我等の学校に於て中学科を卒業したるものが尚引續きて基督教主義又は其の感化の下に、更に高等若しくは専門の教育を受けんと欲する場合には如何に為すべきかと云う問題なり。

是れ固より今にして初めて起こりたる問題に非ず。早く既に基督教教育者の苦心したる所の問題なり。即ち此の問題の解決として京都の同志社には専門部あり、明治学院と青山学院とは高等科あり、立教学院には大学部あり、東北学院には専門学部あり、然らば我等は現在の設備を以て満足することを得るか、之を以て基督教々育

の目的を達することを得るか、之を以て我が国の教育上の必要に應ずることを得るか、或いは更に完備せる高等の教育機関を要せざるか。換言すれば、日本に於て名実相合える基督教大学の必要なきや否やと云うにあり。

立教学院に於ては既に大学部を設置し、同志社其の他の基督教学校に於ても大学部設置の計画ありと聞けり。蓋し現在中等以上の基督教々を施しつつある学校は何れも皆其の必要を感じつつあるは明白なる事実なり。何となれば、現今日本の情態に於ては、中学卒業の後単に高等普通の教育を受けたるのみにては、卒業後就職の途頗る困難なればなり。今日は堂々たる帝国大学の卒業生にして就職の困難を切に感じつつある場合なり。況んや単に高等普通の学を修めたるものにて何等専門の知識なきものに於てをや。今日基督教学校の高等科に入学者の少なき一の重なる原因は此に存するなり。青山学院の高等科に入学者の比較的多き一の原因は、無試験検定教育免許の特典あるが故ならん。故に余は云わんと欲す、現在我が国に於ける基督教教育機関は首無しの肢体の如しと。其の不備なるや論を俟たざるなり。

然れども人或いは云わん。日本帝国には既に東西兩京の帝国大学あるのみならず、九州にも東北にも設けられんとするに非ずや。加之のみならず、早稲田大学あり、慶応大学あり、又高等商業、工業、農業の官立学校あるに非ずや。然るに尚此の上に一大学を必要とするの理由何処にあるか。

此の議論に答うるには更に根本的問題を考えざるべからず。即ち日本に於て基督教主義の教育を必要とするや否やとの根本問題は是れなり。若し夫れ単に国家教育の立場より見れば、基督教大学は申すに及ばず、中学校も高等学校も基督教のものは一切其の必要を認めざるならん。否寧ろ此の如き学校は厄介物視するならん。然れども、我等の確信するが如く、日本の為に基督教主義の教育が果して必要なりとせば、現在の機関設備を以て満

足する能わず、其の目的を達すること能わず、と断言せざるを得ず。

然らば何故に日本の為に基督教教育を必要とするか。

今は其の根本に溯りて此の問題を詳論するの邊なしと雖も、極めて簡単に其の理由を述べれば、

第一、我等基督信徒は我が子弟の為に基督教主義の教育を要す。現在我が国の学校を官公私立の別なく宗教教育に對しては全然無頓着なるのみならず、其の態度精神に於て全然非基督教的なる場合少なしとせず。我等は此の如き精神態度の学校に我が子女の教育を托するは甚だ心苦しき事共なり。成るべくは単に中等教育のみならず大學教育までも基督教の感化の中に受けしめ、然して基督教的の品性を養成せしめんことを希望せざるを得ず。是れその理由の一なりとす。

第二、我等は基督信者として各自、分に應じて基督教を全世界に宣伝するの義務を負うものなり。我等は日本全國を基督教化せんと欲するものなり。我等は唯我が信仰上より之を欲するのみならず、我が国の為を思うても之を最善と信するものなり。実に基督教の感化に由らずして我が国民の品性を健全に発達せしむるの途なきを信するものなり。

然らば如何にせば能く日本を基督教化し得べきか。是れ当面の問題なり。夫れ一國民を教化するの道は第一直接伝道にあり。是れ勿論の事なり。然れども、唯直接に福音を説教することのみを以て唯一の方法と為すは、寧ろ淺薄の見と云わざるべからず。真に國民を教化せんと欲せば、其の脳髓となり指導者たるべき人物を教化し而して國民全体の思想觀念を基督教化せざるべからず。換言すれば、我が国の社会各方面に立ちて牛耳を取る人物をして基督教的の世界觀を有し、基督教主義に依りて生活行動せしめざるべからず。然して之れが為には、唯公衆

に向つて広く福音を宣伝し教会を建設するのみならず、最高の教育機関を設けて基督教的人物を養成するの必要あるなり。

然らば、如何にして此の如き大学を設立せんとするか。其の資金は如何に、其の教授たるべき人物は如何に、是れ實際の問題なり。若しも一教派にて之を建設し、之を維持するの金と人とあらば、是れ蓋し最も單純なる解決ならん。

然れども見渡す所、現在日本の教派中に一手にして之を実行するの資金を有するものあるを見ず。然らば諸教派合併して一の大学を設立するも亦一の方法ならん。例えば、現在東京にある四、五の中学以上の基督敎学校が合併して一の大学を設立せんと欲せば、是れ決して不可能の業に非ざるべし。然れども、恐らくは是れ云うべくして行なうべからざるの論なり。今日の如く教派の分立する間は、教育事業の合同を見るは、縦令不可能ならずとするも至難の事なりとす。

故に、余は第三の方法として教派以外に独立の基督敎大学の設立を切望して止まざるものなり。若しも此の如き大学の設立あらば、現在の諸基督敎学校はその卒業生の爲め初めて活路を見出して直ちに一生面を開くべきは、余の確信して疑わざる所なり。此の方法に対する一大困難は資金の出処なり。如何に少なく見積りても創立費五、六百万円は必要ならん。年々の経費も亦莫大ならん。漠然として此の如き事を云うは宛がら雲を捕うるが如き感なき能わず。然れども我等は神の全能を疑うこと能わず。若しも真に其の必要あらば、又我等にその信あらば、神に於て其の方法なしと云うべからず。日本に於ても既に教育の爲に百万円以上の資金を寄附したる富豪家も一人にして足らず。其の資金に至りては只管神の佑助と内外篤志家の義捐とに俟つの外なし。

余の切に希望する所は、本大会が以上述べたる如き基督教大学の必要を認め、満場一致の決議を以て其の意志を発表し、以て内外富豪家の篤志同情に訴えん事なり。其の学科及び他の細目に関する事の如きは徐るに議して可なり。〔開教五十年記念講演集 明治四十三年二月二十一日発行〕

## 基督教大学問題

観 潮 生

エディンバラ宣教会の影響として、諸教派連合の基督教大学の問題が、昨年来我国に提起せられて居ることは既記の如くであるが、爾來各基督教学校の当局者の間に協議が開かれつつあると聞く。然しいまだ何等の成案も立たず、ただ日本一般教育の現状と宗教々育の現状とを比較して、後者の欠陥を認め、宗教主義の大学の必要を声明せんとしつつあるに過ぎぬ様である。然るに、その必要の理由として考えられて居るところのものを今よりしてよく吟味することが大切であると思う。何となれば、今の諸校の当局者特に外国宣教師諸君のうちには、現今の我思想界の真相に通ぜず、今も尚二十余年の昔の如く我思想界は不可識論や唯物論の横行するところであるから、之に対して有神論を主張するの必要がある故に大学が必要であるという様に考えられるものも少なからずとか。抑も我思想界は、一般の物質的進歩によく随伴しつつあるかは疑問であるが、決して二十年一日の如きことは無い。思想上に於ても唯物論などはや真面目の主張者は少ない。精神の意義と価値とは漸く認められ、かの実現説や人格的唯心論やまた宗教家が却て二十年一日の如く、昔の不可識論や唯物論に対したときの思想を以て今日の思想界に対せんとしては効果がないのも無理はない。宗教に対する要求の如きも今は盛んにあるので

ある。ただ宗教界の進歩が遅くてこの要求に応じがたいのである。それを知らずに一に旧式の思想を以て大学を起し来るとも決して満足なることは有り得ぬ。

大学といわば、教授の自由と学究の自由とは最も尊重すべきものである。もしこの自由なければ何の大学であろう。然るに今日の論者の如き思想を以てし、即ち今の宗教学校に往々見る如き少しく自由なる宗教思想を抱くものがあれば忽ち圧迫を加えんとする様では、教育機関が如何に大きくなってそれもそれは大学では無い。

それで、ある進歩主義の人々の中には、まず基督教大学などいう文字それ自らが疑問ではないかという人もある。それは一理ある。然し我等はなお基督教大学の存在の理由があると思う。その故は、我等は人間の精神上の教養が大学準備教育を以て終ると見ることが出来ぬ。精神上の修養は人間全生涯に渉ることであつて見れば、如何に高き教育の期間に於ても之を忽語にすることは出来ぬ。勿論、問題は之を全く個人に任すや否やというにあるが、我等は大学教育に於ても教育者が学生の精神修養の為に力を尽すは至当と思う。故に各分科の大学生が各専門の学心に心を注ぐと共に、校内の精神上の空氣に触れてその人格を高上せしめ、更に進んでは世界人生の問題に接触すべきは最高教育の要件である。ここに於て基督教の世界觀と人生觀とがこの教養の根基となり得るとすれば基督教大学は成立するのである。

然し以上は各分科共通の教養の問題であるが、宗教主義の大学の問題は文科に於ては一の特別の問題となるのである。哲学や文学の如きは宗教に特殊の関係がある。宗教学や神学になると一層そうである。さてここで自由討究をなすとせば、本よりその結果、基督教に反対の思想の起ることもあろう。否な宗教をさえ否定するものも起るかも知れぬ。しかし人類の思想に大關係ある基督教そのものが、充分なる研究をとげらるべきは大学を

またねばならぬ。その真の光明はかくてぞ發揮せらるるであらう。特に一步を進めて基督教の将来の發達を想望すれば、之には最も優秀なる思想家の貢獻を要する。西洋思想の發達、その現今の趨勢、諸般思想の潮流、及び東洋在來思想等の研究實に大事業といふべきである。これらの方面の進歩は實に大学にまつこと極めて大である。基督教大学の必要がかかる点より説かれて來らねば我等は心安ずることはなしがたいのである。〔開拓者第六卷第四号明治四十四年四月一日〕





第七篇



# 明治四十四年の井深日記と教派合同問題

## 明治四十四年井深梶之助先生の日記

明治四十四年一月

〔一月二日、月曜日〕 晴但シ寒氣強シ

朝飯後直チニ和田秀豊氏及ビ市橋虎之助氏方へ年始ノ礼ニ廻リ、ソレヨリ貴山氏方ノ大会伝道局理事会ニ出席ス。貴山氏ノ満州及ビ朝鮮巡廻ノ報告、毛利、植村二氏ノ台湾巡廻伝道ノ報告ヲ聞ク。午後同所ニ於テ大会常置委員会ヲ開ク。一、二ノ報告アリタルノミニテ格別ノ議題ナシ。夕刻帰宅シテ又々年賀状ヲ認ム。

〔一月六日、金曜日〕 晴

東北学院シユネーダー氏來訪ス。協力伝道ノ事、又教育上ノコトニ付キ話アリ。午後、ドクトル・ワイコフヲ訪問シ、基督教主義大学取調委員会ノコトニ付キ協議ヲナス。

〔一月七日、土曜日〕

大久保利通伝上巻ヲ読了。元治、慶応年間ノ往時ヲ追想シテ感慨無量ナリ。若シモ会藩ニモ彼が如キ先見ノ人物アリタレ

バト思イシコト幾回ナルヲ知らズ。庭前ニ於テ家族撮影ス。健次ハ健康上ノ都合ニヨリ一高ノ寄宿舎ヲ退キ同志会ニ入会スルコトトナセリ。

〔一月十一日、水曜日〕

授業例ノ如シ。午後二時ヨリ建築調査委員会ヲ開キ、新教場ノ凶案及ビ位置ニ付キ評議ス。凶案ニ付キテハ格別異議ナケレドモ位置ニ付キテハ二説アリ。甲ハ新講堂ニ並ビタル前面ヲ可トナシ、乙ハハリス館ニ並ビタル西側ヲ可トス。議論ノ末、來ル十九日臨時理事会ヲ開キソノ決議ニ由ルコトトシテ閉会ス。余ハ思ウ所アリ、公平ナル局外者ノ位置ニ立チテ判断スルノ必要ナル所以ヲ極言シタリ。宣教師ノ為ノ学校ニ非ズ、学校ノ為ノ宣教師ナルニ、從來ハ事案之ニ反スルノ觀ナキニ非ザルナリキ。

〔一月十二日、木曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後花子同道横浜ニ赴キ、先ズ東洋汽船

会社ニ至リ原監督ニ面会、来ル三月文雄下船ノ事ヲ依頼シテ其ノ快諾ヲ得タリ。夫レヨリ英和女学校ニ赴キ、ミス・ウィリアムズ、及ビクロブ嬢ニ面会ス。及ビ三枝子ニモ面会相談ノ上、結婚式ハ来四月五、六日比ト仮定ス。春子ノ結婚式モ同時ニスルノ考エナリ。午後大風雨、珍ラシク雷鳴アリ。

〔一月十六日、月曜日〕

午後東京高等工業校長ヲ訪問シ、入学規定ノコトニ関シテ交渉ス。實際ニ於テハ異議ナシト雖モ規定取計ライ難シト云ウ。依リテ規定改正ノ事ヲ依頼シテ引取ル。青年会同盟事務委員会ヲ開キ、本年度ノ予算ノ認定其ノ他ノ事ヲ議決ス。横山繁氏帰省ス。

〔一月十八日、水曜日〕

午後青年会館ニテキリスト教育必要取調委員会ヲ開キ、大学設立ノ必要ニ付キ各自意見ヲ述ブ。シュネーダー、ヘーデン、ギウリック、イムブリー、ワイコッフ、バンドアイク、ベリ、ベンニクホフ、本多庸一、江原、石坂、千葉及ビ余出席ス。評議ノ末起草委員六名ヲ挙グ。イムブリー、シュネーダー、ヘーデン、ギウリック、石坂及ビ余ノ六人ナリ。委員ハイムブリー氏ヲ起草者ト定ム。同志社ハ別ニ二大学ヲ設クルノ方針ナリト云ウ。

〔一月十九日、木曜日〕

午前十時シュネーダー、ベーテン、ギウリック、小方仙之助及ビ余ノ五人会合、同道ニテ文部省ニ出頭、専門学務局長福

原氏ニ面会シテ、高等学校入学規定ノコトニ付キ質問シ且ツ請願ス。又実業学務局視学官針塚氏ニ面会シテ高等工業学校ノ入学規定ニ付キ請求シタリ。孰レモ我等ノ請求ノ理由アルヲ認メリ。午後明治学院理事會ヲ開キ、新教場ノ図案及ビ位置ニ付キ討議決定ス。

〔一月二十三日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後イムブリー氏ト会見、学院教員ノコト、セベレンス氏ノ書簡ノ事ニ付キ打合せヲ為ス。荒川文六、九州帝国大学工科大学教授ニ任ゼラル。高等官四等六級俸ナリ。

〔一月二十四日、火曜日〕

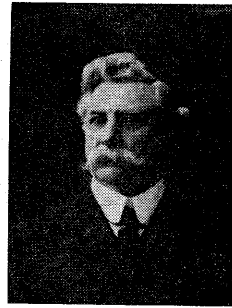
授業例ノ如シ。内務省宗教局長ヨリ電話アリ出頭面会。指路教会財団法人認可願ノ件ニ付キ質問アリ。午後河西家ヲ訪問シ、和田仙太郎結納ノ件ニ付キ打合せヲ為ス。木村良夫夫婦来訪ス。無政府党幸徳（秋水）伝次郎其ノ他十一名死刑ニ処セラル。

〔一月二十六日、木曜日〕

授業例ノ如シ。再ビ宗教局長ニ出頭、指路教会法人願ノ件ニ付キ打合せヲ為ス。午後青年会館ニ於テ東京教役者會アリ。本多氏ノ欧米視察談アリ、後、三河屋ニ於テ会食アリ。

〔一月二十七日、金曜日〕

例ノ如ク出院授業シ居タルニ、イムブリー氏我が教室ニ来タリ、只今ドクトル・ワイコッフ氏方ヨリ使来タリ同氏ハ言ウ



ワイコッフ博士

コト不能トノコトナリ。何か聞キタルカト実ニ寝耳ニ水ニテ一驚ヲ喫シタリ。直チニ授業ヲ休メ駆付ケタルニ途中下女ノ走り来タルニ逢ウ。彼女曰ク、且

那ハダメナリト。余急行シタイムブリー氏ト共ニ家ニ入ル。ミセス・ワイコッフ泣ク泣ク曰ク、彼既ニ往ケリ。成程面ヲ見ルニ全ク青ザメテ死人ノ面ナリ。手ヲ取りテ脈ヲ見ルニ未ダ温味ハアレドモ脈ハ絶エタリ。呼吸モナシ。加治木ハ未ダ来タラズト云ウ。依リテ余直チニ学院ニ歸リテ、ホイルトニ一氏ヲ電話ニテ呼び寄ス。ソレヨリ棺ノ注文ヲ為ス。

〔二月二十八日、土曜日〕

ワイコッフ氏方へ赴キ種々打合せヲ為シ、墓地ヲ瑞聖寺ト定ム。プレスビテリアン、及ビリフォームド・ミッシェンノ人々同所ニ墓地ヲ買ウコトナリ。十四人ニテ各二坪口二十八坪ヲ求ムルコトニ談判整ウ。代価ハ二坪十二円ナリ。雨天泥濘甚ダシ。夜、青年会館ニ於テ宗教講演ヲナス。新聞記者続々来訪ス。

〔一月三十日、月曜日〕

ワイコッフ氏葬儀ノ時演説スベキ同氏ノ略歴及ビ弔辞ノ草稿ヲ作ル。毛利官治氏来訪、指路教会財団法人認可願ニ付キ打合

セヲナス。午後和田仙太郎同道河村家ニ赴キ、結納ヲ授受シ婚約ヲ成立セシム。花子横浜ニ向キ、文雄結婚ノコトニ付キ校長並ビニ三枝子ト打合せヲ為ス。

〔二月三十一日、火曜日〕

熊野氏ト共同シテ花環ヲ贈ル。代金六円ナリ。午後一時半出棺。雨天泥濘甚ダシ。宅ニテライク氏ノ祈祷アリ。学生三十人許リ花環ヲ持チテ棺先ニ往ク。余ハブース、イムブリー、ゼームス・バラ氏ト共ニ馬車ニテ列ニ加ワル。生徒一同ハ郵便局前ニ起立シテ棺ヲ迎ウ。式ハ熊野氏ノ詩篇、ブース氏ノ新約朗読、バラ氏ノ演説、余ノ履歴朗読並ビニ弔辞、イムブリー氏ノ祈祷ヲ以テ終ル。会葬者満堂、生徒ハ皆階上ニ立タシム。墓地ニテハブース、和田、稲垣ノ三氏式ニ預カル。墓地ハ白金瑞聖寺ナリ。幸イニ同寺境内ニ数十坪ノ空地アルヲ発見シ、リフォームド及ビプレスビテリアン両ミッシェンノ人ニ申合セテ、二十八坪ノ使用權ヲ獲得シタリ。日暮ニ式ヲ終ル。生徒等ハ最後迄止マリタリ。墓標ハ故明治学院教授理学士ワイコッフ先生墓ト書サシメタリ。氏ハ実ニ模範の教員、忠勤ナル事務家、日本人ノ良友、キリスト教的の紳士ナリキ。真ニ温厚篤実ノ人トハ氏ノ如キ人ナランカ。

明治四十四年二月

〔二月一日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後ハ臨時休業ス。午後青年会館ニ於テ内外協力伝道委員会ヲ開ク。日本人側ニテハ本多、小崎、平

岩、植村、綱嶋、余ノ六人ナリ。評議ノ末、先ズ名古屋市ニ伝道スルコトヲ定メ、綱島氏ヲ委員トシテ同地ノ諸教会ト交渉セシムルコトト為ス。植村、綱嶋、バンカム、余ノ四人実行委員トナル。真澄発熱四十度以上ニ昇ル。

〔二月二日、木曜日〕

授業例ノ如シ。午後学院理事事務委員会ヲ開キ、故ワイコフ教授ノ後任者ニ付キ協議ヲ為ス。ジョン・バラ氏ヲ會計ト為ス。教授ノ大半ハホフサンマール氏之ヲ引受ケ残余ノ分ハ他人ヲ頼ム事ニ決ス。

〔二月四日、土曜日〕

午後「丁未会」ノ人々ト共ニ撮影。白井胤録氏來訪。教派合同ノ事ニ付キ意見ヲ聞ク。田嶋氏細君ノ母病死ニ付キ明日高輪教会ノ説教ヲ依托セラレソノ準備ヲナス。

〔二月五日、日曜日〕

朝高輪教会ニ於テ説教ヲナス。午後小石川松平家、桃沢氏、沼沢、片山、荒川家ヲ歴訪ス。荒川ニテ晚餐ヲ喫ス。帰途服部綾雄氏ニ邂逅ス。ワイコッフ氏記念肖像ノ件並ビ此ノ頃ノ大逆事件ニ付キ内閣ノ責任ヲ問フ事ニ付キ話アリ。

〔二月六日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後四時青年会同盟事務委員会ヲ開ク。フヒシャル、元田二氏帰朝。フ氏ハ日本青年会事業ノ為ニ五十万円ノ予約金ヲ募リテ帰レリ。会后、東京青年会ノ理事ト共ニ両氏歓迎会ヲ開キ夕食ヲ共ニス。

〔二月八日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後ラデス氏ヲ伴イ新築ノ築地小学校ヲ視察ス。経費ノ割合ニハ中々好ク出来タリ。建築費壹坪ニ付キ百十四円ナリト云ウ。ソレヨリ青山学院ニ往キミス・ペールニ面会シ、英語教員ノ事ヲ問合セタレドモ望ミナシ。

〔二月十日、金曜日〕

授業例ノ如シ。午後教員宗教研究会ヲ開ク。夜、学士会館ニ於テ大学青年会ノ発起ニテ、フヒシャル氏ノ為歓迎会ヲ開キ会食ヲナス。

〔二月十五日、水曜日〕

授業例ノ如シ。午後青年会館ニ於テ東京キリスト教教育会ヲ開キ、二、三ノ項目ニ付キ報告討論アリキ。

〔二月二十日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後青年会ニ於テ協力委員会ヲ開キ、石原氏ノ報告ヲ聞キ且ツ木更津講義所ヨリ会堂新築ニ関スル請願書ヲ議ス。夜、富士見町教会ニ於テ臨時中会ヲ開キ、同教会牧師招聘並ビニ日本橋教会牧師招聘ノ件ヲ可決ス。

〔二月二十一日、火曜日〕

授業例ノ如シ。午後新教場凶案委員会ヲ開キ見積書ノ方針ヲ定ム。午後発熱ノ気味ニテ夕ノ懇話会ニハ欠席ス。

〔二月二十三日、木曜日〕

朝授業例ノ如シ。十時ヨリ神田青年会ニ於テ教役者祈禱会アリ。伝道局理事モ出席ス。午後ハ外国宣教師モ出席、伝道上

第七篇

ノ事ニ付キ懇談ス。オルトマンズ氏、植村氏演説ス。貴山氏伝道局ノ事ヲ報告シ、石原氏東京市内伝道ノコトニ付キ提議ス。伝道局理事ハ三河屋ニ於テ会食シテ分カル。

〔二月二十四日、金曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後大隈伯爵ニ於テ、リチャード氏ト会见ス。即チハワイ中学校奨学金供進ノ件ニ関ス。来会者尾崎行雄、江原、本多、新渡戸、鎌田、島田、元田、成瀬、余等ナリ。三名ノ委員ヲ立テテ方法ヲ案ゼシムルコトトナス。

〔二月二十五日、土曜日〕

午前十時、青年会館ニ於テ内外協同伝道委員会ヲ開キ、名古屋市伝道ノコトニ付キ綱嶋氏ノ報告ヲ聞キ且ツ協議ヲナス。來月七日植村氏出張ノ筈ナリ。三枝子、母同道ニテ來訪ス。

明治四十四年三月

〔三月四日、土曜日〕

午後四時青年会ニ於テ同盟委員会ヲ開キ、米國ヨリ五十万円寄附金ノ件其ノ他ニ付キ協議ス。小松武治氏ヲ万国會議ニ派遣スルコトニ決ス。

〔三月六日、月曜日〕

授業例ノ如シ。新教場ノ入札アリ。夜委員会ヲ開キ開札シタルニ、浜田最低額、次ハ竹田、次ハ大倉組、次ハ鈴木、次ハ猪ノ橋ナリ。依リテ浜田、竹田、大倉ノ三人ヲ理事会ヘ提出スルコトニ決ス。熊野氏ハ議ニ預カル。

〔三月八日、水曜日〕

午前五年級修身ノ試験ヲ行ナウ。午後理事会ヲ開キライク氏ヲワイコフ氏ノ後任トシテ招聘スルコト、卒業証書ノ事ヲ決シ、ソレヨリ建築請負ノコトニ至リ、ランデス氏ハ全力ヲ尽シテ浜田ニ工事ヲ与エント謀リタレドモ、誰一人同意スルモノナク大勢不可ナルヲ見テ退場ス。ミロル氏ノ動議、ブース氏ノ賛成ニ由リ竹田源次郎ニ落札スルコトニ決ス。建築委員ニ熊野、ブースノ二人ヲ加エテ五名トナス。ランデス氏ノ挙動ハ殆ンド狂氣ジミタリ。

〔三月九日、木曜日〕

授業例ノ如シ。ランデス氏ヨリプロテスト書來タル。他ノ理事ニ示セドモ相手ニスルモノナシ。然シナガラ、念ノ為廻書ヲ添エテ他ノ理事ニ廻送シタリ。午後普通部教員会ヲ開キ、卒業式ノ準備ニ付キ委員ヲ挙げ、新校舎ノ図案ヲ示ス。

〔三月十一日、土曜日〕

午後二時青年会館ニ於テ内外協同伝道委員会ヲ開キ、名古屋市伝道ノ事ヲ評議ス。植村、平岩ニ氏交渉ノ結果ヲ報告ス。最初綱嶋氏ノ交渉不十分ナリシ為、多少ノ誤解アリシガ漸ク氷解シタルモノノ如シ。小崎、バンカムニ氏ヲ以テ主任トナシ各自出張ノ日数等ヲ定ム。ランデス氏再ビ意見書メキタルモノヲ提出ス。実ニ奇々妙々殆ンド正氣ノ沙汰ト思ワレヌ程ナリ。

〔三月十五日、水曜日〕

午前高等部二年、三年兩級ノ試験ヲ行ナウ。又外國教師四名



ノ負担學科目ニ付キ協議ス。本多庸一、原田助、千葉勇五郎三氏ト共ニ清新軒ニテ午餐ヲ共ニス。エデンボローノ「リユニオン」ナリ。午後二時三十分建築委員會ヲ開キ、図案變更其ノ他ノ要件ヲ議ス。ランデス氏モ出席シ平氣ナリ。存外無邪氣ナモノナリ。

〔三月十六日、木曜日〕

神学部授業例ノ如シ。午後一時ヨリ竹田源次郎代人ト面會。建築委員ヨリ図案變更ノ件及ビ其ノ他ノ事ニ付キ申渡シ更ニ見積書ヲ出サシムル事トス。石原氏來訪。結婚式ニ付キ打合セヲナス。荒川文六來訪。小形ノ書棚ヲ進物トシテ貰ウ。木村良夫來訪、夕食ヲ饗ス。

〔三月十七日、金曜日〕

神学部授業例ノ如シ。払曉ヨリ雪トナル。昼ヨリ又雨トナル。東洋汽船会社ヘ問合せタレドモ未ダ武洋丸入港ノ報ナシ。午後四時ヨリ青年會館ニ於テ青年會館建築費募集委員會ヲ開ク。山本氏ノ報告ニヨレバ桂侯爵ハ今回ノ百五十万円御下賜金云々ヲ口実トシテ体ヨク断リタル由、恐ラク望ミナカラン。

〔三月十九日、日曜日〕

午前十時靈南坂教會ニ於テ小崎氏ノ為ニ説教ス。夜來雪降り泥濘甚ダシ。聴衆甚ダ少ナシ。夕刻ヨリ沼沢七郎氏來訪。山川浩及ビ健次郎著容保公伝出版ノ件ニ付キ相談アリ。夜食ヲ共ニシ緩談シテ帰ル。武洋丸午前十一時横浜入港ノ赴キ電報

アリ。

〔三月二十日、月曜日〕

午後二時過ギ文雄無事帰宅ス。神学部授業例ノ如シ。竹田源次郎代理人來タリ、訂正ノ図案ヲ出シ且ツ見積書ヲ出ス。委員調査ノ上満足、愈々同人ニ工事ヲ托スベキヲ議ス。代金參万參千七百五十円也。ランデス氏モ図案仕様ニ就キテハ異論ナキ旨ヲ明言シタリ。伝道局理事會ヲ事務所ニ開ク。

〔三月二十八日、火曜日〕

天氣快晴、春暖、桜花俄カニ開ク。寸分申分ナキ上天氣ナリ。午前式場及ビ第二席応接場ノ準備ヲ督ス。ライシャ、ホフサンマール両夫人主トシテ之ヲ為ス。清楚ニシテ上品ニ出来タリ。福嶋家ノ一行遅刻シタルガ為ニ、午後三時半ヨリ式ヲ始ム。來賓八百名足ラズナリ。ランデス姉妹ノ奏樂頗ル好シ。前日練習ノ効空シカラズ。儀式モ至ツテ静肅ニ滞リ無ク濟ミタリ。司式者モ上出来ナリキ。両新郎新婦モ上出来ナリキ。式後、旧講堂ニ於テ挨拶アリ。カヒート菓子トヲ呈ス。(以下略)

〔三月二十九日、水曜日〕

午前和田秀豊氏ヘ謝礼トシテ金拾円ヲ呈シ、石原保太郎氏ヘ八井深、木村両家ヨリ各金五円ノ呉服切手ヲ呈ス。午後花子ト同道三越ニ赴キ、松平家男子誕生祝ノ為ニ小兒頭布ト涎掛ヲ求メ、又ランデス姉妹ヘ奏樂ノ礼トシテ各スカーフ一個ヲ送ル。ソノ足ニテ自分ハ直チニ松平家ニ赴キテ之ヲ呈ス。

第七篇

夜、長尾半平氏方ニ開カレタル台湾人会ニ於テ一場ノ感話ヲナス。

明治四十四年四月

〔四月一日、土曜日〕

花子同道文雄夫婦ト共ニ横浜ニ赴キ、家具ヲ買イ求メテ世帯ヲ持タシム。三枝子ノ母モ学校ヨリ転居シテ同居ス。家ハ広過ギル位ナレドモ南ガ開イテ居ラスガ欠点ナリ。夜ニ入りテ帰ル。

〔四月七日、金曜日〕

貴山氏、植村ノ使者トシテ來訪、曾テ本多氏ヨリ内談ノアリタル朝鮮總督ヨリ朝鮮伝道費寄附ノ件ニ付キ宮川経輝氏ヨリ反対意見出タルニ付キ、我が教会ハ申込ミヲ取消シテハ如何トノ相談アリ。

〔四月八日、土曜日〕

早朝植村氏ヲ訪問シ昨夜ノ話ニ付キ協議ス。其ノ結果、申込ミハ単ニ会堂敷地ノ払下ゲノミニ限り之ヲ公然ノ事トスル事ニ決ス。交渉ハ植村ニ一任シタリ。

〔四月九日、日曜日〕

午後青山学院ソール氏方ニ於テドクトル・ガウチャルトト会見ス。支那視察ノ模様ヲ聞ク。又我が教育会ヨリ提出スベキ意見書並ビニ決議案ニ付キ相談ス。帰途木村良夫方ニ立寄り夕飯ノ饗応ヲ享ク。浅草ニ大火アリ。火元ハ吉原ノ由。焼失六千戸以上ト云ウ。近年ノ大火ナリ。

〔四月十日、月曜日〕

午前八時半新講堂ニ於テ始業式執行。花子帰宅ス。午後二時青年会館ニ於テ基督教教育会委員会ヲ開キ、ドクトル・ガウチャール氏ハ諮問ニ対スル意見書ニ付キ協議ノ未確定ス。シユネーダー氏ハ仙台ヨリ來タリ、ヘイデン氏ハ神戸ヨリ來タル。午後六時ヨリ交詢社ニ於テ鉄道青年会評議員会ニ出席ス。服部、長尾、増田、山本氏等出席。模範行為表彰ノ件ニ付キ種々議論アリタリ。

〔四月十二日、水曜日〕

熊野氏ニ留守中ノ事ヲ托ス。午後五時出発、腕車ニテ新橋停車場ニ向ウ。停車場ハ雑踏ス。関屋親次氏態々見送ル。平塚駅ニ至ル比機関ニ故障ヲ生ジ、列車俄ニ停止スルコト四十分余、漸ク国府津ヨリ汽関車來タリテ走り始ム。列車中ニ加藤直士氏アリ。其ノ他ニモ余ヲ知レル人アリ。然シ余ハソノ誰ナルヲ記憶セズ。

〔四月十三日、木曜日〕

九時二十分過ギ三ノ宮ニ着ス。途中ニテ二十分余ヲ取返シタルナリ。直チニ波止場ニ至リ小蒸氣船ニ入ル。然ルニ凶ラズモ鈴木四十四氏ニ逢ウ。大連ヲ經テ京城ニ赴カントストノ事ナリ。一等客ハ僅カニ余ノ外ニ三名ニテ至極都合宜シ。一人ハ海軍士官、一人ハ中学校長ラシク、一人ハ鈴木氏ナリ。船長、事務長共ニ至極深切ナリ。内海ノ景色佳ナリ。漁舟無數夜ニ入り入浴、神氣爽快ヲ覺ユ。

〔四月十四日、金曜日〕

午前七時三十分門司港ニ投錨ス。暫時門司ニ上陸シテ郵便ヲ投ジ且ツ新聞ヲ求メテ帰船ス。乗客積荷共ニ多シ。出船ノ間際ニ至リフヒシャル氏モ来タル。丹羽氏ハ来タラズ。午後一時出帆、玄海ヲ出ヅレバ浪高ク船動揺ス。前後ニ帆ヲ揚ゲテ動揺ヲ止メント欲ス。晩食ノ卓ニ就キタレドモ食氣更ニナク中座シテ甲板ニ出ヅ。頓ニ寢ニ就ク。

〔四月十五日、土曜日〕

天氣晴朗海上平穩ナリ。早朝入浴シ心地好シ。海上平穩、濃霧ナシ。食堂ニ於テハ昨年ノ夏鉄嶺丸遭難ノ話アリ。旅順中學校ノ教員大須賀某ハ遭難者ノ一人ナリ。當時端艇ノ不足ト船員ニ舟漕ギノ練習ナキコトヲ非難シタリ。船長モ同意シタリ。且ツ一同無線電信ノ必要ヲ主張シタリ。晩ニハ日本食ノ餐心アリキ。又三等室ニ於テ「ニワカ」ノ余興アリキ。

〔四月十六日、日曜日〕

雨天トナル。但シ海上ハ平穩ナリ。午後四時三十分大連入港、檢疫ヲ受ケ上陸シタルハ五時半過ギナリ。守瀬、宮川氏等ニ迎エラレ、先ズ青年會館ニ赴キ、ヒツバルド氏ノ案内ニテ一応館内ヲ見分ス。設備ハ中々ニ往届キタリト覺ユ。ソレヨリヒツバルトノ案内ニテフヒシャル氏ト共ニ大和ホテルニ投ズ。

〔四月十七日、月曜日〕

天氣晴朗、窓外海上ノ風光佳ナリ。午前フヒシャル氏ト共

ニ會館ニ向キ、ヒツバルト氏ニ面會シ、同道シテ民政署長吉村源太郎氏ヲ訪問シ又ウキン氏ヲ訪イ、南滿總裁ノ邸ニ名刺ヲ投ジテ帰館ス。午餐後大塚氏來訪。午後五時ヨリ會館ニ赴キ理事會ニ列席、憲法ニ付キ協議ヲ受ク。午後六時半ヨリ樓上ニ於テ會食ス。日本食ノ餐心アリ。食後吉村署長、久保田滿鐵理事、橋税関長、井上正金銀行支店長等ノ五分演説アリ。余モ亦青年會ノ目的ニ付キ一場ノ話ヲ為ス。

〔四月十八日、火曜日〕

午前九時大和ホテルヲ辞シ、大塚素氏ノ案内ニヨリフ氏ト共ニ同氏ノ舍宅ニ移ル。ソレヨリ直チニ會館ニ赴キ丹羽、ヒバルド氏ト朝鮮ニ於ケル青年會事業並ビニ朝鮮人ノ青年會ト同盟トノ關係ニ付キ協議シ、自分自然ノ成リ往キニ委スルコトト為ス。會館ニ於テ牛肉スキヤキノ饗應ヲ受ケ、宮川己作氏ノ案内ニテ星ガ浦ニ赴ク。灣内ノ景色佳ナリ。滿鐵ノ經營ニテホテル及ビコテージ等ヲ建築シ夏期遊覽ノ場所タリ。天氣晴朗無風、殆ンド内地ノ初夏ノ如シ。夜、開館式アリ。丹羽、フヒシャルト共ニ演説シ、最後ニ献堂ノ祈禱ヲナス。會員三百名余出席ス。

〔四月十九日、水曜日〕

早朝ヨリ雨風トナリヤガテ雪風トナル。昨日トハ寒ニ宵壤ノ差ナリ。室内ノベチカニ火ヲ焚キテ暖ヲ取ル。ウキン氏來訪、滿州伝道者ノ事ニ付キ相談アリ。今一、二名必要ナリト云ウ。午後ニ至リ漸ク風休ム。宮川、丹羽兩氏來訪。宮川氏

第七篇

ノ案内ニテ電話交換手合宿所ニ赴キ、二十余ノ女子ニ一場ノ  
教話ヲナス。取締ハ伊藤某夫人ナリ。大塚氏ハフツ氏、余ノ外  
ニ丹羽、望月、ウキン氏ヲ招キテ支那料理ノ振舞アリ。品數  
凡テ三十六ナリ。食後會館ニ赴キ演說ヲナス。宮川、丹羽、  
フヒシヤル、余ノ四人ナリ。聴衆ハ二百名ニ滿タズ。同時ニ  
浪花節ノ興行アリ、妨ケラレタリト云エリ。

〔四月二十日、木曜日〕

午前大塚氏ノ案内ニヨリ満鉄会社ニ至リ中村總裁ニ面會シ、  
ソレヨリ港ニ至リ倉庫ヲ一見ス。中々ニ広大ナリ。一棟五千  
坪ノモノアリ。其ノ槽ノ価格五百万円ト云エリ(倉庫一杯)  
ソレヨリ築港事務所ニ至リコンクリートブロック製造ノ実況  
ヲ見ル。港ニテ使役スル苦力五千人トノコトナリ。午後二時  
大塚氏方ヲ辭シ、宮川氏ト共ニ旅順ニ來タル。嶋村氏其ノ他  
ノ迎エヲ受ケ草刈氏ノ宅ニ招待セラル。晚餐ニハ嶋村、宮川  
二氏モ招カル。夜、教會ニテ説教ス。聴衆ハ五十人許リナ  
リ。中流ノ人々ト見受ケラル。天気晴朗心地極メテ好シ。

〔四月二十一日、金曜日〕

午前嶋村、宮川氏ト共ニ白玉山表忠塔ニ昇ル。宮川氏ト余ハ  
絶頂ニ上リ四方ヲ見ル。眺望佳ナリ。高サハ海拔二〇三メー  
トルナリト云ウ。但シ塔ノ形ハ如何ニモ殺風景ナリ。今少シ  
ク美術的ニハ出来ヌモノニヤ。午後、新市街ブライアン氏宅  
ノ婦人会ニ於テ一場ノ講話ヲ為ス。帰途杉森氏方ニ寄り暫時  
談笑、共ニ草刈氏方ニ來タル。同氏宅ニ於テ支那料理ノ饗応

アリ。夜教會ニ於テ再ビ説教ヲナス。聴衆ハ前夜ヨリモ小數  
ナリ。旅順ノ伝道ハ中々困難ナリト見受ケラル。

〔四月二十二日、土曜日〕

天気晴朗内地ニハ見難キ天気ナリ。新聞ヲ開キ見ルニ桂及ビ  
徳大寺ハ公爵ニ、小村ハ侯爵ニ、渡辺、寺内ハ伯爵ニナリタ  
リトアリ。朝鮮合併ノ賞ト条約改正ノ功カ。ソレニシテモ徳  
大寺ト渡辺ハ如何。午前十一時旅順ヲ辭シ大連ニ歸リ千村春  
次氏ノ宅ニ投ズ。同氏ハ教會ノ長老ナリ。夜大連教會ニ於テ  
説教ヲナス。聴衆ハ六、七十人ト見受ク。雲左エ門ヤラ、艦  
隊ノ入港ヤラノ為ニ妨ケラレタリト云エリ。説教後、宮川守  
衛氏等宿ニ來タル。

〔四月二十三日、日曜日〕

快晴 午後八時半千村春次氏方ヲ辭シ、九時嘉義丸ニ乗込  
ム。乗客中ニ英國陸軍中將ソル・ゼームス・マルレー氏其ノ  
他數名ノ外国人アリ。雑踏ス。大塚氏其ノ他棧橋迄見送りテ  
來タル。海外ノ日本人、太陽等ヲ誦ム。

〔四月二十四日、月曜日〕

夜來風雨トナル。濃霧ノ為船ハ群嶋海中ヲ通行スルコト能ワ  
ズ。正午ヨリ一旦退却ヲ始ム。其ノ後船長ハ寧ろ濟州嶋外ヲ  
航スルノ得策ナルヲ認メ南ニ向ウ。風激シク浪高ク、加ウル  
ニ濃霧ナリ。不快極マル。夕飯ニハ只食卓ニ就キタルノミ、  
食氣更ニナシ。

〔四月二十五日、火曜日〕

天氣快晴。早朝起床入浴、神氣爽快ナリ。船モ濟州嶋ノ内ヲ航海シツツアリ。船客一同喜悅ノ色アリ。晚ニハ和食ノ饗応アリ。且ツ横山某ノ尺八及ビ横笛ノ余興アリ。二等室ニ於テハ浪華節等ノ余興アリ。

〔四月二十六日、水曜日〕

午前五時、六連嶋ニ投錨シテ檢疫ヲ待ツ。濟ミテ門司ニ投錨シタルハ八時比ナリキ。此処ヨリ船客ノ多數ハ上陸シテ、上等客ニテ残レルハ余ノ外ニ二人ナリ。晚ニハ特ニ日本食ノ振舞イアリ。夜來、嶋ノ海峡ヲ通過ス。潮流矢ノ如シ。

〔四月二十七日、木曜日〕

午前六時和田玉岬ニ投錨、檢疫ヲ待ツ。間モナク濟ミテ入港投錨ス。時ニ七時前ナリ。直チニ上陸。税関ノ検査ヲ受ケテ三ノ宮停車場ニ至ル。待ツコト四十分余ニシテ最急行ノ列車ニ乗ル。然ルニ京都ニ達スル前ニ偶然荒川文六モ同車ナルコトヲ発見シ東京迄同行ス。途中ニテ二回程些少ノ故障アリ二十分余延着。無事帰宅シタルハ午後十時比ナリキ。留守中家族一同無事ナルヲ感謝シタリ。

明治四十四年五月

〔五月一日、月曜日〕

本日ヨリ出院授業例ノ如シ。午後真野氏ヲ訪問シ花料三円ヲ贈ル。同家ノ愁傷落胆ハ一方ナラズ。文ニモ実ニ不幸ノ人ナルカナ。三タビ妻ニ先ダタルトハ。帰途、植村氏ヲ訪問シ



真野文二  
（井深之助の妹、大議員、歴任）  
（深夫、九族、貴族、顧問、密問、樞密、長）

リ。  
〔五月三日、水曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。午後四時ヨリ青年会同盟事務委員會ニ出席。本年ノ夏期學校ノ件、寄附金募集ノ件等ニ付キ議事アリ。

〔五月四日、木曜日〕

午前出院授業例ノ如シ。午後一時ヨリ青年会募金ノ為、渋沢栄一男ニ面会ス。江原、本多、長尾、山本、フヒシャル同道ス。男ハ最初ニハ中々承諾ノ様子モ見エザリシガ、後ニハ漸ク話ニ乘リ森村市左エ門氏ニ紹介書ヲ与エタリ。

〔五月五日、金曜日〕

午前出院例ノ如シ。十一時ヨリ森村氏ニ面会ス。江原、本多山本、フヒシャル氏同道、森村氏ハ心好ク話ニ応ジ、応分ノ寄附ヲナスベシト約束シタリ。ソレヨリ農商省ノ商品陳列所ヲ一見シテ後、精養軒ニ於テ一同午餐ヲナシ、共ニ後藤男爵ノ官邸ニ赴ク。男爵ノ態度ハ頗ル冷淡ナリキ。桂公ノ「フサ

タレドモ京都  
へ出張中ニテ  
不在ナリ。竹  
田代理人ニ第  
一回ノ支払  
イヲ為ス。金  
壱万三千元ナ

第七篇

ガル」ハ即チ自分ノ「フサガル」所以ナリ。今ハ如何トモ致方ナシトノ返答ナリキ。

〔五月七日、日曜日〕

午前十時半込教会ニ於テ説教ス。多加良亭ニ於テ午餐ヲ喫シ、青年会館ニ於ケル諸教派合同期成同盟会ノ発会式ニ出席、委員ノ要求ニヨリ開会ノ祈禱ヲ捧グ。今井、植村、海老名氏等ノ演説ヲ聞キ半途ニシテ帰ル。夜、寄宿舎ニ於テランデス氏ノ説教アリ。中々長談義ニテ退屈ナリキ。

〔五月八日、月曜日〕

午前出院例ノ如シ。午後一時日本銀行ニ赴キ、高橋男爵ト会見セントシタレドモ二時過ぎ迄出頭ナシ。依リテ第十五銀行ニ赴キ園田頭取ニ面会シテ寄附金ヲ請求シタルニ、頗ル同情ヲ表シ五百円ハ寄附セント約シタリ。夜九時過ぎニナリ青年会ヨリ電話アリ、高橋男爵ヨリ只今面会セントノ電話アリト云ウ。依リテ直チニ更衣シテ同氏宅ニ赴キタルニ山本、フヒシャルノ二氏ハ先着シ居タリ。例ノ件ヲ相談シタルニ大イニ同情ヲ表シタリ。

〔五月十日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後二時半青年会館ニ於テ東京基督教教育会ノ例会アリ。宗教教育ニ関スル文部大臣ノ訓示ニ付キ、学校教員等ノ誤解ナキ様警戒ヲ加ウルコトニ付キ調査委員ヲ挙グ。江原、井深、石坂、佐々木ノ四人之二当タル。小石川松平邸ニ赴キ弔辞ヲ述ブ。容恭殿病死ノ為ナリ。荒川夫婦来

タリ宿泊ス。子供ハ八日ヨリ来タル。

〔五月十七日、水曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後文部省ニ往キ、田所普通学務局長ニ面会シテ、ウイルミナ女学校認可ノ件ヲ尋ヌ。時刻遅レタル故ニ明日電話ニテ問合せ與レトノ事ナリキ。ソレヨリフヒシャル氏方ニ赴キエデー氏夫婦ノ歓迎会ニ列ス。内外人数十名来会ス。

〔五月二十二日、月曜日〕

午後三時ヨリ協力ミッシン委員会ヲ開キ、各伝道地ノ報告ヲ聞キ、品川教会新会堂ノ為地代補助ノ件ヲ可決ス。其ノ後土地保管委員会ヲ開キ、熊野氏トリフォーラムド・ミッシン用地ノ境界ヲ定ム。

〔五月二十五日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。第二年級説教ノ試験ヲ行ナウ。午後一時半神学部教授会ヲ開キ、卒業試験ノ事、夏期講習会ノ事等ヲ議決ス。四時青年会館ニ於テ教派合同調査委員会アリ。然レドモ誰レモ委員長ヲ引受ケルモノナクシテ相談ニナラズ。引続キ青年会総主事選任ノ事ニ付キ委員会ヲ開ク。元田氏ニ暫時ソノ事務取扱ヲ托スルコトノ相談アリ。平沢氏ハ固辞シタリ。

〔五月二十六日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後七時ヨリ帝国ホテルニ於テ日本平和協会ハ米国新聞記者エリス氏ヲ招待シ、晚餐ヲ饗シテ一場ノ



明治43年神学部卒業生と在學生

後列左より久村頼蔵、渡辺勇助、大坪正道、村田四郎、瀬川四郎、小北俊次郎、山口重次郎、安部實平、藤本保己、第2列左より村岸清彦、西条弥一郎、渡辺善太、篠原愛三、大迫元繁、馬場久成、高山豊三、山本岩吉、東瀬(使丁)、第3列山本喜蔵、豊留秀信、郷司隼爾、仁田一三、大川茂、中山昌樹、高崎能樹、栗原荒野、加藤一夫、西山貞、間宮、第4列高田銀造、原田友太、田島教授、1人おいて、イムプリー教授、井深総理、山本教授、秦教授、松永教授、宮地講師、松尾造酒蔵 最前列左より大井上武、畑中義之、遊佐敏彦、檜崎武三郎、高尾益太郎、小口季隆、八十川寛一、辻庸夫、英義雄

感話ヲ聞キタリ。府下ノ諸新聞記者モ出席シタリ。余モ強イテ頼マレテ出席シエリス氏ノ為ニ通訳シタリ。チピカル米国記者流ノ人物ト見受ケラル。

〔五月二十七日、土曜日〕

本日ハ日本海軍記念日ニ付キ、海軍省ヨリ村越少佐ヲ聘シテ一場ノ講演ヲ生徒一同ニ聞カシム。午前九時ヨリ十時過ギマデ話シタリ。人物ハ至極ヨサソウナル人ナリ。午後山本邦之助同道、高田商会、三菱銀行ノ江口氏、勸業銀行ノ志村源太郎氏及ビ大倉喜八郎氏ヲ訪問シテ、来ル卅一日銀行クラブニ於ケル集會ニ出席アランコトヲ依頼シタリ。大倉氏ハ晴々ト談話シタリ。

〔五月三十一日、水曜日〕

出院例ノ如シ。高等二年組ノミヲ教エ、坂本町ノ銀行クラブニ往ク。青年会寄附金募集ノ件ニ付キ渡沢、高橋両男爵等ト会見ノ為ナリ。渡沢男爵ハ病氣ノ為不參、高橋男爵、森村市左エ門、豊川良平ノ三氏來タル。其ノ他ハ差支エ断ワル。青年会側ニテハ江原、本多、山本、余ノ四人ナリ。協議ノ上、三井、岩崎、両家ニテ各五千円ズツ

第七篇

其ノ他ハ二千円、一千円、五百円位ノ分担ニテ二万七千円ヲ募集スルノ協議整イタリ。森村氏最モ熱心ヲ示シ、高村氏モ中々尽力シタリ。豊川氏ハ成ル可ク逃レント試ミタリ。

明治四十四年六月

〔六月五日、月曜日〕

一時間授業ヲ為了リテ三菱会社ニ赴キ、江原、山本ノ二氏ト共ニ岩崎男ニ面会ヲ求ム。秘書役ラシキヲモテ代リニ応接セシム。用事ヲ述べテ帰ル。江原氏ハ帰宅。山本氏ト余ハ高田商会ヲ訪イタルニ高田氏ハ未ダ出勤セズ。ソレヨリ三井物産会社ニ赴キ、岩原理事ニ面会シテソノ賛助ヲ求ム。同氏ハ快諾シタリ。ソレヨリ転ジテ興業銀行総裁添田寿一氏へ面会説明シタルニ、同氏ハ直チニ一千円ヲ寄附スベキ旨ヲ承諾シタリ。(此ノ記事ハ火曜日ニ移ス)

〔六月九日、金曜日〕

午後二時日本橋ニ往キ彦三郎ヨリ注文ノ足袋及ビ海苔ヲ求ム。ソレヨリ青年会館ニ於テ教派合同ノ委員会アリ。更ニ熱誠ナシ。未ダ真面目ニ非ズ。四時ヨリ田川大吉郎氏ノ主催ニ関ル懇談会アリ。内務省ヨリ八床次地方局長、斯波宗教局長、留岡幸助氏出席。植村、海老名、小崎、長尾半平、熊野諸氏出席。余先ズ本年ノ地方長官ニ対スル内務大臣ノ訓示中神社崇拜ノ件ニ付キ、ソノ動機、意義等ニ付キ質問シタルニソレヨリ中々ノ議論トナル。床次氏重ニ語り、此方ハ植村、海老名、余等ソノ衝ニ当タル。長尾氏モ能ク談シタリ。有益

ノ会合ナリキ。一同食ヲ共ニシタリ。

〔六月十日、土曜日〕

夜、神学社卒業式ニ往ク。途中電車ニ故障アリ八時過ぎ着。柏井園氏ポールトローヤル学派ノ事ニ付キ演説中ナリキ。九時演説終リテ去ル。腸ノ工合宜シカラズ。三井家、岩崎家共三五千円ズツ寄附ノ予約アリタル旨山本氏ヨリ報告アリ。

〔六月十三日、火曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後一時ヨリ江原素六、山本邦之助氏同道ニテ岩崎、三井、渋沢、高橋、後藤ノ五男爵、其ノ他森村添田、村井、豊川へ寄附金ノ礼ニ廻ル。漸ク五万円以上ノ寄附金ヲ得タリ。

〔六月十五日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。午前九時夏期講習会開会。山本氏司会。余開会ノ辞ヲ述べテ後、オルトマンズ氏、オール氏ノ「処女懐胎」ノ大意ヲ紹介ス。言葉ハ中々達者ナレドモ、言廻シ不十分趣意徹底セズ。午後八稻垣氏病氣ニ付キ、伊藤藤吉氏司会、懇談会ヲ開ク。発題者ハ毛利氏、題ハ牧会上ノ任務ナリ討論ハ甚ダ不出來ニテ失望セリ。ソノ想ニ於テ貧シク、ソノ調ベモ高カラズ。地方ヨリ來タル人廿余名。東京ヨリ來タル廿余名。人数ハ大低予期通りナリ。

〔六月十六日、金曜日〕

授業例ノ如シ。講習会。午前、講演者ハオルトマンズ氏ト植村正久氏ナリ。前者ハ前日ノ続キ、後者ハイエス死後ノ伝記



ト題シテソノ復活、昇天、即チ現在ノ有様ニ就キ講話ヲ為シタリ。余リ上出来ニハアラザリキ。講演後協力委員会ヲ開キ來年度ノ予算ヲ議決ス。植村氏ハ宅ニテ午餐ヲ共ニス。午後ノ懇談会ハ星野光多氏ノ発題ニテ「日本人ガキリスト信者トナル時ノ経験」ト云ウ題ナリキ。服部、小林氏等演説ス。懇談会ハ今日マデノ処成功トハ云イ難シ。郷司源吾昨夕日病死。本日葬式ヲ行ナウ。

〔六月十七日、土曜日〕

午前八時半ヨリ講習会。川添万寿得氏、聖書問題ノ掃結ト題シテ新約書高等批評ノ現時ノ状況ヲ略述ス。頗ル有益ナル講演ナリタレドモ、講習会員中ニ能ク之ヲ了解シタル人ハ蓋シ小數ナラン。次ニドクトル・イムブリー日本キリスト教会憲法史ノ前半ヲ講演ス。余之ヲ通訳ス。午後ハ土曜日ニ付キ講演ヲ休ム。片山夫婦、子供ヲ携エテ來タル。夕刻、小石川原町バプテスト女学寮ニ於テ大迫元繁氏ノ結婚式アリ。之ニ列ス。

〔六月十九日、月曜日〕

朝ヨリ大風雨起コル。十時比ニ至リ最モ甚ダシク、瓦飛ビ樹木折レ煙突ノ首落ツ。近頃ノ暴風ナリ。内ニテモ胡桃、柿木等ノ枝折ル。午前余ハイエスノ倫理第一回ノ講演ヲナシ、イムブリー氏歴史第二回ノ講演ヲナス。午後ハ笹倉氏ノ発題ニテ現時ノ教役者ニ最モ緊急ナルモノハ何ゾヤト云ウコトヲ述ブ。其ノ後數人ノ感話アリタレドモ、田嶋氏ノ外ニハ聞クニ足ル説ナシ。ミッシン伝道者ノ思想ノ欠乏甚ダ明白ナリ。

〔六月二十日、火曜日〕

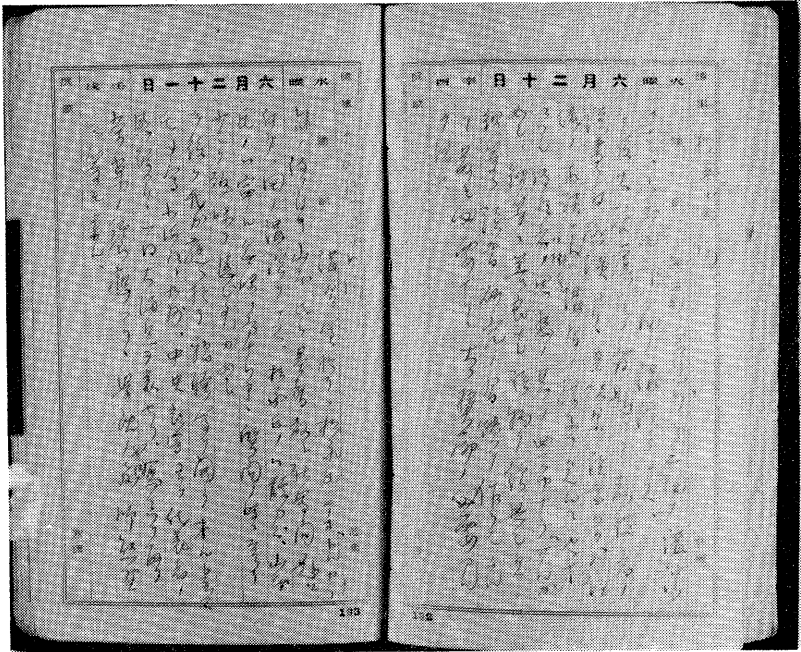
授業例ノ如シ。午前余先ズ第二回ノ講演ヲナシ、山本氏第一回ノ講演ヲナス。午後大谷廣氏ノ発題ニテ教役者ノ読書ニ付キ懇談アリ。其ノ結果読書クラブ組織ノ相談アル。講習ノ様子ヲ見ルニ、地方ニアル伝道者ハ概シテ思想ノ甚ダ豊カナラザルガ如シ。彼等ニ善良ナル読物ヲ給与シ且ツ彼等ニ読書研究ノ習慣ヲ作ラシムルコト最モ必要ナリ。大イニ奨励ノ必要アルヲ認ム。

〔六月二十一日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。講習会ニ於テハ松永氏、テオドル・カイレルノ伝ニ付キ、山本氏ハ基督教ト社会問題トニ付キ第一回ノ講演ヲナス。松永氏ノハ聴カズ。山本氏ノハ寧ろ無味ノ方ナリキ。質問ノ時ニ至リテ少シク趣味ヲ感ジタルガ如シ。午後ハ我が庭ニ於テ親睦会ヲ開ク。オルトマンズ氏司会。北海道、九州、中央部等ヨリ代表者ノ感話アリ。一同大満足ヲ表セリ。写真ヲ取り茶菓ノ饗応アリ。学院ノ外国教師、熊野氏等モ來タル。

〔六月二十二日、木曜日〕

午前八時三十分ヨリ田嶋進氏弁証学ニ付キ、松永氏「モダニスト」運動ニ付キ講演ヲナス。午後石原氏ノ発題ニテ、日本ヲ教化スルニ最モ有効ナル方法ニ付キ意見ノ交換アリ。懇談後簡單ナル閉会式ヲ挙グ。余先ズ神学部ヲ代表シテ閉会ノ辭ヲ述ベ、イムブリー氏ミッシンヲ代表シ、三浦徹氏會員ヲ



明治 44 年 日 記

代表ス。一同大満足ノ様子ナリ。夜寄宿舎ニ於テ講師慰勞会アリ。單純ナル茶菓ノ饗応アリ。先ズ講習会ハ成功ヲ以テ終レリト云ウベシ。

〔六月二十四日、土曜日〕

午前海軍省ニ出頭、浅井将秀氏ニ面会、隣地ノ海軍省墓地払下ゲノ件ニ付キ尋問シタルニ、同氏ハ何モ知ラズ。経理部ノ都留某ヲ紹介シ呉レタリ。依リテ同氏ニ尋ネタルニ、目下払下ゲノ意志ナシト云エリ。然レドモ尚次官若シクハ大臣ノ意向ヲ探ル方、然ラントノ事ナリキ。

〔六月二十六日、月曜日〕

出院例ノ如シ。午後三時青年会館ニ於テ教会同盟役員会ヲ開ク。来ル十月ニハ愈々同盟ヲ組織スルコトニ決ス。其ノ後フヒシャル氏ト面悟ス。事ハ京城ニ於ケル丹羽氏ノ事ナリ。本多氏ヨリ聞ク所ニヨレバ、同氏ハ統監府ヨリ或ル名義ノ下ニ金ヲ受ケ居ルガ如シ。之ヲ如何ニ処置スベキカ是レ問題ナリ。

明治四十四年七月

〔七月三日、月曜日〕

出院例ノ如シ。霖雨尚止マズ。一週間以上連日ノ降雨ニテ泥濘甚ダシ。午後三時青年会館ニ往ク。宮城女学校長ミス・ウイドネル及ビ早阪哲郎氏ニ

面会ス。来月廿五日同校創立廿五年記念会ノ時演説ヲ托セラ  
ル。四時ヨリ同盟事務委員会ヲ開キ、小松氏ノ報告ヲ聞キ且  
ツ募集分配割合等ヲ議シ後ニ、小松、千葉両氏ノ為ニ歓迎会  
ヲ開ク。

〔七月四日、火曜日〕

出院例ノ如シ。雨尚止マズ。(中略)本日ハ自分ノ第五十八  
回ノ誕生日ナリ。例ノ如ク祝イノ晚餐アリ。既往ヲ追懐シテ  
感深シ。願クハ自今ノ生活ハ更ニ善ク、更ニ有用ナルモノナ  
ラシメン。

〔七月六日、木曜日〕

午前八時、五年級ノ試験問題ヲ出シ置キ、青山学院ニ於テ開  
カルベキ日本キリスト教々育同盟總會ニ赴ク。投票権ヲ有ス  
ル代表者十三名、其ノ他合セテ約三十名アリ。諸種ノ報告ア  
リ。女学校ヲ同盟ニ入ラシムベキヤ否ヤニ付キ可否ノ議論ア  
リ。来年迄延期スル事ニ決ス。役員選挙ノ後、来年ノ会場ヲ  
関西学院トスルコト、又大学設立調査委員、宗教教育調査  
委員ヲ挙グ。暫時懇談シテ閉会ス。帰途沼沢家ヲ訪問ス。緩  
談數刻ニシテ辞ス。此ノ日ハ天気最も晴朗、連日雨後ノ風光  
殊ニ美ナリ。

〔七月七日、金曜日〕

午前高等学部ノ試験ヲ執行ス。十二時前丹羽清次郎氏來訪。  
朝鮮牧師三十名ヲ日本觀光ノ為メ招待スル事ニ付キ相談ア  
リ。午餐ヲ共ニシ同道シテ青年會館ニ赴キ、種々協議ノ末、  
同盟委員ハソノ目的ヲ賛成スルト同時ニ、極暑中ニ之ヲ招ク

ハ極メテ不適当ナリト認メ、且ツ丹羽氏ガ予メ委員ニ謀ラザ  
リシヲ遺憾トスル旨ヲ決議シタリ。丹羽氏ノ処置過テリトノ  
感深シ。都留仙次氏ヲ招キ夕餐ヲ共ニス。同氏留学中ノ事又  
今後ノ事ニ付キ緩談ス。此ノ日強風沙塵ヲ揚ゲ不快甚ダシ。

〔七月十日、月曜日〕

出院例ノ如シ。暑氣俄ニ來タル。華氏八十九度ニ達ス。午後  
建築委員会ヲ開キ、ヘボン館修繕ノコト、夏期中監督當番ノ  
事等ニ付キ協議ス。熊野氏ハヘボン館ニ電燈ヲ用ユルコトヲ  
主張シタレドモ再調査ニ附スルコトト為セリ。

〔七月十五日、土曜日〕

午前八時前、後藤男爵ヲ官邸ニ訪問シ、青年會寄附金ノ為ニ  
尽力セラレタルコトヲ謝ス。山本、小松ノ二幹事モ同行セ  
リ。ソレヨリ山本氏ト共ニ近藤廉平氏ヲ訪ネ礼ヲ述べ、又中  
橋徳五郎、浅野総一郎ノ二氏ヲ訪問シタレドモ二人共ニ不在  
ナリキ。試験ノ点数調べ終了。臨時教員會ヲ開キ、二ノ不  
良生徒ノ退校ヲ定ム。

〔七月二十日、木曜日〕

午前九時出発、鎌倉ノ夏期学校ニ赴ク。鎌倉ノ停車場ニテ安  
部清蔵、樞橋、フヒシャル氏其ノ他ニ会见シ、八幡前ナル松  
岡屋旅店ニ投ズ。是レ校長、講師ノ宿所ナリ。室ハ風通シ好  
キ所ナリ。午後ニ至リ千葉、栗原、笹尾、中津氏等到着ス。  
午後三時開校式ヲ挙グ。來校者約四十名。余ハ開校ノ辞ヲ述  
べ、美山、清水ノ二氏ノ歡迎ノ辞ニ對シテ仙台、京都、熊本

第七篇

ノ代表者ノ答辭アリ。夜ハ千葉勇五郎氏ノトルコ見聞談アリ。会場ハ福音館ナリ。

〔七月二十一日、金曜日〕

早朝鶴岡八幡宮ニ散歩ス。後ニ山ヲ負イ、前ニ海ヲ望ミ、実ニ二勝区ナリ。但シ規模ノ大ナラザルハ遺憾ナリ。鎌倉ノ幕府早ク既ニ亡ビテ此ノ神社ノ依然トシテ存スルハ、宗教ノ力ノ恐ルベキモノアル一証ナリトス。午前、栗原基、海老名正二氏ノ演説アリ。前者ノ背景論ハ用意深ク聴クベキモノアリ。後者ノキリスト教起源論ハ浅薄ニシテ聴クニ足ラザリキ。夜ハドクトル・ホワイトノ聖書研究ニ関スル講話アリ。是レ亦一流ノ講義ナレドモ稍牽強ノキライナキ能ワズ。

〔七月二十二日、土曜日〕

本日ハ運動会ニテ、ホワイト氏ノ講演ノ後一同ハ直チニ江ノ嶋ニ遠足ス。自分ハ宿ニ帰り明日ノ説教ノ用意ス。午後ハ長谷ニテ健次、真澄、清見ヲ待ツ。時早キ故ニ大仏ヨ見ル。子供等來タル。海岸ニ往キ小舟ヲ浮ベテ遊ブ。ヤガテ地曳綱ヲ引キ、ソノ獲物ヲフライトナシ夕飯ノ饗応アリ。一同ヲ代表シテ鎌倉ノ信徒ニ謝辭ヲ述ブ。洲上ニ於テ角力ソノ他ノ遊戯アリ。一同満足ノ風ナリキ。夜ハ会堂ニテ親睦会アリタレドモ自分等ハ宿ニ帰りタリ。

〔七月二十三日、日曜日〕

昨夜雨降り俄ニ冷氣ヲ催シ來タル。午前十時礼拝。美山氏司会、安部氏祈祷、余説教ス。礼拝者ハ百三、四十人ナリキ。

午後同盟委員会ノ準備委員会ヲ開キタルニ、笹尾氏ヨリ開拓者ノ事、夏期学校講師選定ノ件ニ付キ忌憚ナキ意見アリ。余モ亦意見ヲ述ブ。小松幹事ニ神学ノ素養ナキト赤門派ニ偏スルハ一大病根ナリ。夜、左近某ノ旧約ニ関スル極メテ独斷的ニシテ不敬蔑ナル講演アリ。実ニ不都合千万ナリ。何故ニ委員ガ此ノ如キ人物ヲ講師ニ選ビタルカ不都合ノ至リト、宿ニ帰りテ後フヒシヤールニ警書ヲ与エタリ。

〔七月二十四日、月曜日〕

今朝ノ講演会ノ司会ハ故ニ自ラ避ケ、小松幹事ヲシテ当タラシム。ソノ故ハ左近氏講演ハ自ラ不賛成ナルノ意ヲ表センガ為ナリ。但シ前夜ニ比シテソノ調子稍改善シタリ。是レフヒシヤール氏ノ忠告ニアリタルニ由ル。聴衆ノ過半ハ睡眠ノ中ニ之ヲ聞流シタリ。午後同盟委員会ヲ開ク。原田、本多、鶴崎氏等モ來タル。開拓者ノ方針ニ付キ議論アリ。笹尾氏最モ痛論ス。岡田氏ノ弁解アリ。遂ニ編輯委員三名ヲ挙ゲルコトニ決ス。夜原田氏ノ講演アリ。題ハ東北宗教ノ接近及ビソノ将来ナリ。聴衆情氣ナキ能ワザリキ。

〔七月二十五日、火曜日〕

午前、原田助氏ノ東西宗教ノ接近及ビ将来ニ付キ演説アリ、前回ヨリハ成功ナリキ。午後ハ佐藤某ノ鎌倉史跡ニ付キ講演アリ。余ハ中途ニシテ帰ル。夜文芸会ノ催アリ。十時比ヨリ大風雨トナリ旅宿ニ帰ル。人々シャツ一枚ニテ帰りタルモアリ。余ハ人車ニテ帰りタルガ、一時比ヨリ暴風雨トナリ二時

最モ激烈、一時八家モ倒レンカト氣遣ワレタリ。三時過ギヨリ漸ク鎮マル。ドクトル・ヒームモ同蚊張ノ中ニアリ難困ルナラント思イノ外、グーグートイビキヨカキ眠リ居タルハ多分危険ヲ知ラザリシ為ナラント評シタリ。原田氏ハ荷物ヲ片付ケタリ。

〔七月二十六日、水曜日〕

起キテ見レバ日蔽ヤラ板塀ヤラ吹倒サレ、或イハ松ノ大木ノ根コソゲ倒レタルアリ、中々ノ暴風ナリキ。会堂ニテハガラス戸吹飛バサレテ微塵トナリ危カリキト云ウ。今朝ハ今井寿道ノ講演アルベキ筈ナリシガ、鉄道不通ト見エ時刻マデニ來タラズ。依ツテヒウム氏ニ印度ノ宗教情況ヲ聞ク。午後美山貫一氏ト清水海軍大佐ノ宅ヘ礼ニ赴ク。來年ノ夏期学校ニ付キ相談ヲナス。夜今井氏ノ講演アリ。二回分ヲ一回ニ約メタリ。

〔七月二十七日、木曜日〕

午前海老名氏ノ講演アリ、引続キ閉校式ヲ執行ス。來校者凡テ百三十名許リ。先ズ以テ良好ノ成績ナリ。來校者ハ満足ノ有様ナリ。帰途電車ニテ鶴沼ニ立寄り、母上並ビニ子供等ヲ見舞ウ。鶴沼ニテモ大分被害アリタレドモ我等ノ借家ハ四方家ニ囲マレタレバ何等ノ被害ナシ。五時過ギ帰宅ス。構内ニ於テハ樹木倒レ屋根損ジタレドモ格別ノ事ナシ。内ハ少シモ損害ナシ。

明治四十四年八月

〔八月二日、水曜日〕

朝、加藤一夫來訪。渡米ノ志ヲ休メ雜誌発行ニ従事シタシトノ話アリ。種々苦心シタル様子ナレドモ志操未ダ堅固ナラズ。朝鮮牧師視察團一行着京。一行二十九名内一人病氣ノ為大阪ニ残ル。午後二時小石川後樂園ニ於テ歡迎会ヲ開ク。本多氏司会。余及ビ小崎弘道歡迎ノ辞ヲ述べ、李商在及ビ崔某答辭ヲ述べ。茶菓ノ饗応アリ。一同撮影シテ散会ス。炎暑強シ。來会者約二百名ト見受ク。一行ハ至極満足ノ様子ナレドモ稍々疲勞ノ態ナリ。

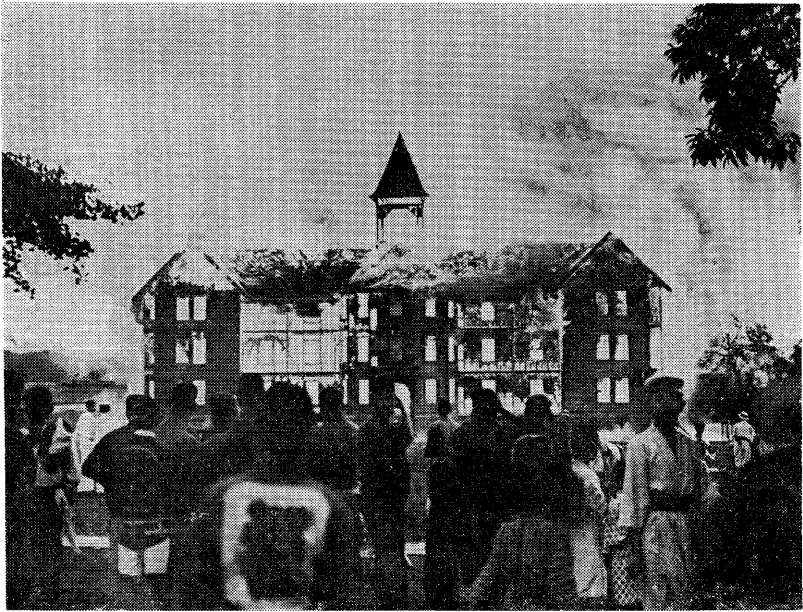
明治四十四年九月

〔九月二十一日、木曜日〕

午前五時二十五分ヘボン館ヨリ出火シ、見ル間ニ二階、三階ニ焼広ガリ、遂ニハリス館賄所、小使部屋共ニ焼失シタリ。火元ハ舎監室ナレドモ、生憎其ノ夜ハ舎監不在ニテ原因不明ナリ。寄宿生ニハ一人ノ負傷者モナシ。只小使一人飛下リテ腰部ヲ撲チタルノミ。消火栓ハ物ノ役ニ立タズ。手ポンプニテ新校舎ヲ安全ニスルコトヲ得タリ。早速焼出サレタル生徒ノ立退場、明日ヨリノ授業、見舞ノ礼、其ノ他ノ事ニ付キ忙殺セラル。然ルニ、今夜ハ真野新夫婦ト沼沢夫婦トヲ招キ置キタル故ニ一層ノ混雜ヲマネキタリ。

〔九月二十二日、金曜日〕

神学部ノ始業式ヲ挙グ。不思議ナルカナ、昨日ヘボン博士永眠ノ電報アリ。ソレニ付キ、又々新聞記者等続々來タリテ、



へボン館炎上

同博士ノ伝記ヲ問イソノ写真ヲ得ント欲ス。中々ノ混雑ナリ。

〔九月二十三日、土曜日〕

見舞客ヤラ書状ヤラ混雑尚止マズ。

〔九月二十四日、日曜日〕

高輪教会ニ於テヘボン博士ノ事ニ付キ説教ス。

〔九月二十七日、水曜日〕

午後七時横浜指路教会ニ於テヘボン博士ノ追悼会アリ。教師毛利ノ依頼ニヨリ往キテ、同博士ノ事業及ビ性行ニ付キ一場ノ演説ヲナス。

〔九月二十八日、木曜日〕

午後二時ヨリ学院講堂ニ於テ前総理ヘボン博士ノ追悼会ヲ行ナウ。山本氏、博士ノ伝ヲ述べ、イムブリー、小崎弘道、服部綾雄三氏ノ追悼ノ辞アリ、男爵高橋是清氏ハ記念ノ為金百円ヲ贈リ、岸田吟香（二代）ハ美事ナル花輪ヲ送り來タル。中々盛会ナリキ。

〔九月二十九日、金曜日〕

朝ヨリ羽根田、要館ニ開カレタル教役者修養会ニ赴ク、自分ハ午後祖先崇拜ノコトニ付キ講話ヲ試ム。笹尾氏ハ例ノ長講義ヲヤリタリ。二時間ヤリツツケタリ。中々ノ元氣ナリ。夜ハ祖先崇拜ニ付キ懇談アリキ又無邪氣ナル茶話会アリ一同満足ノ態ナリ。

〔九月三十日、土曜日〕



第七篇

午後三時、東京基督教教育会ヲ開キ役員ノ選挙ヲ行ナイ、帰途植村氏ノ宅ヲ訪問ス。

〔十月十二日、木曜日〕

植村正久氏海外漫遊ノ途ニ登ル。午後、普通学部教員会ニ於テ教員モ院内ニ於テハ禁煙スベキコトヲ要求ス。

〔十月十三日、金曜日〕

竹田源次郎ニサンダム館及ビ新講堂ノペンキ塗替エヲ請負ワシム。清國內地武昌ニ内乱起コリ、形勢頗ル重大ナル報告アリ。

〔十月十四日、土曜日〕

熊野氏ト共ニ上野公園ニ往キ、文部省開設美術展覽会ヲ見ル。日本画、西洋画共ニ格別ノモノナシ。彫刻モ同様ナリ。年々同然ニテ進歩ヲ見ザルハ何故ゾヤ。出院シテ事務ヲ見タリ。(十七日ノ処ニ記入スベキ筈)

〔十月十六日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後四時ヨリ青年会同盟事務委員会ヲ開ク。夏期学校常設ノ地トシテ御殿場附近宇東山ヲ三千坪足ラズヲ八百円ニテ購入スルコトニ定ム。之レガ為ニ実行委員五名ヲ挙ゲタリ。

〔十月十七日、火曜日〕

休日ニ付キ公設美術展覽会ヲ見ル。午後七時半、精養軒ニミセス・トレミーヲ訪問ス。実ニ活潑ナル婦人ナリ。

〔十月十八日、水曜日〕

授業例ノ如シ。文雄来訪。光ハ来ル廿二日横浜入港ノ天津丸ニ乗込ミヲ命ゼラルヤモ知レズトノ話ナリ。(下略)

〔十月十九日、木曜日〕

授業例ノ如シ。ミセス・トレミー、及ビミス・マルシャル来訪。学校ヲ參觀ス。

〔十月二十日、金曜日〕

生徒等箱根へ修学旅行ヲナス。神学生モ同行ス。

〔十月二十二日、日曜日〕

午前高輪教会ニ於テ礼拝ス。午後、横浜、文雄方ヲ訪問ス。然ルニ文雄ハ予備員連中ニテ鎌倉ニ遠足ニ往キ、家族ハ不在ニテ空シク帰ル。

〔十月二十三日、月曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後三時ヨリ宅ニ於テ教役者委員会ヲ開ク。来会者星野、笹倉、毛利、永井ノ四氏ナリ。

〔十月二十四日、火曜日〕

午前八時過ギ品川出発。赤羽ニ往キ同所ヨリ汽車ニ乗替エ仙台ニ向ウ。午後九時着仙。シュネーダー氏ノ客トナル。宮城女学校幹事早坂氏モ停車場ニ出迎ウ。

〔十月二十五日、水曜日〕

午前八東北学院生徒一同ノ為、故ヘボン博士ニ付キ一場ノ話ヲナス。午後一時半ヨリ宮城女学校創立廿五年記念式アリ。来賓ハ仙台ノ上、中流ノ紳士夫人ナリ。余ハ日本ニ於ケルキリスト教主義女子教育ノ結果及ビ将来ニ就イテ一場ノ演説ヲ



ナス。文部大臣、県知事、市長、東北大学総長等ノ祝辭アリ。五時半式ヲ終ル。夜、シュネーダー氏宅ニ於テ東北学院生徒ノ為ニ話ヲナス。クックトカ云ウ一宣教師ハ極メテ下品ニテ不謹慎ナル話ヲシテ宣教ノ面ヨゴシヲシタリ。実ニ馬鹿ナ奴ナリ。

〔十月二十六日、木曜日〕

午前五時十七分仙台発車。午後四時過ギ無事帰宅ス。エチ・ケイ・ミロル氏夫婦同車シタリ。途中紅葉ノ美ナル所アリキ。

〔十月二十七日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後八来月三日開館式ノ事ニ付キ相談ヲナス。

〔十月二十八日、土曜日〕

午前出院事務ヲ見ル。午後、三越呉服店ニ往キ里見氏ニ面会シ、理事室備付ノテーブル及び椅子ヲ注文ス。

〔十月二十九日、日曜日〕

彦三郎奉天ヨリ上京、午前九時新橋着。自分出迎エ同道シテ宅ニ歸ル。貴山幸次郎氏来訪、伝道上ノ打合せヲナス。

〔十月三十日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。午後三時ヨリ宅ニ於テ教授者委員会ヲ開ク。星野、笹倉、毛利、永井ノ四氏来会。

明治四十四年十一月

〔十一月一日、水曜日〕

授業例ノ如シ。午後、臨時教員会ヲ開キ開館式ノ打合せヲナス。

〔十一月二日、木曜日〕

臨時休業ヲナシ明日ノ準備ヲナス。生徒ハ各組ニ於テ趣向ヲコラシ種々ノ餽物ヲ作ル。神学生ノ鶴二亀、最モ好評ナリ。午後七時、彦三郎若松ニ向イ出發ス。清國ノ革命ハ急転直下ノ勢イ、袁世凱ハ内閣組織ノ命ヲ受ク。滿朝ハ単ニ虚器ヲ擁スルニ過ギザルニ至ラン。

〔十一月三日、金曜日〕

例ノ如ク申分ナキ快晴ナリ。午後二時、講堂ニ於テ天長節祝賀会兼新校舎開館式ヲ舉行ス。余、式辭ヲ述べ、熊野氏報告ヲ讀ミ、イムブリー氏祈祷ヲ捧ゲ、松井安三郎氏祝辭ヲ述べ。東京府知事並ビニ中嶋久万吉氏祝辭ヲ送ル。式ハ大成功ナリキ。来賓モ三百名以上、満場ノ集会ナリキ。特ニ校歌ハ上出来ナリキ。式後来賓一同ニ菓子ヲ供シ、新校舎ヲ縦覧ニ供シ生徒等ノ仮装行列アリ。夜ニ入りテハ提灯行列アリ。是レ亦大成功ナリキ。

〔十一月四日、土曜日〕

サンダム館ヨリ新校舎ヘ事務所移転。理化器械、博物標本運搬且ツ来週ヨリ授業ノ準備ノ為終日ヲ費ス。文雄来訪。(中略)

夕刻、片山寛来タリ、豊子今日午前三時比ヨリ産氣付キタルニヨリ、直チニ用意シテ大病院ニ入院セシメタルニ六時比

第七篇

分娩、一声、二声啼キタレドモ間モナク死去シタル由ナリ。但シ産婦ハ無事ノ赴キナリ。死児ノ埋葬ニ付キ相談ニ来タリタリ。

〔十一月五日、日曜日〕

午前高輪教会ニテ説教。洗礼、聖餐式ヲ執行ス。受洗者四人、内女二人。午後、花子ト共ニ片山ニ赴キ死児ノ為ニ葬式ノ形ヲ行ナウ。発育ハ十分ナリト思ワル。ソレヨリ大病院ヘ赴キ、豊子ヲ見舞ウ。夜ニ入りテ帰ル。留主中ニ地震アリ。

〔十一月七日、火曜日〕

授業例ノ如シ。午後神学部教授会ヲ開ク。夜、長尾、熊野、山本、松永、都留ノ五人ヲ招キ夕飯ヲ饗ス。福岡、荒川ヨリ松茸ヲ送リ来タル。

〔十一月八日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後、上野公園ニ於ケル漆工競技会ヲ見ル。荒木真弓氏ヨリ漆工ノ説明ヲ聞ク。琉球ノ小硯箱ヲ求ム。

〔十一月九日、木曜日〕

出院授業例ノ如シ。支那ノ革命ハ日々重大。皇帝蒙塵ノ風説頻リナリ。

〔十一月十日、金曜日〕

出院授業例ノ如シ。寿枝、京都ヨリ上京、宿泊ス。帝国ホテルニ於テインタルナシヨナル・インダストリアル・ヒース・

フオラムノ件ニ関シヒル氏ノ主催ニ関ワル会合ナリ。熊野氏ト共ニ出席ス。

〔十一月十一日、土曜日〕

午前十時過ぎヨリ横浜ニ赴キ指路教会堂ニ於テ伝道局常務委員会ヲ開ク。午後二時ヨリ海岸教会ニ於テバラ氏渡来五十年祝賀会アリ。余ハ日本基督教大会ヲ代表シテ祝辞ヲ述ブ。本多庸一、稻垣信、タムソン、グリーン、ソーバル、テヤリングノ諸氏モ亦祝辞ヲ述ブ。旭亭ニテ横浜ノ旧友数名晩食ヲ共ニシ、ソレヨリフェリス学校ニ開カレタルレセプションニ赴キ、バラ氏ニ挨拶シテ帰ル。

〔十一月十二日、日曜日〕

午前八時二十四分、寿枝若松へ出発、之ヲ品川ニ見送り、ソレヨリ富士見町教会ニ赴キ説教ヲナス。一人ノ受洗者アリ、釧路ノ医師ナリ。会衆ハ三百名以上ト見受ケタリ。

〔十一月十三日、月曜日〕

出院授業例ノ如シ。本日ヨリ街燈ノ瓦斯ヲ電気ニ改ム。

〔十一月十四日、火曜日〕

授業例ノ如シ。文雄、春洋丸ニテ米國航路ニ従事ス。

〔十一月十五日、水曜日〕

授業例ノ如シ。午後協力委員会ヲ開ク。

〔十一月十八日、土曜日〕

午後二時過ぎ出発、千葉ニ赴ク。函国ヨリ四時ノ汽車ニテ往ク。森岡氏等停車場ニ出迎ウ。産婆学校長高梨美つ子ノ宅ニ

案内セラル。同人八十数年前ニ自分ヨリ受洗シタル人ナリ。

演説会ハ盛会ナリキ。満場立錐ノ地ナシ。三百名余ノ人ナリ。現時ノ傾向ト宗教ノ必要ニ付キテ珍ラシク一時間以上話シタリ。江原氏モ演説スル筈ナリシガ俄カニ差支エアリテ来タラザリキ。

〔十一月十九日、日曜日〕

午前十時千葉教会ニ於テ説教ス。集会者ハ九十名余。高梨氏方ニテ昼食ヲ喫シ、江原素六氏ト共ニ帰京ス。雨天悪路ナリ。陛下還御ノ為新橋ニテ半時間以上電車止メラル。

〔十一月二十日、月曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後、女子学院ニ於ケル婦人会ニ赴キ、宗教談ヲナス。時ニ電話アリ、片山ノ病人危篤ナリト。病人トハ何人ナルヤ分カラズ、一時驚キタレドモ後ニテ片山母堂ノ喘息ノ発病シタルコトナルヲ知レリ。花子ハ直チニ片山ニ赴キ、自分ハ青年会ニ於テ伝道局常務委員会及ビ青年会同盟事務委員会ヲ済マシテ往ク。木村良夫モ来タル。大分落付キタレバ大抵大丈夫ナラントノ事ニテ九時過ギ辞シテ帰ル。

〔十一月二十一日、火曜日〕

授業例ノ如シ。午後横浜ニ赴キ、文雄ノ留守宅ヲ訪問ス。三枝子一昨夜腹痛ノ由ナリシカドモ、昨夜ハ無事。十全病院ニ往キ三枝子入院ノ事ニ付キ打合セヨナス。或ハ年内二分婉スルカモ知レズトノ事ナリ。

〔十一月二十四日、金曜日〕

授業例ノ如シ。午後五時ヨリ築地精養軒ニ於テロマ字ひろめ会ノ秋季大会アリ。林伯爵司会ス。渋沢男モ出席。阪谷男ノ演説アリ。後ニ本会ヨリ文部省ニ向イ小学ノ教課ニロマ字ノ書方、読方、綴方ヲ編入スベキコトヲ建議スベシトノ決議ヲナス。中々盛会ナリキ。

〔十一月二十五日、土曜日〕

午前、食堂及ビ寄宿舎建築ノ件ニ付キ委員会ヲ開キ、協議ノ上、一応専門技師ノ意見ヲ徵スルコトニ定ム。午後、小石川後樂園ニ於テ江原素六氏ノ為ニ古稀ノ祝賀会アリ。余ハ同盟ヲ代表シテ祝詞ヲ述ブ。来会者百名許リアリ。

〔十一月二十六日、日曜日〕

午後、沼沢氏ヲ訪問。病氣ハ既ニ快復ノ由ニテ来客中ナリキ。木村ニ立寄り晩食ヲ喫シテ後、青山教会ニ往キ説教ヲナス。侯爵小林寿太郎氏肺患ニテ死ス。一般ニ惜マル。

〔十一月二十七日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後三時、青年会館ニ於テ教会同盟委員会ヲ開キ、弥々来月十九日組織会ヲ開クベキコトヲ議決ス。出席者ハ小崎、平岩、山本、余ノ四人ナリ。

〔十一月二十八日、火曜日〕

授業例ノ如シ。熊野氏方ニ花子同道、夕飯ニ招カル。長尾夫婦、ランドス夫婦、ラインシャー夫婦、森海軍小佐モ共ニ招カレ、和洋折中ノ料理ノ饗応アリ。会津ヨリみしらず柿苧箱到着シタルヲ以テソノ中十個ヲ熊野氏ニ贈ル。一同大ニ之ヲ賞

蕪ス。

〔十一月二十九日、水曜日〕

授業例ノ如シ。午後、臨時事務委員会ヲ開キ、新寄宿舎ノ位置、ソノ他ノ事ニ付キ評議シタリ。又、プレスビテリアン及ブリフオームド両ホールドヘ金貨五千弗ノ特別寄附ヲ請求スル事ヲ決ス。セベレンス氏ヘモ予約金ノ催促状ヲ発ス。

〔十一月三十日、木曜日〕

授業例ノ如シ。午後、幹事及ビ生徒監ト評議會ヲ開ク。夜、寿枝若松ヨリ帰京ス。彦三郎ヨリ獲物ノ雉子、山鳥ヲ送ル。

明治四十四年十二月

〔十二月一日、金曜日〕

午前九時、ビシヨップ・ハリス、ミストル・フヒシャールト共ニ寺内朝鮮總督ヲ訪問シ、在東京朝鮮人青年會館敷地ノ件ニ付キ陳情シタルニ、条件ニヨリテハドウカ為スベシトノ答アリ。同時ニ宣川ニ於ケル朝鮮人が同總督ヲ暗殺セント企図シタル事ニ付キ話アリキ。本日ヨリ新暖房器ヲ使用ス。午後、建築委員会ヲ開キ、寄宿舎ノ図案ニ付キ協議ス。

〔十二月二日、土曜日〕

午後一時三十分、故外務大臣侯爵小村寿太郎氏ノ葬式ニ會葬ス。京浜ニ於ケル内外官民ノ人物ハ殆ンド洩レナク青山ノ式場ニ集マリ、両陛下始メ皇族以下寄贈ノ柩、花輪等無數、実ニ盛ナル葬式ナリ。国葬ニハアラザレドモ伊藤公以後ノ盛

ナル葬式ナリ。式場ヨリ直チニ奥野昌綱翁一周年記念會ニ出席ス。会場ハ青山教會ナリ。夜、都留仙次氏、三谷民子、原某來車九時比辭シ去ル。都留氏紹介ノ為ナリ。

〔十二月三日、日曜日〕

午前、高輪教會ニ於テ禮拜。午後、木村良夫、片山寛來訪。良夫ハ愈旭川博寿堂病院ノ招聘ニ応ズル筈ノ由。留守中春子分婉ノ時大學病院ニ入院ノ事ニ付キ打合セラナス。片山ハ今回ノ事ニテ大學病院ニ対シ大ニ信用ヲ輕ジタルが如シ。市橋虎之助氏來訪ス。

〔十二月四日、月曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後二時、女子学院ニ往キミリケン氏ノ婦人会ノ為ニ一場ノ話ヲナス。ソレヨリ花子一同、神田錦町瓦斯会社ニ赴キガスストーブヲ見ル。今夜ヨリ電燈ヲ点シ始ム。久村頼藏、吉川花子、松永文雄氏同道、明日結婚式ノ「演習」ヲ為ス。熊野氏方ニ往キ教會同盟委員會ニ出ルベキ代表者ノ事ニ付キ相談ヲナス。

〔十二月五日、火曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後三時半、聖書學館ニ於テ久村頼藏、吉川花子ノ結婚式アリ。余、ソノ式ヲ司ル。式後一同撮影ス。

〔十二月六日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後暇乞イノ為木村ヲ訪問ス。良夫ハ不

在ニテ面会セズ。星野又吉、宮部金吾、新嶋氏等へ紹介書ヲ与エテ帰ル。片山夫婦子供ヲ携エテ来タル。久村夫婦、吉川氏ト共ニ礼ニ来タル。

〔十二月七日、木曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後、普通学部教員会ヲ開キ、期末試験ノ日割及ビ生徒取締ノ事等ヲ議ス。彦三郎会津ヨリ帰京ス。眞野咲子来訪。

〔十二月八日、金曜日〕

午前授業例ノ如シ。木村良夫旭川へ向ケ出発。上野停車場迄見送ル。午後、神学部教授会ヲ開キ試験其ノ他ノ事ニ付キ評議ス。

〔十二月九日、土曜日〕

午前、横浜、西村庄太郎氏ヲ訪問シ、予約金ノ催促ヲナス。来年ノ二月迄猶予ヲ請ワル。止ムヲ得ズ承認ヲ与ウ。夫レヨリ文雄留主宅ヲ訪問ス。三枝子其ノ後大イニ健康宜敷ク出産モ多分順当ナラントノ事ニテ大イニ安心シタリ。

〔十二月十日、日曜日〕

午前高輪教会ニ於テ説教ス。午後、富尾氏ヲ訪問シ葬式ノ相談ヲナス。

〔十二月十一日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後二時ヨリ芝教会ニ於テ大会常置委員会、教会同盟委員会、伝道局常務委員会ヲ開ク。夜、片山ヲ訪問

シ、春子大病院入院ノ件ニ付キ相談ス。

〔十二月十二日、火曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後二時、高輪教会ニ於テ富尾留雄氏妻政子ノ葬式アリ。余ハ司式説教ス。四時、瑞祥寺境内ニ葬ル。

〔十二月十三日、水曜日〕

午前授業例ノ如シ。午後、協力委員会ヲ開ク。午後九時三十分寿枝品川ヨリ京都ニ向ケ出発。同処迄見送ル。

〔十二月十四日、木曜日〕

授業例ノ如シ。午後、普通部教員会ヲ開キ、生徒取締リ規則ヲ議ス。議論百出、委員再附托トナス。

〔十二月十五日、金曜日〕

午前授業例ノ如シ。高等一年、二年ノ試験ヲ為ス。午後六時三十分、彦三郎新橋ヨリ出発。同処マデ見送ル。

〔十二月十六日、土曜日〕

午前、朝鮮基督教青年会幹事及ビウオレス氏等来訪。同会館敷地ノ事ニ付キ相談アリ。午後、銀座へ買物ニ往ク。

フヒシャル氏来訪。朝鮮ニ於ケル青年会ノ事業視察ノ結果ヲ報告ス。先ズ以テ好況ナリ。

〔十二月十八日、月曜日〕

授業例ノ如シ。午後四時半ヨリ牛込弁天町友愛学舎ニ於テ青年会同盟事務委員会ヲ開キ、来年度ノ予算其ノ他ノ件ニ付キ

第七篇

議決ス。友愛学舎ハヘンニングホフ氏監督ノ寄宿舎ナリ。

〔十二月十九日、火曜日〕

授業例ノ如シ。午後二時ヨリ青年会館ニ於テ基督教會同盟組織會ヲ開ク。加盟教會八個。代表者數五十人。其ノ中出席者四十八名。投票ノ結果、投票ノ多數ヲ以テ本多氏會長ニ選バレ小崎ト余ハ副會長トナル。其ノ外ノ十名ノ常務委員並ビニ幹事、會計ヲ選舉ス。三枝ワルシトノ電報アリ。花子、のぶヲ連レ横浜ニ赴キタルニ前夜下痢シタリトノ事ニテ産氣付キタル訳ニハアラズ。

〔十二月二十一日、木曜日〕

神学部第一年級及ビ第二年級ノ試験ヲナス。本日ニテ普通部試験了ル。午後、グラウンド・コンミチーノ會ヲ開ク。

〔十二月二十二日、金曜日〕

本日ニテ神学部試験了ル。

〔十二月二十三日、土曜日〕

健次帰宅ス。夜、高輪教會ニ於テクリスマス祝祭アリ。家族一同出席ス。

〔十二月二十四日、日曜日〕

横濱ニ往キ文雄留守宅ヲ訪問ス。三枝子ハ大分快方。差シ当タリ分婉ノ様子ナシ。但シ女中ナキニハ困リ居レリ。

〔十二月二十五日、月曜日〕

午前十時ヨリ神学部ニ於テ伝道局常務員會ヲ開キ、引続キ大

會常置員會ヲ開ク。宅ニテ午餐ヲ喫ス。出席者、毛利、笹倉、貴山、徳沢氏等ナリ。貴山幹事ニ慰勞金五拾円ヲ送ル事トス。

〔十二月二十六日、火曜日〕

午前七時半出發、若松ニ往ク。郡山ニテ暫時待合せ、午後六時發車、九時前若松着車。栄町清水屋ニ投ズ。穴沢医師教會代表者トシテ停車場ニ出迎ウ。

〔十二月二十七日、水曜日〕

午前、光牧師、穴沢医士、シュネーダール、モール、ノス三博士旅館ニ來訪ス。午後二時ヨリ獻堂式執行ノ筈ノ処、漸ク三時ニ始マル。其ノ前ニ堂外ニテ写真ヲ取ル。會堂ハ高等女學校ノ前ニ在リ、形ハ福嶋ノ教會堂ト殆ンド同一ナリ。余ハ獻堂ノ説教トシテキリストハ世界ノ光タルコトヲ説ク。若松市長、会津中学校長等ノ祝辭アリ。夜、シュネーダー氏ト余ト演説ス。但シ夕刻ヨリ雪風トナリ寒氣甚ダシク聴衆モ至ツテ少ナシ。

〔十二月二十八日、木曜日〕

午前四時起床。五時十五分發車。昨夜來雪風烈シ。寒氣凛烈ナリ。若松ヨリ郡山ニ出ルマデハ全ク雪風ノ中ヲ經過シタリ。郡山ニテ急行車へ乗替エ、午後四時過ギ無事帰宅ス。

〔十二月二十九日、金曜日〕

午後、柿崎正治氏來訪。來年一月中旬内務省ニ於テ諸宗教ノ

代表者ヲ召集シテ国民教育上ノ事ニ付キ相談会様ノモノヲ開カントスル事ニ付キ打合セアリ。基・仏・神三教ノ代表者ヲ召集シテ意見ヲ諮問スルノ意ナリト察セラル。我等ノ位置、主張ヲ明カニスルノ好機会トモナランカ。兎ニ角ニ当局者ガ宗教ノ輕ンズベカラザルコトヲ自覺シ来タリタル徵候ト見ルベキカ。

〔十二月三十日、土曜日〕

朝鮮水上氏ヨリ送リタル明太子ノ事ニ付キ新橋停車場小荷物

掛ニ往キ尋ネタレドモ更ニ要領ヲ得ズ。要スルニ運送会社ノ過失ニテ他ノ人ニ送達シタルモノノ如シ。紛失未達ト認メテ其ノ赴キヨ石橋氏へ通知シタリ。

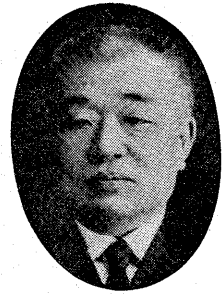
〔十二月三十一日、日曜日〕

電車運転手及ビ車掌ニ不平アリ、午後ヨリ同盟罷工ヲナス。東京市内俄カニ交通ノ便ヲ欠ク。夜ニ入り文雄来タル。春洋丸ハ昨日午前十一時ニ入港シタリ。文雄今回増俸ヲ受ケ四十五円トナル。骨ハ折レテモ都合宜敷キ由ナリ。

## 教派合同期成同盟会発会式に於ける植村正久、海老名弾正の演説

### 教派合同期成同盟会発会式

五月七日午後一時より東京青年会館に開かる。会するもの二百余名。江原素六氏病氣欠席の為、平沢均治氏会を司り、先ず井深樞之助氏祈禱を捧げ、折しも京城より上京中の渡辺暢氏聖書を朗読し、山本邦之助氏合同問題の経過を報告し、各派を代表せる十四氏の演説あり。その要領は各派の週報に出てたれど、何れも断片なれば、本誌には特にその筆記全文を掲ぐる筈なりしも、茲に二氏のみ掲げ此の記憶すべき発会の記念とす。



植村正久

植村正久君

日本基督教会は、合同と云う事に就いては最も古い縁故がある教会であります。元と元と我々は日本に一つの教会を建てるが宜しいと云う考えで幾分か骨を折ったこともある。又只其の教会設立当初の時ばかりでない、其の後に成りましても組合教会と合同するという事に就いて種々尽力したことも私自身としてもあるので、又私の属する教会全体が然う云う主義を有つて居るのである。所が今日の状態斯くの如く幾つかの教派が分立して居る。之は一体悪い事であろうか善い事であろうかと云うと、或る意味に於ては善い、又或る意味に於ては悪いと思う。教派の分立必ずしも悪事でない。其の中に止むを得ぬ事情……事情と云うと少し嫌な気味がありますが、精神上の問題もあると思う。精神上から分離するならば、分離は歓迎すべきもので、情実からみて合同するよりも争う方が宜しい。私は教派の分立を必ずしも非としない。悪事と思わない。又教派分立があつては一致が無いかと云うと一致はある。聖書の詞を平かに解釈するならば、何んなに教派が分立して居つても、其の間に一致はある。パウロの如きは最も其れを能く認めて居ると思う。事に依つたらば、精神上になると、我々が想像するよりも深い一致があるだろうと思う。其れで教派の分立は不一致と思わぬ。決して一致に差支え無いと思うて居る。若し其の精神上に於てさういうように深い一致があるものならば、形ちに於ても、色々の事業の上に於ても一致するように為たいと云うことは誰でも考へると思う。どうもさういう場合に於て或る誤解からとか、或る小さい事情からとか、又議論とか、主義とか、枝葉の点とかから分かれることは、最も遺憾なことであるから、成るべく之を能く調和するように為たいと云



うことは、誰でも考えるところ。であるから、どうか合同が出来れば大変幸いな事で、誰でも之に対して不同意を表する者はあるまいと思う。若し其れが合同的ならば、又仮令形ちに於て教派合同が出来ぬとも、日本基督教会は、他の方法を以て随分力を協せて偕に遭り得ると思う。伝道と云うものは各主義のあることであるから軽々しく出来ない。只今御話になつた聖公会の如きも、英国に於てシ・エム・エスとエス・ピー・デイは仲が悪く伝道を別にして居る。此は主義の上から止むを得ぬと思う。主義の問題、精神の問題で、誰でも一緒になることは出来ぬ。然う云う野合的の合同は出来ぬ。併し日本に於ける廃娼問題とか、禁酒問題とかの如き、或いは我々は宗教の自由を与えられて居るのに、其の性質明かに宗教と解釈するものを、宗教を盛んにする必要があるからとて、宗教として政府が取持とうと云うならば、そういうことに対しては、信仰自由の為に戦わねばならぬ。其れにはユニテリアンでも、カトリックでも、又坊主であろうが、偕に同盟して働くことが出来る。況んや同じく福音主義を奉じて居るものは丸て一致して仕事が出来る。私思うに、今日日本の基督教はもつとそういう方面に於て盛んに種々の働きを遣り得ると思つて居る。併し其ればかりでなしに、そういう伝道以外の事を遣つて、進んで伝道まで出来るならば、合同するが宜しい。然かし、其れに就いては信仰の一致を要する。信仰の一致がないのに合同の出来るものでない。私一己人として全部責任を負うて伝道するならば、信仰を偕にしないものと偕には遭れない。然う云う主義であります。其れで我々の救いのために世に降臨せる神の唯独子主耶穌基督と其の十字架とに、絶対的に信任を置き、神の諸ろの憐みに依りて勧められて、身を献けて生ける供え物となして神に献げられたる基督に於ける信仰にして一致するならば合同が出来る。然らざれば出来ない。謂ゆる道同じからざれば相共に謀らず。止むを得ない。そう云うことに於て合同は不可能である。其の場合に於ては止むを得

ない。分離が良いのである。併し、然う云うのは、強<sup>あなが</sup>ちに信条を拵えて、其の信条の鑄型に当嵌めて遣らねばならぬと私は云うのでない。世の中には随分頑固な連中プレマス・ブレズレンの如きは随分困る連中である。其の頑固連中に信条があるかと云うに、形式に於て信条はない。けれども、なかなか主義を以て團結して居る。信条が無くとも、形式に於て文が無くとも、精神的團結がある。ああいう真似をすると云うのではないが、併し文になつて居る信条が無くとも、随分信仰生活に於て、基督に対する態度に於て、精神、志に於て、随分一致が出来る。そういう一致は確かにあるので、其の一致の爲めには形の合同は要らぬかと思う。然うしてそういうように考えて往くならば、余り細かい文字などに拘泥しなくとも、例えば、日本基督信徒が皆一緒にならずとも、もつと今より大きな団体となり、十個あるものなら五個になり、五個あるものは三個までこぎつけられると思う。其れで何うか信仰の一致を謀りたい。信仰に依りて相赦し相容れて互に敬服し、知己であり同志であるならば、同じく神の前に熱心祈禱が出来る。そういうものに合同することは望ましいことである。唯此の株式会社でも造るように、運動し相談して、信仰の譲り合せなどは不思議な話である。信仰の譲り合せなど、其の様な妙なことを唱えたとて事が成るものでない。合同は精神であり信仰である。一種のリバイバルが出来なければならぬ。私はそういうような方針で今度企てられたような事業に、自分流儀か知らぬが、其の精神で或る程度まで御伴が出来ると思う。然うでなければ、始めから我々は決して此の事に拘わらぬのである。信条の必要、不必要は私は余り言わない。信条があつた方が宜しいかも知らぬ。併しながら先刻申したように、精神が発揮して居れば文字は無くとも宜しい。証文は要らぬ。然り然り否否で宜しいと思う。又此の制度の一致に於ては、私思うに、先ず之は自分等がそういうように偏して居るのか知らぬけれども、制度の方には我々日本人は一致し易いと思う。要は私が

自分の見方を諸君に当嵌めて往くのは失礼か知らぬが、自分の志が其処に往かぬならば、根本的一致ではない。神を信ずる、聖書を読む、基督は我々の先生だと云う、其の位のもので遣ると云うことは出来ぬ。どうしても基督に絶対的の信任を置き、神が我々を救わんとして遣わし給うた独子に絶対的の信仰を置き、銘々其の身を清き礼物として神に献げ、偕に紛骨碎身して天国の建設に当たる所の根本的精神に於て一致しなければ役に立たぬ。若し其の信仰にして日本の基督教会にあるならば、其の信仰を發揮して、此の合同を謀りたい。而して出来るだけ多く提携して伝道に当たりたいと思うのであります。

海老名 弾正 君



正 弾 名 老 海

只今私は組合教会の意見として申上げるものではありません。外にも組合教会の教師として此の壇に上る方もあります。私一人代表する訳に往かないのであります。唯私の意見を申上げるのであります。

此の教派の種々分れて来た所のは、抛んぬない理由が存して居るだろうと思うのである。基督の御言を仮りて其れを説明するといふは恐れ多いのでありますけれども、併し多少参考になるうと思ひます。我は葡萄樹、爾等其の枝なりとありますが、一つの葡萄樹の枝は唯一本でない、どれほど枝があるか分からぬ。枝から枝が出で、枝に枝がつくようなもので、此は個人的事で全然教派に当嵌めることは出来ぬけれども、教派とてもそういう意味に於て段々と多くなつて来なければならぬ事情があつたかと思ひるのであります。

其れで教派は基督教の欠点である、間違ひであるといふことは私は敢えて言わぬのである。寧ろ教派の多く出来て居るのは、其処に生命がある所以である。又変化の多い所以で活きて居る証拠であると思ふのであります。如何に統一的に遣つて居る天主教の如きものの中にも様々の教派がある。天主教と言へば唯一つの大なる教派で、其の中に小さい意見の變つたものは無いだろうと思ふは誤りで、どの位あるか私は一々之を枚挙することは出来ぬのであるが、此の教派の多く出来て来た所ものは強ち悪い意味でない。勿論、教派に弊害を生じて来ることもあり、唯併しながら此の枝葉にばかり走つて了うと、又甚だ其処に間違ひを生ずることがあるので、此の合同運動の如きは、そこに一つの大なる意味がある。其処は何であるかといふと、其の本に反る、我は葡萄の樹と言われた所の其の本に反り其の根本に反るのである。如何に多くの其処に枝が出て居つても、根本は一つであるといふことを互に相自覚することが非常に必要なことである。其の根本は基督彼自身で、其の基督に就いて意見を言うのではない。基督との深い関係を言うのである。基督は我々が定義を下すべき所の方でない。如何に人が定義を下して見ても、何時でも定義以上で其の定義は幾度壞わされたか分からぬ。基督は此の如きものであると云う定義は、敢えて為すべきことでない。寧ろ不敬であるけれども其の基督に立帰ること、基督に対して自分の深い切つても切られない関係を自覚し、自分の精神の依つて居る所、安心の基づいて居る所、自分の生命の依つて居る所、苟も基督信者たる以上は、自分が基督にあること、基督に添つて居る訳合の事、其れを最も深く自覚することである。而して基督から流れ出るものは如何なるものであるかを知り、互に相愛するは神の国を建設する事業である。其の基督から出る生命、基督と我々との最も深い所の関係を自覚して、而して枝から枝について居るよりも、大本との深い関係を知ったときに、其処で合同が出来る。合同というに色々種類があり性質が

ある。強ち單純なものに成つて了うことを言うのでない。特質がある。其の特質の中に大統一あることで、合同は行なわれるも特質を失つて誰も彼も同じ型に容れることは出来ぬ。基督は其れよりも大きな型である。基督の中にはどれほど大きなものが這入つて居るか分からぬ。如何なる教派、如何なる信条、如何なる意見と雖も、其の一斑を表わすに外ならぬものである。凡ての人種、奴隸、男女、ユダヤ人でも異邦人でも、誰も彼も基督は一なりで、其の基督は凡てのものを以て凡てのものに満る御方である。其の人格に立戻つて往くことが最も大切なことであろうと思う。而して其の基督は一の想像でない、一の理想でない、歴史上の基督でなければならぬ。此の地上に於て血あり肉あり骨あつて我々の中に行動したもの、人の頼らなくてはならぬ、彌陀とか如来とか一種の理体でない。我々の中にあつて肉あり血ある所の其の人、其の歴史的基督に我々の根柢があるのである。其処を能く明かにして往かねばならぬと思うのである。其の基督が我々の本尊である。其の本尊の本に我々統一せられて往くべきことにして、此処に自ら統一が出来て居るけれども、動ともすれば枝葉に亘つて根本を打忘れると云うことがある。合同の叫びの一言、此処に来なければならぬことで、其処で大いに統一することが出来るのである。

然して尚一つは我々クリスチアンが世の中に対して為すべき所の事業である。是れ世間に対する態度である。此処を我々能く知らなければならぬ。未だ神の国の声が地上に行渡つて居るのでない。前途遼遠である。殊に日本に於てクリスチアンは数の上から云つても少数である。六千万の同胞の居る所で、我がプロテスタントのクリスチアンは十万に足らぬ。誠に少数である。此の大多数の国民は寧ろ反対の態度を取つて居る。なかなか基督教に来ない。其処は彼等に迷信もあり誤謬もあり、様々の不義罪惡もある。是と我々戦わねばならぬ。其処に共通

の敵がある。其の共通の敵を知らなければならぬと思う。間々僅かの事に依りて互いの異同に心を奪われて共通の敵を忘れると云う例がある。所が共通の敵は大なるものであつても我々の共通を恐れて居る。我々の一致団結を恐れ、一致の行動を恐れて居る。其れがあれば真に共通の敵は立場を失わなければならぬ所がある。斯う云う際に、教派の分かれて居る故を以て、互に冷淡視し、甲の失敗は乙之が為めに涙を注がない。乙が失敗しても乙の言に丙の触れることなく、丙の失敗に丁亦一向同情を注がない。各為す所を以て足れりとして居る。此は共通の敵に勝つ所以でない。此の大なる事業を我々有つて居るのである。其れで互に基督の枝であることを自覚して、而してあらゆる点に於て共同する其の事はなかなか大きいもので、広大なる敵に勝つ所以である。未だ調査して居りませぬが、東京ばかりで何百という講義所がある。斯くの如き講義所、集会所を有つて居るものは、基督教団体の外には無い。大なる会堂から小なる会堂まで数えれば甚だ多いのである。その外に各自の家を之が為めに献げるものが少なからずある位である。そういう良い機関を有つて居るクリスチアンである。而して其れが五十人、百人、五百人、千人の団体を備えて居る訳合いである。斯の如きものが一致団結して一つの目的に対して働くことと云うことであれば、なかなか豪いものである。或る思想杯に対しては、此のクリスチアンが確乎と立つて、自分の立場、主義を明かにして主張せば有力なもので決して等閑に看過することは出来ぬものである。互に氣脈を通じて祈れば、非常に勢力あるものである。啻に具体的問題として一つの事業を為すばかりでない。思想界に於ても同様の訳合いで、力を有し得る訳である。此れに就いて議論と云うものは一様でない、其の違つて居る所が好い。甲の論ずる所と乙の論ずる所と同一でない。乙の論は丙と同一でない。非常に相違がある。其れであるからして、其の相違が不揃いな社会に応ずることが出来る。如何に高い思想でも、一方に偏して居ては低い

所に及ばぬ。又低い思想ばかりでは高い所に及ばぬ。同じ物を見るにも類推法もあれば色々実験の仕方がある。其れを悉く同じように為なければならぬと云う合同であつたならば、合同が間違ひである。其処に非常な相違がある。沢山分かれて居るので非常に面白い所がある。而して不揃いな社会に向つて自由に事を為すことが出来る。自ら其処が出来て居るのである。今日教派の違ふ所は不揃いな社会に自ら適する様に出来て居るので、其れを能く利用するときは、不揃いな社会に対して応病与薬と云う訳で相当な事が出来るのである。其れを各自自覚しなければならぬ。其れを互に非難し輕蔑して遣るとなれば、其れは教派の多く出来て居る弊害である。若し互に能く敬い重んじ、互に能く祈り、各長ずる所を以て統一的行動をなす思想を得れば合同は成功である。又斯の如きことは我が日本に於て非常に要求する所である。畢竟するに、今日合同に就いて二つの能く考へて載きたいことは、一つは教会以外に対し、我々の共通の敵が力強く構へて居る所に対する態度如何と云うことで、此れはどうしても合同でなければいかぬ。一騎打ちではいかぬと云うこと。其れから尚一つは其れを統一する中心である。此は言わずとも解つて居る。其れは即ち我々が載いて居る所の基督である。之を眞に分かり易く何かに当嵌めて言うならば、丁度維新前の外国に対する態度である。一面に於て尊王の正義に依りて纏りが著いたけれどもそれ迄は我が大君が上にあつたけれども、各自が之を自覚しなかつた。藩主よりも深く重きを置かなかつた。天皇が我々の上に在すことを自覚して居らぬ。其れを自覚しなかつた故に合同がない。其れで外国に向つた為に忽ち敗北した。私此の間九州に往つた時熟々其の事を思つた。下の関の海岸に於て長州人が外国の軍艦と戦つた折りの事を考え、下の関と小倉とは一葦帯水、橋を架けても渡るべきほどの所を、向うの藩の小倉では対岸の火事として何の備えもせず、平気で見て居つた。其れでは到底いかぬと云うので、互に団結して遂に日本が統一せら

れて今日のようなになったのである。今日我が基督教会は斯れほどでは無いが、一方に於て必死と戦って居るのに傍観して居り、之に加勢しないというは、非常な間違いで、同じ基督を載いて居りながら斯の如くであつては、其の精神、主義、其の強弱を深く自覚することの足らぬことを表わして居るのである。其れ故に私は此の合同を非常に賛成し、此の意味に於て内は以て基督と我との關係及び各自の教派を深く悟り、而して是よりも尊きものは即ち基督であるということを知つて、そうして其の基督に統一的に結合し、外は以て不信仰の社会に向つて戦いたいのである。この共通の敵に對して戦うて勝つことを得る一つの道ある所以は何ぞや。即ち基督に依る一致團結合同にあり。合同は此の意義を自覚すると云うことであります。

最後の弁士小崎氏の演説終れるは三時四十分、一人平均十二分余なり。江原氏の外、予定の演説者にて病氣等にて欠席せられしは綱島佳吉、元田作之進、高木王太郎の三氏なり。演説につき地方來会者の紹介及び各地祝電の朗読あり、次いで小崎氏を座長に押し会則案を議し、(本誌「開拓者」四月号五八、九頁参照)高崎介蔵氏の動議にて第五條理事七名を十五名に改め、また第十一條会員の寄附を有志者の寄附に改めし外は草案全部を可決せり。終りて有志者卅余名は神田宝亭に会食し、全員の各簡単な食卓演説あり、地方上京諸氏も多くその熱誠を披瀝せられたり。小崎座長より指名せられし、理事は左の如し、

植村正久、熊野雄七、小崎弘道、荒木真弓、平岩愼保、平沢均治、元田作之進、中島力三郎、万木源次郎、石川角次郎、松野菊太郎、岡崎義孝、山本邦之助、松島 篤、和田秀豊

更に理事の互選を以て理事長小崎弘道、副理事熊野雄七、書記和田秀豊、松野菊太郎、會計荒木真弓、平沢均治等である。謹みて上天の恩恵と会員の努力とにより本会がその目的を達成せんことを祈る。

〔開拓者第六卷第六号明治四十四年六月一日〕



天下大勢の赴くところ事みな成る。分裂も勢いなり、統合も勢いなり、知らず教派問題の現勢は如何。

勢い窮まれば必ず変ず。十六世紀以後プロテスタントの教派続々として欧州に分出し、伝道の氣運に連れて各派はその儘外邦に入った。然かもかく位置を変え且つ發生の時代も遠くなれば、教派の意義は失せて、寧ろ桎梏となり弊害を生じ、此の勢い今や窮まりて、合同の氣運が茲に動き來つた。

西洋の邦土にて、左まで感ぜられなかつた分派の弊が伝道の地に於て甚だしく感ぜられ、今はその反響が彼の邦土に及び、合同の氣運は彼等の間にゆらめきそめた。此の反響が此度の蘇国の宣教大会によって層一層と高鳴した。しかもその反響がまたその発起点に反応して日本に於ける合同の氣運を起こし來つて居る。

去月上旬神戸に開かれた組合教会の総会は左の建議案を通過せしめた。

「我組合教会は時運の發展に伴い日本に於ける各教派の合同を図り以て神国拡張の為に尽瘁する機運の熟せんことを希望し、茲に其意志を表明するものなり」

いま歴史を回顧すると、明治二十年頃より一致、組合兩派の合併の議あり、合併草案なるものを成立した。此の時は一一致派の方は能動的であつて組合派は受動的であつた様に思われる。しかも、交渉約四年に亘つた結果、組合派は遂に之を謝絶した。然るに二十年後の今日烽火は先ず組合派によって挙げられた。その眼中には先ず當年の對手が浮んで居るのである。知らず引きつづいて大会を浜寺に開いた日基派は如何に之に対したか。

聞く所に因れば、組合派の代員はかの建議を携えて日基派大会を訪いしに、同会の議長は之に対し、慎重に之を熟考すべきを答えしのみにて、同会は別に何等の決議を為さざりしという。

組合派の建議なるものは、之を譬うれば敵情偵察の為に放てる氣球の如きものである。趣意余りに漠然として決意に乏しい。決して先制の利を占むる所以で無い。同派にして合同の意気の昌さかなるものあらば、何故に直ちに実行委員を挙げて、目差すところに向つて驀進せしめなかつた。要するに合同の如きは理非は明白にして、まだ機至らざるを怨むのみである。故に之を成立せしめんとせば、精神を傾倒して氣運を促し来らねばならぬ。其の勢いは猛然として河を決する如く衆心を激励せねばならぬ。自他余りに謹慎にして優柔ならば、かかる問題は決して成就せぬ。寧ろ思い切つて理想的に壯図を企つるがよい。

去月新人社は合同問題に関して先輩諸家の意見を問うた。其の質問の箇条は(一)合同の可否及び其の範囲、(二)合同の時機、(三)合同の方法、(イ)政治、(ロ)経済、(ハ)信条、である。我等も試問を辱うしたが、元より我等は先輩では無いが同時にまた先輩の如き係累が無いから、忌憚なき若輩の卑見を答えた。それで詳細の事はここに再説せぬが、二、三の要件と思うことを挙げておく。

まず最も大切なるは、今日の各派の奉ずる信条の意義を重視せぬ事である。今日の信条なるもの多くは十六、七世紀頃の遺物である。その中には成立の当時にこそ必要あれ、今に至つては全く無用なるのみならず、真に荒唐不稽なるものが少なくない。我等は近頃各派の信条を比較して見んと思ったが、その材料を手軽く集めがたかつた。何故に基督教には、仏教の各宗綱要の如き書が乏しいのであろう。或いは疑う、かの信条の如きは殆んど伏魔殿であつて、之が扉は寧ろ漫りに開く可からざるものなるかを。されば、かかる信条は概ね之を度外視し

て、むしろ濶大にして含蓄多き綱領の如きものを作つて之によつて合同せねば成らぬ。明治二十二、三年の一致組合兩派合併草案の如く、ウエストミンスター略問答、ハイデルベルグ問答、プレマス問答等を担ぎ來つては全然今の時勢に不適當である。且つ細密の信條を確定して發展の余地を塞ぐは殆んど自滅の封印をするに等しく、決して長久に進歩を目標とするもの為すべき事でない。故に綱領は各人解釈の自由ありて、また將來發展の余地充分なものでなければならぬ。

合同の動機は一心共力して日本の基督教会を設立するにあらねばならぬ。朝鮮合併の結果より生ぜし伝道の要務の如きは、之を眼中におくも可なるが、今日屢々大きく如く朝鮮伝道の為めに合同すべしというが如きは、本末を誤るの甚だしきものである。それより先ず全然西洋の助力を脱離し、制度に於ても思想に於ても、完全に獨立したる日本の基督教会を立つることが最大の動機でなければならぬ。之が成立せねば我等は朝鮮に伝道すべき特色あるものを持たぬのである。欧米の儘の基督教の宣伝ならば我等が敢えて取次ぎするの必要はない。ただ日本人がそれを為すからというだけでは不満足である。尚此の問題に就ては次に論ぜんとするが、我等は最も思想を重んずるの見地から、日本基督教会の成立の爲めには自由派を度外視すべからざることを注意するのである。

今年八月伯林に於ける世界自由基督教徒の大会は、決して所謂正統派の諸氏が冷然として顧みぬ如き価値なき者ではない。特にハーナック、オイッケン、ワイネル、トレルチ、ブーセー、等の独逸有数の学者が之に加わり、仏のサバチエー、英のカーペンター、伊のムルリの如き名士をも加えたものである。然して注意の範圍は猶太人問題、モダーニズム問題、極東問題に迄及んで居る。之に關しては、同会に列席せられたる三並良氏の報告が六合雜誌にあり、我等もいささか之に關して意見を同誌に送つておいたが、ここに現われたる思潮は、独逸の

ルーテル派の如きは其の後公然之を非認して居るが、実は将来基督教会の進路を示すものの如く見ゆる。自由派として現に日本にあって此の方面の思想を伝うるものは尚少々である。然しながら、所謂正統派中にもかかる自由思想の傾向あるもの少なくない。特に新進の少壮者中に多くある。また従来の教会に満足せずして脱離し去つた人士中にも自由派はある。此等の有力なる分子も成し得る限り、新日本教会中に網羅せねばならぬ。

然しながら、全体の合同が余りに包擁的で思想が紛雜になるを憂うるならば、最小限として二個の區別を立つるがよろしかろう。外国伝来の宗派の無意義なるは今更云う迄もないが、此等を尽く打ちて一丸とし、いまだ獨立せざる諸教会は、断然外国の助力を謝絶して獨立し以て全体に合せねばならぬ。然してこの混和の中から自ら進歩派と保守派の二大派を別ち来るがよろしかろう。思うにこの二派は今日潜勢的には存在してあるのであれば、之を顕勢的にするは望ましきことであつて、全般の爲には二派の対立は却つて全部一体たるよりも有利であるかも知れぬ。

創立の業に与りて千辛万苦を嘗められた先輩諸君はこの合同を完成して有終の美を収めらるるがよろしかろう。若し不幸にして諸君が情実や係累の爲に遷延決せられざるときは、小壯者特に進歩主義者は遂に鬱勃の氣堪ゆる能わず、断然として別に旗幟を立つるに至るであらうと思う。或いは之が眞の進歩であるかも知れぬ。

教派合同問題に連絡して学校同盟の問題がある。これも蘇国大会の産物であらうが、米国の諸教派は、日本に於て合同して基督教大学を立てんとした協議中なりとさく。これは日本人の中にも希望があらうが、問題の起り方は外国からである。東京の基督教諸学校も之に関して近頃會議を開いたと聞く。

理想的に言えば、合同の教派も学校も共に日本のものであるべきであるから、日本の基督教学校としては、日

本人の力に信頼して自立せんとする同志社の如きものを助成して大学たらしむるが正当である。(但し位置は東京であることが肝要である)。それで外国の各派合同して大学を作ると言うが如きは、恐らくは不可能ではあるまいか。特にこの大学問題と教会の独立問題とを連係して考うると、教会が独立して学校のみが外国各派の連合管理の下にあるというが如きは如何にも変態である。また連合管理そのものも決して調和的永続を望みがない。よつて思うに、若し外国の有志にして真に日本基督教教育の為に尽さんとする好意を有するものあらば、よろしく第一派の優秀なる日本教界の教育者を選んで、万事を之に一任し、全然宗派の外に立たしめたらよろしかろう。これより以外に方法は殆んど無い様である。

因みに云う、近頃東京に於ける基督教教育会なるものは必要の会なりと思う。しかし、各基督教学校の正教員のみを会員とする如きは、其の規模の狭隘なる決して大事を為す所以でない。今の世に於て攻究すべき教育問題一にして足らず。第一諸校自身の独立さえが未決問題ではないか。教会が独立しても学校のみ外国補助若しくは管理の下に残る如きは悲惨なる事実では無いか。かかる場合に際し、連合教育会の如きもの何ぞひろく識者を加えて自由なる大胆なる研究を為さざるか。(開拓者第五卷第十一号明治四十三年十一月)

第  
八  
篇



# 明治学院財団法人理事会決議録

明治学院財団法人理事会決議録

(明治三十九年三月二十二日より  
明治四十五年七月一日まで)

## 第卅回

一 明治参拾九年参月式拾貳日午前拾時理事会ヲ明治学院総理室ニ開ク  
一 磯辺弥一郎、松永文雄、有馬純清、毛利官治、石原保太郎、ブース、ランヂス、ブケンナン、イムブリー、ジョン・バラ、ローガン、マクネヤ、稲垣信、井深梶之助、松井安三郎、ノ諸理事及ワイコッフ、オートマンズ、

熊野雄七、ノ員外議員出席

一 磯辺弥一郎祈禱シテ開会

一 役員ヲ選挙セシニ其結果左ノ如シ

議長 井深梶之助

邦文書記 熊野雄七

英文書記 エム・エヌ・ワイコッフ

会計 ション・バラ



一 兩書記前理事会ノ記録ヲ朗読之ヲ正確ナリト認ム但シ法人認可前ノ理事会ナリ

一 書記ワイコッフ氏ヨリ前年度中取扱ヒタル事務ノ報告ヲナス

一 井深氏報告、前会ノ決議ニ基キ柏井園氏へ送ルベキ旅費ノ件ニ付本人へ其旨通知セシモ未ダ其返信ナキ中ニ自分ハ欧州へ向ケ出發セシニ其後同氏ハ間モナク帰朝シテ直チニ神学部教授タルコトヲ辞シタルヲ以テ自然前会ノ決議ハ消滅スルコトトナレリ

報告ニ対シ全会異議ナシ

一 井深氏財団法人認可願ハ明治卅八年三月九日認可セラレタル赴ヲ報告ス

一 イムブリー氏動議 財団法人寄附行為ヲ邦文及ヒ英文ニ印刷スルコト、可決

右ノ委員ニ井深氏イムブリー氏ヲ挙ゲ

一 井深氏報告、予ハ昨年三月本國ヲ出發シ仏國及ヒ萬國ノ蘭國基督教青年会同盟大会ニ臨ミ歸路米國ニ過ギリ学院ノ為メ基本金及擴張費ノ募集ニ付運動尽力シタルニ大約式萬五千弗ノ寄附及ヒ予約ヲ得タリ而シテ尚其他ニモ数名出金ノ約束ヲナシタルモノアリ

一 イムブリー氏動議 米國ニテ明治学院へ寄附金ヲナシタル人々へ井深氏ヲ經テ謝状ヲ送り且尚今後ノ尽力ヲ依頼スルコト、可決

一 既ニ正午ニナリタルヲ以テ一時半マテ休憩

一 午後一時半再ヒ開會

一 石原氏動議、井深氏基本金募集ニ付テハ非常ニ尽力サレタルヲ以テ理事会ヨリ厚ク其勞ヲ謝スルコトニイタシ

タシ、満場一致ヲ以テ之ヲ賛成可決ス

一 熊野氏動議 高等学部四人及普通学部四拾貳人今回規定ノ学科ニ及第シタリ仍テ例ニ從ヒ卒業証書ヲ附与スルコトニ致シタシ、可決

但シ卒業者ノ姓名ハ別帖ニアリ

一 オートマンス氏曰ク、神学部別科生吉岡徹、関口幸四郎、松尾年太郎ノ參人規定ノ試験ニ及第セバ来六月ニ卒業証書ヲ授与スルコトニ致シタシ、可決

一 熊野氏高等普通両学部過去壹ケ年間ノ状況ヲ報告ス

一 オートマンス氏神学部ニ於ケル過去壹ケ年間ノ状況ヲ報告ス

一 ワイコッフ氏新講堂建築ノ報告ヲナス決算表ハ後ニ記載ス

一 井深氏 神学部教員ニ付述ベテ曰ク柏井園氏辞任セルニ付其代リトシテ松永文雄氏ヲ壹ケ年間依頼シタリシカ此後同氏ヲ挙テ神学部教授トナシ教会歴史ヲ担任セシメ月俸六拾円ト定メンコトヲ希望ス願クハ協賛可決セラレンコトヲ乞フ 全理事ノ三分ノ二以上賛成可決

一 井深氏尚続テ希望ヲ述ベテ曰ク秦氏ヲ今後神学部ノ専任教授ト為シ月俸六拾円トシ別科生ノ系統神学ヲ担任セシメ且フルトン氏来秋帰省スルニ付其担当科目中ノ幾分ヲ負担セシメンコトヲ望ム

一 オートマンス氏緊急動議ヲ提出シイムブリー氏從來ノ如ク英語ヲ以テ系統神学ヲ教授スルコトヲ請求ス  
右ハ先決問題トシテ之ヲ採決セシニ賛成多数可決

一 熊野氏動議 秦氏ヲ教授トシ別科生ノ系統神学及フルトン氏不在中其受持チタル学科中ノ或ル科ヲ担任セシム

ルコト 全理事三分ノ二以上賛成、可決

但シ此決議ハ九月一日ヨリ実行スルコト

一松井氏 総理及ヒ幹事ノ年俸ヲ増額スルコトニ付動議ヲ為ス。此問題ノ提出セラレタル時井深氏ハ稲垣氏ニ議長席ヲ譲リテ暫時退席シタリ熊野氏モ松永氏ニ書記ノ任ヲ托シテ暫時退席ス

一ワイコッフ氏動議 来四月ヨリ総理ノ年俸ヲ貳百円増加シ壹千貳百円トスルコト 可決

一時既ニ黄昏ニ近キタルヲ以テ明二十三日午前九時開会スルコトトシ松井氏祈禱シテ散会ス

一二十三日午前九時 松永、稲垣、ローガン、マカルピン、バラ、井深、イムブリー、ブカナン、ランヂス、諸理事及ヒワイコッフ、熊野ノ二氏出席

一マカルピン祈禱シテ開会

一オートマンズ氏神学部教授フルトン氏今秋帰省ニ付テハ其後任者トシテ秦氏九月ヨリ全力ヲ注クモ到底フルトン氏ノ受持タル学科ヲ尽ク担任スルコト能ハス其善後策如何ニセバ宜シカラン理事会ハ之ヲ熟考シテ其欠ヲ補ハレタシトノ冀望ヲ述ブ

一イムブリー氏動議 右ニ付フルトン氏ノ不在中協力ノ三ミツション、ニ寄附金額ヲ各參百円ツツ増額スルコトヲ請求シ以テ適當ノ講師ヲ選定スルコト、多数賛成可決

右ニ付議長指名ニテ井深、イムブリー、ワイコッフ、マカルピン、ノ諸氏ヲ交渉委員ニ挙ゲ

一神学、高等、普通ノ三学部ノ予算提出討議ノ上左ノ如ク可決

明治学院明治参拾九年度予算書

一 神学部ノ分

収入

一金参千参百円也

北米合衆国プレスビテリアン、亜米利加里ホームド教会及亜米利加南プレスビテリアン教会ヨリ寄附

支出

一金貳千貳百五拾五円

一金貳百〇五円也

一金壹百円也

一金壹百円也

一金七拾五円也

一金貳拾五円也

一金壹百円也

一金貳百四拾円也

一金貳百円也

合計金参千参百円也

總理他教員及書記兼図書係俸給

使丁手当

薪炭及点火費

諸納税

印刷及広告費

備付品

火災保險費

營繕費

図書購買費

一 高等学部及普通学部ノ分

収入

一金四千九百円也

北米合衆国プレスビテリアン教会及亜米利加レホームド教会ヨリ寄附

一金五千四百円也

授業料

合計金壹万〇参百円也

支出

一金七千四百八拾壹円也

一金四百〇九円也

一金参百円也

一金参百五拾円也

一金貳百円也

一金壹百五拾円也

一金壹百五拾円也

一金六百八拾円也

一金貳百円也

総理幹事教員書記及図書係標本係俸給

使丁手当

薪炭及点火費

印刷及広告費

備品購買費

火災保険費

諸納税

營繕費

図書購買費

一金壹百五拾壹円也

諸雜費

一金貳百拾六円也

借宅料

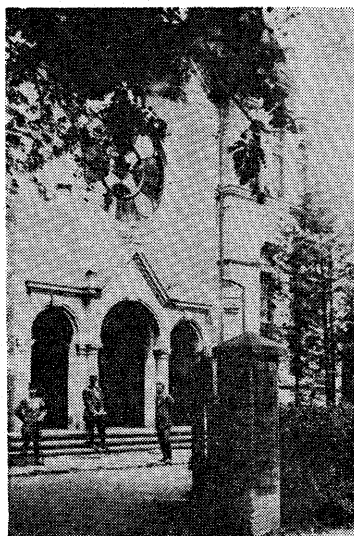
合計金壹万貳百八拾七円也

一 イムブリー氏 此予算ニ基キ關係ノ、ミツシヨ、ニ從來ノ如ク寄附ヲ繼續センコトヲ乞ハントノ動議ヲナス可決

一 イムブリー氏動議 築地拾七番地ニアル旧神学校ノ建物及地面ハ元來ダッチ・リフイムド、プレスビテリアン及スコッチ・プレスビテリアン、ノ三ミツシヨ、ニ属スルモノナルガ之ヲ三伝道局ニ交渉シテ学院ニ譲リ受ケ若シスコッチ、ノ方之ヲ承認セザレバ適當ノ価ヲ以テ買取ルコト、可決  
右ハ事務員ニ委託シテ交渉セシムルコトトセリ

一 理事有馬純清、渡辺暢、松井安三郎、松永文雄ノ四氏ハ本日ヲ以テ満期ニ付理事ノ選挙ヲ執行シタルニ投票ノ結果有馬純清、渡辺暢、松井安三郎、ノ三氏ハ再選重任ト決シ松永文雄氏ハ満期退任シ其後任ハ暫時欠員トナス事ニ決ス

一 イー・エス・ブリス、ビー・シー・ハワース、エチ・ビー・プライス、ノ三氏ハ帰国ニ付辞任シ、チャー・エム・マクネヤ、シーケー・カンミンゲ、ノ二氏ハ満期退任ニ付ウイリアム・イムブリー、エチ・エム・ランデス、ノ二氏ハ在日本プレスビテリアン宣教師社団法人ニ於テチャー・アール・ミロル氏ハ在日本リホームド宣教師社団法人ニ於テアル・エー・マカルピン、シー・エー・ローガン、ノ二氏ハ在日本南プレスビテリアン宣教師社団法人ニ於テ本法人理事ニ当選ノ赴夫々通知アリタリ



新 講 堂

一 事務員ヲ選挙セシニ井深、石原、松井、イムブリ、ノ四氏当選ス 但シ書記ハ職務上会議ニ参加スベキコト

一 五月中ニ理事会ヲ開クコトト決ス

但シ時日等ハ議長及ヒ書記ニ委任スルコト

一 サンダム・ホール、ノ内事務室ヲ増設スルコトニ付ランデス氏ヨリ報告アリ

ランデス、バラノ二氏ニ委嘱シテ速カニ着手スルコトニ決ス

一 井深氏ヨリ本年二月廿四日新講堂震害ノ結果及独逸ノ技師、文部省建築課長等ノ調査講究ノ報告アリ

一 ワイコッフ氏新講堂建築費決算ニ付報告

支出

一金壹万六千参百四拾八円〇壹錢也

收入

一金壹万五千五百〇壹円六拾壹錢也、ミロル氏寄附

一金七拾五円貳拾八錢也 右利子

一金貳百円也 李春生氏寄附

一金五百円也 築地十七番地ヨリ借入

一金七拾壹円拾貳錢也 リホームド・ミツシヨ、

ヨリ借入

合計金壹万六千参百四拾八円〇壹錢也

一會計ノ検査員ニワイコッフ、松永ノ二氏ヲ挙ゲ  
一井深氏祈禱ニテ閉会ス

書記 熊野雄七 ㊦

議長 井深梶之助 ㊦

### 第貳回

一明治三十九年五月八日午後二時理事会ヲ開ク 有馬、松井、磯辺、稻垣、石原、ブカナン、ミラル、マカルピ  
ン、ジョン・バラ、ランデス、イムブリー、井深ノ諸理事及ワイコッフ、熊野ノ式書記出席

一ミラル氏祈禱シテ開議

一書記邦文及英文ノ記録ヲ読ム

一正確ナリト認ム但シ英文ト邦文トヲ对照スルコト

一前会ニテ松永氏ヲ今四月ヨリ秦氏ヲ来ル九月ヨリ神学部教授ニ専任シタルニ付来ル九月後其就職式ヲ挙クルコ  
ト

但シ万事総理ニ一任スルコト

一マカルピン氏財団法人寄附行為条項中理事会ヲ少クモ一年二回開クトアルヲ年一回ト改メンコトヲ動議ス

一ミラル氏賛成満場一致ヲ以テ可決

一新講堂震害ニ付キ之ヲ修繕スルカ或ハ之ヲ全く改築スルカ且他ノ必要ナル建築ヲ要スベク今委員五名ヲ挙ゲテ  
之ガ取調ヲナサシムルコトニ可決



議長ノ指名ニテ井深、松井、石原、イムブリー、ミラル、ノ五名ヲ挙ク

一 神学部生徒寄宿舎ヲ來ル六月限りニテ解約スルコトト決ス

一 向後理事ノ數ヲ十二名トナスコトトシ是ヨリ十二名ニナル迄ハ仮令欠員ヲ生スルトモ補充選挙ヲ為サザル事

一 従來神学候補生ハ授業料ヲ免除サレ居リシモ今五月ヨリ凡テ之ヲ納付セシムルコトトス

松井氏祈禱シテ閉会ス

議長 井深棍之助<sup>㊦</sup>

書記 熊野雄七<sup>㊦</sup>

### 第參回

一 明治四十年三月廿四日午前十時理事例会ヲ總理室ニ於テ開ク

一 井深、渡辺、磯辺、スカッダル、インブリー、ミラル、バラ、ランダス、ノ諸理事及ヒ熊野、ワイコッフ、ノ

二 書記出席タムソン、ライシヤウル、ノ二氏員外席ニ列ス

一 スカッダル氏祈禱シテ開議

一 書記邦文及ビ英文ノ前會記録ヲ朗誦ス之ヲ正確ナリト認ム

一 井深氏ヨリ前會ノ決議ニ基キ本年一月九日松永文雄、秦庄吉岡教授ノ就職式ヲ執行セリトノ報告アリ

一 井深氏ヨリ新講堂ノ營繕ハ伊藤為吉監督ノ下ニ全ク竣工シタリ之レが為メニ金參千九百拾五円四拾五錢ヲ要シ

タリトノ報告アリ

一 「南プレスビテリアン・ミッション」ノ書記ローガン氏ヨリ該ミッション、ハ今後明治学院神学部ニ於ケル協

カヲ止メ同時ニ該ミツション、ヲ代表セル理事ハ皆辞任スベシトノ通知書ヲ提出ス

一「北プレスビテリアン」及ビ「リフオームド」両「ミツション」協議会ヨリ左ノ決議文ヲ提出ス

一両ミツション協議会ノ書記ハ「南プレスビテリアン・ミツション」ニ其ノ明治学院神学部ニ於ケル協力ヲ止ムルトノ決議ヲ再考スベシト勸告センコトヲ該理事会ヘ交渉スルコト

一両ミツション、ノ書記ハ此決議案ヲ「南プレスビテリアン・ミツション」ノ書記ニ送ルコト

一右両ミツション協議会ノ提出セル決議文ニ対シ熟議ノ上井深、渡辺、イムブリー、ノ三氏ヲ委員ニ挙ケ「南プレスビテリアン・ミツション」ニ交渉シ尙再考ヲ促スコトトシ左ノ決議案ヲ議定ス

「南プレスビテリアン・ミツション」ガ明治学院神学部ト提携シテ其協力ヲ始メシヨリ以來学院ノ方針及ヒ性質ニ於テ何等ノ変革ナシ又該ミツション、ヨリ我理事会ヘ提出セル通知書中其自派ノ神学校ヲ設立スベシト述ベタルノミニシテ他ニ其協力ヲ絶ツノ理由ヲ指示セズ又理事会及ビ「プレスビテリアン」「リフオームド」ノ両ミツション、ニ於テハ其協力ヲ絶ツノ充分ナル理由ヲ判定シ得ズ特ニ我学院ト其關係ヲ断絶スルコトハ重大ナル事件ナルガ故ニ理事会ハ「南プレスビテリアン・ミツション」ニ尙再考スベキコトヲ勸告ス

一インブリー氏ノ動議ニテ右ノ如ク「南プレスビテリアン・ミツション」ニ交渉シテモ該ミツション、ニ於テ其協力ヲ断絶スルノ前議ヲ固執スル場合ニハ、イムブリー、熊野、ミラル、ノ三氏ヲシテ委員トシ該ミツション、ニ交渉シテ其神学部ニ対シ支払フベキ分担ノ予約金ヲ絶ツノ期日ヲ定メシムルコトニ決ス

一熊野氏ノ動議ニテ「南プレスビテリアン・ミツション」愈々我学院ト提携協力ヲ絶ツニ至ラバ学院財団法人ノ条款ヲ変更スル必要生スベシ。然ル場合ニハ井深、渡辺、イムブリー、ノ三氏ヲ委員トシ之レガ改正案ヲ立テ

而シテ之ヲ次ノ理事会ニ提出セシムルコトニ決ス

一 熊野氏本年高等学部ニ於テハ尾本竜、斎藤多三郎ノ二名普通学部ニ於テハ堀洋三外六拾四名ノ卒業生アリ規定

ニ從ヒ明廿六日ノ卒業式ニ於テ証書ヲ授与スルコトヲ推薦ス可決

一 井深氏本年神学部ニ於テ本科生都留仙次別科生島森進外五名卒業スベシ各自試験ニ及第ノ上來ル六月一日ノ卒

業式ニ於テ証書ヲ授与スルコトヲ推薦ス可決

一 熊野氏高等普通両学部ニ於ケル本年度ノ入退学者ノ数ヲ左ノ如ク報告ス

高等学部 入学者 三五名

同 退学者 一六名

同 現員 三二名

普通学部 入学者 一五六名

同 退学者 四五名

現員 二五四名

一 熊野氏ハリス館ノ一部ヲ變更シ三教場ヲ設ケタリトノ報告ヲナセリ

一 井深氏神学部ニ於ケル本年度ノ生徒数ヲ左ノ如ク報告ス

本科生 二名

別科生 一三名

予科生 一六名

一神学部、高等、普通三学部ニ於ケル来年度ノ予算案提出討議ノ上左ノ如ク可決

明治四拾年度予算案

一神学部ノ分

収入

一金參千八百式拾壹円也

北米合衆国プレスビテリアン、亜米利加里ホームド教会及亜米利加南プレスビテリアン教会ヨリ寄附

支出

一金貳千六百式拾円也

総理他教員及書記兼図書掛俸給

一金貳百五拾円也

薪炭及点火費

一金貳百參拾六円也

使丁手当

一金七拾五円也

印刷及広告費

一金五拾円也

備附品

一金壹百円也

火災保険費

一金五拾円也

諸税

一金貳百四拾円也

營繕費

一金貳百円也

図書購買費

合計金參千八百貳拾壹円也

高等学部及普通学部ノ分

収入

一金四千九百円也

北米合衆国プレスビテリアン教会及亜米利加里ホームド教会ヨリ寄附

一金八千円也

合計金壹万貳千九百円也

支出

一金八千八百四拾貳円也

総理他幹事教員及書記図書掛俸給

一金八百八拾円也

薪炭及点火費

一金五百五拾貳円也

使丁手当

一金四百貳拾五円也

印刷及広告費

一金四百円也

備付品費

一金壹百五拾円也

火災保険

一金參百円也

諸税

一金八百円也

營繕費

一金貳百円

図書購買費

一金參百円也

雜費

一金五拾毫円也

借宅料

合計金壹万貳千九百円也

一イムブリー氏ノ動議ニテ右収入予算兩ミツシヨ、ノ寄附金四千九百円ヲ向ニケ年間継続センコトヲ該兩ミツシヨンヘ書記ヨリ請求スルコトニ決ス

一磯辺氏ノ動議ニテ年末ニ至リ学院ノ經濟許ス限リハ井深総理ノ俸給貳百円ヲ増加スルコトニ決ス

一ワイコッフ氏ノ動議ニテ若シ「南プレスビテリアン・ミツシヨ」愈々我神学部ニ於ケル協力ヲ絶ツニ至ラバ、インブリー、熊野、ミラル、ノ三氏ニ委托シテ「プレスビテリアン」及ヒ、「リホームド」「兩ミツシヨン・ボールド」ヘ神学部ノ經費額ヲ悉ク「兩ミツシヨ」ニテ担当寄附センコトヲ交渉セシムルコトニ決ス

一熊野氏ニ水道引用ノ件ヲ其筋ヘ照会シ其結果ヲ事務員ヘ報告スヘキコトヲ委托ス

一井深氏ノ動議ニテ明治学院憲法ニ改正スベキ必要アルヲ以テ六名ノ委員ニ附托シ之ガ調査ヲナシ案ヲ立テ次ノ理事会ヘ提出セシムルコトニ決ス右ノ委員ニハ渡辺、ミラル、イムブリー、井深、ランデス、熊野、ノ六氏ヲ挙ゲ

第八篇

一理事石原保太郎氏辞任シ稻垣信、井深、磯辺弥一郎、毛利官治ノ四氏ハ本日ヲ以テ任期満チタルヲ以テ前会ノ決議ノ精神ニ基キ三名ヲ選挙セシニ井深、磯辺、毛利、ノ三氏再選セララル

一役員ヲ左ノ如ク選挙セリ

議長

井深樞之助

書記

ローゼー・ミラル

同

熊野雄七

會計

ジョン・バラ

一事務員ヲ左ノ如ク選舉セリ

井深、イムブリー、バラ、ランデス、スカッダル、ミラル、ノ六氏當選ス但シ書記熊野氏ハ職務上會議ニ参加スベキコト

一會計検査ノコトハ事務員ニ任スルコトトセリ

一高等学部ヲ今一層進歩セシムル為メニ委員三名ヲ挙げ之ヲ熟考シ其立案ヲ立テ之ヲ議長ノ手許マデ提出セシメ議長ハ之ヲ必要ト認ムル時ハ臨時理事会ヲ開キ之ヲ討議スルコトニ決ス委員ハ松井、ランデス、熊野ノ三氏トス

一近々ワイコッフ氏休養トシテ帰省スルニ付米國滞在中学院ノ為メ寄附金募集ノ事ヲ依頼スルコト

一プレスビテリアン、リホームド、ノ両ボード、ニ書翰ヲ送りワイコッフ氏ノ寄附金募集ニ関シ十分助力及ヒ便利ヲ与ヘンコトヲ依頼スルコト

一インブリー氏ニ依頼シ再ビ蘇國プレスビテリアン教会ニ書翰ヲ送り築地拾七番地ニ在ル該教会ノ分有セル財産ヲ学院ニ讓与スベキコトヲ促スコト

一熊野、ランデス、二氏ヲ委員トシテ学院卒業生及ビ其他ヨリ寄附金ヲ募集シ及ヒ一般卒業生ヲシテ学院ニ対シ

尚一層興味ヲ起シ其利害ニ深キ注意ヲ払ハシムル方案ヲ立テ之ヲ事務員ニ提出セシムルコト  
右ノ四件満場一致ヲ以テ可決セリ

一 井深議長祈禱シテ閉会

議長 井深棍之助<sup>㊦</sup>

書記 熊野雄七<sup>㊦</sup>

#### 第四回

一 明治四拾年六月拾日午後四時神学部総理室ニ於テ臨時会ヲ開ク

一 井深、渡辺、松井、ミラル、バラ、有馬、スカッダル、イムブリー、ランデス、ノ諸理事、及ヒ書記熊野氏出席  
タムソン氏亦員外席ニ列ス

一 井深議長着席 有馬氏祈禱シテ開議

一 井深氏ヨリ前会ノ決議ニ基キ渡辺、イムブリー、及ビ予ハ我理事会ヲ代表シテ「南プレスビテリアン・ミッション」ヘ書ヲ送り其分離ノ件ニ付再考ヲ促カシタルニ先月廿九日該ミッション、ノ書記ローガン氏特ニ上京シ、イムブリー氏及予ニ面会シ該ミッション、ヨリ書翰ヲ呈セシ上口述ヲ以テ到底前議ヲ翻スコト能ハス最初決定セシガ如ク明治学院ト分離シテ別ニ自派ノ神学校ヲ設置スルコトニ決セリトノ確答ヲナセリトノ報告アリ  
「南プレスビテリアン・ミッション」ヨリ送レル書翰文ノ要旨ハ今回該ミッション、ノ伝道地ノ中央タル神戸市ニ神学校ヲ設立シテ一個ノ新ナル伝道機関ヲ起スヲ以テ分離ノ主要ナル理由トナスト云フニアリ但詳細ハ別紙書翰ノ如シ



一 イムブリー氏動議右ノ如キ事情ナレハ遺憾ナカラ止ムヲ得サル次第第二付我理事会書記ヨリ「南プレスビテリアン・ミッション、ノ書記ヘ其分離ヲ承諾セル趣ヲ報告シ且ツ別ニ此分離ニ関シ将来相互間ノ誤解ヲ避クル為メニ左ノ書翰ヲ送ルコトニセン 可決

一 書翰文ハ別紙ノ通り

一 在日本南プレスビテリアン社団ノ代表者タル、シー・エー・ローガン、アール・エー・マカルピン、ウキルリアム・シー・ブケナン、ノ參氏ハ今回同社団ニ於テ別ニ神学校ヲ設立スルノ計画アルニ付辞任ヲ申出ヅ理事会ハ審議ノ末之ヲ許答ス

一 「南プレスビテリアン・ミッション」ノ分離ヨリ生スル結果財団法人ノ條款中改正スベキ点アリ而シテ前會ニ於テ斯カル場合ニハ、渡辺、井深、イムブリー、ノ三氏ニ其改正案ヲ立テて理事会ニ提出センコトヲ依托シアリ由テ該委員ヨリ左ノ如キ改正案ヲ提出セリ

一 第五条中左ノ四種ノ四ヲ三ト改ム

一 第五条中第參号ヲ全部删除シ第四号ヲ操上ゲ第三号ト為ス

一 第七条中「及在日本南プレスビテリアン宣教師社団ノ三」ノ式拾字ヲ刪リ在日本プレスビテリアン宣教師社団ノ下ニ「及」ノ壹字ヲ加ヘ在日本アメリカ・リホームド宣教師社団ノ下ニ「ノ二」ノ式字ヲ加フ

右ノ案滿場一致ヲ以テ可決

一 フルトン博士ハ長ク我神学部ノ教授トシテ忠実ニ其職ヲ尽シタルモ「南プレスビテリアン・ミッション」ノ分離ト共ニ其職ヲ罷ムルコトトナリタルヲ以テ理事会ヨリ其謝状ヲ送ルコトニ決ス

但シ其謝状ハ井深氏担当スルコト

右議了ノ後タムソン氏祈禱シテ閉会

議長 井深梶之助<sup>㊦</sup>

書記 熊野雄七<sup>㊦</sup>

### 第五回

一 明治四拾年拾壹月貳拾七日午後參時学院總理室ニ於テ臨時理事会ヲ開ク

一 井深、渡辺、イムブリー、磯辺、バラ、ランダス、毛利、ノ理事及ヒ熊野書記列席

一 井深理事議長席ニ就ク

一 毛利理事開会ノ祈禱ヲナス

一 イムブリー理事今回新築ノ神学校寄宿舎落成ノ報告ヲナシ且ツセベレンス氏神学校寄宿舎新築ノ為メ最初ハ金八千円ヲ寄附スベキヲ約セルモ委員等ハ大倉土木組ニ命シテ其設計ヲナシメシニ八千円ニテハ到底堅牢便宜ノ工事ヲ成ス能ハサルヲ以テ尚セベレンス氏ニ種々交渉ノ結果總計金壹万參千円ヲ寄附スルコトトナシ家屋及下水等ニ至ルマデ總工事ノ費用額ハ金壹万貳千九百六拾九円六拾壹錢ト計上スルニ至レリト

一 普通学部入学者大ニ増加シ従来ノ校舎頗ル狹隘ヲ告ゲ且ツ寄宿舎ナルヘボン館モ最早經久ノ結果暫ク頽破ニ傾キツツアリ故ニ可成速ニ此等ヲ改築若クハ新築スルノ必要アリ殊ニセベレンス氏ハ我等ノ手ニテ若干金ヲ醜集セバ校舎及ヒ寄宿舎建築ノ為メ尙金約壹万八千円ヲ寄贈スベシトノ予約条件モアリ是非学院出身者及ビ直接間接ニ学院ニ縁故アル人々ヨリ約壹万円ノ資金ヲ募集スルコトニ決ス但シ学院従来ノ科程ヲ高メ神科、文科、及

ビ商科ノ三大学ヲ設置スルヲ目的トスルコト

一学院拡張ノ件ニ対シ方案ヲ立テシメンが為メニ選定セル委員ランヂス熊野二氏ノ外ニ井深氏ヲ加フルコトニ決ス

一前条ノ如ク資金募集ヲ為シ約金四万円ノ予算ヲ以テ新ニ普通学部校舍ヲ建築スルコト

一寄宿舎ヲ新築シヘボン館ヲ西方ノ低地ヘ移転改築シ又幹事宅ヲ他ヘ移シ改築スルコトニ決ス

一右資金募集ニ付キ井深、渡辺、バラ、松井、熊野、磯辺、毛利諸氏ヲ委員ニ挙グ但シ委員ニ於テ必要ト認ムルトキハ他人ニ依頼シテ尽力セシムルヲ得

一新築ノ神学部寄宿舎ノ名ヲセベレンス館ト称スルコトニ決ス

一従来ノ図書委員ハ井深、ランヂス、イムブリー、ワイコッフ、ノ四氏ナリシガワイコッフ氏ハ帰国不在イムブ

リー氏ハ辞任セシヲ以テ松永文雄、ライシャオル二氏ヲ其補欠トシテ選挙セリ

一ランヂス氏祈禱シテ閉会

## 第六回

一明治四十一年三月二十四日午後二時理事会ヲ総理室ニ開ク

一井深、ミラル、ジョン・バラ、ゼームス・バラ、ランヂス、磯辺、有馬、イムブリー、毛利ノ理事及熊野書記

出席 ライシャール氏亦員外席ニ列ス

一有馬氏開会ノ祈禱ヲナス

一書記前会ノ記録(邦文及ヒ英文)ヲ朗読ス正確ナリト認ム

一書記ヨリ事務員会ニテ取扱ヒタル事項ヲ左ノ如ク報告ス

一四十年十一月十五日午前十一時五十分総理事室ニ於テ理事事務員会ヲ開ク

一井深、ミラル、イムブリ、バラ、ランデス及熊野出席

一井深議長曰ク国漢文教員武安衛氏今般都合ニ由リ辞表ヲ提出セリ其事情已ムヲ得ザルガ如シ故ニ其希望ニ從ヒ解職シ従來勤務ノ勞ニ対シ本月分及來月分ノ俸給ヲ給与スルコトニセバ如何満場一致ヲ以テ之ヲ決ス

一四十年十一月十九日午後七時事務員会ヲ開ク

一井深、バラ、ミラル、イムブリ、ランデス及熊野出席ライシヤール氏亦出席

一武安氏後任者選定ノ事ハ井深總理ニ委任スルコト

一神学部寄宿舎新築落成ニ付捧献式ヲ來ル三十日午後三時ニ挙行スルコト

一神学生ヨリ爾來瓦斯代トシテ一灯ニ付毎月壹円ツツ徴収スルコト

一神学予科生ニシテ「ミツシヨシ」ノ補助ヲ受ケ居ル者ハ授業料ノ内毎月壹円ヲ免除スルコト

一学院將來發展擴張ノ件ヲ議スルガ為メニ來ル二十七日午後三時臨時理事会ヲ開クコト

一欧米雜誌拾壹種ヲ購買スルコト

但爾來凡テ欧米ノ雜誌ハ井深氏ノ名宛ニテ送ラシムルコト

一ライシヤール氏ヲ雜誌管理人トスルコト

右ノ諸件ヲ議定シテ十時過散會

一井深氏曰ク事務員会ノ依頼ニ依リ武安氏ノ後任者ニ文学士佐久節氏ヲ聘シ本年一月ヨリ就任セシメタリ

一ミラル氏ヨリ昨年度ノ會計検査ヲナセシニ正確ナリトノ報告ヲナセリ

一学院ノ會計年度ハ歴年度トスルコトニ決ス

一熊野普通、高等両学部ニ於ケル本年度入退学及ビ現在生徒数ノ報告ヲナスコト左ノ如シ

普通学部

学年	入学生徒数	退学生徒数	現在生徒数
老年	六一	二三	三八
中年	二六	一〇	五〇
参年	四九	一九	六五
四年	五〇	一六	八二
五年	四三	九	七七
計	二二九	七七	三一二

高等学部

学年	入学生徒数	退学生徒数	現在生徒数
老年	一三	九	四
中年	〇	七	一五
計	一三	一六	一九

一井深氏神学部ニ於ケル本年度生徒数ノ報告ヲナス左ノ如シ

本科参年

一

同 壹年

六

別科参年

四

同 貳年

四

同 壹年

三

聽講生

二

予科貳年

九

同 壹年

二

一 井深氏報告シテ曰クフルトン博士辭任セラレタルカ故ニ前会ノ決議ニ基キ謝状ヲ贈リタルニ之ニ対スル鄭重ナル返事来レリ

一 井深氏曰クオートマンス博士昨夏帰国ノ時ハ再ビ来朝従前ノ如ク教鞭ヲ取ルナラントノ希望ナリシガ其後同氏ヨリ来書アリテ家事ノ都合ニヨリ到底再ビ来リテ教鞭ヲ取ル能ハザルトノ事ヲ報セリ又之レニ付コップ氏ヘモ書ヲ送リテ交渉セシニ同氏ヨリノ懇切ナル返信ニオルトマンス氏ハ到底再任ノ見込ナキ旨ヲ言ヒ来レリ云々

一 野々村氏ニ依嘱シテ神学生ノ為メニ拾五回仏教史ノ講演ヲナサシム又荻原氏ニ聖地巡回紀行ノ講演ヲ五回程依頼セリ

一 井深氏曰ク来ル六月ニ於テ卒業スベキ神学生左ノ如シ

本科佐々木謙三 別科松岡宗太郎 杉本登貴吉 諏訪修治 平田吉五郎

右ノ者来ル六月定期試験ニ及第セハ之ニ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス 可決

一熊野報告本学年末ニ於テ普通学部五年級生徒瀬戸高彬外七拾名規定ノ試験ニ及第セリ依リテ之ニ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス(卒業生姓名ハ卒業生名簿ニ在リ)

一理事渡辺暢氏韓国ヨリ招聘サレ不日赴任スルヲ以テ辞表ヲ提出セリ

一渡辺松井有馬ノ三理事任期満チタルヲ以テ改選セシニ松井安三郎星野光多二氏当選服部綾雄西村庄太郎有馬純清鶯沢聡明ノ諸氏四点以下ノ得点アリシモ過半数ニ満たザルヲ以テ復ヒ投票セシニ服部氏五票西村氏四票ヲ得タリ依リテ服部氏ヲ挙ケ若シ服部氏ニシテ就任シ得ザル時ハ次点ノ西村氏ヲ之ニ代ラシムルコトトス

一役員ヲ選挙セシニ議長書記會計ハ凡テ重任

一井深氏曰ク歴史担任ノ教師野々村戒三氏他へ転任スベキニ付辞任シ英語教員野間真綱氏家事上ノ都合ニテ辞任セシヲ以テ其後任トシテ文学士石原謙、中川竹之助ノ両氏ヲ依頼スルコトニシ度俸給ハ石原氏二月給三十五円中川氏二月給五十円ヲ給与スルコトトセン可決

一本年度予算案ヲ提出スルコト左ノ如シ

(中略)

一熊野氏ノ俸給金壹百円ヲ増加シテ他ハ皆原案ノ如ク通過セリ

一会計検査委員ニ毛利、ミラル二氏ヲ挙ク

一前会ノ決議ニ従ヒ先キニ定メラレタル委員イムブリー、ミラル、熊野ノ三氏ヲシテ「プレスビテリアンミッシヨンボールド」ニ照会シ神学部ニ於ケル経費ハ「ダッチリフオムドミッシヨン」ト共ニ等分シテ其二分ノ一ヲ

負担スル様実行セシムルコト

一 神学部教員ニ久シク欠員ヲ生シ居リ未ダ其人ヲ得ザリシガ井深氏ヨリ大坂東教会牧師山本秀煌氏ヲ招聘スルコトヲ動議ス種々審議ノ上全会一致ヲ以テ之ヲ招聘スルコトトス而シテ神学部經費予算額稍不足ヲ告クルノ恐レアルヲ以テ其財政ノ許ス時ヲ待チテ之ヲ実行スルコトニ決ス但シ其年俸ハ金九百八拾円トス

一 井深、ランデス、熊野ノ三氏ヲ委員トシテ近キ将来ニ於テ新築スベキ普通学部校舎ノ図案ヲ可成的速カニ調製シテ之ヲ理事会へ提出セシムルコト

一 事務員ハ従前ノ通りト定ム

右議了シテ閉会時ニ午後六時過キナリ

### 第七回

明治四十一年十二月二十二日午後二時左ノ事項ヲ議センガ為メニ臨時理事会ヲ開ク

一 来ル四十二年度予算案ノ件

一 会計バラ氏辞任及改選ノ件

一 明治学院財団法人条項中改正ノ件

一 理事補欠選挙ノ件

服部、磯辺、ミロル、イムブリー、井深、ジョン・バラ、ブース、ノ諸理事及熊野書記出席ワイコッフ氏亦列席

一 井深氏議長席ニ着ク

一 服部理事祈祷シテ開議



一 明治学院財団法人行為ノ第七条中ニ団体ノ三字ヲ社員ノ二字ニ改ムルコトニ決ス

一 前ノ例会ニ於テ服部綾雄、西村庄太郎二氏理事ニ新選セラレ服部氏ハ之ヲ受諾セシモ西村氏ハ不得已事情ニヨリ辞退サレシヨ以テ其補員トシテ一人ヲ選挙スルコトトシテ投票セシニ其結果鵜沢聡明氏四票、齋藤十一郎二票ノ得点アリ是ニ於テ服部氏ノ動議ニテ鵜沢氏ニ其承諾ヲ求メ若シ同氏ニシテ承諾シ得ザル事情アルトキハ齋藤氏ヲ補員トスルコトニ決ス

一 明治四十二年度神学部高等学部及普通学部ニ於ケル予算案審議ノ上左ノ如ク決シ両ミツシオンハイムブリー、ミロル、井深ノ三氏ヲシテ尚二年間左ノ予算案ノ如ク寄附金額継続ノ請求ヲナサシムルコトトス

明治四十二年度予算案

一 神学部ノ分

収入

一金五千九百六拾円也

内訳

北米合衆国プレスビテリアン教会及ヒ亜米利加リフゾームド教会ヨリ寄附

支出

一金五千九百六拾円

内訳

一金四千百六拾円

総理他教員及図書館助手書記俸給

第八篇

一金參百円

使丁手当

一金百五拾円

広告費及印刷費

一金貳百円

薪炭及点火費

一金百円

火災保険料

一金百円

備付費

一金參百円

書籍購入費

一金百五拾円

諸税

一金參百円

管繕費

一金百円

道路費

一金百円

雜費

高等学部及普通学部ノ分

収入

一金壹万四千九百円也

内訳

一金四千四百円也

一金壹万五百円也

北米合衆国プレスビテリアン教会及亜米利加里フョームド教会ヨリ寄附  
授業料及雜収入

支出

一金壹万四千九百円也

内訳

一金壹万七拾五円也

總理幹事他教員其ノ他ノ俸給

一金五百八拾円也

使丁手当

一金壹千百円也

薪炭及点火費

一金四百円也

印刷及広告費

一金四百円也

備付品

一金參百八拾円也

諸税

一金八百八拾円也

營繕費及道路費

一金貳百円也

図書購買費

一金貳百円也

標本及器械購買費

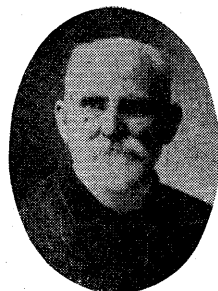
一金百八拾円也

火災保険料

一金五百五円也

雜費

一ジョン・バラ氏不得已事情ニヨリ会計ノ任ヲ辞ス仍テ其後任者トシテワイコッフ及ビ熊野ノ二氏ヲ選舉ス  
議事畢リタルヲ以テブ羅斯氏祈祷シテ閉会



ジョン・バラ

明治四十二年三月廿四日午後二時半理事例会ヲ開ク井深、ミロル、磯辺、イム  
ブリー、ゼー・シー・バラ、ランヂス、松井ノ諸理事及ワイコッフ、熊野、ラ  
イシャルノ諸氏列席  
井深氏議長席ニ着ク

一ジョン・バラ氏開会ノ祈祷ヲナス

一書記前会ノ記録邦文英文ヲ朗読セシニ正確ナリト認ム

一會計検査委員ミロル氏報告シテ曰ク會計ノ帖簿ヲ検査セシニ正確ナルコトヲ認ム

一前年度ノ會計バラ氏ヨリ普通高等両学部ノ會計決算報告ヲナス

一同氏神学部ノ會計決算報告ヲナス

一井深氏ヨリ左ノ件々ヲ報告ス

一前ノ臨時会ニ於テ決議セル財団法人明治学院寄附行為中改正ノ件ヲ出願セシニ文部大臣小松原英太郎氏ヨリ本年二月五日附ヲ以テ願ノ趣認可ストノ指令アリタリ

一前会ノ決議ニ基キ山本秀煌氏ヲ神学部教授ニ招聘セシニ快諾スルコトトナリ仍テ其俸給ノコトニ関シテリーホームドミッション書記コップ氏ニ交渉セシニ其承諾ヲ得タリ山本氏ハ既ニ本年一月ヨリ来任授業ヲ始メタリ故ニ不取敢自分ヨリコップ氏ヘ謝状ヲ送リタリ尚山本氏ノ就職式ハ来ル六月一日ヲ以テ執行スルコトト教授会ニ於テ決議ス

一 築地十七番ノ建物及地所讓渡ノ手續ハ既ニ完了セルモ稅務署ヨリ通知ヲ待テ其登記ヲナス筈ナリ

一 井深氏前ノ臨時会ニ於テ決セルプレスビテリアン及リフオムドミツションヘイムブリー、ミロル及予ノ三名予算案ノ通り寄附金繼續センコトヲ請求シ遣セリ

一 前学期中高等普通兩学部ノ英語教員文學士皆川正禧氏都合ニヨリ辭任セシニ付其後任者ニハ文學士広田道太郎氏ヲ採用セリ又國漢文教員森脇俊作氏ヲ採用セリ又大橋留治氏ハ本学年限り辭任セリ仍テ其後任者選定ノコトヲ予ニ委托セラレンコトヲ望ムト理事会ハ右ノ諸件ヲ凡テ承認セリ

一 井深氏神学部現在生徒ノ員數ヲ報告ス且ツ曰ク別科生三年生青木留造幡川万吉宮田熊治三名來ル六月ノ定期試験ニ及第セバ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス

一 神学部本科生

二年

六名

一年

七名

一 同別科

三年

三名

二年

三名

一年

四名

一 同聽講生

二名

一 熊野氏普通、高等兩学部入退學及現在生徒ノ員數ヲ報告ス

一 普通学部

学年	入学生徒数	退学生徒数	現在生徒数
壹年	八三	二〇	六三
貳年	一五	九	四一
参年	三三	二八	六五
四年	三八	二四	八八
五年	三	四	六七
計	一七二	八五	三二四

一 高等学部

学年	入学生徒数	退学生徒数	現在生徒数
壹年	一六	六	一〇
貳年	一	〇	四
参年	〇	七	八
計	一七	一三	二二

右之外貳年級ニ聴講生壹名アリ

一 本年三月普通学部ニ於テ五年級生徒石塚喜智二郎外五十八名規定ノ試験ニ及第セリ仍テ之ニ卒業証書ヲ授与セ  
ンコトヲ推薦ス

一 本年三月高等学部生徒中原剛三中村獅雄村上二郎大村安記鈴木達雄日達儀平明翫慈恭別科生張惠淳ハ規定ノ試験ニ及第セリ仍テ之ニ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス

一新講堂過般ノ地震ニテ損害ヲ蒙リタル所アリランデス氏其修繕方法ニ付意見ヲ述ブ

一 右修繕方法ヲ講スル為メニランデス、バラ二氏ヲ委員トスルコトニ決ス而シテ其設計及予算ハ之ヲ事務員ニ報告スルコトトス

一 理事例会ハ爾來五月及ビ十一月ノ二回ニ開クコトト決ス

但シ本年五月ハ開クコトヲ要セズ

一 井深、磯辺、毛利ノ三理事任期満チタルヲ以テ改選セシニ皆重任スルコトトナレリ

一 理事長改選井深氏當選

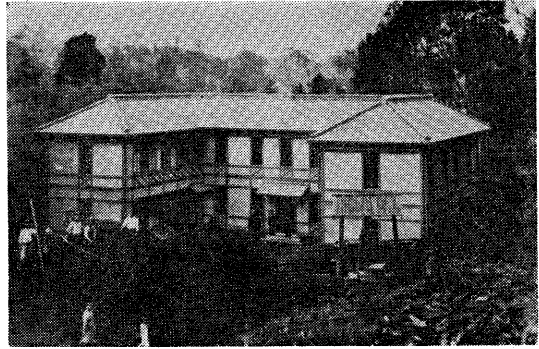
一 卒業式ハ來ル二十七日午後二時ニ執行スルコトトセリ

一 書記記録ヲ朗読ス正確ナリト認ム

一 松井氏祈祷シテ閉会

明治四十二年一月二十二日午後三時三十分事務員会ヲ開ク井深、イムブリー、ミロル、ワイコッフ、ランデス、熊野ノ諸氏出席

一 イムブリー氏ヨリ過般來学院拡張資金予約ノ件ニ関シセベレンス氏ト通信往復ノ結果最初同氏が条件ヲ附シタル通り日本人ノ手ヨリ相当ノ寄附金額ヲ得ルニアラザレバ其予約ヲ遂行セザルベシトノ意明カナリ故ニ特ニ



セベレンス館

井深総理ニ時間ノ許ス限り寄附金募集ニ尽力センコトヲ依頼シ而シテ之レガ為メニ要スル費用ハ隨時支給スルコトトセントノ動議ヲ提出セリニ全会一致ヲ以テ之ヲ可決セリ

一井深氏ヨリ久シク懸案トナリ居リシ築地十七番ノ家屋及地所所有權ヲ「プレスビテリアン」、「ダッチリホームド」及「スコットランドプレスビテリアン」ノ三「ミッション」ヨリ譲リ渡シニ関スルノ手續凡テ完了セリトノ報告ヲナセリ

右議了シテ閉会

明治四十二年七月十二日午前十時理事事務員会ヲ開ク井深、ミラル、イムブリー、ランデス、熊野ノ諸氏出席

一講堂地震損害ニ関シテ如何ニ修繕スベキカトノ問題ニ付ランデス氏ニ委任シ設計予算ヲ立テ十月ノ好時候ヲトシ修繕ニ着手スルコトトス

一ミラル氏米国ダッチ・リフォームド・ミッション書記コップ氏ヨリ來信ヲ報告シテ曰クオートマン氏ハ若シ理事會ニ於テ再ビ來朝復職スルコトヲ希望セバ來年來朝スベシト事務員會ハ之ヲ喜ビテ可成早く其來朝再ビ其任ニ復センコトヲ希望シテ書記ヨリ返答スルコトト決ス



明治四十二年十二月三日午後二時三十分事務員会ヲ開ク

出席者井深、イムブリー、ミラル、ワイコッフ、熊野、ランヂスノ諸氏ナリ

ミラル氏祈禱シテ開議

一今夏両学部ニ於ケル修繕費予算ニ超過シ会計ニ不足ヲ生ジタルヲ以テ予テ銀行ニ預ケタル築地十七番ヨリ収入ノ借家料ノ内金參百円ヲ引出シ其不足額ヲ充補スルコトト決ス

一ワイコッフ氏動議 神学部ニ於テ来ル六月卒業スベキ本科生中山昌樹外五名別科生上村知清外二名若シ学年試験ニ及第セバ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス可決

一井深氏昨年八月全国ノ基督教主義諸学校ノ代表者青年会館ニ会同シ基督教教育同盟会ナルモノ組織セラレタリ仍テ我学院モ之ニ加盟センコトヲ動議ス可決

一來ル四月六日京都ニ於テ開催ノ基督教教育同盟会ニ井深、熊野、ワイコッフ及ランヂス諸氏ノ内都合ニ由リ兩人出席スベキコトヲ可決ス

一井深氏曰ク予ハ理事会ノ許可ヲ得テ来ル五月初旬蘇国エデンボローニ開カルベキ宣教師大会ニ臨席スベク就テハ予ノ不在中熊野氏ヲ総理代理トセンコトヲ推薦ス可決

一神学部ニハ井深氏不在中イムブリー氏ヲ部長トシ高等学部ニハワイコッフ氏ヲ部長トスルコトヲ決ス

一普通学部教員会議ノ提出ニ係ル普通学部一年生ノ授業料ヲ来ル四月ヨリ毎月金壹円五拾錢ニ減スルコトヲ可決ス

一明治学院全部ノ規則書ヲ英文ニ訳スルコトヲ可決ス仍テ委員ニワイコッフ、インブリー、熊野ノ三氏ヲ挙ゲ

一井深氏曰ク予今般蘇国宣教師大会ニ臨席スベキニ付テハ其序ニ米國ヲ經過シ学院ノタメ尽力スルコトヲ得バ好

都合ナリト思フ仍テ理事会ハ之ヲ承認セラレンコトヲ望ムト理事会ハ此希望ヲ容レ臨機ノ所為ニ一任スルコトヲ決ス

一ワイコッフ会計ヨリ昨年度ノ会計決算報告ヲナス之ヲ是認ス

一会計検査員ミラル氏曰ク会計諸帖簿ヲ検査セシニ皆正確ナリト認ムト

一熊野氏高等学部講座ノ基本金トシテ募集セル金額元利合セテ金一千二百六拾円八拾毫錢ヲ三井銀行ニ預ケアリ

トノ報告ヲナセリ

服部氏祈祷シテ閉会

午後五時過散会

### 第九回

明治四十二年十二月十日午後二時三十分総理室ニ於テ理事例会ヲ開ク井深、インブリー、ミラル、ブース、ゼムス・バラ、ジョン・バラ、ランデス、磯辺ノ諸理事及ビ熊野、ワイコッフノ書記会計出席ス

一ブース氏祈祷シテ開議

一書記去七月以來今日マデ事務員ノ取扱ヒタル記録ヲ朗読ス之ヲ正確ナリト認ム

一井深氏オートマンス氏ヨリノ来信ヲ朗読シ同氏来学年ニハ来朝シ神学教授ノ職ニ復スベキコトヲ明カニセリ

一井深氏プレスビテリアン外国伝道局書記スピヤ氏ヨリノ来信ヲ朗読シ来夏蘇国エデンボローニ於テ宣教師大会

ヘ出席ノ必要ヲ懇懇シ来リ且委員フルトン氏ヨリモ同様ノコトヲ申来リ其往復旅費ヲ先方ニテ支弁スベキコトヲ申添ヘアリトノ事ヲ述フ之ニ対シ理事会ハ事務員ノ決議ノ如ク井深氏ノ意ニ随ヒテ之ヲ決行スルコトヲ可ト

ス

一 ランデス氏講堂震害ノ修繕費用ハ約金九拾円ノ予算ナリ然レドモ工事ノ都合ニ由リ多少ノ増減アルベシト報告ス

一 来年度予算案ヲ会計ワイコッフ氏ヨリ提出セリ

(中略)

右ニ対シ討議ノ末博物科講師大島広氏ノ俸給額ヲ金六拾円増加シ習字科ノ教員岡見正氏ノ俸給額ヲ金參拾六円増加スルコトシ其他ハ原案ノ通り可決ス

一 会計検査委員ニミラル、山本秀焯二氏ヲ選舉ス

一 井深氏曰ク米国カナデー氏巨万ノ金額ヲ伝道会社及ビ諸種ノ学校ニ寄贈セリトノ事インデペンテント雜誌ニ掲載シアリ之ニ対シ委員ヲ立テ伝道会社ニ書状ヲ送り其寄附金中ヨリ我学院ニ分与センコトヲ依頼スルコトニセバ如何理事會ハ之ヲ審議シ井深、インブリー二氏ヲ挙ゲテ之レガ委員トセリ

右之諸項議了シ五時散會

明治四十二年七月一日午後七時三十分総理事室ニ於テ事務員會ヲ開ク井深、ミラル、ワイコッフ、イムブリー、ランデス、熊野ノ諸氏出席

ミラル氏祈禱シテ開會

一 普通学部教場ヘボン館及ハリス館其他ノ修繕ヲ要スルカ故ニ之ニ関スル設計及予算ヲ立ツル為メニ委員三名ヲ

選定スルコトトシテ議長ヨリランヂス、ワイコッフ及熊野ヲ指名ス但シ其設計予算ハ可成の速カニ之ヲ事務員会ニ提出スルコト

一 画教員田崎氏ヲ都合ニヨリ今学期限り解傭シ谷齊一氏ヲ後任者ニ依頼スルコト

但シ田崎氏ヘハ八、九両月ノ俸給ヲ贈与スルコト

一 神学部ノ修繕ニ関シテハインブリー氏ヲ委員トシテ之ガ設計及予算ヲ立テシムルコト

一 爾來營繕ノ事ニ関シテランヂス及熊野二氏ヲ常置委員トシ且ツ大工佐藤ハ右二氏ノ監督ノ下ニ使用スルコト

一 数学ノ教員大橋留治氏四月辭職セシヨ以テ其後任者ニ石沢氏ヲ国漢文ノ教員、新井、森脇二氏辭任セシヨ以テ其後任者ニハ文学士野村宗朔氏朱牟田轍氏ニ委嘱セリ

散会

明治四十二年七月五日午後七時三十分事務員会ヲ開ク

出席者井深、イムブリー、ランヂス、ワイコッフ、バラ、熊野ノ諸氏

一 井深氏曰ク予ニ來ル四十二年六月蘇国エデンポローニ於テ開会セラルベキ万国宣教師大会ニ出席スベキ様当局者ヨリ懇懇シ來レリトテ同氏ヨリ事務員ノ意見ヲ諮ヒ之カ決答ヲナサント欲スト仍テ事務員会ハ討議ノ上其諾否ハ井深氏ノ所決ニ一任スルコトトセリ

一 ジョン・バラ氏ヨリ故ミッセス、ゼームス・バラノ遺産一千円ヲ神学研究ノ奨学金トシテ寄贈セリトノ報告アリ仍テ書記ミラル氏ヲシテ謝状ヲ送ラシムルコトトセリ

一熊野氏報告シテ曰ク普通学部卒業生邦人ヨリ金五拾円同韓人參名ヨリ金百円ヲ寄贈セリ仍テ不取敢謝状ヲ贈レ  
リト時既二十時ヲ告ゲタルヲ以テ來ル八日午後二時三十分再会ヲ期シテ散会

明治四十二年七月八日午後三時於總理室事務員会ヲ開ク井深、ミラル、イムブリー、ランヂス、バラ及熊野ノ諸  
氏出席ス

一井深氏曰ク築地十七番ノ地所ノ登記手續全ク畢レリ其費用金八拾七円ヲ要セリト

一修繕委員ランヂス氏調査ノ結果ヲ報告シテ曰クサンダム館ノ修繕費ハ約金四百円ヘボン館ノ修繕費約金百円講  
堂地下室ヲ実用ニセントアメニハ其費用約金百七十五円普通学部教場ヨリ講堂ニ至ル通路ヲ造ルニ約金二百二十  
五円ヲ要スベク即チ其總計約九百円トナル右委員ノ報告ヲ受ケ其他必要ノ事ハ凡テ委員ニ委任スルコト

一新講堂地震ノ損害修繕ニ関シ來ル十二日午前十時再ビ事務員会ヲ開クコト

一神学部ノ修繕ニ関シハイムブリー氏ニ委任スルコト

一築地十七番ノ借家料ハ本年一月ヨリ九月マテ月々八十円ノ処モール氏ノ事情ヲ酌量シテ六十円トシテ請求スル  
コトト定ム但シ其間ニ他ニ転貸シ其借家料トシテ收入シアルモノハ凡テ明治学院ヘ交附スルコトトス  
一來ル十日午後二時三十分理事例会ヲ開クコトトス

## 第十回

明治四十三年三月七日午後二時臨時理事会ヲ開ク井深、ミロール、ブリス、ジョン・バラ、毛利、ゼームス・バ

ラ、服部、イムブリ、及ワイコッフ、松井、熊野ノ書記出席

毛利氏祈禱シテ開会

一書記前会ノ記録ヲ朗読ス正確ト認ム

一ワイコッフ氏動議 普通学部五年生約六拾有余名本月末卒業スベキモノアリ若シ定期試験ニ及第セバ之ニ卒業証書ヲ授与センコトヲ推薦ス可決

### 第十一回

明治四拾三年十一月二十五日午後一時三十分定期理事会ヲ開ク

井深氏、毛利、服部、ミロル、インブリ、ランデス、ジョン・バラ、ブリス、磯辺ノ諸理事及ピワイコッフ会

計熊野書記出席ライシャル氏亦列席

井深氏議長席ニ着ク

一バラ氏祈禱シテ開会

一書記前会ノ記録ヲ朗読ス之ヲ正確ト認ム

一事務員会ノ記録ヲ朗読ス理事会ハ之ヲ是認ス

一熊野氏普通、高等両学部ノ入退学及ヒ現在ノ生徒数ヲ報告ス

普通学部

入学

退学

現在

第八篇

老年

五〇

七

四四（前年度ノ落第生一人ヲ含ム）

参年	六名			
同别科生				
参年	四名			
参年	四名			
参年	四名			
高等学部				
参年	九	三	六	
参年	一	〇	一	
参年	〇	五	三	
計	一〇	八	二〇	
五年転学				
四年	四二	一九	九〇	
参年	二三	一三	六一	
参年	八	一四	二四	
計	一二六	五九	二九一	

一井深氏ヨリ神学部ノ現況ヲ報告ス

神学部ノ本科生

第 八 篇

	同聴講生	壹名
	老年	貳名
	同聴講生	壹名
	神学部予科生	七名
	貳年	四名
	老年	四名
	一井深熊野両氏ヨリ学院拡張費募集ノ状 況ヲ報告ス	
	一ワイコッフ会計ヨリ来年度ニ於ケル神 学高等及普通学部収支予算ヲ提出ス	
	神学部予算	
	収入	
	一金五千九百六拾円也	
	米国両伝道会社ヨリ寄附	
	支出	
	金四千四百円也	
	金百五拾円也	
	総理他教職員俸給	
	印刷及広告費	



明治42年神学部卒業生と在學生

後列左より小口季隆、郷司隴爾、加藤一夫、八田舟三、西条弥一郎、村田四郎、  
瀬川四郎、久村頼藏、渡辺善太、渡辺勇助、第2列左より一人おいて大井上武、  
栗原荒野、馬場久成、高田銀造、内藤、篠原愛三、中山昌樹、大坪正道、藤本保  
己、仁田一三、大川茂、第3列左より宮田熊吉、秦教授、有馬教授、井深総理、  
インブリー教授、山本教授、杉本登貴吉、青木留藏、高崎能樹、前列左より高山  
豊三、松尾造酒藏、山本喜藏、高尾益太郎、辻庸雄、英義雄、山本岩吉



金貳百円也

金百円也

金百円也

金參百円也

金百五拾円也

金參百円也

金百六拾円也

金百円也

合計金五千九百六拾円也

高等普通両学部予算

収入

一金九千円也

一金四千四百円也

一金壹千四百七拾四円也

支出

金壹万九百拾四円也

点火及薪炭費

備品購入費

火災保険料

図書購入費

諸税

營繕費

諸雜費

道路修繕費

授業料

米国兩伝道会社ヨリ寄附

特別雜収入

總理他教職員俸給



明治末期の神学生とセベレンス館

第 八 篇

金壹千円也

点火及薪炭費

金四百円也

印刷及広告費

金貳百円

諸税

金八百円

營繕費

金貳百円也

図書購入費

金四百円也

備品購入費

金貳百円

器械藥品購入費

金八拾円也

道路修繕費

金百八拾円也

火災保険料

金五百円也

雜費

合計金壹万四千八百七拾四円也

一 井深氏曰ク数学教員石沢藤吉氏辞任セシニ付其後任ニハ理学士野村茂氏ヲ聘シ物理学及数学教員川島洸氏亦辞任セシニ付其後任ニハ佐藤正叟氏ヲ聘シ佐藤氏ハ去ル四月ヨリ野村氏ハ五月ヨリ就任セリ而シテ都合上佐藤氏ヲシテ物理学及ピ算術ヲ負担セシメ野村氏ヲシテ数学ヲ担任セシムルコトトセリ又予欧州行不在中去ル五月神学教授秦庄吉氏不得已事情アリトノ理由ニテ辞任セシニ付事務員会決議ノ通り取扱ヘリ又同講師宮川己作氏大連教会へ赴任セザルベカラザルヲ以テ辞任セリ

一都留仙次氏ヲ神学部助教ニ聘シ年俸金七百貳拾円ヲ給与スルコト但シ就任期ハ其都合ニヨルコト可決

一神学部予算ハ原案ヲ可決ス但シ井深総理ノ年俸ヲ来年三月ヨリ金百円増スコト

一ワイコッフ氏動議 普通学部ノ予算ハ支出額収入額ヨリ超過シ經費不足ヲ告クルヲ以テ米國兩伝道会社ニ金六百円ノ増加ヲ請求スルコト可決

但書記ミロル氏ヨリ請求書ヲ送ルコト

一ワイコッフ氏動議本年度經常費ノ欠損ハ築地十七番ノ賃借料ノ内ヨリ之ヲ補フコト可決

一ミロル氏動議諸官省及ビ諸学校教員俸給ニ割若クハ二割五分ノ増額アリ本学院ニ於テモ多少斟酌スベキ必要モアラン由テ委員ヲ設ケ之ヲ調査シ然ル後普通学部ノ予算ヲ立テシムルコト可決

右委員ニワイコッフ、熊野、服部ノ三氏ヲ選定ス

一井深氏動議過刻報告アリシガ如ク拡張費ニ対シ予定ノ寄附予約ヲ得タレバ速カニ校舍新築ニ関シ特ニ委員ヲ設ケルコト可決

右委員ニハ服部、ワイコッフ、イムブリー、井深、松井、熊野ノ六名ヲ選定ス

右議了シテ毛利氏祈祷シテ閉会

明治四拾三年五月二十五日午後二時三十分理事事務員会ヲ開ク

イムブリー、バラ、ランデス、ワイコッフ、熊野出席

熊野総理代理議長席ニ着ク

一 神学部教授秦庄吉氏不得已事情有之本学年限り辭職シ度トテ辭表ヲ提出セリ

事務員ハ之ヲ許容シ而シテ氏多年ノ勤勞ニ對シ慰勞トシテ金百四拾円ヲ贈ルコトヲ決議ス

一 学院拡張費募集ノタメ來ル六月初旬熊野宮地ニ氏ヲ大阪神戸ヘ派遣スルコトトス四時散會

明治四拾四年一月十九日臨時理事會開催



A. K. ライシヤワー

井深、毛利、ゼームス・バラ、イムブリー、ジョン・バラ、ランデスノ諸理事

及ライシャル、ワイコッフ、熊野ノ諸氏出席

ライシャル氏開會ノ祈禱ヲ捧ク

一 井深氏議長席ニ着ク

一 前理事會ニ於テ選定シタル委員ノ提出案ニ基キ教員數ヲ減シ其受持タル科ハ

現任教員ニ分担セシメ且其教員ノ俸給ヲ左ノ如ク増額スルコト可決

河西銀之助、宮地謙吉、佐久節、佐藤正叟、野村茂、熊野雄七、斎藤勝次郎、朱牟田轍、大内太一郎、富尾留雄、広田道太郎（明細ハ略ス）

一 井深氏曰ク此委員ノ提出案ヲ可決シタル上ハ從來化学地文等ノ学科ヲ担任セル理学士足立震太郎氏東洋史地理ノ教員文学士若山善郎及国語漢文之教員文学士野村宗朔氏ニ旨ヲ諭シ辭任セシメ而シテ足立氏ハ在職十二年忠実ニ勤務セルヲ以テ三ヶ月分ノ俸給額金九十円ヲ贈与シ若山氏ニハ二ヶ月分ノ俸給額金九拾円野村氏ニハ二ヶ月分ノ俸給額八拾円ヲ贈与スルコトニシタシト可決

一 大工ノ給金ヲ三円増加スルコト

一 井深氏都留氏ヨリノ返翰ヲ読ミ前会ノ理事会ニテ決議セル同氏招聘ノ事ヲ承諾セル旨ヲ告ク

一 委員ヨリ提出セル校舎新築ノ図案ニ付ランデス氏説明ス

一 建築委員ノ提出セル二案ヲ参考シ各員実地ヲ見分シ遂ニランデス氏トハリス館トノ間ニ新校舎ヲ建築スルコト

ニ 決ス

一 新築図案ニ関シ文部省建築課長久留氏ノ意見ヲ求ムルコト可決

一 井深、ランデス、バラノ三氏ヲ委員トシ校舎新築図案ヲ精細ニ製シ之ヲ請負人ニ示シ工費予算額ヲ定メ入札セ

シメ然ル後其結果ヲ理事会ニ報告シ理事会ニ於テ之ヲ審議決定スルコトト定ム

右議了シテ閉会

明治四拾四年二月二日午後二時半事務員会ヲ開ク井深、イムブリー、バラ、ランデス書記熊野氏会合

一 故ワイコッフ氏ノ担任セシ科目中和文英訳ノ七時限及聖書ノ科ヲホフサンマー氏他ノ科目ハ外国人ヘ依頼スル

コト可決

一 故ワイコッフ氏ノ後任トシテバラ氏ヲ当分会計トスルコト可決

明治四拾四年三月八日午後二時半左ノ事項ニ付臨時理事会ヲ開ク

一 校舎新築ノ件

一 故ワイコッフ氏後任ノ件

一 ダッチリホームドミッシェンヨリ交渉ノ件

一 卒業証書授与ノ件

井深、ミロル、ブース、ジョン・バラ、ランヂス、ゼームス・バラ、イムブリーノ諸理事熊野書記列席ライシヤ  
ワル。オートマンス二氏亦員外席ニ列ス

井深氏議長席ニ着ク

ブース氏開会ノ祈祷ヲ捧ゲ

一 普通学部五年生高等学部三年中規定ノ試験ニ合格及第スル者ニハ来ル三月廿五日開催ノ卒業証書授与式ノ時証  
書ヲ授与スルコト

一 神学部本科三年生及別科三年生ニモ前項同様ノ条件ヲ以テ学年末ニ於テ卒業証書ヲ授与スルコト

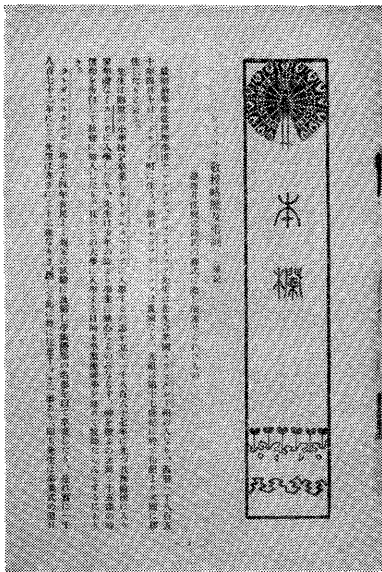
一 故ワイコッフ氏遠逝ニ付キダッチリホームドミッシェン及ワイコッフ夫人ニ懇篤ナル吊詞ヲ贈ルコト

右ニ付キ井深、イムブリー、ミラルノ三氏ヲ委員トシ吊詞ヲ認メ且ツ之ヲ贈ラシムルコト

一 書記ミラル氏リーホームドミッシェンヨリ理事会ヘ送レル二ノ書翰ヲ朗読ス

(一)ハ同ミッシェンノ宣教師住宅ヲ学院構内ニ建築ノ許可ヲ請求シ(二)ハ故ワイコッフ氏ノ後任者トシテライク氏  
ヲ推薦セルナリ

一 右書翰ニ対シ審議ノ末ライク氏ニ関スル推薦ヲ欣諾スルコトトシ而シテ住宅建築ノ件ハ尚熟考審議シテ次回ノ  
理事会ニ於テ諾否ヲ決スルコトトセリ



表紙絵は和田英作筆

一 ライク氏教授トシテ来任ニ付テハ其担任ノ学科目  
 ニ関シランデス、ライシヤワル、ホフサンマー、  
 ライク、井深ノ五氏ヲ委員トシ熟議ノ上正当ノ配  
 賦ヲナサシムルコト

一 校舍新築委員ヨリ報告アリ曰ク委員等ハ大体ノ図  
 案設計ヲナシ六名ノ建築請負者ニ示シ去ル六日ヲ  
 期シ入札セシメタリ而シテ委員ハ六名ノ提出セル  
 仕様帖及ビ工事費目ヲ調査協議ノ末六名中大倉組  
 竹田源次郎浜田安之丞三名ノ分ヲ取り之ヲ理事会  
 ニ提出シ其裁決ニ附スト

一 審議ノ末竹田源次郎ニ請負ハシムルコトトシ委員  
 ヲシテ尚仕様帖ニ就キ精細ノ交渉調査ヲナシ満足  
 ノ結果ヲ得タル上工事請負ノ契約ヲ結バシムルコ  
 トトス

一 建築委員ニブース、熊野二氏ヲ加フルコト  
 一 建築委員ハ必要ニ応ジ臨時理事会ヲ召集スルコト  
 右議了シテ閉会

明治四拾四年三月三十日午後二時臨時理事会ヲ開ク井深、ブース、ミラル、イムブリー、ランデス、磯辺ノ諸理事熊野書記列席

井深氏議長席ニ着ク

一書記和英文ノ記録ヲ朗読ス正確ト認ム

一井深氏報告シテ曰ク前会ノ決議ニ從ヒ外国教師間ニ担任スベキ学科目ニ関シ委員協議ノ上円滑ニ配賦スルコトナレリト

一建築委員ヨリ先ニ提出セル凶案ニ多少ノ變更ヲナセリトテ其變更ノ部分ヲ指示ス衆之ヲ可トス

一ランデス氏自己ノ意見先キノ理事会ノ決議ト相容レザル所アルヲ以テ建築委員タルコトヲ免セラレントノ辞表ヲ提出シタレドモ審議ノ末ランデス氏ニ再考ヲ促シ此辞任ヲ取消シ尙委員タルコトヲ繼續スベキコトヲ勸告セシニ終ニ承諾スルコトナレリ

一新校舍建築ヲ竹田ニ請負ハシメタルハ他ノ請負入札者ニ対シ不正等ノ猜疑ヲ懷キタル故ニアラザルコトヲ決議ス  
一「リホームドミッション」ヨリ交渉シ来レル構内住宅建築請求ノ件ニ対シ審議ノ末構内東北ノ一角地ニ一家ヲ建ツルコトヲ許可スルコト

但シ幹事住宅ヲ同角地ニ移スノ必要アルヲ以テ建築委員ハ幹事及ビ該「ミッション」ニ交渉シ其位置ヲ定ムルコト

一将来学院拡張若クハ其他ノ事情ニヨリ必要ノ場合アル時ハ凡テ宣教師住宅ニ対シ適當ノ予告ヲナシ他へ移転セシムベキコト



一 凡テ宣教師ノ住宅ハ学院財団法人中ニ含入シ法律上学院ノ所有ナルモ其実「ミッシェン」ノ所有ナルガ故ニ後來ノ誤解紛議等ヲ予防スルガタメニ井深、イムブリー二氏ヲ委員トシ詳細明斷ナル文書ヲ造ラシムルコト

一 道路ノコトハ建築委員ニ一任スルコト

一 普通学部ニ於テ国漢文特ニ作文教員ヲ聘スルコト

但シ月俸ハ約拾五円内外トス且ツ可成基督信者ヲ採用スルコト

右議了シテ閉会

明治四十四年五月十一日午後二時三十分臨時理事会ヲ開クブリス、ジョン・バラ、ランデス、井深、イムブリーノ諸理事及ビ書記熊野列席

井深氏議長席ニ着ク

バラ氏祈祷シテ開会

一 校舍新築ニ付キ左ノ如ク諸費目ノ大要ヲ決ス

一、金參万三千七百五十円也 校舎教場、雨中体操場便所使丁室一切

一、金壹千五百円也 室内瓦斯暖房費

一、金貳千三百円也 各室備付品博物標本理化用器械及藥品陳列棚等

一、金壹千円也 道路改造費

一、金貳千貳百円也 幹事住宅新築費 但シ内五十円ハ垣根其他道路費



一 小使東瀨（拾円）鈴木（三円）前田（五円）ノ三人ニ手当トシテ拾八円ヲ与ヘタリ

一 大工佐藤ニ金貳拾円他二人ニ各金拾円ヲ与ヘタリ

一金貳拾五円ヲ消防義会ニ寄贈セリ

一 電気灯変圧器ノ場所ヲ電気局ヨリ借用申込メリ仍テ門ノ西方ニ老坪ヲ使用セシムルコトトス

一 電気灯ヲ使用スルコトニ付テライク及ヒ熊野ヲ委員トシテ調査セシムルコト

一 火災保険会社日本明治ヨリ金貳万円ヲ受領シ内金壹万五千元ヲ三井銀行ヘ金五千元ヲ第三銀行ヘ預ク

一 消火器ポンプ約金参百円斗ノモノヲ買入レ置クコトトス

一 至急食堂及ヒ賭所建築ノ必要アリ故ニ井深、熊野、ランデスノ三氏ヲ委員トシテ寄宿舎又ハ小使室等ノ大体設

計ヲナサシメ来ル十月六日ノ臨時理事会ニ提出セシムルコト

右議了シテ散会

明治四十四年十月六日午後二時三十分火災ニ付善後策ヲ講ズルガ為メ臨時理事会ヲ開ク

井深、ミラル、ブース、ゼームス・バラ、ランデス、イムブリー、熊野書記及ライク出席

ブース氏祈禱シテ開会

一去ル四十二年十一月二十五日以来開催ノ前会記録ヲ朗読ス之ヲ正確ト認ム

一 井深氏ヨリ新築校舎竣工セルハ約束ノ期限ヨリ二ヶ月前ニ在リ而シテ頗ル完全ニ出来上レリトノ報ヲナセリ

ランデス氏亦加言ス



館ボンへした帰に灰燼

一右新校舎竣工ニ付竹田方ヨリ証状ヲ附与センコトヲ請求シタルニヨリ井深氏ニ其証状ノコトヲ一任スルコト  
一来ル十一月三日天長節ノ佳節ヲ期シ新校舎開館式ヲ執行シ其後之ヲ教場ニ使用スルコト  
右開館式ニ関シ井深、ライシヤール、イムブリー、熊野、ミラルノ五氏ヲ委員トシテ準備セシムルコト但シ撮  
影ノコトヲ含ム之ニ対スル費用ハ委員ニ任ズルコト  
一井深氏出火ノ状況ヲ詳カニ報告ス

一熊野氏ノ事務余リ多端ニ付之ヲ輕ムル必要アリ故ニ之ヲ事務員ニ委ネ  
講究セシムルコト

一會計バラ氏不在中ライク氏ヲ臨時會計トスルコト

一寄宿舎焼失ニ付之ヲ新築セザルベカラズ故ニ過日ノ事務員会ニテ決シ  
タル委員ヨリ食堂寄宿舎賄所小使室等ノ大体ノ図案ヲ提出シタリ凡テ  
之ヲ事務員会ニ一任スルコトトセリ

右了リテ散会

明治四十四年十一月二十九日午後二時半左記ノ件ニ付臨時理事会ヲ開ク  
一新寄宿舎建築ノ件及其位地

出席者井深、ミラル、ブース、イムブリー、ジエムス・バラ、磯辺ノ諸  
理事熊野書記及ライク氏ノ諸氏ナリ

ミラル氏祈祷シテ開会

一新築スベキ寄宿舎ノ位地ハ旧ヘボン館及ハリス館ノ跡東南ニ面シテ建ツルコト

一米国プレスビテリアン及リホームド両伝道会社ヘ火災ニ付其損害ヲ償フガ為メニ五千弗ヲ乞フコト

右ニ関シ井深、イムブリー、ミラルノ三氏ヲ委員トシテ両伝道会社ヘ交渉セシムルコト

一仮リニ生徒ヲ収容シ居ル寄宿舎ハ種々ノ理由ニヨリ本年十二月限り閉鎖スルコト

一基督教主義ノ大学設立・合同ニ両伝道会社モ賛成センコトヲ要求スルコト其委員ニ井深、イムブリー二氏ヲ挙

ゲ交渉セシムルコト

一体操器械ニ目下金百円ヲ支出スルコト

一リホームド伝道会社ヨリ理事会ガ宣教師ノ住宅ヲ構内ノ東北ニ建築スルコトヲ許可セルヲ多トシ丁寧ナル謝状

ヲ送り来レリ

右了リテ散会

明治四十五年一月廿三日午後一時三十分新校舎理事室ニ於テ理事例会ヲ開ク

理事長井深、理事ブリス、ミラル、オルトマンス、イムブリー、ランヂス、書記熊野會計心得ライクノ諸氏及員外ゼームス・バラ、ライシヤール二氏出席イムブリー氏開会ノ祈祷ヲ捧グ

一書記前会二回ノ記録ヲ朗誦ス正確ト認ム

一「ダッチリフオームドミッション」ヨリ選出ノ理事ゼームス・バラ氏辞任セシヲ以テ其後任トシテオルトマン

ス氏ヲ選出セリトノ報アリ

一「ダッチリフオームドミツシヨン」ヨリ交渉アリ曰ク「先年神学部教授オルトマンズ氏婦省後山本秀煌氏神学部教授ニ就任シ其俸給ヲ同「ミツシヨン」ヨリ支出シ来リシガ今ヤオルトマンズ氏再ビ婦来復職セリ而シテ山本氏ハ今後尚継続シテ教鞭ヲ取ルノ必要アリ故ニ爾来同氏ノ俸給ハ同学部ノ会計予算中ニ計乗シ「リフオームド」及ビ「プレスピテリアン」ノ両「ミツシヨン」ニテ負担スルコトヲ請求スト

一昨年十一月臨時会ニ議決シタル通り仮寄宿舎ハ昨臘限り閉鎖セリ而シテ其生徒ハ親戚若クハ知人等ノ家ニ分宿スルコトナレリトノ報告アリ

一本学院ト海軍墓地トノ境界ノ生垣全ク焼失シタリシガ海軍省ヨリ交渉ノ結果材料ハ海軍省ニテ負担シ其労銀ノミ学院ニテ負担スルコトナリ既ニ之ヲ実行セリトノ報アリ

一体操器械ノ内球竿及ビ棍棒等既ニ調達シ之ヲ使用シツツアリトノ報アリ

一消火ポンプハ未ダ購入セズシテ其貯蔵所ノ建築ヲ待チ居レリトノ報アリ

一理事室ノ卓子椅子ハ竹田組ノ寄附ニ係ルトノ報アリ

一理事室ヲ始メ事務室及ビ教員室等ニ電灯ヲ設置シタリ「セベレンス」館神学部ヘモ同様ナリ又サンダム館ニモ近々設置ノ筈ナリトノ報アリ

一ライク氏前年度ノ会計報告ヲナセリ而シテ会計バラ氏昨年夏帰省不在中ニテ不明ノ点アルヲ以テバラ氏婦来ヲ待チ之ヲ詳細ニ報告スルコトトセリ

一ミロル、ライシャール二氏ヲ委員トシテ会計帖簿ヲ検閲セシムルコトトス

一バラ氏ノ後任トシテライク氏ヲ會計ニ任スルコトトス  
一ライク會計ヨリ本年度ニ於ケル神学部高等学部及普通学部収支予算案ヲ提出ス  
神学部予算

収入

一金五千九百六十円也

米国兩伝道会社ヨリ寄附

支出

一金四千百十円也

總理他教員俸給(明細ハ略ス)

小計金四千百十円也

一金三百円也

使丁手当

一同百五十円也

印刷及広告費

一同二百円也

点火及薪炭費

一同百円也

備付品費

一金百五十円也

火災保険料

一同三百円也

図書購入費

一同百円也

諸税

一同二百五十円也

修繕費

一同百円也

道路修繕費

一同二百円也

諸雜費

小計金千八百五十円也

累計金五千九百六十円也

高等学部及普通学部

収入

一金八千円也

授業料

一同五千円也

両伝道会社寄附

一同千円也

特別雜入

合計金壹万四千円也

支出

一金九千九百五十円也

総理他教職員俸給

小計金九千九百五十円也

一金六百十二円也

使丁手当

一同七百円也

点火及薪炭費

一同五百円也

広告及印刷費

一同二百円也

備付品費

第八篇



一金三百五十円也

諸税

一同四百円也

修繕費

一同二百円也

図書購買費

一同二百円也

諸器械購入費

一同百円也

道路修繕費

一同三百円也

火災保険料

一同四百八十八円也

諸雜費

小計金四千五百円也

累計金壹万四千円也

右三学部予算案ハ討議ノ後原案ヲ可決ス

但シ神学部教授山本氏ノ俸給ハ「リフオームドミッシェン」ヨリ交渉アリタル通り爾來ハ両「ミッシェン」ニテ分担スル様ミラル、オルトマンズニ氏ヲシテ請求セシムルコトトス

一普通学部ノ予算十分ナラズ仍テ尚兩ミッシェンニ書記ヨリ増額スルコトヲ請求スルコト

一神学部ノ剰余金ハ築地十七番ヨリ生スル財産中ニ移スコトトス

一普通学部教員ニハ爾來基督教信徒ヲ限り任用スベキ方針ヲ以テ之レガ実行策ヲ講究スルガタメニ井深熊野ライシャル、ライクノ四氏ヲ委員ニ挙グ

一学院教員ノ子息ニハ來学年ヨリ授業料免除ノ特典ヲ与フルコトト決ス

一新学年ヨリ教授時間ノ改正ヲナスコトニ議決ス

但シ詳細ノ事ハ普通学部教員会ニ一任スルコトトス

右議了シテ閉会

明治四拾五年三月二十二日午後二時理事例会ヲ開ク

理事長井深、理事服部、イムブリー、ランヂス、ブース、磯辺書記熊野出席

服部氏開会ノ祈祷ヲ捧グ

一熊野氏昨年度ニ於ケル入退学ノ数其他ノ状況ヲ報告ス

	入学	退学	前年度ヨリノ分	現在
普通老年	四六	六	一	四一
〃 貳年	二〇	一三	三三	四〇
〃 参年	二二	一四	二五	三三
〃 四年	三九	二一	六五	八三
〃 五年	七	六	六四	六五
高等老年	一一	三	〇	八
〃 貳年	〇	〇	四	四
〃 参年	〇	八	一〇	二

一普通学部五年卒業生米田種一外五十四人ニ卒業証書ヲ授与スルコトヲ推薦ス可決

一高等学部卒業生西村博徳丸巍ノ二名ニ卒業証書ヲ授与スルコトヲ推薦ス可決

一日本人ノ理事六名トモ任期満チタルヲ以テ皆改選セシニ井深、磯辺、石川ノ三氏ヲ二年ノ期限ヲ以テ選挙ス  
沢、服部、松井ノ三氏ヲ老年ノ任期ヲ以テ選挙ス

一熊野氏事務上ノ都合ニ依リ会計ノ辞任ヲ申出タリ可決

一熊野氏ヲシテ春期休業中阪神間ニ予約ノ寄附金ヲ集ムルタメ派遣スルコト

一來ル四月十九日神戸関西学院ニ於テ基督教主義教育会開催ニ付井深氏ヲ派遣スルコト

一書記三輪ノ月給ヲ式円増額スルコトトス

一井深建築委員ヨリ報告アリ曰ク寄宿舎及ヒ其他ノ建物ニ関シ浜田、関、竹田ノ請負師ニ命シテ図案設計仕様書ヲ出サシメシニ浜田ノ予算額余リ高キニ失ス而シテ竹田及関ヨリ提出セルモノハ殆ント同様ノ予算ニシテ之ヲ選定スルコト困難ヲ感シタルヲ以テ佐々木岩太郎ナル者ニ依頼シ調査セシメ終ニ竹田ノ方ヘ委任スルコトトセリ

一地租及ヒ家屋税ノ事ニ関シ学院トミッシヨンノ間ニ明晰ナル負担額ヲ確定スルガタメ委員トシテランダス、ライク及ヒ熊野ノ三氏ヲ挙ク

右議了シテ閉会

明治四十五年五月二十八日午後三時総理事室ニ於テ理事事務員会ヲ開ク井深、イムブリー、ランダス、書記熊野会

計ライク出席

ライク氏祈禱シテ開会

一築地十七番ノ建物ノ中ニ白蟻発生セシヲ発見セシコトハ昨年夏頃ノ事ナリシガ其当時一時姑息ノ手当ヲナシタルモ其効ナク尚害已マズ漸次蔓延ノ兆アリ之ニ対シ将来如何スベキカノ善後策ヲ立テ之ヲ理事会ニ報告スルタメニライク、バラ二氏ヲ委員トスルコト

一当構内塵埃起リ諸建物ヲ汚スコト甚シ之ヲ防ゲガタメ撒水車ヲ購求シ一日二回位撒水セシムルコト

一神学部使丁ノ住家ノ家根其他ヲペンキ塗ニスルコト

一物置ノトタン家根ニペンキヲ塗ルコト

一イムブリー、バラ、熊野ノ三氏ヲ委員トシテ芝地ヲ整理スルコト

一理事会書記ヨリ遣ハシタル書面ニ対シ在米國プレスビテリアン伝道会社ヨリ返翰ニヘボン館ハリス館焼失ニ付新寄宿食堂等ノ建築ノタメ請求サレタル寄附金ハ学院教員尽ク基督教信徒トナラザル限りハ之ニ応スルコト能ハス云々ト書記ミロル氏ニ代リイムブリー氏之ヲ読ム之ニ対シイムブリー、ミロル、井深三氏ヲ委員トシテ尚返翰ヲ送ルコト

右議了シテ閉会

明治四十五年六月二十二日午前九時總理室ニ於テ理事事務員会ヲ開ク

井深、ミラル、イムブリー、ランデス、ライク、熊野ノ諸氏出席

ミラル氏祈祷シテ開会

一 書記前会ノ記録ヲ読ム正確ト認ム

一 体操及ヒ生理科教員齋藤勝次郎氏志ス所アリ米國ニ留学スルコトトナリタルヲ以テ今学期限り辞任シ度トテ辞表ヲ提出セリ之ニ對シ審議ノ末事情不得止ト認メ其辞任ヲ許容スルコトトス而シテ同氏就職以來已ニ拾年余其間忠実ニ精勤セシヲ以テ慰勞トシテ金百円ヲ贈与スルコトニ決ス

一 富尾留雄氏家事上ノ都合ニヨリ今学期限り辞任シタキ旨ヲ以テ辞表ヲ提出セリ

一 右ニ對シ種々審議ノ末同氏ハ就職以來忠実ニ精勤セシノミナラズ学院卒業生ナレバ可成留任ヲ勸メテ其辞任ヲ翻スコトヲ得バ甚タ可ナランモ既ニ再度マテ辞表ヲ提出シタル程ニテ不得已事情ト認メ之ヲ許容スルコトニ決ス

一 同氏ノ辞任ニ付ソノ慰勞トシテ金五拾五円ヲ贈ルコトトス

一 広田道太郎、佐藤正叟二氏ハ学院ノ都合ニヨリ七月限り辞任ヲ請求スルコト

但シ右二氏ハ慰勞トシテ三ヶ月分ノ俸給額ヲ贈与スルコト

一 右両氏ノ後任者ハ井深總理ニ委托スルコト

一 基督教同盟教育會書記ボードイン氏ヨリノ照會ニ基キキリスト教主義諸學校ニ於ケル高等学部聯合ニ對スル協議委員トシテ井深ライクノ二氏ヲ選舉ス

一 來ル四十六年六月二日米國ニ於ケル万国學生青年同盟會ヨリ井深氏ハ臨席ノ招待書來ル審議ノ末井深氏ニ於テ必要ト認メナバ休暇ヲ与フルコトトス

一新寄宿舎ハ来ル九月ヨリ之ヲ開キ舎生ヲ収容スルニ付テハ其舎費トシテ各生ヨリ金參円ヲ徴収スルコトトス  
一寄宿舎各室ニ卓子ヲ備ヘ付クルコト

但シ其工事ハ学院大工ニ命スルコト

右議了シテ閉会

明治四十五年七月一日午後一時三十分理事々務員会ヲ開ク

井深、ミラル、イムブリー、書記熊野會計ライク出席

イムブリー氏祈祷シテ開会

一井深氏過日事務員会ノ決議ヲ水芹氏ニ報セシニ同氏ハ快諾シタル旨回報シ来ルト報告ス

但シ月給七十円トスルコト

一佐藤氏ノ後任ニハ石川林四郎氏ノ紹介ニカカル来ル七月理科大学ヲ卒業スベキ江見節男氏外一人ニ依頼スルコ

トトス但シ兩氏ニ五十円ヲ給与スルコト若シ必要ナラバ猶十円ヲ増スコト

一斎藤勝次郎氏ノ後任ニハ久永由直氏ヲ聘スルコトトシ其俸給ハ月額金參拾円トス

一寄宿舎新築既ニ竣功ヲ告ケタルヲ以テ委員ハ之ヲ検査シ欠点ナクバ建築請負人ニ殘金ヲ支払フコトハ會計ニ委任スルコト

一物価騰貴ニ付食料ヲ値上ケスルノ必要アリ仍テ神学生ノタメニ「ミッション」へ補助金ヲ尙金壹円増額スルコトヲ推薦スルコト

第八篇  
右議了シテ閉会

## 日露戦争後より明治を閉じるまで

新聞に見た明治三十九年から四十五年まで

私立学校令の槍玉に挙げられた学校の閉鎖

〔明治三十九年一月三日、日本〕

△私立学校令 なるものは十五六ヶ条に過ぎず、旧冬の三四学校の解散閉鎖は其第十條を適用したるものにして、其第十條が三項に分れたる中、風俗紊乱、風儀壞乱の恐あるものと云ふ第二項に依りて処分せられたるものならん。

△閉鎖と解散 日本裁縫女学校と蕾披幼稚園とは解散を、日本淑女学校と日本音楽学校とは閉鎖を命ぜられたるに就て、其區別を聞くに、府に届出あるものは学校と見做し居る故に、其命令は閉鎖にして、未だ府より学校と認識し居らざるものは、路傍に於ける不穩の集會を警官が処分するやうなる意味にて解散と云ふものなり。

▽日本音楽学校 校長山田源一郎氏の話説によれば、予は未だ閉鎖命令をうけたることなし、但し府教育課よりは時々出張し、或は調査されたる事等あり、而して風儀上の問題

に就て、男女混淆教授の結果面白からざる出来事ありなど詰責をうけし事もなきにあらざり、然れども閉鎖を命ぜられしにあらざりとは少しく理義不明白なり。

△日本淑女学校 此学校は非常に混乱を極め居れり、一面に於ては講師の連中は學監塚本ハマ子が府視學官岡五郎氏など、同じ流れの茗溪出にてもあり、且つは別懇の間柄なれば、発表前に学校に一応忠告する位は出来さうなものをとの議論盛にして、一面に於ては氣早なる連中が自身の職業継続の爲めに、早くも学校売渡問題をかつき廻はるなど乱脈を極め居れり、而して此輩が第一にかけ付けたるは、

△成女学校にして 此は嘉悦孝子女史が常に其校舎の借物なると狹隘なるとをこぼし居るを以てなるが、僅か敷地口七十坪の建物（二階は六十坪）を有するにすぎず、場所も亦僻在し居ることなれば、交渉の纏ること到底覚束なかるべし、更らに一面には、

△慷慨悲憤党 なるものあり、元來此の学校の第一欠点は法学士とか文学士とか矢鱈に若連中を引き込み、無妻者をして面白半分にワイワイさわがせ居りしが、今回の処分により四十人の若殿原は急に職業を失ひしこととて大に憤慨し風紀の紊乱せるもの豈独り我校に限るとせんや、我校よりも大にして且つ甚だしきものあるを知らずやなどいさまき、私立学校令第十一条に訴願權（行政裁判所に）あるを幸とし、行政訴訟を提起せんなど扼腕しつつあるもあり、然れども如何せん、三千五百余円の借財を負ひ、僅に百名足らずの生徒に四十人の天狗の講師を有する此日本淑女学校の風紀の紊乱し居る事は世にかくれなき事実にして殊に教頭文学士先生の乱行尚ほ世の耳目に新たなるに於てをや。

四月より実施の東海道最大急行 特定賃金を徴収

〔明治三十九年一月二十七日、中外商業〕

鉄道作業局にては予記せる如く、凱旋輸送完了を期し、新橋、神戸間に最大急行列車を運転せしむる由にて、同列車に使用する特別ボギー車は目下新橋工場に於て製作中なるが、至極善美を極めたるものにして、同急行列車は一、二等の新製特別ボギー車四輛を以て編成する筈なるが、兼て噂ざりたる如く、最大急行列車の乗客に限り、或る特定割増賃金を徴収する事となり、昨今主務省と交渉中なる由にて、愈々來る四月一日より運転を実施する計画なりと云ふ。

戸水寛人復職して大学教授総辞職問題圓滿に解決

〔明治三十九年二月一日、東朝〕

大学紛擾事件が総て良好の結果を以て圓滿に解決すべき事は、過般既に報道し置きたるが、当時此報道を打消したるものもあれど、爾來新総長と各教授との間に於て、数回会合の結果、事實は實際に於て着々進行し、彼の寺尾、金井等の諸博士も異議なく辞表を取下げたれば、其他の諸氏に於ては固より異論ある筈なく一同辞表を撤回し、同時に別項の如く戸水博士も復職を命ぜられたれば、是にて大体の問題は解決し、従つて最後の異議者たりし建部博士も既に戸水博士にして復職となりたる以上は、紛議の主因消滅したるものなるを以て、是亦辞表を撤回するに躊躇せざるべしとの事にて、尚中村博士も予期の如く多分高等商業学校に再任する事とならんとしふ。兎に角斯る教育界の大問題の容易に解決となりしは、学界の爲め慶すべき事にして、此間に於ける新総長の苦心は一方ならざるものありしといふ。

戸水博士復職

休職東京帝国大学法

科大学教授法学博士

戸水寛人

復職被仰付〔新聞集成明治編年史第十三卷三八頁〕

自殺流行から哲学書の禁読

〔明治三十九年二月五日、読売〕

女の藤村操と云はるる自殺生徒松岡千代を出したる岡山の山陽女学校長豊田恒雄氏は去卅一日生徒一同を講堂に集め訓



論して曰く、今後生徒諸子の内において、万一苦悶に堪へざるが如き場合には、其由を父母兄弟姉に訴ふる能はざるが如き事情あらば、余を初め各教師に訴ふることすべし、尚諸子は教科書以外の書籍にして、哲学書の如きは断じて読むべからず、又松岡千代の自殺につき、世間往々本校の主義精神が、その一面に於て未だ思想の確乎として定まらざる彼の少女をして、大胆なる自殺の動機を為さしめしが如くに吹聴するものあれども決して此事件の爲め従来の主義方針（基督教に近し）を變ずるなく、且つ平素諸子の書籍に対する嗜好等については、今後一層嚴密なる注意を払ふべしと。（同上書四〇頁）

#### 万国婦人矯風会大会に矢島樞子出席

〔明治三十九年六月五日、時事〕

日本婦人矯風会頭矢島樞子刀自は本年米國ボストンに於て開会せらるべき万国婦人矯風会大会に、日本婦人矯風会を代表して出席する爲め、七月十日の同大会を終りて後、同月下旬出発する事に決定したる由、刀自今や古稀の高令に達し、進んで此海外長途の旅を試みるとす、意気の旺なる思ひ知るべし、往復日程は約六ヶ月の予定なりと云ふ。（同上書一〇一頁）

#### 学生の思想風紀取締に関する訓示

〔明治三十九年六月九日、官報〕

文部省訓令第一号 ○学生生徒ノ本分ハ常ニ健全ナル思想

ヲ有シ、確實ナル目的ヲ持シ、刻苦精勵他日ノ大成ヲ期スルニ在ルハ固ヨリ言フ俟タズ、殊ニ戦後ノ國家ハ將來ノ國民ニ期待スル所益々多く、今日ノ学生生徒タルモノハ其ノ責任一層ノ重キヲ加ヘタルヲ以テ、各々學業ヲ勵ミ一意専心其ノ目的ヲ完ウスルノ覚悟ナカルベカラズ。

然ルニ近來青年子女ノ間ニ往々意氣銷沈シ、風紀頹廢セル傾向アルヲ見ルハ本大臣ノ憂慮ニ堪ヘザル所ナリ、現ニ修業中ノ者ニシテ或ハ小成ニ安ジ奢侈ニ流レ、或ハ空想ニ煩悶シテ処世ノ本務ヲ閑却スルモノアリ、甚シキハ放縱淫靡ニシテ操行ヲ紊リ、恬トシテ恥ヂザル者ナキニアラズ、斯ノ如キハ家庭ノ監督其ノ方ヲ誤リ、学校ノ規律漸ク弛緩セルノ致ス所ニシテ今ニ於テ嚴ニ戒慎ヲ加フルニアラズンバ、禍害ノ及ブ所実ニ測リ知ルベカラズ。

社会一部ノ風潮漸ク輕薄ニ流レムトスルノ兆アルニ際シ、青年子女ニ對スル誘惑ハ日ニ益々多キヲ加ヘムトス、就中近時發刊ノ文書图画ヲ見ルニ、或ハ危激ノ言論ヲ掲ゲ、或ハ厭世ノ思想ヲ説キ、或ハ陋劣ノ情態ヲ描キ、教育上有害ニシテ断ジテ取ルベカラザルモノ尠シトセズ、故ニ学生生徒ノ閲読スル図書ハ其ノ内容ヲ精査シ、有益ト認ムルモノハ之ヲ勸奨スルト共ニ、苟モ不良ノ結果ヲ生ズベキ虞アルモノハ、学校ノ内外ヲ問ハズ嚴ニ之ヲ禁遏スルノ方法ヲ取ラザルベカラズ。

又頃者極端ナル社会主義ヲ鼓吹スルモノ往々各所ニ出沒

シ、種々ノ手段ニ依リ教員生徒等ヲ誑惑セムトスル者アリト聞ク、若シ夫レ斯クノ如クシテ建國ノ大本ヲ藐視シ社会ノ秩序ヲ紊乱スルガ如キ危険ノ思想教育界ニ傳播シ、我教育ノ根柢ヲ動カスニ至ルコトアラバ國家將來ノ為メ最モ寒心スベキナリ、事ニ教育ニ当ル者宜シク留意戒心シテ、矯激ノ僻見ヲ斥ケ流毒ヲ未然ニ防グノ用意ナカルベカラズ。

本大臣ハ國運ニ照シ時弊ニ鑑ミ特ニ茲ニ訓示ス、教育ノ当局者及ビ学校長教員等ハ、克ク本大臣ノ旨ヲ体シ父兄保護者ト協心戮力シテ、風紀ヲ振爾シ元氣ヲ作興スルニ努メ、學生生徒ハ自ラ修メ己ニ克チ、學業ヲ成就スルニ專ニシテ上下胥ヒ率キ、以テ教育ノ効果ヲ完ウセムコトヲ期スベシ。

明治三十九年六月九日

文部大臣 牧野 伸顯〔同上書一〇三頁〕

義務教育六ヶ年ノ採用に決定

〔明治三十九年七月二十六日、東朝〕

義務教育年限改正 ○普通教育義務年限四ヶ年制を廢して六ヶ年制に改むるの議は、文部省に於て略決定せりと云ふ、而して愈々六ヶ年制を採用することせば、無論現在の高等小学校は廢止せらるべく、同時に尋常師範学校令の改正もあるべし。〔同上書一二三頁〕

米國排日ノ我抗議を聴かず

〔明治三十九年十月二十五日、東朝〕

〔廿四日桑港発〕 明廿三日当地教育局より領事に回答あ

り、抗議は総て無効となれり、因て領事は昨廿三日更に抗議を再提せり。

我政府は本件に就き、日本國民を抑圧し、輿論鎮撫中なりとの電報ありたり。

当地の米國人は、一般に日本の反對を輕侮するの傾向あり、クロニクル新聞も昨二十三日の社説にて、日本は米國人を排斥するの權あり、然らば米國も亦日本人を排斥するの權ありとて、日本の激昂を冷笑し、桑港の教育局が採れる学校政策を是認せり。

今回の如く日本の激昂を招きたるは、米國にて殆んど類例無きこととせり。

余(特派員)は信ず、若し学校問題が満足に解決されずば、日本は益々輕侮され、我外交政策に影響し、太平洋沿岸の日本人に対する迫害益々甚だしくなるべしと。〔同上書一五八頁〕

明治四十年

明治学院二十五年

〔明治四十年三月三日、東朝〕

明治十五年に始めて卒業生を出し爾來四百余名の卒業生ありて、隱然基督教界の大勢力を為せる明治学院は、昨日午後一時より神田青年會館に於て同院総理井深博士、ワイコップ博士、インブリー博士、及びバラ教授の就職二十五年記念祝賀會を催せるが、音楽、聖書朗読、祈祷を終りて司會者熊野

雄七氏開会の辞を述べ、次いで在校生、現職員、卒業生、理事員各総代の祝詞あり、是れより古き師弟の關係として、野矢丈夫君はワイコップ教授に、松村介石君はバラ教授に、服部章三君はインブリー教授に対して感謝の祝意を演説し、各教授亦た之が答辞を述べ、而して本多庸一君は明治五年以来の親交ある友誼として井深総理に対して祝意を呈し、総理亦之に答へて、更に明治学院の将来は時勢の進運上是非とも大業と為さざる可らずとの希望を陳じ、此の間学院の有志の合唱、外人有志の四部合唱、松永夫人の独吟、最後に校生一同の合唱を以て式を終り、茶菓饗応の後、余興として小円遊、円喬、桃林の落語講談ありて閉会し、更に午後六時よりは四教授を芝の三縁亭に聘して盛なる晚餐会を催したり。〔同上書二二四頁〕

#### 万国基督教青年大会の賓客ホール博士

〔明治四十年三月十四日、東朝〕

ホール博士講演 ○万国基督教青年大会の賓客として逸早くも渡來せる米國紐約市ユニオン神学校の校長たるホール博士は、昨十三日（十六日迄連夜）七時より神田青年會館に於て講演会を開きたり。博士は今より三年前に始めて日本に來り、其後シカゴ大学の依頼に依り印度に再遊したれば、大に我國と印度の事情に詳かなり。〔同上書二三〇頁〕

#### 在米日本兒童就學問題緩和

〔明治四十年三月十六日、時事〕

（三月十三日華盛頓發）桑港教育局は、本日午後夫の市長シユミットの大統領と為したる妥協を十分に遵奉せる決議案を通過したり。

大統領は明日夫の日本兒童を桑港の學校に入學せしむるの目的を以て提起せられたる中央政府の訴訟取下げの命令を発す可し。〔同上書二三〇頁〕

#### 東京勸業博覽會開會式舉行

〔明治四十年三月二十一日、報知〕

待ちに待ちたる東京勸業博覽會は愈々廿日開會式を舉行せり、当日は朝來春寒料峭、加ふるに西北の風吹きすさみて膚に硲りするばかりなりしにも拘はらず、一天拭うが如き日本晴の好天氣なりしかば、朝暾煦々として上野の森をこめたる朝靄を破れる午前七時頃より、來賓、出品者等陸續として會場を集まり、九時頃に至りたれば、左しにも広きを誇りし第一号中庭はフロックコート、シルクハットを以て埋められ、殆んど立錫の余地なき光景を呈したり。

#### 万国基督教青年大会開催—海外二十五箇國の代表者東京に集る

〔明治四十年四月二日、日本〕

基督教青年會の本年に於ける万国大会は日本に於て行はることとなり、將に明三日よりして神田なる同會々館に開會せられんとす。而して之に列席すべき代表者は海外二十五箇國より來る者百八十名、内地人四百五十名、外人中には世界

知名の士も少なからず。又別に女子部の大会に外国より来る者三十九名あり。亦以て今春の一偉觀と謂ふを得べし。

吾人は先づ遠来の代表者に向て其勞を謝し、併せて其大会の成功を祈らんと欲す。抑も基督教青年会は其本部を倫敦に有し、世界各地に散在する支部は約七千八百、其會員總數七十二万余、而して其の目的は言ふ迄もなく社会矯風の上在于り。斯る会の事業に對しては、信仰の異同如何に拘らず、之に同情を寄するは至当の事たり、短少の時日間の大会が果して実地に如何なる事業を挙げ得るやば吾人の知らざる所なりと雖ども、然かも此大会が社会矯風の事業に大なる新刺戟を與へ、青年並に一般社会に好影響を及ぼすべきは疑を容れず。加ふるに此世界的会合は自から世界的思想を鼓舞し、我同胞の島人的氣風を打破するの功敢て少なからざるべし。吾人が滿腹の好意を以て此大会を迎ふる所以なり。

且夫れ日本は開国以來次第に各種の万国会合に加入し、代表者を海外に派遣したること多しと雖ども、未だ日本に於て世界的会合を開きたるの例は多からず、来明治四十五年の博覽会の如きも、之を万国博覽会となさんと希望は朝野共に甚だ切なるにも拘らず、經費の都合よりして純粹の万国博覽会とは爲し難きが如し。然るに今万国青年大会は日本に於ける世界的会合の第一着として催はざる、正に是れ日本對世界の關係史に於ける重要な一新事件にして、吾人は此意味に於て大なる満足を感じせらんとする能はず。今後若し之に引續き

て各種の世界的会合を東京に開くを得ば、其我帝国の利益及び名譽に資すること決して鮮少に非るべし。基督教青年会の万国大会に次で、救世軍の總大将ブリスも亦不日英國より来らんとす。想ふに其の到着と共に救世軍の活動は更に刮目すべきものあらん。吾人基督教会の活動が此の如くに盛んなるを見、經世の爲めに大に之を喜ぶと同時に、窃に仏教界の不活潑に念到して独り慚然たらざるを得ざるものあり、近年仏教僧侶は遷世的生活の非を悟り、社会的事業に着目するに至りたるも、之を基督教界に比する時は、其經營は到底同日の談に非ず。吾人は仏教及び僧侶自身の名譽と利益との爲に深く之を恥ぢ、且悲む。彼等にして若し他教徒の爲す所に顧みて発憤砥励する所あらば、豈啻に彼等の幸のみならんや。

〔同上書二三八頁〕

救世軍總督ブリス大将入京

〔明治四十年四月十八日、東朝〕

救世軍總督ブリス大将は、昨日横浜より入京したり、停車場の歡迎門、場内をかざれる無数の万国旗など歡迎の人氣引立ち數時間前より新橋一帶の賑ひはなかなかものにて救世軍芝小隊、京橋小隊、日本力行会、日本伝道学校、婦人矯風会其他の各団体何れも歡迎旗を推立てて場外に控へ居たり、是れより先き救世軍本部にては將校其他一同総出にて夫々歡迎の準備を爲し、戰場將校は場外に、參謀將校はプラットフォームにと陣取り、大将の到着を今か今かと待ち居た

り、さる程に時刻迫るや、歡迎者尾崎市長を始め、島田三郎、三浦安、小崎弘道、豊川良平の諸氏を始め皆プラットフォームに入れり、暫くして午後五時と云ふに大將は到着し大將の随員なるフッキング大佐ニコール少將先づ車を下り、其後につづいて大將は下車したり、此時尾崎市長進み出で大將と握手して無事安着を祝したり、市長の次に握手したるは三浦安氏、其後をうけて安藤太郎氏なりき、先刻來待無れ居たる歡迎者はいかで猶予すべき、安藤氏の握手すむや四方より大將を囲みて我先にと握手を争ふに、大將は深大の感に打たれけんプラットフォームに立ちし儘音声高らかに謝意を述べて曰く、(山室軍平氏通訳)

斯くまで熱誠なる諸君の歡迎を受けたるは感謝に堪へず、プラットフォームにて演説するは御国の習慣に合はぬべければ今は唯感謝を表するのみに留めん、日本語を理解するの困難なるは予て聞き居たり、日本に著してより唯三十六時間のみ、無理もなければ、日本語にて謝辞をのべられぬは残念なり、斯る盛大なる歡迎は美に予期せざる所とて、予の喜びは言語に尽されず、神は東京を恵ませ給へり。

演説終るや歡迎者一同は万歳を三唱し、ブース大將亦双手をあげて之に応へたり、かくて大將は人込をかき分て車寄の辺に長髯霜の如き偉大なる体軀を現はせば、場外立錐の地なき迄に群れる大集団は一時に万歳を叫び、馬車の馬は驚きて

群衆の間へかけこむなど一時はなかなかのさわぎなりき、兎角して大將は用意の二頭馬車に乗り車上に起立し帽をふりつゝ歡迎門を通過して帝國ホテルに入れり、当日東京市にては大將の入京を相図に日比谷公園にて十二発の煙火を打ちあげ祝意を表したり。(同上書二四五頁)

日本メソヂスト教会独立 教界多幸の年 更に此の吉報

〔明治四十年五月三十一日、万朝〕

吾基督教の独立。(清水九嶋)

今年ほど吾精神界に重大な喜ばしい事件のあった事はあるまい、教育界に於ては小学校令の改正、師範学校令の改正、全国教育家大集会、其他種々の教育大会があり、宗教界に於ては万国基督教青年大会、ブース大將の來朝其他種々の宗教大会があった、是等は夫々將來の精神界の発展に一紀元を画する事のみである、然るに吾人は更に新しく更に慶ばしく更に重要な事件を尚一つ此上加へる事となつた、即ち我国に於ける全基督教を代表し得る程に、最も多数の信徒と学校を有して、普天率土の端までも其勢力の行渡つて居る美以教会、日本メソヂスト教会、南美以教会の三大派が合同を遂げて、米国の各母教会から独立を為し、今や日本人が事実に於て之を「吾基督教」と称呼し得る者となつたといふ事である〔下略〕(同上書二六七頁)

日韓新協約成立 迷へる韓國の全面的指導 統監府其の実権を握る

〔明治四十年七月二十五日、官報〕

日韓協約○明治四十年七月二十四日韓国京城ニ於テ、伊藤  
統監ト韓国総理大臣トノ間ニ締結セラレタル日韓協約左ノ如  
シ。

日本国政府及韓国政府ハ、速ニ韓国ノ富強ヲ図リ、韓国民  
ノ幸福ヲ増進セムトスルノ目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定セ  
リ。

第一条 韓国政府ハ施政改善ニ関シ統監ノ指導ヲ受ケルコ  
ト。

第二条 韓国政府ノ法令ノ制定及重要ナル行政上ノ処分ハ予  
メ統監ノ承認ヲ經ルコト。

第三条 韓国ノ司法事務ハ普通行政事務ト之ヲ區別スルコ  
ト。

第四条 韓国高等官吏ノ任免ハ、統監ノ同意ヲ以テ之ヲ行フ  
コト。

第五条 韓国政府ハ統監ノ推薦スル日本人ヲ韓国官吏ニ任命  
スルコト。

第六条 韓国政府ハ統監ノ同意ナクシテ外国人ヲ備聘セザル  
コト

第七条 明治三十七年八月二十二日調印日韓協約第一項ハ之  
ヲ廢止スルコト。

右証拠トシテ下名ハ各本国政府ヨリ相当ノ委任ヲ受ケ、本  
協約ニ記名調印スルモノナリ。

明治四十年七月二十四日

統 監 侯爵 伊藤博文

光武十一年七月二十四日

内閣総理大臣勲二等 李完用

〔同上書二九四頁〕

明治四十一年

同胞今や五千万

〔明治四十一年一月一日、東朝〕

四十年に於ける本邦内地在住の人口は未だ正確に知悉し能  
はざるも、最近七ヶ年の平均増加数六十一万八千六百六十一人  
を以て、仮りに本年の増加人員と見做さばさしたる失当なか  
るべく、之によりて計上する時は、実に四千九百廿六万七千  
七百四十四人にして、二十五年前即ち明治十六年の人口に比  
すれば、一千二百廿五万〇四百四十二人、廿一年に比すれば  
九百六十六万〇五百十人を、更に卅一年に比すれば五百五十  
万三千八百八十九人を増せり、此割合を以て増加せば四十一  
年中には我大和民族は実に五千万以上に達すべし、今累年の  
人口を示せば左の如し。

明治十六年 三七、〇一七、三〇二

同 廿一年 三九、六〇七、二五四

同 廿六年 四一、三八八、三一三

同 卅一年 四三、七六三、八五五

同 卅六年 四六、七三二、八七六

同 卅九年 四八、六四九、五八三

四十年(未確定) 四九、二六七、七四四

布哇移民停止 移民会社大恐慌

〔明治四十一年一月二十六日、中外商業〕

外務省は廿三日警視庁其他の地方庁を経て各移民会社に対し、呼寄移民(妻子等家族を呼寄するもの)の外一切布哇移民を停止すべき旨言渡せり。

目下森岡商会の白露移民を除くの外二十六移民会社は、悉く布哇移民の取扱を以て營業とせることとて、各会社は一大恐慌を起しつゝある由。〔同上書三七三頁〕

▽ホール博士逝く

〔明治四十一年四月十九日、國民〕

紐育組合神学校長神学博士チャールス・ホール氏は、三月二十三日逝去せり、氏は印度及び日本の比較宗教学の講演に依り、極東基督教徒間に知名の士なり。〔同上書四一七頁〕

戊申詔書

〔明治四十一年十月十四日、官報〕

詔書 ○朕惟フニ、方今人文日ニ就リ、月に將ミ、東西相倚リ、彼此相濟シ、以テ其ノ福利ヲ共ニス、朕ハ茲ニ益々国交ヲ修メ友義ヲ惇シ、列国ト与ニ永ク其ノ慶ニ頼ラムコトヲ期ス。顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ、文明ノ恵沢ヲ共ニセムトスル、固ヨリ内、国運ノ發展ニ須ツ、戦後日尚淺ク、庶政益々更張ヲ要ス、宜ク上下心ヲ一ニシ、忠実業ニ服シ、勤儉産

ヲ治メ、惟レ信惟レ義、醇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ実ニ就キ、荒怠相誡メ、自彊息マザルベシ。

抑々我神聖ナル祖宗ノ遺訓ト、我が光輝アル国史ノ成跡トハ、炳トシテ日星ノ如シ、寔ニ克ク恪守シ、淬礪ノ誠ヲ輪サバ、国運發展ノ本近ク斯ニ在リ。朕ハ方今ノ世局ニ処シ、我が忠良ナル臣民ノ協贊ニ倚藉シテ、維新ノ皇猷ヲ恢弘シ、祖宗ノ威徳ヲ対揚セムコトヲ庶幾フ、爾臣民、其レ克ク朕ガ旨ヲ体セヨ。

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣総理大臣侯爵 桂 太郎

〔同上書四八五頁〕

公文書にインキ◇使用許可せらる

〔明治四十一年十二月八日、東朝〕

官庁の公文書に洋製の墨汁(インキ)を使用することは、明治九年の太政官達に禁止されありしが、昨日閣令を以て右の達を廢止し、インキを使ふも差支なき事となれり。〔同上書五一三頁〕

明治四十二年

明治四十二年

明治四十二年一月十一日、報知

〔明治四十二年一月十一日、報知〕  
府下巢鴨庚申塚なる明治女学校は、明治十八年中故木村鑑子等によりて創設され、其の後、女史の遠逝に次ぎて巖本善

## 第八篇

治氏専ら経営の衝に膺り、多年基督教主義の下に幾多の才媛淑女を養成したるが、去卅九年一月中巖本氏の手を離れ、只医学博士令嬢久美子を首め、小此木忠七郎、福迫亀太郎、青柳猛（有美氏）、湯谷礎一郎の六氏によりて専ら維持の勞を執り更に元良博士、三宅博士、小此木ドクトル、坪井（正五郎）、呉、元良の三博士外、呉文聰、小波山人氏等の助力にて命脈を保ち居たるが、巖本氏の声価と共に既に不治の難病に罹れる同校は最早奈何ともする能はず、漸次衰頽に赴き、竟に旧臘廿五日に至り廢校するの止むなきに至れり。如上の履曆を有する同校は前後二十五年間に幾多の才媛を出せる中に、三島博士夫人千代槌（三十七）、福来博士夫人たつ子（二十八）、大塚文学博士夫人楠緒子（三十五）、木下医学博士夫人やす子（三十四）等の諸夫人を首め、閩秀文学者野上八重子、佐佐木雪子（信綱氏夫人）、岸本りう子、羽仁もと子、煙山文学博士夫人八重子等、相前後して同校にありしものなるが、兎に角同校今回の訃音は、都下女学校の為洵に傷ましき事なり。〔新聞集成明治編年史第十四卷一二頁〕

### 加州排日の眼目

〔明治四十二年一月十五日、中外商業〕

加州議會に提出されし排日案の内容は、

- 一、日本学童を公立学校より排斥すること。
- 二、会社重役たるを禁ずること。
- 三、住所を隔離すること。及土地所有權禁止の四案にして

右の内第一の日本学童を公立学校より分離せんとするの議案はポリチカルコート千六百六十二条に依り、学務委員は亜米利加印度人、モンゴリアン及支那学童に対し、特定の学校を設立することを得との規定に対し、更に日本人を加へんとする排日案たるも、第二の会社重役たるを得ずとの案は、單に日本人のみに對して適用せんとするにあらずして、總ての外国人を含み、更に第三の住所を隔離せんとするの案も、市の官憲が不潔にして好ましからざるもの、又は居住者の習慣が道徳衛生に害あるものと認むるときは、条例には命令を以て特定の居住区域を設立すべしといふにありて、第二及び第三の案は全然排日案といふべからず、若し右議案が通過するが如きあらば、各国との条約にも影響を及すべきを以て、目下の形勢にては通過の見込なかる可しと云ふ。〔同上書一六頁〕

### 基督教伝道五十年 日本基督教會獨立運動

〔明治四十二年三月十二日、東朝〕

今年はプロテスタント基督教の伝道、本邦に開始せられしより滿五十年に相当すればとて、日本基督教にては特に祝謝伝道會なる者を設け、植村正久氏を會長とし、五千元の資金を募りて、一年間に弘く全国台湾及び滿州韓國に巡回伝道をなし、更に内地及び滿韓に十箇所の伝道地を選びて、之を一年間に自給獨立せしめ、着々教會の基礎を固くして、所謂日本人の日本伝道の理想を実現すべしといふ、之に就て来る十



三日午後二時より神田青年會館に於て大集會を開き、十四日の夜は同所にて演說會を開く由、尚十三日夜は同教會に縁故ある内外男女二百名許り上野精養軒に於て、祝謝宴會を開くと云ふ。(同上書五五頁)

明治初年の基督教殉教者市川栄之助其の妻まつ子逝く

〔明治四十二年八月一日、都〕

明治初年新派基督教の渡來に際し、日本語教師として宣教師グリーン氏に招聘せられし市川栄之助氏は、聖書を手にし居たるばかりにて、国禁の邪宗門に帰依したりと認められ、妻まつ子と共に、京都の獄に繋かれ、間もなく牢死を遂げ、遺骸の行方さへ知る能はざるに至り、當時將に國際問題とまでならんとしたるに、岩倉大使一行欧州より帰朝したる後邪宗門嚴禁の辻建札撤去せられたる結果、まつ子は在獄二ヶ年余にして出獄したれど、身体太く疲勞して、唯息の通ふのみなりしと云ふ。其後同女は上京して、グリーン氏を初め各有志者の補助に依りて、孤独の生涯を送り來りしが、近來いたく健康を損じ療養に怠りなかりしも、遂に卅日午前三時溘焉死去したれば、卅一日赤坂靈南坂教會に於て葬儀を執行し、青山墓地なる故榮之助氏の記念碑の側に葬れり。(同上書三一頁)

渋沢男爵筆頭に渡米実業團の発程

〔明治四十二年八月二十日、中外商業〕

渋沢男爵を筆頭として總數五十二名の中四十九名の渡米実

業家諸氏は、予定の如く十九日午前十時三十二分の特別列車にて新橋を発したり。◎新橋駅附近は早朝より見送人を以て満され、駅正面には東京実業聯合組合、渋沢男爵、日比谷平左衛門、町田徳之助、根津嘉一郎、小池国三、原林之助、佐竹作太郎諸氏等の見送人名刺受付所を設備され、無慮數百台の腕車、數十台の馬車自働車は駅前広場に所狭き迄押し並べられ、盛觀湧くが如き中、◎渋沢男爵及同夫人の自働車を馱つて來るを初めとし、日比谷、根津、佐竹、小池氏等統々到着し、囂の如く群集せる見送人はどよめき渡りて之を迎へ、万里の征途に上る長老中老連は満面に得意と感謝の色を浮べ、左顧右盼して之に応じ、渋沢男爵は階下の特別室に入り、小村伯初め群り來る見送人に一々応接し、元氣よく忙がし氣に笑い且談じ、◎他は大抵楼上休憩室及一二等待合室に陣取り、知己親族其他關係者の応接に目も眩まん許りに忙がはしく見受たり、◎やがて発車前三十分、渋沢男先づプラットフォームに立ち、以下順次に之に続けば、一万余の見送人の人波を打つてプラットフォームを押し、さしも広き新橋駅も内外杜絶し、身動きもならぬ中、発車時間は愈々迫り、雷と轟く万歳聲裡に汽車は徐々として新橋を離れたり。◎尚見送人の便利を謀り二十人乗りの特別車を継続せしがこは是く売切れ駅内に彷徨して申込の遅かりしを悔い居たる連中頗る少なからざりき。◎見送人中軍人は殆んど絶無にて、只長岡中将が白のユニフォームに一個の金鷄勲章を輝かせられたる

と、米國代理大使の背高きとが独り場中の異彩なりき。〔下略〕〔同上書一三六頁〕

学制改革問題沿革 福原専門学務局長談

〔明治四十二年九月十日、東京日刊〕

学制改革問題の起源は頗る古く、今日迄已に幾多の変遷を経し事なれば、其詳細に至りては十分調査の上ならでは之を語る能はざるも、先づ本問題の沿革に就て吾人が思ひ起す事は森文部大臣時代の中等教育制度なりとす、随か明治十九年の事なりしと思ふ、森文部大臣は中学校を五年、高等中学校を三年と定め、中学校令を發布して、茲に中等教育の制度始めて確定するに至りしが、後ち

井上文部大臣は大に実業教育を奨励し、中学校を分ちて実科中学を設け、尚高等中学校を改めて高等学校となし、高等職業教育を授くる所謂後の専門学校の形となし大学に入学するもの為には、単に高等学校内に当分の間大学予科を置く事を得る規定を設け、以て森文部大臣時代の中等教育機関を改更せられたり、茲に注目すべきは、其高等学校中の専門教育は更に振はざるのみか当分設くる事を得たる、所謂宿借の大学予科の方却って盛況を呈し、遂に今日の有様となり、実科中学亦三四校を胚胎せしのみにて、遂に立消えの姿となりき、併し同大臣の実業教育に対する功績は決して没すべからず、今も尚実業教育奨励費用庫補助法の存するは、同大臣の教育会に於ける形見と称すべし、次で

△蜂須賀文部大臣の時に至り、民間に於て漸く二種中学校論を唱ふるもの多く、戸水寛人君の如き亦一人なりき、省内にては既に井上大臣時代の実科中学の経験により之に反対するもの多く、朝野共頗る議論あり、結局二種中学校論は遂に成立するに至らざりき、之と同時に文部省内に於ては大に中等制度調査の必要を認め、中等制度調査委員会を設け、時の専門局長菊池男其委員長となり、今の岡田次官及び一木内務次官等其委員として調査に従事せしも、何等の成案を見ずして終れり。

樺山文部大臣時代には小学校令の改正並に中学校令施行規則等の改正あり、茲に教育界の大變動と称するは、前蜂須賀文部大臣時代より戦勝の余波として中等教育勃興の氣運に向いし事之れなり、当時中学校数は僅に全国を通じて百校内外に過ぎざりしが、戦勝國として中学校の数余りに少数なりとの議朝野に起り、遂に各府県には一校以上の中学を設置すべし、尚文部大臣は、府県知事に向ひ、中学校の増設を命ずる事を得との法令さへ出でたり、之より中学校の増加夥しく、現に余が三十一年洋行の時此有様なりしに、三十四年帰朝の時には已に二百七十校を算するに至り、僅か三年の間に百五六十校の増加を見るに至りしなり、後年中学卒業生の増加夥しく高等学校入学者に過剰を生ずるに至り、遂に高等学校増設論、大学増設論等の喧しくなり、果ては学制改革問題が政治問題として、議會に現はるるに至りしは、実に之れがた

めなりと察せらる。

菊池文部大臣時代には、彼の有名な行政整理問題ありて、学制改革も同時に之を行ふ可しとの論起り、久保田男爵等は、議会に於て学制改革論を呼号したれば、頻々として出て来り、内閣法制局にても一の改革案を持出せしも、菊池大臣は之を排斥し、自ら中学七年制度を定めて直に大学に聯絡せしめ、高等学校は之を廢して漸次実業専門学校と為す可しとの案を立てしも、大学側の反対を買ひ同案は直に高等教育會議に於て否決せられたり。

久保田文部大臣時代 是より先久保田謙男は貴族院に於て頻りに学制改革を唱導し、学制改革をして政治的問題と化するに至らしめしは、實に同男の力なりと云ふべし、而して男は桂内閣に入りて文部大臣となるや、他年の抱負を實現せんと努めたれども、同大臣の所謂改革案なるものは、現時の専門学校の一部を大学校と改め、之を小学より中学大学と進む学習上の正系となし、帝国大学は學術の蘊奥を極むる所謂學問の研究所とし、正系以外に獨立存在せしむる成案なりしも、之は単に従来の専門学校を大学の名に改むる迄にて他に何等の得る所なければ、屬僚の反対あるのみならず、外部にも漸く反対するもの多く、次で男の辞任と共に有耶無耶の内に消滅したり。

牧野文部大臣時代 同大臣の時には、義務教育年限の延長を實施したるが、之は主として歴代大臣の希望にして、又朝

野共に賛成せし所なるも、只町村經濟の点を顧みて今日迄延引し居たるのみなり、而して同大臣は中学校及び高等学校の改造に注目し、未だ発表せし事は無かりしも、大体に於て菊池大臣の案に同じき意見を持し居たりしもの如し、然れども國語仮名遣問題及び語學問題の爲め、學生改革案に對して其全力を注ぐ事能はず、而して遂に小松原現文相に及びし次第なり云々。(同上書一四五頁)

基督教宣教五十年記念会は今日から

〔明治四十二年十月五日、東朝〕

宣教五十年記念会 ○今五日より十日に至る六日間、神田美土代町基督教青年會館に於て舉行する基督教宣教記念祭は、連日講演會及び宣教會を開き、尚基督教伝道に關する參考品を陳列縦覽せしむる筈なるが、第一日には午前九時より開會、小崎弘道氏の感謝、小川義綏氏の祈祷、本多庸一氏の演説、奥野昌綱氏の祝禱其他外國宣教師数名の聖書朗誦、演説、感話、祈祷あるべし。(同上書一五五頁)

滿州視察中の伊藤博文公哈爾賓驛頭に狙撃さる 一韓人六連發銃を連射し絶命

〔明治四十二年十月二十七日、東朝〕

伊藤公狙撃さる ○廿六日哈爾賓領事館午後二時半着電。

伊藤公今廿六日午前九時、哈爾賓に着し、プラットホームに下るや韓人と覺しき者の爲めに狙撃せられたり。

○伊藤公危篤 伊藤公の傷所は數発の命中により、生命危

險なりとの統電あり。

○田中滿鉄理事も 別報によれば、随行の田中滿鉄理事も軽傷を受けたりとあり。

○六連発にて絶命 廿六日午後二時三井着電に拠れば、今朝伊藤公韓人の為に暗殺せらる、川上総領事、田中滿鉄理事負傷し、犯人直に就縛とあり。尚別処來電に拠れば、伊藤公は午前十時哈爾濱停車場プラットホームに下車せる刹那、歡迎の群集に紛れ居りたる一韓人の、手に六連発の短銃を擬すると見る間に、公爵目鬼けて狙撃せるに、公は胸部を貫かれて倒れたるも、犯人は六発を連発して遂に公爵は絶命せり、川上、田中両氏の負傷は重からずとあり。〔同上書一六二頁〕

明治四十三年

廿五年前の回顧 宮内次官渡辺千秋談

やまと新聞二十五周年

〔明治四十三年四月一日、やまと〕

△やまと新聞の発展「やまと新聞」が二十五周年前に、東京に於て呱呱の声を揚げたるは、今より顧みれば、世に云ふ二た昔以前の事にて、追々社運隆盛に赴き、殊に松下社長及び社員諸君一同の非常なる勉勵を以て近時著しく発展し、東京有数の大新聞となりしは、常に愛読する千秋等の厚く祝せざるを得ざる次第なり。頃日社員石川氏訪問せられ、「やまと新聞」の二十五周年祝典に就き、何か其の当時の談話を求められしが、之れを遠く求めんより、近く千秋の居住する高輪

の変遷を述ぶるは、大に今昔の感に禁へざる所にして、高輪が近々此の数年に於て、今見る如き長足の進歩を為せしことは、吾々をして実に驚かざるを得ざらしむる次第なれば、爰に聊か其の変遷を語るべし。(中略)

△当時高輪の物笑い 其頃高輪辺の人々は、鹿児島県知事は余程金持と見え、一坪一円以上も出して斯る土地を買ひたりと噂し合ひ、当時の物笑いとなりし程なり。当時は高輪の海辺は総て蘆原にて、現在の盲目長屋の如きものもなく真に寂寥たる有様にて、汽車も一日に二三回横浜往復が通るに過ぎず、人力車に乗らんにも、俄かに雇ふことさへ出来得ざる程なりき、又当時故後藤伯は、今の宮内省の御用邸を所有し居りしが、高輪地方の者に対し「遠からず此の土地は一坪十円になる」と誇りし由にて、之を聞きたる高輪辺の人々は、後藤伯は氣違ひになつたと噂し、大に之を嘲笑したる程なりし也。

△殆んど隔世の感 然るに今日は皇族の御邸も出来、電車の便、汽車の利、其他種々非常なる繁榮を來たして、之を二十五年前に比すれば、実に驚く可き進歩なり。其の後千秋が止むを得ずして近隣の地を買入れたる時は、一坪一円の幾倍にも当り、今日より顧みる時は殆んど隔世の感あり、尤も是れは高輪に限らず、東京各区の変遷も凡そ斯の如くなる可きも、就中高輪は全市無比の進歩なりと信ず、元來千秋は、前に述べたる老吏の説を聴き、且つ極めて閑靜の地を好むよ

り、公暇には読書にてもするに便なりと考へ、斯る荒謬たる土地を買入れたる次第なるも、今は非常なる熱鬧の地と變じ、甚だ予期に反する次第なり。二十五年前のことを顧み、貴需に於じて其の梗概を陳述すること斯の如し。〔同上書二二三頁〕

変節漢と睨まれて同志から附け狙はれたる幸徳秋水湯河原にて捕へらる。

#### 犯罪事件に関する一切の件掲載禁止

〔明治四十三年六月三日、東朝〕

社会主義者幸徳秋水は、相州足柄下郡土肥村大字湯河原温泉宿天野屋旅館に止宿中、去る一日突然逮捕せられたるが、該件に就いて東京地方裁判所検事より「犯罪事件に関する一切の件」掲載方禁止を達せられたり。依て左に犯罪事件以外、天野屋に静養中の動靜、逮捕当時の顛末を記すに止む。

△幸徳の捕縛 同人は去る四月七八日頃より妻女同伴、湯河原温泉天野屋に到り、静養を兼ねて基督伝を著述しつつありき。五月六日妻と共に一旦帰京し、同月十日単身にて再び天野屋に赴き、相変らず専心著述に従事せるが如くなりき。一昨一日帰京する由を告げて午前八時三十分輕便鉄道に乗らんとて、同七時三十分人力車にて旅館を出で、同停車場に向ひしが、其の途中同人逮捕に向ひたる東京横浜の両地方裁判所検事、並に小田原区裁判所の名越判事の一行六名に出会し、直に其の場に取押へられ、一旦湯河原巡査駐在所に伴はれ、

同所にて令状を執行され細密なる身体検査を受けたる上、同七時十六分の輕便鉄道にて東京へ護送されたり。〔以下略〕

〔同上書二六〇頁〕

#### 日比谷音楽堂解散

〔明治四十三年六月二十八日、號売〕

日比谷公園内なる音楽堂は、嘗て社会主義者の利用する処となりし以來、警視庁は其取締を嚴にし、今日僅かに市主催の西洋音楽が時々演奏せらるるに過ぎざるの有様にて、汎く市民の趣味ある娯樂を供するの主旨に副はざるを以て、一般に之を開放的ならしめ、市主催の音楽の外、風俗講話及び市民の屋外集會等にも利用せしむる様為さざる可らずとの論、市の識者間に漸く唱道せらるるに至りたれば、早晚何等かの形式に於て実現せらるるに至るべし。〔同上書二六九頁〕

#### 韓国併合 韓国大皇帝即時御嘉納

〔明治四十三年八月二十三日、東朝〕

#### 韓国合併

▲寺内統監と李総理大臣との間に、特種の協約成立し、去る十六日李総理は之を韓国皇帝陛下に奏上せり。

▲韓国皇室の嘉納 李総理の奏上を受けられたる皇帝陛下は直に之を大皇帝に諮られしに、大皇帝も一言の疑ひなく、之を嘉納せられたり。

▲去る十七日 寺内総監は右の結果を全部電報にて、我が内閣に報告せしかば、桂首相は十八日参内して伏奏する所あ

り、遂に昨二十二日の臨時枢密院會議を開かるるに至れり。  
発表はやがてなるべし。

▲解決形式 は協約に依るものにして、処分の性質は合邦に  
非ずして合併なりとの事なり。〔下略〕〔同上書二八九頁〕  
明治四十四年

ワイコップ博士逝く

〔明治四十四年一月二十九日、中外商業〕

明治学院教授理化学博士マードン・ワイコップ氏は、廿七日  
午後九時卅分俄然心臟麻痺にて芝白金今里町なる自宅に逝去  
せり、享年六十一。氏は西曆千八百五十年四月十日を以て、  
米國ニュージェルシー州ニューブランズ・ウック、ロットガ  
ルの大学校を卒業後、直ちに聘せられて我が國に來れり。性  
温厚真率にして、來朝以來茲に三十余年、その子弟後進を愛  
撫し、教師と云はれんよりは、寧ろ父老と稱すべきものあり、  
又大の日本鼻眞にて、よく邦人と調和したれば、何人にも  
よく敬愛せられたりと。〔同上書三六九頁〕

東京自慢のハイカラ劇場帝國劇場開場式舉行

〔明治四十四年三月三日、東朝〕

泰平象ありて、樂境樂地涌然として有楽町に生じ、帝都の  
繁栄を飾り、演劇の發達を資くることは國民としてよろこび  
東京市民として誇るべき事なり、劇場いかに華麗莊嚴を極む  
るとも其の舞台に現はるる作と技芸にして、旧態に滞まら  
ば、錦の袋に瓦を包むに等しく、其の不調和は滑稽にして、

且つ一種の悲劇なるべしとの杞憂を抱く者もあれど、渠成り  
て水通ず、先づ劇場成りてそれに相応しき作も出で技芸も高  
尚に進むこと、順はちがへど有る道理なり、演劇改良の叫び  
は早く四十年前におこり、はじめは活歴史となり、後は時代  
思想劇とまでなりしが、反響はただ反響に消えて作としては  
其の望みにかなふもの出ず、技芸家としては却つて凋落の有  
様を示すのみなる今の時に、其の容器たる劇場だけにても、  
野田式の芝居を離れて殿堂式の劇場となりしは、杞憂家にと  
りてせめてもの喜びなるべし、三月一日此の開場式拜觀の榮  
を得て、羽織袴と改まりて參席して見れば、我れながら威風  
堂々として、天晴れの紳士らしき、また冗な伯父さんたる旧  
態なし、衣服によりてさへ、人の心持の改まるもの、まして

此の東洋第一と稱ふべき大劇場に其の作を出し、其の技芸を  
示す者、感激せずしてあるべきやと思へばそれもまた頼もし  
く、場内に入りて四方を觀れば、まことに眼も眩むばかり広  
大美麗なり、式は洋樂部の奏樂に始まり、渋沢会長の演説、  
横河技師の報告、桂首相の祝詞代読、清浦子の演説、阿部知  
事の祝詞等ありて、式三番となる、構造の爲め反響強く、笛  
鼓少し異様に響きたり、梅幸の翁本行がかりにて勤め、此の  
劇場の紋章たる規模を其の身に舞ふことは、俳優として古今  
未曾有の榮譽といふべし。高麗藏の三番叟は強きに過て劍術  
道場の開場式に踏むかと疑はれ、宗十郎の千歳は千歳の一遇  
と面箱捧ぐる手の嬉し震へに動きたるは道理なり、宗之助の

ツレ千歳無事にして、目出度く終りたるが下手斜めに花道を  
取付あるを本行の橋がかりとして、皆揚幕より出でたるは、  
劇場の舞台としては、(舞台が明るく、花道が暗いだけ)見  
た目栄す、花道を花道とも橋掛りともして用ふ時は、此も舞  
台と同じ明るさには宜しからんか、休憩時間には二階三階  
各食堂にて立食あり、錦衣の淑女貴婦人花に花を飾り、輝き  
を添へたり。休憩の後、史劇(頼朝)、序幕北条館の庭中、  
同返し夜の庭二場を出す。舞台中央空洞ある大桶の道具立、  
すべてパノラマを見るが如くなり、周囲のきらきらしきを暗  
くして、舞台を明るく浮出しのやうに見せるはよけれど、い  
かにも活人画じみて、此中に動き物云ふ者は真の人と思はれ  
ず、是も今少し見物席を明るくしたるが宜しからんと思ひた  
り、世には暗きを明るく見せんと工夫するに、此の劇場は明  
るきを暗く見せんとするに、却て苦心のあるならん、次に新  
派の喜劇あれど、それは次興行に出すとのこと、喜劇は新し  
きがよし、新派喜劇の蒸返しを後に見んこと惜しければ見ず、  
大切には女優一統の西洋舞踊ありといふ。是こそ此の劇場  
此の舞台によく調和して、第一の見物なるべし、演劇は改め  
見て、改め評す。先開場の盛式を祝ふて、帝都に一大美観を  
加へたるを欣ぶ。(竹の屋主人)〔同上書三八四頁〕

#### 明治学院失火 ヘボン館焼失

〔明治四十四年九月二十二日、東朝〕

廿一日午前五時二十分、芝区白金今里町明治学院内ヘボン

館二階の学生読書室より出火したり。折柄西南の強風に煽ら  
れて、火は忽ち四階建百四坪の祠館に燃え拡がり、更に二階  
建五十九坪のハリス館に移りて勢ひを増し、炊事場(二階建  
二十坪)、小使部屋(平家十坪)をも灰燼に帰して同七時半  
鎮火したり。

▲記念の建物 ヘボン館は有名なる米国の博士ヘボン氏の  
記念として去る明治十九年の建築に係り、永く教室に使用せ  
しが、近頃新築教場の竣工と共に、目下学生の寄宿舎に当て  
たり。同館は階下のみ煉瓦造にて二階以上は木造ペンキ塗な  
れば、出火と共に見る見る燃え拡がり、強風に勢ひを得て猛  
火忽ち大建物を包みたれば、三十有余名の寄宿学生は辛くも  
寝衣一枚にて逃げ出せり。ハリス館は監督ハリス氏の記念と  
して、是も明治十九年新築より同所に移りしものにて、目下  
一部を教室に、一部を幹事室に用ひ居るも、矢張り木造ペン  
キ塗りなれば、瞬く中に烏有に帰したり。〔下略〕〔同上書  
四六八頁〕

ヘボン博士逝く 我が開国当時の恩人

〔明治四十四年九月二十四日、東朝〕

一昨廿一日の桑港特派員発の飛電は突如として吾人の胸を  
打てり。曰く「多年我邦に住して育英の任に当り、且和英、  
英和両辞書を著して学界に多大の貢献を為したるヘボン氏  
は、ニューデヤシー州イースト・オレンヂの自邸に於て、二  
十一日朝逝去せり、享年九十六、内田大使は水野総領事に託

して葬儀の当日花環を贈ることとなせり。

▲ヘボン博士略歴

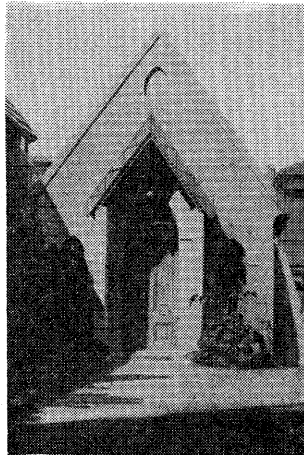
ヘボン博士は夙に本邦に渡来し我国教育界に貢献する所勤からず、明治初年の頃本邦に於て和英辞書を著し、当時語学の幼稚なりし我國の英学研究者に多大の便宜を与ふると共に、博士は此の著述に依りて得たる利益の全部を挙げて、都下明治学院に寄附し、記念の一寄宿舎を設置したり、名づけて之をヘボン館と云ふ。天なる哉同館の慮らずも火を失して烏有に帰したる廿一日早曉を以て、博士は実にイースト・オレンヂの庵に永眠せるは亦奇なりと云ふべし。博士は去る三十八年三月多年の功に依り特に勲三等に叙し、旭日章を授けられしが、後老軀其の職に堪へざるの故を以て帰国し、爾来紐育近郊に其の余生を送りて今日に至れるなり、博士の薫陶に依り、我国朝野の衝にある者尠ならず、林外相、高橋日銀総裁、其の最も顯著なるものなり。(同上書四七〇頁)

バラ博士在日五十年の祝典を挙ぐ

〔明治四十四年十一月十二日、報知〕  
五十年來横浜に在りて、現存せる外人宣教師の最も古參なるバラ博士の來朝五十年祝典は、既報の如く十一日午後二時より、同氏の創立に係る日本最古の教会たる横浜山下町の海岸教会にて開催さる、門弟井深梶之助、本多庸一氏以下來會者頗る多数、先づ内外人の祝辭演説に續て、老博士の五十年間の経歴談あり、博士嬉しさに熱涙を揮つて、

「明治五年開館式の当日に參集したる日本信者は僅に十一名なりけるに、今や八百卅一名にも上れるは、皆神の御恩ぞ」

とて真摯の眼を揚げて数度神に謝しぬ、博士の寵児たりし本多庸一氏は往年の追想談を試みて、予等數人の青年は当初は毫も基督教の信者たるべき意なく、唯英語学修のみの為に



横浜海岸教会小会堂  
(明治四年の建築であるが、大正十一年の大震災で焼失)

博士に就きしに、曾て予等數名政府の忌諱に觸れて將に獄裡に投ぜられんとせし時、博士は予等を諭して曰く、今卿等を米國に送りて警吏の手より免れしめん事は実に易々たり、されど卿等は決して逃ぐる勿れ、隠るる勿れ、必らず深く縛に就くべし、仮令獄裡に繋がるるとも、決して政府を恨む勿れ、決して官吏を怨む勿れ、基督教徒は國家に忠実なるべき者ぞと、予は此時初めて基督教の眞価を認め、バラ博士の誠意



をも了解して、夫れより始めて熱心なる基督教の信者とはなりぬ云々と述べて、満場を感動せしめたり。〔同上書四八八頁〕

#### 明治四十五年

##### 宗教活用案再燃

〔明治四十五年一月十九日、東日〕

既報内務省の宗教活用計画に就て、床次内務次官の語る所によれば、此計画を進行せしむるに就ては、先づ閣内の元老及び有力者なる山縣、桂二公、松方、井上の兩侯、大隈伯、渡辺宮相、大浦子、石黒、千家兩男等を訪問して、其賛同を求め、既に神仏耶三教の重なる代表的人物に向ては直接又は間接に其趣旨を唱道して誤解なきことに努めつつあれども何時第一回の会同を開催し得べきかは未だ発表するの時期に達せず、又此会同の目的は、従来互に異教異端の感情に馳せつつある、神仏耶三教の宗派的精神を成るべく友愛、寛大、自由の域に進め、之に由りて以て国家の進運を輔け、国民道德の信念を養ひ、社会風教の活泉たらしめ、三教に共通せる宗教的精神生命をして最も広大に最も深遠に發揮せしめんとするにありて、而して我国の教育上に於ける修身倫理の精神を陶冶すべき天職を帯びつつある教育家が個人としての精神上に於て、熱誠にして純潔なる上帝、仏陀又は八百万神等の宗教的大信念を有し、彼等が個人として実に品性高潔、思想剛健、仰いで天に恥ぢず、俯して地に恥ぢざる宗教的確信

を其教育上に於ける修身倫理の感化に向て活用するもの陸續たるに至るは教育宗教調和の良績として、三教会同の期待する所なり。我輩は、印度に生れ支那に生長し来りし仏教が、伝来の当初我国民性、民情と衝突し、一時敬神、崇仏兩派の間に流血の惨を見たるも、後高僧大徳前後に顕はれ、日本の団体と、人情とに調和すべき日本的新仏教を開きし歴史を顧み、基督教各派の如きも、今後歲月を経過して、幾多の大宗教家が活躍し来り、その宗教を我国性に同化せしむる活動を試むるに至らば、必ず日本的基督教確立せらるるべしと信ず。左れば我輩が今日に當りて神仏二教で輝く東洋固有の思想、信仰と基督教で閃く泰生新来の思想信仰との間に於ける調和を計り、新に精神界に開国進取の新旌旗を翻さんとするは時機を得たる処置なりと認む云々。〔同上書五一八頁〕

##### 神社崇敬祖先崇拜に基督教はイヤイヤ

〔明治四十五年一月二十二日、万朝〕

宗教利用に関し、最も初めに交渉を受けたるは基督教側に於て、其際当局より大会同の節提出すべき提案三項を内示し、右に対する賛否を諮詢せしに、前内閣の訓示を踏襲せる神社崇敬、祖先崇拜の一項に関しては、一同反対の氣勢を示し、之が削除を求め、当局の容るる所となり、為めに基督教側は何時にても内務の召集に応ずるに決せしも、之を洩れ聞ける神道側にては快からざるものありて、反対の氣勢熾んに

## 第八篇

仏教側に於ても亦た一般は内務の計画を冷視しをり、中には欠席を明言しつゝあるもの尠からず。(同上書五一九頁)  
日本各派基督教会の大同盟を結成す

〔明治四十五年二月八日、報知〕

ルーテルが宗教改革を絶叫せし後信仰に自由を得しプロテスタントは多岐多様の教派を生み、新教は今や煩に堪へざる程多数の教派に分れたり、殊に夥しき教派を有する米國基督教の流を汲みし我が新教は、僅々七万の教徒を有するのみなるに、殆んど二十の教派に分れ、何等統一の機關を有せざるは、其発達上遺憾鮮からざりき、尤も廿世紀の初年、同盟會主動と爲りて全國に大挙伝道を行ひ大に新教徒の氣勢を昂めしが、此未曾有の壮舉が反て各派暗闘の俑を作り、忽ち福音同盟會の解散を告ぐるに至りたり。而も各派の有力者は是を遺憾とし、寧ろ是を機會に諸種の事業を目的とする日本基督教会大同盟會を起さんと企画し、先づ個々別々の教會に對して夫々誘導に努めしも容易に成らず、遂に各教派を聯合せしむるの捷徑なるを想ひ、爰に教派の信仰政治に就ては容喙せずとの條件の下に同盟を促し、四ヶ年に亘る宿題は漸く解けて去年十月日本基督、日本組合、メソヂスト、美普、同胞、クリスチャン、普連士、福音の八派賛同となり、新教徒八割の勢力を集注し得たれば、十二月十九日各派代議員四十八名を會し規約を制定し、且つ會長本多庸一、副會長小崎弘道、井深梶之助氏等の選挙を終り、是より陣容を整へて大に基督

教徒の抱負を世に示さんとの準備成りたれば、弥よ来る十日午前六時より神田青年會館に朝野の名士を招請して同盟會の發會式を挙げ、同盟の主旨と其の使命を天下に宣言する手筈とはなれり、然れど此同盟は未だ全く新教各派を網羅するに至らず、聖公會、浸礼、基督、自由メソヂスト、ルーテル、同盟統一等の不參教派あり、且つ宗派組織ならざる救世軍及び孰れの教派にも屬せざる島貫兵太夫氏の力行教會、田村直臣氏の數寄屋橋教會等、孤立の教會に對しても今後極力同盟を德憑し新教全部の大同盟たらしめずんば止まずと稱し居れり、而して此同盟は信仰及び政治に干渉せずと標榜すれども、將來の大精神は絶対の合同にあるが如く、此の同盟とは表面何等關係を有せざれど、殆んど時を同して各派合同期成會の成るあり、密かに氣脈を同盟に通じ、時機を俟つて兩者接触し、断然日本に於ける各教派分立の弊を除き大合同の実を挙げんとしつゝあり。(同上書五二六頁)

### 宗教會同の理由

〔明治四十五年二月二十三日、東朝〕

宗教會同問題に關し貴族院予算總會に於て、原内相の爲したる説明左の如し。

唯今御尋ねの宗教家の會同に就ては、世間にも新聞紙等にも色々の記事がありて、甚だ六ヶ數問題にでもなつて居る様に見えて居りますけれども、私の考へし処の趣意は、左様な六ヶ數事柄ではなかつたのであります。素より行政上の方面

より社会の改良を要する事もあり、又教育の方面以外にも相当の力を要することもあり、旁々致して此の教育、宗教と云ふことは、矢張り其の方面に於て相当の尽力を致すと云ふことは無論宜しいことであらうと考へて居ります。併し此の宗教を如何いたすかと云ふが如き考へは、毛頭有つて居らない、唯斯様に其の宗旨に依つて色々致して居りますが、兎にも角にも社会の為國家の為に相当に働きかけて居る人々でありますから是等のの人々の力として、十分に効果を奏するやうに致したならば、最も社会の為に宜しからうと思ひますと云ふ次第で、此の社会の為に貢献致して居る宗教家と一夕会合致して意思も聴き、懇談も致して見たいと云ふ丈けのことではありません。併し斯様のことは誤解を来す懸念もありますから、夫れ等のの人に此の意志を話して然る後に案内を致したいと考へて居りました中に新聞紙に出て、是からも先き色々な議論を生じ、之れに理窟が付きまして騒然たる有様で、賛否の議もありましたが、私の趣意は左様に六ヶ敷ことではなく、斯う云ふ人々を一々招待致しまして、色々懇談でも致しましたならば、自分に取りますしても、誠に是等の人と語を交へることは甚だ喜ばしきことと考へる、又社会の爲めにも全く無益となるまいと考へまして、唯是等の人を招きまして懇談を致さうといふ極めて単純なる意味で、併し此の単純なことが幾分社会道德の為に結果を生ずるならば、極めて望外の仕合せであります、自分は唯是等の人と懇談を重ねて見た

と云ふ丈けの考であります。〔同上書五三二頁〕

神・仏・耶の三教―会同協議

〔明治四十五年二月二十六日、東朝〕

内務省の主權に係る三教会同協議会は廿五日午後三時より華族会館に於て開催せらる。内務省よりは原内相、床次次官始め各局長、秘書官、勅任参事官並に潮事務官、文部省よりは福原次官、松村普通学務局長、司法省よりは松田法相、平沼次官、海軍省よりは齋藤海相、財政次官、陸軍省よりは岡次官、通信省よりは小松次官等約二十名出席し、仏教側よりは天台宗、真言宗、真言律宗、浄土宗、臨濟宗、曹洞宗、黄檗宗、真宗、本願寺派、日蓮宗、融通念仏宗、時宗、法相宗、華嚴宗等の各管長約七十五名、神道側よりは天理教、金光教、神理教、祓教、御嶽教、神習教、実行教、大成教、扶桑教、大社教、修成派、黒住教、神道派等より十五名、耶蘇教側よりは正教会、天主教、聖公会、浸礼教、日本美以教会、日本組合教会、日本基督教会等より各代表者九名にて、会同者約百二十名、会館楼上の大広間に於て各自着席するや原内相は左の挨拶をなし、夫より茶菓の饗応ありて歓談に時を移し五時三十分散会せり。

今回諸君を御招待せし処、多数諸君の來臨を得、親しく諸君と御懇談をなすの機会を得たるは小官の最も満足する所なり、此の御招待に關し世間には種々議論あるが如しと雖も、小官が本日諸君の御來臨を煩はしたる次第は他意あら

## 第八篇

ず、従来人心を指導し風教を振興するに就て、諸君が各宗教の立場よりして多年尽力せられたつことは、夙に認識する所にして又深く感謝する所なり。而して世運の進歩と共に精神界の健全なる発達を図り、社会状態の改善をなすことに關し、今後諸君の尽力に待つ所多大なるに因り諸君と一堂に會し御懇談を為すことは、小官の久しく切望したる所にして、即ち本日御招待をなしたる次第なり、諸君幸に此の意を諒とせられ、將來益々國家の為に尽力せられんことを望む。(同上書五三四頁)

### 米価暴騰 円に四升四合到る処生活難

〔明治四十五年三月八日、万朝〕

「米が高い」「また米が高くなった」とは到る処で聞く嘆声である。「高ければよさう」と言つて済む贅沢品ならば、いくら高くならうが一般の人々にさまで痛痒は感じないけれど、これは日本人に取つて一日も欠くべからざる食料品である。よしや牛肉や魚肉は喰へずに我慢をして居られても、米の御飯は朝昼夕の三回、必ず喰はずには我慢が出来ない、喰べねば生命が続かないのである。日本人に取りて米ほど大切なものは他にない。その最も大切な需用品の値段が日一日と暴騰して来ては、人間は十分腹を肥やすことも出来ない。慥く日本人の生命は日一日に縮まる度を速かにせられるのである。「米の高い」の嘆声は他人事ではない、当面自分の身の上に関する大問題ではあるまいか。

### △白米の値段

「米が十銭すりや、やつこらやのや」と云ふ唄が、日清戦争の始まる少し前に流行した事がある。これは白米の値段が十銭にも届いては、兎ても日本の米は喰べられない。南京米の臭いでも買つて我慢しなければならぬと云う意味を唄つたのであった。併し今日の白米の値段は十銭に届いたどころの騒ぎぢやない。一円に僅か三升九合六勺余、つまり一升の値段が二十五銭二厘に当る勘定である。今市内の白米標準相場と云はれて居る山栗小売部の現在の小売値段を聞くと、

一等米(生搗)二十五銭二厘

一円に付三升九合六勺八才

二等米(混搗)二十四銭

一円に付四升一合六勺六才

三等米(混砂)二十三銭二厘

一円に付四升三合〇一才

四等米(混砂)二十二銭四厘

一円に付四升四合六勺

である。併し市内の各小売店が悉く此通りの値段で売つてゐるのではない。標準米よりは多少米の質の悪いのを一等、二等、三等、四等、五等と等級に別つて、前記の標準相場より多少安く売つて居る店もある。〔下略〕〔同上書五三九頁〕  
赤門前の食物屋―昔と今の変わりやう―

〔明治四十五年三月九日、國民〕

学生の食物も段々と奢って来た、試みに大学生と一高生との食物の今昔を調べて見ると、昔の学生は誠に質素なもので普通の蕎麦屋へ入って、二銭(当時の代価)のかけを喰ふ者をさへ贅沢だと罵って、縄暖簾を潜り、丸三うどん(当時一銭)を喰り、最も御馳走だといつても、本郷四丁目のいろは牛肉店へ飯櫃を抱へて駆込む位、甘党は追分の梅月を此上なきものとして居たが、年と共に漸々贅沢になって、いろはは竜岡町の豊国となり、切通の江知勝となり、梅月は青木堂の西洋菓子となり、御茶はコーヒ、ココアとなった、それからと云ふものは、学生の口は益々奢り、愈々バタ臭くなり、本郷カッフエ、パラダイス、淀見軒、弥生軒等が流行し、住所其所等のミルクホールが夫々繁昌するやうになった、此の間に大学の構内の食堂には小川の洋食が出来た、一高内には桜鳴堂に菓子、洋食、蕎麦、汁粉の食堂が出来た、斯くて食物に次いで起るべき問題は女で、女の居ない本郷カッフエや、淀見軒よりも、婀娜者が居て盛んに愛嬌を振り撒くパラダイスや、弥生軒の方が気受けがよく、中には或る女を的に通ひ詰める輩もあって、江知勝の或る女中は、工科大学生と駆落さへした、此の頃から屋台店の立ち食ひが流行出して、本郷館側のすし屋や、赤門前のおでん屋などが繁昌して、おでん屋は屋号をまで一高屋と呼ぶやうになり、又蕎麦屋の側では一高門前の松屋よりも、藪々よりは女中で名高い絹物蕎麦屋の方が流行り、ミルクホールは中食に食麵麩とミルク丈ではお客が

承知せぬ処から安西洋料理を兼業するやうになった、然も何でもハイカラな食物と女とが無くては御意に召さぬので、湯島辺は大分繁昌する様になり、お蔭で鳥又や小花等も賑はつて来たが、有繋に此反動とでも云ふのか、パラダイスが積年の悪風を一掃するといふ触込で、昨年十月以来、給仕は一切男にする旨を広告した等は振つてゐる。〔同上書五四〇頁〕

青山学院長本多庸一

〔明治四十五年三月二十七日、東朝〕

日本美以教会青年会列席の爲め、過日來長崎に滞在せる青山学院長本多庸一氏は、此程突然発病し療養中の処、病勢面白からず、大谷医学博士其他の勧告に依り、県立病院隔離病室に入院せるが、二十六日終に逝去せり。〔同上書五四六頁〕

新片町より藤村の文芸委員会編

〔明治四十五年四月七日、読売〕

新片町より(島崎藤村)

文芸委員会の事業は今後奈何に発展して行くだらう。文部省の立場より言へば、今日の文芸上の作品を取って直にそれを社会に推薦し得るものではない、と私の友の一人が言った。又一人は、最初文芸委員会を設くる時に、何故文部省の立場を明かにして置かなかつたらう、通俗文学としてのすぐれたものもあって可いではないか、と言ふものもあつた。私一個の希望を言へば、あの事業を独立した性質のものとした

い。成るならある大きな保護者の手に委ねたい。文部省に代つて文芸を保護しやうとするやうな抱負のある人は、今日に求められないかしら。

兎もあれ、明治の文芸は絵画や音楽が受けたほどの保護も無しに今日まで進んで来た。その間には実に幾多の犠牲者を出した。透谷、眉山は自殺し果て、緑雨も、一葉も、独歩も皆な酬ひらるるところは少くして斯の世を去つた。過去に於ける名のある文学者が二十代三十代で死んで居るといふ事実は、心ある人の眼には奈何に映ずるだらう。今日の文学者は、言はば是等の先駆者の精神を受継ぎ事業を受継いで居るのである。

文部当局者が今後奈何なる方針を執るか、それは吾儕の言葉を挟むべきかぎりでは無いけれど、すくなくも吾儕の希望を言へば、文芸に対する誠意と理解こそ第一に望ましい。先頃新聞紙上に伝へられた文芸委員会の有様のごとき、最高の理解ある論議と言ひ得るであらうか。又、新聞紙の報ずるところによれば、委員は作品を扱ふために八回も投票をし直したといふ、これが誠意の籠る証拠と見做さるるであらうか。吾儕は吾儕に先んじた人々の警めた艱苦を忘れるものではない。吾儕は作物を賞せらるるにも優りて、真に理解され、誠意を以て取扱はれることを望むものである。「下略」〔同上書五五〇頁〕

燈影星の如し——昨夜半の宮内省

臨時閣議開催の準備成る

〔明治四十五年七月二十九日、東朝〕

聖上陛下の御容体御危険に渡らせ給ふこと伝はりてより、二重橋坂下御門の辺は一般の群集堵の如く、天地陰森として不安の氣漲り渡りて見えたが、中にも坂下御門の宮内省の噴水池より表玄関、側面の通用口にかけては、参内者の馬車、自動車、人力車など所狭まで列び、その間を警衛の兵士は三人又は五人づつ隊を組んで坂下門、乾門等を警衛し、皇宮警察官も亦総員出仕して、各御車寄より省内の所要所を警戒し、提灯の光、飛ぶ星の如し、御事なき平生に在りては午後十時を限りて、宮内省の表玄関前より噴水池の辺は静寂の領域となり、唯アーク燈の燦き樹立を照すのみなれど、昨夜は十一時を過ぐる頃まで参内者の車馬来往すること頻にして、触目の光景何となく心を動かしむ、若し夫れ宮内省に至りては、総務課を始め各課員より給仕の末まで、総員総出仕にて事務を執れるが、これ又省内道路の所要所には皇宮警手立番して警戒し、且坂下御門内には所属消防隊臨時総出にて、非常を戒め居れり、夜十時までに西園寺首相以下各大臣参内し、万一御大切の事ありたる場合には、直に臨時閣議を開くの準備をなし、内閣なる会議室には、省員と雖も出入を禁じて警戒するなど、凡ての光景又前日の如からず、静寂の内に動揺あり、陰森の中に喧騒あり、省の内外漸く事多きを加へたる様は、廊下行く人々の慌しさにも窺ひ知るべし。

天皇崩御 七月三十日午前零時四十三分

〔明治四十五年七月三十日、東朝〕

天皇崩御 ○天皇陛下今三十日午前零時四十三分崩御あら  
せらる。

右官報号外を以て宮内大臣、内閣総理大臣の連署にて告  
示。

昨二十九日午後八時頃より御病状漸次増悪し同十時頃に至  
り、御脈次第に微弱に陥らせられ、御呼吸は益々浅薄とな  
り、御昏睡の御状態は依然御持統遊ばされ、終に今三十日午  
前零時四十三分、心臟麻痺に依り崩御遊ばさる、洵に恐懼の  
至りに堪へず。(岡、青山、三浦、西郷、相磯、森永、田  
沢、檉田、高田拜診)

(三十日宮内省公示) 〔同上書五九九頁〕

第九篇





## 排日問題と井深梶之助

米國移民の沿革 菊田貞雄 井深先生關係資料

### 「若松村の哀史」シュネルの事

年代の順を逐ふ必要から、初期渡米者として全然異教に属する一つの集団移民があったことをここに記しておく。それはイ・ダブリュー・スネルなるものが引率して明治二年（一八六九年）の二月と十月とに渡米せしめた日本人二十余名で、カリフォルニア金鉱地帯であるエルドラード郡、ゴールド・ヒルに地を卜し、茶の栽培を試みたのであったが、その事業は失敗し、一行は四散した。〔海老名一雄「カリフォルニアと日本人」四八頁〕  
シュネルの移民渡米は明治元年のヴァン・リードが布哇移民に暗示せられしか？

引率者スネルは和蘭人ともいふが、独逸人だといふ説が正しいやうだ。幕末の頃武器売込みを目的として日本に來り、維新の戦争に際しては、当時朝敵方の牙城であった会津藩、庄内藩に鉄砲を売り、且砲術を教へた。同じく奥羽聯盟の雄藩である仙台藩とも縁故を持って居る。その功により会津侯から松平武兵衛の姓名を賜はつてゐるところを見れば相当なものであったに違ひない。が、会津庄内共に敗れ去り、維新の鴻業確立を見るに至

ってからは、朝敵の御用商人だった行き懸り上もはや日本での仕事に見切りをつけねばならなくなったものと見え、ここに一大転向してカリフォルニアの日本村建設に新活路を見出さんと企図したらしく考へられる。伝ふるところによると、彼の最初の計画はカリフォルニアに養蚕業を起すことにあったといはれるが、或は同時に金鉱採掘による僥倖をも夢みてゐたかも知れない。いづれにしろその行き方には当時東洋くんだりまで一獲千金の機会を求めて来た冒険的商人気質がよく顕はれてゐると同時にゴールド・ヒルの日本人植民地を名づくるに若松村の名を以てしたところなど、彼が会津といふものに対する綿々の愛着を窺ふに足り、松平武兵衛のゆかしき名と共に会津哀史の後日譚を遠くカリフォルニアの、而もシエラ・ネヴァダの山近き奥地に残したことはまことに興味深いものがあらねばならない。〔同上書四八頁—四九頁〕

### シュネル (Schnell) シュネル

私達〔普魯亜〕の仮領事館〔横浜在〕も一八六六年〔慶応二年〕十一月に私の賜暇帰省中かうした火災の為に完全に焼失した。私は日本を去る前に領事館の和蘭人の通訳と事務員とに……〔Von Brandt, "Drei und breisig in Ost-Asien" 3 Bde, 1901—1902. Japanese translation by 喰代驥訳「黎明日本」財団法人日独文化協会、東京、刀江書院、昭和十七年八月、二七頁〕……シュネルとクリーチの両事者が義務に忠実であつた事には感謝しなければならなかつた。〔二八頁〕……私の通訳シュネル氏が襲撃された際……〔二〇四頁〕

時に普魯亜人「スネル」ナル者会津ニ居リ大ニ歐羅巴ノ戦時〔河原勝治「思出の記」(パンフレット) 大正六年八月、五頁〕談ヲ聞カセシ為メ大ニ得ル所アリ 当時〔河原〕善左衛門ハ国産奉行タレバ務メテ戦時用ニ供スル金、銀、銅、鉄、山塩ノ採掘ヲ奨励シ「スネル」等ト数々御蔵入、山三郷、石ヶ森辺ヲ巡廻セリ 又家ニ在リ

シ魚網ノ鉛、銅壺、錫ノ徳利、銅の菓罐、茶釜ノ如キハ彈丸製造ノ為メ尽ク上納セリトゾ。〔六頁〕

若殿様〔喜徳公〕は白子と云ふ名の命いた馬に跨つて独逸人スネルが献上したエポレットの附いた軍服を召されまして、私は〔河原勝治〕滝沢峠の麓まで御見送を為した。〔温故会「河原勝治氏講演会津戦争所感」昭和九年四月廿九日、二頁〕

此の時〔会津藩公明治元年二月江戸出発の前〕我が藩相梶原平馬、藩士鈴木多門等横浜にて普魯亞人スネル弟に計り、小銃八百挺並附属の諸道具彈藥器械等を購ひ、又多門、佐瀬八太夫周旋尽力して旧幕勘定奉行某より金を借りて船載し、スネル兄及び長岡藩相河井継之助等と共に亜米利加汽船に搭し、三月二十六日〔陽四月十八日〕新潟に上陸す。〔会津戊辰戦史編纂会「会津戊辰戦史」昭和十六年、東京、井田書店、一七六頁〕

それから〔渋沢栄一等が徳川昭武を具して仏蘭西より〕上海に着くと、長野慶次郎といふのが独逸人スネルといふものと共に突如として現はれた。……長野の云ふところによると、スネルは会津に居たが、其の戦半に兵器の足らぬのに苦み、鉄砲を買ひに此処へ来たのである。薩長は官軍の名を冒してゐるが、実は薩賊長好である。何ぞみすみす彼等の悪謀に屈してなるものか。此処に足下が民部公子に随つて来られたに遇つたのは一の便宜を得たものである。公子は將軍の弟君である。足下等と公子を奉じて、此処より直に函館に至り、函館軍の首領と仰いだなら、軍氣も大に張つて形勢も転開しよう。是非とも同意してほしい、との事だった。〔幸田露伴「渋沢栄一伝」東京、岩波書店、昭和十四年、一四二頁〕〔小貫修一郎「青淵回顧録」上巻、二二二頁—二二三頁〕

この日本の一大転換期を前にして、東北の雄を以て自他共に許してゐた会津の庄内藩に、砲術指南として平松

シュネルと云うオランダ人がゐた。長い間プロシヤの領事館に通訳官を勤めてゐたといふので、日本語はとても巧みであつた。彼は長岡藩の傑物河井継之助や、大倉喜八郎、渋沢栄一などとも商売上其他で知合であつた。常に野心満々たる男で、幕末の混乱にまぎれて東北の反軍に武器弾薬を売込んだりして問題を起した男であつた。

会津城中の大会議にも出席して、世界の大勢を説き且つ種々策戦上の献策をしたり、自ら戦〔河村政平〕「太平洋の先駆者」東京、西東社、昭和十八年、二七四頁〕線を巡視したことなどが伝へられてゐる。官軍が東北に進撃して、長岡、新潟等の諸城を陥入るるや彼も捕えられ、斬刑に処せらるる処を外国人だといふので特に許された。

然るに庄内藩の家老石原倉右衛門が討死した時、その懷中に、庄内藩の本間友三郎とエドワード・シュネルの間に、武器売買契約の証文があつたのが発見され、彼は日本で最初の外人裁判に附せられた。この事に就ては尾佐竹博士が昭和七年一月号の「自警」誌上に「エドワード・スネル事件」として書いて居らるる。

エドワード・スネルは日本名を平松武兵衛と云ひ、日本婦人と結婚して二児があつた。この婦人の生家については不明であるが、多分庄内藩士の娘であつたらうと思はるる。その理由は現在北米加州エルドラド郡コロマ村字ゴールド・ヒルのヴィアカンパ家に家宝として秘蔵されてゐる金の葵の紋を彫めた立派な懐剣（天和三年一月一日 住守次作）と、同地に最近まで生残つてゐた古老が、「シュネル夫人は上品な容姿の立派なキモノを着てゐた日本婦人であつた」と云ひ伝へられてゐる事によつてもうなづける。……〔二七五頁〕

シュネルは裁判が一先終ると、身に迫る危険を感じてか北米に移住せんとして、計画を樹て、カリホルニアの

富源の開発と、日本産業の進出を夢み、彼地に将来一大植民地を開拓して、失意の殿様や不遇の藩士等を呼寄せ、ゆくゆくは一大王国を建設せんとの野望を抱いて、明治二年五月一日横浜出帆の大平洋汽船会社船チャイナ丸に乗船渡米した。

彼に従って北米に向った者は、二十人乃至三十人と云はれてゐたが、私が発見した五月二十一日附の桑港のアルタ・カリホルニア新聞に拠ると、一行はシュネル夫妻、幼児二人及びその子守のおけい外に下等船客として日本人五人のみである。勿論後の便船で来た者もあつたやうである。これを全部シュネル一行としても、全部で十名内外である。五人の下等船客の大部分は大工で、中に一人の医師も交つてゐたとも伝へられてゐる。その五人の氏名も色々に伝へられて、はっきりしないが千葉県人桜井松五郎及神奈川県人増水国之助、東京府人井筒友次郎の三〔二七六頁〕人は確かの様である。外に柳沢佐吉もその一人であつたと言はれてゐる。

エッチ・シュネル

当時サンフランシスコ一流のホテルであつたオツキシデンタル・ホテルの五月二十一日の宿帳の中に、エッチ・シュネルの署名と並んで *Nishagawa* としふシュネルが代筆したらしい署名がある。二人とも国籍を「支那<sup>チヤイナ</sup>」として居るのも興味がある。このニサガハ？（西川？）とは何人であつたか今以て解けぬ疑問であるが、或は同行の医師であつたか、或は覆面の会津藩士であつたか判明しない。他の五人の者が支那人宿かどこかの下級な宿に泊つてゐるのに比べ、シュネル夫妻、幼児及おけいとこの人はオツキシデンタル・ホテルに投宿してゐる。これに依つても相当地位のある人と思はるる。

シュネルは此のホテルに滞在中、ホテルの経営者チャールズ・グレーナーと云ふドイツ系の米人と相談の結

果、同人所有の加州エルドラド郡コロマのゴールド・ヒルの土地六百英加購入の契約成立し、一行は日本から持参した多くの苗木類や種物類などを車に積んで、桑港から約百六十哩ある此の山奥へ移住した。〔二七七頁〕

ここは一八四八年二月、ジェームス・マーシャルに依つて金が発見され、有名なゴールド・ラッシュが起つたその本元で、この地方には一時世界中のゴールド・シーカー等が押寄せ、コロマの山村も一躍人口三四千の賑やかな町になったことがある。

シュネルがここに来た頃は、その全盛時代が過ぎて二十年も後の事故、もう黄金熱もさめて、元の寂しい山村に還つた時だった。

その後シュネルは此の地ゴールド・ヒルの丘の上に、「タウン・オブ・ワカマツ」即ち若松植民地を建設中と盛んに加州内の新聞に宣伝させてゐるが、明治四年には早くも失敗して、シュネル一家は遂にこの若松植民地を放擲して日本に帰国した。外の者はこの数千哩外の異境に残されて困惑し、シュネルの無責任をうらんだ。

明治五年岩倉大使が来桑するや、残留組の者はその窮状を大使に陳情して、政府の救を求めたとの事である。

〔二七八頁〕

#### チャイナ号の乗客

ウオアリー船長の乗つてゐる太平洋郵船会社の汽船チャイナ号は、香港から三十日と十九時間、横浜から二十日間の航海の後、明治二年五月二十日午前十一時その棧橋に安着した。……

帰航は、四月十九日午後三時五十分香港発、乗客は千三百十人（大部分は支那北米移民）荷物千三百十五噸及合衆国郵便を乗せて横浜に向つたが、東北の強いモンスーンに遭つて難航〔一一二頁〕した。四月二十七日夜半

横浜着、四月三十日午前六時五十三分桑港に向って出帆……横浜を発つてから南西の烈風になやまされた。

……桑港上陸の船客は一等三十三人。その中にエッチ・シュネル夫妻、幼児、おけい及従者が含まれてゐる。この外に三等船客には七人のヨーロッパ人、五人の日本人（シュネル同行の日本移民と思はる）、支那人千二百五十人であった。

〔“San Francisco Herald” May 21, 1869, the front page. 一三三頁〕

### シュネル一行

日本の北部地方に十ヶ年住居してゐたプロシヤの紳士シュネルは三家族の日本人と共に桑港に上陸した。

この三家族は今本港に向つて来航中の本部隊、四十家族の先陣をなすもので、それについて猶八十家族の移民が来ることになつて居り、全部で百二十家族とも云ひ、又四百人とも云ふ人々が、永久の植民地をこのカリホルニアに建設せんがために来りつつある。

彼等の大部分は生系の製産業者である。又、その一部は茶の栽培業者である。彼等は三年物の桑の木を五万本持つて来た。この木は桑属科の植物中最も柔らかな葉を有し、この葉が日本では最も上等の生系をとつてゐる。

其他彼等は各種の竹を極めて多数持参してゐる。これは多方面に極めて用途の多いものである。又油をとる木の三年もの高さ五呎のものを五百本及茶の実六百万個持つて来てゐる。この茶の実は小さい堅果である。〔一一四

頁〕

シュネルはプロシヤ公使館の通訳官を勤め後に日本北部地方が官軍と戦つた時は、その地方の大蔵大臣ミニスタ！オブリナイナンであつた。彼は極めて日本語が巧みてプリンス・イズ（伊豆守）の下で重要な職務を掌握してゐた。会津藩の敗



北の結果、彼をして他にどこか平和な職業を求めしむるに至つたのである。三人のプリンス（殿様）も彼の後を追つて此国に來り、彼と運命を共にすると云ふことは噂のみでは「一一五頁」ないらしい。シュネルは百三十人の従者及家族を持つてゐる。彼等は彼を命の親として尊敬し、彼も亦彼等の面倒を見てやり、彼等を助けて此の国の法律や習慣に従はしむべく責任を以て導くのだといふ。

これ等の日本人は決して農奴ではなく自由民である。若しプリンスが來れば、もともとと沢山の移民とその家族が附随して來ることになつてゐる。彼等は皆高い教育のある立派な紳士で、最も行儀正しい家庭に育つた人達である。此の日本の移民達は十分に此の国の法律や習慣を了解しこれに従ふであらう。一体日本人はその行それ自体が威嚴の魂で、侮辱されたり、ペテンにかけられたりしたら承知せぬ国民であることは、予め承知しておかねばならぬ。この日本人を支那人同様に油断して取扱うことは氣をつけねばならぬ。彼等は家族連である。我々の資源を開発すべく熟練せる技術と産業を持つて來たものである。シュネルは政府の土地を買ふ考で、平野よりもむしろ安い山地か、高原の土地を適當として物色中である。……〔“The San Francisco Alta,” May 27, 1869. 一一六頁〕

#### 当時の亞米利加

シュネルが日本の移民三家族をつれて、キャリホルニアに上陸した當時は、有名な米国大陸横断鐵道の中西部線中央太平洋鐵道の開通したばかりの時であつた。この鐵道完成の為に使役されてゐる約九千人の支那人労働者は職を失つて、その大部分はサンフランシスコの「小支那」と云はれてゐた支那町に集つてゐた。一八四九年のゴールド・ラッシュの好況時代はすでに去つて、一八五四年の不景氣以來天下の形勢思ふやうにならぬところ

へ、この中央太平洋鉄道会社の吐き出した多数の支那人がブラブラとサン・フランシスコに集ったものだから、白人労働者等は大なる威嚇を受けた。……「支那人を追払へ」の標語は到る所に〔一一七頁〕かかげられた。

“Pig Tail Ordinance.”

……この当時加州内にはすでに七万五千人の支那人が来てゐた。

シュネルはこの支那人排斥熱の勃興期に来て、巧みに加州民の心理を捕へて、極めて上手な日本人植民地の宣伝をやつてゐる。……〔一一八頁〕

シュネルの失敗

「約五六百万の茶の種が植民地に移植されたが、芽を出したのは僅かに百二十本にも足りない。その百二十本ばかりのものも小さく弱々しい姿である。其他五六百本持つて来た桑の木は僅か二本元氣よくつゐているのみだ。この乾燥した暑氣にあつてはとも生き伸びることは難しい」〔一三四頁〕……日本人植民地には今僅か八人の日本人しかゐない。四人の男と四人の女である。そしてそれ以上来るかどうかは今のところ判明しない。ここに来てゐる日本人が到着した当時、直ぐ後から百四十人の〔一三三頁〕ものが来るやうに報道されたが、決して彼等は本国から乗船してゐない。……」〔一三四頁〕〔Placerville Correspondence in the “Sacramento Union,” September 18, 1869.〕

第九篇 ……此の「ゴールド・ヒルの」土地はシュネルが五千弗で買ふ契約をし、最初五百弗を払ひ残りの四千五百弗は十日以内に払ふ約束であると云ふ報道を訳出したが、一八七一年（明治四年）四月七日附のユニオン新聞には、若松コロニーの土地問題について、シュネルはキャプテン・ジョン・シュランの出張を乞ふて、その助力を願

つてゐる。

この六百英加の公有地はシュネルの知らない中に測量長官によってとりあげられ、競売に附されんとしたものである。しかしシュランはシュネルの事情をよく知つてゐたので、彼の改善した植民地六百四十エーカーを、一エーカー一弗廿五仙で払下げるやう議案をつくつた。「一三九頁」そして下院議員のサージエントがこの議案の通過のために尽力した。それですべての問題が解決したと報道してゐる。

しかし実際はこの若松コロニーの土地問題は、さう安々と解決しなかつたやうである。はじめての六百エーカーの山ランチを五千弗で、シュネルに売つた同じ独逸人チャールス・グレーブナーはシュネルが最初の五百弗を払つたばかりで、残りの四千五百弗を約東通りどうしても払はないものだから、この売買契約の履行を迫つてゐた。……

今この土地はヴィアカンブの所有に歸してゐた。若松コロニーのあつた土地にはオーク樹や灌木が茂つて、昔植ゑた茶の木や桑は一本も見当らぬ。ただ昔シュネルのゐたと云ふ現在のヴィアカンブの弟の任んでゐる庭に、シュネル一行の植ゑたと云ふ直徑二尺位の大きさの櫟の木が一本、密柑の老木が五六本、昔を物語るやうに残つてゐる。……

平松シュネルは若松コロニーの事業が思はしく行かず、土地が茶や生糸等を製産すること「一四一頁」が出来ないので非常に困つたらしい。持参した幾莫かの金は使ひ果して仕舞ひ、伴れて来た者には小遣さへ与へられず、全く窮境に陥つた結果、遂に意を決して日本に歸つた。それは明治四年の五六月頃と思はる。

彼について来た医師、大工の増水国之助、桜井松之助、大藤松五郎、一五郎、柳沢佐吉、タマキ（この人名詳

ならず、松井？）等は或は離散し、或は帰国し、中には在桑港の名譽領事ブルークスに歎願して、岩倉大使一行に助けられて帰国したものと云ふ。……〔一四二頁〕

松平スネール一家が、その後どこに行つたかは明らかでない。これを書きながら考へることだが、東部のボストン近くで松平といふ日本系混血の市長が出来た。松平大使がワシントンに居つた頃、「自分の先祖も東北の武士の關係者だと聞いた。もしやあなたと關係はないか」と聞いてやつたと、ぼくはワシントンで何時か聞いた。この松平と何か關係はないだらうか。……〔清沢冽「非常日本への直言」昭和八年、東京、千倉書房一一九頁〕

#### 日本移民史（第一回排斥）

明治十九年（一八八六）桑港に医師にして野心政治家であるシー・シー・オードネル〔川島伊佐美「日米外交史」昭和七年、一六頁〕なるものあり市長立候補の政策として日本人排斥を唱道し「ジャップ・マスト・ゴー」の看板を掲げて大に日本人排斥の氣勢を揚げた。是が排日の第一歩であつた。この頃からソロソロ日本人の在来者が増加し出した。〔一七頁〕

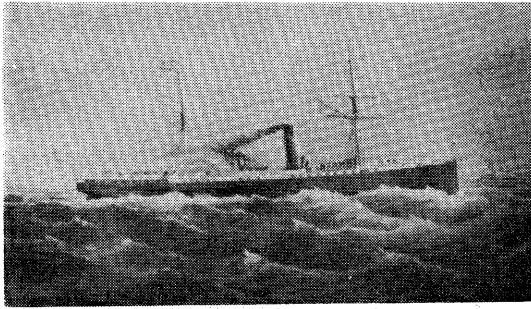
#### 学生隔離問題

日本人学生隔離問題は、千八百九十三年即ち明治廿六年の五月十四日に始めて桑港に於て發生し、時の桑港市教育委員会に於て委員ポークの發議にて今後日本人学生にして公立学校に入らんとするものは支那人学校に入らしむ可しと主張し決議せんとしたが時の桑港領事珍田捨巳及び故〔一七頁〕ハリス美以総理其他有志の極力奔走反対運動により漸く撤回された。〔一八頁〕

#### 米布合併と日本移民

我が日本では明治四年の七月に布哇と修交通商条約を締結し、更に明治十九年一月二十九日、日本と布哇との

移民条約を締結し、爾來日本政府は続々移民を布哇に送り、布哇全島は日本人が最も多数となるに至った。その後千八百九十三年即ち明治廿六年に米國は布哇と合併条約を締結したが、我が國では別に正式の抗議をしなかつた。然し其以後千八百九十七年の六月十六日に更に改めて新米布合併条約を締結したので、時の米國駐劄



最初の移民船の画  
(サンフランシスコ日本領事館所蔵)

公使星亨をして米國政府に対して正式の抗議を申込ましめた。其根拠とする所は「布哇島の独立は太平洋に關係を有する諸國の相互和親に最も必要なり。米國と布哇島との合併は日布條約上日本の有する既得權の侵害なり」と謂ふにあつた。……〔二二頁〕……米國政府は合併はなすも特に日本臣民の既得權に影響を及ぼすが如き事をせざる可しといふ約定をなし、日米兩國間の友情を害するが如きことなくして事已んだ。〔二二

頁〕

#### 日本移民の増加

日清戦争以後此歳（一八九八年比島米國領となりし年）に至つて日本より米國への移民は次第に其数を増し、殊に布哇より転航するものが著しく増加して来たので米國政府は急に警戒を加へ出し、特に移民調査官を日本に派遣し調査せしめて之を議會に報告せしめた。〔二二頁〕

#### 排日決議

千九百年即ち明治三十三年の五月七日には桑港に日本人排斥の市民大会が開かれ、時の市長ジェムス・フキラ

ン及びスタンフォード大学教授ロス等は排日大演説を試み、太平洋労働同盟は日本人の排斥決議をなした。是は米西戦争後布哇転航其他日本より直航により桑港市及び地方に日本移民の激増した為めである。〔二三頁〕

千九百〇四年來加州に於ける排日運動は日に悪化の形勢を示し同年米國労働聯盟は年会に於て公けに排日を言し、翌五年桑港クロニクル紙盛んに排日の記事を掲げて煽動し、同五月桑港に労働派の日韓人排斥協會を組織する等排日運動は愈よ重大化したので、之に対抗の爲め加州邦人間に前記の在米日本人聯合協議會組織され、次いで各地に之と聯絡の日本人協議會が起つた。而して右在米日本人聯合協議會は引きつづき代表者會を開催し排日融和策、民族の發展、日本人の帰化權獲得、日白結婚許可運動等の事を議した。〔二八頁〕

学童排斥隔離問題〔明治三十九年〕

……桑港の排日氣勢は悪化し、既に其発端を千八百九十三年（明治廿六年）に出だして居る日本人学童の隔離教育は俄然として再燃し來り、〔註・一九〇六年四月十八日起れる桑港震災と公立学校崩壊焼失による校舍不足とに原由すと云ふ〕千九百〇六年（明治三十九年）十月十一日桑港市教育課は前年五月密かに東洋人学童隔離教育案を内定し置きしを實現せしめんとし、突如我が就学兒童に公立学校より退校を命じ、東洋人の爲めに設けられたる隔離学校に入る可きを命じた。在留邦人は驚駭と共に忽ち之に反抗するの運動を起し、華府駐在の青木大使は米國政府に強硬なる抗議をなし、竟に國際問題となり、大統領ルーズヴェルトは桑港市シユミッツを首府に召喚して再考を促し、猶ほ頻りに或は威嚇或は慰撫を以て加州の官憲に當り、学童隔離の撤回を迫つたが州の当局等は容易に聴かず、百方術竭きて竟に此難問題は布哇転航禁止と交換的に解決を見るに至つた。〔三〇頁〕

## 布哇転航禁止（明治四十年）

〔布哇〕転航禁止のことは学童復校の交換条件として実行さるるならんとの風説は明治四十年の一月十五日に伝ったが、在留邦人は未だ之を信ぜず、同一月三十日に在米日本人協議会代議員会は羅府に開かれ、大統領の教書中に在った日本人の帰化権獲得問題を始め当時抬頭しかけて来た土地所有禁止問題等に就き種々議したが、転航禁止の事には更に触れず散会したが次いで二月十五日に大統領ル氏が隔離学校事件解決の条件として愈よ移民条件改正案を議会に提出し、在留邦人の駭然自失、日本朝野の反対の声喧しかりしにも拘らず右の提案は二月十八日に愈よ米國議會を通過し同十九日大統領署名し七月一日より実施さると共に布哇、加奈陀、墨国、南米よりの日本移民転航は愈よ禁止さるる事となつた。〔三一頁〕

## 土地法第一案（明治四十年）

加州の州会に突如別箇の最も峻烈なる排日法が提出された。所謂ルスノ選出下院議員のドリユー土地案が是れである。ドリユーの「加州外人土地所有権制限案」は一九百〇七年（明治四十年）の二月二十八日に提出され苦もなく加州下院を通過したが、竟に大統領ル氏の干渉となり、加州知事シレットに中止の訓電を發して漸く事無きを得た。（三一頁）

## 米國実業団日本訪問

米國太平洋沿岸の実業家を日本に導き、一には日米の国状民性を知らしむると共に、日本と太平洋沿岸との実業的關係を一層密接ならしむるを急務とした。そこで曩に小池総領事は桑港の実業家と往復する間に、何気なく諸君一度び日本に遊びては如何と提議したが、座に在る一統の熱心なる賛成となり、其後実業家との往復を重ね

るに従ひ、漸次其の歩武を進め、或者の如きは、若し日本の諸商業會議所の招待あらば、更に妙なるべしと謎を掛くるに至った由で、小池総領事は更に米國実業家側の意嚮を慥かめたる上、状を具して外務省及商業會議所聯合会に交渉したが共に其計画に賛同し、商業會議所は協議の結果、東京、大阪、京都、横浜、神戸五商業會議所連名を以て、桑港、シャトル、ポートルランド、ローサンゼルス等の沿岸重なる商業會議所に向け、菊花満開の期節を以て、日本に來遊せられ度旨の正式の案内状を贈り來った。……〔四三頁〕さて日本の五商業會議所の招待状に接した桑港商業會議所は之を受納するや否やを總會に附議したが、満場一致を以て可決し、……其後……着々準備を整へ五十四名（内婦人廿名）の觀光隊は九月廿五日の天洋丸で日本に赴いた。小池総領事は右一行に満足を与へん為め自己賜暇を得家族同伴一行と共に帰朝した。右觀光隊員は桑港、タコマ、シャトル、ポートルランド、羅府、サンデーゴーよりの一流の実業家等で日本では米國戰艦隊と共に朝野挙つて彼等を歓迎した。〔四四頁〕

当時〔日露戰爭後〕の外務大臣小村侯爵は此の傾向〔亜米利加の日本移民に対する感情の悪化〕を非常に憂慮して、種々交渉の結果、例の紳士協定が成立しました。これは明治四十年であつたかと思ひます。其際小村侯爵から次の様な話を聞きました。此時は益田孝氏も一緒だつたと記憶して居ります。

「移民問題は兎に角紳士協約で一時的のつなぎはつけたが、永久に安心しては居られぬ。何とか考へねばならぬと思ふが、米國は輿論の國であるから、直接國民に強い感じを与へるのが最も適當と思ふ。それには単に政府の樽俎折衝のみでは効果が挙らぬ。國民外交が必要であるから、商業會議所辺りで心配して欲しい。」

私は大いに共鳴したが、益田〔孝〕君は起たなかつたのであります。此年〔明治四十年〕に、東京及其他各地



の商業會議所が、米國太平洋沿岸の八商業會議所の人々を招待して交歓することになりました。之が西國國民外交の始まりであります。米國からは婦人も混つて五十人余り見えたのであります。私は其前年、東京商業會議所の会頭は辞して居たのでありますけれども、私の次に会頭となつた中野武官君から相談を受け、私も喜んで同意し、多少の幹旋をしました。各地の歓迎も宜しきを得ましたので、一同大層悦んで歸られた様でありました。それから翌年、太平洋沿岸の商業會議所の評議で、日本の「白石喜太郎」「渡沢栄一翁」昭和八年、五一五頁」実業家を招待することになりましたので、之に應じて日本から渡米実業団を組織して、五十人ばかり米國を訪ねることになり、私が団長となつて行きました。」「五一六頁」

#### 紳士協約と太平洋協約（明治四十一年）

斯く日米兩國が交歓を行つて居るうちに千九百〇八年（明治四十一年）六月に日米間の紳士協約は実行され、日本の外務省は移民の渡航に自発的制限を加へ出した。また同年の十二月には日米の兩國間に「太平洋條約」が締結された。

#### 排日諸案（明治四十二年）

千九〇九年即ち明治四十二年は加州々開會の年であり、排日問題で随分喧ましく、多事なる歳であつた。第三十八加州議會は一月四日を以て開會されたが劈頭に排日案は続々として提出された。其重なるものは

市民にあらざる者の土地所有禁止法案

日本学童隔離教育法案及亜細亞人居住区域制限法案

市民に非らざるものの諸法人団体重役禁止法案（日米外交史）（前出書四四頁）

市民にあらざるものの児童に教科書の無料貸与禁止案

等て其他直接間接に日本人を圧迫し日本人の権利を剝奪せんとする諸法案が數十通提出された。中には米國憲法及び日米通商条約に違反して居るものも尠くなかつた。然し知事シレット氏始め当時の州會議員の多数意嚮は寧ろ此際峻烈な排日立法をなすは宜しからず。日本移民問題は日米兩國政府の協商に依つて一段落を告げたから……竟に大統領に電請して其干渉を乞ひ極力運動して此多数の排日案を否決或は撤回せしめた。……〔四五頁〕

日本実業団渡米（明治四十二年）

其後米國実業家は、日米親善の一策として又日本の欲待に酬ゆる処あらむとして、帰來直ちに日本実業家を米國に招待する計画を起し、結局太平洋沿岸聯合商業會議所の名を以て日本に招待状を發し、而して米國國務省及び我外務省亦陰然尽力する処あつて、我商業會議所は招待に応ずること〔五五頁〕となつた。

渡米実業団は、洪沢男爵を団長とし、中野東京商業會議所會頭、土井大阪商業會議所會頭、西村京都商業會議所會頭、大谷横浜商業會議所會員、松方神戸商業會議所會頭、上遠野名古屋商業會議所副會頭を初めとし、六市の名ある実業家、同夫人、専門家及び隨員を合せて五十二名を以て成り、九月一日シヤトルに上陸……〔五六頁〕十一月卅日の便船で帰朝の途に就いた。実業団の米國に逗まる日数九十日、道程殆んど一万哩に近く、往訪の都市七十有余、……兎に角此行は日米民間の親善に非常に有功のものであつた。〔五七頁〕

ジョーダン博士の訪日（明治四十四年）

明治四十四年に入り米國より或は団体として、或は個人として日本を訪問したもの少くない。団体としては市俄古実業家の觀光団、米國鉸山業者の觀光団の如き、個人としては……スタンフォード大學總長ダヴィッド・ス

ター・ジョーダン博士、紐育日米協会頭リンゼー・ラッセル氏雑誌インデペンダント主筆ハミルトン・ホルト氏等の日本訪問は日米親善に多少の意義あるものとして歓迎せられた。就中ジョルダン博士の各所に於てなしたる平和演説は、日本国民に強き印象を与へ大なる反響を起した。〔一一四頁〕

#### 在留日本人故国名士招待（明治四十四年）

在留同胞は進んで同胞が如何に堅固に發展しつつありや、加州産業界の如何なる地位勢力を占め居るや、加州に於ける日米人關係は如何なる状態にありやを、事實ありのままに内外に知らしめ、誤解を一掃し、信用と同情とを喚起し、以て同胞の運命を開き、来らんとする機会を失はぬ様發展の地歩を進めざるべからずといふので、故国に於ける識見高き公平なる数名の名士を招待し同胞發展実況の視察を乞ひ、其真相を内外に紹介し同時に同胞の進まんとする方針に就て指導助言をも乞ふ必要ありとの説漸く高くなつた。四十四年六月下旬、北部加州日本人基督教徒の聯合機關たる基督教伝道団が代議士島田三郎氏を招待する事に決した事動機となり、七月上旬には一部有志の間に故国新聞記者招待の説起り之が在米日本人会参事会の議に上るに至つた。各政党より一名づつての代議士の外に二名の学者を招待することとなり、既に伝道団の招待に應じたる島田三郎氏を在米日本人会の招待と變じ、其他の人選を男爵渋沢栄一氏に依頼するに至つたが、渋沢男は島田三郎氏の外に米國東部六大学の招きに應じて講演の爲め渡米することになつて居た農學博士・法學博士新渡戸稻造氏を約十日間加州に滞在せしめ島田氏の活動を応援せしむる事に決し、此二氏を以て在米日本人会の〔一二〇頁〕求めに應ずることとした。島田、新渡戸の両氏は八月三十日横浜解纜の春洋丸に搭じ、九月十六日桑港に到着し在留日本人の熱誠なる歓迎を受けた。〔一二一頁〕

ラッセルと日本の社会

明治四十四年後半期会長ラッセル氏はホルト博士と共に日本を漫遊し各方面の歓迎を受け、日本の朝鮮に於ける事業、日本の満州事業日米間に誤解せらるる要点等に就て各所に講演をなし、十二月上旬帰紐……〔一三三頁〕

エリオット博士

〔エリオット〕博士はカーネギー平和財団の使命を帯び世界漫遊の帰途明治四十五年六月十一日日本の新領土朝鮮京城に着し、十二日寺内総督の午餐会に臨み其夜講演会に一場の平和演説をなし……〔一三三頁〕……日本に滞在すること前後一ヶ月にして学校に、公会に、工場に多大の印象を残し七月十三日午前十一時五十五分内外貴顕紳士数十名に送られ鉄道院の特別列車で新橋を発し、即日横浜出帆のサイベリア号に搭じて帰米の途に就いた……〔一三六頁〕

島田三郎と平和協会大会



島田三郎

代議士島田三郎氏は明治四十四年後半日本人の実状視察を乞はんが為め加州在留同胞が主催となり招待したるものであるが、同年十二月八日米国に於ける平和〔一三七頁〕協会の大会華盛頓府に開かれると招かれて同地アメリカン・ユニオン・ホールに於てタフト大統領、上院議員セオドル・エバートン、下院議員ダビット・フォスター、米国議員会議長リチャード・バートホルト氏等と共に当時タフト大統領と米国上院との間に一問題となれる「英・

米・仏仲裁条約」に就て一場の演説を為した島田氏は日米間過去五十余年間の交誼を叙し……〔一三八頁〕  
日米交換教授としての新渡戸博士

カーネギー平和財団第三部長にしてコロンビア大学総長たるバトラー博士等は日米両国相互の知識欠陥より生ずる非平和的結果を憂慮し、日米交換教授の急務なるを主張したので明治四十四年末より之が実行を見るに至った。

法学博士農学博士新渡戸稻造氏は日米交換教授日本側の第一人として明治四十四年九月桑港に上陸在米日本人会の招待に応じて加州各所に十数日間の講演をなした後、ブラウン大学、コロンビア大学、ジョンズ・ホプキンス大学、ヴァージニア大学、イリノイ大学、ミネソタ大学等の六大学、其他各地の招待に依りて前後九個月間に亘り日本の文明、日米親善に関する大小百四十回の講演をなしたが一般に大なる印象を与へ、従来米国と欧州諸国との交換教授中空前の成功を贏ち得たと称せられた。〔一三九頁〕

#### 土地問題と日本名士渡米（大正二年）

加州土地問題漸く險悪となり日米国論沸騰するや日本の政治団体〔二七五頁〕実業団体は代表者を米国に派遣し親しく在留日本人を慰問せしむると同時に、日米問題の解決に尽力せしむるに至った。千九百十三年四月十八日立憲国民党は其党議に基き在米日本人会に宛て「加州の排日問題に關し同情に堪へず、本党は同問題に対し諸君と根本的解決に一致し度き為め服部綾雄を渡米せしむべし」と電報し來つたが、同月二十八日には政友会に於ても国民党と同一の趣旨により貴族院議員江原素六を渡米せしむることに決し、五月二日には排日運動防止、日米兩國の和親増進を目的として在野政治界、実業界、学界の有力者により組織せられたる日米同志会は特に法学

博士添田寿一及神谷忠雄を派することに決した。

政友会代表江原素六は山本邦之助と共に五月三日横浜を発し十九日桑港着、加州各地日本人の散在する地方を歴訪し其実状を聴取し、在留日本人主催の演説会に臨み希望所見等を披瀝し、又米人有力者間にも接衝する所あり約二ヶ月間を加州に送り、夫れよりオグデン、ソートレーキ、デンバー、ワシントン、ニューヨーク、ボストン、トロント、シカゴ、バンクーバー、シヤトル、ポートランドを経て帰桑すべき旅程に上り各地に於て学者、実業家、有志家の歓迎を受け八月一日帰桑し同月十二日桑港を発し布哇を経て帰朝の途に就いた。

服部綾雄又江原素六一行と同船渡米加州各地を歴訪し親しく実状を視察し、日本人間に接衝講演演説〔二七六頁〕等をなした後六月三十日よりオレゴン州ポートランドに開催した万国基督教市民大会（一万余の会衆）に列席、日米問題に関して演説をなし、夫れより約四ヶ月間シヤトル及英領晚香坡附近に滞在専ら日米問題の解決策に就て攻究する所あった。

添田寿一、神谷忠雄の一行は五月十日横浜を出帆し、同月二十六日桑港に上陸したが、当時問題は華盛頓に移つて居たので、江原、服部及び在留民の代表者等と協議をなし、加州地方の視察範圍を一先づ重要な部分に止め……六月十二日桑港を発し華盛頓に赴き珍田大使、大統領、國務卿其他民間の有力者に対し加州に於ける日米人の状況態度を具陳し、特に大統領、國務卿に向つて在留日本人は米国政府が正義公道によりて必ずや満足なる解決を与ふべきを確信し、信頼と希望とを以て忍耐謹慎速かに最終の断案の下るを待ちつつある旨を陳述し、夫れより紐育に転じ有力なる政治家、実業家、学者及び新聞雑誌の關係者と会見し、在留日本人の実状を説明すると同時に一般に懷抱せる誤解誤謬の弁駁匡正に力め、更に日本国民の米国に対する希望を述べ……〔二七七頁〕

## 井深先生の渡米

直接土地問題の調査及び之が解決を目的としたのではないが、或は日米交換として或は各種万国〔二七八頁〕会議に出席の序を以て或は欧米視察の序を以て特に米国に來り、各其異なる方面より日米兩國の親善の爲めに尽力したる数名の人士があつた。即ち帝国大学教授文学博士姉崎正治がハーバード大学外米國七大学にて、日本の宗教、道德、哲学、文学等の講義をなすべく八月廿一日日本を發して渡米したのと元田作之進、井深梶之助、津田梅子、小崎弘道等の宗教家が万国基督教市民大会、万国学生大会、万国日曜学校大会に出席の序を以て各地に日米親善の爲め尽力する所あつた。……〔二七九頁〕

## 加州外國人土地法（一九一三年）

第一 加州外國人土地所有禁止及ヒ借地權制限ニ関スル法律

第一條 合衆國ノ法律に拠リ、市民權ヲ取得シ得ル外國人ハ、外ニ法律ヲ以テ規定スル場合ヲ除キ合衆國市民ト同一ノ形式ニ拠リ不動産ヲ享有シ又ハ転売シ、遺産ヲ相続シ、又ハ或ル權利ヲ取得スルコトヲ得ト雖モ他ノ場合ハ之ヲ禁ス而シテ農作地トシテ土地ヲ賃借スル時ハ三ケ年ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條 本州又ハ他州或ハ外國ノ法律ニヨリ設置セラレタル会社、組合又ハ法人ノ株主ノ過半数カ本法人カ從屬セル國家ト合衆國政府ト締結セル條約ノ明文ニヨリ不動産ヲ享有シ又ハ転売シ遺産ヲ相続シ又ハ或ル權利ヲ取得スルコトヲ得ルト雖モ他ノ場合ハ是ヲ禁ス而シテ農作地トシテ土地ヲ賃借スル時ハ三ケ年ヲ超過スルコトヲ得ス〔二三三頁〕

第五條 本法實施後第二條ニ明示セル外國人又ハ第三條ニ明示セル会社、組合又ハ法人カ本法ノ規定ニ反シ取

得シタル不動産ハ之ヲ没収シ「カリフォルニア」州ニ帰属セシム

本条及第二、第三条ハ現有スル或權利ノ行使ニヨリ又ハ先取特權裁判確認權等ノ行使ニヨリ当然取得ス可キ不動産ニ対シテハ其權利ヲ行使スル外國人又ハ外國会社ノ所有トシテ存続スル限り之レヲ適用セス〔二三四頁〕

四月廿八日國務卿、フライアン、サクラメント入市、知事、上下兩院領袖と協議をなす。

五月二日賛成三十六票、反対僅かに二票を以て上院通過

五月三日賛成七十二票、反対僅かに二票を以て下院通過

フライアン國務卿五月三日土地案の下院本會議に附せられし東都へ向う。

五月十九日加州知事ジョンソン排日土地法に署名をなし、同案州法なとる。

### 来るべき加州土地法

日米兩國政府が、千九百十一年に締結せる日米通商條約と加州市民が希望しつつある排日法とは両立せず、故に來〔三月〕十三日大統領ウエルソン氏に代りて内閣を組織す可き新大統領は日米通商條約を破棄して新日米條約を締結せざる可からず。日米通商存在する間は日本人排斥は違法なり。米國政府は所謂紳士協約に依つて辛うじて日本人の渡米を制限する外なし、然るに加州市民は日本は紳士協約を無視しつつありと云ひ、更に嚴重なる排日法を実施すべく努力しつつあり。

日米通商條約には農業用地の所有及び賃借に関する規定なし。故に日本人に対する加州の農園所有禁止法及び農園賃借制限法は違法に非ずと解釈せらる。加州市民は十一月の一般投票に依つて土地賃借をも嚴禁し、更に米國出生子女を利用する会社又は後見人〔の〕制度を禁止せんとしつつあり。加州市民の説によれば新排日法も日



米条約に違反せずとの事なるが、他方に於て右は条約違反なりとの説あり。

然るに加州市民は土地法上の排日を以て満足せず米国に出生せる日本系子女の市民権を剝奪し根本的に日本人を排斥すべく希望しつつあるが、右は米国の憲法を修正して始めて効用を生ずるものなり。然るに憲法修正は頗ぶる困難なり。以上の諸問題を綜合するに米国政府は(一)一九二三年を以て無効となるべき日米通商条約と紳士協定とを修正し、更に(二)米國憲法を修正せざる可からず。……(一九二〇年九月廿日華府電報、五三二頁)

#### 一般投票(一九二〇年十一月)

加州排亜協会の発案になる加州外人土地法修正案(第土地法)は十一月三日の加州一般投票に依て賛成六十六万八千四百八十三票反対廿二万二千〇八十六票(五三七頁)の大差で通過し、愈々十二月九日より実施さるる事となった。

#### 加州民ハ左之法律ヲ制定ス

第一条 合衆国国法ニ拠り合衆国市民タルコトヲ得ル總テノ外国人ハ合衆国市民ト同一方法及同一範圍ニ於テ本州内ニ於ケル不動産又ハ不動産上ノ權利ヲ取得、保有、使用、讓渡及相続スルコトヲ得但シ本州ノ法律ニ別段ノ規定アル場合ハ此限ニアラス

第二条 第一条ニ掲ケタルモノ以外ノ外国人ハ合衆国政府ト当該外国人ノ本国トノ間ニ存在スル現行(五三八頁)条約ニ規定セラレタル方法、範圍、目的ニ於テノミ本州内ニ於ケル不動産又ハ不動産上ノ權利ヲ取得、保有、使用及讓渡スルコトヲ得

第三条 本州、他州又ハ外国ノ法律ニヨリ組織セラレタル会社、組合又ハ法人ニシテ其社員又ハ組合員ノ過半

数力第一条ニ特定セル以外ノ外国人ナルカ又ハ其発行株式ノ過半数力是等外国人ノ所有ニ係ル場合ハ該会社、組合又ハ法人ノ合州国政府ト当該社員、組合員又ハ株主ノ本国トノ間ニ存在スル現行条約ニ規定セラレタル方法、範圍、目的ニ於テノミ本州内ニ於ケル不動産又ハ不動産上ノ權利ヲ取得、保有、使用及讓渡スルコトヲ得、合州国政府ト第一条ニ特定セル以外ノ外国人ノ本国トノ間ニ存在スル現行条約ニ規セラレタル方法、範圍、目的ニ於テノミ将来当該外国人ハ農業地ヲ取得、保有、使用又ハ讓渡スルノ権能ヲ有シ又ハ有シ得ル会社、組合又ハ法人ノ社員又ハ組合員ト為リ又ハ之レカ株式ヲ取得スルコトヲ得。

第四条 第二条ニ掲ケタル外国人及第三条ニ掲ケタル会社、組合又ハ法人ハ将来之ヲ未成年者ノ財産中本法ノ規定カ該外国人、会社、組合又ハ法人ニ対シ取得、保有、使用又ハ讓渡ヲ禁止セル部分ヲ管理スル後見人ニ任命スルコトヲ得ス 当該郡ノ公定管理人其他適當ノ個人若クハ之ヲ本条ノ規定ニ拠リ後見人ニ任命セラルル資格ヲ有セザル者ヲ両親トスル未成年市民ノ財産ノ後見ニ任命スルコトヲ得〔五三九頁 註記・本土法には農業土地の貸借の条項を見ず。〕

埴原大使の警告（一九二四年）

排日条款附移民修正法案に対する抗議とも見る可き埴原大使の國務卿ヒューズ氏〔Charles Hughes〕に宛つた意見書は四月十一日ヒューズ氏より上院移民委員会に回附し、同時に公表されたが、埴原大使は「米國議會懸案中の排日的移民法条款が遂に日米兩國間に於ける親善なる關係に齎らすべき重大なる結果に對し、充分なる考慮を払はれん事を望む」といひ、更に「日本政府は若し必要の際に於ては現行紳士協約の改正又は變更交渉を為さんことを欲す」と述べたが、其大要は左の如くである。

「紳士協約は日本政府が米国政府と締結せる協定にして日本政府は之に依り自発的に日本労働者の米国移住を防遏する対策を採用施行せんことを試みたるものにして、移民法制定に關する米国の主權に制限をなさんと欲するものに非ず。日本政府は紳士協約の規定を最も慎重に且忠実に履行し來り猶引續き之を遵守せんとする用意成れり。〔七〇二頁〕故に日本政府は之と交換的に米国政府が必要の際に於て、議會に日本国民の正当なる感情を痛く毀損するが如き議案を通過せしむる事なき様勧告をなす事あるを信頼するものなり。〔七〇三頁〕」

#### 一九〇八年の紳士協約

埴原大使は「紳士協約の目的の一は同協定に除外せられし以外の日本労働者の米国渡航を禁止するにあり」と述べ、其協約の要綱及び日本の旅券発給に就て左の如く述べた。

(一)日本政府は米国帰住者及び其両親、妻、廿歳以下の子女を除く外、熟練又不熟練を問はず一般労働者に米国行旅券を發給せず

(二)日本政府は外務監督の下に特別官憲に依り旅行券の發給を管掌せしめ当該官憲は学生、商人、旅行者其他の渡米許可出願者ある際に於ては旅券發給前に申請者の渡米後労働者に変更する疑ひなきと確むる為めに充分なる調査をなし、再渡航者に対しては在米日本領事館の在留証明を提出せざれば之に対し旅券を再下附せず。

然るに米国議會懸案中の新移民法の主眼は米国民の觀察に従ひ、日本人を好ましからざるものなりと烙印を捺し、差別的に排斥するにあり、然し新法案実施の曉に於ても僅に一年日本人百四十六人を排斥し得るに止まらざる可し、常に國際交渉に於て正義と公正とを高唱する米国民が僅々此百四十六人を排斥する為め兩國關係親善を毀損するが如き斯の如き移民政策を制定せんとする真意は吾人の諒解に苦しむ所なり。〔七〇三頁〕

## 米國兩院反感を増す

此埴原大使の警告書は移民法案の通過防止に効力あるものとして揭示された〔七〇三頁〕ものであるが、却つて兩院議員等を激発し、独り排日派のハイラム・ジョンソン、ショートリッヂ其他の西部州選出議員等のみならず、従来比較的穩健の態度を持し、或は寧ろ日本擁護の地位に立つた東部の上下兩院議員等まで俄に激昂し態度を改むるに至つたのは頗る遺憾な事である。……共和党領袖ロツヂ上院議員は「埴原大使が國務卿ヒューズ氏に送れる書状は一強国使節が其友邦国に宛てたるものとしては穩当ならざる事を遺憾とす。同書中には包まれたる威嚇あり、故に予は紳士協約を承認せんとする移民法修正案を後援するを得ず、移民問題は國家根本主義に属する最大なる問題たり、移民の支配權を喪失せる國は獨立國に非ず」と云ひ、従来親日的であつた上院議員リード氏さへ「埴原大使の抗議は著しく形勢を悪化せり、吾人は今やなるべく穩便に事を解決せんとせる態度を変へ、余儀なく排日條款を採用せざる可からざるに至り……」と論じた。〔七〇四頁〕

## ジョンソン法案米國議會を通過す

斯くして米國議會の形勢は急転悪化し、四月十二日下院に於て「千八百九十年の國勢調査に基づき移民を二分率に制限し、排日條款を包含するアルバート・ジョンソン氏立案の新移民法案」は僅か五分間討論の後採決となり、賛成三百二十二票、反対七十二票にて通過し、問題の紳士協約は自然消滅するに至つた。

〔四月〕十五日上院は「日本移民絶対禁止の所謂排日條款を新移民法案中に挿入する案」を採決し、満場一致で通過した。〔七〇五頁〕

上院は〔四月〕十五日排日條款法案を通過したが、其時は欠席者尠なくなつた為め其翌十六日再び之に採決

を試みたが、同日の結果は七十一票対四票で正式に再通過した。〔七〇六頁〕

### 新移民法の効果

新移民法は愈々排日条項付きにて七月八日より実施さるる事となり、一八九〇年の国勢調査に基き其二分率を東洋人外の欧州其他の外国人移民に入国を許容するもので、毎年外国移民総数を十六万九百九十人に制限し、現行の一九一〇年の国勢調査三分率即ち毎年の入国数三五七、八〇一人を半減以下に切下げるものである。其割当率は左の如くである。

#### 〔現行法〕

#### 〔新法〕

英国	七七、三四二	六二、四五八
独逸	六七、六〇七	五〇、一二九
伊太利	四二、〇五七	三、八八九
波蘭	三〇、九七九	八、八二〇
露国	二四、四〇五	一、七九二
瑞典	二〇、〇四二	九、五六一
チエック	一四、三五七	一、八七三
諾威	一二、二〇五	六、四五二
羅馬尼亞	七、四一〇	六三一
澳太利	五、七二九	三、八七八

丁 抹

五、六一九

二、七八二

匈牙利

五、七四七

四八八

〔七二九頁〕

### 千九百廿五年移民法

第十一条(A) 各国民ノ年歩合ハ千八百九十年ノ合衆国々勢調査ニ於テ決定セラレタル合衆国大陸内ニ居住セル当該国籍ノ外国出生者總數ノ百分ノニタルベシ、尤モ各国民ノ最少歩合ハ百名タルベシ〔七五一頁〕

第十三条(C) 合衆国市民トナルコトヲ得サル外国人ハ左ノ場合〔註・大凡非移民〕ヲ除キ合衆国ニ入国スルコトヲ得ス〔七五七頁〕

### 日本人後見人出頭否認（一九二三年）

土地法修正の新法市民権なき外国人後見人禁止法は愈々八月十六日より実施されたが、サンタローザ居住河田密人氏は二人の米国生れの子供の爲ある養鶏場として土地を購入し、壹万弗を投じ自分は其後見人となり監督に当らんと其許可をソノマ郡上級裁判所に出願して右新土地法に觸るるの故を以て判事サムソン氏より十月十七日拒否された。〔六七二頁〕

### 借地権試訴敗訴（一九二三年）

予て合衆国大審院に上告中であつた水野、ポータフキールド借地権試訴及び華州中塚テレースの借地権試訴は共に十一月十二日敗訴と決し「合衆国大審院は加州及び華州の土地法は憲法に違反せず、又日米両国間に締結さ

れたる通商条約に違反する所なし」と判決があつた。〔六七三頁〕

在米日本人人口

Total Japanese population, 1870—1930:

一八七〇	五五
一八八〇	一四八
一八九〇	二、〇三九
一九〇〇	二四、三二六
一九一〇	七二、一五七
一九二〇	一一一、〇一〇
一九三〇	一三八、八三四

[From "Fifteenth Census of the United States: 1930. Population." Vol. II, p. 32, Table 4.]

Proportion of native—to foreign-born Japanese, 1900—1930:

Year	Native	Foreign-born
一九〇〇	二六九	二四、〇五七
一九一〇	四、五〇二	六七、六五五
一九二〇	二九、六七二	八一、三三八

第九篇

一九三〇 六八、三五七 七〇、四七七

[From "Fifteenth the Census of the United States: 1930. Population." Vol. II p. 34 Table 8.]

[Rodman W. Paul, "The Abrogation of the Gentlemen's Agreement," p. 105.]

Japanese Immigrant Aliens admitted to the United States, including Insular Possessions:

一八九九	三、三九五
一九〇〇	一二、六二八
一九〇一	五、二四九
一九〇二	一四、四五五
一九〇三	二〇、〇四一
一九〇四	一四、三八二
一九〇五	一一、〇二一
一九〇六	一四、二四三
一九〇七	三〇、八二四
一九〇八	一六、四一八
一九〇九	三、二七五
一九一〇	二、七九八



一九二七		六六〇
一九二六		五九八
一九二五		六八二
一九二四	八、四八一	
一九二三	五、六五二	
一九二二	六、三六一	
一九二一	七、五三一	
一九二〇	九、二七九	
一九一九	一〇、〇五六	
一九一八	一〇、一六八	
一九一七	八、九二六	
一九一六	八、七一一	
一九一五	八、六〇九	
一九一四	八、九四一	
一九一三	八、三〇二	
一九一二	六、一七二	
一九一一	四、五七五	

一九二八	五二二
一九二九	七二六
一九三〇	七九六
一九三一	六二六
一九三二	五〇三

〔一〇八頁〕

〔菊田貞雄井深先生關係資料第十一冊〕

布哇移民の由来と経過

菊田貞雄

井深先生關係資料

布哇在住日本移民三期

- 出稼ぎ時代 明治十八年（一八八五）より同四十年（一九〇七）迄の二十二年間
- 定住時代 明治四十一年（一九〇八）より大正十三年（一九二四）迄の十七年間
- 永住土著時代 大正十三年（一九二四）以後
- 出稼ぎ移民時代は、官約移民、私約移民、自由移民の、三種の移民が次々にハワイに渡航した時代で、移民の

入国、帰国、及び米大陸転航などで、出入りや移動が頻繁に行はれ、兎角腰の定まらぬ時代であった。〔山下草園「日本布哇交流史」昭和十八年、東京、大東出版社、三三七頁〕

明治十八年（一八八五）に始まった官約移民は、三ヶ年の労働契約で、一ヶ月二十六日働き、賃銀十二ドル五十仙の出稼移民であった。彼等の最大目的は短期間に出来るだけ多額の金を貯へて、錦衣帰郷することになり、帰り得ない者は、「辛棒」の出来ぬ落伍者の如く看做された。……その後明治二十年代の終り頃になると、来る者、帰る者の外に「あすの日」と「より良き賃銀」を求めて、アメリカ大陸に転航する者が激増し、生活の不安定と人心の動揺著しく、移民達は誰も彼もが、みな遣瀬無い気持であった。

この頃盛んに唄はれた俗謡「ホレホレ」節には、次のやうなものがある。

「一回二回デヨ、帰らぬ者は、末はハワイの甘蔗の肥」

「行かうかメリケン、ヨ、戻るか日本、ここが思案のハワイ国」〔三三八頁〕

官約移民 明治十八年（一八八五）二月八日ホノルルに入港した第一回船東京市号以後、明治廿七年（一八九四）六月廿八日ホノルル到着の三池丸まで、廿六回に亘る定期移民船、臨時船又は其の他の便船にて、渡布した官約移民は、総数二万九千百三十九名で、中女子五千七百九十九人に及んでゐる。

私約移民及自由移民 更に明治二十七年七月以降、同三十一年（一八九八）米布合併と（三三九頁）共に私約移民が禁止されるに至る迄の五ヶ年間に、ハワイに入国した私約移民は、四万二百八人に及ぶ。其の後移民は一時中止されたが、明治三十四年（二九〇一）八月一日、日本が再び移民を許可するに至ってから、同三十九年（二九〇六）七月一日までの自由移民の渡布は、三万六千四百九十三人に上り、明治四十一年（二九〇八）一月

実施のルート、高平の紳士協約に依り、新移民の渡航が禁止されるまでを通算すれば、自由移民は六万八千三百二十六人となつてゐる。

呼寄移民 明治四十一年（一九〇八）一月以降、大正十三年（一九二四）米国排日移民法実施に至るまでの、呼寄移民の渡布は六万二千二百七十七人（米大陸よりの入国も含む）に上り、之が内訳は男子二万六千五百三十人、女子三万六千二十三人子供五千五百十一人にて、女子が男子の数を一万も凌駕しているのは、写真結婚花嫁の渡布に依るものである。〔三四〇頁〕

官約移民に対する知事の諭告

明治廿六年広島県知事から、県出身の移民に与へた告諭に、次の如く明確に指令している。

「広島県民布哇出稼者に告ぐ。茲に出稼者は最 愛 なる父母妻子に離れ三千里の波濤を躓え遠く彼の国に赴くものにして其の目的は金銭を儲蓄て他日故郷に帰り安穩に世を渡らんとするに外ならず 今此金銭を得んと欲せば品行を方正に職業を務めず 法則を守らず尚も利慾の爲めに無頼の徒に加はり不良の行を爲すことあらば辛苦して得たる金銭は忽ち消尽して遂に飢餓に迫り進退維谷の場合に臨んで後悔を噛むとも豈及ばんや依て今出稼者の為に最注意すべき事柄を左に掲げれば日夜之れを心肝に銘じて忘ることなく以て能く三年の労働を為して富を致し 解約の期至らば必ず速に郷里に歸るべし行け各自愛せよ

広島県知事從三位勲二等 鍋島 幹 〔三五五頁〕

一、日本帝国の臣民たる事を忘れず、恥を海外に貽す可らず

一、雇主に対しては常に契約を守り信実を以て仕ふべし 苟も浮薄の行為あるべからず

一、同輩者中は親子兄弟と心得相扶持し決して喧嘩等を為す可らず

一、賭博は布哇国に於ても禁制なれば決して之を為す可らず

一、飲酒は精神を弛め稼業を怠り悪事を誘引するの基なれば慎みて之を用ふ可らず

一、金銭は常に大切に取扱ひ其の預入れ又は郷里へ送方総て監督官に尋ね合せ其の指揮に従ふべし決して輕忽に為す可らず〔三五六頁〕

#### 布哇移民草分（明治元年）

斯くて、明治政府の最後の返答を待つこと、凡そ二十七時間、真夜中が過ぎて慶応四年（一八六八）旧四月二十五日の数秒が刻まれると、消燈したシオット〔“Sicoto” a British sailing ship〕号は、錨を揚げて静々と動き出した。その瞬間、日本最初の某国移民の海外渡航史の一頁が、ひっそりとした闇の中に始められたのである。

〔一六六頁〕

これ等移民男女百五十三名（人数には他に、百四十二名、百四十三名、百四十八名、百五十名などの説あり）の外、シオット号の乗組員は船長レーガン以下、移民輸送人たるアメリカ商人〔一六七頁〕デイ・エト・バアウム、移民医デイ・ゼー・リー、及び船員十数名であった。出稼人の食糧品は、白米二十俵、玄米五百俵、味噌、醬油、薪も積んでゐたが、魚、鳥、野菜など種々不足のものが多かった。〔一六八頁〕

シオット号のホノルル入港は明治元年五月二日、西曆一八六八年六月十九日であった。〔一八八頁〕三十三日を要して布哇に着港す。〔一八五頁〕

## 労働契約条件

一、契約労働年限は三ヶ年にて、ホノルル到着の日より三十六ヶ月を数ふ。

一、賃銀は一ヶ月四ドル。

一、渡航船賃、来布後の住宅、食料、治療費等は、凡て耕地会社より給与す。

一、賃銀支払方法、賃銀は毎月一日、その半分を現金、半分を手形にて支払ふ。但し労働者が希望なれば、組

長〔二十五人毎に組を作る〕を通じて残余の半額を手形と引換へ、現金にて受取ることを得〔一九〇頁〕

## 布哇国王来朝と治外法権（明治十四年）

外務卿井上馨公は、ハワイ国王〔カラカウア王〕の御一行に対して、相手国の人々が事に当って何んなに暴慢で、不遜で、頑迷で、且つ不公平であるかを説き、それが如何に国際和親と交易との上に禍してゐるかを述べ、更に此条項が国際公法の精神に反することなどを、熱心に力説するのであった。

ハワイ国とは彼我の貿易殆んど無く、従つて治外法権制の有無は、ハワイ国の利害を左右するものでない故、何卒公正なる人道的御精神に基いて、之が破棄を聴許されたと、外務卿は懇請するのであった。説くところ理路整然、一語一語に力籠りてその熱意は相手の胸に次第に喰ひ〔二八三頁〕込んでいった。

一言も発せられず、静かに聴召されてゐたハワイ国王も、次第に井上外務卿の熱誠に動かされ給へば、國務長官にて又移民事務長官たるアームストロングも亦、その正義と熱意に感激を覚ゆるのであった。

……政府は又、ハワイ国に対しても〔条約〕改正運動を試みたことがあるが、其時は不幸にして成功しなかつた。然しハワイ内閣はアームストロング等の出発に際して、若しも日本に於て機会有らば、此の事項に關して日

本の外務大臣と、協議を遂げるやうに依頼したのであった。

……井上外務卿が、言々縷々と気魄を罩めて、説き且つ訴へれば、カラカウア王には御感動いと深き御面持にて傍らのアームストロングを顧られた。王の御意図を悟ったアーム〔二八四頁〕ストロングは、ここに於て井上外務卿に向ひ、陛下と予が個人的に協議を遂げる間、暫し待たれたしと申入れ、王と共に別室に去ったが、暫らくして再び姿を現はした。そして彼はハワイ国王侍立の上にて、ハワイ内閣を代表して言葉を改め、

「ハワイ国王陛下は、忠実なるその全閣員をして承認を与へしめ、日本との条約に於ける苛酷にして、不平等なる章句を廢棄することを茲に承諾するものである」

と井上外務卿に対して言明し、更に、

「ハワイ国王陛下は、日本皇帝陛下の御懇篤なる御接待を賜り居る上からは、正しく且つ友誼的な行動を、急速に執られるであらう」と述べた。

……斯くて日本が長い期間に亘って苦しんだ治外法権は、布哇との条約に関する限り、その改訂が確認せられたが、而かも此の事が一度公表せられる暁には、過去二十三年間日本の開港場に〔二八五頁〕於て、自己の利益の爲めに、屈辱的鉄槌を日本に与へた西洋各国は、漸次之に準じて改正の余儀なきに至るべく、斯くの如くして彼等の一大恐慌が来ることは必然の運命である。それ故に彼等が妨害策を施すであらうといふことも考へられるので、布哇国王の治外法権廢棄の御承認は、布哇の全閣員の正式承認を経て公式の発表に至るまでは、國際の公然の秘密として残されることに、双方の間で決められた。

外務卿井上馨公が辞去して後、アームストロング移民事務長官は、アメリカ公使ビンガム氏に会見して、井上

外務卿との会談の顛末を述べた。ビンガム公使は之より先、アームストロングに対して、布哇は既に事実上アメリカ合衆国の勢力範囲内に在って、国際的見地よりすれば、それは一匹の黒白のテリア犬が、猛犬の保護を受けつつ、其の前脚の内に安眠してゐるに等しいのであると、注意する所が有つたが、今アームストロングが、井上外務卿に対して執つた、大胆な行動に付いては、それが人道の本義に副ふものとして、微笑を以て之に賛同の意を与へた。

アームストロング移民事務長官は、国王陛下の御懇篤なる御承諾と、侍従長ジャッドの同意の許に、程なく外務卿井上馨公に宛てて、公文書の覚え書きを送つたが、その中には次のやうな一節が明記せられてゐた。

「ハワイ政府は、日本の保全を全幅且つ完全に認識せる条約に同意せんと欲するものにして、〔二八六頁〕それは現行条約中に、所謂特殊属領地権として、知られてゐる条項に因り生じ来る、総ての要求の悉くを破棄するものである。」

併し、ハワイ政府は米國に牽制されるところがあつて、正式に日本に対する治外法権の撤廃を通告して来たのは、是より十二年の後、即ち明治二十六年一月（一八九三）のことで、同月十八日附を以て、東京駐在ハワイ弁理公使アーウィンより、時の外務大臣陸奥宗光に寄せた通牒には、次の如く記してある。

「以書翰啓上候陳者布哇皇帝陛下の政府は日本の法律及びその司法事務の執行に対し完全なる信任を置き、且つ日本國皇帝陛下の政府に対し更に親好友愛の衷情を彰表せむことを欲し、從來布哇政府が日本に於て執行し來りたる裁判権を拋棄することに決定致候依て布哇政府は千八百七十一年八月十九日の条約に依り享受したる在日本布哇國の臣民は其財産に対する裁判権を全然且つ永久に拋棄致候旨を同國政府の訓令に従ひ公然閣下に御通知



致候は拙者の歡喜に堪へざる所に有之候。現今布哇国臣民の帝國に在留するもの十五名乃至二十名有之凡そ二十五名の同国臣民は年々日本に來遊致候……」〔二八七頁〕

### 布哇国王渡來の目的

それは予々カラカウア王の、千々に思ひを砕かれしことであつて、第一は日本人移民を、布哇に渡航せしめるやうに懇望すること、第二は今や益々太平洋及極東は、多事多端なる秋、ここに大きな盟友と結んで、相互協力を図ること、第三は皇姪カイウラニ女王殿下のために、皇婿を乞ふことで、第二と第三は自然に連繫するものであつた。〔二八八頁〕

御來朝以來日尚淺きに拘はらず、布哇国王には、日本御信賴の御心愈々強く、殊に數回山階宮定磨親王殿下の御瀾達なる御資性、御快活なる御交際振りや、当時海軍候補生としての凛々しき御英姿に接せられてからは、王の御胸中はそのことで一ぱいであつた。……〔二八九頁〕

時は明治十四年三月十日夜、……〔場所は〕……赤坂の離宮……カラカウア王には、密々に、明治天皇陛下に

謁見を賜はり度しと、式部官を通じて内請されたのであつた。〔二九三頁〕

〔二九四、二九五頁繼續〕……

山階宮定磨親王殿下は、後の元師海軍大將東伏見宮依仁親王殿下にあらせられ、その頃は山階宮晃親王の御養子として、築地の海軍兵学校予科に御在学中にて、御年十五歳、洵に英明の貴皇子で在らせられた。〔二九六頁〕

カラカウア王には、間もなく延遼館に御還御になり、驚く隨員達に、この事



カラカウア国王

は必ず内密にするやうにと御命令があつたが、謁見の内容に就いては何事も御洩らしにならなかつた。けれども明治天皇には侍従を遣はされて、カラカウア王の随員達に、王との会見の内容を、簡単に報告せしめられたが、委細なことは矢張り御語り遊ばされなかつたのである。

この事件に関して、カラカウア王の従者の一人であつたアームストロングは、「世界周遊記」と題する旅行記の中に於て、次のやうに記している。

「ここに思ひも設けぬ小説のやうな事件が起り、吾々従者を当惑せしめ且つ愕かした。それは王が吾々に一言も伝へられないで、日本皇帝陛下の侍従を御伴れになり、何時の間にか消える如く御旅館を立出でられたことである。これは吾々随員を無視され又礼儀に背いたことであつた。王は吾々を絶対に信頼されて居たので、此の秘密的な御行動は、吾々の理解し難い処であつた。

「王は宮殿より御帰館遊ばしても、吾々には日本皇帝陛下との御会見の目的に就いては、〔二九七頁〕何等のお話もなく、凡て秘密にする様にと御希望せられた。併し日本皇帝に於かせられては、これを「国家の問題」を理由として、井上外務卿に告げられ、また吾々随員も此の問題を知り置く可きであるとして、天皇陛下は侍従を吾等のところに御差遣になつて、王との御会見の性質に就いて内密に報告せられた。然し精細なるその内容に就いては、吾々が布哇に帰国するまでは発表されなかつた。

「カラカウア王はポリネシア族としての、特殊な考へ方からして、日本皇室と布哇皇族との間に婚姻關係を成立せしめ様と計画せられたのである。王はアメリカ合衆国が、近き将来に於て布哇王国を、征服するかも知れないといふ危惧を抱いて居られた。それ故に王姪にして王儲たるカイウラニ女王と、日本皇室の親王との御婚姻を

図り、其結果として日本政府の勢力を惹き入れ、米國合衆國の布哇合併運動を、圧へようとせられたのである。王は随員一同が王の御計画を実現困難として、大反対することを御存じであったために、御自身自ら秘かに、御解決の道を選ばれたのである。

「日本皇帝陛下には、王の御懇請を真面目に御聴取遊ばされたが、事重大にして且つ日本の慣例に無きことなれば、熟考の上答ふべしと仰せられた」と述べてゐる。〔二九八頁〕〔註記・カイウラニ王女は一八七五年十月十六日の降誕であるから、カラカウア王が日本に赴かれた当時は御年僅かに六歳であった。〔三〇二頁〕カイウラニ王女は布哇カラカウア王の王妹とスコットランド貴族の出なりと云ふ。〕〔三〇九頁〕

カラカウア王御來朝当時の随員たるアームストロングは、この点に就き「世界周遊記」の中に、次のやうに認めてゐる。

「明治天皇陛下には此の懇請を、至極真面目に御聴取遊されたが、事重大にして又日本に於ては、全く前例無きことなれば熟考の上お答へすると仰せられた由である。

「吾々がハワイに帰ってから間もなく、日本より秘密の使命を帯びた特使が到来し、御婚約の御申入れを、遺憾乍ら謝絶するといふ天皇陛下の親書を捧呈した。それは社会的理由を差措いて、日本が「ハワイに於ける米國の勢力圈内」を犯すやうな計らひに、關係することを〔三〇八頁〕欲しないのであった。此の事件に依つて、日本と布哇の友好關係が、破壊さるるやうな事は、少しもなかつたが、これに依つて吾々側近者は、爾後王の行動に、より深き注意を払ふやうになつた。若しカラカウア王の御計画が、日本皇帝陛下の御聴許を得てゐたら、ハワイは日本の領土となる経路を辿るに至つたであらう。」〔三〇九頁〕

その翌〔ハワイ国王御来朝の年〕明治十五年のこと、カラカウア王御来朝当時、接伴係りの一人であった式部官長崎省吾は、表向き米国視察といふ要務を命ぜられて、サンフランシスコに向った。然し本当の用件は、ハワイ国王への御返答を伝達するに在ったので、滞米中にハワイに渡ってカラカウア王に謁し、御勅錠を具さに奏上した。〔三〇七頁〕〔菊田貞雄井深先生関係資料第十一冊〕

布哇皇帝の来朝と井深梶之助

布哇皇帝日本教会を訪ぬ

今回の訪問は、日本に於ける最初の本邦教会建設の為、布哇基督教信徒が、当教会建設基金として金子壱千弗を贈られたるに對し感謝の意を表せんが為當教会本邦会員の為せる招待に應えて本月十日に行われたるものなり。

王室一行が此の要請に應ぜらるべき機会を得るに當りては、慇懃なる軍隊との約条多きが為大いなる困難を伴いたり。斯る事情なれば御一行は予定の時刻に出席出来申さずとの報らせを受けしなり。恒例としては、控の間に於ける御寛ぎの時間を含むも僅か一時間を出でざりしが為、礼拝式開始は遅刻せるも、辛棒強く、密集せる聴衆をば失望せしめざりき。

皇帝陛下は教会を代表せるテイ・ダブリュウ・ギューリック博士によりて停車場に迎えられ、御召馬車は停車場にて皇帝陛下の御召しを御待ち申上げいたるに拘らず私用車に御上乘、教会に到らせられぬ。教会に於て

皇帝陛下とコロネルス・ジュッド及びアームストロングは教会役員等に接見せられ、次いで説教壇上に導かれて坐し給いぬ。説教壇の背面なる常磐木の大字にて書かれし『アローハア』なる語、布哇基督教徒の挨拶『愛しみ汝と偕にあれ！』は王室御一行の各員の心を歓ばしめたりき。礼拝式は番組通り執り行わる、ギューリック博士による紹介の挨拶左の如し。

(前略)

教師奥野昌綱を陛下に謁することをお許し下さいませ、彼は陛下に同僚基督教信徒の感謝の念いを表わし、お伝えするでございませう。陛下の為に、その御挨拶は後程教師井深梶之助により英語に翻訳せられるでございませう。(中略 後出の六合雜誌記事参照) 又陛下の御応えの御詞は本邦基督教信徒の為同翻訳者によりて後程日本語に翻訳せれるであります。(中略)

英語の讚美歌を歌いて後日本語の祝祷にて礼拝は了れり。多数の指導的日本の説教者等の紹介の折、皇帝陛下は通訳せる若き牧師(注・井深梶之助二十七才)を評して、朕と雖も君ほどは進歩しておらぬと考える、と曰えり。而して彼は年若き女性は男性よりも英語に熟達せりと聴こし召されて驚きたる態なりき。(以下略、明治十四年三月十二日付「ジャパン・ガゼット」紙記事の訳文「植村正久と其の時代」第二卷一八八頁―一九二頁)

此日集合せる男女は無慮一千余名さしもに広き会堂も立錫の地なきに至れり、まことに稀有の盛会と謂うべし因に云う布哇国皇帝はまことに雄壯肥大容貌堂堂として天晴一國の帝王と見えたり、余輩親しく其席に列し帝の演説を拝聞したるが英語の発音の正しきには敬服したり。(明治十四年三月「六合雜誌の記事」「植村正久と其

日米問題について

エリオット博士

ニュー・ヨーク・タイムス紙上、同博士の寄書

読者は既に都下の各新聞にてエリオット博士が日米問題に於て意見を述べ、米国に於ける屈指の新聞ニュー・ヨーク・タイムスに投書せられた事を読んだであろう。今其の原文を得たれば左に之を訳載する。此の原文は去る四月三十日同紙に掲げられたのを在米日本人協会が特に印刷したものである。

ニューヨーク・タイムス記者足下

今回加州に於て論議せられつつある法律案は明かに日本人を目的として作られたものである。而して該法律案は日本と我が米国政府との間に於ける条約にて保障せられたる日本人の権利を剝奪せんとするものである。かかる法律が出たに就いては、此の際米国人全体に、新たに世界列強の伍班に列した日本国民の特性に関して信ずべき智識を有せねばならぬと思う。

予は一八七一年以来我がハーバード大学に留学した処の多くの日本人学生を知って居る。又教師として日本に滞在して居た処の多数の米国人を知って居る。又最近に於て日本を訪問した。日本の社会状態、産業状態及び内治外交に就いて主なる人々と直接に話す機会を有った。故に今貴紙を借りて日本人に関する所見を述べ思慮ある米人の参考に供しようと思う。

日本人は他の東洋諸国民と同一視すべからざる人種である。彼等は支那人や暹羅人や爪哇人や印度人と異なつて居る。その肉体上、精神上乃至道徳上の特性に於て異なつて居る。又その社会上、政治上の歴史も異なつて居る。日本人は一八六八年王政復古以来、到底他の東洋諸国民が企て及ぶべからざる処の速かさを以て西洋文明を吸収し之を巧みに応用しておる。法律経済及び其の他の科学、一として然らざるものはない。彼等は小学校から大学に至る系統を作り、最初は高等教育に於ては多く外人の援助を籍りたが、今は大概日本人のみで教育をして居る。又彼等は泰西諸国の海陸軍に就いて学び、只単に黄色人種を圧伏した計りでなく、白哲人種をも負かして居る。実に彼等は叡智と創造力と商工業に対する企業心と強き意志、道徳的忍耐とを有する国民である。

過去四十五年間に於ける彼等の歴史は、彼等が立派な肉体的、精神的及び道徳的状态を有する人種なることを明かに証明している。加之、彼等は愛国心と自尊心と忠義の觀念に満てる国民である。茲に於てか、或る者はこれこそ列国競争場裡に於て恐ろしき要素であるが如くに考えた。而して日本を目して平和の擾乱者であるかの如くに見做すに至つた。此の疑いは果して真なるや否や。これ予が次に解決せんとする問題である。

日本人は戦争を好む処の人種ではない。成程、彼等は最近数年間に於て二大戦争を敢えてした。併し乍ら此の戦争たるや正当防衛に出たものである。亜細亞大陸には日本に対抗する二つの大なる国民がある。而して彼等は非常に大なる領土を有して居る。即ち露西亜と支那である。日本の指導者は、若し朝鮮及び朝鮮の港灣が此の強大なる隣国の何れか一の手中にあっては日本国は安全でないことを経験上知つて居たのだ。

日本人は数の上で所謂大国民ではない。その数は支那国民全体の九分の一より多くはない。露西亜人口の三分の一より多くはない。また米国民の総数の半分に充たない。

日本人は切りに郷国を恋しがる国民である。成程、彼等は或いは商業家として冒険を敢えてし、又行商として業を求めて遠国に旅行する。併し乍ら、彼等を目して殖民的の国民であるとするのは誤っておる。日本政府は極力日本移民を台湾に出さんとしたが容易でなかつた。現に朝鮮に於ても同様の困難を感じて居る。そのくせ朝鮮と日本は氣候が似ている。日本人は氣候が熱いと尚更ら嫌がる。であるから、彼等は菲律賓を横領しようとする考えは毫頭有っていない。また日本の商業家にして外国に出て居る者は少なくないが、金が出来ると大抵は家族と金を携えて国に帰つて了う。

日本人が或る事業の為に外国に行くときには彼等の多くは外国の女と結婚をしない。内地でも海外でも彼等の種族の純潔を保持する。この点は外国にある白人と驚くべき対照をなして居る。予は日本人が米国に於てのみならず、諸外国に於ても離婚の習慣を助長する者とは見ない。

日本人は企業心に富み商売に巧みな国民である。而して彼等と取引するには、泰西諸国民と取引する中に必要な掛引以上の掛引をする必要はない。これ近代日本に於ける一般教育の結果である。封建制度の時代に於ては日本の商業家は最下級に置かれた。それは彼等が生産者でない為であつた。然るに、今日於ては商業道德、特に契約の神聖なるものなることは總ての学校に於て二、三十年來教えられている。近時日本政府が実業家にも爵位等を授くるに至つたのは現今の文明に於ける商業の重要を認めた為である。

西洋諸国の陸海軍人にして、日本人は大太平洋に散在する処の他國領の島々を奪取せんとする意志があると云つて日本人をせめる者がある。併し是は日本人を誣めるの甚だしき者である。日本の政治家及び政治学者は悉く日本が到底かくの如き事を為し得るものでないと云う事を言つた。かの太平洋を一国で支配することは不可能であ



る。そんな企には少なくとも四大強国の海軍を打って一丸とする必要がある。例えば、英独仏米日露伊の海軍が聯合したならば、単に太平洋のみならず世界総ての海洋を支配し得るであろう。此の如き聯合なら却って望ましい事であると思う人は沢山ある。

凡ての日本の有力者等は日米兩國の孰れにしても、十万の軍を行李や弾薬、糧食と共に安全に太平洋を横切つて輸送する事の不可能なるを認めて居る。よしやそれが数十の戦艦や装甲巡洋艦で護送されても安全でない。かかる大艦隊が夜間洋中に拵がって行動して居るときに、之を殆んど目に見えぬ船で攻撃するの機会は現今余りに多く且つ余りに恐るべきものがある。よしや奇跡でもって、かかる軍が、敵國の海岸に上陸し得たとしても、何事をか為し得ようぞ。文明國間の現今の戦争に於てかかる遠距離の遠征はとてもむづかしいのである。

日清及び日露兩戰役の結果、日本は莫大な負債をして居る。今日とても遠方に大仕掛けな攻撃を試むるに必要な資金を借りることは出来ぬ。本国附近での防禦戦なら有利に戦い得るかも知れぬ。それは他の貧國でもしたことであるから、無論日本は為し得るであろう。然し經濟の現況から見れば、日本は今後少なくとも二、三十年は攻勢に出ることは出来ない。其の上に日本の政府と実業界とは、日本の商人、製造家、理財家が今後二、三十年内に集め得る全資本を要するのである。それを本國の公共事業の施設や、実業の計画の拡張に当てねばならぬ。

實際、商工業上の利益の爲には日本をして世界各國と平和を保たざるを得ざらしめるのである。日本は米國又は其の他の國と戦争しても得る処はないのである。又米國が日本と戦争した場合も同じことである。予は去年の夏日本に居て多くの政治家、宗教家に会った。而して右の如き平和を懷抱せざるものは一人も見なかった。

日米の商業は相互の益である。而して米國は日本の最もよい花客である。兩國間の戦争は夢にも想われぬ。日

本が米国に対し侵撃の行を敢えてし、遂に戦争を惹起するなどと思うのは全く不道理で、空想で、馬鹿々々しい。そんな考えは病的な怯懦な想像の産物に外ならぬ。

思うに、当たり前前の日本人は、米国人に対して称讃と好意とを有って居るのみである。日本国民は米国に於て最惠国民が有する十分の権利を得なければならぬ。これ日本が我が米国に対して望む処である。

日本の政治家は決して国民をして大々的に外国に移住せしめんとする野心を有っていない。之れに反して、彼等は国民をして朝鮮とか樺太とか台湾とか云う領土に行かしめんとして居る。また日本本国に於ける商工業は非常に沢山の労働者を要求して居る。

また、日本の経済家は日本の資本を外国に下ろすと云う事よりは、外資を輸入して自国に於ける殖産工業を発達せしむるの得策なることを認めておる。これは自然で至当のことである。而して現に外資は日本に於て国際的実業上の投資の新たな種類を興しつつあるのである。

若し本国に於て成功して居る処の米国の会社が、自己の製品及びその方法を日本の資本家に売り与え、日本の会社の株権を米国人が引受くるならば、日本の労働者は国内に止まり、これと同時に米国人は利益を享けることが出来る。

事情既に此の如きなるが故に、予は日本の資本が僅かに加州に下ろされたればとて、之に対して之を制限するような法律案を設けることの全く不必要なることを絶叫せざるを得ない。日本人は今日加州に於て沢山の資本を容易に下ろすことは出来るものではない。また仮令将来日本人が金持ちになって加州に資本を下ろしたにしたら、加州は決して損をすることはない。現に加州は自分の資本だけで足らなくて欧州のものを利用して居るでは

ないか。

之を要するに、加州に於ける今日の排日法律案は、日本国民の特性及び現状を無視した苛酷にして利己的なるものと言わねばならぬ。是は立憲政治を採用し国民の独立を成就し、文明に向って進んでいる、寧ろ全米国民が敬慕する処の感性深き日本の国民に対する思慮なき侮辱である。(原口氏訳述)〔開拓者第八卷第七号〕

## 排 日 問 題

SAN FRANCISCO CHRONICLE

TUESDAY, MAY 20, 1913

Distinguished Japanese Envoys Arrive

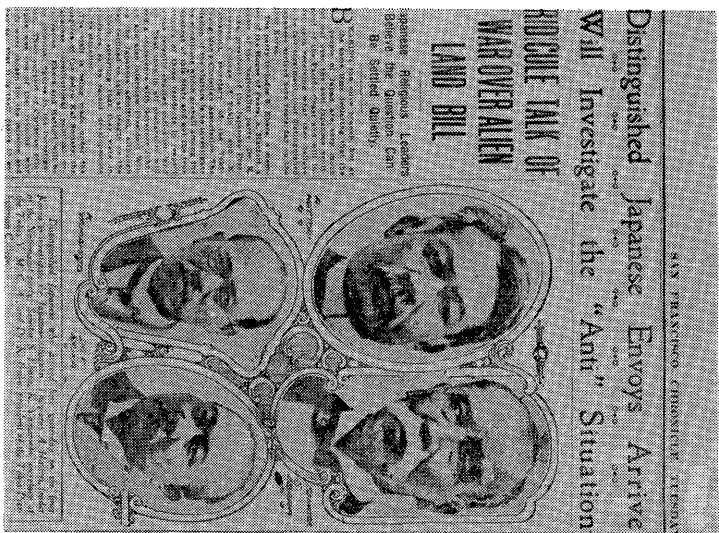
Will Investigate the "Anti" Situation

RIDICULE TALK OF WAR OVER ALIEN LAND BILL

Japanese Religious Leaders Believe the Question Can Be Settled Quietly.

BEARING the olive branch, but at the same time declaring that the people of Japan are very much put out over the anti-Japanese sentiment of the Pacific Coast and will insist upon receiving what they believe to be fair treatment, four distinguished Japanese arrived here yesterday on the liner Korea.

The party includes S. Ebara, a member of the House of Peers; A. Hattori, a leader of the Nation-



サンフランシスコ、クロニクル紙  
 写真上段左より 服部徳雄、江原素六  
 下段左より 日本邦之助、井深堀之助

alist party; Dr. K. Iwuka, president of the Japanese Presbyterian College of Tokio, and K. Yamamoto, secretary of the Tokio Young Men's Christian Association. The mission of the visitors is to investigate the conditions which prevail among the Japanese of this State and get the true attitude of these residents in respect to the recently-enacted anti-alien land bill. That they in all probability will seek a conference with Governor Johnson and also interview President Wilson the Japanese admitted, although they declined to talk at length on the subject, asserting that they were in ignorance as to recent developments in the situation.

The visit is being made under the auspices of the Seiyu Kai Society, the Japanese constitutional political organization. Ebara and Hattori will be the principal figures in the investigation. Their

support of Christian principles was one of the reasons why they were chosen for the mission and they say that it is their desire to secure a quiet and unbiased report of conditions in order to contradict jingoism on the part of the masses and newspapers in Japan.

#### WAR TALK RIDICULED

Scorning the possibility of war between Japan and the United States, the Japanese admitted that the feeling among certain classes in the empire has been highly aroused.

All countries have their jingoes at a crisis such as this," said Dr. Ibuka, "and that is what those in the governing power are attempting to stifle. Most of us are looking at the matter calmly, believing that the American people will give us a square deal, and having the utmost confidence in President Wilson.

The Japanese have always relied from the beginning upon the justice of the United States, and while the feelings of our people are undoubtedly hurt by the anti-Japanese legislation in this State, the men of standing are maintaining a cool attitude. War talk is utterly ridiculous. The question is one that can be settled in other ways than by strife. We expect to get the views of the principal Japanese in California on the subject, believing that there are some points to be considered that have not come to the surface and are not visible in the reports that have been received in Japan."

Senator Ebara, who is 72 years old, is recognized as among the most eminent Christians in Japan.

He has been a staunch supporter of international peace and was the president of the first Japanese Peace Society.

#### MISSION OF PEACE

"Our mission to this country is essentially one of peace," he said. "We wish to familiarize ourselves with the state of affairs and have every hope that our visit here will result in a better understanding being reached between Japan and the United States. My first visit to this country was made over forty years ago, and I have always entertained the greatest of good feeling for Americans. The conditions which have given rise to the anti-alien land bill will receive our attention and our investigations will be conducted quietly and with the desire to bring about a more friendly view of the questions involved on the part of both the Japanese and the people of this country."

The visiting Japanese were met at the pier by a large number of their countrymen and escorted to the Fairmont Hotel. At the conclusion of their investigation in the State the party will go to Mohonk Lake, N. Y. to attend the annual conference of the Christian Students' Federation. While in Japan, Dr. John R. Mott, who recently was in San Francisco on his way home from a tour of the Orient, selected the Japanese to represent their country at the religious convention. According to Hattori, the party expects to spend about three months in the United States, reporting to the society at various times their findings and offering suggestions that will work for a permanent establishment of

friendly relations.

Accompanying the party to Mohonk will be Miss Ume Tsuda, secretary of the Y. W. C. A. at Tokio, who came to this country for the first time as a child forty years ago. For many years she has labored in the interests of her countrywomen and has occupied a prominent position in the educational and religious life of the empire.

布哇日々新聞



向って左より 服部綾雄氏、江原素六氏  
井深隰之助氏、山本邦之助氏  
(昨日午後五時半アラケア棧橋にて撮影)

◎三名士の日米問題大演説

△聴衆無慮千五百名 当地未曾有の盛会

加州排日問題の調査と加州同胞の慰問の大使命を帯びて母国二大政党を代表せる江原、服部両氏並に日本基督同盟の代表者井深氏の寄港に当り偶々乗船の遅着せるが為めに其演説を聞くを得ることになりしを以て発表の突嗟なりしにも拘はらず定刻八時前迄に会場なる中央学院へ集まるもの続々として絶えず、階上大講堂は忽ち充滿し更に隣なる教室までを開放して傍聴席に充て聴衆無慮千五百名と算せられたるを以て如何に在留同胞が時局問題に多大の注意を払へるかを知らるに



左より 江原素六、服部綾雄  
井深梶之助

足らん

▲開会の辞 定刻正八時一行は永滝総領事と共に入場着席するやドクター毛利伊賀氏、主催者金曜会を代表して開会の挨拶を述べ順次三弁士を紹介したり

▲服部前代議士 第一席には前代議士服部綾雄氏は破るるが如き喝采声裡に登壇朗々たる音吐にて先づ今夕斯く海外に発展されつつある同胞諸君と会するを喜ぶと共に諸君が世界のの人となりつつあるの感に打たるものなりとて海外に於ける同胞は徒らに政府の保護に頼らずして自ら世界のの人たんとするの覚悟を要すと冒頭を置きて本題に入り、近来不愉快なる事件あり、米国の一州に於て日本人排斥の意味に非ずやとの感を起さしむる法案が可決せられ、將に知事の署名を絶んとしつつあるは日米国交の上には何等の影響を及ぼさざるも、(中略)

▲井深梶之助 第二席は日本基督教同盟会及青年会を代表せる井深梶之助氏にして氏は極めて謹厳なる態度にて日本の基督教徒が加州問題に就て氏は極めて謹厳なる態度にて憂慮しつつあることを報じ、排日は決して米國全部の思想に非ずとて米國有識者の日本に対する好意を列挙して此際同胞が感情を抑へ忍耐を加へて真に大國民たるの特長を表らばさん事を望み居留同胞の健全なる発達を在天の父に祈ると熱誠をこめて述べたり

▲江原素六翁 最後に登壇せるは政友会を代表せる貴族院議員江原素六翁にして氏は七十二才の老軀を掲げ



て登壇し氏が維新の際白刃の下を潜りて国事に奔走せし当時の逸話より最も早く米国の文明を知り其国風を尊敬せし事由を語りて之が爲めに今回特に政友会が此老朽を選抜せし所以なりとて屢々諧謔を交へて頗る興味深く且有益なる演説をなし大喝采を博したり（其演説は次号を掲ぐ）

▲総領事の謝辞　斯くて江原氏の演説終るや永滝総領事登壇して三氏に對し謝辞を呈し一同と共に拍手して謝意を表し閉会を告げたるは十時近くなりき

◎諸名士寄港　江原貴族院議員、服部代議士、井深樞之助、青年会書記山本邦之助、津田梅子の諸氏を乗せたるコレア号は昨日午後五時半に至りアラケア棧橋に着したるを以て永滝総領事を始め多教の人々出迎へ、津田女史を除くの外リチャード氏の案内にて直ちに同氏邸に至りレセプションに臨み幾多の訪問者に接し晚餐の後ち午後八時中央学院なる演説会に赴き閉会後有志者に送られ望月俱樂部に至り昨夜は同所に一泊したり、一行中江原、服部両氏は加州同胞慰問使として特派されしもの、井深氏は排日問題とは關係なく紐育州レーク、モホンクに於て六月二日より一週間開かるる基督青年大会に列席するものにて山本氏は之に随伴すべしとの事なり

△津田女史　津田英語女塾長梅子女史は鉄色の袴に黒絹の羽織という和装にて上陸、旧友カーター夫人及高師出身の赤星、中川女史、女子学生協会員等に出迎へられバビット氏の案内にて一先づ同夫人方の歓迎茶話会に臨み（永滝夫人も出席夫れより中央教会に於ける女子学生協会の会合に臨みて一場の講話をなして夜は旧友カーター夫人方に一泊したり。

井深樞之助先生大正二年之日記  
……排日問題……

加州土地問題と井深先生渡米

〔大正二年三月三日、月曜日〕

午後内務省宗教局長ヨリ依頼ニヨリ出頭シタルニ外務省及ビ文部省ヨリノ交渉アリ、ポールトランド〔Oregon〕ノ〔基督教市民〕万国大会ニ何人カ出席スル人ナキカトノ相談ナリキ。依リテ先方トノ交渉ノコトヲ話シタルニ、ソレナラバ当外務省ノ方ヘソノ旨ヲ通シ置クベシトノ事ナリキ。

〔三月二十四日、月曜日〕

ハインツニ招カレテ帝国ホテルニテ午餐ヲ供ニス。同氏ハ余ニ向イテ是非共日本ヲ代表シテツウリヒニ於ケル万国日曜学校大会ニ出席スベキヲ勧誘シ、余若シ往ケバソノ旅費トシテ金壹千円ヲ寄附セント提供ス。余ハソノ好意ヲ感謝シテ尚塾考ノ上確答スベシト約束シタリ。但シソレト同時ニ既ニ万国市民大会ニ出席ノコトニ略々約束シタルコトヲモ告ゲタリ。

〔三月四日、火曜日〕

元田氏ト共ニ坂井徳太郎氏ヲ本郷同志会ニ訪イ渡米旅費ノ件ニ付キ相談シタルニ、同氏モ至極同感ナルガ故ニ早速外務大臣ニ謀ルベシト約束シタリ。

〔三月二十一日、金曜日〕

午後二時半ヨリ青山学院ニ於テ日曜学校生徒大会アリ。今週来朝シタル日曜学校委員ハインツ氏一行ヲ歓迎ス。余英語ニテ歓迎ノ辞ヲ述ブ。一行中数名ノ子供ニ対スル話アリ。一行大満足ノ様子ナリ。ハインツ氏ハ頻リニ余ノ英語ヲ賞讃シテ措カズ。是非ツーリヒノ大会ニ出席スベシト云ウ。

〔三月二十五日、火曜日〕

本日モ亦ハインツ氏ニ招カレテ帝国ホテルニ於テ午餐ヲ供ニス。日本ノ日曜学校理事等モ共ニ招カル。其席上ニ於テハインツ氏ハ再ビ余ノ承諾ヲ求メタルニ由リ事情ヲ説明ス。日本ノ理事等モ是非余ノ往カンコトヲ求メタレドモ、今直チニ応ジ難キ事情ヲ述ブ。

帰宅ノ上ハインツ氏ノ好意ヲ謝シ且ツ遺憾ナガラ直チニソノ請イニ応ジ難キ旨ヲ認メ、イムブリー氏ニ相談ノ為ソノ下書ヲ同氏方ニ持往キタレドモ九時半過ギ迄帰ラザリキ。

〔三月二十六日、水曜日〕

早朝ブラオン氏ニ電話ヲ以テ昨夜認メタル書面ノ趣意ヲハインツ氏ニ伝エラレンコトヲ依頼シ、且ツ余ヨリ書面ヲ送ラントスルコトヲ告ゲタリ。然ルニイムブリー氏ハ昨夜ハインツ氏ト会見ノ節再ビ余ノコトニ付キ相談アリ。又々再考スルコトトナリ、種々イムブリー氏ト相談ノ結果、条件次第ニテハツウリヒニ往クベキ旨ヲ返答スルコトトシテ、ソノ交渉ヲイムブリー氏ニ托シタリ。

〔三月二十八日、金曜日〕

高峰讓吉氏ヲ飯倉ノ宅ニ訪イハインツ氏ト交渉ノ結果ヲ語り、旅費不足分ノ事ニ付キ同氏ノ意見ヲ問ウ。尚一考スベシトノコトナリ。

帰途外務省ニ寄り阪井徳太郎氏ヲ尋ネ、旅費ノ件並ビニ三年後日本ニ万国日曜学校大会ヲ開クコトニ対シ外務当局者ノ意見ヲ尋ネルコトニ付キ打合せヲナス。

〔四月九日、水曜日〕

十二時ヨリ会場ヲ辞シ、小崎氏ト共ニ帝国ホテルニ往キハイイツ及ビブラオン氏ト共ニ午餐ヲ喫ス。ハイイツ氏ヨリ旅費老千円ヲ受領ス。残額ノ五百円ハツウリヒニ於テ受取ル筈ナリ。四人相携エテ大隈伯邸ニ至リ会談ス。高田慎蔵、江原素六ノ二氏モ亦来会ス。

〔四月十八日、金曜日〕

外務省ニ出頭シ松井次官ニ面会シ、大正五年ニ万国日曜学校大会ヲ東京ニ開会スルコトニ対シテ外務当局ノ意見ヲ叩キタレドモ不得要領ナリ。只差支エナカラントノ返事ヲ得タルノミ。十二時半ヨリ外務大臣ノ午餐会ニ招カル。正賓ハモット、メービー、ピーボデー氏ナリ。日本人側ニテハ高橋、菊地、桜井、金子、神田、高田等ナリ。阪谷市長ノ自働車ニ便乗シテ大隈伯邸ニ赴ク。モット、メービー、ピーボデー氏、グリーン、ハリス氏等モ来タル。日本人側ハ牧師連ナリ。伯ノ演説アリ、モットノ演説アリ。遂ニ大統領ニ宛テ且日本人会長ニ宛テ電報ヲ報ズルコトニ決議シタリ。

〔四月二十八日、月曜日〕

午前十一時ヨリ青年会館ニ於テ教会同盟常務委員会ヲ開キ、加州排日事件ニ付キテブライアン氏ヘ電報ヲ発スルコトニ議決ス。ソレヨリ宝亭ニ於テ午餐ヲ共ニス。三時ヨリコールマン氏方ニ於テ日曜学校理事会ニ於テ小崎及ビ余ノ為ニ送別祈祷会ヲ開ク。江原氏モ政友会ヨリ派遣セララルコトトナリタルガ故ニ、又同氏ノ為ニモ送別

ノ折ヲナス。

〔五月一日、木曜日〕

早朝江原氏ヲ訪問シタルニ既ニ外出セラレタリ。外務省ニ阪井徳太郎氏ヲ訪問シタルニ、是レ亦同志会ヘ往キテ不在ナリ。電話ヲ借リテ話シタルニ例ノ事ハ尚懸案ナリトノコトナリ。但シ午後総理大臣秘書官ニ問合せノ上返答スベシト。然シテ午後ノ電話ニヨレバ、愈々吾人ニ付キ一五〇〇ダケ支出スルコトニ決シタリトノコトナリ。夕刻、青年会館ニ往キ江原、服部、山本三人ノ為送別会ノ席ニ列ス。阪井氏ト尚面談シテ委細ノコトヲ聞キタリ。

〔五月二日、金曜日〕

早朝江原氏ノ宅ニ赴キ同氏ノ帰宅ヲ待チ金三千円ヲ受領シ、直チニ小崎氏ヲ宅ニ訪イ同夫人ニ弍千円ヲ渡ス。内五百円ハ余ノ分ヲ贈リタルナリ。午後大隈伯爵ヲ訪問シテ暇乞ヲナシ、又市役所ニ阪谷男爵ヲ訪問ス。同男ハ日米問題ニ付キテ頗ル憂慮スル旨ヲ告グ。

〔五月三日、土曜日〕

朝飯後家族一同礼拝。彦三郎夫婦来タル。品川停車場ヘハ学院ノ教員生徒一同並ビニ井深勝治夫婦、沼沢夫婦、真野夫婦、同正雄、片山とよ、桃沢静子等見送ル。母上、真澄、清見モ品川迄見送ル。十時廿九分ノ列車ニテ横浜ニ赴キ直チニ港務部ニ往キ荷物ヲ預ケ、花子、勝治、健次、井深とせ子、熊野、三浦ノ六人ヲ携エ万珍亭ト称スル支那料理屋ニ往キ午餐ヲ喫シ、港務部ノ船ニテ本船ニ乗込ム。津田梅子、江原、服部、山本氏等ハ後ヨリ乗込ム。〔船ハ“Corea”ナリ〕

〔五月九日、金曜日〕

午前八午後ノ演説ノ準備ヲナス。午後三時ヨリ服部氏先ズ簡略ニ日本政体ニ付キ話シ、余ハ日本ノ教育ニ付キ二、三十分演説シタリ。俄カニ用意シタル割ニハ大喝采ヲ博シタリ。演説後幾人トナク來タリテ札ヲ述ベタルモノアリ。

〔五月十日、土曜日〕

〔午後〕四時ヨリ三等ノ日本人船客ノ為ニ服部、江原、津田梅子三氏ノ話アリ。婦女子ニ菓子ヲ送ル。彼等ハ嬉々トシテ喜ビ居タリ。

〔五月十六日、金曜日〕

午後四時二十五分「ホノルルアン」号ニ出逢ウ。五時ヨリ三等室ノ日本人五十名計リノ為ニ演説ヲナス。

〔五月十七日、土曜日〕

夕刻再ビ日本人ノ三等船客ノ為ニ演説ヲ試ム。今回ハ彼等ノ希望ニ依レリ。

### 桑港上陸

〔五月十九日、月曜日〕

正午過ぎ仮碇泊所ニ於テ検査ヲ終リ、旅券ノ検査ヲ受ケ棧橋ヨリ上陸シタルハ二時比ナリキ。ストルヂ氏ノ案内ニテ直チニ南太平洋鉄道会社ニ行キタレドモ、寝台ハ悉ク売切レタリト云ウ。……江原、服部両氏ハフェールモント・ホテルニ投ズ。夜ハ領事沼野安太郎氏ノ招待ニヨリ同氏宅ニ於テ日本食ノ饗応アリ。我等一行並ビニ当地ノ重立チタル日本人数名モ招カル。

〔五月二十日、火曜日〕

朝、主人〔帝國ホテル〕ト共ニ鐵道会社ニ行キ明日午前十時二十分発ノ切符ヲ求ム。

服部氏来タル。共ニ小川ホテルニ往キシニ牛嶋〔謹弥〕来タリ、ガイ氏ト共ニ我等ヲ饗応ス。ソレヨリフェセルモン・ホテルニ往キ、ドクトル・シヨルダン氏ト面談ス。排日問題ニ付キ縷々陳フル所アリ。領事モ来会ス。ソレヨリスタルヂ氏ヲ訪問シテ後、日本人伝道団ニ於テ数名ノ日本人ニ談話ス。七時比帰館シテ荷造ヲナス。

〔Tuesday, June 17, 1913.〕

Yesterday afternoon a telegram came from Viscount Chinda inviting me to dinner tonight but had to decline it on account of my engagement with Dr. Goucher this noon....

〔Wednesday, June 18, 1913.〕

Took 12. 30 a. m. train from New York and arrived at Washington 7. 12. After having breakfast at the station I went to the Embassy about 8 o'clock.... He [the ambassador] took me and Messrs. Soeda & Kamiya to the State Department and introduced me to Secretary Bryan who was most cordial and freely talked on the California question. He said he coined a new phrase "Nothing final between friends".... Mr. Hanbara gave me & Ushijima and Abiko a drive through Cock Creek & invited us to a dinner at the Restaurant Gordon....

〔Thursday, June 19, 1913.〕



排日移民法撤回交渉のため大統領ウイルソンに面  
会してホワイト・ハウスを退出する日本代表、  
左より井深堀之助、神谷忠雄、添田寿一、珍田駐  
米大使  
(ガゼット・タイム紙より)

[The] Ambassador took me and Messrs. Soeda and Kamiya to the White House at 10. 25 and introduced us to President Wilson, who received [us] very cordially. Mr. S. spoke for the affiliated Chambers of Commerce and I spoke for the Church Federation in Japan. I expressed our appreciation of what he is doing towards just & fair solution of the Cal. land question and assured him of our confidence in his administration. He spoke about selecting the ambassador to Japan with special care. Ambassador, Mr. Soeda & myself were invited to luncheon to Mr. Bryan's. Both he and Mrs. Bryan were most cordial. Mr. B. spoke of his experience in Japan, his weakness for white radishes, &c. Took 4 p. m. train and got in New York 9 o'clock.

[Thursday, June 26, 1913]



Aboard the "Prinz Fredrich Wilhelm." A fine weather again. Wrote a long letter to Dr. Imbrie.  
Wrote to Mr. Sakai [of the Foreign Office] giving an account of my interviews with President Wilson  
and Secretary Bryan. [菊田貞雄 井深先生關係資料第十一冊]

万国学生大会便り 米國モホンク湖畔にて

井深 梶之助

拜啓時下益御清康賀し奉り候。然者、小生事幸いに海陸無異、去月二十六日午後プリンストンに到着、同夜より万国委員会に出席し、同三十一日を以て同委員会を了り、六月一日委員一同紐育市に着、翌朝は更に多くの代員とともに汽船にてハドソン河を溯りウエストポイントに上陸し、同所にては特に大統領の命令により執行せられたる陸軍士官学校の觀兵式を見申し候。万国学生大会の爲めに、特に士官学校の觀兵式を挙行せしむるとは、流石に米國式なれども、觀兵式と申すは創立以來第三回目なりとか承知致し、序を以て校舎の内部一切の設備を見物し、それから特別仕立の汽車にてニウプラツと申す所迄参り、その所より一行三百名許り同時に數十輛の馬車を列ねて会場なるレーキモホンクに向い出立致し候。此の行程六哩、約二哩間馬車の打続きて山坂を登る所中々壯觀に覚え申し候。山の絶頂に達したる所一小湖あり。是れ即ちモホンク湖に候。(天上の湖の意とか)其の周囲は断崖絶壁、其の上に松林あり、水は深くして青く、風涼くして夏尚お寒きを覚え、真に一個の仙境に之れ有り候。然してホテルは湖の西畔に屹立して東は湖水の全面を望み、西は広き谷と彼方なる山脈を見下し、その風景の佳なる我が國に於ても稀れに見る所に候。ホテルは単に一軒なれども來賓五百名を收容し、其の食堂は吾

々五百名を容れ、更に五百人以上の人を容るることを得申し候。且つその設備行届き贅沢過ぎる程に候。平素は富豪等の避暑地と成り居り候由なれど、前の所有主スマイレー氏兄弟の主義に由りて、酒類並びに賭博は絶対に禁止せられ居り候事如何にも好き心地に候。今も三百三、四十名の大会社員の外に百余名の来客之れ有り候。

大会の順序並びに演説者等は別便にて御覽之れ有り度く候。今回の大会に於ては支那の人氣頗る盛んにて支那代員の氣焰亦た万丈とも申す可き哉。一昨日午後は支那人二十四名主人役となり、他の代員一同を招きて茶話會を開き申し候。その趣向も中々振いたるものに候。先ず第一にその正面に一旒の国旗を掛け且つその代員に五色のリボンと支那の通貨（志厘錢）を組合せたる徽章を配付して胸に掛けしめ、それから支那茶（実は日本茶なるも知れず）一杯と支那菓子と日本の煎餅との饗応之れ有りたる上に支那語の演説も之れ有り候。又た今回の大会に於て大いに注意を惹起したるはラテン欧州とラテン米國に御座候。オーストリア、ハンガリー、イタリヤ、フランス、ブラジル、アルゼンチン、メキシコ等の情態に就いて頗る精密なる報告あり、その前途に就いても熱心なる意見の交換之れ有り候。

総幹事モット氏の報告の有力なりしは勿論なれども、スピーヤ氏の講演も大いに大会を動かし申し候。且つ今朝の礼拝式に於けるビシヨブ・ブレントの説教は最も有力にて之れ有り候。

日本人の代表者は日野真澄、加藤勝治、村田四郎、吉田悦蔵、川上勇、畑中博の諸氏と津田梅子、武田章子、野中つち子、山田こと子。大会の精神は至極美わしく祈禱の心深く一致の心も強く候。且下東西共に人種國民間の衝突悪感の如何に激烈なるかを思えば、四十ヶ國以上の異國民の會合に於て此の如き円満なる一致の精神の発頭をみるは一奇跡と申して然る可きと存じ候。



写真後列向って左より川上勇（プリンストン大学）フィシャー（東京）加藤勝治（シカゴ大学）山田こと（ヴァサー大学）津田梅子女史（東京）井深梶之助（東京）。  
前列向って左より武田彰子嬢（プレノー大学）野中つち子嬢（聖書学校）日野真澄（同志社）吉田悦蔵（近江八幡）。

前後致し候得共、プリンストンに於ける万国委員会  
は、六月二十六日より三十一日の夜中過ぎ迄連日連夜  
の会議にて一同大分に疲労を覚え申し候。重要な議  
題は憲法改正即ち信仰上の基礎の事、イタリア国青年  
同盟が世界同盟を脱せんとしたる事、次回の大会々場  
並びに時期等に之れ有り候。何れ委敷くは追而報告致  
す可く候。

扨て大会も愈本夕を以て結了し、明朝紐育に帰り、  
それよりペンシルバニヤ州のエーグルスシャーなる学  
生大会に出席して一場の演説を試み再び帰紐、諸種  
の要務を弁じ渡欧の計画に御座候。

後便へ譲り大略此の如くに御座候。草々頓首

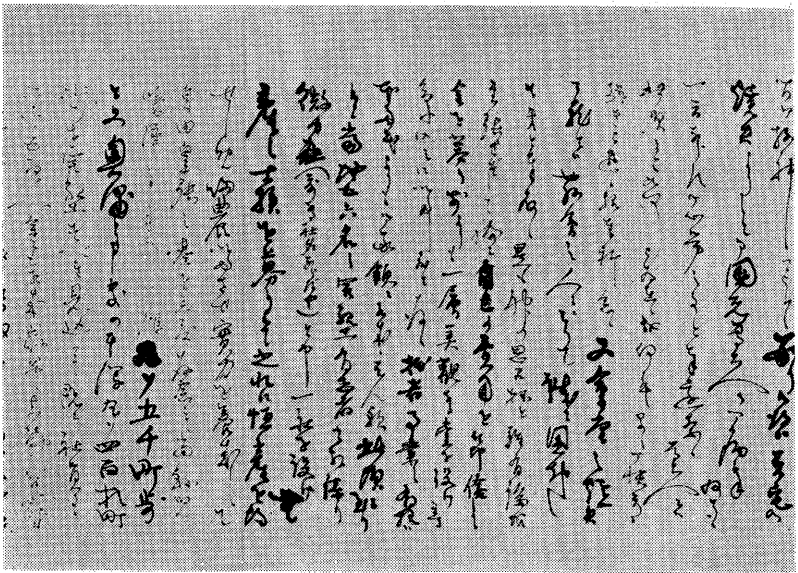
（右は井深委員長より小松主事に寄せられたる私信なり。）（開拓者第八卷第八号大正二年八月一日）

# 第十篇



(1) 雨森信成

明治十三(推定)年七月二十五日





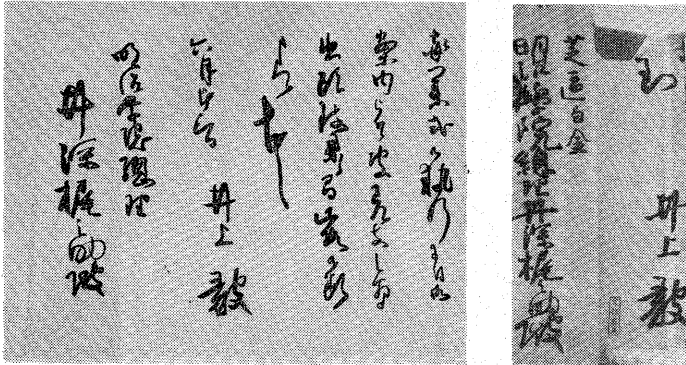






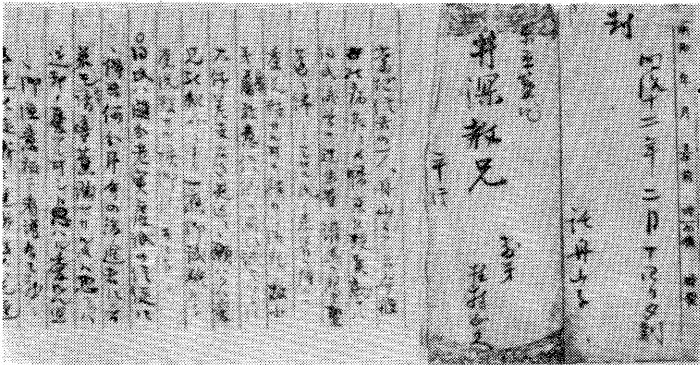
(3) 井上毅

明治二十七年六月二十三日



(4) 植村正久

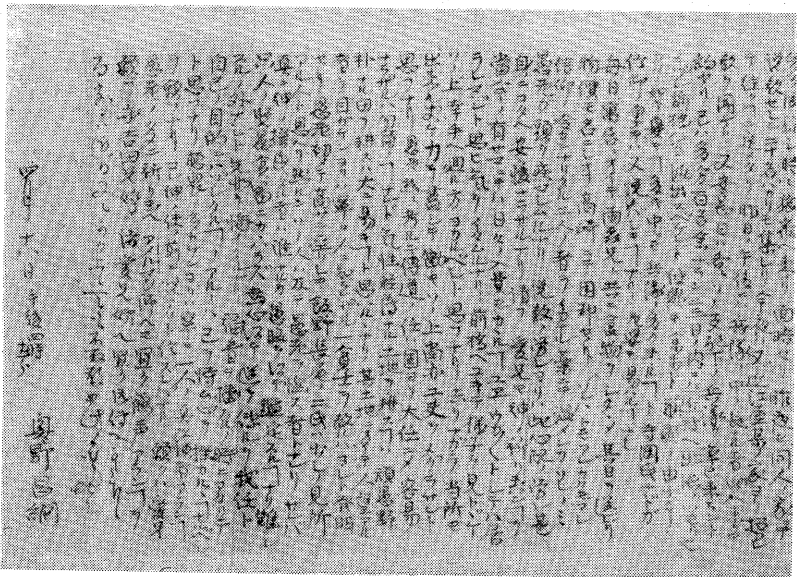
明治十二年二月十四日

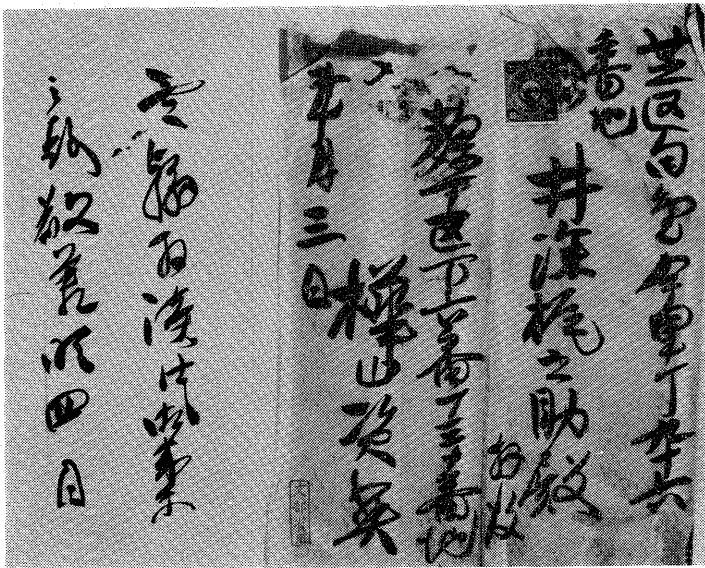
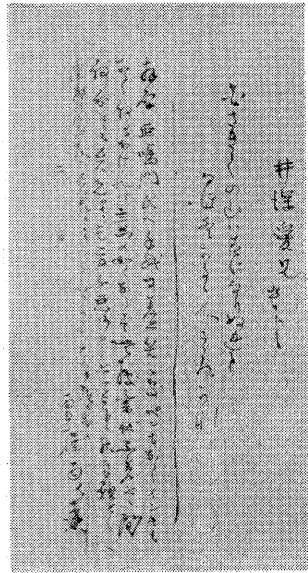




(6) 奥野昌綱

明治十一年四月十八日





(7) 樺山資英

明治三十二年十月三日



(8) 岸田吟香

明治三十三年推定年四月十五日

東至麻布白金町  
 明治學院  
 井深梶之助様  
 押  
 沢彦  
 岸田吟香  
 拜啟  
 久未の月、お  
 不申のほどに、お  
 少産年栄、お  
 幸甚

銅像建設所  
 貴君  
 貴君  
 仲后  
 三宅  
 林  
 隈川  
 家  
 悦  
 並  
 向  
 孝  
 興  
 野  
 呂  
 個  
 休  
 友  
 百  
 名  
 郎  
 友  
 田  
 天  
 花  
 大  
 島  
 信  
 吉  
 中  
 三  
 橋  
 七  
 尾  
 和  
 杉  
 人  
 牛  
 子  
 行  
 法  
 外  
 八  
 木  
 石  
 橋  
 像  
 前  
 有  
 者







仁科...  
 一、教師「道」...  
 二、...  
 三、...  
 四、...  
 五、...  
 六、...  
 七、...  
 八、...  
 九、...  
 十、...  
 十一、...  
 十二、...  
 十三、...  
 十四、...  
 十五、...  
 十六、...  
 十七、...  
 十八、...  
 十九、...  
 二十、...

席布...  
 二二二...  
 小...  
 木挽...  
 十六...  
 今夕...  
 今夕...  
 帰宅...  
 津田...

(10) 小崎弘道

明治十七年十一月二十五日



西園寺公望  
 三月廿一日  
 井深板之助殿  
 貴書奉覽 甚為感荷 貴學堂之設 實為我邦之幸 且蒙 賜教 尤為感荷 貴學堂之設 實為我邦之幸 且蒙 賜教 尤為感荷

(12) 西園寺公望

明治二十八年三月二十六日

西園寺公望  
 井深板之助殿  
 謹啟 拜見 二十七日 貴學堂之設 實為我邦之幸 且蒙 賜教 尤為感荷 貴學堂之設 實為我邦之幸 且蒙 賜教 尤為感荷

西園寺公望  
 井深板之助殿  
 三月廿一日





(14) の B 高橋五郎

明治十年九月七日

奉并匠先生 高橋五郎  
 天運循環頃又不休有是者有來  
 有生有死存者必亡來者必往誰  
 能柱之是以仲元有川上之數聖  
 事有四門之惑焉夫草草靈寶之聖王  
 而性靈融會之傑而往自古皆然  
 矣雖令作々木子觀生時而逐之  
 板床子來塵里而索之高不可望也  
 由是觀之天下不歸至聖又何有乎  
 不肖者乎月月初深今年亦既秋  
 前我之氣因而未善夫出而視木葉之  
 折矣入而嘆吾身之將老撫影之不樂  
 遂作一首之歌聊以自遣云  
 秋風之寒久日每仁成佳景  
 唯何者无入物難哀志役  
 明治十年九月七日之夜  
 秋學樓高橋五郎

(15) 寺内正毅

大正四年二月二十日

東京市芝区身舎路法學院内  
 井深振之助殿  
 東林寺内正毅  
 大正四年二月二十日  
 尊東拜誦尹贊  
 外五名今回特赦之  
 恩典に浴びたる一事は  
 余  
 聖上陛下大権之毅  
 能に出下たること示

之如く存言小生は仁政  
 云々の以道輝漢の汗  
 顔に至りては屈外意に  
 此聖恩の爲め内解  
 人之字意を促し外  
 宣若師事は疑を解  
 くを得は將事を統治  
 上は及びず於學不  
 妙候事は存味家  
 傳り以尽力之程も亦  
 候等事は捧 不亦敢  
 以返辭之如形に存候  
 謹言

新行  
 大正四年二月三十日  
 寺内正毅  
 井深権之助殿

(16)のA 新島 襄

明治十七年三月七日

東条木挽町九月十日  
 井深権之助様  
 先づ、いよいよ、  
 日、お陰、  
 二、三、  
 三、四、  
 五、六、  
 七、八、  
 九、十、  
 十一、十二、  
 十三、十四、  
 十五、十六、  
 十七、十八、  
 十九、二十、  
 二十一、二十二、  
 二十三、二十四、  
 二十五、二十六、  
 二十七、二十八、  
 二十九、三十、  
 三十一、三十二、  
 三十三、三十四、  
 三十五、三十六、  
 三十七、三十八、  
 三十九、四十、  
 四十一、四十二、  
 四十三、四十四、  
 四十五、四十六、  
 四十七、四十八、  
 四十九、五十、  
 五十一、五十二、  
 五十三、五十四、  
 五十五、五十六、  
 五十七、五十八、  
 五十九、六十、  
 六十一、六十二、  
 六十三、六十四、  
 六十五、六十六、  
 六十七、六十八、  
 六十九、七十、  
 七十一、七十二、  
 七十三、七十四、  
 七十五、七十六、  
 七十七、七十八、  
 七十九、八十、  
 八十一、八十二、  
 八十三、八十四、  
 八十五、八十六、  
 八十七、八十八、  
 八十九、九十、  
 九十一、九十二、  
 九十三、九十四、  
 九十五、九十六、  
 九十七、九十八、  
 九十九、一百、  
 一百一十、  
 一百二十、  
 一百三十、  
 一百四十、  
 一百五十、  
 一百六十、  
 一百七十、  
 一百八十、  
 一百九十、  
 二百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

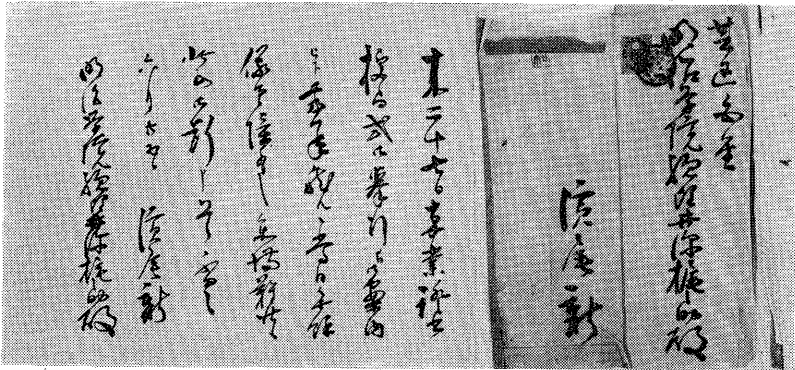
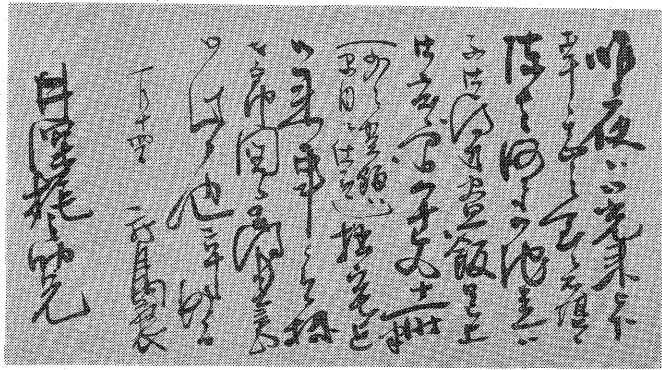




第十篇

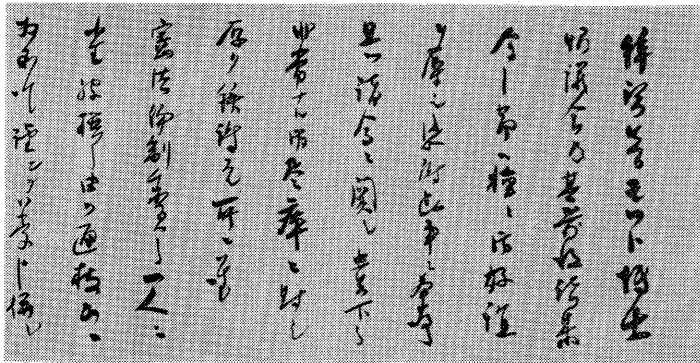
(17) 浜尾新

明治二十七年六月二十五日



(18) 原田助

大正二年四月二十五日





(19) 藤生金六

明治十二年十月二日

東京の地味不  
 十二番  
 井深提の様  
 十二月二日  
 針  
 藤生金六

（以下は縦書きの草書本文）

（以下は縦書きの草書本文）

（以下は縦書きの草書本文）



(21)のA 本多庸一

明治二十七年十一月二十七日

本多庸一  
 謹啓  
 此の度、  
 井原権一、  
 多田、  
 本多庸一

本多庸一  
 謹啓  
 此の度、  
 井原権一、  
 多田、  
 本多庸一

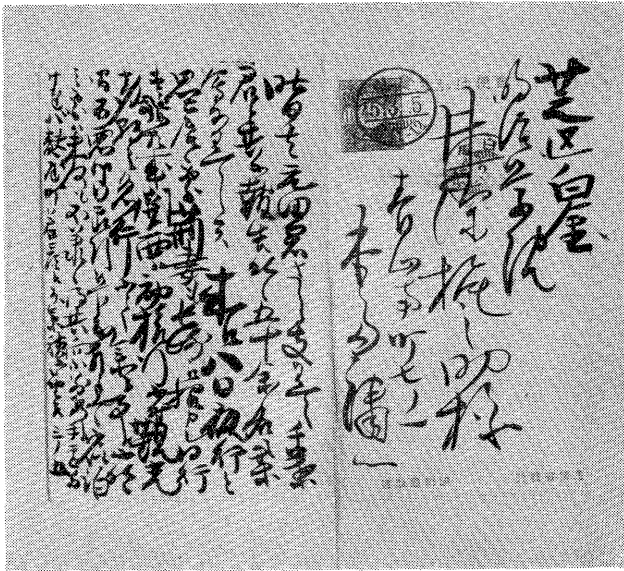






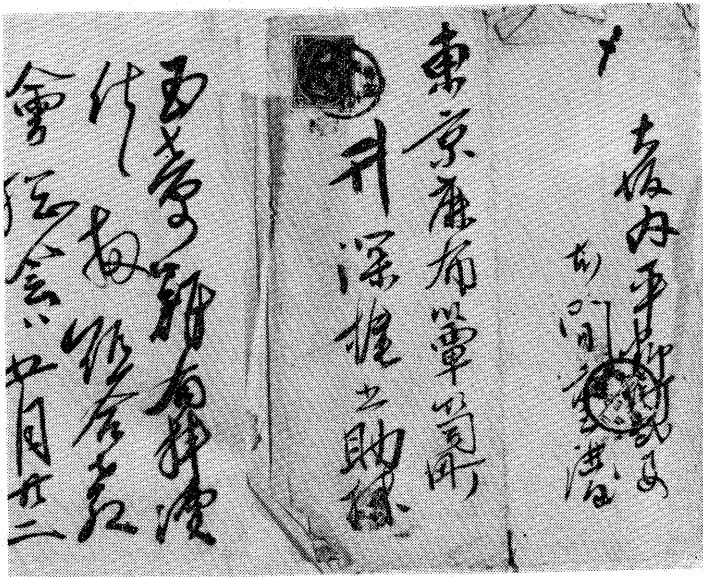
(21) の B 本 多 庸 一

明治四十五年三月五日



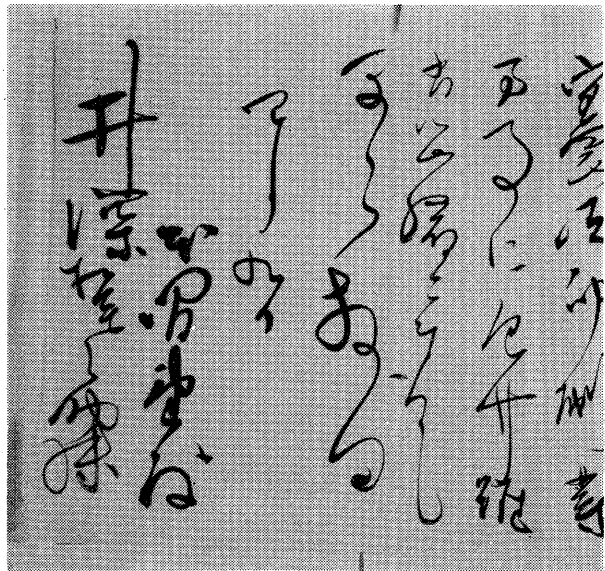
(22) 本 間 重 慶

明治二十二年四月九日









(23) 松山高吉

明治十八年三月六日







(25) 安川 亭

明治四十五年三月二十九日

麻布クニ高三秀  
才原雅也於土川亭

有餘暇者、法上、好、也、  
大會ヲニ含ス、入、也、  
株、上、也、  
固、以、也、  
作、也、  
又、也、  
去、也、  
插、也、  
客、也、

花難し、  
一、也、  
二、也、  
三、也、  
只、也、  
山、也、  
大、也、

刺 せん、出年之ハシ、其備守ノ  
 道、毎計ハ、出、其備守ノ  
 勢、權邊、可從、コノ、カ、死シテ  
 日、エ、平、切、シ、端、ハ、キ、リ  
 惣念ト念一ニル片、目下、お候、お刺  
 せん、此、危、ハ、御、カ、ト、ノ、使、カ、決、ラ、お  
 成、宜、ハ、念、邊、ハ、能、行、コ、レ、ト、モ、時、之、に  
 先、立、ル、州、ハ、お、期、お、望、モ、ハ、キ、ハ、お、要  
 ノ、イ、テ、ア、リ、カ、ス  
 大、事、を、身、ハ、書、キ、ツ、テ、フ  
 ニ、あ、り、ま、す  
 丹、後、守、兵、衛、尉

十、八、日、申、下、ノ、事、ト  
 一、つ、中、ハ、老、久、ハ、然  
 況、ハ、明、治、学、後、一、刻  
 焼、火、い、た、し、ハ、由、上、ノ、ハ  
 一、ハ、行、の、り、ハ、シ、カ、キ、ハ、  
 知、し、し、返、取、ハ、知、カ、ラ、不  
 幸、ハ、書、道、保、一、ハ、シ、カ、キ、ハ

(26) 山川健次郎

明治四十四年九月二十二日

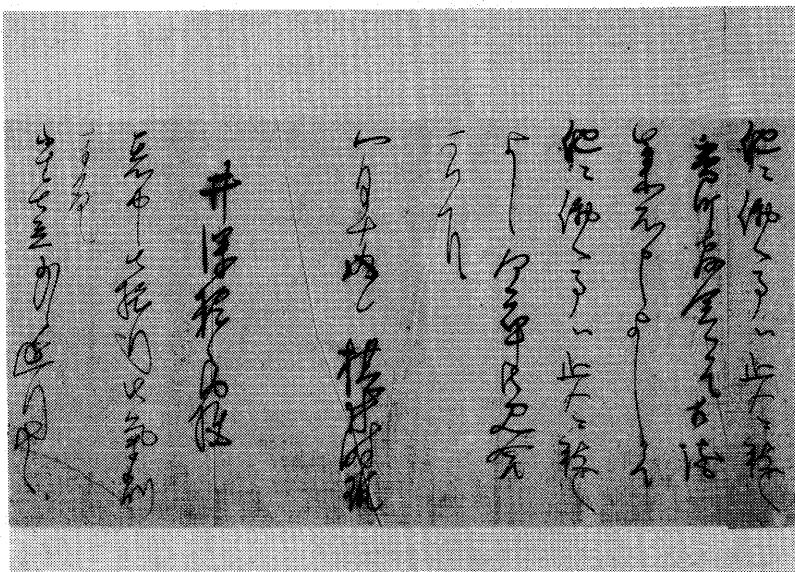


一 筆 字 之 同 情  
 少 取 教 育 之 益  
 中 之 益 也 之 益  
 多 月 廿 五 日 健 次 弟  
 井 你 毀  
 行 矣 也

本 口 区 東 井 号 三 五  
 横 井 時 雄  
 芝 高 輪 象 岳 寺 内  
 井 深 掘 之 助 様  
 以 今 奉 回 之 事 存  
 少 々 能 下 一 俾 一  
 考 可 否 存 之 在 否 存  
 其 事 存 之 在 否 存

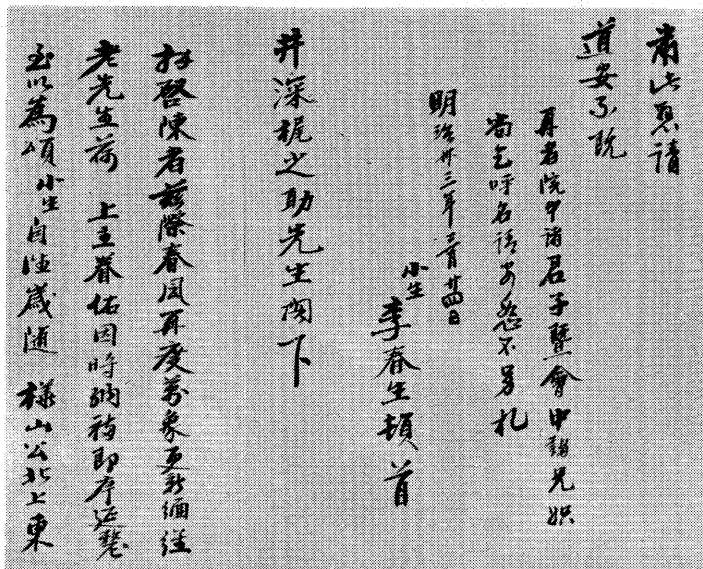
(27) 横井時雄

明治二十六年八月十八日



(28) 李 春 生

明治三十三年三月二十四日



京觀光辱承吾族會諸兄弟設筵款  
揚高情厚德之令又念已不忘惟是昔  
時因土匪頻何端亂風流鶴唳日致  
驚加之衰老不振俗務纏綿殊未遑  
情書道謝為憾泰在行道為交步  
不以亂中簡慢疎忽見罪頃有涉者  
小生之孫兒李延禧曾在東京就學歸  
來後立處此公李校四年卒業令狀擬  
再耳承於吾但文恭  
皆院規模宏敞院中諸主茂名皆鴻  
儒碩彦因是託河金龜補君汝為脩  
書介紹信孫兒李延禧到京之日尚望

先生推愛必納異日學業有成未始不  
為閣下與院中諸公栽培之所賜也

## あとがき

「井深梶之助とその時代」の刊行は、三年前に武藤学院長の発起により篤志家の寄附金を基にして始められたのであるが、あまりにも大きな題目であるのと資料の全容も当時は整っていなかったため、最初から困難と不安があった。しかし多くの方々のご協力とご指導により昭和四十四年第一巻が刊行され、つづいて翌年第二巻が刊行され、ここに第三巻が刊行されることとなったことはかえりみてまことに感激にたえない。

第一巻巻頭の「刊行のことば」によれば、「第三巻は大正から昭和にかけての井深先生晩年の公的活動及び私生活に関する資料を収める予定」となっているが、諸般の事情により第三巻は大正初期をもって終ることとなった。もともと本事業の資料として拠って来た菊田貞雄「井深先生関係資料」も菊田氏の死去のためではあるが、大正二年の排日移民法の時期をもって終っているし、井深先生の最も旺盛な公的活動も大体この時期を頂点としているので、この時期をもって一応第三巻を閉じることとした。

大正二年といえば井深先生が満五十九才で、明治学院総理として在任中であり、大正十年にその職を退くまでもなお八年を残している。その後は名誉総理として、また日本基督教会の最高長老として学院の育成に、教会の発展につくすところがあったが、一面では芝白金の邸に、或いは湘南逗子の別邸にあって、教え子たちが、牧会伝道に、文芸活動に、あるいは社会運動に活躍するのを見守りつつ時に書道に親しみ或いは作歌を楽しむなど悠々自適の生活を送っていた。偶々昭和六年の満州事変以来国際関係とくに日米関係の悪化に先生は心を痛めつつ、太平洋戦争の足音のせまる昭和十五年六月二十四日末明、脳膜下出血のため八十六才をもってその生涯を

終った。本巻の終期とした大正二年から二十七年の後である。

従つて年代的に見れば「井深槐之助とその時代」として本書は未完のものたるを免れないであろう。しかしながら、戦前から筐底深く眠っていた故菊田氏の苦心の結晶である「井深先生関係資料」や、講演・日記・手紙など井深先生ご自身の資料が、全部とまで行かなくとも、その大部分が公にされて井深先生の活動とその人となりで紹介されたことは明治学院の宿願が果されたといふべく、これによって日本プロテスタント史、キリスト教教育史に幾分の貢献がなされるならば幸いである。

本事業のため御指導を賜わった委員諸氏並に第二巻に引つづきご協力を賜わった井深家、松平家、東京神学大学、青山学院、慶応義塾、東京女子大学、日本YMCA同盟、日本YWCA本部、婦人矯風会、明治学院その他資料の提供、助言を賜わった各位に対して深甚なる感謝の意を表する次第である。

一九七一年九月

編者

井深梶之助とその時代 第三卷

昭和四十六年九月一日印刷  
昭和四十六年九月五日発行

定価 二、〇〇〇円

編者 井深梶之助とその時代  
刊行委員会

発行者 武藤富男

発行者 学校法人 明治学院

東京都港区白金台一丁目二ノ三七  
振替口座 東京 三七一

印刷所 株式会社 三五堂

東京都世田谷区経堂五ノ三七ノ四